

上私部遺跡Ⅲ、有池遺跡Ⅲ

交野市

上私部遺跡Ⅲ 有池遺跡Ⅲ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇九年八月

財団法人
大阪府文化財センター

2009年8月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第193集

交野市

上 私 部 遺 跡 Ⅲ

有 池 遺 跡 Ⅲ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

序 文

本書で発掘調査成果を報告いたします上私部遺跡と有池遺跡は、一般国道1号バイパスおよび第二京阪道路建設に伴う発掘調査によって新たに確認されました。

上私部遺跡は大阪府交野市青山に所在する集落遺跡です。平成15年度から数次にわたって行われた発掘調査を通じ、それまで知られていなかった古墳時代の集落の構造と、その変遷の詳細を明らかにすることができた点は、特筆されます。

今回の調査では前回の調査で検出された、周囲に区画溝を配した掘立柱建物群の北側と東側にも、さらに計画的に配された建物群が展開したことを明らかにすることができました。

有池遺跡は上私部遺跡の東側に隣接して位置します。これまでの調査で古墳時代中期から飛鳥時代、平安時代後期から室町時代の集落遺構を検出しました。特に中世の集落に関しては、灌漑システムの限界のため、それまで放置されがちだった丘陵や段丘・扇状地において、集落が形成される端緒となる時期を経て、開発が軌道に乗り、耕地や居住域が拡大する過程をとらえることができました。

今回の調査では、基幹水路の役割も果たしていたとみられる屋敷地の区画溝の利用状況や、それと隣接する他の屋敷地との関係を把握する上で、重要な成果を得ることができました。

これらの遺跡の背後に目を転ずれば、古くから信仰の対象となっている交野山頂の観音岩が間近に望まれ、前面には交野台地の広がりをとらえることができます。交野山頂への登山道の入口付近には、旧石器や早期の縄文土器が出土したことで知られる神宮寺遺跡が所在します。一方、周辺の丘陵や台地上には、武具や銅鏡等の副葬品が出土したことで知られる東車塚古墳をはじめ、多数の古墳が存在することが知られています。また私部という地名は、『日本書紀』敏達天皇6年(577)に設置された皇后の生活をまかなうための「私部」に由来すると考えられます。平安時代以降には、一帯はおおむね岩清水八幡宮領の荘園に含まれたとみられ、鎌倉時代になると交野山に開元寺が移ることで、一層発展したことが知られています。このような歴史的な経緯は、この一帯が河内・山城・大和を結ぶルート上に位置することとも関連していたのでしょう。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、多大なご協力を賜りました国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、西日本高速道路株式会社関西支社、大阪府教育委員会文化財保護課、交野市をはじめとする地元関係各位に深く謝意を表しますと共に、今後とも文化財の保護に一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2009年8月

財団法人 大阪府文化財センター

理事長 水野 正 好

例 言

1. 本書は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路の建設に伴って実施した上私部遺跡07-1と、有池遺跡07-1・上私部遺跡07-2・上私部遺跡08-1の発掘調査報告書である。前者の調査成果を第Ⅰ部、後者を第Ⅱ部として掲載する。上私部遺跡と有池遺跡は大阪府交野市青山に所在する。
2. 調査は国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所・西日本高速道路株式会社関西支社から委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。調査名称・受託契約名・受託契約期間は以下の通りである。

上私部遺跡07-1〔上私部遺跡（その3）〕

事業契約名：第二京阪道路（大阪北道路）上私部遺跡発掘調査（その3）・平成19年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査（上私部遺跡その3）

受託契約期間：平成19年4月1日～平成20年3月31日

有池遺跡07-1・上私部遺跡07-2〔有池遺跡（その6）・上私部遺跡（その4）〕

事業契約名：第二京阪道路（大阪北道路）上私部・私部南遺跡他遺物整理・平成20年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理事業（上私部・私部南遺跡他）

受託契約期間：平成20年4月1日～平成21年3月31日

3. 調査及び整理は以下の体制で行った。

上私部遺跡07-1〔上私部遺跡（その3）〕

〔平成19年度 調査〕 調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘

京阪調査事務所長 山本 彰

調査第三係長 秋山浩三、主査 上野貞子（写真）

技師 若林幸子、専門調査員 和田大作 垣内拓郎

〔平成20年度 整理〕 調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘

京阪調査事務所長 山本 彰

調査第一係長 三好孝一、主査 上野貞子（写真）

副主査 若林幸子

有池遺跡07-1・上私部遺跡07-2・上私部遺跡08-1〔有池遺跡（その6）・上私部遺跡（その4）〕

〔平成19年度 調査・整理〕 調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘

京阪調査事務所長 山本 彰

調査第三係長 秋山浩三、主査 上野貞子（写真）

技師 若林幸子、技師 黒須亜希子

専門調査員 和田大作 垣内拓郎

〔平成20年度 調査・整理〕 調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘

京阪調査事務所長 山本 彰

調査第一係長 三好孝一、主査 上野貞子（写真）

副主査 若林幸子、技師 黒須亜希子

4. 今回の調査において、以下の分析・鑑定業務を委託して行った。
花粉・珪藻・植物珪酸体分析：株式会社古環境研究所
放射性炭素年代測定（AMS）分析：株式会社パレオ・ラボ
5. 本書に用いた写真は、遺構については調査担当者が撮影した。遺物については京阪調査事務所主査 上野貞子、中部調査事務所主査 片山彰一が撮影した。
6. 本書の編集・執筆は第Ⅰ部を主に若林幸子、第Ⅱ部を黒須亜希子が行った。したがって第Ⅰ部と第Ⅱ部とで、用語や遺構図版の体裁の統一が図られていない部分が若干ある。なお付章の執筆は第Ⅰ節を株式会社古環境研究所、第Ⅱ節を株式会社パレオ・ラボが担当した。
7. 発掘調査および整理作業においては、財団法人大阪府文化財センター職員をはじめ、以下の諸氏・団体から御協力、ご教示をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略）
網 伸也・南 孝雄・真鍋成史・小川暢子・大阪府教育委員会・交野市教育委員会
8. 本調査に関わる、遺物・写真・実測図等の資料は財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。

凡 例（第Ⅰ部）

1. 本書に掲載した遺構実測図・地形図などに付された方位はすべて座標北を示している。
2. 本書で使用した測量基準線・地区割方法は、世界測地系による国土座標軸第Ⅵ座標系を基準に、当センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル（暫定版）』（2003）に準拠している。また座標値はすべてmで標記している。地区割の第Ⅰ区画は7 J、第Ⅱ区画は10である。
3. 本書で使用した標高値は東京湾平均海水位（T. P.）を使用している。
4. 実測図の縮尺については、竪穴住居・掘立柱建物は80分の1に統一した。他の遺構については、それぞれ縮尺を明記し、各図にスケールを付した。なお、断面図・見通し図の位置は平面図中に「一」で示した。
5. 遺構番号は、全調査区にわたっておおむね発掘調査の段階で付した番号をそのまま使用している。遺構番号の後ろに遺構の種類を付したものを遺構名とする（例：21 溝、14 土坑など）。ただ柱穴列の遺構番号の一部は、整理作業の成果から順次新たに付したものである。
6. 遺構平面図には極力遺構名を掲載することとしたが、ピットについては煩雑になるため、番号のみを掲載したことがある。
7. 遺物実測図の縮尺は、基本的には3分の1に統一したが、他の縮尺を採ったものもある。図版ごとに縮尺はスケールを付して示した。遺物番号は実測図・写真・遺物観察表ともに共通する。
8. 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄著『新版 標準土色帖』2008年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・在団法人日本色彩研究所色票監修 を基準としている。

目 次

序文

例言・凡例（第Ⅰ部）

目次

〔第Ⅰ部〕

上私部遺跡（その3）07－1の発掘調査成果報告

図・表目次

写真図版目次

第1章 調査の経過と調査方法	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査方法	2
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 遺構	10
第1節 遺跡の基本層序	10
第2節 古墳時代の遺構	14
第3節 古代から中世の遺構	56
第4章 遺物	62
第1節 古墳時代の遺物	62
第2節 中世の遺物	85
第5章 まとめ	90
付章 自然科学分析	124
第1節 上私部遺跡（その3）発掘調査に伴う花粉分析	124
第2節 放射性炭素年代測定	130

〔第Ⅱ部〕

有池遺跡（その6）07－1・上私部遺跡（その4）07－2・上私部遺跡（その4）
08－1の発掘調査成果報告

—第Ⅱ部に目次あり—

〔第 I 部〕

上私部遺跡（その 3）07－1 の発掘調査成果報告

目 次

<p>図1 調査位置図 1</p> <p>図2 地区割模式図・調査区配置図 3</p> <p>図3 調査地周辺地形図 5</p> <p>図4 調査地周辺遺跡分布図 7</p> <p>図5 調査区北壁土層断面図 11</p> <p>図6 土層断面柱状図 12</p> <p>図7 古墳時代遺構配置図 16</p> <p>図8 12 竪穴住居実測図 17</p> <p>図9 建物 1・2 実測図 19</p> <p>図10 建物 3・4 実測図 20</p> <p>図11 建物 5・6 実測図 22</p> <p>図12 建物 7・8 実測図 23</p> <p>図13 建物 9・10 実測図 25</p> <p>図14 建物 11・12 実測図 27</p> <p>図15 建物 13・柱穴列 1 実測図 28</p> <p>図16 柱穴列 2～9 実測図 30</p> <p>図17 柱穴列 10～14 実測図 32</p> <p>図18 19・20・21・32 溝実測図、21 溝遺物出土 状況図 34</p> <p>図19 29・30・127 溝断面図 37</p> <p>図20 26・113～115・154 溝実測図 39</p> <p>図21 1172 土坑実測図・167 土坑断面図 41</p> <p>図22 168 土坑、156・165・169 溝断面図 42</p> <p>図23 36・89・90 ピット、42・43 土坑実測図 43</p> <p>図24 14・33・39 土坑実測図 45</p> <p>図25 18・49・159・170 土坑、187・302～304 ピット実測図 46</p> <p>図26 176・179～181・184・185・188・190・ 281・299・310・311 ピット実測図 49</p> <p>図27 153 ピット、266・278・279 土坑、300・ 305・307・308 ピット実測図 51</p> <p>図28 264・265 土坑実測図 52</p> <p>図29 調査区北西隅検出谷土層断面図 54</p> <p>図30 古代～中世遺構配置図 57</p> <p>図31 中世遺構配置図 58</p>	<p>図32 中世溝・畦畔断面図 59</p> <p>図33 12 竪穴住居〔1～4〕、298 柱穴（柱穴列 7） 〔5〕、〈25〉 柱穴（建物 3）〔6〕、121 柱穴（建 物 3）〔7〕、199 柱穴（建物 10）〔8〕、37 ピッ ト（建物 13）〔9〕 出土遺物実測図 □ 内は 遺物掲載番号 63</p> <p>図34 15 溝〔10～15〕、20 溝〔16～24〕 出土遺 物実測図 □ 内は遺物掲載番号 64</p> <p>図35 21 溝・22 井戸〔25～27〕、21 溝〔28～43〕 出 土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号 67</p> <p>図36 22 井戸〔44～50〕、32 溝〔51・52〕 出土遺 物実測図 □ 内は遺物掲載番号 68</p> <p>図37 29・30 溝〔53～60・66・72〕、29・30・ 127 溝〔61～65・71〕、29 溝〔67～70〕 出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号 70</p> <p>図38 30 溝〔73～84〕、26 溝〔85～88〕、154 溝 〔89〕 出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号 71</p> <p>図39 1172 土坑〔90～96〕 出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号 74</p> <p>図40 14 土坑〔97〕、49 土坑〔98〕、278 土坑〔99〕、 1009 土坑〔100〕、153 土坑〔101・102〕、 266 土坑〔103・104〕 出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号 75</p> <p>図41 調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土遺 物実測図 77</p> <p>図42 調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土遺 物実測図 78</p> <p>図43 移動式竈〔129～136〕・U 字状土製品〔137〕 実測図 □ 内は遺物掲載番号 79</p> <p>図44 古墳時代遺物包含層〔138・139・141〕、中世 耕作土〔140・142～144〕 出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号 80</p> <p>図45 須恵器杯外面線刻拓本図 80</p> <p>図46 21 溝〔151～155〕、22 井戸〔156〕 出土木 器実測図 □ 内は遺物掲載番号 82</p>
--	---

図 47	242 土坑〔157〕、273 ピット〔158〕、231 ピット〔159〕、254 ピット〔160〕、1172 土坑〔161〕出土木器実測図 □ 内は遺物掲載番号 …… 83	202〕出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号 …… 87
図 48	調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土木器実測図 …… 84	図 51 瓦実測図 …… 88
図 49	調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土木器〔168〕、中世耕作土出土木器〔209〕、調査区北西隅検出谷地形中世耕作土出土木器〔210〕実測図 □ 内は遺物掲載番号 …… 85	図 52 瓦実測図 …… 89
図 50	調査区南西隅検出谷地形中世耕作土〔169・170〕、調査区北西隅検出谷地形中世耕作土〔171・172〕、1～3 溝〔173〕、6 溝〔174〕、I-2-2 層〔175・176〕、I-2-1 層〔177～180〕、34 ピット〔181〕、I-2 層〔182～192〕、I-1-2 層〔193～195〕、I-1-1 層〔196～200〕、側溝掘削時〔201・	図 53 主軸方向分布図 …… 91
		図 54 上私部遺跡変遷図（1） …… 93
		図 55 上私部遺跡変遷図（2） …… 94
		図 56 上私部遺跡変遷図（3） …… 95
		図 57 上私部遺跡変遷図（4） …… 96
		図 58 上私部遺跡（その3）07-1 発掘調査における花粉ダイアグラム …… 127
		図 59 上私部遺跡の花粉 …… 128

表 目 次

表 1	上私部遺跡小期対応表 …… 91	表 6	上私部遺跡（その3）07-1 発掘調査における花粉分析結果 …… 126
表 2	建物・柱穴列土層一覧表 …… 101	表 7	測定試料及び処理 …… 131
表 3	土器・土製品・石器等観察表 …… 108	表 8	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果… 131
表 4	木器観察表 …… 122		
表 5	瓦観察表 …… 123		

写真図版目次

図版 1 遺構	図版 4 遺構
2 調査区東半部古墳時代遺構面全景（南から）	柱穴列 1・柱穴列 2（北東から）
2 調査区西半部古墳時代遺構面全景（東から）	14 土坑土層断面（西から）
図版 2 遺構	12 竪穴住居・柱穴列 1（北から）
1 調査区北半部古墳時代遺構面全景（南東から）	図版 5 遺構
1 調査区南半部古墳時代遺構面全景（東から）	18 土坑（南から）
図版 3 遺構	19 溝・20 溝・柱穴列 12（南から）
14 土坑（南から）	建物 2 検出状況（北東から）
39 土坑（南から）	図版 6 遺構
建物 1（北東から）	建物 2 完掘状況（北から）

- 建物3完掘状況（北から）
77 柱穴（南西から）
図版7 遺構
21 溝遺物出土状況（東から）
21 溝土層断面（南から）
21 溝遺物出土状況（東から）
図版8 遺構
30 溝・127 溝・29 溝（南から）
建物4（南から）
1172 土坑検出状況（北から）
図版9 遺構
1172 土坑出土壺口縁部接写（北から）
1172 土坑I層掘削状況（西から）
1172 土坑VI層上面検出状況（南から）
図版10 遺構
1172 土坑土層断面（南東より）
1172 土坑土層断面（北西より）
1172 土坑VI層上面検出状況（北東から）
図版11 遺構
1172 土坑VI層上面検出状況（南西から）
1172 土坑VI層断ち割り状況（北から）
図版12 遺構
1172 土坑完掘状況（北から）
154 溝土層断面と遺物検出状況（東から）
153 ピット遺物出土状況（東から）
図版13 遺構
調査区北西隅検出谷地形（東から）
調査区北西隅検出谷地形土層断面（東から）
建物10・建物7（東から）
図版14 遺構
建物9・建物8（東から）
建物10（東から）
建物7（西から）
図版15 遺構
266 土坑遺物出土状況（東から）
建物11（東から）
建物12（東から）
図版16 遺構
中世遺構面全景（南東から）
1 溝・2 溝・3 溝・畦畔4・5 溝（南から）
畦畔2・畦畔3（南から）
図版17 遺構
1 調査区北半部中世遺構面（東から）
1 調査区中世遺構面全景（南から）
図版18 遺物
図版19 遺物
図版20 遺物
図版21 遺物
図版22 遺物
図版23 遺物
図版24 遺物
図版25 遺物
図版26 遺物
図版27 遺物
図版28 遺物
図版29 遺物
図版30 遺物
図版31 遺物
図版32 遺物
図版33 遺物

第1章 調査の経緯と調査方法

第1節 調査に至る経緯と経過

上私部遺跡は大阪府交野市青山町に所在し、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴って発掘調査が行われた。平成11年度に大阪府文化財センターが確認調査を行ったところ、地点によって粗密は認められたものの、道路予定地のほぼ全域において古墳時代の遺構や遺物が検出された。これらの成果により、文化財保護法に基づく遺跡発見届が提出され、青山2丁目の地域は「上私部遺跡」として周知されることとなった。

平成15～16年度に上私部遺跡（その1）03-1の調査〔以下、上私部遺跡（その1）と標記する〕^{註1)}が行われ、平成16年度にはその調査区から西への遺構の広がり確かめるため、確認調査も行われた。平成17年度には上私部遺跡（その1）調査区の南西隣接地にあたる上私部遺跡（その2）05-1の調査〔以下、上私部遺跡（その2）と標記する〕^{註2)}を行った。今回報告する平成19年度に行われた上私部遺跡（その3）07-1〔以下、上私部遺跡（その3）と標記する〕の調査区は上私部遺跡（その2）調査区の北側に隣接し、調査区東端は上私部遺跡（その1）調査区とも隣り合う。調査対象面積は2,240㎡である。これまでの調査対象面積を併せると、約15,500㎡にわたって上私部遺跡の調査が行われてきたことになる。一連の発掘調査は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所と西日本高速道路株式会社関西支社の委託により、大阪府教育委員会の指導のもと（財）大阪府文化財センターが行った。



図1 調査位置図（1：20,000）

第2節 調査方法

調査範囲は東西方向に長く、東辺よりも西辺が長い三角形に近い形状である。調査区北辺にはほぼ直行する方向で2分割し、西半部を1調査区、東半部を2調査区とした。北側には住宅地が近接し、西側は府道交野久御山線が隣接するため、防塵・防音対策として調査区北辺と西辺を万能扉で囲った後、反転して調査を行った。

建物の基礎部分等の残地物、宅地造成に伴う盛土、および現代～近世耕作土・床土を機械掘削によって除去し、中世耕作土層以下は人力掘削して遺構・遺物の検出に勤めた。人力掘削にあたっては、耕作土層の層位に注意し、層ごとに出土遺物の帰属を明らかにするように努めた。なお、中世遺構面および古墳時代遺構面では記録写真撮影および図面作成を行った。

測量は世界測地系によって測量した国土地標第Ⅵ座標系を基準とし、クレーン車による写真撮影を、古墳時代遺構面において各調査区で1回ずつ、計2回行った。写真測量による図化作業は50分の1の縮尺で行った。また中世遺構面や個別の遺構・遺物の検出状況、土層観察用断面等の実測に際しては、適当な縮尺を選択し、手測りで実測を行った。調査区の全景写真は3段と5段の足場から撮影した。

遺構名の記載方法は基本的に「遺構番号（アラビア数字）—遺構種類」とした。例えば遺構番号が200番の遺構が溝状の形態であった場合、200溝と記載する。ただし建物跡のように、複数の遺構の集合体で一つの機能を有する遺構が構成される場合は、他と区別する必要があるため、建物7というように「遺構種類—番号」という表記を用いる。

今回の調査で検出された遺構の中には、以前の調査で検出された遺構の延長部分を検出したものも含まれる。そのような遺構に対しても、今回の調査で新たに遺構番号を付した。遺構の詳細を記述する際に対応関係を示すため、以前の調査で付された遺構番号を挙げる場合は、混乱を避けるため遺構名を「」でくくって標記する。「」書きされない遺構番号は今回の調査で付した遺構名である。

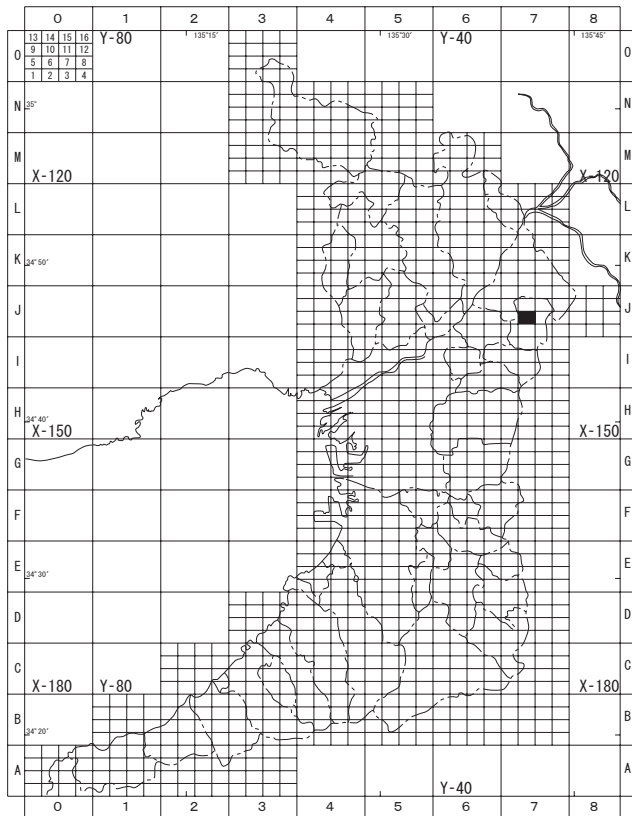
遺物は先述した第Ⅵ座標系の座標に基づく10m間隔の基準線によって設けた方形区画ごとに取上げ、出土地点及び日付を明示して登録番号を付した。遺物は洗浄・注記後、必要なものは接合・復元し、遺物実測・写真撮影を行った。調査の過程で古環境復元のため、1172土坑埋土から土壌サンプルを採り、花粉分析等を行った。

なお発掘調査終了後は大阪府教育委員会による立会を受けた。

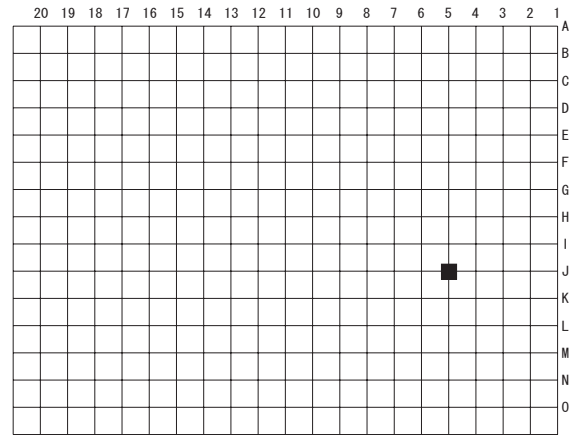
註

註1) 財団法人大阪府文化財センター 2007 『上私部遺跡Ⅰ』（財）大阪府文化財センター調査報告書第151集

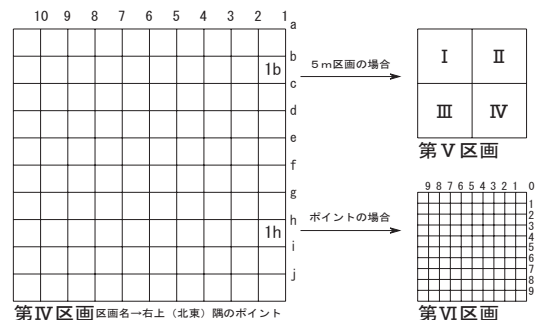
註2) 財団法人大阪府文化財センター 2007 『上私部遺跡Ⅱ』（財）大阪府文化財センター調査報告書第165集



第I・II区画



第III区画



第IV区画 区画名→右上(北東)隅のポイント

地区割模式図

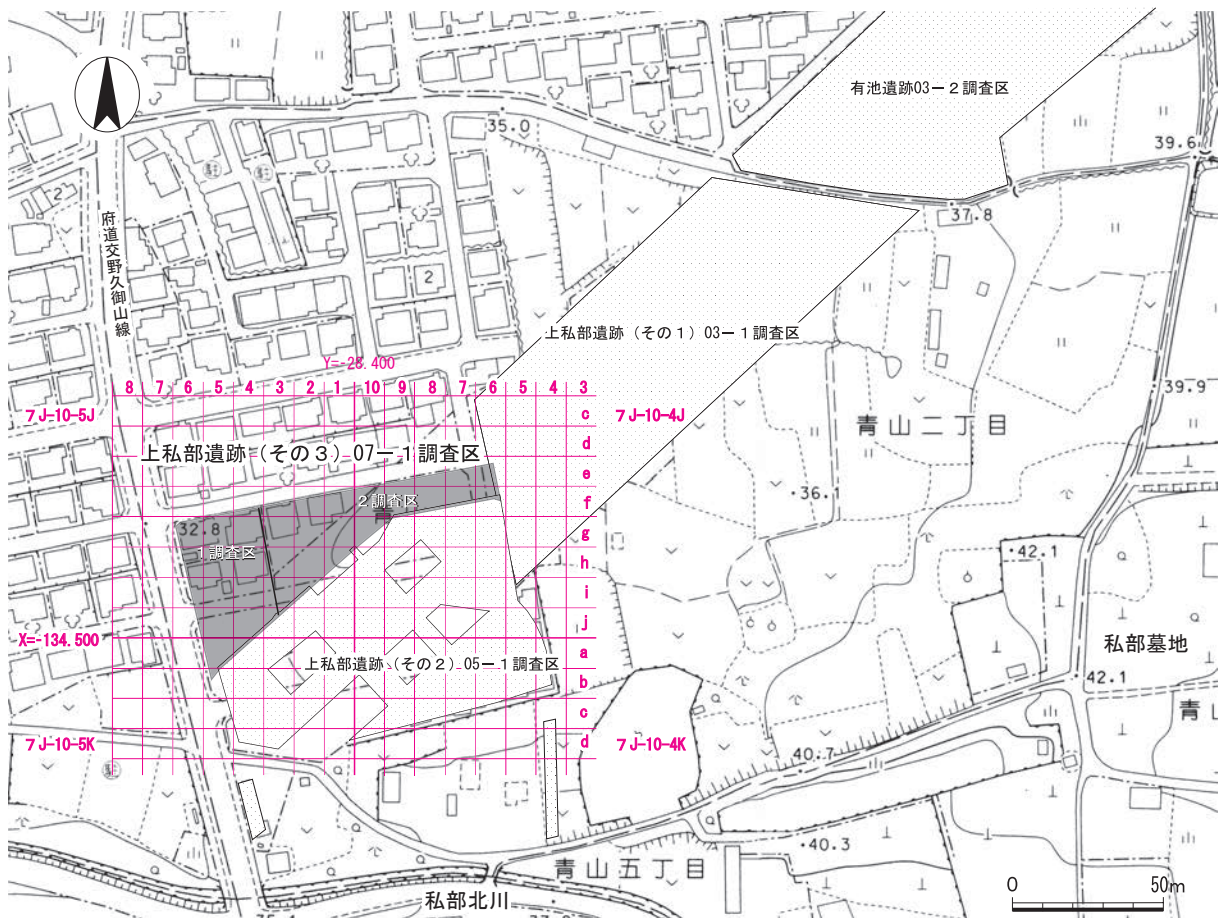


図2 地区割模式図・調査区配置図 (1:2,500)

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

大阪府北東部に位置する交野市の、北部に位置する。戦後間もない時期に撮影された米軍撮影空中写真をみると、調査地周辺は水田や果樹園等、広く生産緑地として利用されていたことがわかる。近年は都市近郊のベッドタウンとしての開発が加速しており、徐々に宅地化が進行している。南に河内、東に大和、北東に山城が隣接し、東高野街道へのアクセスにも便利な位置にあり、往時は人の往来が活発だったことが伺える。

当遺跡は交野台地に移行する緩傾斜地に所在し、標高は T.P. + 35 m 付近である。現在はほぼ平坦に見受けられるが、近世以降の耕地開発や、近年の宅地開発に伴う盛土を除去すると、東から西に向かって徐々に地盤が下がる。最終氷期後半に形成された低位段丘面を覆う、扇状地面の末端部にあたる。一帯は生駒山系を水源とし、天野川に流れ込む河川の貫入を受けて侵食を受けており、上私部遺跡はそれらの河川の一つである私部北川の右岸段丘上に立地する。

交野山地の岩石組成は主に花崗岩で構成されている。明治以降、大阪府が砂防対策として行った大規模な植林により、一帯の山地は濃い緑に覆われているが、元来は樹木がまばらでごろごろした岩がむき出しだった。植物の根による保水と土砂の保持が弱いため、山麓の村や田畑はしばしば山水の激しい被害を受け、村ごとの移動を余儀なくされた場合もあったことが、伝承や文献資料などからうかがえる^{註1)}。平成 17 年度に行われた自然科学分析結果によると、古墳時代の集落が営まれていた段階では、当遺跡一帯は非常に安定し、かつ高燥な土地条件だったとみられる。古墳時代から中世にかけては氾濫原が形成され、地表面は通常乾燥して好氣的な土壤環境で、畑地耕作が継続的に行われていたようだ。灌漑水利体系の再整備により、13 世紀代を画期として水田造成が活発化するが、それに伴い耕地の拡大や森林資源の過剰利用による一帯の山のはげ山化が進行し、私部北川が天井川化する。河床上昇によって中世後半から近世にかけての時期には、一帯の湿地化・滞水域の増加が進んだようだ^{註2)}。そのような環境の変化から、一方では土砂崩れや洪水が誘発されることになったと考えられる。中～近世には洪水によって耕地が土砂に覆われた後、それを耕地化する営みが繰り返されていたことが、今回の調査でもうかがえた。

第2節 歴史的環境

ここでは、上私部遺跡が所在する天野川上流域の遺跡の消長を中心に、歴史的な動向を述べたい^{註3)}。概して天野川上流域は、男山・長尾丘陵・生駒山地に囲まれた淀川右岸一帯の中で、時代の画期となる時期にひとつの核を有していたことがうかがえる地域である。

旧石器時代の遺跡として上私部遺跡・有池遺跡の東側に位置する神宮寺遺跡で、サヌカイト製のナイフ形石器等が採取されたことが知られている。神宮寺遺跡から北へ約 2.5km に位置する津田三ツ池遺跡や、南西約 4 km に位置し、多数の剥片や石核の出土で知られる布懸遺跡の立地とあわせると、標高 50 ~ 100 m を測る生駒山の山麓部が、旧石器時代の居住地の条件にかなっていたことがうかがえる。神宮寺遺跡では縄文時代の炉跡などが検出されており、出土した押型文をもつ土器群は「神宮寺式土



図3 調査地周辺地形図（1：60,000）〔註2より転載〕

器」として縄文早期土器の指標とされる。神宮寺遺跡より天野川をはさんで南西の方向に位置する標高100 m前後の丘陵上に位置する星田旭遺跡では、醍醐Ⅱ～Ⅲ式・船元式土器の影響を受けた縄文中期とみられる土器や、北白川上層式の影響を受けた縄文後期の土器が出土している。

縄文晩期（滋賀里Ⅲ～Ⅳ式）土器の出土状況は、これまで天野川・穂谷川下流の丘陵および台地縁辺部と枚方丘陵に西接する寝屋川流域の低地部の遺跡で出土することが知られていた。それに対して天野川の上流域での出土例は知られていなかったが、一連の第二京阪道路関連遺跡の調査により、茄子作遺跡^{註4)}や私部南遺跡^{註5)}でも検出されることがわかった。私部南遺跡では弥生時代前期以降も集落が営まれる。

弥生前期中段階までの状況を見ると、天野川と淀川の合流部付近に所在する磯島先遺跡や寝屋川流域に所在する高宮八丁遺跡・讚良群条里遺跡では遠賀川系土器が主体であるのに対して、私部南遺跡では長原式系の土器が主体となっており、縄文系の色彩が濃い。弥生中期前半になると天野川流域で核となる集落は、対岸の上の山遺跡や、下流域に所在する星丘西遺跡に移行するとみられる。上の山遺跡では中期前半の竪穴式住居や土坑群・溝などとともに独立棟持柱をもつ大型の掘立柱建物が検出された^{註6)}。この集落は弥生時代中期後半になると、集落規模を縮小させながら茄子作遺跡へと移行する。後期になるとそれまで交野台地に点在していた集落のほとんどが姿を消し、より山際の小高い位置に集落が多く出現する。その中でも天野川上流部に出現する南山（鍋塚）遺跡は、竜王山の中腹に位置し、高地性集落としての特徴が際立つ。なお上私部遺跡では今回の調査で、中期後半から後期の遺構・遺物をごく微量検出したが、集落の存在を確定するには至らなかった。

弥生時代後期から古墳時代前期になると、天野川右岸の中位段丘上に森遺跡が形成される。またそれに近接する私部南遺跡や上私部遺跡でも集落が形成され始める。これは弥生時代後期の段階に交野台地から姿を消した集落が、古墳時代初頭の段階で再び散在的に姿を現すのと期を一にする現象である。さらに森遺跡の東方尾根上には森古墳群・鍋塚古墳が築かれる。前者は古墳時代前期の盟主古墳群とみなされており、中でも墳形・供献土器ともに初期古墳の特徴を備える森1号墳は、全長106 m、前方部と後円部の比高差が10 mと突出する。これら交野地域を眺望する古墳群は、山麓の森遺跡と密接に関わっていると考えられる。

古墳時代中期には森遺跡に北接する段丘上に、車塚古墳群が営まれる。中でも5世紀初頭に築かれたとみられる1号墳は前方後方墳とみられる全長65 m以上の大型墳で、後方に木棺直葬の埋葬施設が3基検出された。うち中央で検出された下層の第1号棺には甲冑・銅鏡・太刀・玉類・青銅器類といった多数の副葬品が含まれていた。森遺跡では5世紀後半から6世紀前半の土器群と供伴して、多量の鉄滓や鞆の羽口・製塩土器が出土しており、この時期、北河内でも最大規模の鍛冶・製鉄が行われたことがうかがえる^{註7)}。当然このような森遺跡の動向は、周辺の古墳時代集落にも何らかの影響を与えたと考えられる。

上私部遺跡で本格的に居住域が展開するのは5世紀前半から中頃の時期で、6世紀代に最も居住域が拡大し、森遺跡と同様、7世紀初頭を最後に終息する。6世紀後半から7世紀初頭の時期には、上私部遺跡に接する有池遺跡にも居住域が及ぶと見られ、堀切状に掘削された数条の溝の最下層から土器・木器が検出されている。加えて有池遺跡では、溝に挟まれた微高地上で竪穴住居2棟を検出した。ただ古墳時代集落に関する遺構の大半は、中世以降の開発に伴って削平されたよう^{註8)}だ。

上私部遺跡では、これまでの調査で5世紀の韓式系土器の平底鉢や甑の破片・牛角状把手が出土するなど、集落成立期における渡来人の存在がうかがえる。また前回の調査では6世紀前半から中頃に、韓

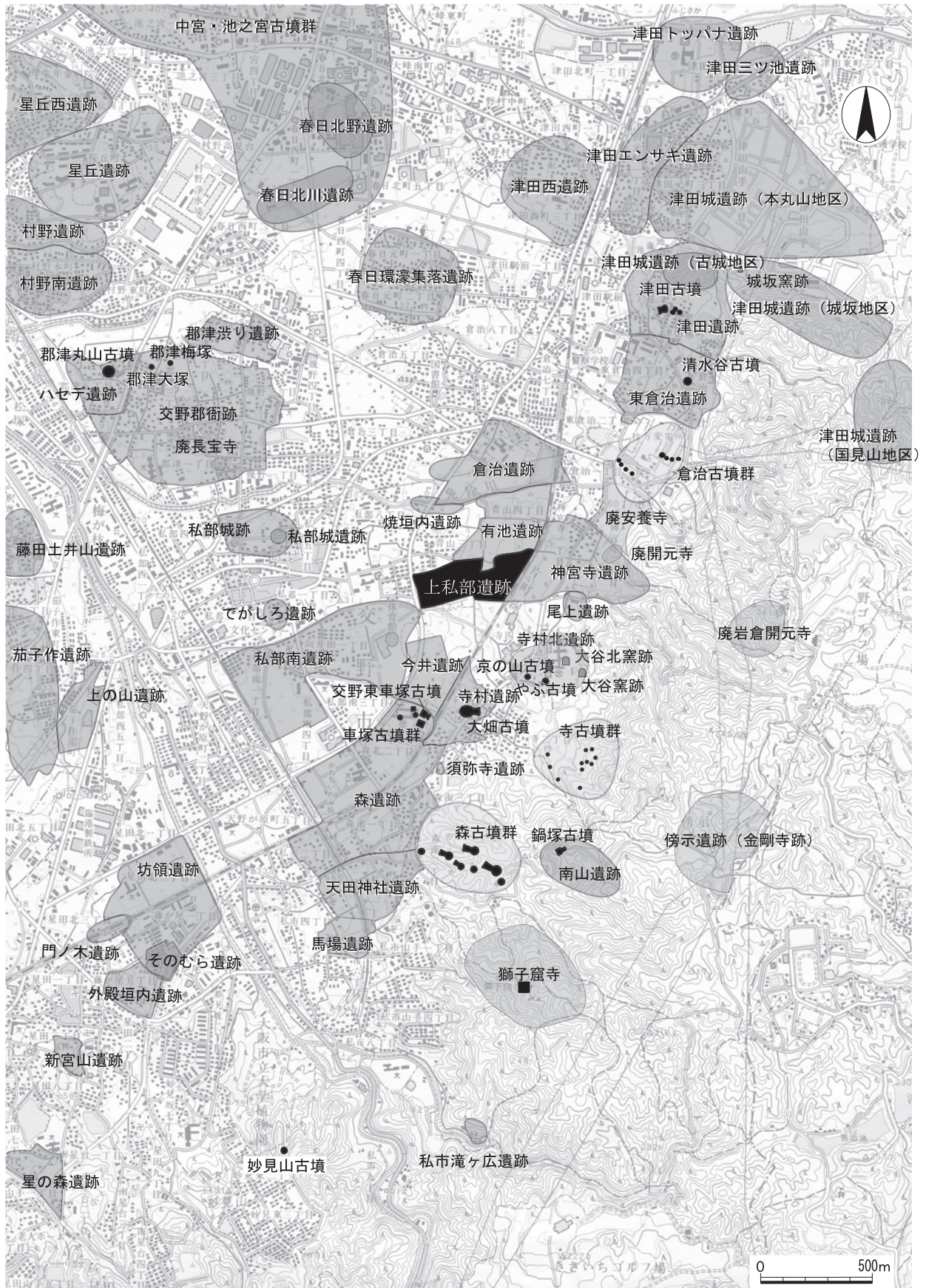


図4 調査地周辺遺跡分布図 (1:25,000)

半島から直接もたらされたと見られる新羅土器の破片が出土した。^{註9)} これらから古墳時代に入ってから、一帯の開発や活発な鉄生産の背景には、最新技術をたずさえた新羅系の渡来人たちの活躍があったことがうかがえるのである。

古墳時代後期になると、生駒山麓に多くの群集墳が営まれる。そのうち竜王山麓に群集する寺古墳群は、車塚古墳群の造営を引継ぐように6世紀後半に造営が始まる。この他にも、上私部遺跡から容易にながめられる範囲に倉治古墳群、清水谷古墳が位置する。

一方、寺川の山裾部分に大谷窯址と大谷北窯址が築かれる。前者の調査は灰原部分にあたっており、6世紀末から7世紀初頭の遺物が出土した。後者の調査では窯址の他に、工房と見られる2間四方の建物も検出された。灰原は大きく2層に別れ、7世紀前半と8世紀初頭の遺物を包含する。

『日本書紀』や『古事記』に記述のある、仁徳天皇の治世に設置された茨田屯倉ないし茨田三宅は、広義には淀川南岸一帯の総称ととらえられる。この時期、茨田堤の造営に端的にみられるような大規模な河川改修事業も含みながら耕地開発が推し進められる中で、三宅関連の施設が分散的に設置されたことが想定されている。『和名類聚抄』の河内国交野郡に三宅郷の記載があること、敏達天皇6年2月条に皇后のために「私部」が設置されたという記述と、現在も残る「私部」という地名が符合することから、当地は大王家と深いかわりをもつ、支配拠点の一つでもあったと位置づけられる。^{註10)}

7世紀中頃に当地域は茨田郡（評）として立評されるが、大宝令施行に伴い交野郡として新たに区分される。^{註9)} 交野郡衙は現在の郡津周辺に位置したと推定されているが、これまでの調査では顕著な遺構・遺物が検出されておらず、特定には至っていない。奈良時代創建の古代寺院としては須弥寺が知られ、これまでの調査で奈良時代の掘立柱建物・溝、11～12世紀の掘立柱建物、15世紀の土坑などが検出されている。平安時代以降には獅子窟寺等の山岳寺院が建立され、鎌倉時代には開元寺が交野山の山上に移ったとみられる。^{註11)}

交野市域における荘園として、岩清水八幡宮領の三宅山と大交野荘がある。三宅山には交野市寺村・森・私市・星田山一帯が比定され、大交野荘には交野市星田・枚方市山之上・茄子作周辺が比定される。大交野荘一帯は興福寺領星田荘と重複しており、しばしば両者の衝突が起ったようだ。三宅荘に比定される森遺跡では、10～15世紀の井戸や溝・柱穴等が検出されており、この一帯で古代の集落の状況をうかがえる数少ない例となっている。^{註12)} 前述の須弥寺も、中世には岩清水八幡宮と深い関係を結んでいたことが知られる。

なお有池遺跡では、これまでの調査で11世紀後半を端緒とし、13世紀後半に最盛期を迎える中世集落が検出されている。この集落では13世紀前半に基幹水路の再編を含む大規模な耕地開発が行われたことで、13世紀後半から14世紀にかけて、居住域の拡大と集住の度合いが増したことがわかった。^{註8)}

註

註1) 片山長三 1981 『交野市史』 交野町略史復刻編（初出1963年）交野市 第4節

註2) 財団法人大阪府文化財センター 2007 『上私部遺跡Ⅱ』（財）大阪府文化財センター調査報告書第165集 第6章 付章 第1節

註3) 交野市域の遺跡の概要について、特に引用文献を述べない限り、以下の文献を参考とした。

片山長三 1981 『交野市史』 交野町略史復刻編（初出1963年）交野市

水野正好他 1992 『交野市史』 考古編 交野市

註4) 財団法人大阪府文化財センター 2008 『茄子作遺跡』 (財)大阪府文化財センター調査報告書第174集

註5) 財団法人大阪府文化財センター 2007 『私部南遺跡Ⅰ』 (財)大阪府文化財センター調査報告書第154集

註6) 財団法人大阪府文化財センター 2007 『上の山遺跡Ⅱ』 (財)大阪府文化財センター調査報告書第155集

なお弥生時代における周辺の集落の動向に関しては、註5)第V章を参考にした。

註7) 交野市教育委員会 1991 『森遺跡Ⅲ』 交野市埋蔵文化財調査報告1990-I

交野市教育委員会 1997 『森遺跡Ⅴ』 交野市埋蔵文化財調査報告1996-II

交野市教育委員会 2000 『古代交野と鉄Ⅱ』 交野市埋蔵文化財調査報告1999-II

註8) 財団法人大阪府文化財センター 2007 『有池遺跡Ⅰ』 (財)大阪府文化財センター調査報告書第152集

註9) 財団法人大阪府文化財センター 2007 『上私部遺跡Ⅱ』 (財)大阪府文化財センター調査報告書第165集

註10) 網 伸也 2005 「淀川水系のミヤケ」『月刊考古学ジャーナル』No.533

註11) 交野市教育委員会・(財)交野市文化財事業団 2004 『須弥寺遺跡』 交野市埋蔵文化財調査報告2003-II

註12) 交野市教育委員会 2001 『森遺跡Ⅷ』 交野市埋蔵文化財調査報告2000-II

第3章 遺構

第1節 遺構の基本層序

現在の調査地とその周辺は、交野・久御山線を挟んで住宅地が広がり、パッチワーク状に耕作地が点在する状況である。昭和36年に作成された3000分の1の地形図を見ると今回の調査区は、やや西に振る方形の条里地割を基準とする水田区画があったところに、北東―南西方向へ斜行して設定されている。なお調査区の南を流れる私部北川の流れにほぼ平行するように、一帯は西もしくは南西方向へ傾斜している。調査地全体は住宅造成に伴って1～2mの盛土がなされており、それを除去すると耕作面となる。耕作面は南北方向にはしる畦畔を伴いながら西に向かって段状に下がり、水田は5面あった。標高は最も高い北東端でT.P. + 34.1 m、最も低い北西端はT.P. + 32.7 mである。その下には、中世から連綿と営まれてきた水田耕作土層が幾層にも重なって堆積する。

耕作土層の枚数は概して、調査区東端の最も標高が高い水田で少なく、標高が下がるにつれて増えていく。標高の低い部分では少しでも水はけを良くしつつ、耕作面を広げるために盛土することが多かったのに加え、しばしば洪水砂の影響も受けたことによるとみられる。

中世の耕作土層は、中世遺構面の基盤層よりも上の層と、それ以下の層で土質が異なる。後者の方が粘性は強く、中～粗粒砂の混入も格段に少ない。さらにそれぞれの土層に含まれる遺物にも時期差が認められたことから、その上面を中世における水田造成の一つの画期ととらえた。また中世遺構面基盤層より下では、上私部遺跡（その2）の調査で、中世遺構面鍵層とされた土層を部分的に認めた。水田耕作土層の断面を見ると、中世から近世・現代にかけての畦畔もしくは地割りの位置が、ほとんど変化していないことがわかる。

中世耕作土層を除去すると、古墳時代の遺物包含層を認めた。ただその検出範囲は極めて部分的で、地山が緩やかにくぼむ部分にのみ分布することから、大部分は中世以降の水田造成に伴って削平されたものと考えられる。中世耕作土層もしくは古墳時代包含層を除去した段階で、古墳時代の遺構面を検出した。古墳時代遺構面の基盤層は、花崗岩バイラン土もしくは黄褐色の粘土層からなる地山である。

近世耕作土の床土下面から中世遺構面までに含まれる耕作土層をⅠ層、中世遺構面から古墳時代遺構面までに含まれる耕作土層および遺物包含層をⅡ層とした。Ⅰ層は粗粒砂を多く含み若干粘性が低い耕作土層と、それよりは有機物を多く含みより土壌化の進んだ耕作土層に大別できたため、前者をⅠ-1層、後者をⅠ-2層とした。またⅠ-1層に関しては、その中でも粗粒砂が混入し粘性の低い耕作土層と、それよりやや粘性が高く、グライ化のみられる耕作土層とに分けられる箇所があったため、前者をⅠ-1-1層、後者をⅠ-1-2層と細分した。Ⅱ層は中世遺構面の基盤層である、粘性の強い極細粒砂～シルト層をⅡ-1層、その下層で部分的に認めた中世鍵層をⅡ-2層とした。また中世遺構面耕作土層の下層で部分的に認めた古墳時代遺物包含層をⅡ-3層とした。

前回までの調査成果をもとに、中世基盤層上面と、地山上面で遺構の検出につとめた。またそれ以外では、大別した耕作土層の単位ごとに土層を掘り下げて、遺物の検出につとめた。古墳時代遺構面において、明らかに古墳時代遺構埋土とは土質の異なる埋土の、水田耕作に伴うとみられる溝群を検出した。これらは中世遺構面で検出した水田耕作遺構より遡る時期の遺構ととらえられる。

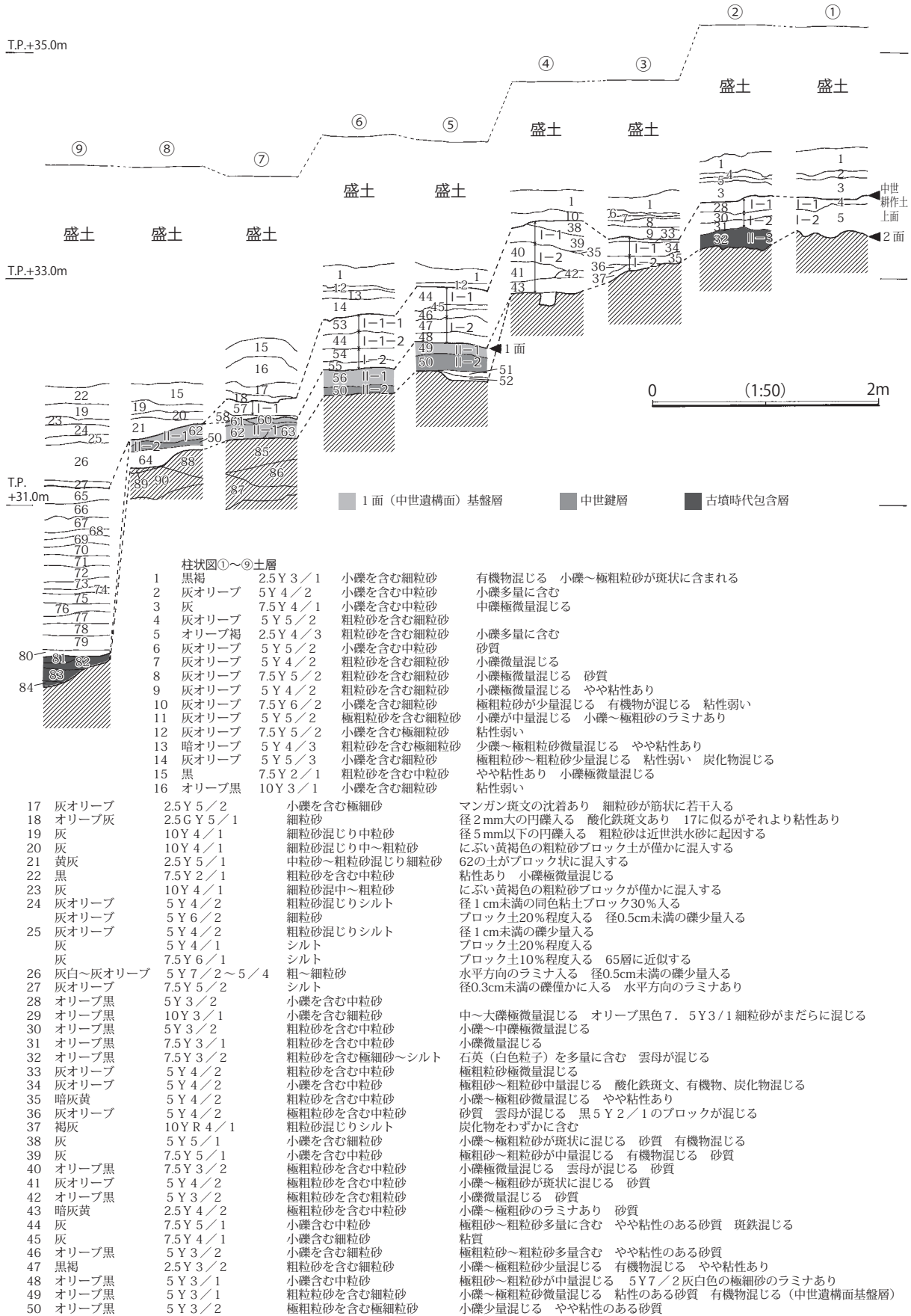


図6-1 土層断面柱状図

51	黒褐	2.5Y 3/2	粘質土	砂礫やや多量に入る
52	黒褐	2.5Y 3/1	粘質土	砂礫多量に入る
53	灰	5Y 4/1	小礫を含む中粒砂	極粗粒砂～粗粒砂中量混じる 砂質
54	オリーブ褐	2.5Y 4/4	極粗粒砂を含む極細粒砂	小礫微量混じる やや粘性あり 酸化鉄斑文あり
55	暗灰黄	2.5Y 4/2	極粗粒砂を含む細粒砂	小礫微量混じる やや粘性あり 酸化鉄斑文あり
56	灰オリーブ	5Y 4/2	小礫を含む細粒砂	極粗粒砂～粗粒砂中量混じる 粘性のある砂質 酸化鉄斑文あり (中世遺構面基盤層)
57	灰	10Y 4/1	中～粗粒砂混じり細粒砂	酸化鉄斑文顕著 径5mm以下の円礫含む
58	灰	7.5Y 5/1	中～粗粒砂混じり細粒砂	酸化鉄斑文若干入る 径5mm以下の円礫含む
59	オリーブ黒	5Y 3/1	極粗粒砂を含む極細粒砂	小礫微量混じる 有機物が混じる 粘性あり
60	オリーブ褐	2.5Y 4/3	中粒砂混じり細粒砂	灰色細粒砂がブロック状に混入する 62に似るが中粒砂の量多い (中世遺構面基盤層)
61	黄褐	2.5Y 5/3	中粒砂混じり細粒砂	下部に中粒砂ブロックが筋状に入る (中世遺構面基盤層)
62	暗灰黄	2.5Y 5/2	中粒砂混じり極細粒砂	灰色細粒砂がブロック状に混入する (中世遺構面基盤層)
63	灰オリーブ	5Y 5/2	中粒砂混じり細粒砂	暗灰黄極細粒砂がブロック状に混入する (中世遺構面基盤層)
64	褐灰	10Y R 4/1	中～粗粒砂混細粒砂	径5mm以下の花崗岩礫含む
65	灰オリーブ	5Y 4/2	細粒砂混じり粘土～シルト	径0.1cm未満の礫少量入る 酸化鉄斑文僅かに沈着 端部に植物遺体の混じり込みあり
66	灰	5Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	同色粘土ブロック10%程度入る
	灰～灰オリーブ	5Y 6/1～6/2	微粒砂	ブロック土40%程度入る 細かい植物茎根入る
67	灰オリーブ	7.5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト	径0.5%未満の礫少量入る 同色粘土ブロック30%程度入る
68	灰オリーブ	5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト	
	にぶい黄	2.5Y 6/3	粗～細粒砂	ブロック土5%程度入る 酸化鉄斑文沈着 径0.5cm未満の白色礫少量入る
69	灰	5Y 4/1	細粒砂混じりシルト	下位68とまじりあう
70	暗灰黄	2.5Y 4/2	中粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の白色礫少量入る
	にぶい黄	2.5Y 6/3	粗～細粒砂	ブロック土10%程度入る
71	灰	5Y 4/1	細粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫僅かに入る
	灰	5Y 6/1	微粒砂	ブロック土10%程度入る 植物遺体少量入る
72	暗灰黄	2.5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト	径0.8cm未満の礫少量入る
	灰黄	2.5Y 6/2	微粒砂	ブロック土10%程度入る
73	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の礫少量入る 植物遺体僅かに入る
74	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の白色礫少量入る 植物遺体僅かに入る
	灰黄	2.5Y 6/2	細粒砂	ブロック土10%入る
75	オリーブ黒	5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト	径1cm未満の礫少量入る
	緑灰	10GY 5/1	細粒砂	ブロック土20%程度入る 植物遺体僅かに入る
76	オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	径1cm未満の礫少量入る 炭化物片僅かに入る
77	オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	径1cm未満の礫少量入る
78	オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	径1cm未満の礫少量入る
	灰黄	2.5Y 6/2	細粒砂	ブロック土5%程度入る
79	オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	径1cm未満の礫少量入る 下位、下層の巻き上げあり 植物遺体僅かに入る
80	オリーブ黒	5Y 3/2+2/2	細粒砂混じりシルト	ブロック状に混じりあう
81	黒褐	2.5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の白色礫少量入る
82	オリーブ黒	5Y 2/2	粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の礫少量入る
83	オリーブ黒	5Y 2/2	粗粒砂混じりシルト	径1cm未満の礫少量入る 炭化物
84	黒	5Y 2/1	微粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の礫少量入る 軟質 植物遺体多く入る

図6-2 土層断面柱状図

それらの遺構の時期を明確に押えることができないが、古墳時代の遺構を切っていることや、前回の調査結果と照らし合わせて、古代から中世の水田耕作に関わる遺構と判断される。

調査区北西隅に位置する谷地形に起因して、今回の調査区では最も標高の低い水田区画においては、耕作土の堆積状況に、他の水田とは異なる状況が見られた。谷はもともと急傾斜を呈して北西方向に落込んでいたと見られるが、底部でさらにV字状の断面形を呈して急激に落込んでいた。その部分に粘性の強い黒色シルト層が堆積する。これは古墳時代の遺物包含層で、この中に多量の土器や木器が含まれていた。古墳時代遺物包含層より上では、多数の水田耕作土層が堆積する。

洪水砂層直下あたりまでの耕作土層には中世土器と古墳時代の遺物が混在する。谷部に造成された水田は、耕地面積が限られるのに加え、洪水砂の流入といった被害も受けやすかったと考えられる。時には洪水による被覆土を鋤きこみながら、時には意図的に土入れをして水田面のかさ上げと地力の回復を図るうちに、徐々に水田面が高くなっていったものとみられる。またその折々に谷の斜面際を掘り込んで平坦面の拡張を図っているため、斜面の所々に階段状のステップが認められる。併せて谷の肩の部分には畦畔が設けられていた。中世を通じて徐々に水田面がかさ上げされて、その間に最深部では1.5m近い厚さで耕作土が堆積することになる。それでも周りの水田より一段低い状況だったため、近世のある時期にその部分をめがけ、図6・柱状図⑨-26層にみるような洪水砂の堆積が生じたとみられる。その結果、隣接する水田との比高差がなくなり、水田の区画にも変化が生じたと見られる。

調査区の西側では、かつての水田の地割が乱れている。これはおそらく旧谷地形の影響を受けたためとみられる。前回の調査でも調査区の南西隅を東から西に向けて蛇行気味に走る谷地形が検出されており、その延長と見られる肩のラインが今回の調査区の南端で検出されている。以上を勘案すると、前回および今回の調査区は、一連の調査で明らかとなった古墳時代集落の展開する微高地の先端近くにあたるとみられる。

第2節 古墳時代の遺構

基本層序で述べたように古墳時代の遺構は地山面で検出している。古墳時代遺構面でみられる旧地形は、東から西に向けて徐々に地盤が下がる。また1調査区の南西隅と北西隅では急激な傾斜を見せる谷地形を検出した。そのうち前者は上私部遺跡（その2）の調査で検出された旧流路北肩の延長部分である。また1調査区の西端部では西に向かって地盤が一段下がる状況が認められた。この壇状の落ちは中世以降の水田造成に伴って成形されたものであるが、旧地形の形状に起因することは明らかである。これらのことから今回の調査区は、南東方向から北西方向に伸びる微高地の先端部にあたると思われる。

古墳時代遺構面では掘立柱建物13棟と竪穴住居1棟、柵・溝・井戸・土坑などを検出した。2調査区で検出した、南北方向を指向する溝群は、上私部遺跡（その2）の調査で検出された、掘立柱建物群を伴う方形区画の西側を限る、南北方向溝群の北側延長部にあたるものである。それらの溝群のうち、最も東側に位置する溝の東肩に、溝と平行する柵の柱穴を検出したのも、前回の調査と同様である。柱穴や土坑等の遺構密度は、これら南北方向の溝群より東側で概して高い様子がみてとれる。そこでまず、南北方向溝群の東側と西側とに分けて、遺構検出状況の概要を述べる。

南北方向を指向する溝群より東側では、掘立柱建物4棟〔1棟は上私部遺跡（その1）の調査で検出した「建物3」と一連のもの〕、竪穴住居1棟、井戸、土坑、ピットなどを検出した。また前回の調査で検出された方形区画の北側を限る、東西方向溝の延長部分を検出した。この溝は今回の調査区ではゆるやかに湾曲しながら北側に方向を転ずる。したがってこれらの区画溝は、前回の調査で検出した掘立柱建物群の四周を完全に長方形に区画するものではないことが明らかとなった。つまり南北方向を指向する溝と、東西から南北方向へゆるやかに方向を転じる溝とに挟まれた部分は、掘立柱建物群を伴う居住空間への出入り口にあたると思われる。また溝が東西から南北へゆるやかに方向を転ずる箇所では、これに直行する方向で、平行する2条の溝があったことも明らかになった。それら平行する2条の溝を境に、その東側では掘立柱建物とそれに切られる竪穴住居、もしくはその可能性のある遺構が交錯するのに対し、西側の区画では掘立柱建物のみが検出される状況が見てとれる。

南北方向を指向する溝群の西側では、掘立柱建物9棟〔1棟は上私部遺跡（その2）で検出した「建物19」と一連のもの〕、集水土坑、谷地形などを検出した。3間×5間の東西方向建物を最大とし、総柱建物2棟を含む。切り合いや方向などからみて、これらの建物は少なくとも2時期に分けられる。

建物の主軸方向や、それらの建物群の北側および東側に配された溝埋土からの遺物の様相から、南北溝群の西側で検出した建物のほとんどは、6世紀後半代に属するものとみられる。それらの北西側および南西側は谷地形に接しており、集落が構築された微高地の先端に当たる部分だったと考えられる。建物群の北側を区切る溝の中ほどで、土坑を3基検出した。そのうちの1基は長軸1m強で、中央に須恵器甕と木樋が据えられており、集水機能を有していたものと想定される。次に種類ごとに検出した遺構の詳細を述べる。

1 竪穴住居

今回の調査では1棟の竪穴住居を検出した。その他にも土坑の項目で述べるが、12竪穴住居に近接する位置で、竪穴住居の可能性のある土坑を数基検出した。いずれもこれまでの上私部遺跡の調査で検出された竪穴住居に比べて規模が小さい。今回の調査区内でみると、竪穴住居もしくはその可能性がある土坑は、19溝よりも東の範囲に限られる。また前回の調査結果と併せてみても、集落の中心とみら

れる方形区画の西側を限る、南北方向溝群より西側では竪穴住居が展開しない状況がうかがえる。

12 竪穴住居（図8）

2調査区中央部やや東寄りで検出した。平面形は方形で、掘形の主軸方向は平均するとN-6°-W、一辺は約3.6mである。柱の心々距離は東西1.4m強、南北約1.2mと、東西方向にやや大きく、柱の位置は全体にやや西に寄る。壁溝は竪穴住居の南西角部分でのみ確認した。検出面から貼り床面までの深さは極めて浅く、10cm強で、特に西側では壁の立ち上がりは検出できなかった。竪穴住居の北壁は、側溝掘削時に削平されたため部分的な検出にとどまるが、北側から幅1m前後の溝が一条、北に向けて伸びるのを確認した。溝の西肩は住居西側の延長線をなぞるように伸びており、両遺構は同じ計画性のもとに築かれたものと考えられる。溝は住居に伴う排水溝と考えられる。溝の掘形はわずかしか残存していなかったが、埋土は12竪穴住居埋土に似ており、それよりもやや有機物の含有量が少ない状況を認めた。12竪穴住居は、一辺の長さが従前の調査で検出された竪穴住居の中でも短く、小規模である。

C-C'断面で顕著なように、掘形底部には凹凸がある。これは地山の土質と関係するとみられる。調査区内で検出した地山はおおむね、粘性の強い中～粗砂混じりの細粒砂～シルト層と、細粒砂混じり中～粗粒砂層からなり、それらが互層に堆積する状況が見られた。12竪穴住居はおおむね粘性の強いシルト層上面で検出しており、それを掘り抜くと顔を出す中～粗粒砂層の上面をねらって、掘形の底面としている状況が見られた。その上面に凹凸があるため、必然的に掘形底部にも凹凸が生じたと考えられる。住居の底面は、貼り床を敷き均す際に平らにすればよく、掘形を掘削する際にはまず、粘性が強く、水分を含みやすいシルト層を掘り抜く事が優先されたことが伺える。

住居埋土から須恵器杯・甕、土師器甕等の破片を検出した。そのうち時期比定が可能なものを中心に実測した。北側から北へ伸びる溝から遺物は出土しなかった。

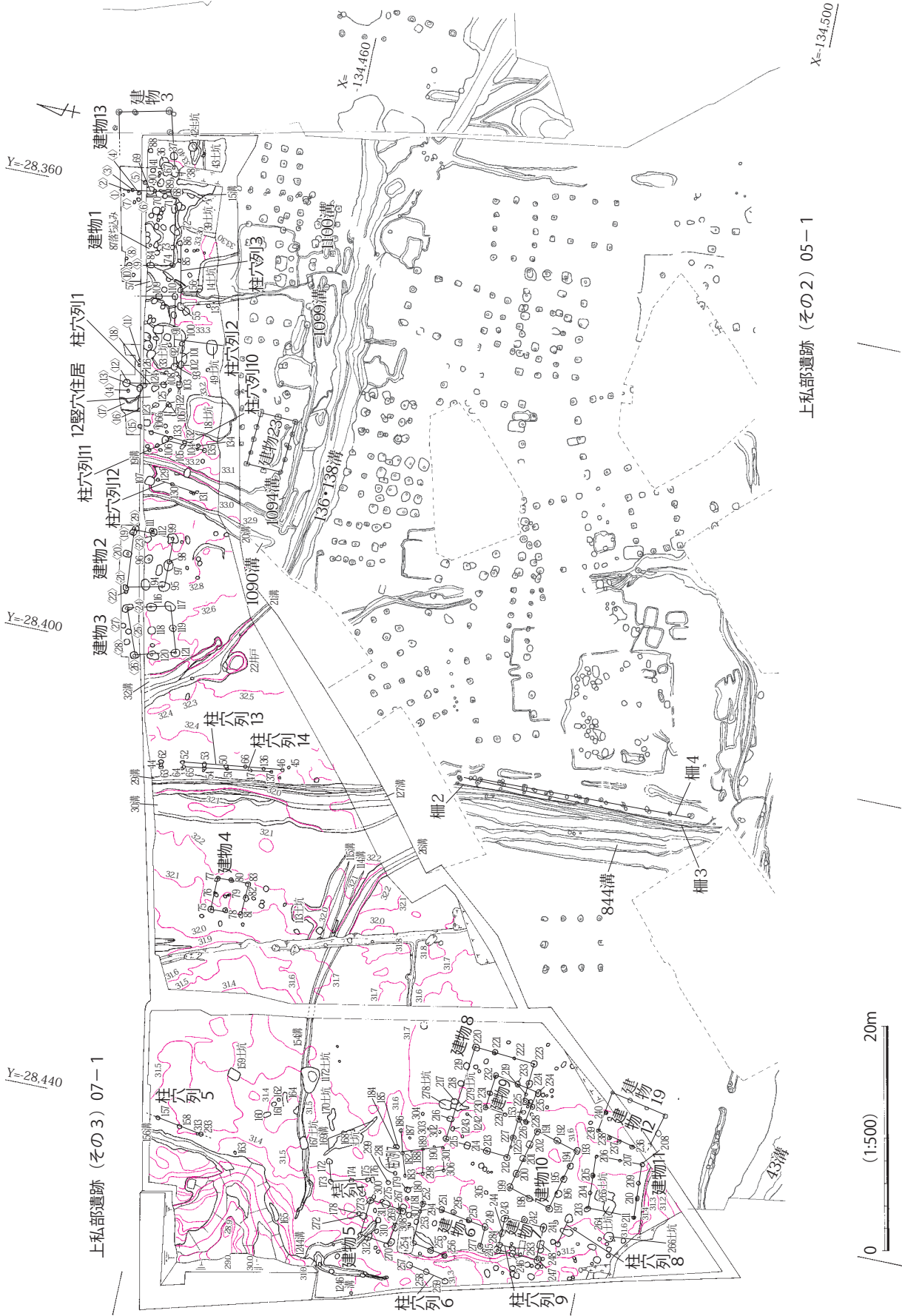
2 掘立柱建物

今回の調査では13棟の掘立柱建物を検出した（2棟は以前の発掘調査で、部分的に検出されたものの延長部分）。前回の調査で検出された古墳時代集落の中心域とみられる、掘立柱建物群を伴う方形区画の北側と、西側に当たる部分で掘立柱建物を検出した。南北方向溝群と、東西から南北へ緩やかに方向を転じる溝とに挟まれた部分には掘立柱建物はなく、方形区画への出入り口にあたりとみられる。

建物主軸方向の北に対する振れ幅の共通性が同時期に共存した建物群のひとつの根拠となるため、東西棟・南北棟ともに北に対する建物の東西への振れを主軸方向の振れとして示しておく。なお、建物柱穴断面実測図の土層観察については、一括して土色注記表を掲載する。

建物1（図9）

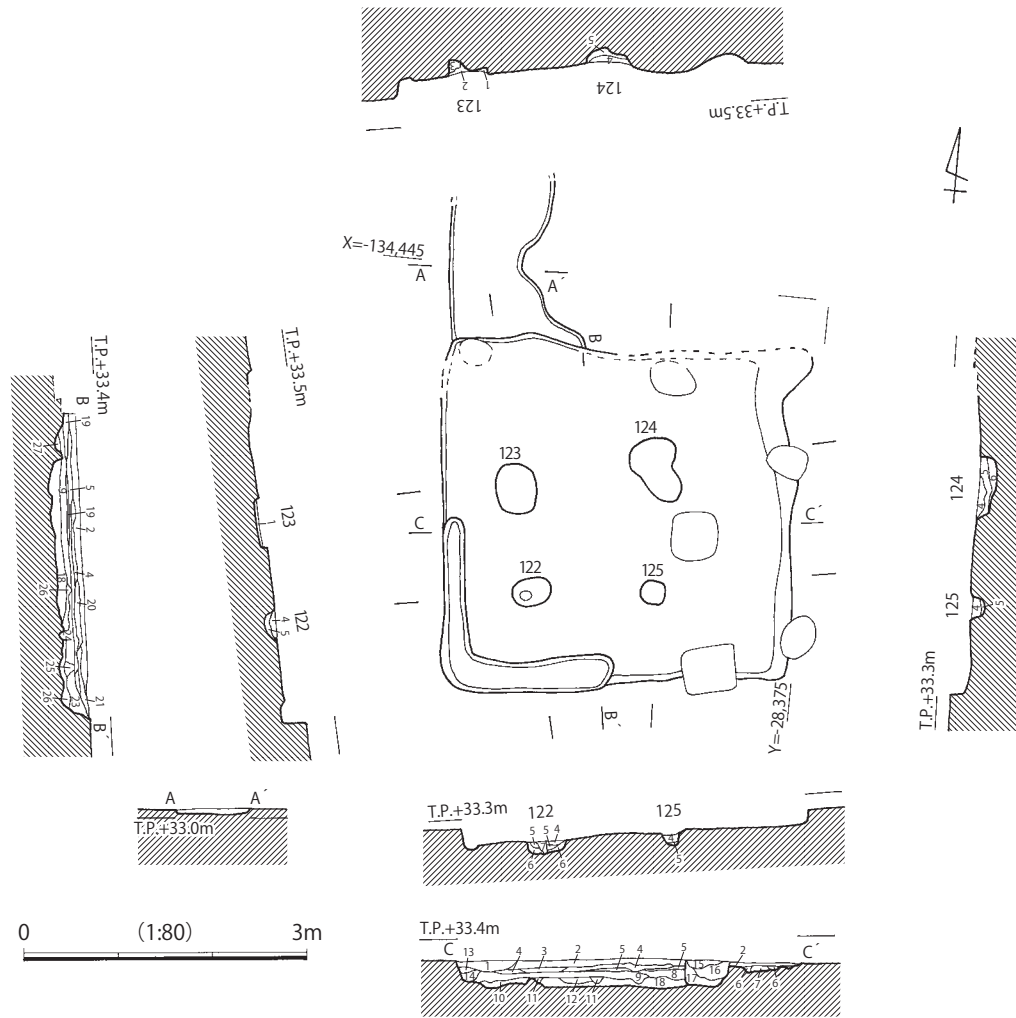
2調査区東部で検出した東西4間、南北2間以上の掘立柱建物である。建物の北側辺は調査区外に続く。これまでの上私部遺跡の調査で検出された掘立柱建物の中で、4間四方や4間×1間の建物は検出されていない。したがって4間を桁行ととらえると、梁行は2もしくは3間である可能性が高いことになる。また梁行が4間の建物では、上私部遺跡（その2）の調査で検出された5間×4間の建物が1棟あるのみである。ただこの建物の場合も梁行の柱間が狭いため、平面積で見れば5間×3間のものとほぼ等しい。今回の調査で検出した建物1の4間を梁行とした場合、前回調査の5間×4間の建物よりさらに一回り大きなものになる。これらのことから、おそらく建物1は4間×3間の建物であろうと考える。桁行・梁行の柱間を比較すると、上私部遺跡（その2）の調査で検出された建物10に近似する。ただし両者の主軸方向の振れは一致しない。



上私部遺跡 (その2) 05-1

上私部遺跡 (その3) 07-1

図7 古墳時代遺構配置図



12 竪穴住居			
1	黒褐	10 Y R 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
2	黒褐	10 Y R 3 / 2	粗粒砂混じり細粒砂
3	黒褐	10 Y R 3 / 1	中粒砂混じり細粒砂
4	黒褐	2.5 Y 3 / 1	中粒砂混じりシルト
5	黒褐	2.5 Y 3 / 2	中～粗粒砂混じり細粒砂
6	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	中～粗粒砂混じりシルト
7	灰	5 Y 4 / 1	細粒砂混じり粗粒砂
8	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	中～粗粒砂混じり細粒砂
9	灰	5 Y 4 / 1	細粒砂混じり中～粗粒砂
10	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じり中～細粒砂
11	灰オリーブ	5 Y 4 / 2	中粒砂混じり細粒砂
12	暗灰黄	2.5 Y 5 / 2	細粒砂混じり中～粗粒砂
13	黒褐	2.5 Y 3 / 2	粗粒砂混じり細粒砂
14	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり中～細粒砂
15	褐灰	10 Y R 4 / 1	中粒砂混じり細粒砂
16	黄灰	2.5 Y 4 / 1	細粒砂混じり中粒砂
17	灰	5 Y 4 / 1	細粒砂混じり中～粗粒砂
18	黄褐	2.5 Y 5 / 3	細粒砂混じり中～粗粒砂
19	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト
20	黄灰	2.5 Y 4 / 1	中粒砂混じり細粒砂
21	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
22	灰	5 Y 4 / 1	中粒砂混じり細粒砂
23	黄灰	2.5 Y 4 / 1	細粒砂混じり中～粗粒砂
24	灰	7.5 Y 4 / 1	中～粗粒砂混じり細粒砂
25	暗オリーブ灰	5 G Y 4 / 1	細粒砂混じり中粒砂
26	暗オリーブ灰	2.5 G Y 4 / 1	細粒砂混じり中粒砂
27	オリーブ褐	2.5 Y 4 / 3	細～中粒砂混じり粗粒砂
地山のシルトブロック入る			
地山の粗粒砂・シルトブロックに炭化物が入る			
地山の粗粒砂ブロック、シルトブロックに炭化物が入る 6より粗粒砂の含有量多い			
地山の中～粗粒砂ブロックと5に似た細粒砂ブロックが混ざり合う			
細粒砂ブロックと地山の中～粗粒砂ブロックが混ざり合う			
地山の再堆積層に灰色の細粒砂ブロックが僅かに入る			
地山の再堆積層に灰黄色の細粒砂ブロックが入る			
地山の中～粗粒砂ブロックに13の細粒砂ブロックが入る			
炭化物僅かに入る			
炭化物僅かに入る			
12に似るがそれより粘性低い			
地山の中粒砂ブロックと、灰色細粒砂ブロックが混ざり合う			
地山の中粒砂ブロックと、灰色細粒砂ブロックが混ざり合う			
地山の再堆積層			
122～125柱穴			
1	褐灰	10 Y R 4 / 1	細粒砂混じり中～粗粒砂
2	黒褐	10 Y R 3 / 1	中粒砂混じり細粒砂
3	黒褐	2.5 Y 3 / 1	中粒砂混じり細粒砂
4	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり細粒砂
5	黄灰	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり中～細粒砂
6	灰黄褐	10 Y R 4 / 2	細粒砂混じり中～粗粒砂
7	黒褐	10 Y R 3 / 1	中～粗粒砂混じり細粒砂
地山のシルトブロック含む			
地山の粗粒砂ブロック入る			

図8 12 竪穴住居実測図

建物の南側辺の長さは 6.4 m、東・西側辺の 2 間分の長さは 3.9 m、床面積は 24.9 m²以上である。主軸方向の振れは N-9°-W である。この建物の南側辺と、建物 3・13 および柱穴列 2 の南側辺とはほぼ同一のライン上に乗る。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で、わずかに隅丸方形のものが含まれる。平面形が長楕円形の柱穴では柱痕が認められず、断面形状でみると壁面の立ち上がりかゆるやかな部分が認められるので、建物の廃絶後に柱が抜き取られた可能性がある。深さはコーナーに位置する柱穴で約 30 cm とやや深く、それ以外は 20 cm 前後と、概して浅い。68 柱穴から土師器の細片が数点出土したが、時期の特定にはいたらなかった。ただこの建物の南東隅柱に切られる 15 溝から比較的多量の遺物が出土している。したがって 15 溝出土遺物の時期が、この建物の時期の上限を示すといえる。

建物 2 (図 9)

2 調査区中央部で検出した東西 2 間、南北 2 間の総柱建物である。後で述べる、2 間×2 間の総柱建物である建物 3 とは隣り合う。北側辺は 5.1 m、南側辺は 4.4 m で、北側辺がやや長い。東側辺・西側辺はいずれも約 3.5 m と、長さはほぼ等しいが、東側辺の柱穴列が他の南北方向の柱穴列より西に振っている。そのため平面形が台形を呈し、全体にややいびつな印象を受ける。建物の床面積は 16.6 m²、主軸方向の振れは N-3°-E である。

柱穴の平面形は楕円形もしくはややいびつな隅丸方形で、柱穴の一辺もしくは長軸は 40～80 cm とややばらつきがある。深さは、コーナーに位置する柱穴で 50～60 cm と若干深くなる傾向がみられるものの、おおむね 40 cm 前後におさまる。東側辺の柱穴列では 2 基の柱穴が別の柱穴で切られるが、切っている方の柱穴と対応する柱穴が周囲に認められないことから、それらは他の建物を構成するものではなく、建物 2 の柱穴を補修もしくは補強するために設けられたものの可能性もある。95 柱穴は掘形を段掘りして柱材を落とし込み、固定している。また <19>・98・111 柱穴など、柱穴掘形の端に柱材を立て掛けて固定した柱穴が認められる。<29>・99 柱穴で柱材が残存していた。

<19> 柱穴で土師器片、<21> 柱穴で須恵器の細片、98 柱穴で外面に平行叩き、内面に同心円文の当て具痕跡が認められる須恵器甕の胴部片を各 1 点出土したが、時期の特定には至らなかった。

建物 3 (図 10)

2 調査区中央部で検出した東西 2 間、南北 2 間の総柱建物である。前述の建物 2 の西隣に位置する。東西 4.1 m、南北 3.8 m と東西にわずかに長い。この建物の南側辺と、建物 1・13 および柱穴列 2 の南側辺とはほぼ同一のライン上に乗る。建物の床面積は 15.6 m²、主軸方向の振れは N-14°-W である。

柱穴の平面形は隅丸方形もしくはややいびつな隅丸長方形で、柱穴の一辺もしくは長軸は 40～80 cm とややばらつきがある。柱痕の直径は 20 cm 前後である。深さはコーナーに位置する柱穴で、40 cm 前後と若干深い傾向があるものの、それ以外はおおむね 20～30 cm 前後におさまる。

120 柱穴から土師器・須恵器の細片が各 1 点、121 柱穴から須恵器と土師器の細片が数点ずつ出土した。内、かろうじて実測可能な須恵器と土師器を各 1 点実測した。

建物 4 (図 10)

2 調査区西部で検出した東西 2 間、南北 2 間の総柱建物である。東西 2.8 m、南北 2.7 m とほぼ正方形で、床面積は 7.6 m² である。間数は同じであるが、建物 2・3 と比べて柱間、柱穴の大きさ、柱痕径はいずれも小さく、床面積は半分弱である。主軸方向の振れは N-3°-W である。

柱穴の平面形はいびつな隅丸方形もしくは楕円形で、一辺もしくは長軸の長さはおおむね 30～60

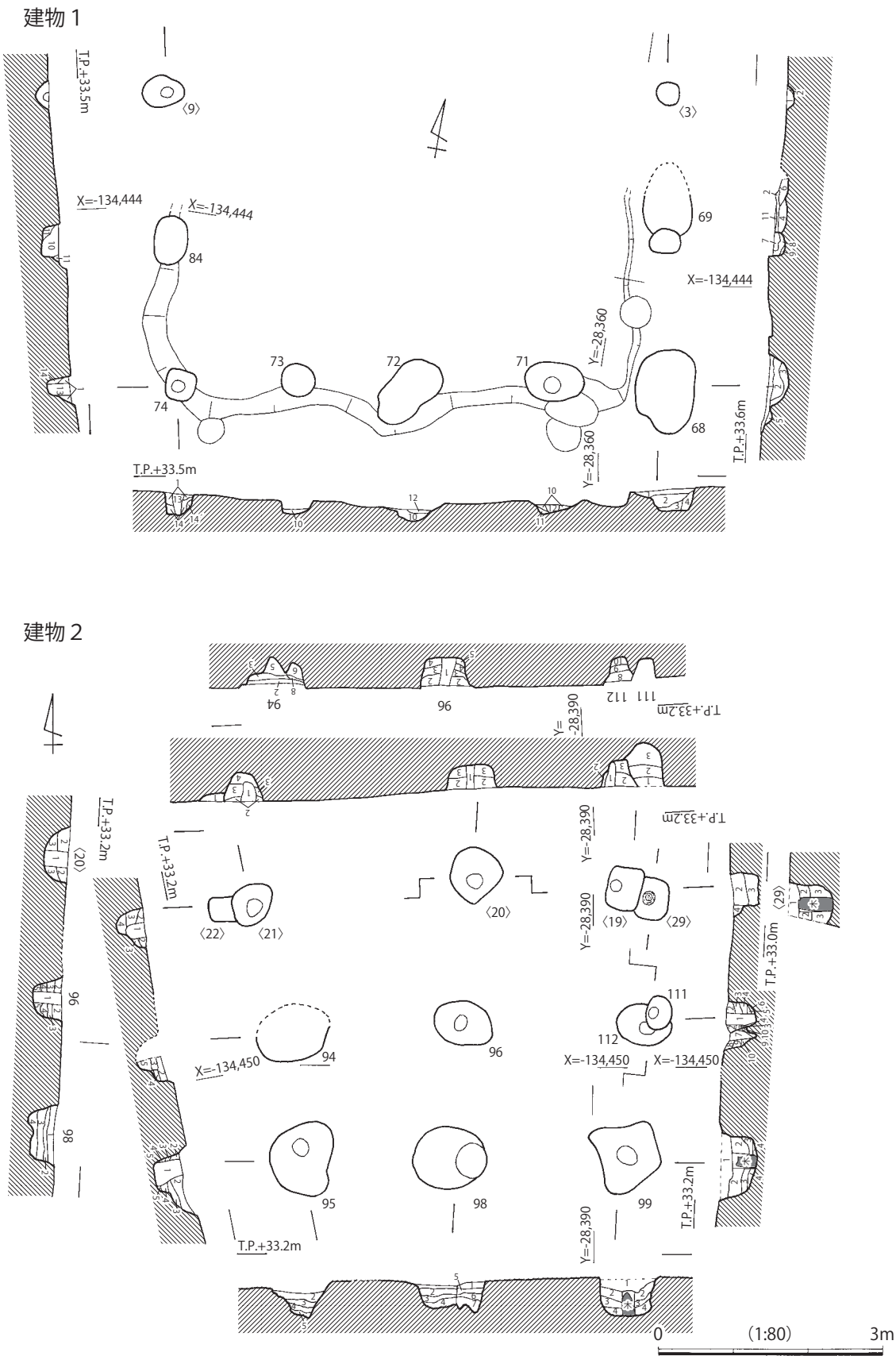
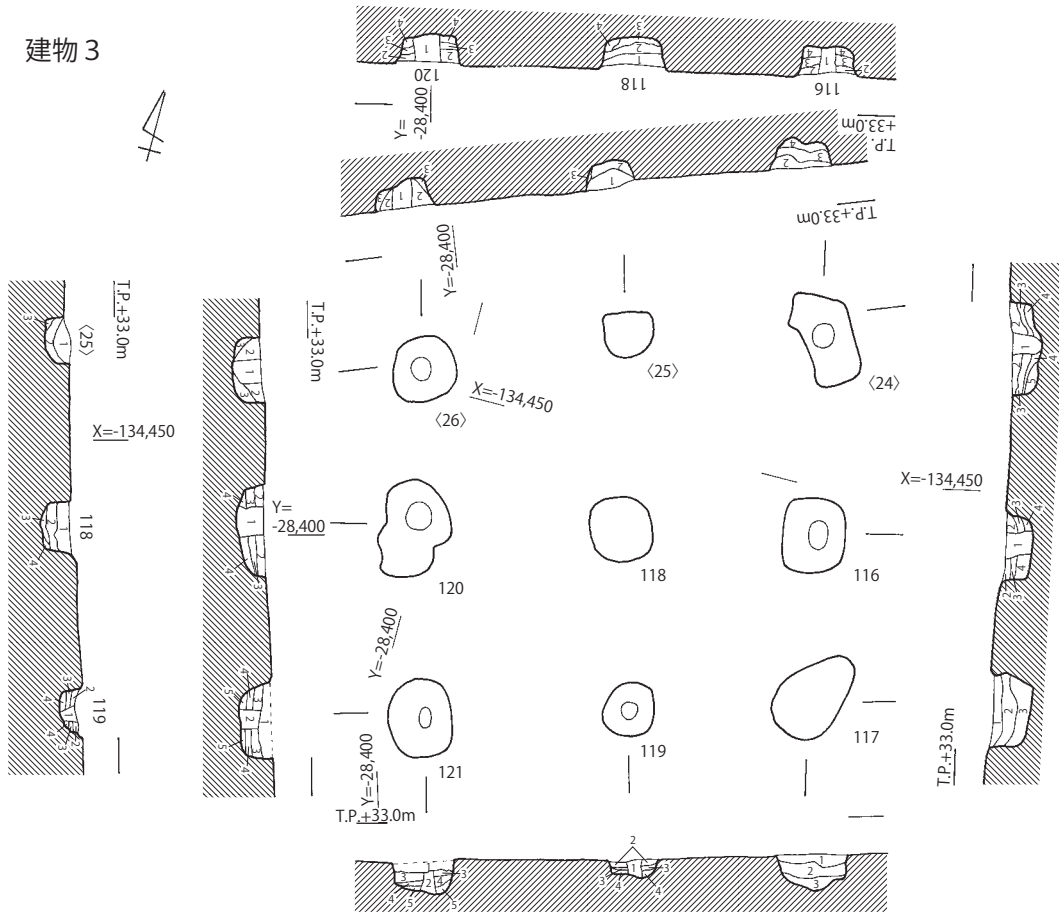


図9 建物 1・2 実測図

建物 3



建物 4

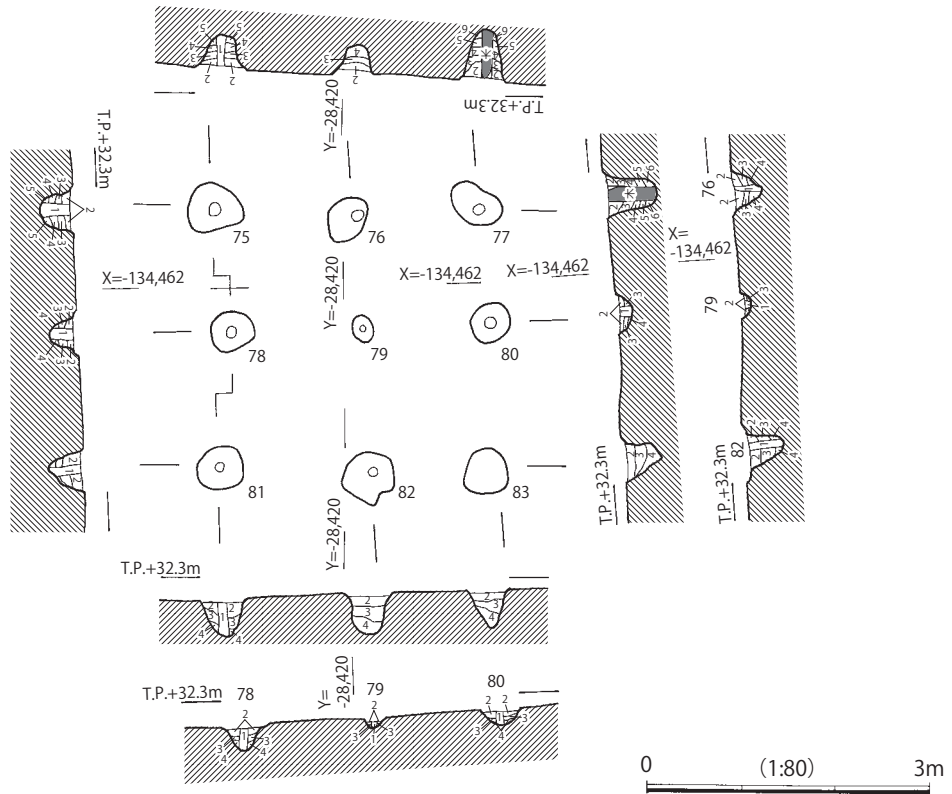


图 10 建物 3・4 実测图

cmに含まれる。ただ中央の79柱穴は長軸30cm、短軸20cm強と、他に比べて極端に小さい。柱痕径は10cm前後である。深さは北側辺および南側辺の柱穴がやや深く、おおむね40～50cmに含まれるのに対し、それ以外の柱穴は10～30cmと浅い。

建物4の南側に位置する26溝は、上私部遺跡(その2)の調査で検出された南北溝群の西端に位置する溝の延長部にあたり、南北方向からゆるやかに東西方向へ方向を転じるとみられる。南北方向を指向する29・30・127溝より西側に位置する建物のうち、26溝を経て154溝にいたる、東西方向溝の北側に位置する唯一の建物である。この東西方向溝より北側における遺構の分布密度は概して低いが、建物4の存在からその北側にも居住域が広がっていた可能性が残る。76・77・78柱穴で柱材が残存していた。

建物5 (図11)

1調査区中央西寄りで検出した東西2間、南北2間の総柱建物である。東西3.3m、南北2.8mと東西にやや長い。床面積は9.2㎡で建物4よりはやや大きいが、概して小規模な部類に入る。主軸方向の振れはN-6°-Eである。柱穴の平面形は不整形な隅丸方形および円形で、一辺もしくは長軸の長さはおおむね50～60cmに含まれる。柱痕の直径は約20cm。建物5を構成する柱穴を切るか、接している柱穴に関しては、他の建物や柱穴列を構成する可能性もある。ただそれらは、他のピットと明確な規則性をもって関連付けられなかったため、修復もしくは補強のために設けられたものである可能性を勘案して平面図に含めた。

西側辺中央の柱穴は、271柱穴掘形の残存がわずかなことからみて、削平された可能性も考えられる。ただ西側辺の柱穴列に並ぶ位置で、北西角の柱穴に近い位置に312柱穴の掘形がわずかに残存することから、これがそれに換わる可能性が高いと考えた。柱穴の残存深度は10～40cmとややばらつきがあるが、柱穴底部の標高を見ると、四隅の柱穴がやや低いものの、それ以外はおおむね等しい。

出土遺物は273柱穴から出土した柱材のみである。

建物6 (図11)

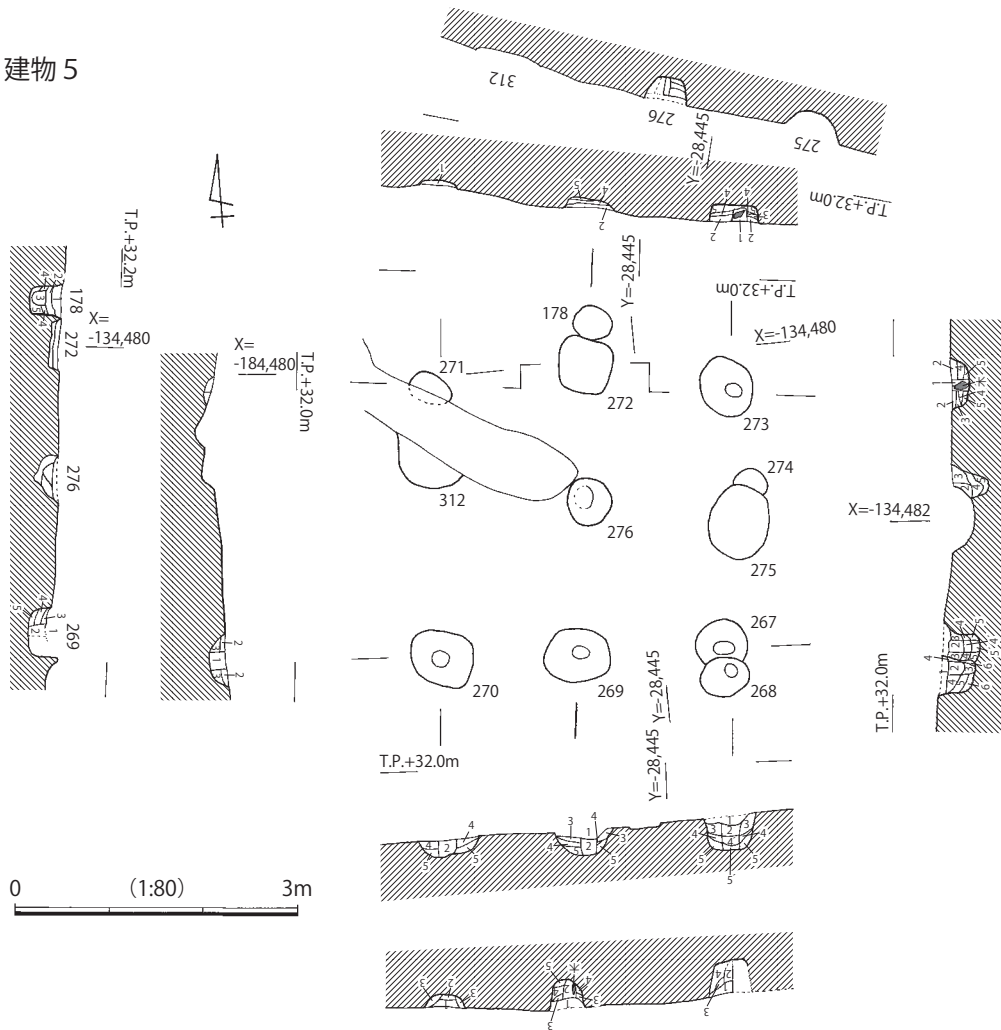
1調査区西寄りで検出した南北4間、東西2間の掘立柱建物である。建物5の南隣に西側辺をそろえるように並んで位置するが、こちらの柱穴列がわずかに東に寄る。建物8からは6.4mほど離れるが、長軸方向を直交させ北側辺がそろえる。主軸方向の振れはN-8°-Eである。南北5.9m、東西3.7m、やや平行四辺形気味の平面形で、床面積は21.8㎡である。南西角部分の柱穴は、中世段階の棚田造成の際に削平されたとみられる。柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形および隅丸長方形で、一辺40～60cmである。柱痕の直径は約20cm。柱穴底部の標高は四隅の柱穴が他に比べて15～20cmほど低いものの、それ以外はおおむね等しい。254柱穴は底に板材を敷き、その上に柱を据えたとみられる。

東側辺・西側辺の柱間に長短があり、不整合な印象を受けるが、隅柱からの一間分と北側辺・南側辺の柱間とはおおむね1.8m前後に収まる。つまり249-250柱穴間・252-251柱穴間・254-255柱穴間の距離と、北側辺・南側辺の柱間の長さはおおむね等しい。このように柱を配置すると、東側辺・西側辺の中央の柱間が間延びすることになる。そのため中央に256・295柱穴を配したのではないかと考えられる。したがって削平されて欠落した柱穴は、南西隅柱とその隣の柱の計2基分だったと考える。出土遺物は254柱穴から出土した礎板のみである。

建物7 (図12)

1調査区南半部西寄りで検出した南北2間、東西2間の掘立柱建物である。南北3.7m、東西2.9m

建物 5



建物 6

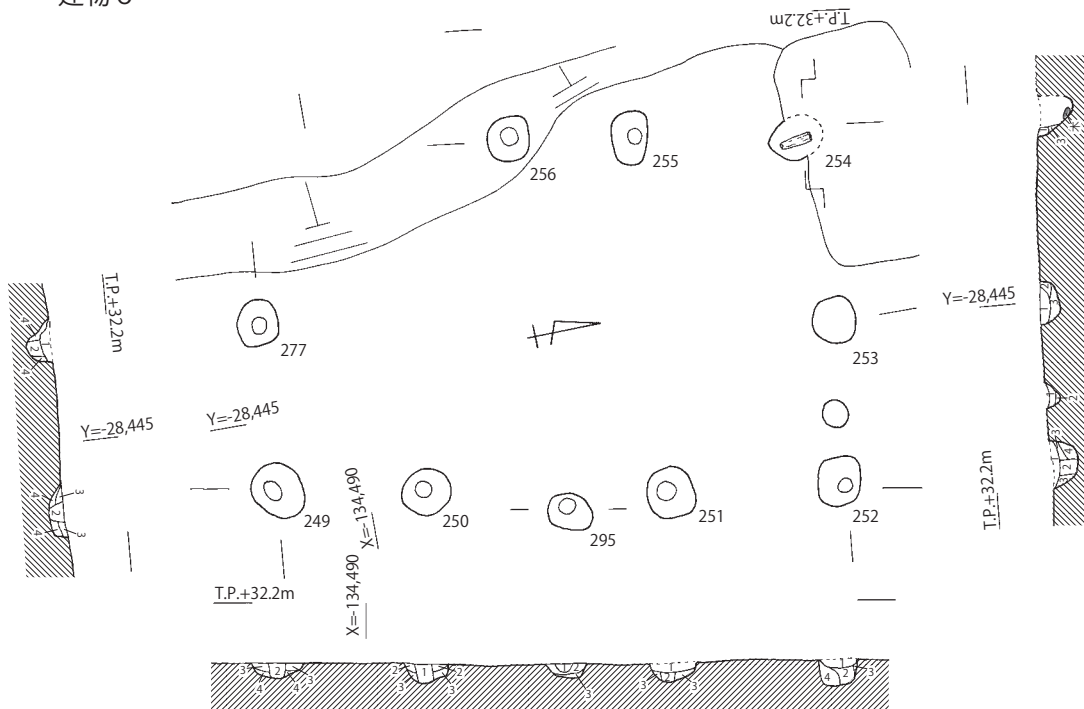
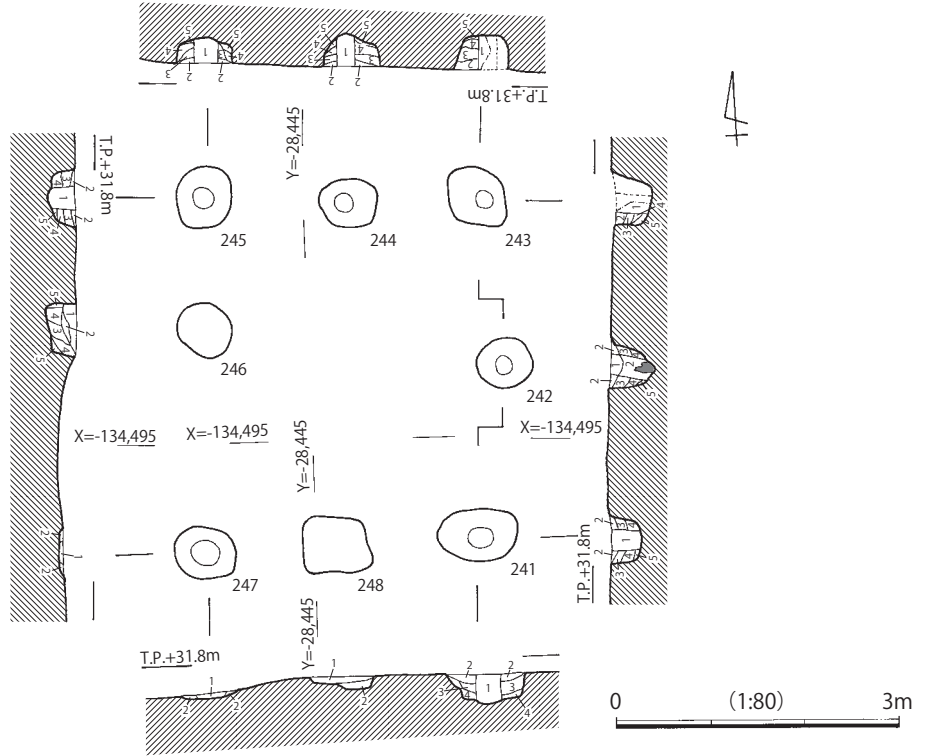


图 11 建物 5・6 実测图

建物7



建物8

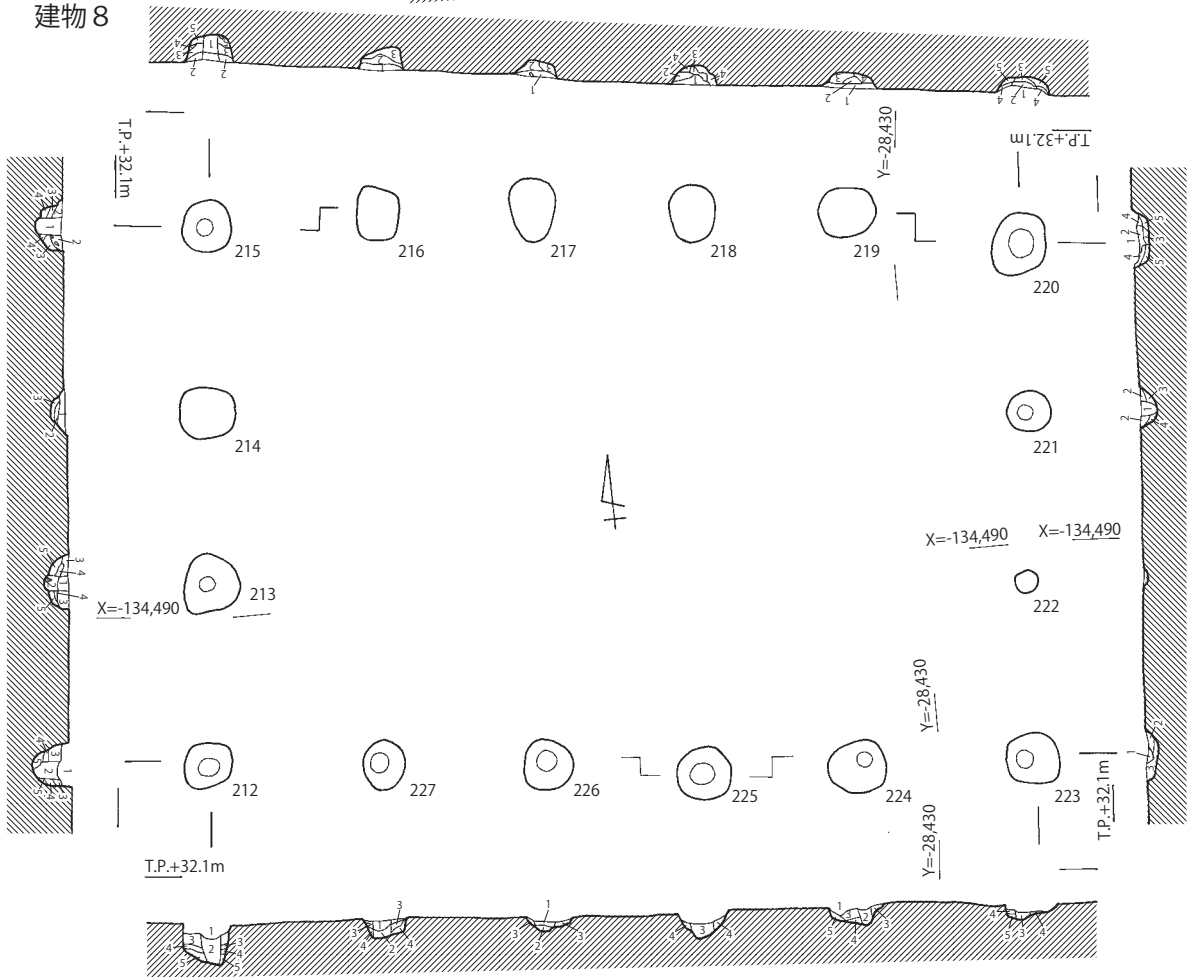


图 12 建物7・8実測図

と南北にやや長く床面積は 10.7 m²、主軸方向の振れは N - 2° - E である。柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形ないし隅丸長方形で、一辺の長さはおおむね 40 ~ 60 cm に含まれ、柱痕の径は 20 ~ 30 cm である。

建物の床面積に比して、柱穴および柱痕の規模がやや大きい印象を受ける。建物の南西隅柱の部分は、中世における棚田造成の際に削平されて残存深度はわずかだが、柱穴底部の標高でみるとむしろ 248 柱穴の方がもとは掘削深度がやや浅く、それ以外はほぼ等しかったとみられる。したがって隅柱だけ柱穴を深めに掘り、柱を据え付けるということも無かったようだ。

建物 5・建物 6 間と同じような距離で建物 6 の南側に位置するが、建物 7 はほぼ 1 間分、2 棟より東に寄る。242 柱穴より柱材が、243 柱穴から土師器の細片 2 点が出土した。土師器はいずれも摩滅しており器種等の判別はできなかった。

建物 8 (図 12)

1 調査区南半部東寄りで検出した東西 5 間、南北 3 間の掘立柱建物である。東西 8.5 m、南北 5.6 m、床面積は 47.6 m²で、これまでの上私部遺跡の調査で検出された中でも最大規模の建物である。主軸方向の振れは N - 5° - E である。建物 6 とは主軸方向を直行させつつ、建物北側辺の並びを揃えるように位置する。建物 8 が位置する部分は、中世以降に行われた水田造成の際により大きく削平を受けたと見られ、柱穴の残存深度は東側辺と南側辺でとりわけ浅い。ただ柱穴底部の標高で比較すると、西側辺でやや低く、それ以外ではほぼ等しい。

柱穴の平面形は隅丸方形もしくは楕円形で、一辺もしくは長軸の長さは 40 ~ 60 cm に含まれる。柱痕の径は 20 ~ 30 cm である。223・226 柱穴は掘形を段掘りして柱材を落とし込み、固定している。

前回の調査で検出された、古墳時代集落の中心部と見られる掘立柱建物群の中にも、これと同規模の掘立柱建物が数棟検出されている。南北方向溝を挟んでその西側にも、大型の掘立柱建物が存在したことが明らかとなった。

218・224 柱穴から土師器の細片が各 1 点出土したが、時期比定できるものはなかった。

建物 9 (図 13)

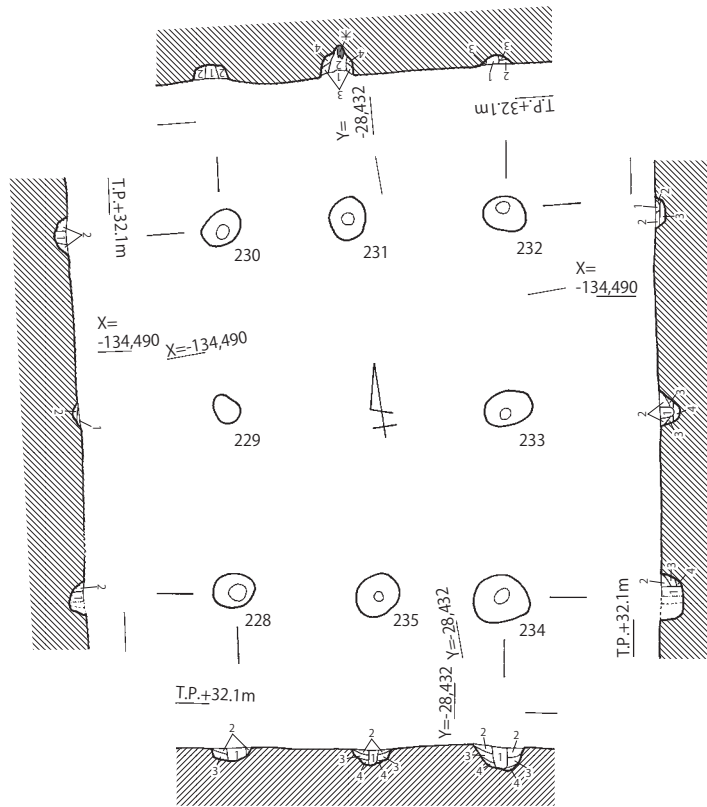
1 調査区南半部東寄りで検出した南北 2 間、東西 2 間の掘立柱建物である。南北 3.9 m、東西 2.9 m と南北にやや長く、床面積は 11.3 m² である。建物 8 と主軸方向を直交させつつ、重なるように位置するが、床面積は建物 8 の 4 分の 1 に満たない。この建物の南側辺は建物 6 の南側辺とほぼ同じライン上に乗る。主軸方向の振れは N - 9° - E である。柱穴底部の標高を比較すると、232・229 柱穴がやや高いのを除けば、ほぼ等しい。

柱穴の平面形はややいびつな楕円形もしくは隅丸方形で、長軸ないし一辺の長さは 30 ~ 50 cm に含まれる。柱痕の直径は 10 ~ 20 cm で、柱穴及び柱痕の規模は他に比べて概して小さい。231 柱穴は柱の部分が若干沈み込んでいる。230 柱穴で土師器細片と須恵器杯の破片が各 1 点、232 柱穴から土師器細片 3 点と須恵器細片が 1 点、231 柱穴では柱材を検出したが、時期比定の可能なものはなかった。

建物 10 (図 13)

1 調査区南寄りで検出した東西 4 間、南北 2 間の掘立柱建物である。東西 5.7 m、南北 4 m で床面積は 22.8 m² である。主軸方向の振れは N - 14° - E である。建物 9 の主軸方向とおおむね直交し、建物 9 の西側辺と建物 10 の東側辺の柱筋がほぼそろそろ。南北の柱間に比べて東西の柱穴の間隔が狭く、北側辺・南側辺の長さは南北の柱間のちょうど 3 間分に相当する。

建物9



建物10

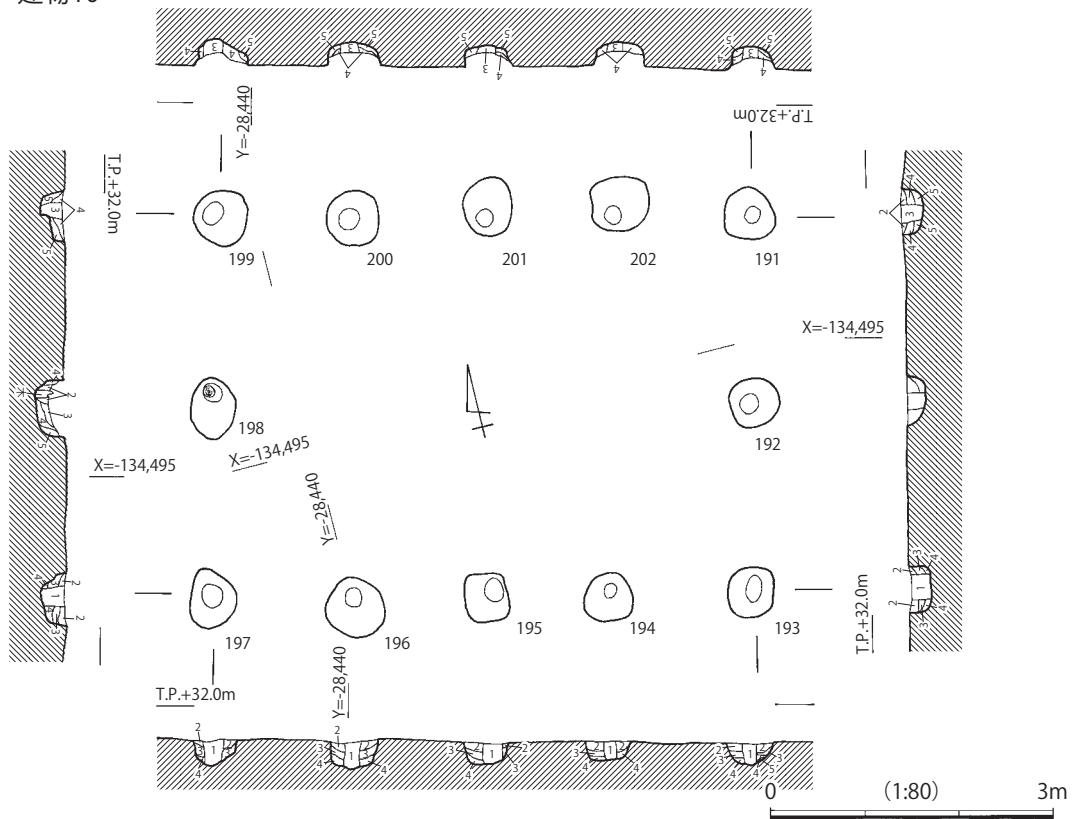


图 13 建物 9・10 实测图

柱穴の平面形はいびつな楕円形で、長軸の長さは40～60 cm、柱痕の径は約20 cmである。199柱穴は柱穴掘形を段掘りして柱材を落とし込み、固定している。また198柱穴は柱を掘形の壁にもたせかけて固定している。198柱穴から柱材・須恵器細片1点と土師器細片2点、199柱穴から須恵器片と土師器細片を各1点、200柱穴から土師器細片を1点検出した。

建物 11 (図 14)

1 調査区南端部で検出した東西3間、南北2間の掘立柱建物で、東西4.8 m、南北4.2 mで床面積は20.2 m²である。主軸方向の振れはN-1°-Eである。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で、柱穴の直径もしくは長軸は20～60 cm、柱痕の径は10～20 cmで、柱穴の規模は他に比べて概して小さい。西側辺中央に位置する柱穴は土坑掘削時に削平され、欠落する。南側辺のすぐ南側は、上私部遺跡(その2)調査区から続く谷の落ち口にあつたっている。後述する建物12とともに、古墳時代集落が乗る微高地先端の、南端に位置する。床面積の大きさも、建物12に近いが、両者の主軸方位は若干異なる。柱穴からの出土遺物はなかった。

建物 12 (図 14)

1 調査区南端部で検出した南北3間、東西2間の掘立柱建物で、今回の調査区と上私部遺跡(その2)調査区にまたがる。建物の東側辺と南側辺は、上私部遺跡(その2)の調査で「建物19」として調査している。東西方向は北側辺3.5 mに対して南側辺が3.2 mとやや短く、南北方向は東側辺5.3 mに対して西側辺4.9 mと短い。平面形は台形状でややいびつである。柱穴の平面形は円形で、検出面での規模は直径25～40 cm、深さは20～30 cmである。柱痕の直径は約10 cmで、主軸方向の振れは東側辺と西側辺で平均するとN-10°-Eである。柱穴からの出土遺物はなかった。

建物 13 (図 15)

2 調査区東端で検出した東西3間、南北3間の掘立柱建物で、今回の調査区と上私部遺跡(その1)の調査区にまたがる。建物の東半分は(その1)の調査で「建物3」として調査している。北東角はほぼ90度だが、南東隅は鈍角、南西隅は鋭角気味であり、平面形は台形気味を呈するとみられる。東西5.1 m、南北4.6 mで東西にやや長く、床面積は23.5 m²である。

柱穴の平面形は円形もしくはいびつな隅丸方形で、直径もしくは一辺の長さは40～60 cmである。隅柱の38柱穴は突出して大きい。柱痕が認められないことから、柱を抜き取る際に大きく掘り窪められたものとする。主軸方向の振れはN-7°-Wで、建物1と南側辺をそろえて並ぶ位置である。前回、今回の調査を通じて出土遺物はなかった。

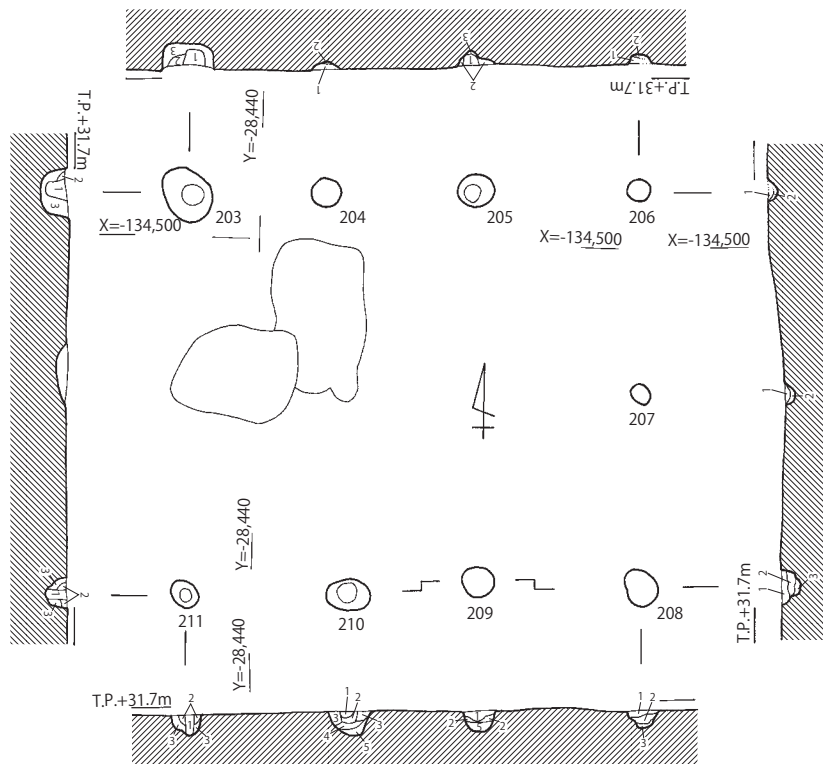
3 柱穴列

何らかの規則性に則って関連付けられる柱穴群のうち、明らかに掘立柱建物となるものを除いた柱穴群を「柱穴列」としてとらえる。したがってその中には、前回の調査で検出した柵2・3・4の延長部分にあたり、柵ととらえられるもの、配置が不完全なため断定はできないが、おそらく建物の一部になるとみられるものなどが含まれる。柱穴相互の関係をより明確にできるよう、柵としてみる場合には横方向のブレ幅が小さく、柱穴の間隔がより均一なものに限定するよう努めた。なお柱穴列断面実測図の土層観察については、一括して観察表を掲載する。

柱穴列 1 (図 15)

2 調査区東寄りで検出した。柱穴がL字状に連続して並んでおり、掘立柱建物の一部とみられるが、東側辺にあたる柱穴列を特定することができなかった。柱間の距離や並びが不揃いになるが、1024・

建物11

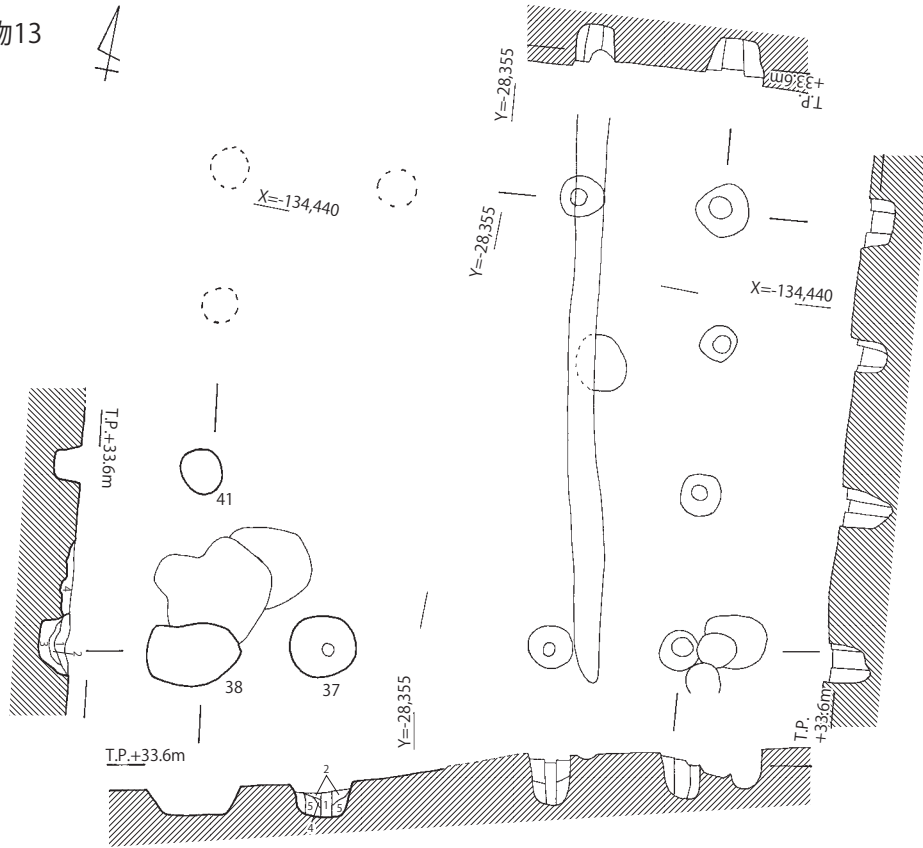


建物12



图 14 建物 11・12 实测图

建物13



柱穴列 1

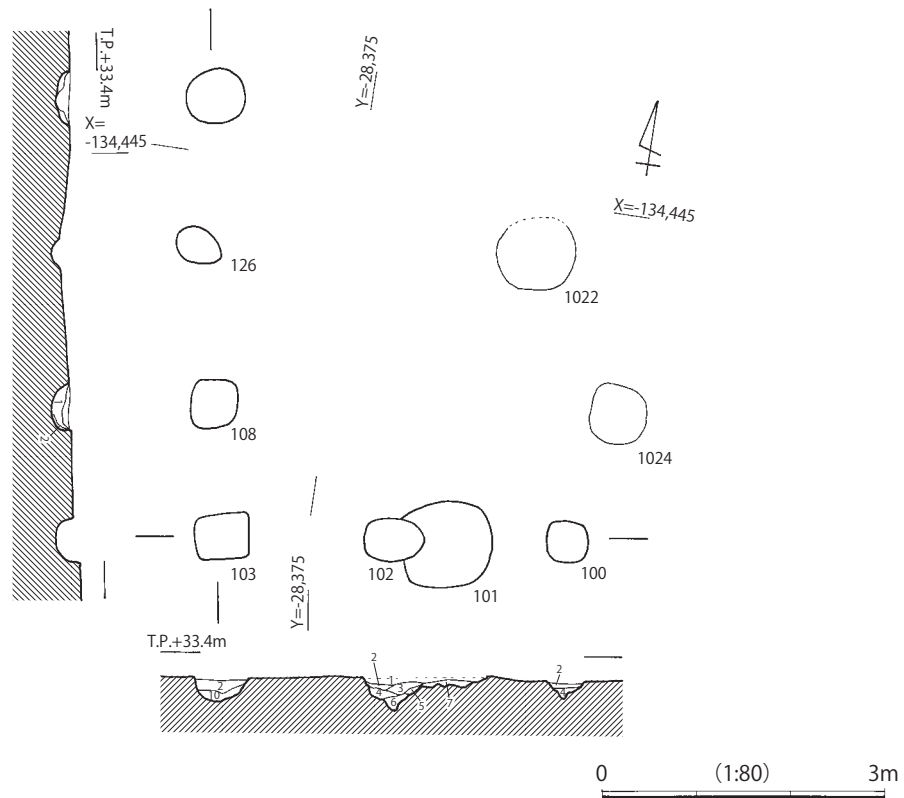


図 15 建物 13・柱穴列 1 実測図

1022 柱穴がそれにあたる可能性もある。そうであれば東西 2 間、南北 3 間以上の南北棟ととらえられる。東西方向に伸びる部分が柱穴列 3 とほぼ並列する。

南北 4.7 m、東西 3.7 m で、柱間は南北が 1.6 m なのに対し、東西の柱間が 1.8 m とやや大きい。主軸方向の振れは $N - 9^{\circ} - W$ である。柱穴の平面形は楕円形もしくは隅丸方形で、長軸もしくは一辺の長さは 40 ~ 60 cm である。108 柱穴で土師器細片を 1 点検出したが、時期比定はできなかった。

柱穴列 2 (図 16)

2 調査区東部で、柱穴列 1 に近接する位置で検出した。92 柱穴が、柱穴列 1 に含まれる 101 柱穴もしくは 102 柱穴で切られており、柱穴列 1 に先行するものである。つまり柱穴列 1 は、柱穴列 2 廃絶後にやや位置をずらして設けられたものと考えられる。東西 4 間 (6.3 m)、南北 1 間 (1.5 m) 以上と見られ、東西の柱間には 1.4 ~ 1.8 m とややばらつきがみられる。南北方向の柱間も勘案すると、1 間 1.5 m 前後で柱を配置したものと見られる。主軸方向の振れは $N - 12^{\circ} - W$ である。柱穴の平面形は楕円形もしくは隅丸方形で、長軸もしくは一辺の長さは 35 ~ 60 cm である。

柱穴が逆 L 字状に連続して並んでいること、柱穴列の東西列と建物 1 の南側辺の柱筋がおおむね通っていることから、建物 1 に並立する掘立柱建物の一部である可能性が高いが、西側辺にあたる柱穴を検出できなかった。これが東西 4 間の掘立柱建物に伴うものだとすると、建物 1 の東西長と似た規格のものといえることができる。110 柱穴から須恵器杯身の口縁部の破片が出土した。細片のため実測できなかったが、受部は上向き加減で直線的に伸び、下面にやや強い回転ナデを施す。立ち上がりはやや内傾し、全体に器壁は薄く、受部・口縁端部はいずれも丸くおさめ、華奢な印象を受ける。

柱穴列 3 (図 16)

2 調査区東部で、建物 1 や柱穴列 1・2 に近接して位置する。東西方向に 3 間伸びる全長 5.6 m の柱穴列で、柱穴列 1 の東西方向列の延長線上に乗る。中央の柱間がやや長く 2.6 m あり、それ以外は 1.5 m である。柱穴の平面形は円形およびいびつな隅丸方形で、直径ないし一辺の長さ 35 ~ 60 cm である。主軸方向は $N - 12^{\circ} - W$ で、柱穴列 1・2 と近似する。出土遺物はなかった。

柱穴列 4 (図 16)

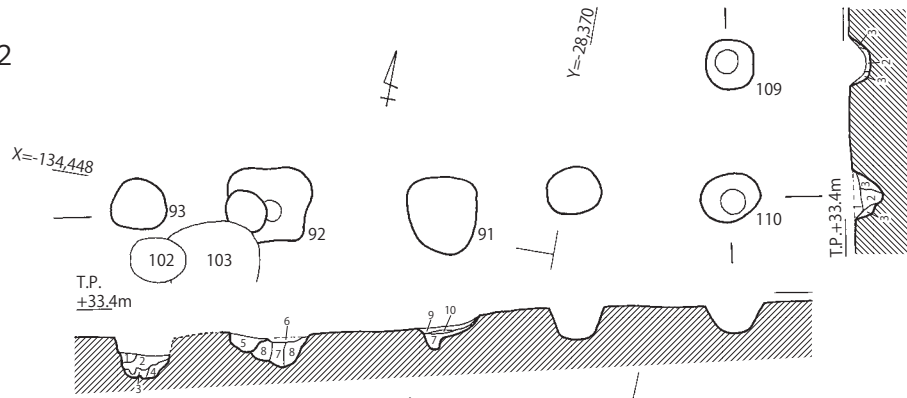
1 調査区中央北寄りで検出した。南北 2 間 (3.3 m)、東西 1 間 (1.75 m) の矩形に並ぶ柱穴列で、主軸方向が柱穴列 7 とほぼ一致する。154 溝の南側で検出した柱穴列もしくは掘立柱建物群の中で、最も北側に位置する。後述する柱穴列 7 とは西側辺の柱筋を揃えて南北に並立する位置関係である。

おそらく掘立柱建物の一部と考えられるが、建物全体の規模は不明である。ただ柱穴列 7 と同様、建物の東側がより強く削平されているととらえるなら、さらに東へ柱穴列が伸びていた可能性もある。加えて南側にも延長していた可能性がある。柱間は東西 1.65 m、南北 1.75 m で主軸方向は $N - 12^{\circ} - W$ 。柱穴の平面形は円形もしくはいびつな楕円形で、直径もしくは長軸は 35 ~ 50 cm、柱痕の径は 10 cm 弱である。出土遺物はなかった。

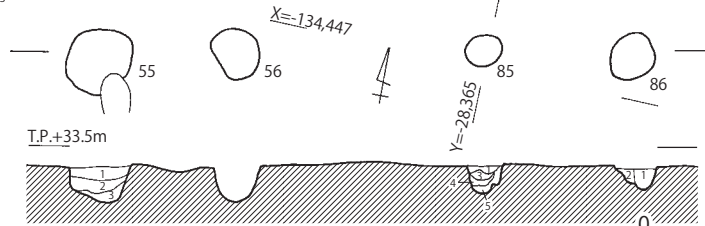
柱穴列 5 (図 16)

1 調査区北端部で検出した。南北方向を指向し、流末が調査区北西隅の谷にいたる 156 溝の東肩に平行して南北に 2 間伸び、全長は約 4 m である。293 柱穴から南に 2 間分延長したところに 163 柱穴があること、157 柱穴が調査区北端際にちかいことから、156 溝の東肩にそって南北にさらに延長する柵の一部である可能性が高い。柱間は 2 m で主軸方向は $N - 9.5^{\circ} - W$ 、柱穴の平面形は円形で直径は 30 ~ 40 cm である。出土遺物はなかった。

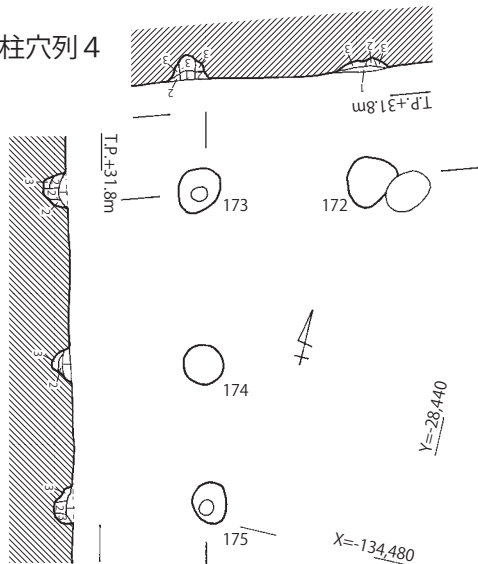
柱穴列 2



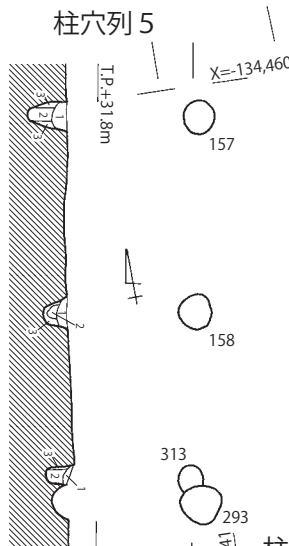
柱穴列 3



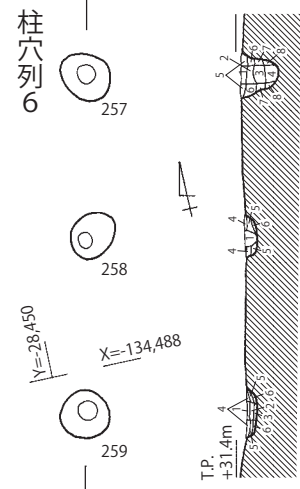
柱穴列 4



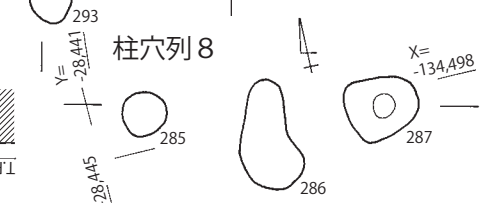
柱穴列 5



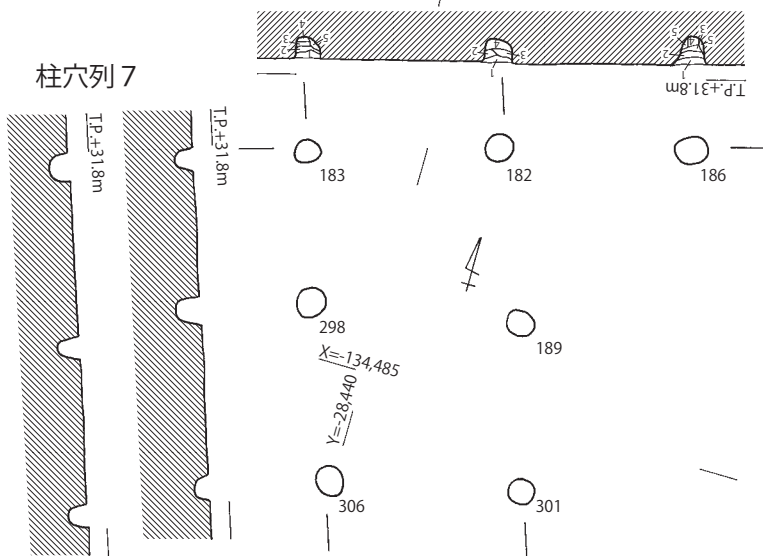
柱穴列 6



柱穴列 8



柱穴列 7



柱穴列 9

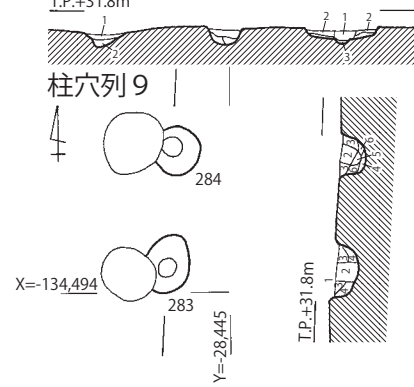


图 16 柱穴列 2~9 実测图

柱穴列6 (図16)

1 調査区中央西端で検出した。建物6の西側辺に平行して西側に位置する。南北に2間伸び、全長は3.5 mである。柱間は1.8 mで、建物6の西側辺の柱間より長い。主軸方向はN-12°-Eで、建物6・9・10・12などに近似する。位置的にみて、建物6に伴う柵の可能性はある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で、直径は45～55 cm、柱痕の径は10 cm前後である。出土遺物はなかった。

柱穴列7 (図16)

1 調査区中央で検出した。おそらく東西2間(4.05 m)、南北2間(3.55 m)の総柱建物と見られるが、そうであれば欠落する柱穴が複数あるため、建物としては完結しない状態である。これより東側では遺構の検出密度が極端に低いため、もともとこの部分の標高が周囲よりもやや高く、水田造成の際により強い削平を受けたことが考えられる。したがって東西方向の柱穴列はさらに東に伸びる可能性もある。柱穴の直径は25～35 cmと概して小さい。東西方向の柱間2.05 m、南北方向の柱間は1.80 mである。主軸方向はN-19°-Wで、西側辺は柱穴列4の南北柱穴列と柱筋が通る。298柱穴から須恵器高杯の杯部破片が出土した。

柱穴列8 (図16)

1 調査区南西部で検出した東西2間(2.5 m)の柱穴列で、柱間は1.25 m。建物7・建物10南側辺の南側に位置する。主軸方向はN-14°-Eで柱穴列6と近似する。出土遺物はなかった。

柱穴列9 (図16)

1 調査区南部西寄りで見出した南北方向を指向する柱穴列である。いずれも建物7西側辺の柱穴に切られている。したがって、柱間の長さや主軸方向は建物7と一致する。これらの東側には他にも多数のピットが散在することから、柱穴列9とセット関係をもち、建物7に先行する掘立柱建物があった可能性もあるが、柱間や柱筋の通りから、これらと明確に関連付けられるものを特定できなかった。出土遺物はなかった。

柱穴列10 (図17)

2 調査区中央東寄りで、19溝に平行してその東側に位置する。南北方向に3間(4.3 m)並ぶ。これらの柱通りに対してやや東に寄るが、〈15〉ピットに連なってさらに北側に延長する可能性もある。南北方向を指向する29溝や156溝の東側でも同様の柱穴列を検出していることから、それらは柵の痕跡と考えられる。主軸方向はN-3.5°-Eで、柱穴列10の南側に位置する、上私部遺跡(その2)で見出した「建物23」の西側辺延長上に乗る。柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形で、一辺の長さは約30 cm、柱痕の径は10 cm前後と概して小さい。132柱穴から土師器の細片が1点出土したが、時期比定はできなかった。

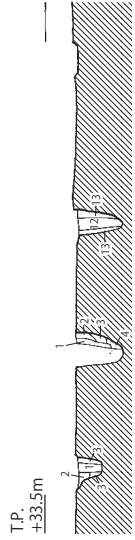
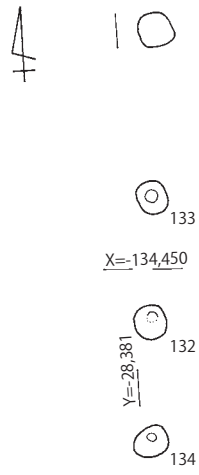
柱穴列11 (図17)

2 調査区中央東寄りで、柱穴列10に先行してほぼそれと同じ位置に設けられていた柵の痕跡と考えられる。2間(3.7 m)分を検出した。柱穴列10と同様、上私部遺跡(その2)で見出した「建物23」の西側辺延長上に乗る。柱穴の平面形はややいびつな楕円形もしくは隅丸方形で、長軸もしくは一辺の長さは35～80 cmとややばらつきがある。柱痕径は20 cm前後である。出土遺物はなかった。

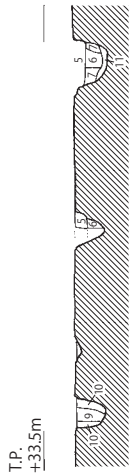
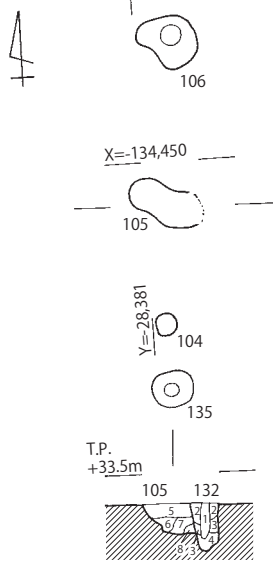
柱穴列12 (図17)

2 調査区中央やや東寄りで、20溝に平行してその東側に位置する。南北方向に2間(3.8 m)検出したが、130-131柱穴間の距離が間遠であり、129-130柱穴間の距離を勘案すると、全長は3間

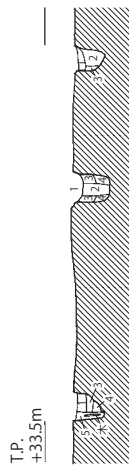
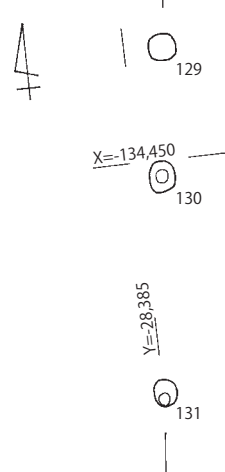
柱穴列10



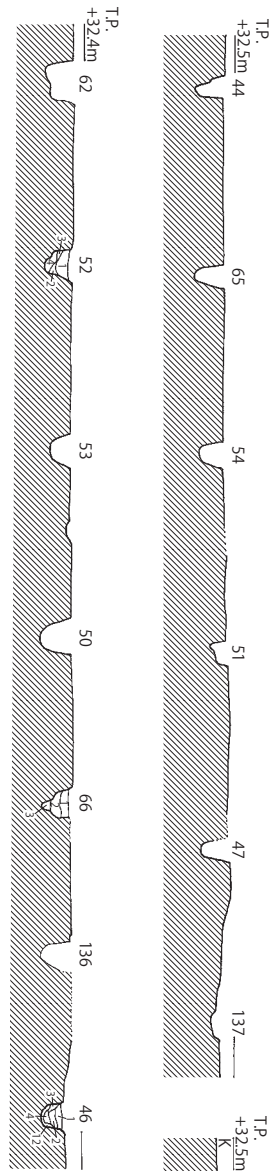
柱穴列11



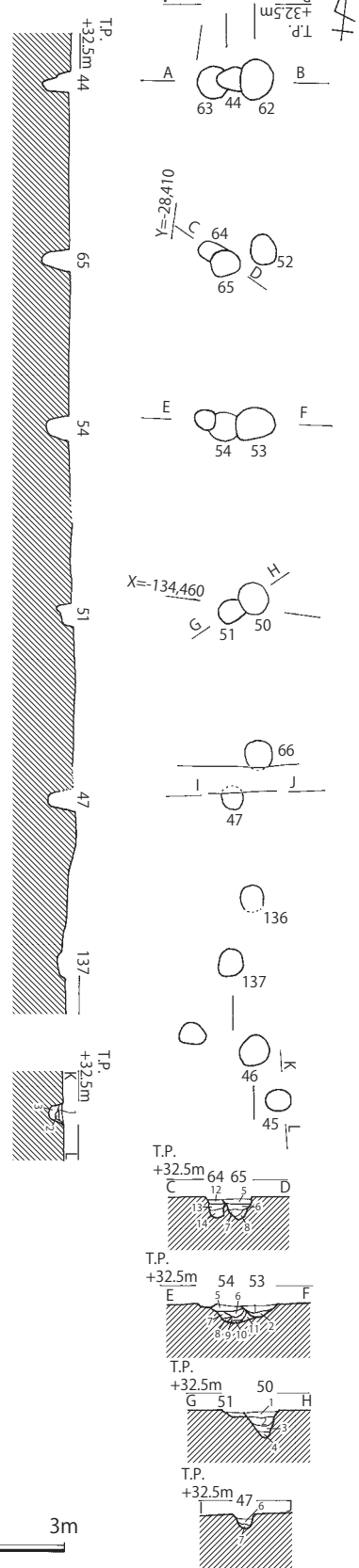
柱穴列12



柱穴列13



柱穴列14



0 (1:80) 3m

图 17 柱穴列 10 ~ 14 实测图

分に相当する。20 溝とともに、調査区北側へさらに延長する可能性がある。柱穴の平面形は一辺 20 ～ 30 cm の隅丸方形で、柱痕径は約 10 cm と概して小規模である。出土遺物はなかった。

柱穴列 13 (図 17)

2 調査区西寄りで 29 溝に平行してその東側に位置する。今回の調査区に限れば南北方向に 6 間(10.9 m) 並ぶ。柱間の距離は平均で 1.85 m である。溝の延長に伴い、柱穴列も北に延長する可能性が高い。また南側の延長は、上私部遺跡(その 2) の調査で検出された「柵 2・3・4」のいずれかに該当する。柱穴の切り合いからみると、「柵 3」と一連のものである可能性が高いと考える。

柱穴の平面形は楕円もしくはややいびつな隅丸方形で、長軸ないし一辺の長さは 20 ～ 45 cm と概して小さい。45 柱穴は 46 柱穴に近接しており、補修もしくは補強のために設けられた可能性がある。62 柱穴から土師器の細片が 1 点出土したが、時期比定はできなかった。

柱穴列 14 (図 17)

2 調査区西寄りで、29 溝に平行してその東側に位置する。柱穴列 13 に先行して設けられたもので、柱間の距離は平均 2.0 m と柱穴列 13 よりやや長い。溝の延長に伴ってさらに北へ延長する可能性が高い。また南側の延長は、上私部遺跡(その 2) の調査で検出された「柵 2・4」のいずれかに該当すると思われる。柱間の間隔がやや近いのは柵 4 だが、それぞれの柱穴間の距離にややばらつきがみられるため断定はできない。また柱穴列 14 の、44 柱穴と 65 柱穴はそれぞれピットを切っており、これに先行する別の柱穴列があった可能性がある。ただこれに対応しそうな柱穴の数がわずかで、柱穴間の間隔も一定しないことから、断定するには至らなかった。柱穴間の距離が間遠な部分においては、削平されたものがあつたのかもしれない。

柱穴の平面形は楕円形もしくはややいびつな隅丸方形で、長軸ないし一辺の長さは 30 cm 前後と概して小さい。44 柱穴から土師器甕口縁部の破片が出土した。残存率が低く実測はできなかったが、口縁部～胴部上端の破片で体部は丸みを帯びるとみられる。口縁部はゆるやかに外反させて立ち上がり、内面では体部と口縁立ち上がり部分との境が明瞭に屈曲する。口縁端部は欠損するが、端部にむけて器壁が薄くなるので、やや華奢な印象のものとする。体部外面は縦方向のハケ調整、内面はコビオサエ後ナデ調整で仕上げる。

4 溝

上私部遺跡(その 2) の調査で検出された建物群を区画する溝の延長部、およびそれらと関連性をもつ溝を検出した。これにより溝で区画された方形区画への出入り口が存在したこと、その北側にも別の区画溝を伴う掘立柱建物群が存在した可能性があることも明らかになった。ここではそれらの溝と切りあい関係をもつ土坑や、溝の機能と密接な関連性を持つ土坑にもふれる。

15 溝

2 調査区東端部で検出した。39 土坑を切って、およそ南北方向にかかるく蛇行して約 5 m 伸びる。溝幅約 62 cm、深さ 15 cm 前後で、建物 1 の南東隅柱に切られる。溝の形状から推して、区画溝のように何らかの規格にのっとって、計画的に掘られたものとは考えがたい。ただ遺構の規模の割には、溝埋土から須恵器・土師器片が比較的多く出土した。

19 溝 (図 18)

2 調査区中央に位置する、おおむね南北方向を指向する溝で、調査区北側へさらに延長する。南側への延長部分は、上私部遺跡(その 2) の調査区で検出された「建物 23」の西側に位置する、南北方向

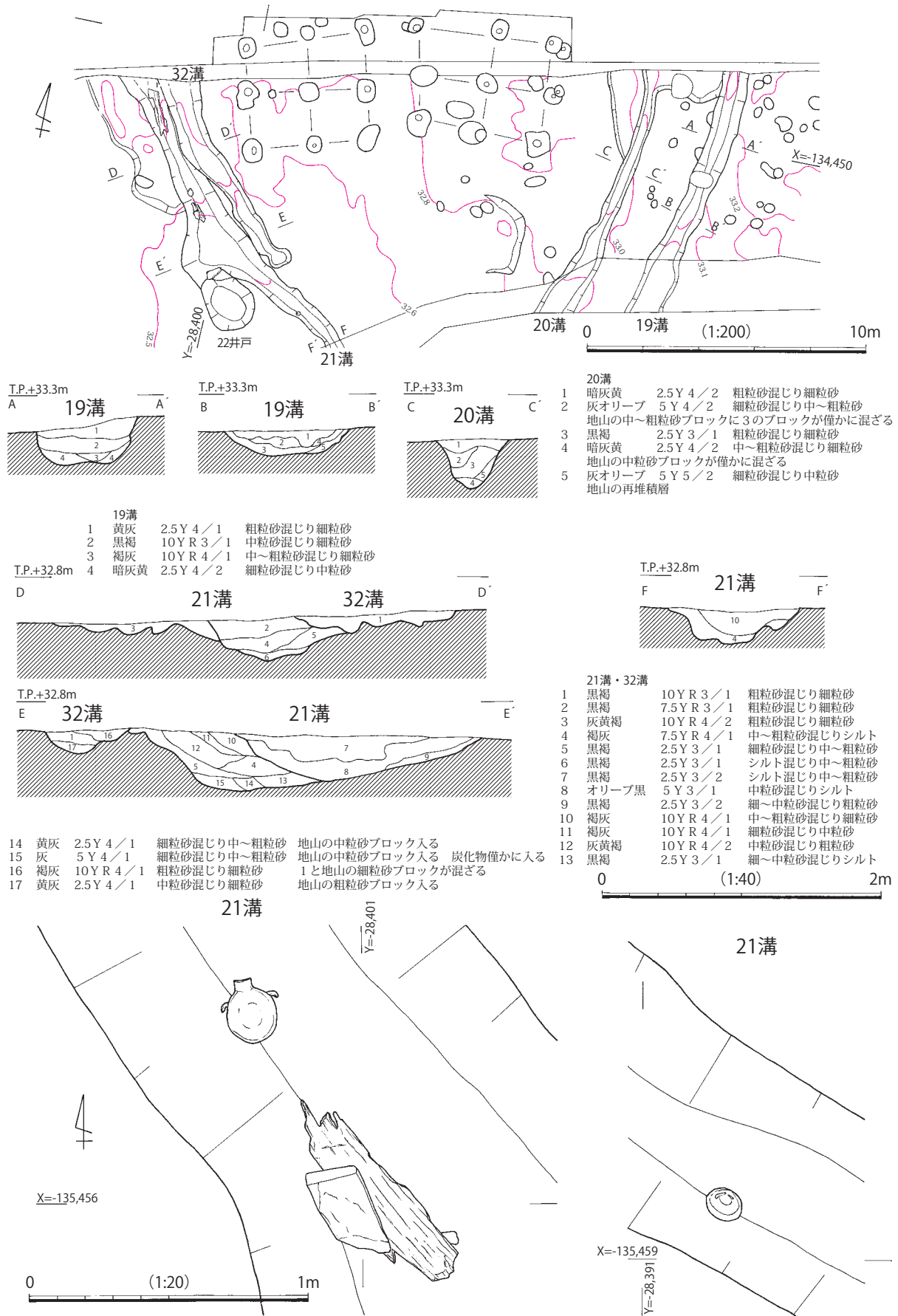


図 18 19・20・21・32 溝実測図、21 溝遺物出土状況図

溝である。後述する 20 溝の東側に平行して位置する。両者とも南半部は北に対して東に約 10° 振るが、北に向かうほど真北に近づくため、全体としては軽く湾曲する。これは前回の調査で検出された方形区画の北側を限る東西溝が、緩やかに湾曲しつつ方向を転じる部分に対して、おおむね直行するようにそれらの溝を配したためとみられる。南側への延長部分は、「建物 23」の南側辺のあたりまでで、南端部がわずかに東に屈曲する。またその延長上には東西方向溝が断続的に伸びる。したがって、19 溝が東西溝の手前で途切れる部分、もしくは断続的に東西方向へ伸びる溝に挟まれた部分が、19 溝より東側に展開する掘立柱建物群によって構成される区画への出入り口だった可能性がある。古墳時代集落の中心域とみなされる方形区画の北側で、竪穴住居もしくはその可能性のある土坑の検出範囲はこの溝の東側に限られることから、集落構造を規定する役割を負っていた可能性が示唆される。

溝幅は 70～90 cm、深さは 20～30 cm で、溝内に溜まった水は北へ流れる。溝埋土から細片を含めると須恵器 4 点、土師器 9 点が出土したが、実測可能な遺物はなかった。須恵器は甕の胴部片が 1 点、かなり粗雑に作られた杯とみられるものが 1 点、器種不明 1 点からなる。土師器は甑・甕等の煮沸具と見られるものが 4 点、器種不明のものが 5 点である。近接した位置に平行して伸びる 20 溝から多量の土器が出土しているのとは対照的である。

20 溝 (図 18)

2 調査区中央に位置する、おおむね南北方向を指向する溝で、前述の 19 溝の西側に位置し、両者はほぼ平行する。溝南半部は北に対して東に約 9° 振り、全体的に見ると溝が軽く湾曲しながら北を指向する点も、19 溝に似る。溝底の標高はおおむね平坦で、厳密には北から南にかけて低くなっている。溝の南端は東西方向溝の手前で途切れるので、排水は特に意識していなかったことがうかがえる。また調査区北端部では溝の東肩が東側に屈曲するように張り出し、19 溝に切られる。したがって 20 溝が北に向かってさらに延長するか、調査区北端部で屈曲して途切れるかは現時点では判断できない。南側は上私部遺跡(その 2) で検出された「1090 溝」に連続する。したがって 20 溝が東西溝の手前で途切れる部分が、その東側に展開する掘立柱建物群によって構成される、区画への出入り口の一つだったと考えられる。溝幅は 50～80 cm、深さは約 35 cm で、19 溝より幅は狭いが、溝埋土から須恵器・土師器などが比較的多く出土した。その中で全体の器形が復元可能なもの、時期比定等の参考になるものを中心に実測した。

21 溝 (図 18)

2 調査区中央で検出した区画溝の一部で、上私部遺跡(その 2) の調査で検出した「136・138 溝」の北側延長部にあたる。今回の調査区内で東西から南北に、ゆるやかに方向を転じる。調査区北側に伸びる延長部分では、南北溝群と平行するとみられる。21 溝と南北溝群に挟まれる部分で、建物・土坑などの遺構を検出しなかった。したがってこの部分が前回の調査で検出した、掘立柱建物群と区画溝からなる方形区画へ至る出入り口と考えられる。

溝埋土の断面観察により、少なくとも 2 時期の切り合いを認めた。溝幅は 50～250 cm と場所により差があるが、1 時期の溝幅は最大でも 2 m には達しないと考える。深さは 10～40 cm と一定しない。おそらくはじめの溝が掘られた段階では溝底の浅い部分があり、水が溜まるか場合によっては溢れたとみられる。掘り直された溝は底までの深さが比較的一定しており、溝底の標高は南から北に向けて徐々に下がる。この段階で溝の排水機能が強化されたとみられる。溝埋土から須恵器・土師器・板石状の角礫・木器など、比較的多種・多量の遺物が出土しており、完形品も含まれる。21 溝がほぼ埋まった段階で、

後述する 32 溝と 22 井戸が掘削された。

21 溝の延長部分は上私部遺跡（その 2）の調査で検出されている。「138 溝」とそれを切って新たに掘削された「136 溝」がそれである。21 溝から出土した遺物を比較すると、「136 溝」出土の遺物群と様相がほぼ一致する。「136 溝」に切られる「138 溝」出土の遺物からは、6 世紀前半と見られる古い様相を有する須恵器が出土するが、21 溝ではそのような須恵器は出土していない。

このことから 21 溝は「136 溝」と一連のもので、その前に掘削された「138 溝」は調査区境の部分までであった可能性が高い。つまり 6 世紀前半の段階では、掘立柱建物群を伴う方形区画北側の区画溝は、東西方向の部分だけだったと考えられる。その後それを再掘削する段階で、溝を湾曲させながら方向を変えつつ、北側に延長したものとする。

22 井戸

2 調査区中央で検出した。21 溝が埋まった段階で新たに掘削された素掘りの井戸で、平面形は楕円形である。長軸 2.2 m、短軸 1.8 m で深さは 1.5 m 以上である。当遺構の北肩で、平らな面を水平にして据えた状態の踏み石状の角礫を検出した。周囲の川が天井川化した影響もあろうが、掘り下げると勢い良く水が染み出す状況が見られた。埋土より須恵器・土師器片のほか、多数の種子類を検出した。

32 溝 (図 18)

2 調査区中央で検出した、21 溝がほぼ埋まった段階であらたに掘削された溝で、21 溝とほぼ同じラインを描く。調査区北側へはさらに延長するが、南端は方向変換部で途切れてしまう。出土遺物によって時期の比較ができないため断定できないが、上私部遺跡（その 2）の調査で検出された「1094 溝」や「1099・1100 溝」等の、東西溝の北で断続的に連なる東西方向溝と一連のものである可能性もある。幅は 40～115 cm、深さは 10～15 cm と極めて浅い。溝埋土より土師器・須恵器・木材を検出した。土師器は杯もしくは高杯の破片が 1 点、甕・甑等の破片が 3 点、器種不明の破片が 4 点である。須恵器は杯類の破片が 2 点、器種不明の破片が 1 点である。前者の中でかろうじて受部の形状をとどめるものをみると、6 世後半以降のものと考えられる。

29 溝 (図 19)

2 調査区西部で検出した南北方向溝である。上私部遺跡（その 3）の調査で検出した方形区画の西限となる南北溝群の内、最も東側に位置するもので、この東側では溝の東肩に平行する柵の柱穴を検出している。溝の西肩は 127 溝に切られる。溝幅は 50 cm から 1 m 前後に含まれると見られ、深さは 30～45 cm。溝底部はほぼ平坦で、いずれかの方向に水を落とすという明確な意図は感じられない。溝埋土より数点の円礫と、多量の須恵器片・土師器片が出土した。

127 溝 (図 19)

2 調査区西部で検出した南北方向溝である。上私部遺跡（その 3）の調査で検出した方形区画の西限となる南北溝群の中央に位置する。土層断面観察により少なくとも 2 時期あることがうかがえる。1 時期の溝幅は 1～1.6 m に含まれ、深さは 30 cm 前後である。溝底の標高は、厳密には調査区北端部でやや低い、ほぼ平坦でいずれかの方向に水を落とすという明確な意図は感じられない。

30 溝 (図 19)

2 調査区西部で検出した南北方向溝である。上私部遺跡（その 3）の調査で検出した掘立柱建物群の西限となる南北溝群の内、最も西側に位置する。土層断面観察により少なくとも 2 時期あることが伺える。1 時期の溝幅は 1～2 m に含まれ、今回検出した南北方向溝群のうち最も幅が大きい。深さは 10

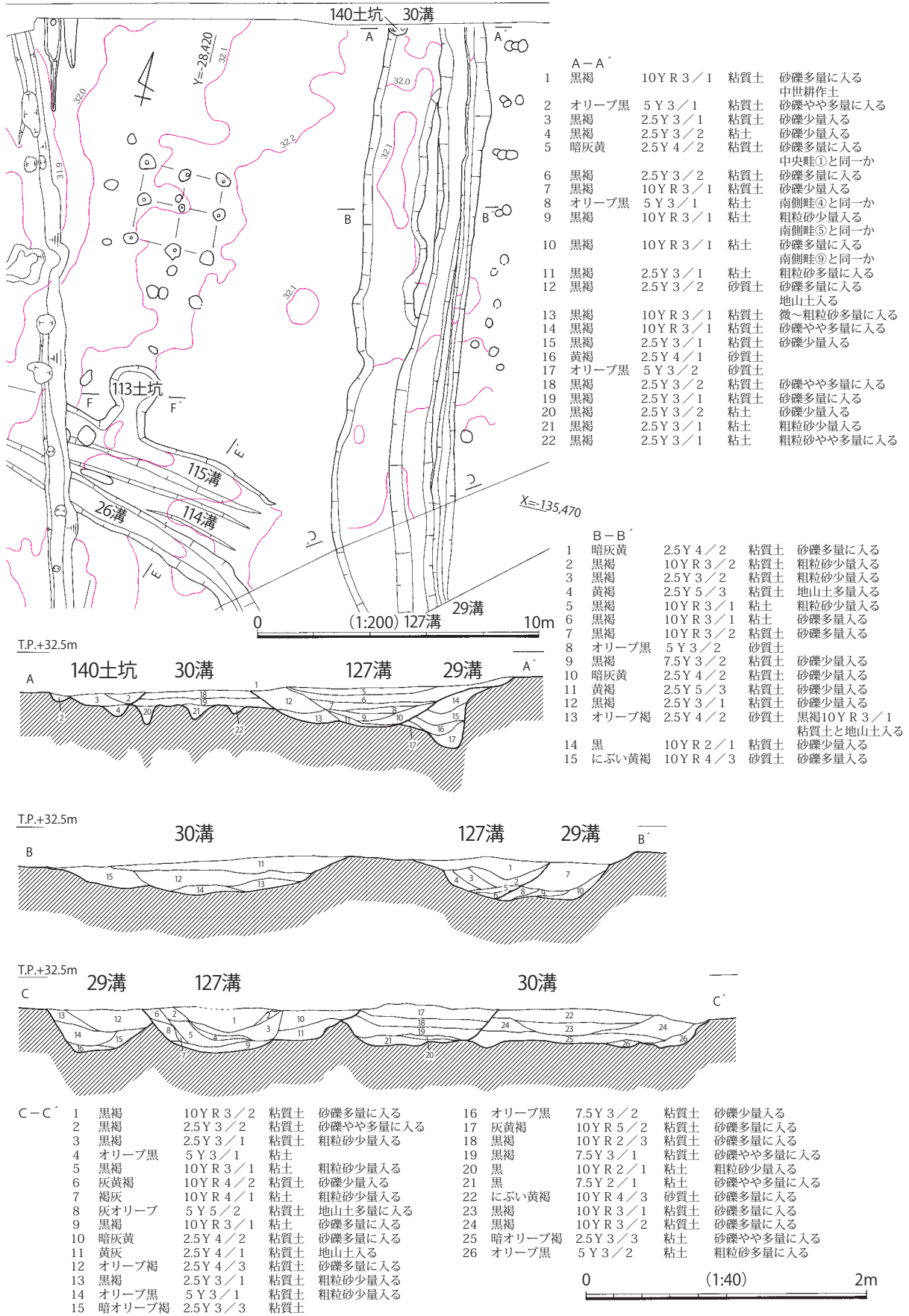


図 19 29・30・127 溝断面図

～30 cmで、溝底部はほぼ平坦である。北もしくは南への明確な高低差は認められない。溝の東肩は127 溝に切られる。溝埋土より比較的多量の須恵器片・土師器片を出土した。

140 土坑 (図 19)

2 調査区西部で検出したおそらく円形の土坑で、調査区北端際で30 溝の西肩を切っている。直径70 cm、深さ約15 cmである。遺構埋土から須恵器甕胴部片と土師器片が各1点出土した。

26 溝 (図 19・20)

2 調査区南西端で検出した南東から北西方向へ湾曲しながら伸びる溝である。南への延長は、前回の調査で検出された、方形区画の西を限る南北方向溝群に至ると見られる。位置的に見れば、上私部遺跡(その2) 調査の「844 溝」がそれである可能性が高い。「844 溝」は少なくとも2 時期の切り合いが認められる。それと同様に26 溝と切り合うか、もしくは平行する溝は他に2本認められた。2 調査区西端部分は中世以降の水田造成の際に段状に削られているため、一段下がる部分では延長部分を検出しなかったが、154 溝にいたるとみられる。このことから南北方向を指向する溝群西端の溝が、今回の調査区内で東西に方向を転じることがわかった。

方向転換箇所ので数度の掘り直しが行われるのは、屈曲部分に土砂が溜まりやすかったからと考えられる。溝内の水は、南から東へ向けて流れるように緩やかな斜度をもつ。「844 溝」の場合、旧段階の溝底はおおむね平坦で南への排水を意識しつつも、厳密には排水方向を定めていなかった可能性が高いことが報告されている。それに対して新段階では南から北へのゆるやかな傾斜が設けられるということである。したがって、今回の調査で検出した26 溝は新段階の「844 溝」延長部にあたると思われる。

溝幅は1.0～1.3 m、深さは約30 cmで、須恵器片・土師器片が比較的多量に出土している。

114 溝 (図 19・20)

前述の26 溝に切られる溝で、2 調査区南西端で検出した。溝幅は1 m前後で26 溝と近似するが、深さは20 cm弱とやや浅い。南北から東西へ方向を転じる溝の屈曲部分のみを検出したものとみられる。関連する遺構の詳細については26 溝の項を参照されたい。出土遺物はなかった。

115 溝 (図 19・20)

2 調査区西端で検出した。26 溝や114 溝と切り合いは認められないが、これらはほぼ平行しており、相互に関連すると見られる。溝幅は1.10～1.35 cmと114 溝に比べてやや広いが、深さは近似する。115 溝の北側に近接して113 土坑が位置するが、それにむけて南北方向に短く分岐して連なる。南北から東西へ方向を転じる溝の、屈曲部分を検出したものとみられる。関連する遺構の詳細については26 溝の項を参照されたい。

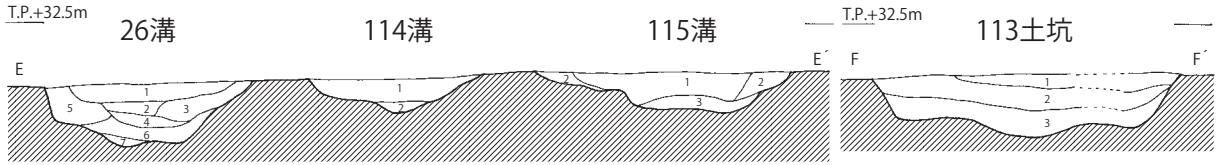
須恵器3点と器種不明の土師器2点が出土した。須恵器は高杯脚部片、甕胴部片、杯蓋の破片が各1点である。高杯脚部は長方形の透かしが2段あり、透かしの間に浅い凹線が1条巡らせている。杯蓋には凹線を巡らせて稜線が表現されている。

113 土坑 (図 19・20)

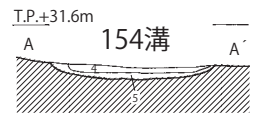
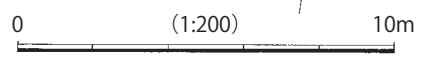
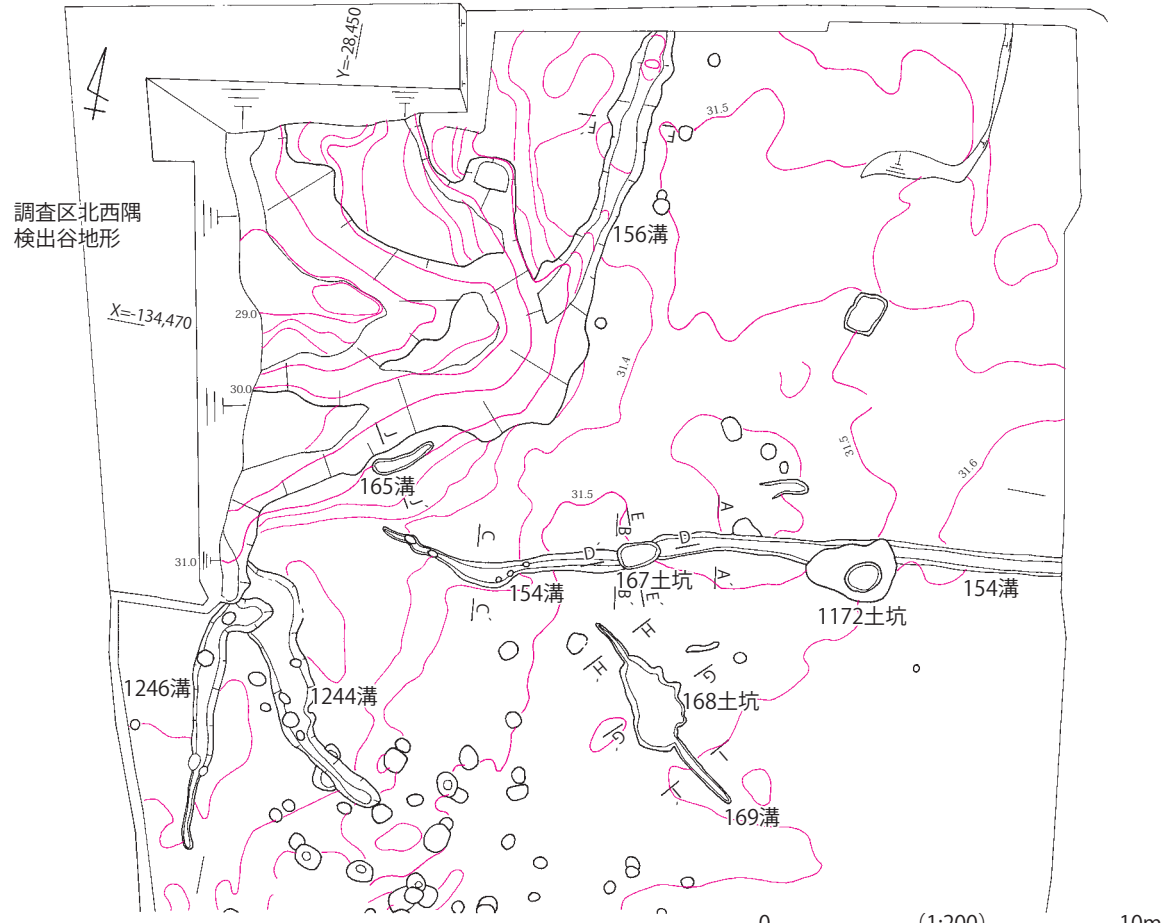
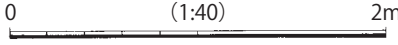
2 調査区西部西端で検出した。前述の115 溝の北側に近接して位置し、その短い分岐箇所につながる。直径1.63 mのほぼ円形で、深さは30 cm前後、底部はほぼ平坦である。出土遺物はなかった。

154 溝 (図 20)

1 調査区中央北寄りで検出した東西方向の溝である。2 調査区で検出した26 溝の延長部分である。この溝より北側では南北溝群寄りで総柱建物1棟を検出したのみであることから、この南側に展開する



26溝				114溝				115溝						
1	暗オリーブ褐	2.5Y 3/3	粘質土	砂礫多く入る	1	にぶい黄褐色	10Y R 4/3	粘質土	砂礫多く入る	1	黒褐	10Y R 3/1	粘質土	砂礫多く入る
2	黒褐	10Y R 3/2	粘質土	砂礫やや多く入る	2	黒褐	10Y R 3/1	粘土	砂礫少し入る	2	褐	10Y R 4/4	粘質土	砂礫多く入る
3	黒褐	2.5Y 2/2	粘質土	砂礫多く入る						3	オリーブ褐	2.5Y 4/3	粘質土	砂礫やや多く入る
4	黒	2.5Y 2/1	粘土	砂礫少し入る										
5	黒褐	2.5Y 3/1	粘質土	砂礫やや多く入る										
6	黒褐	10Y R 3/1	粘質土	砂礫少し入る										
7	オリーブ黒	5Y 3/1	粘土	砂礫少し入る										



154溝 A-A' 断面

4	オリーブ褐	2.5Y 4/3	粘質土	管状斑結沈着
5	灰	5Y 4/1	シルト質粗粒砂	径5mm未満の礫少量入る



154溝 B-B' 断面

1	オリーブ黒	7.5Y 3/2	細砂混じりシルト	細粒砂ブロック	30%程度入る
	灰オリーブ	5Y 4/2		砂質シルトブロック	20%程度入る
	オリーブ褐	2.5Y 4/3			炭化片、土器片入る
2	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト		
	オリーブ黒	5Y 3/2	粗～細粒砂ブロック		20%入る
3	オリーブ黒	7.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト		径3mm未満の礫少量入る
4	オリーブ黒	7.5Y 3/2	粘土		軟質
	オリーブ黒	7.5Y 3/2	粗砂混じりシルト		筋状に入る



154溝 C-C' 断面

1	オリーブ黒	7.5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	細粒砂ブロック	30%程度入る
	灰オリーブ	5Y 4/2		砂質シルトブロック	20%程度入る
	オリーブ褐	2.5Y 4/3			炭化片少量、土器片入る
2	灰オリーブ	7.5Y 4/2	粗砂混じりシルト		しまり良い
					径5mm未満の礫少量入る
					しまり悪い

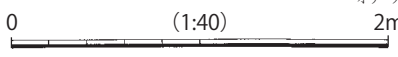


図 20 26・113～115・154 溝実測図

掘立柱建物群の、北を限る区画溝の役割も果たしていたと考える。

溝底の標高は東から西に向かって徐々に傾斜する。流末が谷の肩部に近接しており、溝内の水を最終的には谷に落としていたとみられる。溝幅 45 ～ 80 cm で深さは 8 ～ 20 cm である。溝埋土より須恵器・土師器の破片が各数点出土したが、時期比定できるものはなかった。

1172 土坑 (図 20・21)

1 調査区中央北寄りで前述の 154 溝を切るような状態で検出された。土坑の掘形は最大で長軸 2.32 m、短軸 1.76 m の楕円形で、深さは 44 cm である。土坑埋土は地山のシルトブロックを含み、硬くしまった土 (VI 層) と粘りを帯びた細粒砂もしくは極細粒砂をベースとする黒色化が顕著な層 (I ～ V 層)、両者の中間的な層に大きく分けられる。VI 層内で細分される土層は、シルトブロックの含有量や土壌の粒度に違いは見られるが、土質はおおむね均一で、それらがつき固められたように硬く水平に堆積する。このことから VI 層は、土坑掘形掘削後に意図的に埋め戻されたものとする。したがってこの土坑の機能箇所は、I ～ V 層を除去し、VI 層上面まで掘り下げた段階で検出される、土坑掘形の中央やや南東よりに位置する、一辺約 90 cm 前後の隅丸方形土坑およびその中央に据えられた須恵器壺と樋状木製品等にあると考えられる。

隅丸方形土坑には須恵器壺の下半部を固定するように、地山ブロックを含んだ均質な土が込められていた。壺の内面には「V」字状の線刻が施されており、それが南側にくるように据えられていた。さらに隅丸方形土坑の西肩と、32 層の上面にもたせ掛けるようにして、樋状木製品や柱状の花崗岩礫が置かれる。木製品の上には炭化物含みの細～極細粒砂が堆積するが、木製品に接する部分には流水性堆積と見られる粗粒砂の薄い堆積を認めた。したがってこれが機能していた段階で、154 溝も機能していた可能性が高いと考える。おそらく 154 溝を通して東から西に運ばれてきた水を、隅丸方形土坑もしくはその中央の須恵器壺に落とす機能を有していたと考える。隅丸方形土坑西肩に置かれた木製品や花崗岩礫は、土坑の肩が水流の侵食で抉られるのを防ぎ、あふれた水を溝に導く役割を果たしたのだろう。隅丸方形土坑は図 21 中の 7 ～ 9 層、5・15・32 層、4・32 層の堆積のまとまりからわかるように、数度にわたって掘り直されたものである可能性がある。また VI 層にも中位に、22 層にみられるような流水性堆積層が含まれることから、機能した面は一面だけではなく、補修もしくは積み直しが行われた可能性がある。

なお I ～ V 層と大別した層は、隅丸方形土坑が埋積していく過程で堆積したものと考えられる。隅丸方形土坑埋土もしくはその上面付近から、比較的まとまった土器の破片を検出した。それらの中で、完形になるのは中央に据えられた須恵器壺とその東側体部上半に寄せ掛けるように検出された土師器甕のみで、それ以外は複数固体分の土器の、胴部や口縁部もしくは脚部の破片である。出土量や器種の多様さに比べて必ずしも完形土器の点数が多くないことから、おそらく部分片として出土した土器は、隅丸方形土坑部分が機能を失った後に投棄されたものと考えられる。

遺構埋土をサンプルとした古環境分析結果は、付章第 1 節を参照されたい。

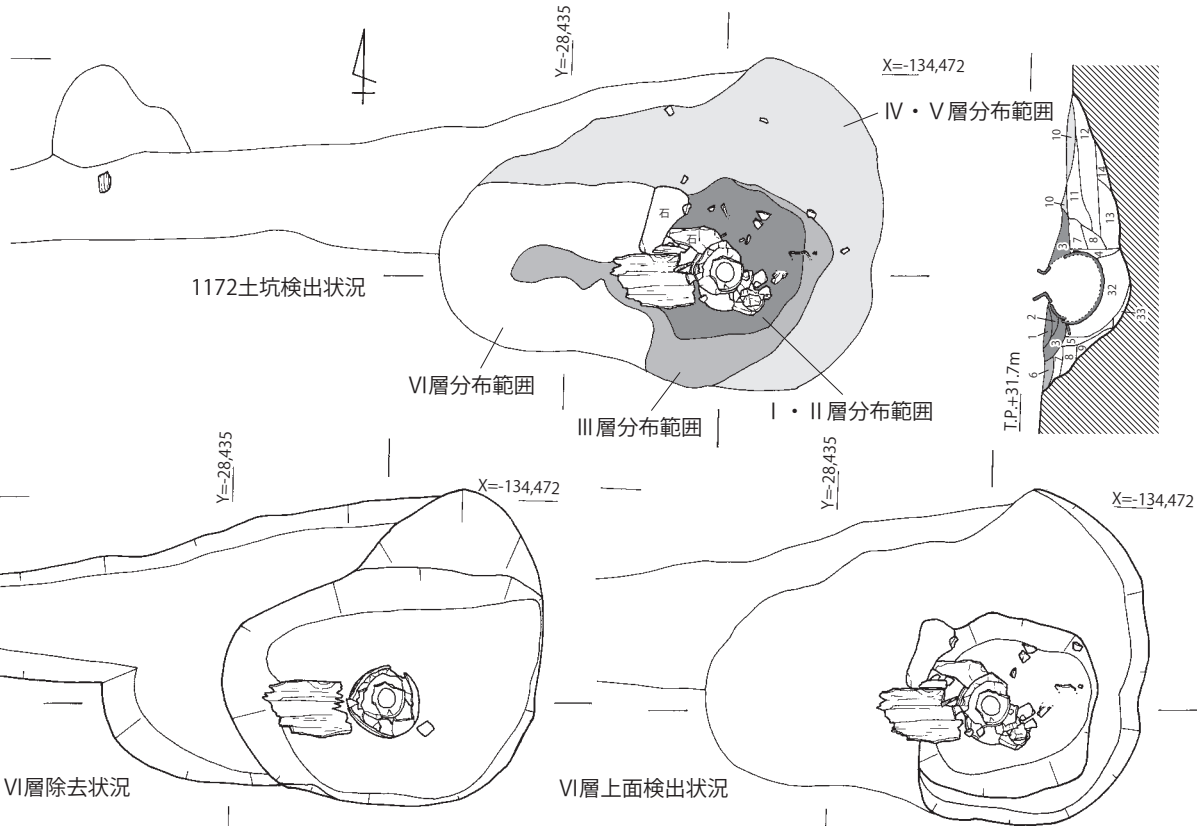
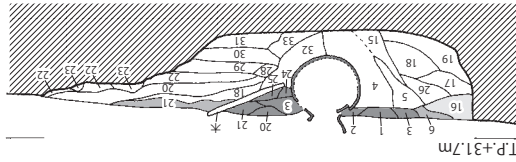
167 土坑 (図 20・21)

前述の 1172 土坑の西側で検出した、長軸 1.07 m、短軸 60 cm の楕円形の土坑である。底部はほぼ平坦で、深さは 10 cm である。154 溝を切るような状態で検出した。遺物は出土しなかった。

156 溝 (図 20・22)

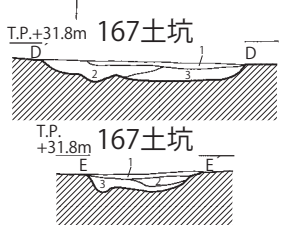
1 調査区北端部で検出した南北方向を指向する溝である。調査区より北へさらに延長し、溝南端は調

1172土坑



1172土坑			
1	オリブ黒	5 Y 3 / 1	中粒砂混極細粒砂
2	オリブ黒	5 Y 3 / 1	中粒砂混極細粒砂
3	オリブ黒	10 Y 3 / 1	中～粗粒砂混極細粒砂
4	灰	7.5 Y 4 / 1	中～粗粒砂混細粒砂
5	灰	5 Y 4 / 1	中～粗粒砂混細粒砂
6	灰	7.5 Y 4 / 1	極細粒砂混細粒砂
7	灰	10 Y 5 / 1	細粒砂混 中～粗粒砂
8	暗オリブ灰	5 G Y 4 / 1	細粒砂混 中～粗粒砂
9	灰	10 Y 5 / 1	中～粗粒砂混細粒砂
10	暗オリブ灰	5 G Y 4 / 1	中～粗粒砂混細粒砂
11	黄灰	2.5 Y 4 / 1	中～粗粒砂混細粒砂
12	オリブ灰	7.5 Y 5 / 2	粗粒砂混中粒砂
13	オリブ灰	7.5 Y 5 / 2	中～粗粒砂混細粒砂
14	オリブ灰	2.5 G Y 5 / 1	極細粒砂混中～粗粒砂
15	オリブ灰	5 G Y 5 / 1	中粒砂混粗粒砂
16	オリブ黒	5 Y 3 / 1	中粒砂混細粒砂
17	灰	5 Y 4 / 1	中～粗粒砂混細粒砂
18	オリブ灰	10 Y 5 / 2	中～粗粒砂混極細粒砂
19	オリブ灰	10 Y 5 / 2	細粒砂混
20	黒褐	2.5 Y 3 / 1	中粒砂混極細粒砂
21	灰	5 Y 4 / 1	中粒砂混細粒砂
22	黄灰	2.5 Y 4 / 1	中～粗粒砂混細粒砂
23	灰	10 Y 5 / 1	細粒砂混中粒砂
24	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混極細粒砂
25	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混粗粒砂
26	オリブ灰	7.5 Y 5 / 2	細粒砂混中～粗粒砂
27	オリブ灰	2.5 G Y 5 / 1	中～粗粒砂混極細粒砂
28	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混極細粒砂
29	オリブ灰	5 G Y 5 / 1	中～粗粒砂混極細粒砂
30	灰オリブ	7.5 Y 5 / 2	中粒砂混極細粒砂
31	オリブ黒	7.5 Y 3 / 1	中粒砂混極細粒砂
32	灰	10 Y 4 / 1	粗粒砂混中粒砂
33	暗オリブ灰	5 G Y 4 / 1	粗粒砂混中粒砂

径3mm以下の花崗岩礫を含む。I層
1に似るが、礫を含まず中粒砂の包含量も少ない。II層
中～粗粒砂の包含量は少なく、粘性強い。炭化物を僅かに含む。
II層
径2mm次の白砂粒を僅かに含む
径2mm次の白砂粒を僅かに含む。4に似るが、それより粘性低い
径3mm以下の花崗岩礫を含む。3と同程度の粘性あり
炭化物を僅かに含む。III層
径3mm以下の花崗岩礫を含む
径3mm以下の花崗岩礫を含む。地山の緑灰色のシルトブロックを
5%ほど含む。7に似るが、それより粘性あり
地山の緑灰色シルトブロックを10%ほど含む
地山の緑灰色シルトブロックと、オリブ灰色砂質土が混ざりあう。
V層
地山の緑灰色シルトブロックと30%程入る。VI層
地山の緑灰色シルトブロックを30%程入る。VI層
地山の緑灰色シルトブロックを主にオリブ灰色砂質土が混ざる。
VI層
地山の再堆積層か。VI層
径3mm以下の花崗岩礫を含む。IV層
16に似るがそれより粘性低い
地山のオリブ灰色シルトブロックを主に、地山のオリブ灰色
砂質土ブロック入る。VI層
18に似るが、それより中～粗粒砂の含有量が多く粘性弱い。VI層
径3mm以下の花崗岩礫を含む。VI層
20に似るが、それより土壌化は弱く、粘性低い木植と接する部分
に薄く粗粒砂が形成される。III層
細～粗粒砂が、層状の稜理構造を呈する。VI層
地山のオリブ灰色砂質土が10%程入る。VI層
24に似るがそれより粘性強い
灰色の粘質土ブロックが10%程混ざる。VI層
灰色粘土ブロックが30%程混ざる。地山の緑灰色シルトブロック
からなる。VI層
VI層
地山の緑灰色シルトブロックからなる。灰色の粘質土ブロックを
5%ほど含む。VI層
地山の緑灰色シルトブロックからなる。灰色の粘質土ブロックを
20%ほど含む。VI層
地山の緑灰色シルトブロックが10%程入る
灰色細粒砂ブロックが混入する
緑灰色の地山砂質土ブロックが30%程入る



167土坑			
1	黒褐	2.5 Y 3 / 1	粗粒砂混じり粘質土
	オリブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じり粘質土
	暗オリブ	5 Y 4 / 3	粗粒砂
2	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト
3	オリブ黒	7.5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト

ブロック土40%
混合層
ブロック土40%
ブロック土20%
径5mm未満の
礫少量入る
径5mm未満の
礫少量入る

図 21 1172 土坑実測図・167 土坑断面図

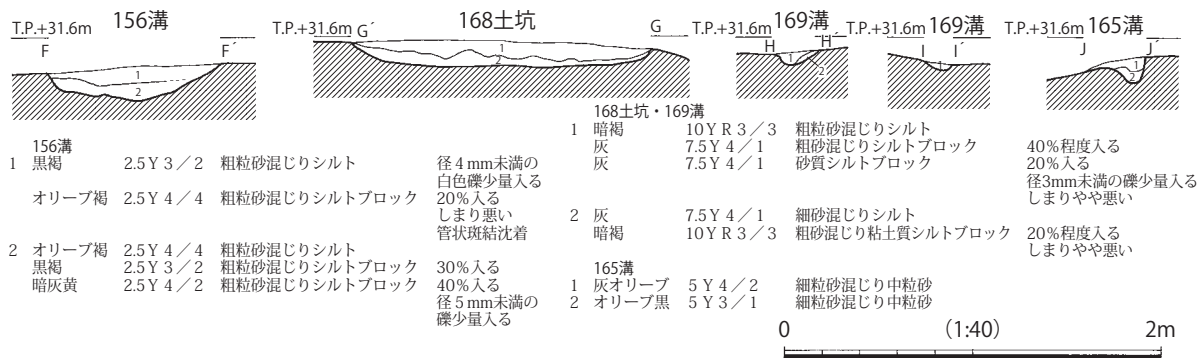


図 22 168 土坑、156・165・169 溝断面図

査区北西隅の谷地形の肩に取り付く。溝底の標高はほぼ平坦で、谷に取り付く部分でのみゆるやかに谷に向かって傾斜している。したがって溝内の水は最終的には谷に向けて、つまり北から南に落とされていたとみられる。

溝の東側ではこれと平行する柱穴列 5 を検出した。その詳細は柱穴列 5 の項を参照されたい。出土遺物はなかった。

168 土坑 (図 20・22)

1 調査区中央やや北寄りで検出した。北西から南東を指向する 169 溝の中ほどに位置する。平面形は長軸 2.6 m、短軸 1.5 m のいびつな楕円形である。深さは 13 cm と浅く、底部は平坦である。遺構埋土は 2 層からなり、上層は 169 溝埋土と一致する。したがって 168 土坑がある程度埋まった段階で、土坑を長軸方向に延長するように、169 溝が掘り足されたとみられる。土師器の細片が一点出土した。

169 溝 (図 20・22)

1 調査区中央北寄りで検出した。北西から南東に 6 m 伸び、幅 10～20 cm、深さ 5 cm 前後である。溝埋土が、中央に位置する 168 土坑埋土上層と一致する。主軸方向は N-43°-E で、この溝と主軸方向が一致する建物もしくは柱穴列は認められない。

周辺の等高線とほぼ直交することから、簡易に設けられた排水施設とも考えられる。この西側に位置する 1244 溝や 1246 溝も同様な機能を負っていたと考えられる。出土遺物はなかった。

165 溝 (図 20・22)

1 調査区やや北寄りで検出した小規模な溝である。調査区北西隅の谷の肩際に位置する。溝幅は最大で 30 cm、深さは 13 cm である。出土遺物はなかった。

5 土坑・ピット

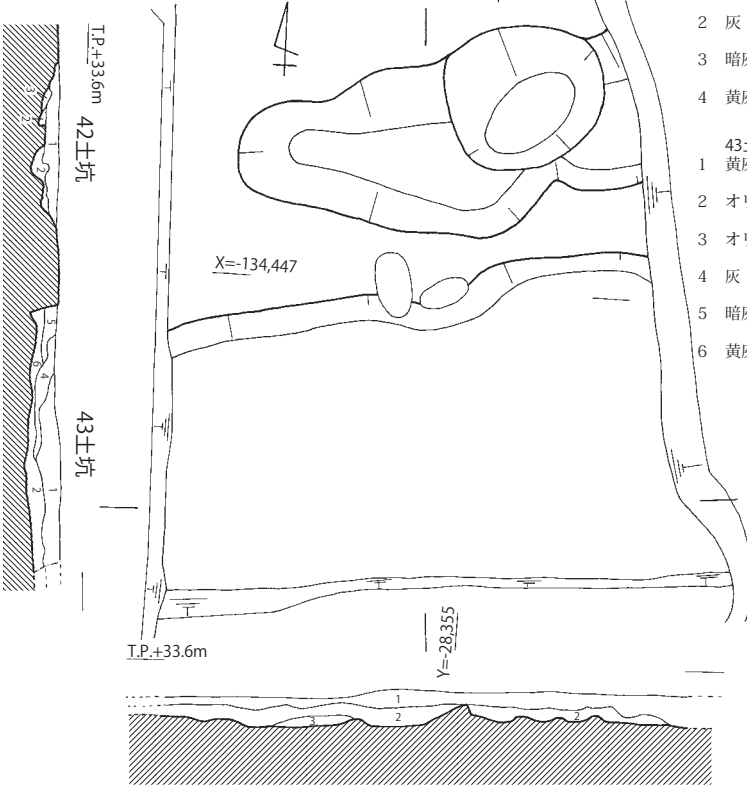
井戸や竪穴住居、掘立柱建物あるいは柱穴列の他に、機能を特定できない不整形な土坑やピットを多数検出した。そのうち柱穴の可能性が高い小規模な円形の窪みをピットとし、それ以外のやや大きい窪みを土坑としたが、両者を分かつ厳密な基準は設けていない。また後述するが、土坑には竪穴住居の可能性のあるものも含まれる。

42 土坑 (図 23)

2 調査区東端で検出した東西に長いいびつな楕円形の土坑である。当遺構の東への延長部は、上私部遺跡 (その 1) の調査区で検出された、「建物 13」の南側で検出されている。

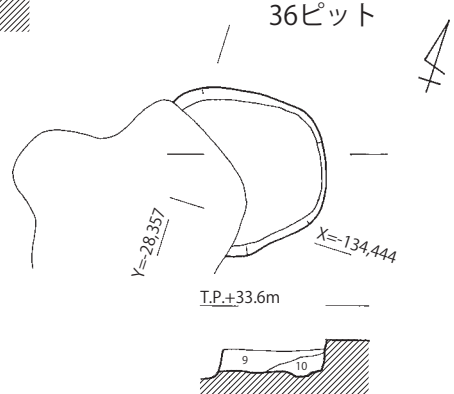
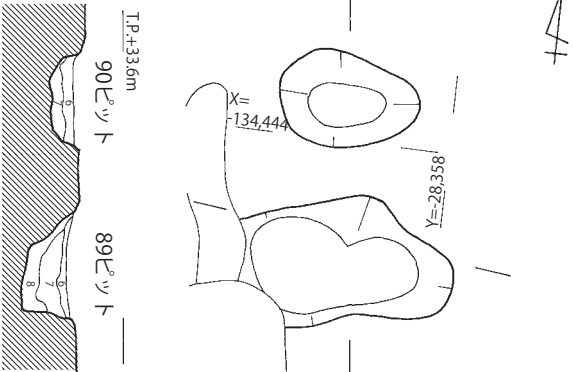
建物の東側辺のほぼ延長上で土坑が収まっている。したがって長軸は約 4 m とみられる。短軸は 0.8～1.0 m、深さは 10 cm 前後。主軸方向は N-11°-W で、あえて言うなら北側に並ぶ建物 1 の主軸

42・43土坑



- | 42土坑 | | | |
|------|-------|------------|----------------------------|
| 1 | 黒褐 | 2.5Y 3 / 1 | 粗粒砂～礫混じり
細粒砂 |
| 2 | 灰 | 5 Y 4 / 1 | 粗粒砂混じり 1より粘性強い
細粒砂 |
| 3 | 暗灰黄 | 2.5Y 4 / 2 | 粗粒砂混じり 地山の二次堆積土
粗粒砂 |
| 4 | 黄灰 | 2.5Y 4 / 1 | 粗粒砂混じり
細粒砂 |
| 43土坑 | | | |
| 1 | 黄灰 | 2.5Y 4 / 1 | 粗粒砂～礫混じり 炭化物含む
細粒砂 |
| 2 | オリーブ黒 | 5 Y 3 / 1 | 粗粒砂混じり 1より粗粒砂の量は少ない
細粒砂 |
| 3 | オリーブ黒 | 5 Y 3 / 2 | 粗粒砂混じり 地山の粘土ブロック入る
細粒砂 |
| 4 | 灰 | 5 Y 4 / 1 | 粗粒砂混じり 地山の粗粒砂ブロック入る
細粒砂 |
| 5 | 暗灰黄 | 2.5Y 4 / 2 | 中粒砂混じり 炭化物僅かに入る
細粒砂 |
| 6 | 黄灰 | 2.5Y 4 / 1 | 中粒砂混じり 炭化物僅かに入る
細粒砂 |

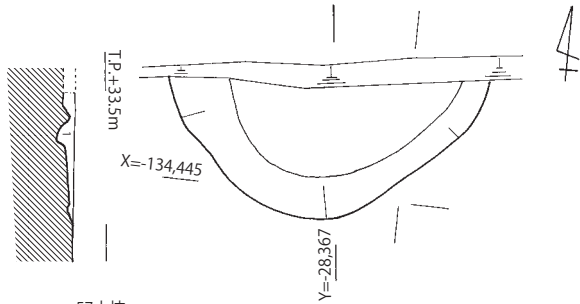
89・90ピット



- | 36ピット | | | |
|-------|----|------------|---|
| 9 | 黒褐 | 2.5Y 3 / 2 | 粗粒砂混じり細粒砂 1に似るがそれよりやや粘性あり |
| 10 | 黄灰 | 2.5Y 4 / 1 | 中粒砂混じり粒細砂 9に似るが粗粒砂は混じらない
地山ブロック僅かに入る |

- | 89・90ピット | | | |
|----------|-------|-------------|-------------|
| 6 | 黒褐 | 2.5Y 3 / 1 | 粗粒砂～礫まじり細粒砂 |
| 7 | 黒褐 | 2.5Y 3 / 1 | 細粒砂混じり中～粗粒砂 |
| 8 | 黄灰 | 2.5Y 4 / 1 | 粗粒砂～礫混じり中粒砂 |
| 9 | 黄灰 | 2.5Y 5 / 1 | 細粒砂混じり粗粒砂 |
| 10 | 黒褐 | 2.5Y 3 / 1 | 細粒砂混じり中～粗粒砂 |
| 11 | 黄灰 | 2.5Y 4 / 1 | 中～粗粒砂混じり細砂 |
| 12 | にぶい黄褐 | 10Y R 5 / 4 | 細粒砂混じり粗粒砂 |
| 13 | 灰黄褐 | 10Y R 4 / 2 | 細粒砂混じり中～粗粒砂 |
- 地山の粗粒砂ブロック含む
地山の粗粒砂と8がブロック状に混ざる
- 地山の粗粒砂ブロック入る
地山の再堆積層

57土坑



- | 57土坑 | | | |
|------|---|------------|-----------------------------|
| 1 | 灰 | 7.5Y 4 / 1 | 粗砂～礫混じり細砂 地山の灰オリーブシルトブロック入る |

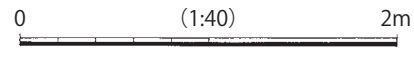


図 23 36・89・90ピット、42・43土坑実測図

方向に近似する。出土遺物はなかった。

43 土坑 (図 23)

2 調査区東端で、42 土坑のすぐ南側で検出した。遺構の北肩のラインのみが確認できたため、全体の形状は不明である。遺構の東側は上私部遺跡（その 1）調査区、南側は上私部遺跡（その 2）調査区にまたがる。しかし隣接する調査区では延長部分が検出されていないため、調査区境の側溝掘削時に削平されたとみられる。底部はほぼ平坦で、壁面は直線的に立ち上がる。土坑埋土の堆積状況はほぼ水平で、埋土上層に炭化物が含まれる。出土遺物はなかった。

89 ピット (図 23)

2 調査区東部で建物 13 と建物 1 の隅柱にはさまれる位置にある。89 ピットは建物 1 の南東隅柱である 68 柱穴に切られる。長軸 1.15 m 以上、短軸 64 cm のややいびつな楕円形を呈する。深さは 30 cm 程度で、底部は平坦である。東西方向断面から、同規模の別のピットを切っていることがわかる。はじめのピットがほぼ埋まった段階でその東半分を重ねるように 89 ピットが設けられた。近辺には 89 ピットと同様、建物 13 の南西隅柱に切られる 67・36 ピットがあることから、建物 1 や建物 13 に先行する建物が存在した可能性があるが、これらのピットとセット関係をもつ柱穴もしくは建物の痕跡は確認できなかった。遺構埋土より須恵器の細片が 1 点出土した。

90 ピット (図 23)

2 調査区東部で建物 13 と建物 1 の隅柱に挟まれて、89 ピットの北側に位置する。長軸 75 cm、短軸 50 cm の楕円形で、深さは約 15 cm である。89 ピットと同様、大型の柱穴が密集する場所にあり、掘立柱建物を構成する柱穴の可能性はあるが、これとセット関係を持つ柱穴を特定することができなかった。遺構埋土から須恵器 1 点、土師器細片 6 点出土した。

36 ピット (図 23)

2 調査区東部にあり、67 ピットに切られる。67 ピットは建物 13 の南西隅柱である 83 柱穴に切られる。平面形はややいびつな隅丸方形もしくは楕円形とみられ、83 柱穴とほぼ同規模とみられる。深さは 20 cm 前後で、底部は平坦である。建物 13 に先行する掘立柱建物の存在が伺えるが、これとセット関係を持つ柱穴を特定することができなかった。遺構埋土から土師器細片が 1 点出土した。

57 土坑 (図 23)

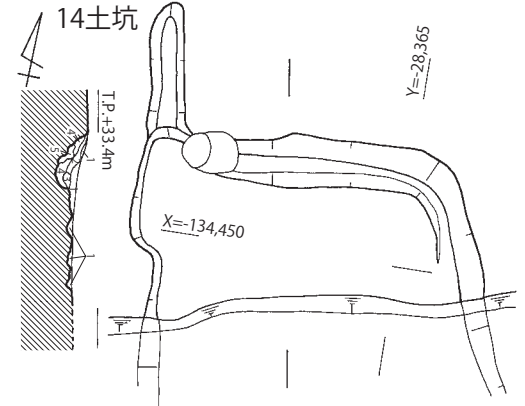
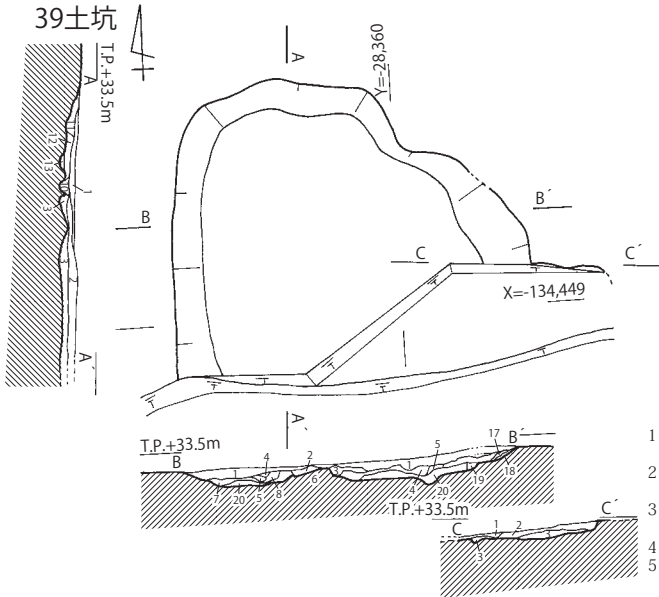
2 調査区東部にあり、建物 1 と柱穴列 2 との間に位置する。円形の土坑と見られるが、北半部は側溝により削平される。直径 1.7 m、深さは 10 cm 前後と極めて浅い。遺構埋土からの出土遺物はなかった。

39 土坑 (図 24)

2 調査区東部で、建物 1 のすぐ南側に位置するいびつな隅丸方形の土坑である。土坑の西辺は直線的だが、対照的に東辺は東に向かって凸状に張り出す。土坑の南側は上私部遺跡（その 2）調査区に接するが、その際の調査ではこの土坑の延長部分が検出されていないことから、調査区境の側溝掘削時に削平されたとみられる。したがって大きさは東西方向 4.6 m、南北方向は約 3～4 m とみられる。深さは 20 cm と浅く、土坑底部にはやや凹凸がみられた。土坑東辺が最も外側に張り出す部分では、埋土上層に焼土や炭化物が含まれるのを認めた。出土遺物はなかった。

14 土坑 (図 24)

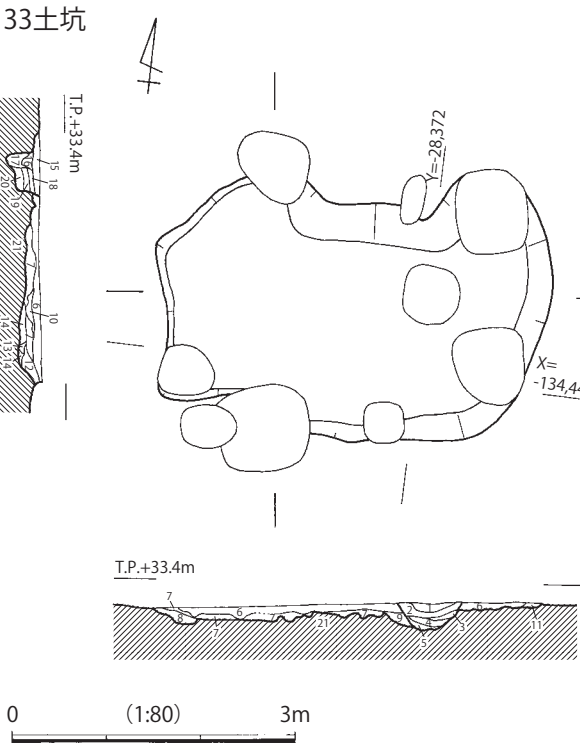
2 調査区東部で、柱穴列 3 の南側に位置する。東西 3.6 m の隅丸方形で、南側延長部は上私部遺跡（その 2）の調査区に含まれるが、別の隅丸方形の土坑に切られており、土坑の南北方向の長さは不明であ



39土坑 A-A		B-B	
1	灰 5 Y 4 / 1	粗粒砂～礫混じり細粒砂	
2	暗灰黄 2.5 Y 5 / 2	シルト	
3	黄灰 2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	
4	暗灰黄 2.5 Y 4 / 2	中粒砂混じり細粒砂	3に似るがそれより粘性低い
5	暗灰黄 2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり細粒砂	
6	にぶい黄 2.5 Y 6 / 4	シルト	地山
7	黄灰 2.5 Y 4 / 1	中粒砂混じり細粒砂	
8	黄灰 2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり中粒砂	
10	暗灰黄 2.5 Y 5 / 2	中粒砂混じり細粒砂	12に似るがそれより粘性低い
11	灰 7.5 Y 5 / 1	細粒砂混じり粗粒砂	地山の再堆積層
12	暗灰黄 2.5 Y 4 / 2	中粒砂混じり細粒砂	
13	暗灰黄 2.5 Y 5 / 2	細粒砂混じり中～粗粒砂	
17	灰 5 Y 5 / 1	粗～細粒砂	地山の再堆積層
18	オリブ黒 5 Y 3 / 1	細粒砂	16に似る
19	灰 5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	
20	灰オリブ 5 Y 4 / 2	中粒砂混じり細粒砂	

14土坑			
1	暗灰黄 2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり細粒砂	地山のシルトブロック、炭化物が混入する
2	暗灰黄 2.5 Y 5 / 2	中粒砂混じり細粒砂	地山のシルト、中粒砂ブロックが混入する
3	灰オリブ 5 Y 5 / 2	細粒砂混じり中～粗粒砂	地山の中～粗粒砂ブロックが混入する
4	灰 5 Y 6 / 1	粗粒砂混じり中粒砂	地山の再堆積層
5	灰 5 Y 5 / 1	中粒砂混じり細粒砂	3に似るがそれより粘性あり

39土坑 C-C			
1	黒褐 10 Y R 3 / 1	粗砂混じり細砂	焼土と炭化物含む
2	褐灰 10 Y R 4 / 1	粗砂混じり細砂	1に似るがやや粘性低い
3	灰赤 2.5 Y R 4 / 2	粗砂混じり細砂	2と地山のシルトがブロック状に混ざり合う
1	黒褐 10 Y R 3 / 1	粗砂混じり細砂	焼土と炭化物含む
2	褐灰 10 Y R 4 / 1	粗砂混じり細砂	1に似るがやや粘性低い
3	灰赤 2.5 Y R 4 / 2	粗砂混じり細砂	2と地山のシルトがブロック状に混ざり合う



33土坑			
1	黄灰 2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	中粒砂ブロック混ざる
2	暗灰黄 2.5 Y 4 / 2	中粒砂混じり細粒砂	径5mm以下の礫入る
3	にぶい黄褐 10 Y R 4 / 3	中～粗粒砂混じり細粒砂	地山のシルトブロック、焼土、炭化物が僅かに入る
4	オリブ黒 5 Y 3 / 1	中～粗粒砂混じり細粒砂	地山のシルト、中～細粒砂ブロック入る 3に似るが地山ブロックの含有量が多い
5	暗オリブ 5 Y 4 / 3	中～粗粒砂混じりシルト	地山の再堆積層に似る炭化物僅かに入る
6	灰 5 Y 4 / 1	粗砂混じり細粒砂	炭化物僅かに入る
7	黄灰 2.5 Y 4 / 1	細粒砂混じり中～粗粒砂	地山の粗粒砂、シルトブロック入る 炭化物僅かに入る
8	黄褐 2.5 Y 5 / 3	中粒砂混じり細粒砂	地山の黄褐色中～粗粒砂と灰色細粒砂がブロック状に混ざり合う
9	黄灰 2.5 Y 5 / 1	中～粗粒砂混じり細粒砂	炭化物が僅かに入る
10	褐灰 10 Y R 4 / 1	中～粗粒砂混じり細粒砂	7に似るがそれより粘性あり
11	灰 7.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	炭化物僅かに入る
12	灰 7.5 Y 5 / 1	細砂混じり中砂～粗砂	6に似るがそれより粘性あり暗灰色の細砂ブロック入る
13	オリブ灰 2.5 G Y 5 / 1	中～粗粒砂混じり細粒砂	12に似るが粘性がやや強い
14	灰オリブ 5 Y 5 / 2	粗粒砂混じり中粒砂	地山の中～粗粒砂ブロックと灰黄色細砂ブロックが混ざり合う
15	暗灰黄 2.5 Y 4 / 2	中～粗粒砂混じり細粒砂	径5mm大の礫と地山ブロック僅かに入る
16	暗灰黄 2.5 Y 5 / 2	中～粗粒砂混じり細粒砂	
17	オリブ黒 5 Y 3 / 2	中～粗粒砂混じり細粒砂	
18	褐灰 10 Y R 5 / 1	中～粗粒砂混じり細粒砂	
19	褐灰 10 Y R 4 / 1	中粒砂混じり細粒砂	
20	灰 5 Y 4 / 1	粗砂混じり中砂～粗砂	

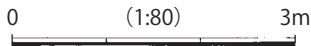


図 24 14・33・39 土坑実測図

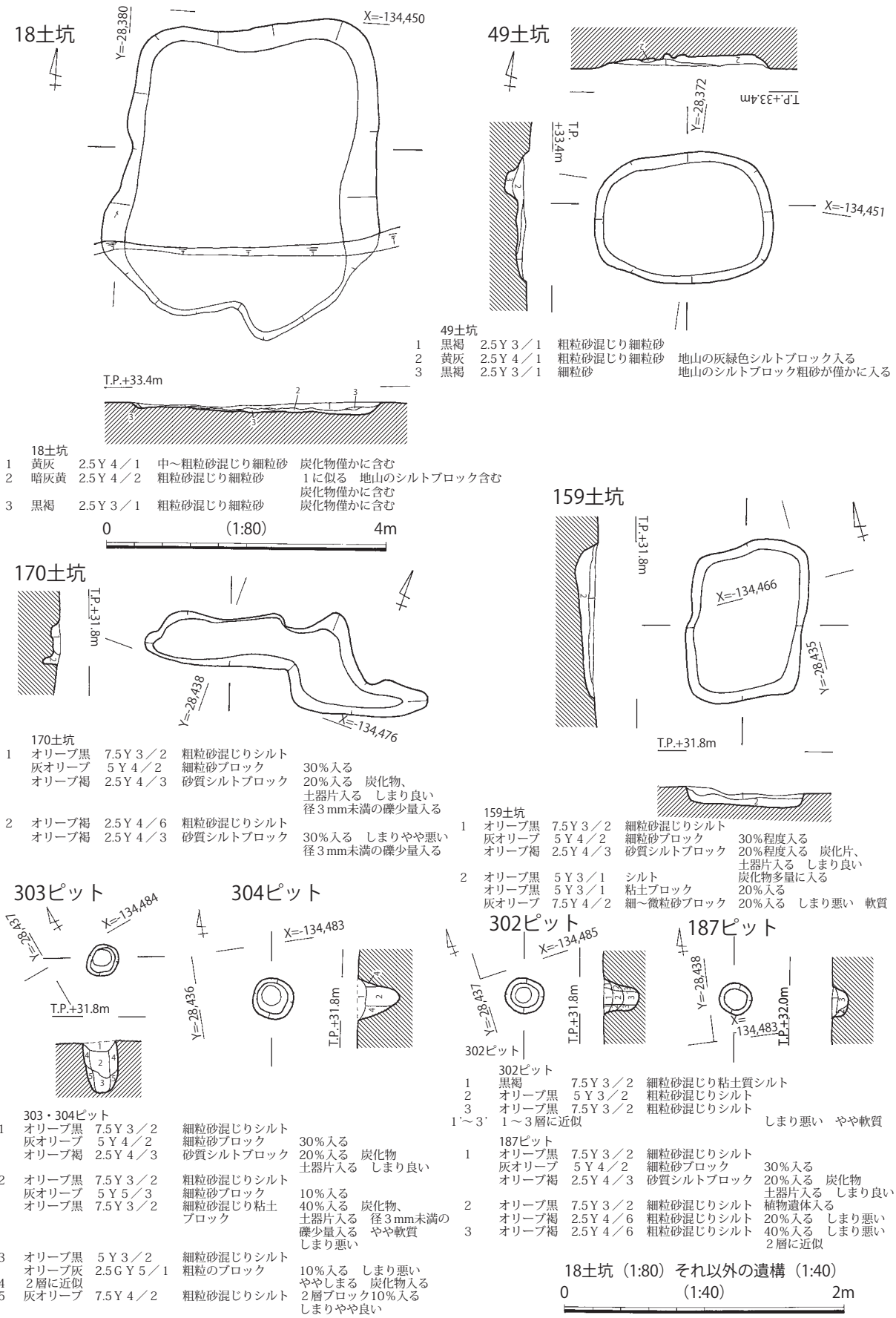


図25 18・49・159・170土坑、187・302～304ピット実測図

る。土坑北辺の西端から南北方向に短い溝が延びる。平面形が隅丸方形であること、北辺に壁溝状のくぼみが認められること、埋土に地山ブロックと炭化物が混入すること、また北辺から南北方向に溝が伸びる様子が 12 竪穴住居に似ることから、竪穴住居である可能性が高いが、柱穴を検出しなかったため、確定できなかった。竪穴住居であれば 12 竪穴住居と同様、平面積が小規模なものと考えられる。出土遺物のうち全体の形状を復元できる 1 点を実測した。

33 土坑 (図 24)

2 調査区東部で、12 竪穴住居のすぐ東側で検出した。土坑の長軸は約 4 m、短軸 2.5 ~ 2.8 m で、深さは 20 cm 前後と浅く、立ち上がりはなだらかである。底部にやや凹凸がみられる。平面形は全体をみると、東西に長い不整形な隅丸長方形もしくは楕円形だが、南辺および西辺は直線的で、すぐ西に位置する 12 竪穴住居とほぼ同じ幅である。また両遺構の南辺はほぼ同じラインでそうろう。

33 土坑の底部が、12 竪穴住居と同じく細粒砂混じり中～粗粒砂層まで掘り抜かれていること、遺構埋土に地山のシルトブロックおよび炭化物が含まれる点も 12 竪穴住居と一致しており、竪穴住居の痕跡である可能性が高いと考える。そうであれば、遺構の北半分は掘形が浅いために削平されて残らず、深い部分のみが残ったと理解される。なおこの遺構は柱穴列 1・2 の柱穴や、その他のピットに切られる。出土遺物はなかった。

18 土坑 (図 25)

2 調査区中央部やや東寄り、12 竪穴住居の南側に位置する。東西 4 m、南側の延長部分が上私部遺跡(その 2) 調査区でも検出されており、それをあわせた南北長は 4.6 m である。深さは 10 cm と浅く、底部は平坦である。平面形はほぼ隅丸方形だが、南辺がやや不整形である。土坑の規模・形状、埋土に地山のシルトブロックと炭化物が含まれる点が 12 竪穴住居に近似する。したがって 18 土坑は竪穴住居の可能性はあるが、土坑内部に柱穴等が検出されなかったため、確定するにはいたらなかった。

須恵器細片と土師器細片が各 4 点出土した。いずれも小片で、前者はおそらく甕と杯類が 2 点ずつとみられ、後者は器種の特定ができない。

49 土坑 (図 25)

2 調査区東寄りで検出した東西に長い隅丸長方形の土坑である。長辺 1.27 m、短辺 94 cm で、遺構埋土に地山のシルトブロックが混入する。深さは 5 ~ 18 cm で底部にやや凹凸がみられる。

出土した土師器・須恵器の小片のうち、須恵器杯蓋を実測した。

170 土坑 (図 25)

1 調査区中央北寄りで検出した東西に長いびつな楕円形の土坑である。東西長 2.05 m、南北長 40 cm 前後、深さは 10 cm 前後である。遺構埋土にわずかに炭化物が混じる。

土師器細片 1 点が出土したが、時期比定はできない。

159 土坑 (図 25)

1 調査区北部、154 溝より北側に位置するややびつな隅丸長方形の土坑である。長辺 1.1 m、短辺 83 cm、深さは 10 cm 前後と浅く、底部は平坦である。遺構埋土は上下 2 層に分けられる。いずれの層にも炭化物が含まれるが、特に下層に多く含まれる。土坑壁面に焼け締まりは認められなかった。出土遺物はなかった。

303 ピット (図 25)

1 調査区中央部で、柱穴列 7 の東側に近接して位置する。平面形は直径約 22 cm の円形もしくは隅丸

方形で、柱痕径は約 13 cmの柱穴である。深さは 36 cmで、190 ピットと 304 ピットをつなぐライン上に位置する。したがってこれらのピットと柵もしくは掘立柱建物を構成する可能性がある。ただ周囲のどの建物とも主軸方向が一致しないこと、セット関係をとらえられるピットの数が少ないことから、それらを柱穴列と確定するにはいたらなかった。

出土遺物はなかった。

304 ピット (図 25)

1 調査区中央部で柱穴列 7 の東側、前述の 303 ピットの東側に位置する。平面形は一辺約 25 cmの隅丸方形で、深さは 30 cm、柱痕径は 14 cmである。これと関連付けられそうな遺構の詳細については 303 ピットの項を参照されたい。

出土遺物はなかった。

302 ピット (図 25)

1 調査区中央部で、303 ピットの南側に近接して位置する。直径約 26 cmの円形もしくは隅丸方形で、柱痕径 11 cm、深さは約 25 cmである。187 ピットと 1243 ピットを結んだライン上に位置することから、それらとセットを成して柵もしくは掘立柱建物を構成する可能性がある。ただ柱穴間の距離が不揃いなこと、セット関係をとらえられるピットの数が少ないことから特定にはいたらなかった。ちなみに 1243 ピットは長軸 45 cm、短軸 30 cmの楕円形で、深さは 15 cm弱と浅い。

出土遺物はなかった。

187 ピット (図 25)

1 調査区中央部で 303 ピットの北西に近接して位置する。直径約 23 cmの円形、深さは 11 cmである。出土遺物はなかった。これと関連付けられそうな遺構の詳細については 302 ピットを参照されたい。

181 ピット (図 26)

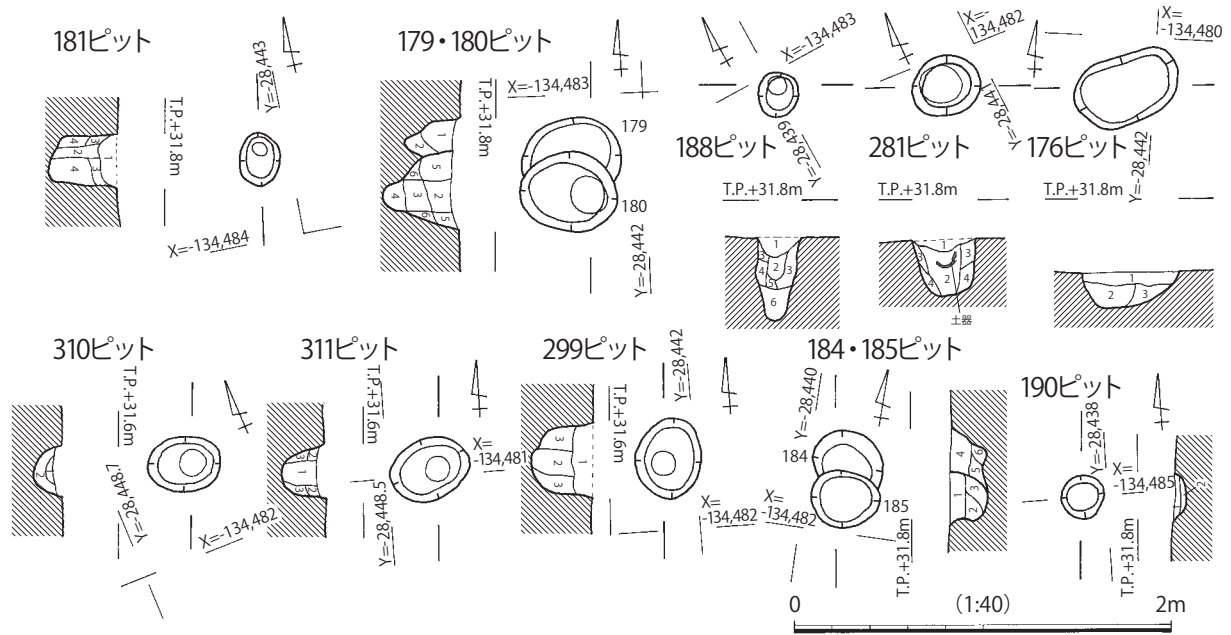
1 調査区中央部で、建物 5 の南東隅柱の南東側に近接して位置する。平面形は楕円形で、長軸 30 cm、短軸 22 cm、深さは 36 cmである。柱痕の直径は 8 cmである。1 調査区において、ピットの検出密度が高い箇所位置しており、柵もしくは建物を構成する柱穴の一つである可能性があるが、これと明確なセット関係を持つ柱穴を特定することができなかった。出土遺物はなかった。

179・180 ピット (図 26)

1 調査区中央部で、柱穴列 7 に含まれる 183 柱穴の西側で検出した。180 ピットが 179 ピットを切る。180 ピットは長軸 52 cm、短軸 42 cm、東西に長い楕円形で、柱痕径は 20 cm弱、深さは 36 cmである。179 ピットは 180 ピットと同規模とみられるが、深さは 25 cmとやや浅い。299 ピット・176 ピットと当ピットがおおむね直線上に乗ることから、それらとセットを成して柵もしくは掘立柱建物を構成する柱穴である可能性がある。

これらのピットが建物 5 の東側辺とほぼ平行することから、建物 5 に含まれる可能性も考えた。しかし東側辺からこれらピット列までの間隔が、他の柱間と比べて間遠であること、建物 5 の柱間とこれらピット間の距離とでは後者の間隔の方が大きく、これらを含めると建物 5 の東西方向の柱筋がいびつになることから除外した。

一方、建物 5 の東側辺にあたる柱穴によって切られているピットと、これらのピットがセットをなし、掘立柱建物を構成する可能性もある。ただそのように見た場合、1 間×2 間という建物の規格がややイレギュラーであること、柱穴配置がいびつであることから、断定するにはいたらなかった。ただこれら



181ピット			
1	黒褐 灰オリブ オリブ褐	7.5Y 3/2 5Y 4/2 2.5Y 4/3	細粒砂混じりシルト 細粒砂～シルトブロック シルトブロック
2	オリブ黒 オリブ灰	5Y 3/2 5Y 5/3	粗粒砂混じりシルト 粗粒砂混じりシルト ブロック
3	オリブ黒 オリブ黒	5Y 3/2 2.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト 粗粒砂ブロック
4	オリブ黒	2.5Y 3/2	シルト
179・180ピット			
1	黒褐 オリブ黒 暗オリブ	2.5Y 3/1 5Y 3/2 5Y 4/3	粗粒砂混じりシルト 粗粒砂混じり粘土 ブロック 粗粒砂ブロック
2	灰 オリブ黒	7.5Y 4/1 5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト 粘土ブロック
3	灰	7.5Y 4/1	粗粒砂混じりシルト
4	オリブ黒 オリブ黒	5Y 2/2 5Y 3/1	細粒砂混じりシルト 粗粒砂混じりシルト ブロック
5	2層に近似		
6	灰 オリブ黒	7.5Y 4/1 5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト シルトブロック
188ピット			
1	オリブ黒 灰オリブ オリブ褐	7.5Y 3/2 5Y 4/2 2.5Y 4/3	細粒砂混じりシルト 細粒砂ブロック 砂質シルトブロック
2	オリブ黒 オリブ黒 灰	7.5Y 3/2 7.5Y 3/1 10Y 5/1	粗粒砂混じりシルト 粘土ブロック 細粒砂ブロック
3	灰オリブ 灰	7.5Y 4/2 10Y 5/1	粗粒砂～シルト 粘土ブロック
4	灰オリブ 灰	7.5Y 4/2 10Y 5/1	粗粒砂混じりシルト 粘土ブロック
5	オリブ黒	7.5Y 3/1	粘土質シルト
6	オリブ灰 灰	10Y 4/2 10Y 4/1	粗粒砂混じりシルト 粘土質シルト網目状に 入る
281ピット			
1	オリブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
2	オリブ黒 オリブ黒	5Y 3/2 5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト 粗粒砂ブロック
3	オリブ黒 灰オリブ	5Y 3/2 5Y 5/3	粗粒砂混じりシルト 粗粒砂ブロック
4	オリブ 灰	5Y 4/1 5Y 4/1	粗粒砂混じりシルト 粗粒砂混じりシルト 網目状に入る

176ピット			
1	オリブ黒 オリブ黒 オリブ黒	5Y 3/2 5Y 3/2 7.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト 粘土ブロック 細粒砂混じりシルト ブロック
2	オリブ黒	7.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト ブロック
3	灰 黒褐 灰オリブ	2.5Y 4/1 10Y R 3/2 5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト 粘土ブロック 粗粒砂混じりシルト
310・311ピット			
1	オリブ黒 オリブ黒	7.5Y 3/1 7.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト 粗～細粒砂ブロック
2	オリブ黒 オリブ黒	5Y 3/2 5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト 粘土ブロック
3	オリブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
299ピット			
1	オリブ黒 灰オリブ オリブ褐	7.5Y 3/2 5Y 4/2 2.5Y 4/3	細粒砂混じりシルト 細粒砂ブロック 砂質シルトブロック
2	灰	5Y 4/1	粗粒砂混じり粘土質 シルト
3	オリブ黒	5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト ブロック
4	灰	5Y 5/1	細粒砂ブロック
5	灰	5Y 5/1	細粒砂混じりシルト
6	オリブ黒 オリブ黒	5Y 3/1 5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト 粗粒砂混じりシルト ブロック
7	灰	5Y 4/1	粗粒砂混じりシルト
184・185ピット			
1	オリブ黒 オリブ黒 オリブ黒	5Y 3/2 5Y 3/2 7.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト 粘土ブロック 細粒砂混じりシルト ブロック
2	オリブ黒	7.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト ブロック
3	オリブ黒	7.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト ブロック
4	オリブ黒 オリブ黒 オリブ黒	5Y 3/2 5Y 3/2 5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト 粗粒砂混じりシルト 粘土ブロック
5	オリブ黒 オリブ黒	5Y 3/2 5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト 粗粒砂混じりシルト ブロック
6	オリブ褐 黒褐	2.5Y 4/3 2.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト シルト
190ピット			
1	黒褐 灰オリブ オリブ褐	7.5Y 3/2 5Y 4/2 2.5Y 4/3	細粒砂混じりシルト 細粒砂～シルトブロック シルトブロック
2	オリブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト

図 26 176・179～181・184・185・188・190・281・299・310・311ピット実測図

の可能性を排除したとしても、176ピットー299ピットー179・180ピットの構成する柱穴列が、建物5に伴う柵である可能性は残る。いずれのピットからも出土遺物はなかった。

188ピット (図26)

1調査区中央部で、柱穴列7に含まれる182柱穴と189柱穴の中間に位置する。掘立柱建物の束柱である可能性もあるが、これと対になる柱穴を検出できなかったため、断定はできなかった。長軸24cm、短軸21cmの楕円形で柱痕径は10cm、深さは44cmである。

出土遺物はなかった。

281ピット (図26)

1調査区中央部で、柱穴列7に含まれる183ピットの北側に位置する。長軸37cm、短軸32cmの東西に長い楕円形で、柱痕径は20cm強、深さは30cmである。

土師器杯の破片が2個体分出土した。大小の別があるようだがいずれも断片で、口縁の大部分を欠いているため正確なことはわからない。

176ピット (図26)

1調査区中央部やや北寄りで、柱穴列4を構成する175ピットの南側に近接して位置する。長辺58cm、短辺36cmの隅丸長方形で深さは19cm、柱痕は認められなかった。出土遺物はなかった。

これと関連付けられそうな遺構については179・180ピットの項を参照されたい。

310ピット (図26)

1調査区中央部西寄りで、建物5を構成する267柱穴と312柱穴の間に位置する。長軸39cm、短軸29cmの楕円形で、柱痕径は15cm、深さは16cmと浅い。出土遺物はなかった。

311ピット (図26)

1調査区中央部西寄りで、建物5の北東隅柱である273ピットの、南西そばに位置する。長軸42cm、短軸32cmの楕円形で柱痕径は13cm、深さは24cmである。

出土遺物はなかった。

299ピット (図26)

1調査区中央部やや北寄りで、建物5の東側辺を構成する275柱穴の東側に位置する。長軸43cm、短軸35cmの南北方向に長い楕円形で、柱痕径12cm、深さは33cmである。出土遺物はなかった。

なおその他の所見は179・180ピットの項を参照されたい。

184・185ピット (図26)

1調査区中央部やや北寄りで、柱穴列7を構成する182柱穴の北東側で検出した。184ピットが185ピットに切られる。185ピットは長軸36cm、短軸31cmの楕円形、深さは20cmである。184ピットはおそらく直径38cmの円形とみられる。深さは20cmで前者とほぼ同じである。

185ピットから土師器細片が1点出土したが、時期比定できるものではなかった。184ピットからの出土遺物はなかった。

190ピット (図26)

1調査区中央部で、柱穴列7の189柱穴と301柱穴の間に位置する。直径20～25cmの円形で、深さは約5cmと浅い。出土遺物はなかった。

なおこれと関連付けられそうな遺構については303ピットの項を参照されたい。

278・279土坑 (図27)

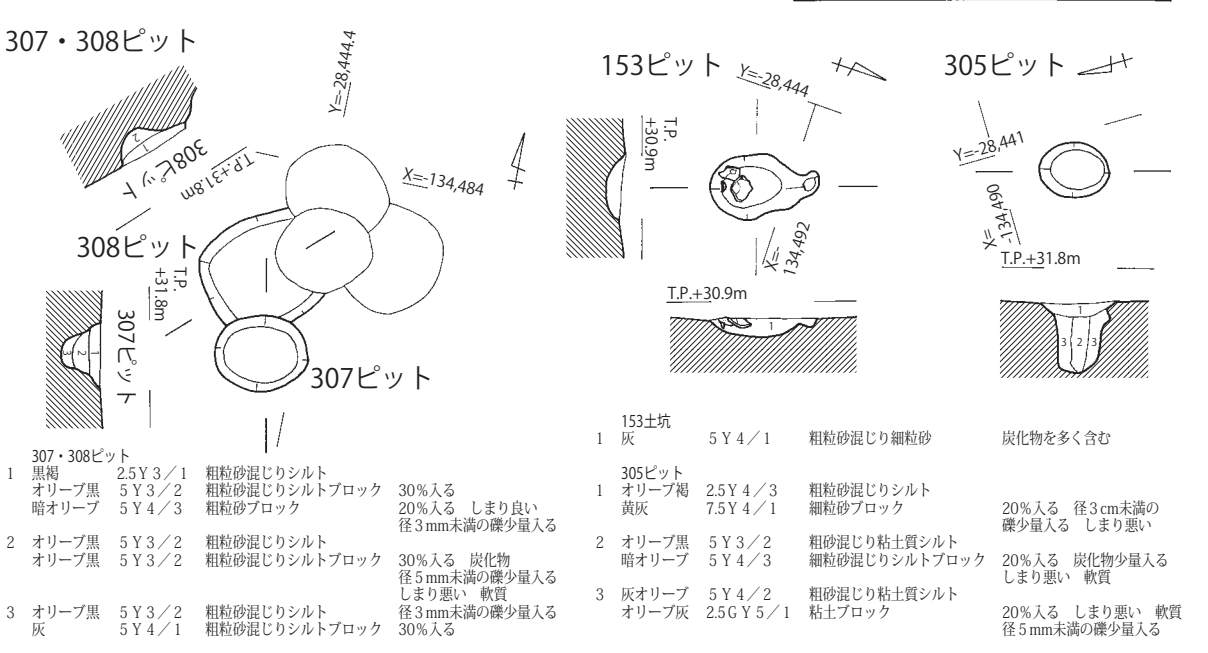
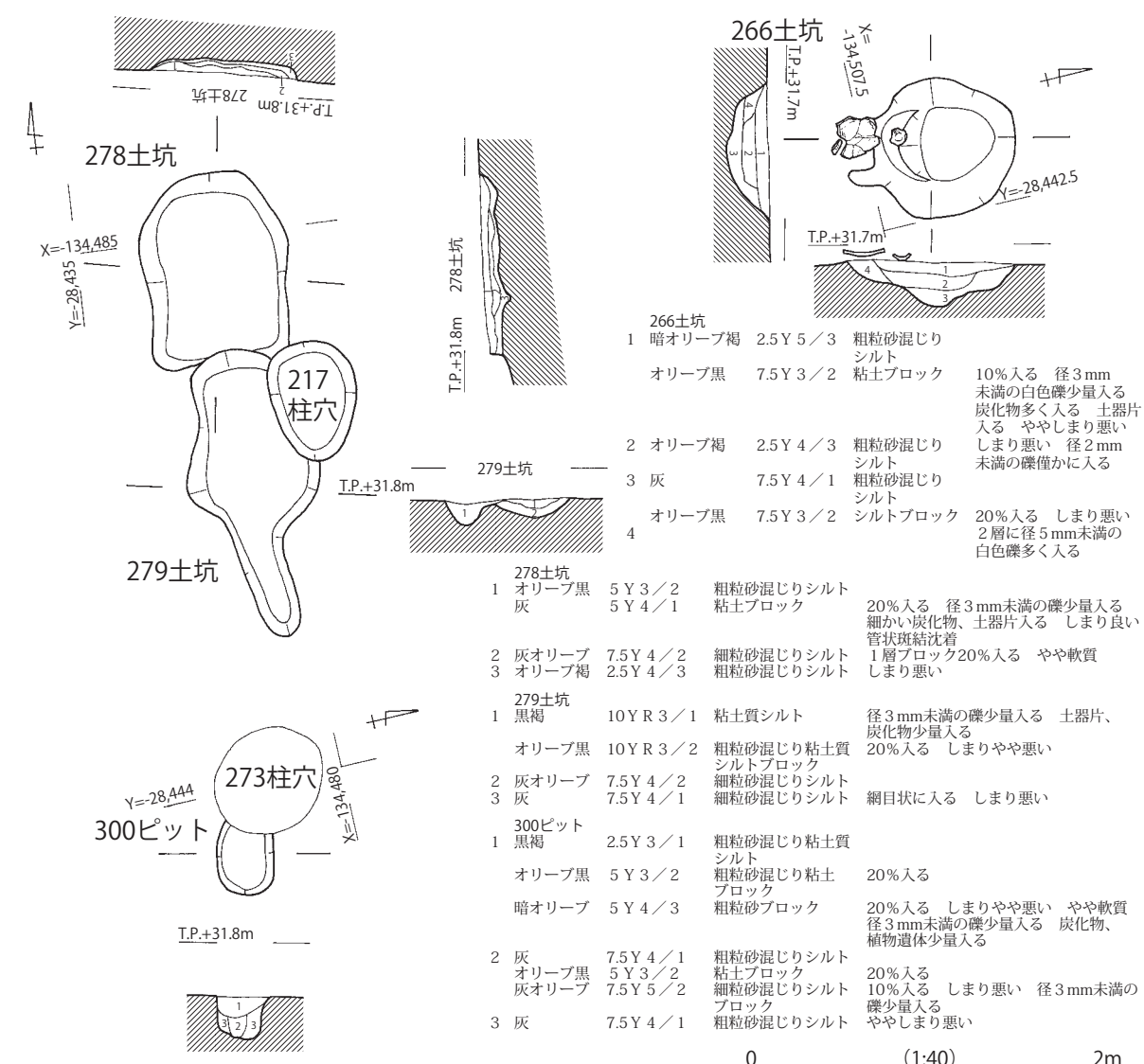


図 27 153ピット、266・278・279土坑、300・305・307・308ピット実測図

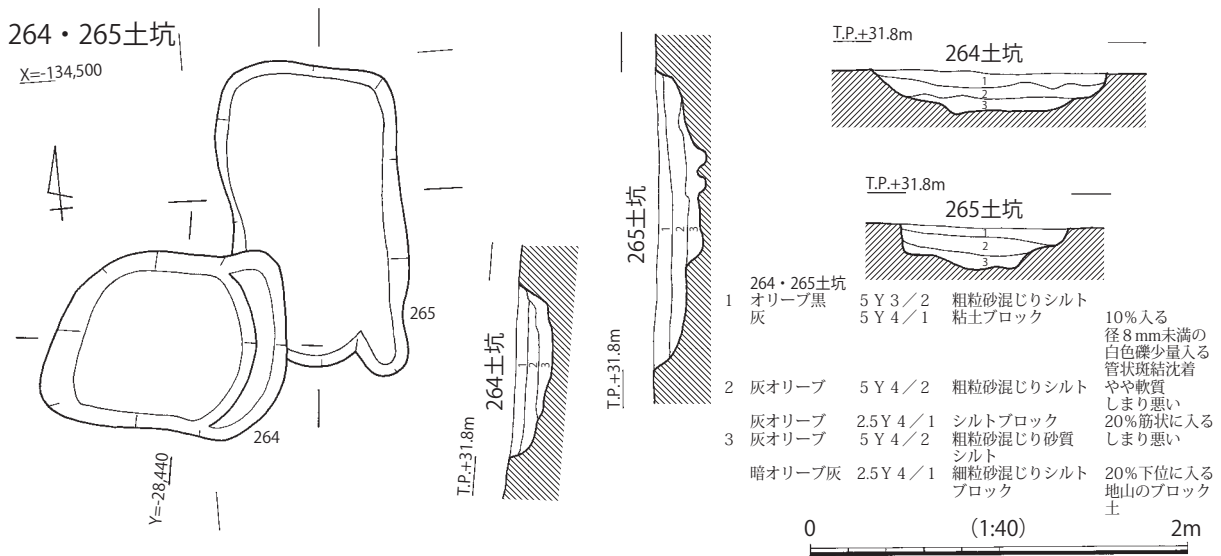


図 28 264・265 土坑実測図

1 調査区南半部東寄りで検出した。278 土坑は 279 土坑に切られる。279 土坑は建物 8 の北側辺に含まれる 217 柱穴で切られることから、それに先行して存在したことがわかる。278 土坑は南北に長い隅丸長方形で、長辺 1.04 m、短辺は 87 cm、深さは 10 cm 前後で底部は平坦である。279 土坑は全体に見ると南北に長いびつな楕円形だが、長辺 1 m 前後、短辺 64 cm の隅丸長方形の南辺が、部分的に南に張り出しているようにとらえられる。全長は 1.63 m、深さは 10 cm である。隅丸長方形の部分で比較すると、278 土坑と 279 土坑の規模や形状は近似する。両遺構とも埋土上層に細かい炭化物が少量混じる。

出土遺物のうち実測と器形復元が可能な須恵器杯蓋 1 点を実測した。279 土坑から遺物は出土しなかった。

266 土坑 (図 27)

1 調査区南端部で、建物 11 の西側辺の西側に位置する。長軸 94 cm、短軸 75 cm の南北に長いびつな楕円形で、遺構検出時に土坑の南肩付近で甕の破片を検出した。深さは 24 cm である。

甕は 2 個体分あり、一つは中期後葉のもので体部下半部、他方は弥生後期の底部付近の破片である。遺構埋土中、もしくは埋土上面で弥生時代の遺物を検出した遺構は 266 土坑の他にはない。ただこれら 2 つの土器は明らかに時期が異なるので、後世の人間が何らかの意図で持ち込み、並べ置いたものと考えられる。

300 ピット (図 27)

1 調査区中央北寄りで、建物 5 の北東隅柱 273 柱穴に切られる。長辺 40 ~ 50 cm、短辺 30 cm の東西に長い隅丸楕円形で、柱痕径は 10 cm、深さは 23 cm である。

このピットと関連付けられそうな遺構については 179・180 ピットの項を参照されたい。

出土遺物はなかった。

307・308 ピット (図 27)

1 調査区中央西寄りに位置する。308 ピットは 307 ピットに切られる。また 308 ピットは建物 5 の南東隅柱 267 柱穴に切られる、268・297 ピットに切られる。308 ピットは一辺 60 cm の隅丸方形とみられ、深さは 15 cm である。307 ピットは長軸 50 cm、短軸 41 cm の東西にやや長い楕円形で、深さ

は 21 cm である。これらのピットと関連付けられそうな遺構については 179・180 ピットの項を参照されたい。

いずれの遺構からも出土遺物はなかった。

153 ピット (図 27)

1 調査区南半部東寄り、建物 8 の南側辺に含まれる 226 柱穴と 225 柱穴のほぼ中間に位置する。長軸 58 cm、短軸 34 cm の南北に長いびつな楕円形で、深さは 10 cm とやや浅い。遺構埋土から土師器高杯や甕、杯数個体分の破片など、複数の器種にまたがる遺物を検出した。遺物はいずれも破片で、完形品は含まれなかった。出土した遺物のうち、器形の復元が可能なもの 2 点を実測した。

305 ピット (図 27)

1 調査区南半部で検出した。建物 6 の南東隅柱と建物 8 の南西隅柱の中間辺りに位置する。1 調査区において比較的ピットの検出密度が低い箇所位置しており、周囲にこれとセットを成して柵もしくは掘立柱建物を構成する可能性のある柱穴を認めることはできなかった。長軸 38 cm、短軸 29 cm の南北にやや長い楕円形で、柱痕径 8 cm、深さは 37 cm である。出土遺物はなかった。

264・265 土坑 (図 28)

1 調査区南端部に位置し、264 土坑が建物 11 の西側辺中央の柱を削平していることから、建物が廃絶した後に形成されたことがわかる。264 土坑が 265 土坑を切っている。265 土坑は長辺 1.58 m、短辺 95 cm の南北方向に長い隅丸方形の土坑で、深さは 22～25 cm である。底部にやや凹凸がみられ、断面形状は皿型である。遺構埋土は 3 層あり、ほぼ水平に堆積する。

264 土坑は長辺 1.29 m、短辺 1 m の東西方向に長い隅丸方形の土坑で、深さは 20 cm である。底部はほぼ平坦で、断面形状は皿型である。遺構埋土は 3 層あり、ほぼ水平に堆積する。

遺構の長軸方向は直行するが、両者の形状・規模・埋土およびその堆積状況が近似することから、両者は同じ機能を有していたと推定される。ただ出土遺物等は検出されず、具体的な機能は不明である。

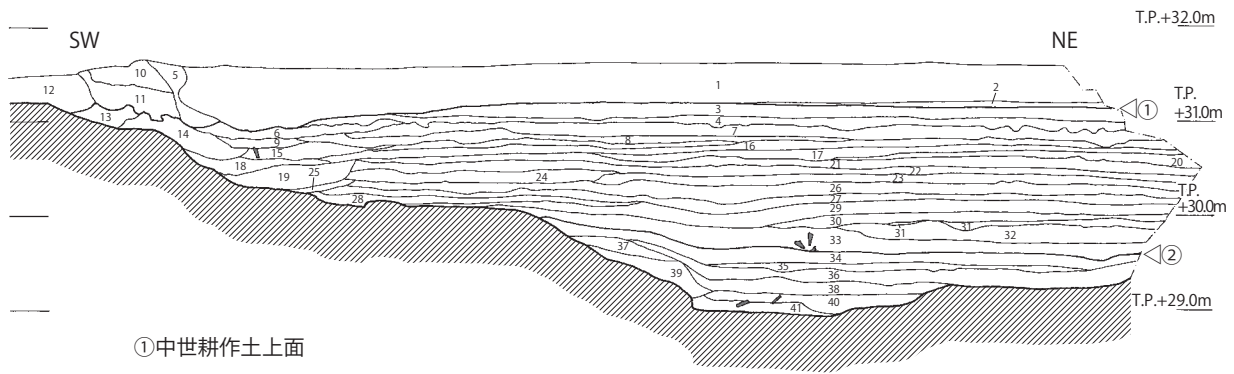
6 谷

調査区の南西隅と北西隅で谷地形を検出した。前者は上私部遺跡(その 2) 調査区の南西コーナー部分で検出された谷の北肩の延長部分をとらえたもので、住宅造成時に生じたかく乱により、落ち際の形状が確認されたにとどまる。したがってそれに関しては、前回の調査成果を中心に概要を述べることにする。後述するように、調査区南西隅検出谷地形の南側延長部分は谷頭に近いと見られるのに対し、調査区北西隅検出谷地形には、谷状地形の形成を促したと見られる侵食部分が認められないことから、前者と一連のものである可能性もある。

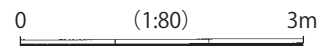
調査区南西隅検出谷地形北肩部分

上私部遺跡(その 2) 調査区では、南西コーナー部分を南東から北西にむかって谷筋が延びるが、その北側にあたる今回の調査区では、谷筋が北に向かってゆるやかに方向を転じることがわかる。上私部遺跡(その 2) の調査では谷底部で「43 溝」が検出されている。東の調査区外から西に向けてのびる幅 30～50 cm、深さ 10 cm 弱の小溝が、北西に短く方向を転じながら広く・深くなり、大溝の形状をとりながら西へ向きを変えて流れる。大溝部分の最大幅は 4 m、深さは最大で約 60 cm あり、溝底の標高は東から西にむけて緩やかに下がる。小溝部分が谷状地形の形成を促した侵食部分ととらえられることから、前回の調査区で検出されたのは、谷頭にあたる部分と考えられる。

「43 溝」からの出土遺物は少なく、須恵器杯身・埴瓶・韓式系土器甕底部片・甕胴部片や、土師器甕・



- ①中世耕作土上面
- ②古墳時代堆積層上面



1	灰白～灰オリーブ	5 Y 7 / 2 ~ 5 / 4	粗～細粒砂	水平方向のラミナ入る 径0.5cm未満の礫少量入る しまり悪い (近世洪水砂)
2	灰オリーブ	7.5 Y 5 / 2	シルト	径0.3cm未満の礫僅かに入ると しまり悪い きめ細かい 水平方向のラミナあり
3	灰オリーブ	5 Y 4 / 2	細粒砂混じり粘土～シルト	径0.1cm未満の礫少量入る 管状斑結僅かに沈着 軟質 しまりやや悪い 端部に植物遺体の混じり込みあり
4	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト	同色粘土ブロック 10%程度入る
5	灰	10 Y 5 / 1	細粒砂	弱いラミナあり
6	にぶい黄	2.5 Y 6 / 3	粗粒砂	ブロック5%入る 径1cm未満の炭化片僅かに入ると
7	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルトと	312層40%程度入る しまり悪い 径0.5cm未満の礫僅かに入ると
8	灰オリーブ	7.5 Y 4 / 2	312層の混合層	
9	灰オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	径0.5%未満の礫少量入る 同色粘土ブロック 30%程度入ると しまりやや悪い やや軟質
10	灰オリーブ	7.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	
11	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	粘土	ブロック20%程度入ると 管状斑結沈着 部分的に細砂の流入あり
12	灰	7.5 Y 5 / 1	粗粒砂混じり粘質シルト	径1cm未満の礫少量入ると
13	灰白	5 Y 7 / 1 ~ 7 / 2	粗粒砂混じり粘質シルト	10%程度入ると
14	灰	5 Y 4 / 1	中粒砂混細粒砂	径2mm大の円礫入ると
15	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	中粒砂混細粒砂	粗粒砂ブロック僅かに筋状に入ると
16	灰白～灰	5 Y 7 / 1 ~ 6 / 1	粗～細粒砂	
17	灰	7.5 Y 6 / 1 ~ 5 / 1	微～細粒砂	波状に入ると 下に下層粘土ブロック10%程度入ると
18	灰	5 Y 4 / 1	細粒砂混じり粘土	軟質 しまり悪い
19	灰オリーブ	5 Y 5 / 2	細～粗粒砂	ブロック30%程度入ると
20	灰	5 Y 4 / 1	シルト	植物遺体の混じり込み多量
21	灰	5 Y 6 / 1	微粒砂	上位に流入
22	灰	5 Y 4 / 1 ~ 5 / 1	粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の礫少量入ると
23	灰～灰オリーブ	5 Y 6 / 1 ~ 6 / 2	粗～細粒砂	ブロック40%程度入ると 上位攪乱痕跡あり 下に弱いラミナあり、杭あり
24	灰オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	粗粒砂混じりシルト
25	にぶい黄	2.5 Y 6 / 3	粗～細粒砂	ブロック5%程度入ると 管状斑結沈着 径0.5cm未満の白色礫少量入ると
26	灰	5 Y 4 / 1	細粒砂混じりシルト	下位314層とまじりあう やや軟質 しまりやや良い
27	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の礫少量入ると
28	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト	ブロック30%程度入ると 植物遺体少量入ると
29	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト	径1cm未満の礫僅かに入ると
30	灰～灰オリーブ	5 Y 6 / 1 ~ 6 / 2	粗～細粒砂	ブロック30%程度入ると 下に(345)下層と混じり合って互層となる
31	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	中粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の 白色礫少量入ると
32	にぶい黄	2.5 Y 6 / 3	粗～細粒砂	径0.5cm未満の 白色礫少量入ると
33	灰	5 Y 4 / 1	細粒砂混じりシルト	ブロック10%程度入ると
34	灰	5 Y 6 / 1	微粒砂	径0.3cm未満の礫僅かに入ると
35	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	ブロック10%程度入ると しまりやや良い 植物遺体少量入ると
36	灰黄	2.5 Y 6 / 2	微粒砂	径0.8cm未満の礫少量入ると
37	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	ブロック10%程度入ると しまりやや悪い
38	灰	5 Y 4 / 1	細粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の礫少量入ると 植物遺体僅かに入ると しまりやや悪い
39	灰オリーブ	5 Y 5 / 2	細粒砂	径0.5cm未満の白色礫少量入ると しまり悪い
40	灰	10 Y 5 / 1	微粒砂混じり粘土	弱いラミナに状に入ると
41	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	径0.2cm未満の礫僅かに入ると 非常に軟質
42	灰	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の白色礫少量入ると 植物遺体僅かに入ると
43	灰黄	2.5 Y 6 / 2	細粒砂	ブロック10%入ると
44	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じりシルト	径1cm未満の礫少量入ると
45	緑灰	10 G Y 5 / 1	細粒砂	ブロック20%程度入ると よくしまる 植物遺体僅かに入ると
46	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の礫少量入ると しまり悪い
47	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	細粒砂混じりシルト	径1cm未満の礫少量入ると しまりやや悪い 炭化物片僅かに入ると
48	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	細粒砂混じりシルト	径1cm未満の礫少量入ると しまりやや悪い
49	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	細粒砂混じりシルト	径1cm未満の礫少量入ると しまりやや悪い
50	灰黄	2.5 Y 6 / 2	細粒砂	ブロック5%程度入ると
51	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	径1cm未満の礫少量入ると 下に、下層の巻き上げあり 植物遺体僅かに入ると
52	オリーブ黒	5 Y 3 / 2 ~ 2 / 2	粗粒砂混じりシルト	ブロック状に混じりあう
53	オリーブ黒	5 Y 2 / 2	粗粒砂混じりシルト	径1cm未満の礫少量入ると 炭化物 土器片含む (古墳時代遺物包含層)
54	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じりシルト	水平方向の弱いラミナあり 植物遺体入ると (古墳時代遺物包含層)
55	灰	5 Y 5 / 1 ~ 4 / 1	粗粒砂～細粒砂の互層	(古墳時代遺物包含層)
56	黒	5 Y 2 / 1	微粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の礫少量入ると 軟質 しまり良い 植物遺体、土師片多く入ると (古墳時代遺物包含層)
57	オリーブ黒	5 Y 4 / 1 ~ 3 / 1	粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の礫少量入ると しまりやや悪い 下に微粒筋状に入ると 植物遺体僅かに入ると (古墳時代遺物包含層)
58	黒	5 Y 2 / 1	細粒砂混じりシルト	地山の緑灰色細砂ブロック10%程度入ると 下に向かって砂の混入度高くなる
59	オリーブ黒	5 Y 2 / 2	粗粒砂混じりシルト	径2cm未満の礫僅かに入ると植物遺体、土器片入ると (古墳時代遺物包含層)
60	灰	5 Y 5 / 1	細粒砂	径0.5cm未満の礫少量入ると (古墳時代遺物包含層)
61	黒	5 Y 2 / 1	細粒砂混じりシルト	ブロック20%程度下位に入ると 土器片入ると しまりやや悪い 軟質 (古墳時代遺物包含層)
62	黒	5 Y 2 / 1	粗粒砂混じりシルト	非常に軟質 同色粗砂筋状に入ると 植物遺体 多量入ると (古墳時代遺物包含層)
63	黒	5 Y 2 / 1	粗粒砂混じりシルト	同色粘土質シルト20%程度入ると (古墳時代遺物包含層)
64	灰	5 Y 5 / 1	細粒砂混じりシルト	ブロック10%程度入ると しまり悪い (古墳時代遺物包含層)

図 29 調査区北西隅検出谷土層断面図

甗・小型広口壺の破片が出土した。

調査区北西隅検出谷地形（図 29）

逆L字状に谷肩部のラインが入り込み、北西へ向けて急激に落ち込む。谷肩部のラインが最も内側に入り込む部分では、谷地形の形成を促したと見られる侵食部分を認めなかった。また前述した谷では、谷の肩に向けて微高地上でもゆるやかな傾斜が見られ、谷斜面の傾斜も比較的なだらかなのに対し、こちらでは肩部から急傾斜を呈して落ち込む点も対照的である。これらのことから斜面が大きく窪む部分は、南西―北東方向から北に向かって谷筋が大きく蛇行する部分の可能性がある。

2.6 m強におよぶ谷埋積土のうち、古墳時代に形成された埋土は図 29 中の 34 層以下の層で、最深部で 70 cm程の厚みがある。これより上の堆積土壌に比べ、粒子が細かく均一で、粘性が強く、炭化物や植物遺体が多く混じる傾向がある。

古墳時代堆積層を仔細に観察すると、止水性堆積物の中にところどころ流水性堆積物がみられることから、増水時にのみ一時的に水が流れる状態だったことが推定される。また古墳時代堆積層の下部では植物遺体が多く含まれることから、当初は増水時以外には常時水が淀んでいる状態で、溝底に落ち込んだ植物の腐食・分解が進まなかったとみられる。古墳時代堆積土上部では混入する植物遺体量が徐々に減少することから、谷の埋積が進むにつれ、徐々に谷底部も乾燥し、それにつれて植物の分解が促される状態だったことがうかがえる。

古墳時代堆積土壌中からは、須恵器・土師器・移動式竈の破片・U字状土製品・木器等、比較的多量の遺物が出土した。古墳時代集落の居住域から投棄された日用品があまり流下せず、谷底にとどまった結果ととらえられる。

谷の傾斜面に所々平場がみられるのは、中世以降に行われた水田造成の際、谷の斜面際も削りこんで水田面を作り出した結果とみられる。古墳時代堆積層より上の堆積土壌は、水田造成および耕作に伴って生じたもので、古墳時代堆積土壌に比べ、土壌化が著しい。なお中世以降の谷部の耕地利用に関しては次節で詳述する。

第3節 古代から中世の遺構

古墳時代遺構面の上層では、第1節の基本層序で述べたように、中世以降の耕作土層が堆積する。古墳時代の遺構群が廃絶した後の、このあたりでの人々の居住を示す遺構は検出されておらず、少なくとも中世から現代に至るまでは稲作を中心とする生産地としての土地利用が連綿と続けられたことがうかがわれる。中世遺構面として、中世における水田開発の画期ととらえられる段階の水田面を調査し、水田関係遺構を調査した他、古墳時代遺構面でも、それより遡る時期の鋤溝等を確認している。それらは古墳時代に属する遺構と比べ、遺構埋土が粒度の細かい砂質土からなり、粘性に乏しいなど、土質に明らかな違いを認めた。したがってここでは、古墳時代遺構面で検出した耕作関係遺構群を、時期不明であるが「古代～中世の遺構」として報告し、上層第1面で検出した遺構を「中世の遺構」として項を分けて報告する。

1 古代～中世の遺構 (図30)

古墳時代遺構面で検出した、耕作に関わって形成されたとみられる溝群である。全て古墳時代の遺構を切っており、古墳時代の集落が廃絶した後に形成されたことは確実である。ただ前回の調査結果と併せてみても、遺構の帰属時期を示す遺物は検出されておらず、時期は特定できない。現状では水田利用が開始された当初の状況を示す遺構群として把握する。

坪境畦畔の位置で検出した1130溝をはじめとする南北方向の溝と、それに直行する溝を検出した。南北方向溝は中世遺構面で検出した畦畔と重複するか、もしくはそれに近い位置で検出している。

ちなみに前回の調査では調査区の北半と南半で溝の検出状況が異なることが報告されている。調査区北半で検出される溝はおおむね東西もしくは南北方向を指向するのに対し、南半では東西方向から南北方向へと緩やかに湾曲する「75・76溝」を機軸として、溝が湾曲する状況が認められる。このような状況は、この部分に小さな谷が入り込んでいたためと推測されている。

前回の調査区の北側にあたる今回の調査区では、前回の調査区北半の状況と同じく、東西もしくは南北方向を指向する溝で、整然とした土地区画が行われている。水田の東西もしくは南北幅を示すと考えられる溝間の距離は、18～20mの中に含まれるが、143溝から149溝までの幅は12m強とやや狭い。

2 中世の遺構 (図31)

中世遺構面の基盤層は調査区全面に広がるものではなく、2調査区西半や1調査区北西端の谷地形に向けて微高地上の標高が緩やかに下がる部分で見られた。このことから中世遺構面基盤層は水田面積を広げるために造成されたとみられる。この面で検出した畦畔の位置は、その後の畦畔にほぼ踏襲される。

中世遺構面ではほぼ南北方向を指向する畦畔と、それに平行もしくは直行する溝、鋤溝等を検出した。畦畔はその裾に平行する溝とセットをなして、構築されたことがうかがわれる。これらの溝は取水・排水を担っていた水路として機能していたと考えられる。

中世の耕作土に含まれる遺物は大半が古墳時代のもので、中世土器の出土数は必ずしも多くない。中世遺構面より上の、中世耕作土層では、土師器の破片や瓦質土器の破片等を検出した。またそこからは南北朝時代のものと思われる筭や、瓦質火鉢の破片等も出土している。

一方、中世遺構面基盤層以下の中世耕作土からの出土遺物も、大半を古墳時代の遺物が占め、中世の遺物はそれほど多くない。瓦器や土師器の細片が少量含まれるにとどまる。またそれらは大半が時期比定の困難なものだった。ただ中世遺構面を精査している時に検出した瓦器碗の破片は、それより上の層

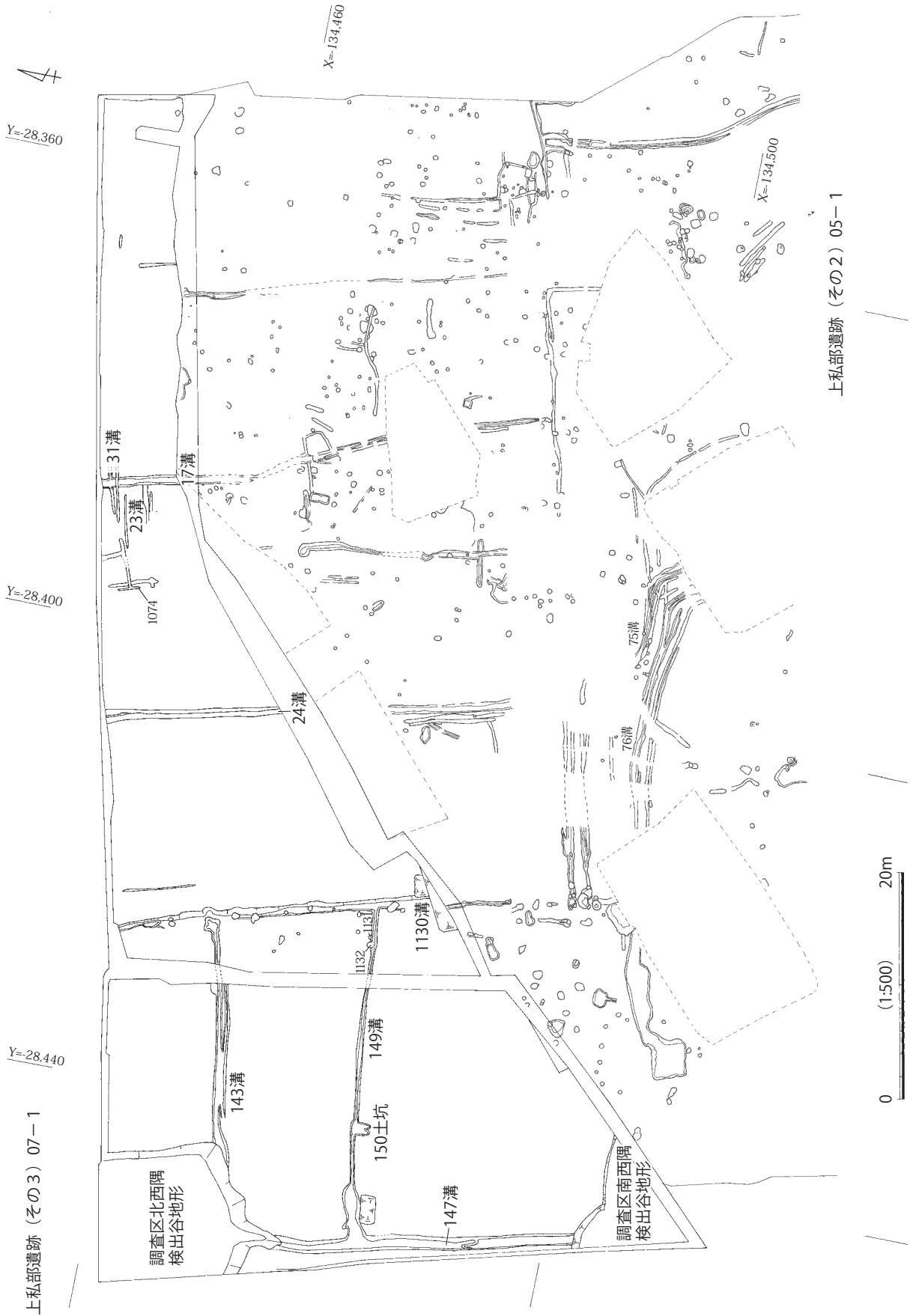


図 30 古代～中世遺構配置図

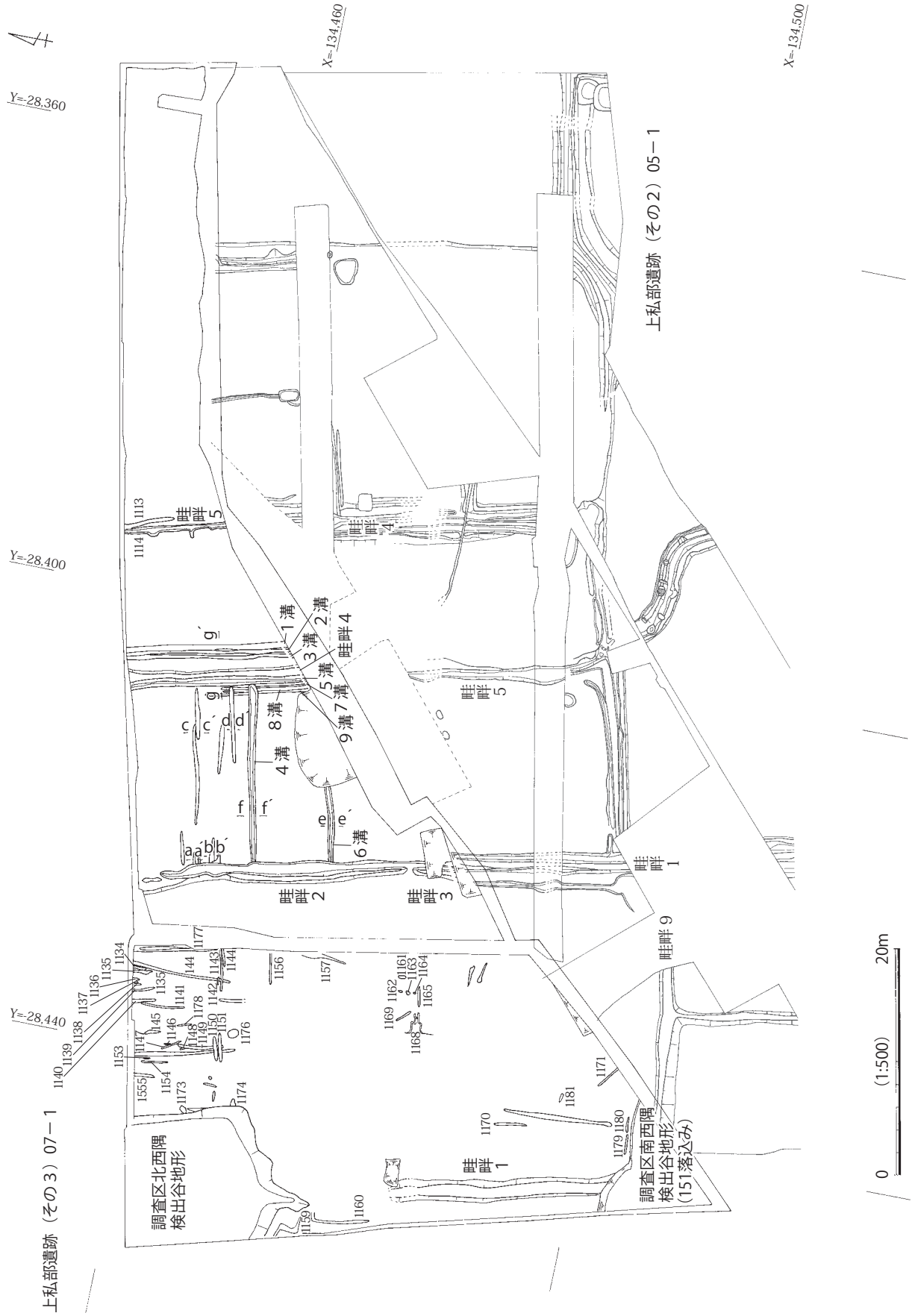


図 31 中世遺構配置図

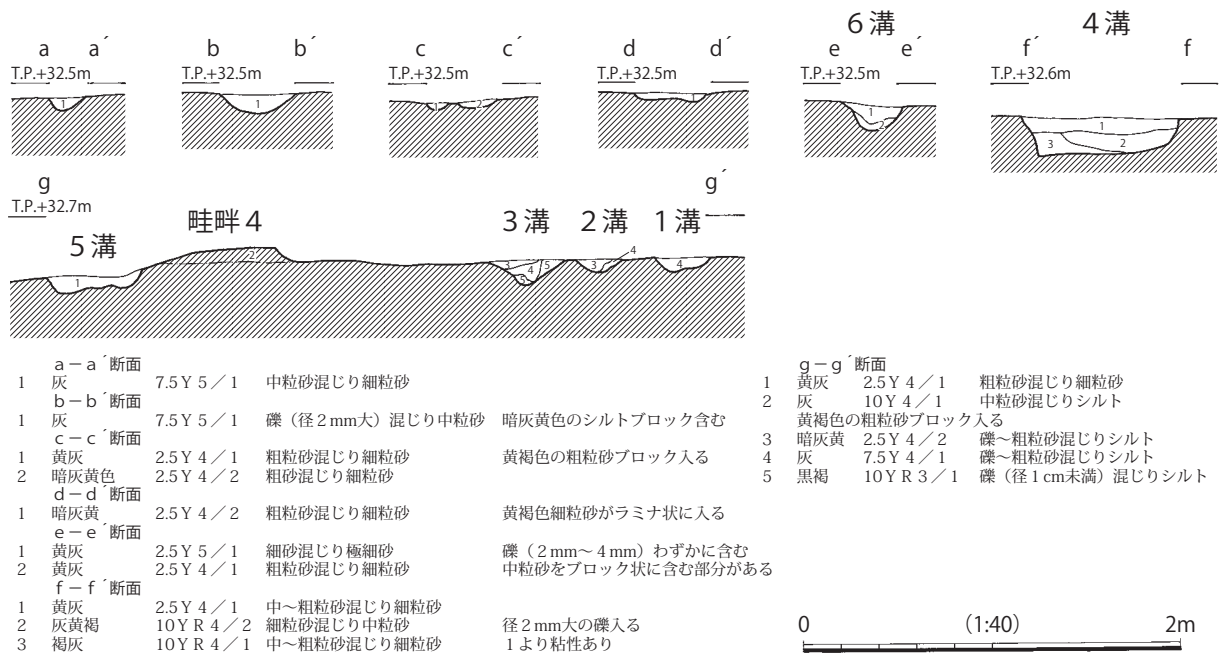


図 32 中世溝・畦畔断面図

から出土した遺物と比較して、やや時期が遡ると考えられるものである。瓦器碗の口縁部が、端部から 2.5 cm の長さでわずかに残存するのみなので確定はできないが、幅 1 mm 程度のミガキが内面に密に施されるのに加え、外面にもそれよりはややまばらだがミガキが施される。口縁端部は丸くおさめられており、器壁の厚さは 3 mm 程度である。おそらく 12 世紀後半から 13 世紀初頭に属するものとみられる。

中世遺構面で検出した溝の埋土からは、内面にわずかにミガキを施した瓦器碗が出土している。中世遺構面で検出した遺構に内包されていた遺物はいずれも細片であるため時期を特定するのは難しいが、高台断面が三角形を呈し、内面のみに施されたミガキもまばらな、退化傾向が顕著な時期のものである。

これらのことから中世遺構面の基盤層は、12 世紀後半～13 世紀初頭を上限とし、13 世紀後半から 14 世紀を下限とする時期に形成されたことがわかる。この造成に伴い、水田の区画がそれ以前より広げられていることから、この段階に水田造成の規模が変化したことがうかがえる。またこの区画が以降の水田区画に踏襲されていることから、中世遺構面が形成された時期を、調査区域の中世における、耕作活動の一つの画期とみなす。

畦畔 1

1 調査区西端で検出した南北方向に伸びる畦畔である。調査区北西隅の落込みの手前で途切れる。南端は住宅造成時に生じたかく乱で削られるが、位置的にみて上私部遺跡（その 2）調査区検出の「畦畔 9」に直交して繋がるとみられる。

畦畔 2・3

2 調査区西端で検出した南北方向に伸びる畦畔である。畦畔 2 と 3 の間がわずかに途切れるが、両者はもともと一連のものにとらえるべきだろう。これら畦畔の西側は壇状に下がっている。またその東側には畦畔に沿うように溝が掘り込まれており、その間の相対的に盛り上がった部分が畦畔 2・3 である。南側の延長部は上私部遺跡（その 2）調査区で検出した「畦畔 1」に繋がる。畦畔の東側に設けられた溝は、水田区画への給排水のために設けられたものと考えられる。

畦畔4

2 調査区中央やや西寄りで検出した、南北方向に伸びる畦畔である。すぐ西側を畦畔に沿わせて、5 溝が掘りこまれている。また西側には1 mほど離れて畦畔4と平行する1～3溝を検出した。それらの溝は切りあっており、わずかに位置をずらしながら掘り直されたものとみられる。南側延長部は位置的にみて、上私部遺跡（その2）調査区で検出された「畦畔5」に至るとみられる。

1～3溝埋土より瓦器・土師器の細片が10点弱出土した。いずれも摩滅の著しい小片だったが、かろうじて実測可能なものが1点あった。5溝の埋土からは瓦器椀と青磁椀の剥片が各1点出土した。

畦畔5

中世遺構面の基盤層が検出されたのは主に畦畔4から西の部分で、この遺構のあたりでは痕跡的にしか認められなかった。したがって畦畔の形状としても不完全な形でしか検出できなかった。南北方向を指向して近接して伸びる1113溝と1114溝に挟まれ、相対的に高く残る部分を畦畔5ととらえる。南側の延長部は上私部遺跡（その2）調査区で検出された「畦畔4」に至るとみられる。

4溝

畦畔4と畦畔2東側の溝を結ぶように東西方向に伸びる。幅33 cm、深さ13 cmで、断面形はU字状である。出土遺物はなかった。

6溝

4溝の南側で、それに平行して東西方向に伸びる溝である。溝の東半部はかく乱で削平されるが、おそらく4溝と同様、畦畔4の手前まで伸びていたものと考えられる。幅83 cm、深さ20 cmで、断面形は皿形である。

遺構埋土より瓦器椀・土師器の細片が出土した。うち、瓦器椀の方は口縁部付近が残存しているが、丸みの無い形態で、口縁部外面に強いヨコナデによる段が生じており、最終段階の形態の特徴を有している。

鋤溝

主に畦畔4より西側の範囲で検出した。幅はおおむね20 cm前後で、深さは5～10 cm程度である。畦畔4と畦畔2・3に挟まれた部分では鋤溝の切り合いからみて、南北方向から東西方向に耕起もしくは畝立ての方向が変化することがわかる。それに対して畦畔2・3より西側では、南北方向から東西方向に変化する。

調査区南西隅検出谷地形（151 落込み）

旧地形で谷を検出した部分は中世以降の水田造成に伴い、徐々にかさ上げされていく。ただ旧地形の影響で周囲よりも低くなっており、この段階の水田区画にも影響を与えたことがうかがえる。前回の調査で検出された「畦畔9」はこの谷の落ち際をかすめるように設置されたものだろう。谷部分の水田耕作土から出土した遺物は必ずしも多くないが、瓦器椀の底部や体部上半、土師器皿などがある。うち、瓦器椀底部の高台は、端部がやや外側に張り出した、断面逆台形状のしっかりしたものだが、13世紀を遡る時期のものではなさそうである。したがって、微高地状の耕地開発と相前後して、この部分の耕地開発も進められたと考えられる。

調査区北西隅検出谷地形

古墳時代堆積土上面から中世耕作土上面にいたるまでには、おびただしい耕作土層の累積がみとめられる（図5・29参照）。耕作土層はほぼ水平に堆積し、V字状の谷断面に呼応して、耕作面の標高が高

くなるにしたがって谷水田の耕作面積も広がった。また耕作面と斜面際、もしくは肩部に溝や畦畔がめぐらされたこともうかがえる。土層断面で見て、中世耕作土下半部分の堆積層が、中世水田面基盤層の堆積時期よりも前なのか後なのか、つまり谷地形の耕作地利用が、水田造成の大規模化の前か後かを、土層断面から判断することはできない。

中世耕作土からの遺物の出土量は必ずしも多くないが、その中で明らかに 13 世紀後半を遡る時期の遺物は出土していない。したがって、微高地状の耕地開発と相前後して、この部分の耕地開発も進められたと考えたい。

中世耕作土の上半部は、明らかに中世遺構面の形成よりも後の時期に堆積したものである。中世の終末期においても、かつての谷地形の影響を受け、隣接する耕作面より 50 cm 近く低い状態だった。近世以降にその窪地をめがけて洪水砂が集まったことにより、隣接する水田面との比高差が解消され、それ以降は一つの区画とされるに至ったようだ。

第4章 遺物

第1節 古墳時代の遺物

1 土器・土製品・石器等

今回の調査で出土した土器の時期的な様相や、器種構成は上私部遺跡（その2）の調査成果として報告された内容とおおむね一致する。古墳時代の遺物は建物群を区画する溝や土坑、調査区北西隅で検出した谷地形の古墳時代堆積層等の他、中世以降の耕作土層からも出土した。

古墳時代遺物の大半を占めるのは須恵器と土師器で、木器がそれに次ぐ他、砥石や鉄滓もわずかながら出土した。須恵器では大半を杯や、甕・壺の胴部片が占める。土師器では甕や甑などの煮沸具が多く出土しており、饗膳具では高杯も多く出土している。鉢は少量の出土にとどまるが、完形品が数点出土した。接合の後、全体の形状がうかがえ、時期比定が可能なものを中心に実測したため、実測図を作成したのは必然的に杯類や、壺・甕の口縁部が多くなった。したがって実測対象からもれた遺物の器種組成や、特徴に関しては、極力文章中に盛り込むよう考慮した。

出土遺物の帰属時期はおおむね6世紀前葉から7世紀初頭に含まれ、その中でも6世紀後半の遺物が大半を占める。ただそれらに混じって弥生土器や古代の須恵器もわずかながら出土しており、それらもこの節で提示する。

時期比定の主たる判断材料となった須恵器杯類は、いくつかの生産地からもたらされたものからなるとみられ、複数の系統がとらえられる。同一遺構から出土した杯類に複数の要素が見られる場合、それを生産地の違いから生じたほぼ同一時期の遺物群とするのか、時期差をとらえるのかで、遺構や遺跡の解釈にも影響が生じることになる。一方、甕・甗・提瓶、壺類では吹田窯や桜井谷窯を包括した千里古窯群の須恵器との共通性を指摘できそうである。したがって出土遺物から遺構の帰属時期を判断する場合は、全体的な遺物の組み合わせにも充分目を配るよう努めた。

実測図に掲載したすべての個体の説明は、観察表の記載をきめ細かくすることでおおむね網羅することとし、ここでは全体的な遺物の様相や、実測図に盛り込めなかった遺物の様相を補足説明することに主眼を置く。

12 竪穴住居（図33）

建物関係の遺構の中では、最も遺物の出土量が多い。実測図に掲載した遺物の他、土師器では甕の破片が2個体分、器種不明の細片が10点強出土しており、それらはいずれも摩滅が著しい。須恵器では杯の破片が5点、甕の胴部片が3点、高杯蓋の破片が1点出土している。杯破片は底部もしくは天井部とみられ、回転ヘラケズリが施されており、ヘラ切り痕跡の残るものは無い。いずれも胎土中に白砂粒が多く含まれる。3点の甕胴部片はいずれも外面には平行叩き、内面に同心円文の当て具痕跡が認められる。そのうち最大径付近とみられる破片には、頸部から肩部にかけて外面にカキメが施されていたとみられる。有蓋高杯の蓋は中央に凹面を呈するつまみの部分のみが残存するものである。

1は底部の延長として受部が作り出されており、底部と受部との区分はできない。立ち上がりは短く内傾し、口径は12cmと小型化傾向がみられる。土師器甕は体部の大半が欠損するが、両者はほぼ同じ器形とみられる。比較的薄手で肩部は丸みを帯び、口縁端部はわずかに上方につまみあげるように丸く

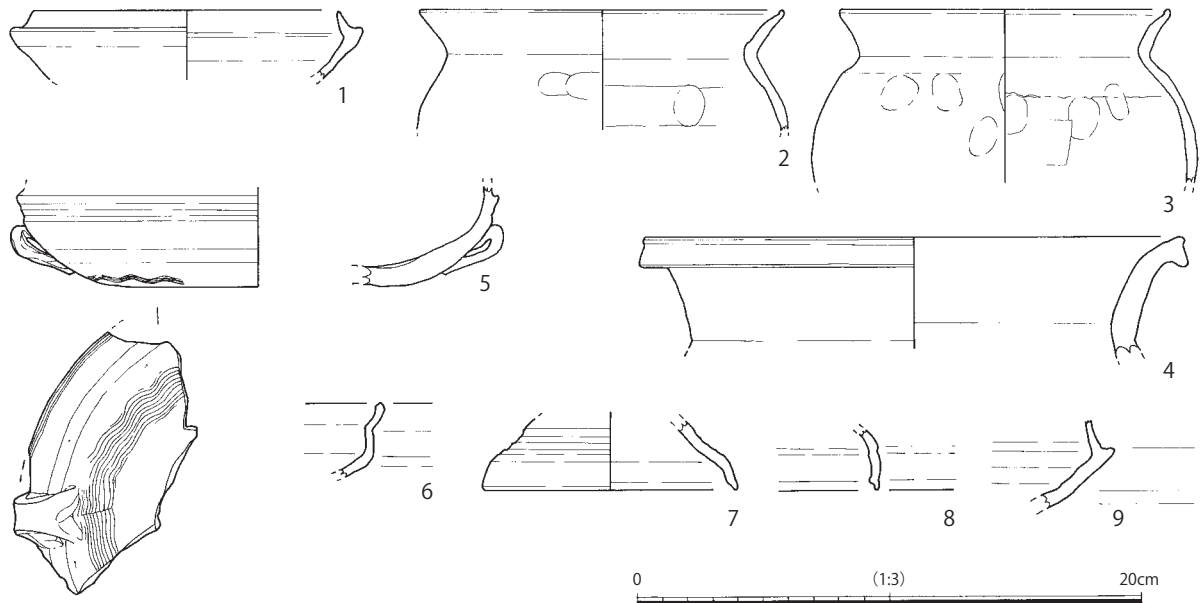


図 33 12 竪穴住居〔1～4〕、298 柱穴（柱穴列 7）〔5〕、〈25〉 柱穴（建物 3）〔6〕、121 柱穴（建物 3）〔7〕、199 柱穴（建物 10）〔8〕、37 ピット（建物 13）〔9〕 出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号

おさめる。以上、この遺構の出土遺物はおおむね 6 世紀後半の様相を呈するとみて大過ないと考える。

建物 3

図化した遺物の他に 120 柱穴と 121 柱穴のそれぞれで、土師器と須恵器杯の破片が 1 点ずつ出土している。121 柱穴出土の須恵器杯では、回転ヘラケズリの範囲は底部もしくは頂部付近のみで、中央にケズリの及ばない部分がみられる。

7 は短脚高杯の脚部片で、裾部で屈曲して段を成すものと見られるが、製作手法の退化が進み、本来は明瞭に作り出されていた張り出しがなだらかな稜線に退化している。脚端部は内側に向けて傾き、わずかに凹面を呈する面が作り出されている。出土遺物がわずかなことに加え、柱穴埋土に含まれる遺物をもって、建物の帰属時期を明確に判断することはできないが、おおむねこれらの遺物は 12 建物出土遺物とほぼ同時期か、それよりやや降る時期の様相を示すと考える。

建物 10

198・199・200 柱穴からいずれも複数の土器片が出土したが、図化したもの以外に器種の判別ができるものはない。8 は器壁が薄くて華奢な印象を受ける。体部外面に凹線をめぐらせて稜線を表現する。口縁端部には内側に傾く凹面が作り出されているが、全体的にみて製作手法には簡略化が認められる。

建物 13

図化した遺物の他、38 柱穴から土師器の細片が 2 点出土するが、いずれも器種等の判別はできない。

9 は口縁部がわずかに残存するにとどまる。底部の延長として受部が作りされており、底部と受部との区分はできない。立ち上がりは短くわずかに内傾し、当古墳時代集落の最終段階の須恵器の様相に類似する。口径復元ができないため時期判断の決め手に欠けるが、いずれにせよ 6 世紀後半を遡るものではない。

柱穴列 7

5 は柱穴列 7 から出土した唯一の遺物である。無蓋高杯の杯部の破片で、内外面に自然釉がかかって

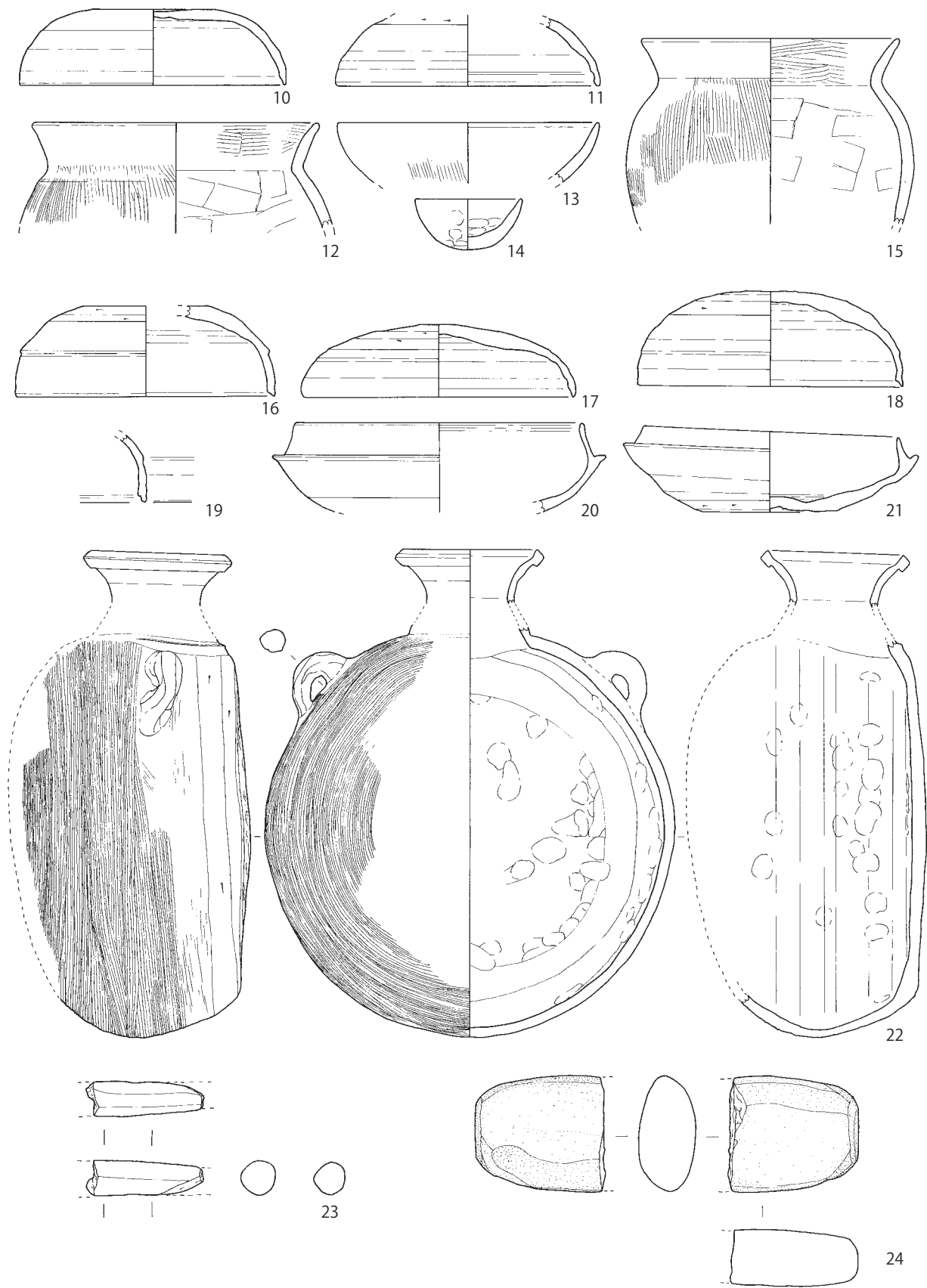


図34 15溝〔10～15〕、20溝〔16～24〕出土遺物実測図 □内は遺物掲載番号

光沢を帯びる。底部付近に一部火ぶくれがみられる。底部は平らで、器高もそれほど高くないと見られ、全体に扁平な印象を受ける。口縁部と体部を画する稜線の下に、浅い凹線を2条めぐらせている。

長方形の粘土板を折り曲げるようにして把手が付けられており、その上端は凹線の下に位置し、下端は底部近くに達する。体部に施された一条の波状文は、その把手よりも下に付されているため、底部の輪郭をなぞるような位置で、真横からはわずかにしか見えない。把手を貼り付けた後に波状文を付しているため、把手の下部が波状文の原体でわずかに削られている。このタイプの高杯に文様が付される場合、通常は把手より上かもしくは把手の位置に文様帯が置かれることを考えると、施紋の位置がややイレギュラーであるという印象を受ける。

15 溝

遺構の規模に比べて出土遺物が多く、実測図を掲載した遺物以外には、細片を含めると須恵器片が6点、土師器片は35点出土している。実測できなかった遺物のうち、須恵器では杯類の破片が2点あり、それ以外は甕の胴部片とみられる。うち1点だけ含まれていた口縁部片は、体部との明瞭な区別のない短い受部から、内傾する短い立ち上がりを有するものである。土師器はおおむね摩滅が著しく、器種特定の困難なものだが、おそらく甕・甕等の煮沸具が大半を占めると考える。

実測した遺物のうち、2点ずつ出土した須恵器の杯蓋と土師器の甕は、それぞれ形態的な特徴が一致しており、比較的時期的なまとまりのある遺物ととらえられる。10・11はいずれも稜線が退化し、本来それが施される部分にわずかな張り出しをもたせるにとどまる。ただ口径はそれほど小型化しておらず、器形も稜線が退化寸前のものと共通する。10は口縁端部に、内側に傾くやや幅広の凹面が作りだされるのに対し、11の口縁部内面には強い回転ナデが施されて幅広の段をなし、端部は丸くおさまられる。また前者には天井部に回転ヘラケズリが施されるのに対し、後者は天井部にヘラ切りの痕跡をとどめることから、後者は前者に比べてより製作上の簡略化が進んでいると言える。14は手づくねのミニチュア土器で、内外面共にユビオサエの痕跡が顕著である。

実測できなかった土器の様相も含めて、これらの土器はほぼ6世紀後半に含まれると考える。

20 溝

実測図に掲載した土器以外にも比較的少量の遺物が出土した。実測遺物以外に須恵器13点、土師器60点があり、大多数を占める後者のほとんどは器種も特定できない摩滅した細片である。そのうち甕・甕等の煮沸具とみられるものが8点で、唯一の甕口縁部片は、口縁端部をわずかにつまみあげるように丸く肥厚させている。須恵器では杯類の頂・底部片が5点、甕胴部片が7点、不明が1点である。甕胴部片の中には外面に平行叩き、内面は当て具痕の擦り消しを行うものが1点含まれる。それ以外の胴部片では内面に同心円文の当て具痕、外面には平行もしくは格子目叩きの痕跡がみられる。

実測図に挙げた須恵器杯のうち最も古い様相を帯びるのは20で、ほぼ水平に張り出した受部からやや内傾して伸びる立ち上がりは長い。口縁端部よりやや下がる内面に浅い凹線をめぐらして、かろうじて段を表現する。これに比べて21は口径が小さく、立ち上がりは短く、全体に粗雑な作りである。杯蓋の16と18は口縁部側をわずかに一段下げて外面に鈍い稜線を作りだす。19は口縁部側を幅広の凹線状にくぼませて、17はその半分にも満たない細い幅の凹線をめぐらせてかろうじて稜線を表現している。つまり稜線のみに着目すれば、16・18→19→17の順に退化傾向が進む。16と18は天井部が丸みを帯びる点でも共通するのに対し、17は器高が低く扁平な印象を受ける。ただ口径を比較すると16・18と17とでは、ほぼ同じか前者の方が小さく、回転ヘラケズリの範囲も前者の方が狭い。

いずれのタイプにせよ、口縁端部には沈線をめぐらせたり凹面状にくぼませたりして、かろうじて段を表現している。23は棒状の土製品で、用途は不明である。24は硬質な石材で、特に使用痕は認められないが、ちょうど手のひらにおさまる大きさで、形も整っていることから、何らかの目的で意図的に持ち込まれたものの可能性がある。

20溝の南側の延長部分は上私部遺跡（その2）の調査で1090溝として調査され、遺物も報告されている。それによると比較的まとまった量の遺物^{註1)}が出土しており、杯蓋では稜線を持つものと稜線のないものがあるが、稜線が無く、かつ小型化したものは認められない。杯身では口径12cm前後で立ち上がりの長いものと、口径13～14cmで立ち上がりが短く全体に扁平なものの二者がみられるとある。実測図を比較すると前者は図34の20と比較的器形が似るが、今回出土したものに比べて底部から体部にかけての立ち上がりがやや直線的で、わずかに作りが粗い印象を受ける。

以上を勘案すると、20溝の埋土に含まれる遺物にはやや時間幅を持つものが含まれるとすることができる。ただいずれにせよ、6世紀の中でとらえられるものとする。

21 溝

比較的多量の土器が出土した。新旧2時期の溝の重なりが認められるが、出土遺物から明確な時期差はとらえにくい。須恵器杯類の形態からとらえられる時期幅は6世紀中頃～7世紀初頭にかけての期間に相当すると考えられる。また後述する、21溝が埋まった後に掘削されたと考えられる、22井戸出土遺物との時期差も、土器の形態からだけでは明確にはとらえられない状況である。

実測した土器以外では、細片を含めると土師器109点、須恵器31点が出土した。前者が大半を占めるが、うち62点が器種を特定できない摩滅した細片で、それ以外はほとんどが甕・甑等の煮沸具が占め、杯もしくは高杯とみられるものは1点だった。須恵器は杯類が8点、甕の胴部片が18点、器種不明の細片が5点である。杯類には稜線の無い杯蓋1点、ヘラ切り後無調整のもの1点が含まれる。甕胴部片では外面に平行叩き、内面には同心円文の当て具痕跡をとどめるものが大半を占めるが、内外面とも粗い擦り消しを施すもの、外面に格子目叩きの痕跡をとどめるもの、平行叩きの後カキメを施すもの、逆にカキメの後平行叩きを施すものが少数ずつ見られた。それらの内面には同心円文の当て具痕跡がみられ、内面の当て具痕跡のみを擦り消すものはなかった。

実測図に挙げた須恵器杯類をみると、杯身は薄手のものとやや厚手のものに分けられる。さらに薄手のものには底部から外方へ直線的に伸びる体部の延長部分を受部とし、内傾する短い立ち上がりを作るもの（36・40）と、体部から口縁を内側に逆「く」の字形に折り曲げるようにして内傾の著しい短い立ち上りを有するもの（30）の2者に分けられる。40は底部が平坦で、ヘラ切り後、底部の中心部分に「の」の字を書くような、しるし程度の回転ナデが加えられている。一方、30は口縁部径が小さく受部および立ち上がりの簡略化が進むが、底部外面の回転ヘラケズリは省略されない。

杯蓋では28と31が薄手の作りで、前者は外面にやや幅広の凹線を一条巡らせてかろうじて稜線を表現するが、後者は稜線をもたず扁平である。これら薄手の杯身と杯蓋は、形態的な特徴からみて近い時期のものとしてよいだろう。口径を比較すると31は30のタイプと、28は36・40のタイプとセットをなすという想定も可能である。杯身のみを見た場合、口径の縮小と製作手法の簡略化は一概にリンクしないため、いずれかの要素をとらえて形態の新旧を判断することはできないが、杯蓋とのセット関係も考慮すると、30の方がやや時期が降る可能性があるだろう。いずれにせよこれらの杯類は当遺跡出土の須恵器杯の中では、最も新しい様相を帯びるものであると言えるだろう。

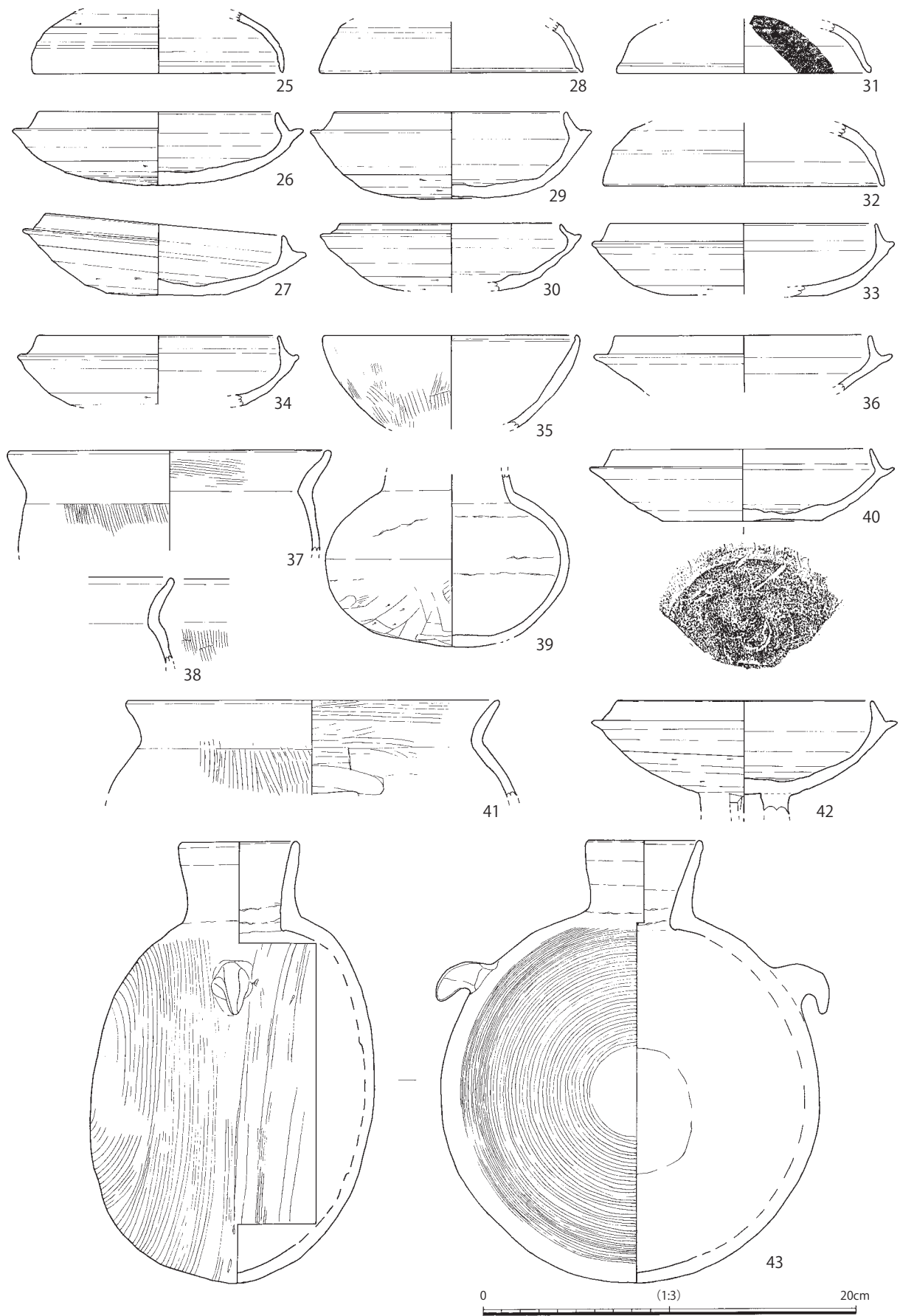


図 35 21 溝・22 井戸 [25 ~ 27]、21 溝 [28 ~ 43] 出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号

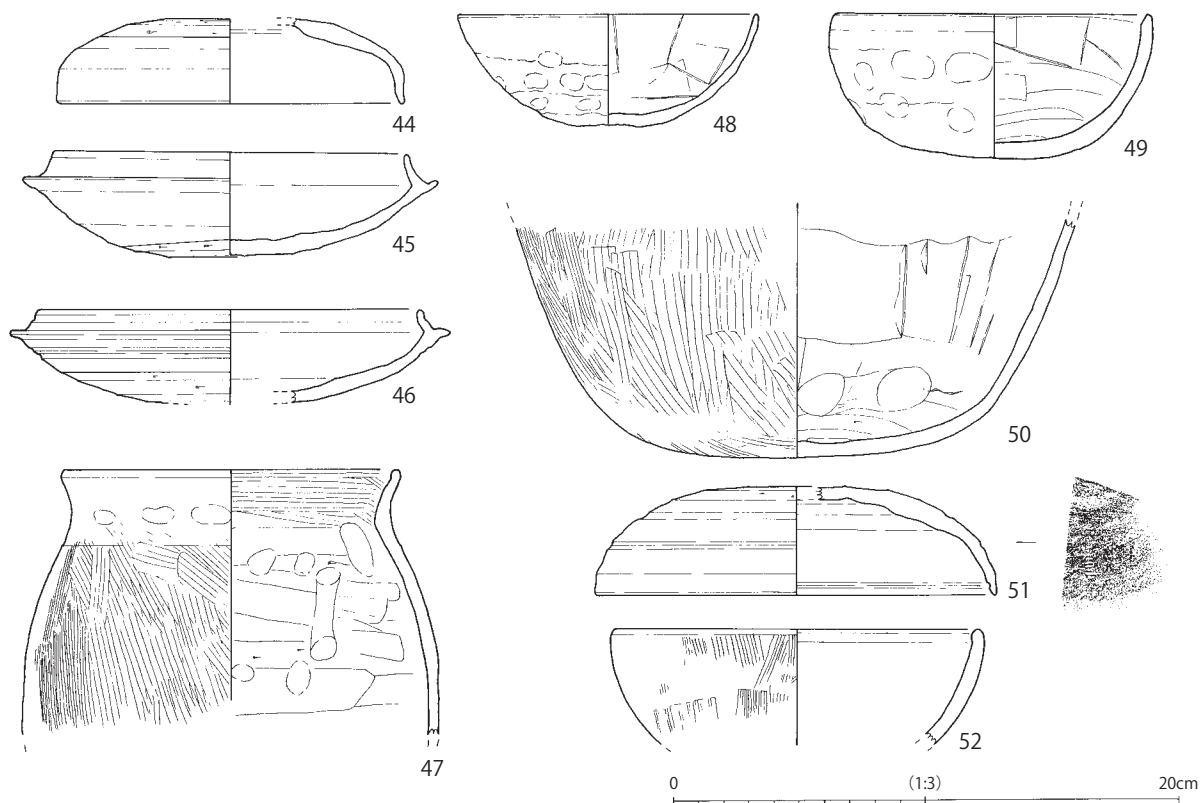


図36 22井戸〔44～50〕、32溝〔51・52〕出土遺物実測図 □内は遺物掲載番号

やや厚手の杯身のうち、33と34は全体が扁平な形状や、受部および立ち上がりの作り出し方、整形方法にいたるまで、非常に類似性が高い。これらは、体部の器壁はやや厚ぼったいが、受部は器壁の一部をわずかに水平方向に引っ張り出して作り出したような形状である。また短く直立する立ち上がりは薄くて華奢な印象を受ける。内面においては体部と立ち上がりの境界が判然としない。有蓋高杯42の杯部の形態も、これらと類似性が高いと考える。一方、29は底部から口縁部にいたるまで、全体に器壁が厚く、底～体部は全体に丸みを帯び、回転ヘラケズリも比較的丁寧に施されるが、口径は12.3cmと小さい。22井戸との掘り分けが厳密にできず、結果的には21溝遺物と混ざって出土した遺物を21溝・22井戸出土遺物として掲載したが、その中の杯身26・27は29の形態的特徴を残しつつも全体に器形が扁平になり、立ち上がりの退化傾向も進んでいる。これらは29に後続して現れる形態とみられる。

土師器甕では全体の形状がわかるものはないが、口縁端部を丸くおさめるものと、ややつまみあげるようにして丸くおさめるものの2者がある。

43は口縁が直立するように立ち上がり、胴部は円形を呈して両面共にふくらみを持ち、把手は鉤状を呈する。この器種では最終段階の形態ととらえられる。

前章でも述べたように21溝出土遺物は、上私部遺跡(その2)の「136溝」の遺物群と様相が一致している。したがってその前身の「138溝」を再掘削した段階で、さらに北側に延長された部分が21溝であると考えられる。

22井戸

実測図にあげたもの以外では土師器4点、須恵器3点がある。前者は甕が1点と器種不明品3点、後者はすべて甕胴部片である。その中に、外面に格子目叩きの痕跡、内面は当て具痕の痕跡を丁寧に擦り

消したものが認められた。遺物の出土数はそれほど多くないが、その中に点数の限られる土師器杯が完形で2点出土したのは特筆される。

須恵器杯類はすべて薄手のもので、前述した21溝出土の薄手の杯類と同様のものである。22井戸が21溝の埋積後に掘削されていることを考慮すると、厚ぼったい形状の杯が姿を消し、極めて器壁の薄い粗雑な作りの杯のみが残るのが、集落の最終段階の須恵器杯類の様相ととらえ得る。46は口径が15cmあり小型化傾向は認められないが、きわめて短い立ち上がりは内傾化が著しい。また胎土は砂粒の混入の著しい粗雑なものである。口径が小型化する杯蓋44は、本来稜線が作りだされる場所にやや肩をもたせているが、稜線は退化している。土師器甕47・50は大きさが異なるが、体部外面に粗いハケが明瞭に残り、内面には横方向のケズリとユビオサエの痕跡が顕著に残る点は共通する。

32 溝

実測図を掲載した遺物の他に土師器片が9点、須恵器が3点出土している。土師器は甕と、杯もしくは高杯片が各1点でそれ以外は器種不明の細片である。須恵器は杯類の破片が2点、甕の胴部片が1点である。

51は外面に凹線をめぐらせてかろうじて稜線を表現する。また口縁部内面にも凹線をめぐらせて口縁端部の段を表現している。体部外面に、ハケ状の工具を押し当てたような痕跡がわずかに残る。52は口縁端部をわずかに肥厚させて丸くおさめる。

29・30・127 溝

それぞれが重なるように切りあっており、厳密に掘り分けることができず、複数の溝の遺物が混ざる場合もあったため、ここでは図37と図38を通覧しながら出土遺物の様相にふれたい。また上私部遺跡（その2）の調査で、これらの溝の南側延長部を調査しており、その際の出土遺物も紹介されているので、それらも併せて概観したい。

これらの溝からの出土遺物を一覧すると、6世紀全般の遺物が出土しているが、21溝や22井戸で見られる集落の最終段階にあたりとみられる器壁のきわめて薄い、粗雑化の進んだ須恵器杯はほとんど認められない。したがってこれらの溝は、集落の最終段階にはその機能をほぼ終え、痕跡程度のものになっていたと見て問題ないと思う。

〔29溝〕実測図を掲載した遺物以外では土師器が16点、須恵器が9点出土した。前者には甕片が1点含まれ、それ以外は器種が特定できない破片である。後者は高杯の脚基部片が1点、杯類の破片が3点、甕口縁部片が1点、甕胴部片が4点である。甕胴部片では外面に平行叩きの後にカキメを施し、内面に同心円文の当て具痕を残すものが1点、それ以外は外面にカキメ調整後平行叩きを施し、内面には同心円文の当て具痕跡を残す。後者には内面に粗い擦り消しを施すものが1点含まれていた。

67は内傾ぎみに伸びる立ち上がりがやや短いものの、口径は14cmあり、受部や立ち上がりの作り出し方に顕著な簡略化は認められない。68は口縁端部からやや下がった外面に粘土を貼り足して、口縁端部全体を肥厚させたように見せている。

70は残存部を見る限り、表面は摩滅してかろく光沢を帯びる。もとは平面が楕円形の礫とみられ、長軸方向の先端には敲打痕が認められる。礫はこのほかに72があるが、こちらは硬質な石材で、使用痕は特に認められない。ただちょうど手のひらに収まる大きさで、何かに使う目的で人為的に持ち込まれた可能性はあると考える。

この溝の延長部と考えられる、上私部遺跡（その2）調査時に検出された「842溝」では、67と同

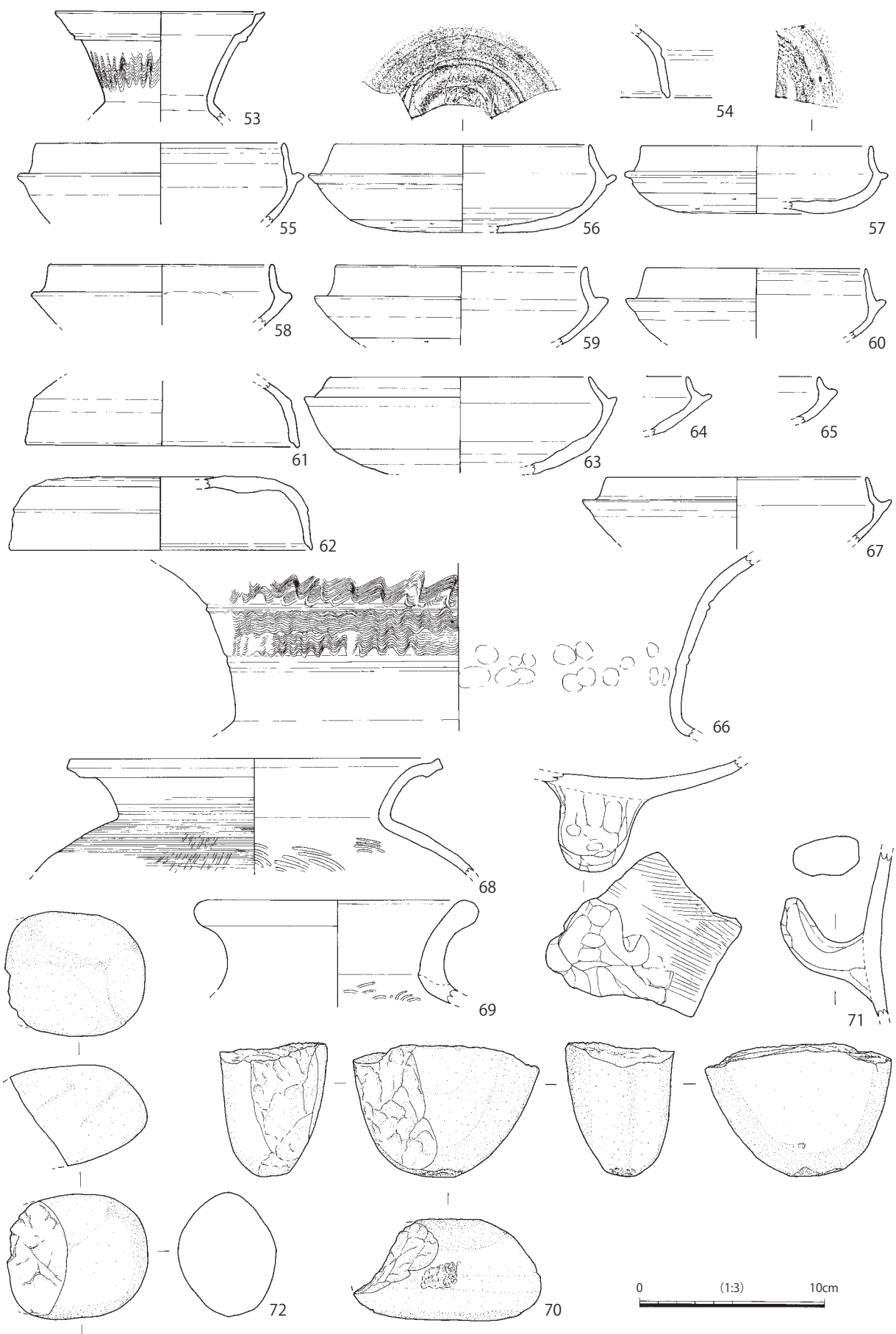


図 37 29・30溝 [53～60・66・72]、29・30・127溝 [61～65・71]、29溝 [67～70] 出土遺物実測図 □内は遺物掲載番号

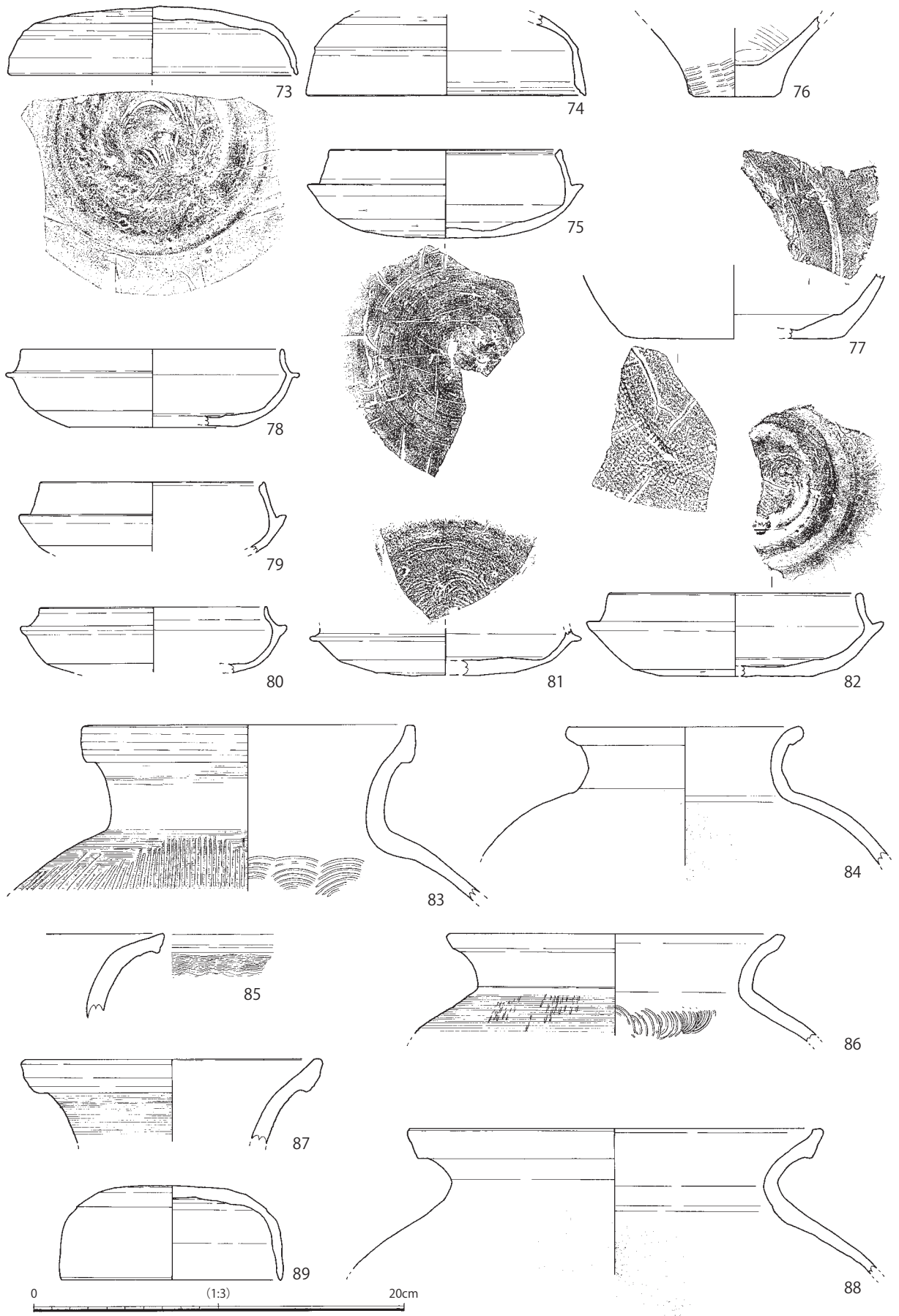


図38 30溝 [73~84]、26溝 [85~88]、154溝 [89] 出土遺物実測図 □内は遺物掲載番号

タイプの須恵器杯の他、稜線を失って中央部にへラ切り痕を残す杯蓋や、口縁が小型化した杯身が出土しており、存続期間の長さが想定されている。ただその中で比較的古い様相をもつとされる杯類に関しても、口縁端部に段を作りだすものはみられないことから、6世紀中頃から後半の範疇でとらえられると考える。

〔30溝〕南北方向を指向する29・30・127溝の中で、30溝は最も遺物の出土量が多かった。したがって溝ごとに掘り分けることができなかつた遺物に関しても、30溝の土器組成の様相が最も強く反映されていると考えられる。実測遺物以外では土師器が35点、須恵器が52点で、他の遺構とは異なり、須恵器の占める比率が大きい点も特筆される。土師器は甕・甑等の煮沸具とみられる破片が12点で、それ以外は器種不明である。須恵器は杯類が31点、甕胴部片が16点、無蓋高杯1点、壺1点、器種不明が3点である。胴部片では外面に格子目叩き、内面には同心円文の当て具痕の残るものが8点、外面に平行叩き、内面同心円文の当て具痕の残るものが2点、外面は平行叩き痕で内面を丁寧に擦り消したものが5点、それ以外は外面を平行叩きの後にカキメ調整、もしくはカキメ調整後平行叩きで、内面同心円文の当て具痕を残すものであった。

他の遺構に比べて、内面の当て具痕跡を擦り消すものの比率が高いと言える。さらに杯蓋では稜線が明瞭に作り出され、杯身では受部が明瞭で立ち上がりが長く、口縁端面に段を作り出すなど、比較的古い様相を帯びる遺物が大半を占める。全体に扁平で立ち上がりが短く、やや粗雑なつくりの杯身も3点含まれていたが、口径が小型化するには至っていないものとみられる。杯類の天井部もしくは底部のみが残存するものについても、回転へラケズリを省略したものは見られない。

実測図を掲載した遺物をみても、杯身ではおおむね底～体部の形状は丸みを帯び、やや内傾しつつ上方に長く伸びる立ち上がりをもつ。特に75・79は口縁端部に退化傾向はみられるものの、段が作り出されており、古い様相を残す。底部が平坦で立ち上がりがやや短いもの(78・80)についても、ほぼ水平方向に短く伸びて体部と明瞭に区別される受部がつくりだされ、腰が張る特徴的な形態を呈する。81もおそらくこれと類似する形態ととらえられるだろう。さらに図37－56・57もこのタイプに含まれるとみられることから、この時期の須恵器杯身に一定量含まれる型式ととらえられる。

74は明瞭な稜線が作り出され、やや肥厚する口縁端部には凹線を巡らせて、退化傾向のある段が表現されている。前述したように実測できなかつた遺物中でも、杯蓋ではこのタイプが主流だが、73のように扁平で屈曲部分に凹線を巡らせてかろうじて稜線を表現したのも認められる。ただその口縁端部には明瞭な段が作りだされる。74のように天井部が平坦で全体に扁平な器形は、稜が退化し、口径が小型化するものにはよくみられる。しかし図37－62のように、稜線が明確に作り出されるものの中にも平坦な天井部を有するものがあることから、73もこのタイプの流れをくむものと理解できる。

このように須恵器の杯類を概観すると、全体に今回の出土遺物の中では古相を示す。須恵器杯類の内面に当て具痕の残るものが少量含まれる点も、これと合致する。また平底鉢(77)も出土している。

83は口縁端部付近を内湾気味に直立させ、口縁端部からやや下がったところに粘土を貼り足して、口縁部全体を肥厚させたようにみせるもので、体部外面はカキメ調整の後に平行叩きを施す。75は底部外面に格子状のへら書きを施す。76は転入品とみられる弥生土器の底部で、表面は全体に摩滅する。

30溝の南側延長部と考えられる「844溝」出土遺物に関しては型式のまとまりが強く、29溝の南側延長部に当たるとみられる「842溝」よりも古い様相をもつと報告されている。時期判断に有利な須恵器杯類を中心にその内容を具体的にあげると、須恵器杯蓋は口径15cm前後のものが主流で、凹線

状に稜線を表現するタイプと、不明瞭な段や稜で稜線を表現するタイプがあるとのことである。また杯身は口径 13 センチ前後で、やや内傾する立ち上がりを有するとのこと、今回の出土遺物の様相とおおむね合致する。

〔127 溝〕今回、127 溝単体の出土遺物として遺物を取上げることはできなかったが、29・30・127 溝の弁別ができない状態で取り上げた遺物の中に、29 溝もしくは 30 溝単体で取り上げた遺物の中には含まれない時期のものがある。それは立ち上がりが受部とほぼ同じ長さまで短くなり、全体の作りも粗雑化した 64・65 のタイプの須恵器杯である。実測できなかった遺物の中にも、これらと同時期のものが他に 2 点認められた。これらは 21 溝や 22 井戸で見られるように、上私部遺跡で検出される古墳時代集落において最終段階の時期のものとして位置づけられる。これは 127 溝が 29 溝や 30 溝を切って成立していることとも矛盾しない。換言すれば、127 溝は南北方向の区画溝が主たる役割を終えた後に成立する遺構ととらえる。

以上、29・30・127 溝出土の土器の様相を概観した。最後に 29 溝と 30 溝との弁別ができなかった 66 についてふれたい。これは大型の甕の頸部で、近接して平行する 2 条の凹線に区画された中に、波状文を施す。2 条の凹線の間には帯状に残る部分は、凸帯の簡略表現ととらえられる。本例のように凸帯が退化する段階では、その間に付される文様も簡略化し、無文化する場合もあるのに対し、この場合は複数の波状文を重ねて区画全体を文様で埋めている。このような部分に土器製作上の古い様相を残す点があるが、この地域の土器の一つの特性を示しているかもしれない。

26 溝

実測図に挙げている遺物以外に、土師器 8 点、須恵器 45 点が出土した。前述した南北方向溝群と同様、須恵器が出土遺物の大半を占める点の特筆される。それらの組成をみると、須恵器は杯類が 12 点、甕胴部片が 24 点、壺 1 点、器種不明が 8 点である。杯類の天井ないし底部中央部分には、ケズリが及ばずヘラ切りの痕跡が残るものが 3 点含まれる。甕胴部片では外面に平行叩き、内面に同心円文の当て具痕を残すものが 4 点、外面に格子目叩き、内面に同心円文の当て具痕を残すものが 3 点、外面に平行叩き、内面は当て具痕の擦り消しを行うものが 2 点あった他、外面に叩き調整とカキメ調整を併用するものがみられる。叩きとカキメ調整を併用するものでは、平行叩きの後にカキメを施すものと、その逆がみられるが、後者の点数の方が上回る。それらのなかに、内面の当て具痕跡を擦り消すものは認められなかった。

実測図に上げた 85～88 はいずれも甕の口縁で、これまで見たものと同様、口縁端部付近を内湾気味につまみ上げ、下端部にやや粘土を張り足すなどして口縁部全体を肥厚させたような効果をもたせている。ただ口縁端部全体に粘土を貼り足して、肥厚させたものは認められない。

154 溝

実測図にあげた遺物の他に須恵器 7 点と土師器 14 点が出土した。組成をみると須恵器は杯類と甕胴部片が各 3 点、壺 1 点で、土師器は甕が 5 点、器種不明が 9 点である。須恵器杯には底部もしくは天井部にヘラ切りの痕跡が残るもの 1 点が含まれる。

実測図に挙げた 89 は完形品で、横倒しの状態で検出された。天井部に回転ヘラケズリが施され、口縁端部は丸くおさめる。

1172 土坑

遺構埋土 I～VI 層と、中心に須恵器大甕を据えた小土坑部分の埋土、須恵器大甕内の埋土は遺構から

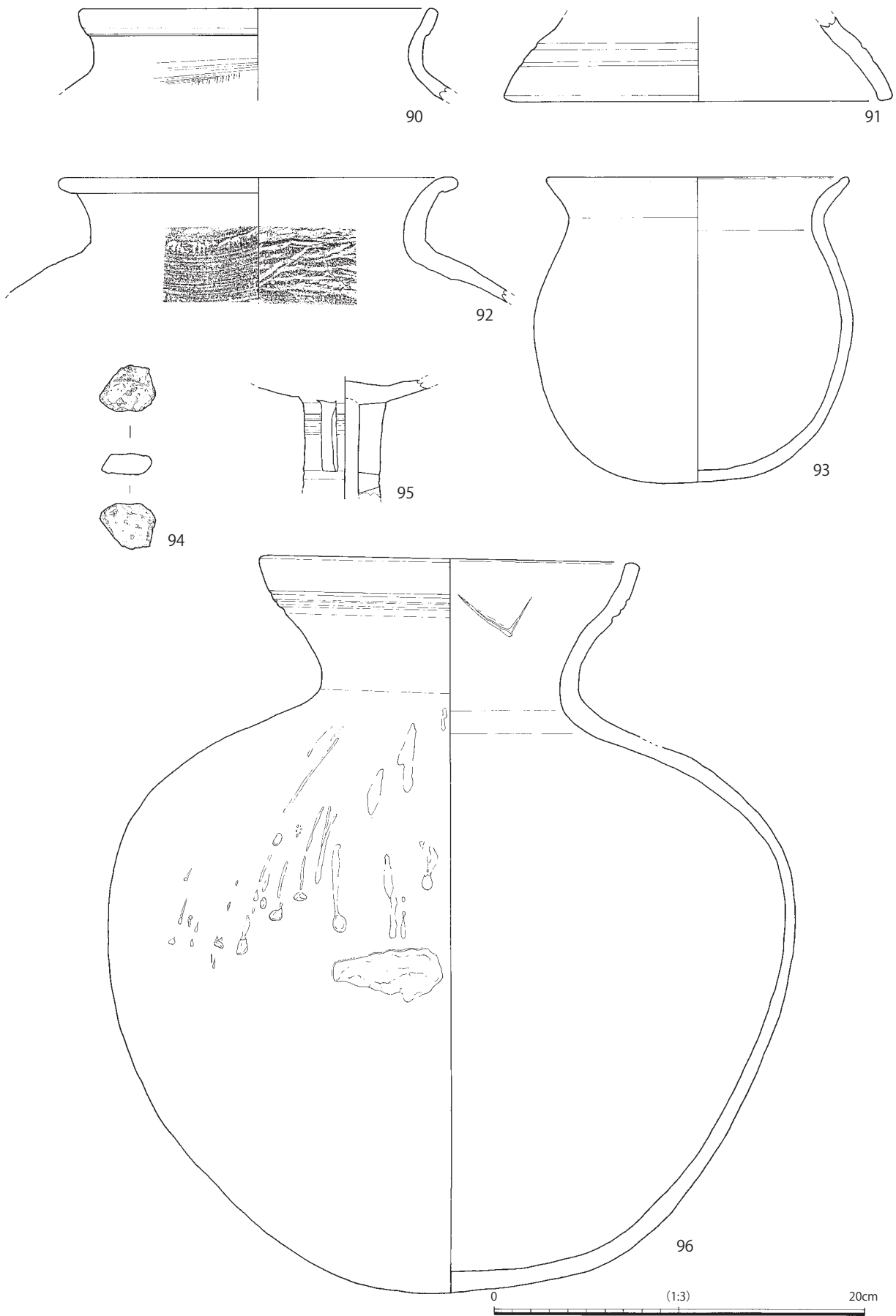


図 39 1172 土坑 [90 ~ 96] 出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号

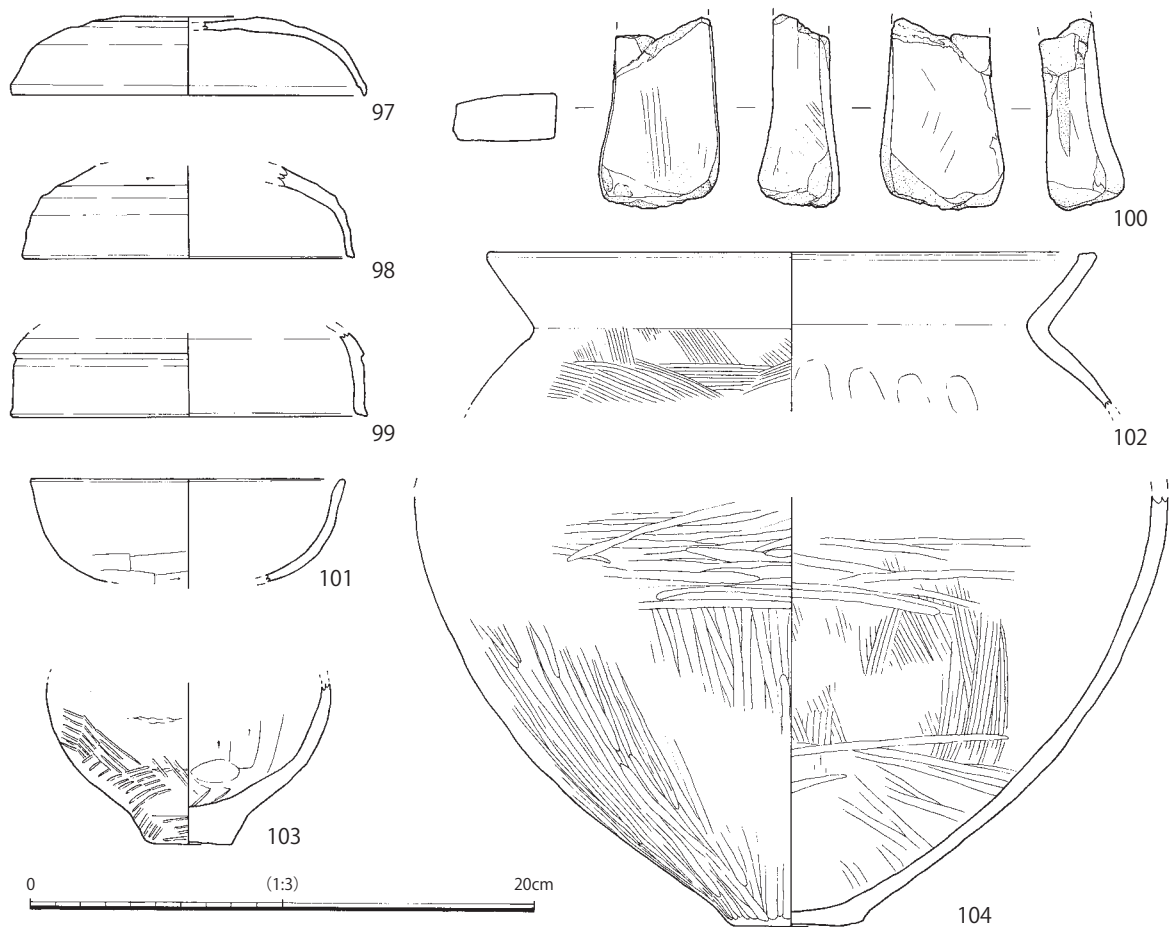


図40 14土坑〔97〕、49土坑〔98〕、278土坑〔99〕、1009土坑〔100〕、153土坑〔101・102〕、266土坑〔103・104〕出土遺物実測図 □内は遺物掲載番号

取上げたあと、水洗選別を行い、さらに微小遺物の取り上げに努めた。遺構埋土からは多量の土器片が出土したが、その大半はⅠ～Ⅳ層から出土したもので、Ⅴ層以下で取上げた遺物は、ほぼ水洗選別中に検出したもので占められる。それらはおおむね、微小な炭化物もしくは最大辺2 cm程度の摩滅した土師器の小片が占める。

水洗選別中に検出した微小な土器片を除くと須恵器57点、土師器81点が出土した。その内訳は須恵器で見ると甕の胴部片が45点、杯類が4点、壺1点、器種不明が7点である。甕胴部片には、格子目叩きの後で、粗いカキメを施しており、明らかに同一個体と判断できるものがあった。それらは2個体分あり、破片の点数で言うと20点弱である。ただこれらにしても接合するものは5～6片と限られるのに加え、口縁部や底部の破片は含まれない。土師器では甕・甕等の煮沸具とみられるものが15点、高杯3点、甕1点で、それ以外は器種不明である。このほかに、被熱して風化の進んだ花崗岩礫1点、窯片とみられる高熱をうけて発泡した土器片も1点含まれる。

実測図に挙げた遺物を見てもわかるように、出土点数は多いものの全体の形状のわかる土器は2点にとどまる。また遺物の大半は遺構埋土上部から出土していることをふまえると、出土遺物の大半はこの遺構が機能を失ってから廃棄されたものと考えられる。

90・92は口縁部外面に粘土をわずかに貼り足したり、口縁部を外方に折り返したりして、口縁部に

変化をつけている。96 は口縁部付近をやや張り出させるように湾曲させ、変化部分に3条の凹線を巡らせるが、口縁端部は直上気味に丸くおさめるのみで、形態変化のメリハリが弱い形状を呈する。

同様のことは91・95についても当てはまる。後者は一段目と二段目の透かし窓の間に施された凹線が極めて浅く、形骸化している。93 は軽く胴部が張り、平底気味の底部を有する。

14 土坑

実測図に挙げた遺物の他に、須恵器片4点と、土師器細片を1点出土した。土師器は器種不明の細片で、須恵器は全て杯類の破片である。後者には先端の鈍い稜線がわずかに残存する杯蓋が1点含まれる。

97 は稜線がなく、天井部中心にヘラ切り痕跡を残し、器壁の薄い扁平な形態だが、口径は小型化しておらず、口縁端部に退化した段を有する。小型化する直前の形態ととらえられるが、いずれにせよこの段階まで口縁部端面に凹面を残すものがある点は、地域的な特性の一つととらえられる。

49 土坑

実測した遺物以外では、須恵器片3点と土師器片4点が出土した。前者は杯類2点と器種不明品が1点とからなり、後者はすべて器種不明である。

98 は口径がやや小型化し、稜線も退化寸前だが、天井部の2分の1強まで回転ヘラケズリを施し、口縁端部にわずかに面を作り出すなど、集落最終段階の須恵器の様相に合致しない点も有する。6世紀後半における杯蓋の形態的なバリエーションの中に含まれると考える。

278 土坑

実測図掲載遺物のほかに10点程度の土師器片と須恵器1点が出土している。いずれも細片だが、土師器はおそらく甕・甑等の煮沸具と考えられる。99 は断面V字状の幅広の沈線を一条めぐらせて、稜線を表現している。製作手法にやや簡略化傾向がみられるが、口縁端部の面はしっかり作りだされる。

153 土坑

実測図に掲載した土師器2点以外で、須恵器は極めて摩滅した器種不明品が1点あるだけで、それ以外はすべて土師器片である。101・102 以外では2個体の高杯片、1個体の甑片、1個体の甕片があるが、それらはすべて残片で、器種不明のものも10点弱含まれる。

実測図掲載遺物も含め、廃棄されたものと考えられる。出土遺物はおおむね極めて摩滅しているが、102 には比較的明瞭に調整痕跡が認められる。

266 土坑

いずれも弥生時代の土器だが103 は後期、104 は中期後葉の土器である。古墳時代を遡る時期の遺物であるが、両者は明らかに帰属時期が異なる。また104 は比較的器壁の残存状態が良く、調整痕は明瞭に残るが、103 は摩滅が著しく器壁の剥落が進んでいる。

いずれにせよ両者は同時並存するものではないので、後世の人間が何らかの意図でこれらの遺物を持ち込み、併置した可能性が高いと考える。

調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層

土器・木器が多数出土した。土器に関しては器種が豊富なのに加え、完形品も数点含まれる。

実測遺物以外の出土品をみると土師器152点、須恵器72点と前者が多数を占める。そのうち土師器の組成は甕・甑等の煮沸具が65点、高杯が16点、杯2点、壺1点、それ以外は器種の特定ができなかった。煮沸具の割合が高いのは他の遺構と同様だが、それに加えて高杯の占める割合が高い。須恵器は甕の破片が45点、杯類が14点、高杯3点、壺・甕各1点で、それ以外は器種の特定ができなかつ

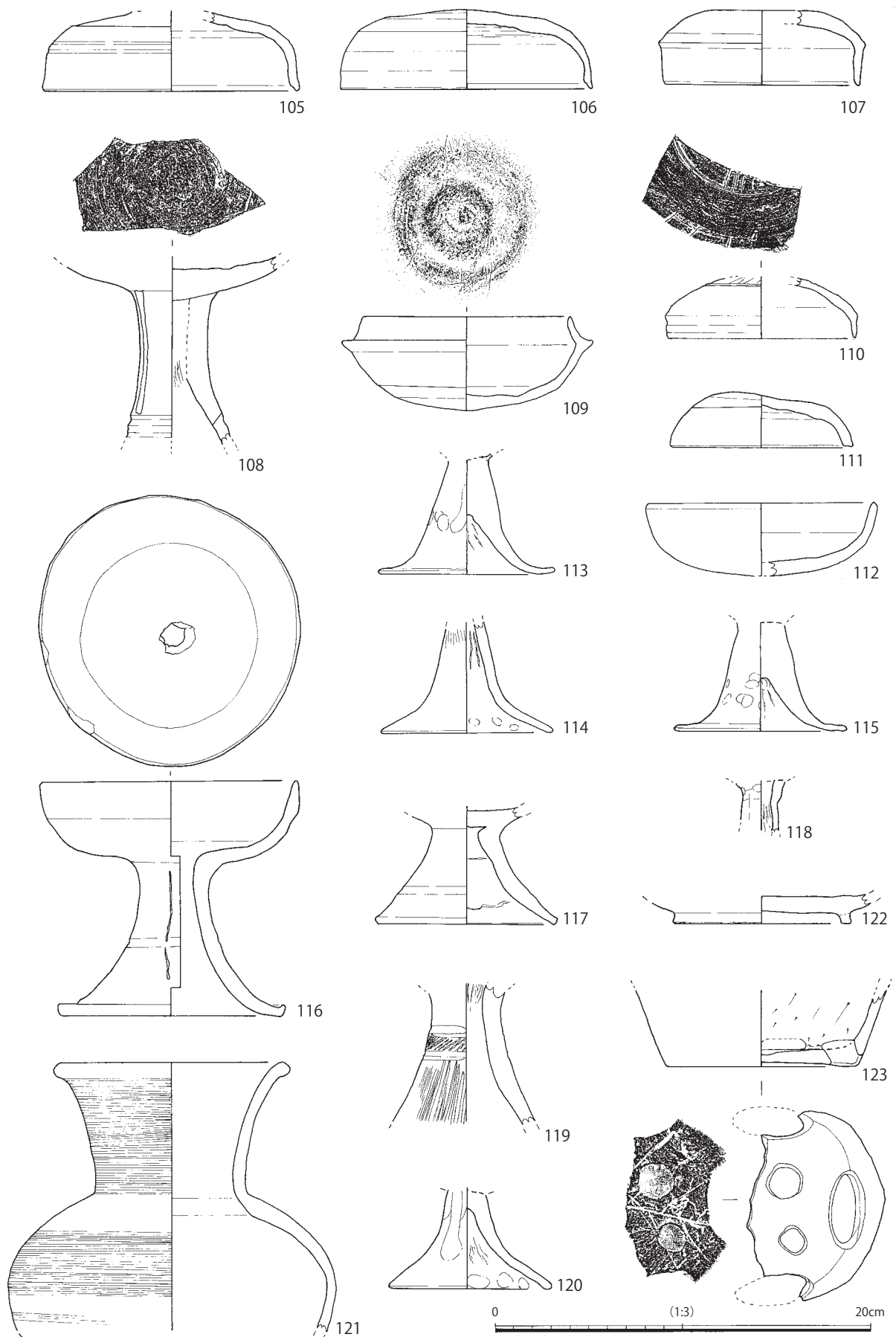


図 41 調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土遺物実測図

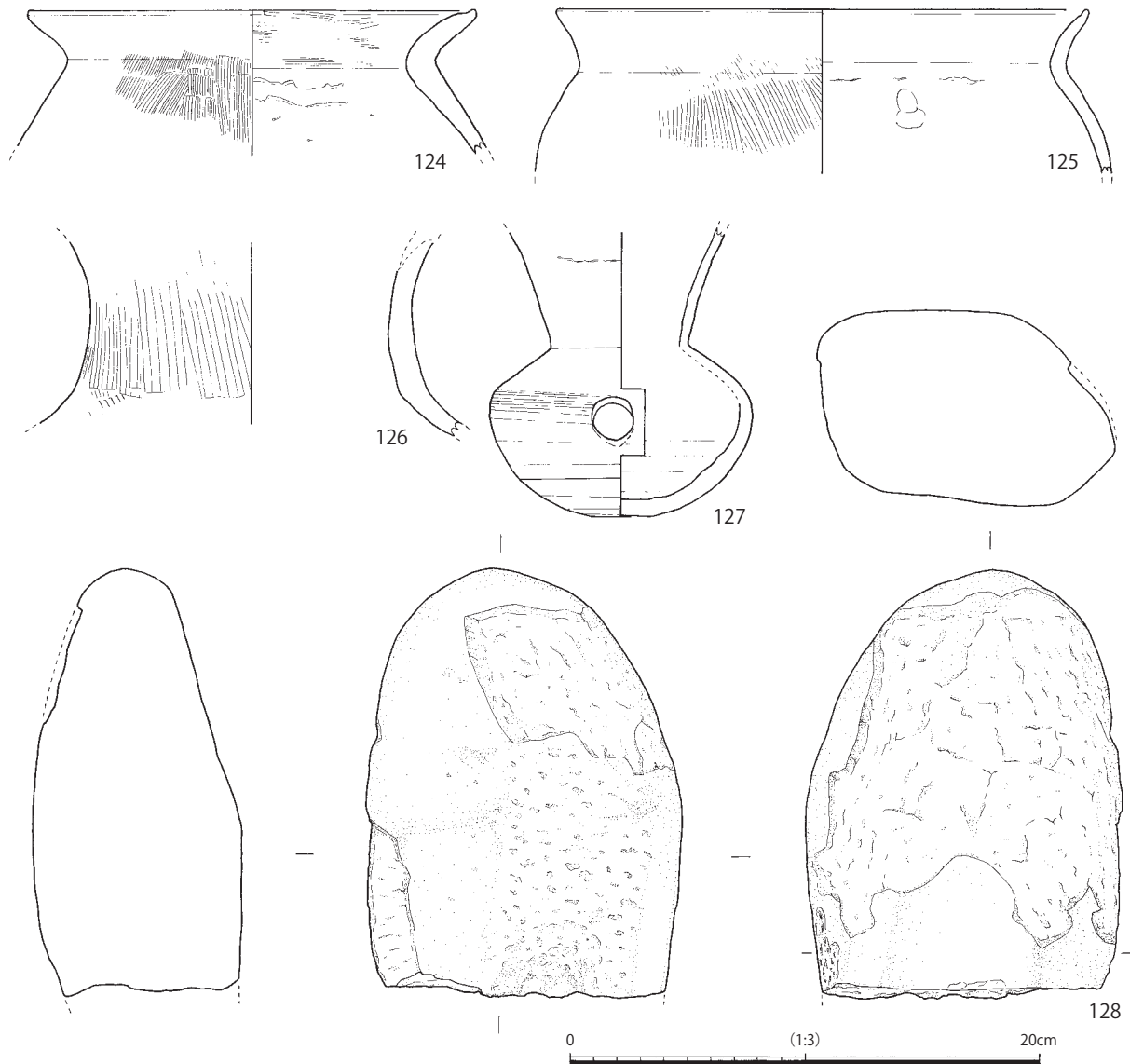


図 42 調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土遺物実測図

た。須恵器甕胴部片では外面に平行叩き調整のみ、もしくは叩き後カキメ調整を施し、内面に同心円文の当て具痕跡を残すものが過半数を占めるが、内面に擦り消しを施すもの9点、内外面ともに擦り消しを施すものが1点と、擦り消し調整を施すものも一定量認められた。これらのほかに、加工・使用痕跡の認められない被熱した花崗岩礫が1点出土した。出土した木製品はすべて実測し、図面を掲載した。

次に実測図掲載遺物を中心に若干の説明を加えたい。107は須恵器杯蓋の製作手法によって作られた土師器である。にぶい稜線を作り出し、口径は10.3cmと小さい。105と106の器形は類似するが、前者は天井部から体部への屈曲箇所には2本の平行する凹線を巡らせて稜線を表現し、後者には稜線がない。残存箇所がわずかなため、実測しなかった遺物の中に、これらとは対照的に比較的明瞭な稜線を持ち、口縁端部に段を作り出すものが1点認められた。109は口径が11cmと小型であるものの、立ち上がりは比較的しっかりしており、底～体部の形状も丸みを帯びる。残存箇所がわずかなため実測しなかったものの中に、立ち上がりの短い粗雑化の進んだ杯身や、中央部にヘラ切りの痕跡を残す、集落最終段階の須恵器杯の様相を帯びるものも認められる。

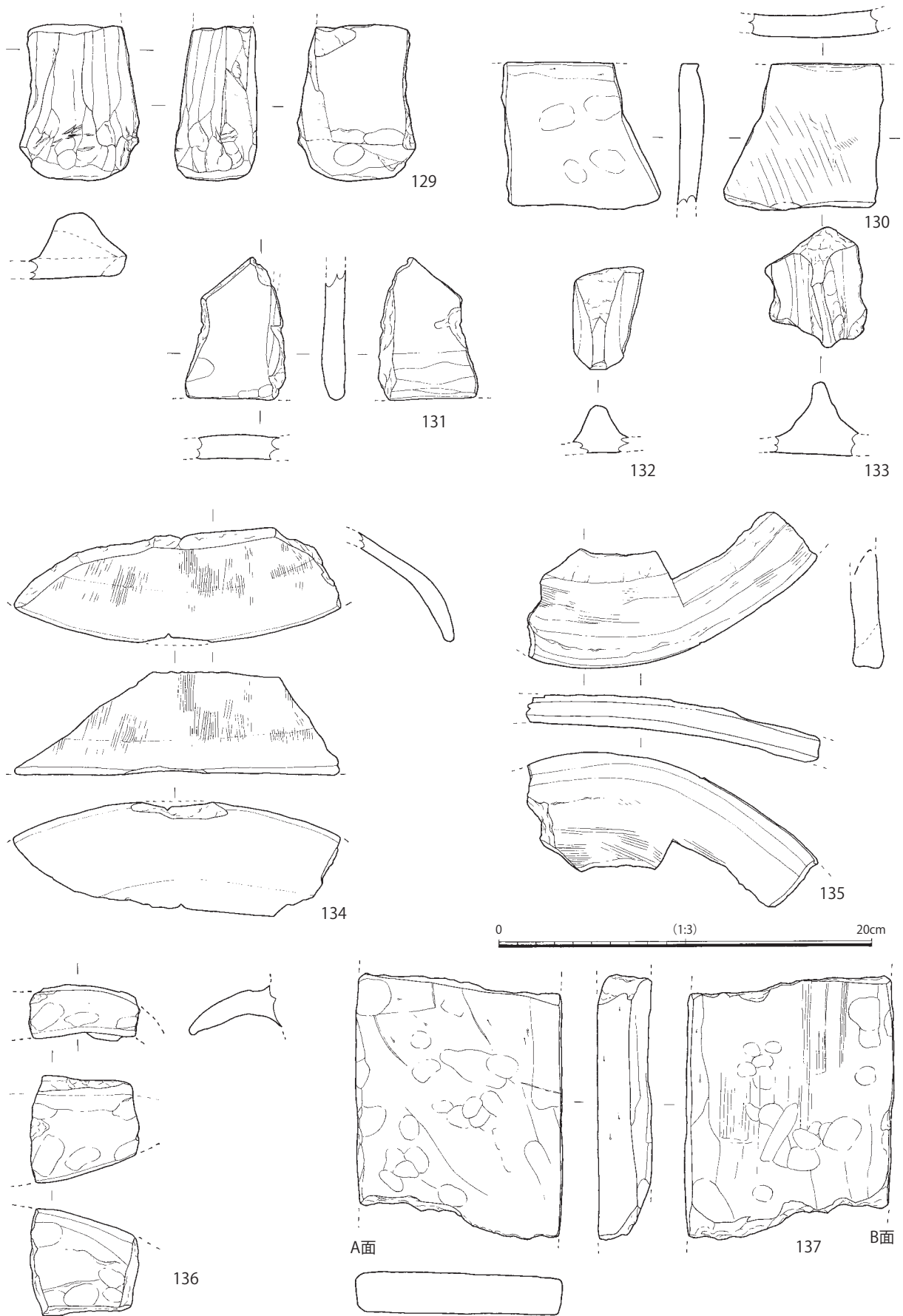


図 43 移動式竈〔129～136〕・U字状土製品〔137〕実測図 □内は遺物掲載番号

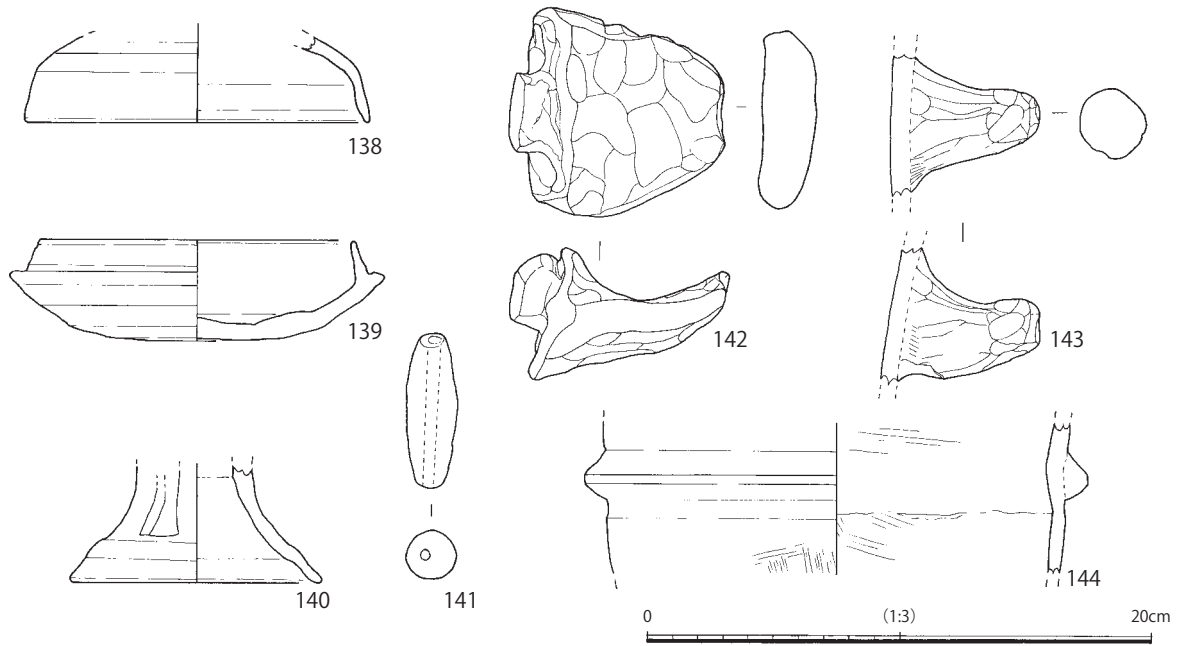


図44 古墳時代遺物包含層〔138・139・141〕、中世耕作土〔140・142～144〕出土遺物実測図 □内は遺物掲載番号

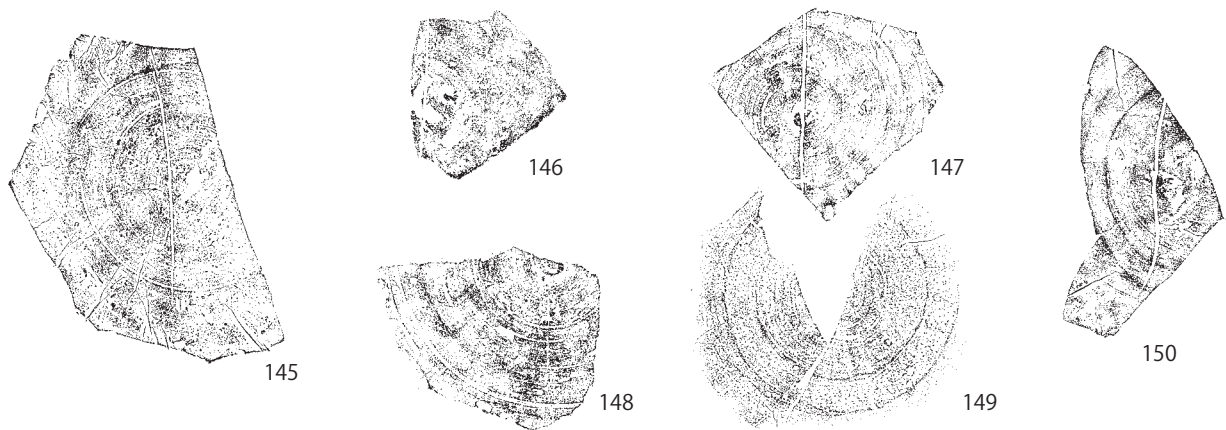


図45 須恵器杯外面線刻拓本図

実測対象から外した土師器高杯のうち脚部でみると、大半を114もしくは120のタイプが占める。また杯部は、屈曲部に稜線をもたない112のタイプのみが見られた。116は2箇所2段透かしをもつ長脚高杯である。ただ透かし窓を開けた後に、整形のためか脚部をしぼったため、結果的には切り抜いた部分がふさがってしまっている。119は全体に厚ぼったく、杯部との接合部に近い部分にシボリメがみられることから、高杯の脚部と判断した。しかし装飾のパターンとしては甕の口頸部を思わせるもので、高杯脚部としてはイレギュラーなものである。118は高杯のミニチュア土器の脚部破片である。粘土の接合部に部分的にユビオサエを施す粗雑な作りだが、胎土は緻密で硬質な印象を受ける。122は底部のみが残存する杯で、底部外面、とりわけ高台の内側の部分は全体に研磨されたように平滑である。123は丁寧な作りで底部外面に木の葉の圧痕が残る。127は口縁部が打ち欠かれている。126は弥生時代中期の土器で、外面に残る粗いハケ調整の痕跡はかるうじて観察可能であるが、全体に極め

て摩滅が顕著である。128 は全体に被熱して風化が著しく、表面が大きく剥離する。残存部分を見ると平坦面が研磨されて摩滅し、側面には敲打痕が顕著に残る。

移動式竈

従前の調査に引き続き、今回の調査でもそれぞれ形態の異なる移動式竈の破片を検出した。出土した移動式竈の破片のうち、部位の特定が可能なものは実測図を作成して図 43 に、それ以外のは写真図版 27 に掲載した。それらをみてもわかるように、今回出土したものはいずれも細片で、全体の形状がうかがえるものはなかった。

129 は移動式竈の脚部で、外側に粘土を貼り足しながら縦方向にナデ上げて形を整える。130 は掛け口部分の破片で、実測図の左上上端に煮沸具を置いた際に生じた摩滅痕がわずかに認められた。131 は基部の破片で、残片はわずかだが丁寧に整形される。134・135 はいずれも庇中央部分の破片で、後者は先端部に丁寧なナデ調整を施して面を作りだす。前者は後者に比べて器壁が薄く、全体に華奢だが、表面に丁寧なナデおよびハケ調整が施される。136 は付け庇の側面に近い部分と考えられ、内面・外面共にユビオサエの痕跡が顕著である。137 は B 面とその左側面にうっすらと煤が付着することから、A 面を作り付け竈に接着して使用した、焚口の、向かって右側に当たる部分の破片と見られる。ただ両面とも丁寧な調整を施しており、竈への接着面を粗雑に仕上げることはしていない。

古墳時代遺物包含層・中世耕作土出土遺物

138 は天井部が丸い形状を呈するとみられるが、稜線の退化・口径の小型化に加え、口縁端部は面をなさず、丸くおさめる。139 は底部から体部の立ち上がりに丸みをもち、受部や立ち上がりの作り出し方にも簡略化は認められないが、全体に厚ぼったく、口径にも小型化傾向がみられる。

図化しなかった遺物の中にも甑の把手が 10 点弱出土したが、それらはおおむね 142 か 143 のいずれかのタイプにふくまれる。144 は残存部分もわずかで、表面の摩滅が著しい。内面の箍の下端付近に大きく粘土の接合痕が認められるのに加え、全体に器壁が薄く、華奢で粗雑な印象を受ける。

ヘラ記号土器

ヘラ記号のある土器のうち、器形復元のできないものを拓本で掲載したのが 145～150 である。いずれも須恵器の杯身もしくは杯蓋で、記号は頂部もしくは底部外面に入れられている。器形復元ができないので、それぞれの時期を正確に把握することはできないが、いずれも中央部分まで回転ヘラケズリが施されているので、集落の最終段階の須恵器は含まれないと考える。

記号は単線の直線もしくは複数の直線の組み合わせからなる。148・149 は施紋具が器壁をかすめる程度にしかあたっておらず、意図的に記号が施されているとみられるものの、細くて目を凝らさないと見えない程度のか細い線である。それら以外のは力強く、器壁を切り込むように線が入れている。147・150 以外はすべて区画溝から出土したものである。

2 木器類

151・152 を除くとすべて、加工痕の明確でない板状の木器である。153 は全体的に面取りされているように見受けられるが、枝の生え際の部分が一箇所、ほぼ未調整のまま残っている。154 は 21 溝の底部にほぼ水平に据えられた状態で出土したもので、図化した面の上半中央部に長軸方向に粗くはつたような痕跡をわずかに認めた。断面形状でも中央部分がわずかに窪むことから、木樋の役割を果たしたものと理解する。156 は薄い板状の木片で、木製品の製作途中に生じた残片と考えられる。

161 は 1172 土坑の中央に据えられていた壺の西側に、近接して置かれていたもので、腐食が進み、

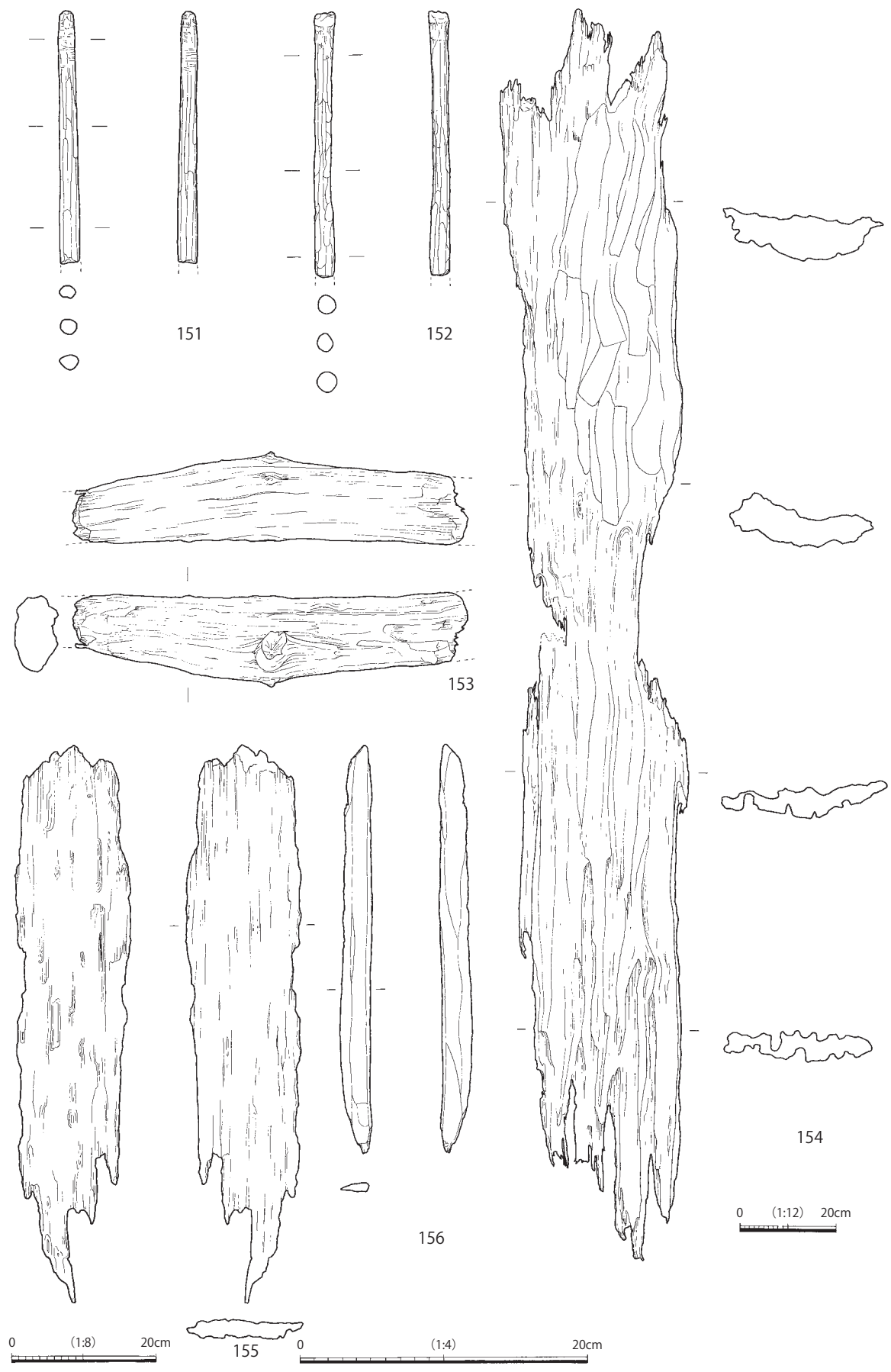


図 46 21 溝 [151 ~ 155]、22 井戸 [156] 出土木器実測図 □ 内は遺物掲載番号

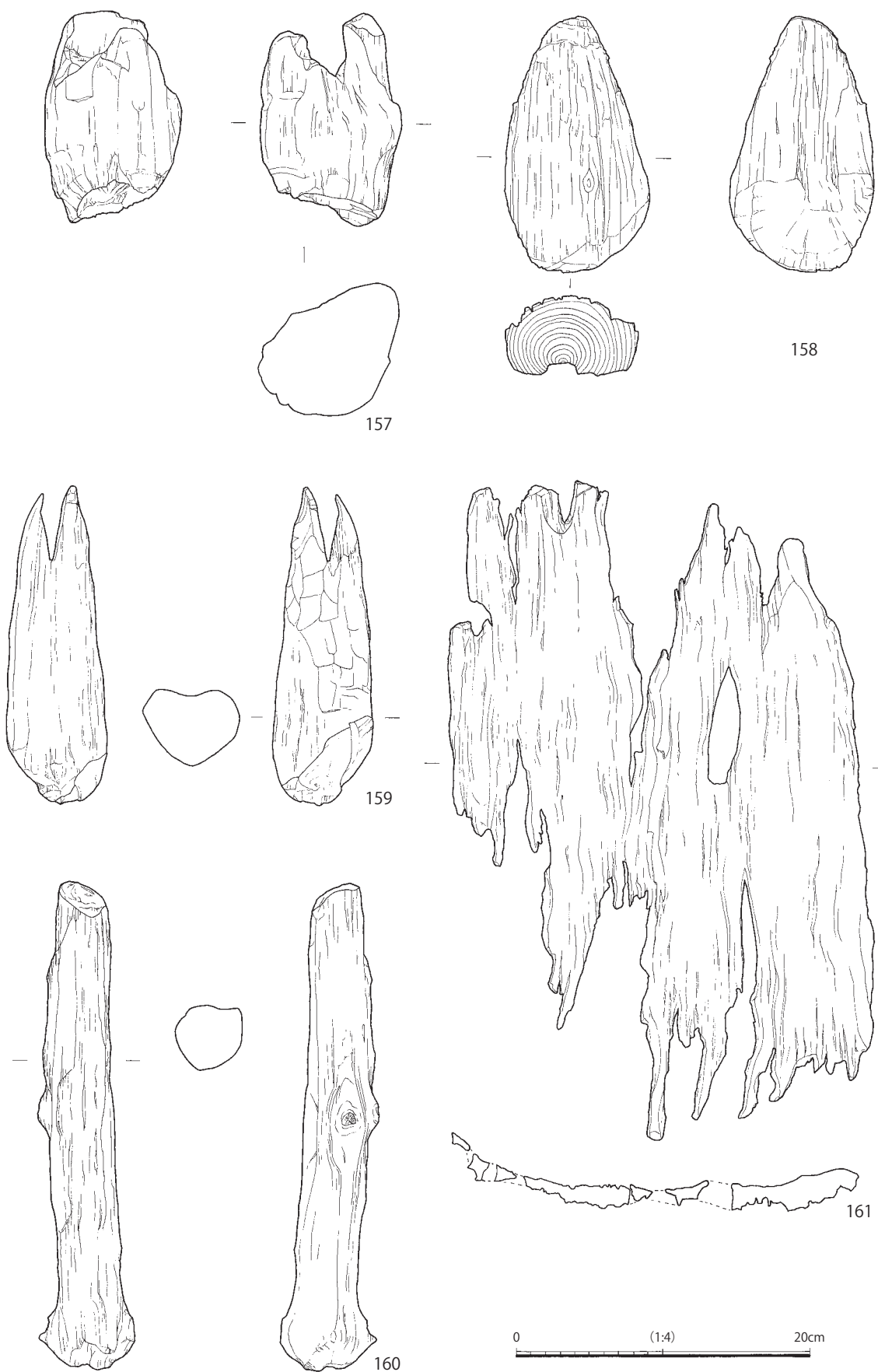


図 47 242 土坑 [157]、273 ピット [158]、231 ピット [159]、254 ピット [160]、1172 土坑 [161]
 出土木器実測図 □ 内は遺物掲載番号

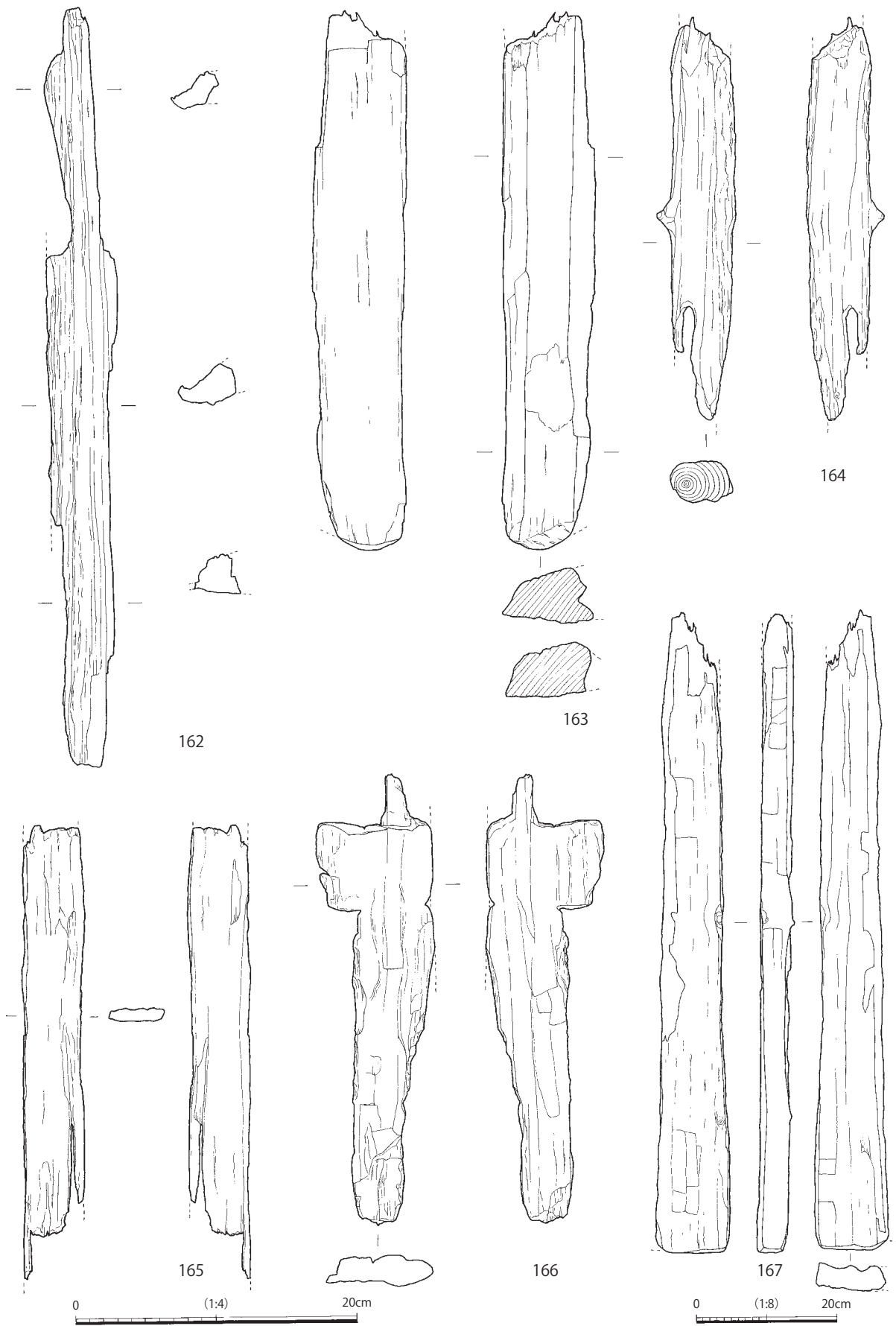


图 48 調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土木器実測図

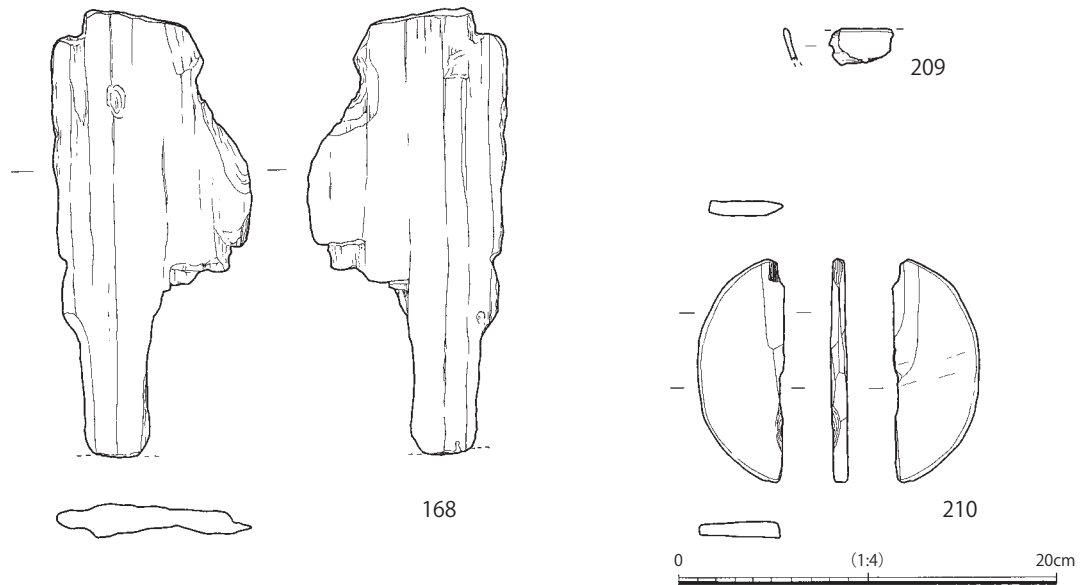


図 49 調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土木器〔168〕、中世耕作土出土木器〔209〕、調査区北西隅検出谷地形中世耕作土出土木器〔210〕実測図 □内は遺物掲載番号

本来の形状はとらえにくいですが、わずかに湾曲した薄い楯状の木製品ととらえられる。157は下端部が金属器で断ち切られたような形状で、中央部に臍孔を切ったような加工痕が認められる。ただ全体には粗雑な整形である印象を受ける。それ以外の杭状の木器に関しては、159で部分的に面取りしたような加工痕が認められる以外は、明確な加工痕は認められない。

図48と、図49左側の遺物には調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層から出土した木器を掲載した。板状もしくは角柱状の木器からなり、建築部材の可能性もあるが、163・167以外は面の作り出し方は粗く、明瞭な加工痕跡も認められない。なお167に対しては放射性炭素年代測定を行った。測定結果は付章第2節を参照されたい。図49右側の遺物は耕作土層から検出したもので、209は漆器の口縁部片、210は曲げ物の底もしくは蓋の再加工品とみられる。後者は本来円形だったものが、半分に折損したものと考える。折損部分は一部、両面からななめに削りだして端部を尖らせていることから、再利用するために破損箇所を加工したと考えられる。

第2節 中世の遺物

1 土器・金属器等

調査区南西隅検出谷地形中世耕作土層

出土遺物はわずかである。169は瓦器碗の底部で、断面台形の高台が付されている。中世遺構面より上の層で検出された瓦器碗は、断面三角形の退化傾向の著しい高台がつくか、もしくは高台を持たないタイプと考えられるので、それらよりは若干時期が遡る可能性がある。ただこの遺物のみをもって、この谷地形の耕作地としての開発が早いと判断するのは早計であろう。

調査区北西隅検出谷地形中世耕作土層

実測図を掲載した遺物の他に、瓦器碗・羽釜・三足羽釜の脚部・火舎とみられる瓦質土器・備前焼播鉢と大甕、東播系須恵器鉢の細片が出土した。瓦器碗はいずれも口縁部付近の破片で、全体的な形態

は復元できないが、残存部を見る限り図 50 の 173 と 174 に類似する形態と見られるものが含まれる。東播系須恵器鉢も口縁部付近が残存するものだが、176 と同タイプのものである。図 50 に挙げた、中世遺構面上層出土遺物より、明らかに時期の遡るものは認められなかった。したがって谷地形を利用した水田造成が始められたのは、中世遺構面基盤層の造成を端緒として、一帯の水田開発が本格化するのとはほぼ期を一にする時期ととらえられる。

1～3 溝

中世の遺物では実測した遺物の他に、瓦器碗の細片 2 点、土師皿の細片 5 点が出土している。前者はいずれも口縁部の破片で、全体の器形をうかがえるものではないが、173 の時期を遡る要素は一切見られない。したがって遺構の時期も、13 世紀後半を遡るものではないと考えられる。

6 溝

実測した遺物の他に、土師器皿の細片が 2 点出土した。いずれも口縁部の破片だが一点は 182 と同タイプの小型の皿、他の一点は 178 に類する、高台が退化する最終段階の瓦器碗の形態を真似た土師器と考えられるものである。174 は体部の立ち上がり直線的で口縁部外面に強いヨコナデを施す、製作手法の粗雑化が顕著なものである。これらのことから 6 溝は、14 世紀を遡るものではないと考える。

中世耕作土層出土遺物

中世遺構面基盤層以下の層からの出土遺物に関しては、時期比定および実測が困難な細片が少量出土したのにとどまるため、実測対象からはずした。ただ中世遺構面を精査している時に検出した瓦器碗の破片は、口縁部が端部から 2.5 cm の長さでわずかに残存するのみなので、明確な判断材料とは言いがたいが、内・外面に磨きが施され、それより上層から出土した遺物と比較して、やや時期が遡ると考えられるものである。幅 1 mm 程度のミガキが内面に密に施されるのに加え、外面にもそれよりはややまばらだがミガキが施されることから、遅くとも 12 世紀後半から 13 世紀初頭に属するものとみられる。

実測図に挙げた資料を基に概観すると、瓦器碗では 187・198 のように口縁端部に段状の沈線を施す、13 世紀前半に位置づけられるものをわずかに含むものの、13 世紀後半以降のものが主体となる。175 と 178 は高台が退化する前後の、最終形態の瓦器碗の形状を模したと見られる土師器である。175 は器高・口径ともに小型化しており、178 よりさらに時期の降るものと見られる。その他に出土した白磁・青磁・東播系須恵器鉢や古瀬戸の天目茶碗、備前焼の播鉢、瓦質土器を含めてみると、中世の遺物は 12 世紀から 15 世紀の時期に含まれ、その中でも 13 世紀後半から 14 世紀の遺物が大半を占めることがわかる。

以上のことから当調査区においては、12 世紀後半代に耕地開発の端緒を求めることができるが、13 世紀後半ないし 14 世紀に、それ以降の時期に引き継がれる土地区画を伴う、大規模な耕地開発が行われたと考えられる。199 は焼きのあまい瓦質の獣足形土製品で、端部に小さな切込みを入れた後、切込みの部分を丁寧に面取りして爪先の形状を表現する。脚部は縦方向に丁寧にナデ上げて調整するが、足底部分の調整は雑である。192 は銅製の筭で表面に光沢を帯びる。体部中央に施された楕定規に面して頸部と同じ幅の耳かきを作り出すという形態的な特徴から、14 世紀代までのものととらえられる。

2 瓦

中世耕作土層より、完形もしくはそれに近い丸瓦・平瓦が複数個体出土している。暗渠として付設されたものの残片の可能性が考えられる。ただ上私部遺跡（その 1）の調査で軒瓦の瓦頭が出土していることから、もとは瓦葺の建物に使用されていたものが転用された可能性もあろう。

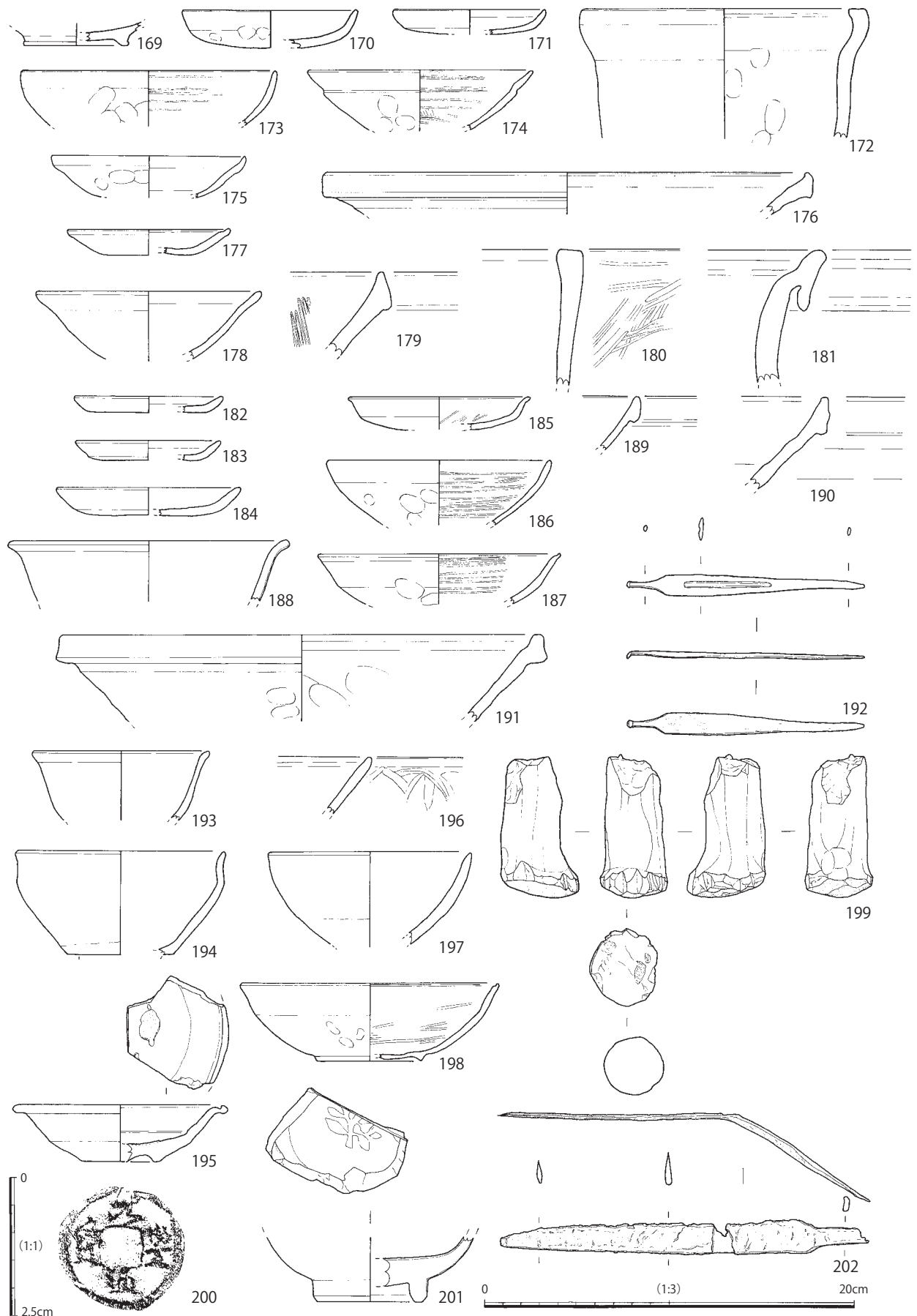


図 50 調査区南西隅検出谷地形中世耕作土 (169・170)、調査区北西隅検出谷地形中世耕作土 [171・172]、1~3溝 [173]、6溝 [174]、I-2-2層 [175・176]、I-2-1層 [177~180]、34ピット [181]、I-2層 [182~192]、I-1-2層 [193~195]、I-1-1層 [196~200]、側溝掘削時 [201・202] 出土遺物実測図 □内は遺物掲載番号

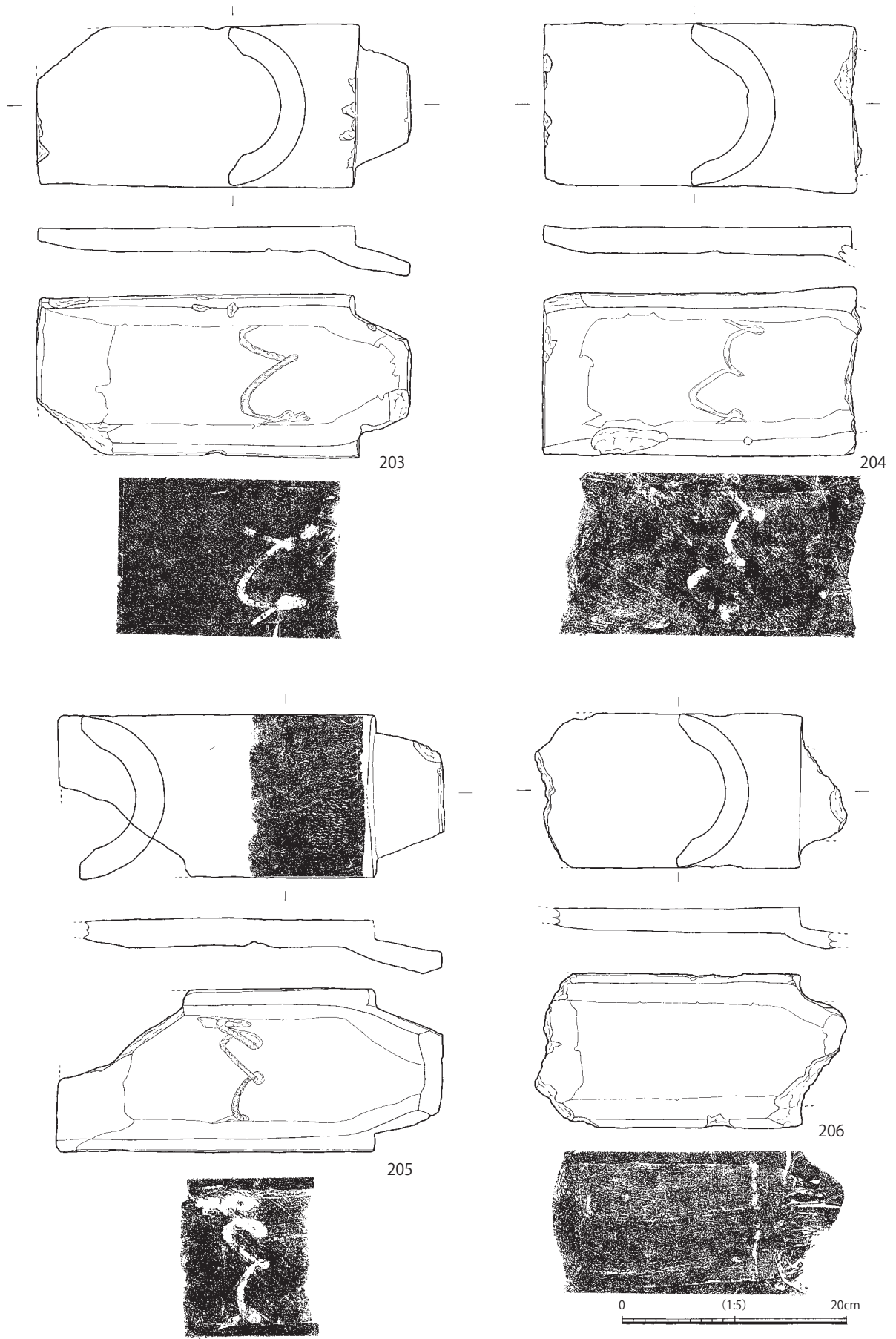


图 51 瓦实测图

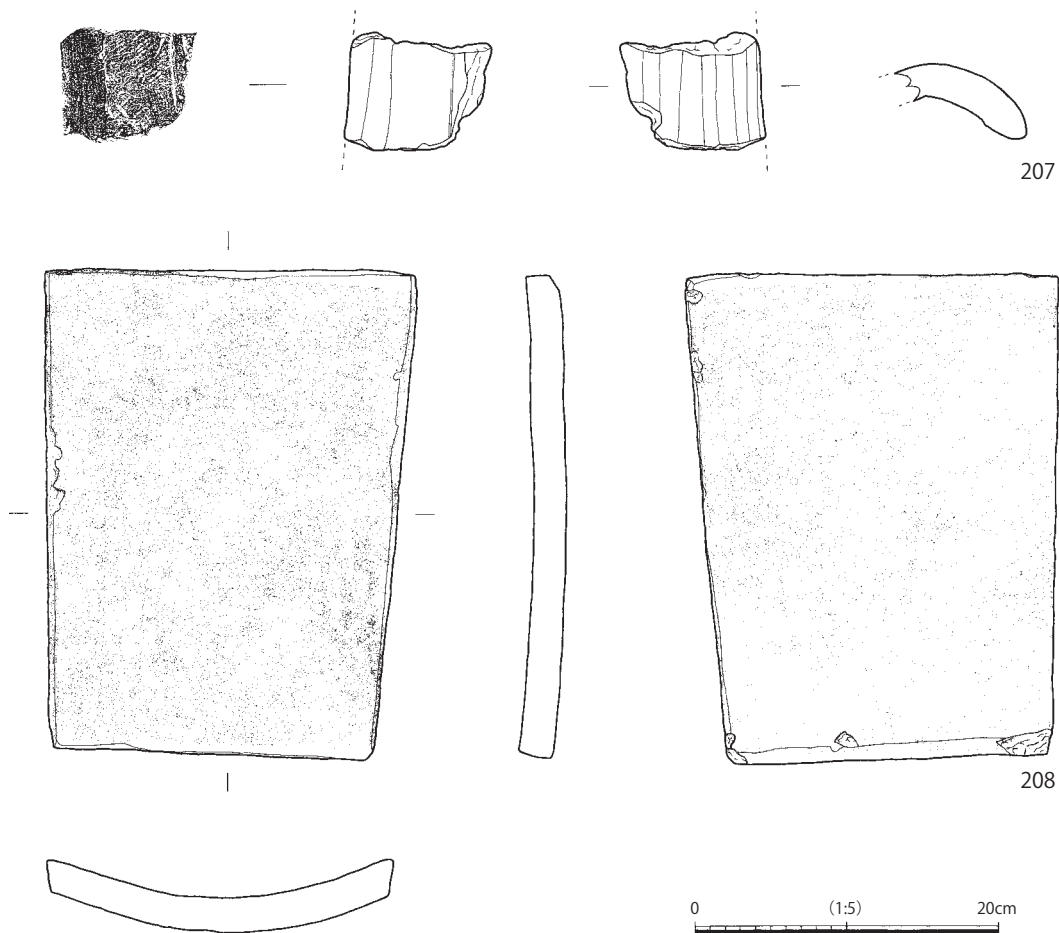


図 52 瓦実測図

上私部遺跡（その2）の調査の際も、完形の丸瓦と平瓦が複数個体出土している。それらは今回の調査で出土したものと、平面形態や面取りの仕方に高い類似性が認められる。図 51 に挙げた丸瓦も、相互に共通点を多く有するが、凹面の釣り紐痕跡の有無もしくはその形状に、バリエーションが認められる。206 は凹面に釣り紐の痕跡を認めず、長軸方向に杵板の痕跡が、短軸方向に粘土の接合痕が明瞭に残る。203 は釣り紐の山の間隔とたわみが大きい、204 と 205 は山の間隔およびたわみが小さい。特に後者は隣同士のループが大きく重なる形状を呈するのに加え、釣り紐の位置が他の二者に比べて低い。203 ～ 205 は凸面にタテ縄叩き後にナデ調整を施すが、206 は丁寧なナデ調整を施すためか、タテ縄叩き痕跡は認められない。

以上、微小な相違点をもとに今回出土した瓦の比較を行ったが、前述したように形態や製作手法は類似性が高く、時期的には同一のカテゴリーに含めうると考える。

第5章 まとめ

今回の発掘調査では、南側に隣接する前回の調査区に引き続き、6世紀を中心とする掘立柱建物群と溝群等を検出した。集落全体を概観すると、5世紀初頭に竪穴住居を主体として成立した集落が、時期が降るに従って徐々に、集落が立地する微高地の先端部に近い西側へと居住域を拡大させる様子をとらえることができる。

今回の調査区は、6世紀代の集落の核をなしていたとみられる、掘立柱建物群の周囲に区画溝を配した方形区画の北および西側にあたっている。その結果、方形区画とその周囲で複合的に展開される集落変遷に関し、新知見を得ることができた。次にその具体的な様相を述べる。

今回検出した掘立柱建物・竪穴住居は、その可能性のある柱穴列や土坑も併せると、20基近くに達する。それらには重なるもの、極めて近接するものがある他、建物の主軸方向にいくつかのパターンがあり、すべてが同時期に存在したとは考えられない。したがってそれらの前後関係を把握し、同時期に存在していた可能性の高い建物群をより分ける必要がある。

ただ建物の時期を、特に柱穴出土遺物を手がかりにして判別するのは非常に難しい。一つには柱穴から出土する遺物が限られることがある。またそれが柱穴の掘削時に落込んだものか、あるいは建物がその役割を終えた後、柱が引き抜かれたり朽ちた跡に、偶然落込んだものかのいずれかであるにせよ、建物の存続期間と遺物の混入時期との間に時間差が生じることもある。ただ12竪穴住居と、柱穴列1・2との重なりからみて、今回検出された建物を少なくとも3時期に分けうるのは確実である。

前回の調査報告書では、「柱穴の切り合い関係や位置関係、振れの共通性などを考慮して、大きく3群4時期（A群、B-1群、B-2群、C群）の変遷を想定^{註1)}されている（括弧書きは筆者加筆）。今回の調査成果を、これまでの調査成果に積み足すという目的に鑑みて、今回検出した建物群に関しても、前回の区分基準ないし方法を参考とし、時期の峻別を図りたいと思う。

前回発掘調査の報告書によると、最も古い段階の建物群は北に対して西へ振った建物群（A群）である。これに含まれる建物群に対しては、区画溝の方位と大きく異なることから、区画溝の掘削以前に成立したものである可能性も示唆されている。ただ建物相互の配置に何らかの規則もしくは規制がはたらいっていたとみられるため、何らかの形ですでに方形区画は存在していたととらえられている。一方、A群と対照的に、北に対して東へ振る建物群があり、それらが最も新しい建物群（C群）として位置づけられる。

それらに対してB群は、ほぼ正方位の建物群と位置づけられている。前回の調査で検出された建物群では、このカテゴリーに含まれるものが最も多く、その中で重複関係を持つもの、もしくは近接するものを考慮しながら2時期に細分されている。その結果B-1群として、正方位からやや西へ振った、比較的振れの幅の小さい建物群が抽出され、切り合い関係や出土遺物から古段階と位置づけられている。他方のB-2群は、やや西に振りつつも、全体としては振れの幅が大きい建物群とされている。

ただ実際には、掘立柱建物の主軸方向の分布は分散的で、弁別の基準となる明確な区分線が引けるわけではない。他の遺構との切り合い関係や、建物相互の位置関係からみて、方向軸に触れがあっても同一の建物群と想定される場合があり、反対もしかりである。したがって掘立柱建物の主軸方向を一つの目安としながら、他の遺構との切り合い関係や、出土遺物の時期、建物の規模や柱間の距離、他の建物

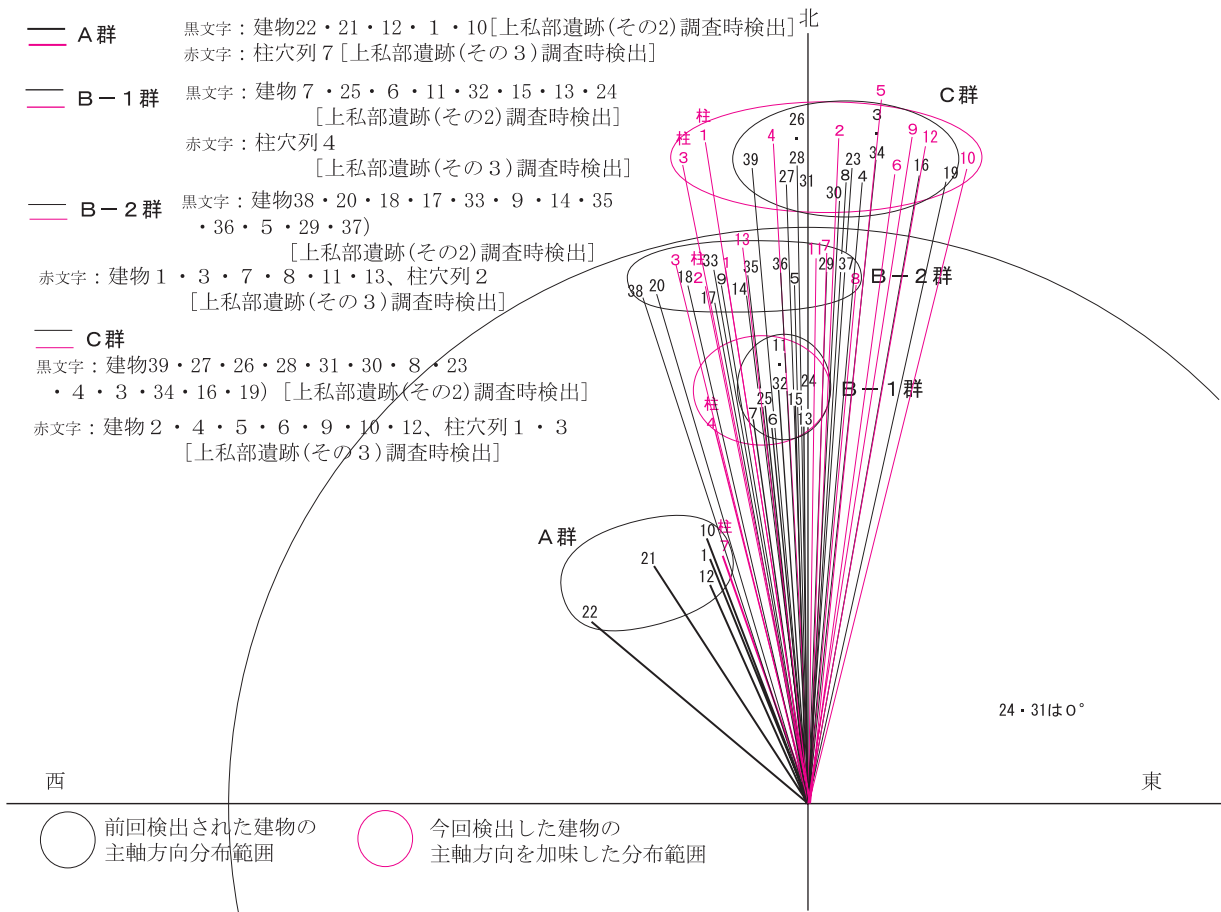


図 53 主軸方向分布図（註 1 より加筆・転載）

表 1 上私部遺跡小期対応表

期	年代	03-1 調査区		05-1 調査区	
		陶邑田辺編年	陶邑中村編年	群	年代
I	~5 C 中葉	~TK208型式	~I 型式第 3 段階		
II	5 C 後葉~6 C 初頭	TK23~TK47型式	I 型式第 4・5 段階		
III	6 C 初頭~6 C 中葉	MT15型式	II 型式第 1 段階	A 群	6 C 初~6 C 前葉
		TK10型式	II 型式第 2・3 段階	B-1 群	6 C 前半
IV	6 C 後葉~7 C 初頭	TK43~TK209型式	II 型式第 4・5 段階	B-2 群	6 C 後半
V	7 C 前半	TK209~TK217型式	II 型式第 5・6 段階	C 群	6 C 末~7 C 初頭

（註 1 より転載）

との位置関係も含めて判断したい。

掘立柱建物の主軸方向をみると今回検出した建物には、北に対して大きく西に振るもの、もしくは正方位に近いがわずかに西に振るものをあまり認めない。したがって B-2 類もしくは C 類に属するものが多く含まれることになる。

なお、前回発掘調査の報告書には、各建物群とそれに対応する時期区分が示されている。これは遺構出土遺物の時期幅が上私部遺跡（その 2）よりも大きく、重なり合う竪穴住居を多く検出した上私部遺跡（その 1）の発掘調査報告書で取られた時期区分との対応関係を明らかにする目的もあり、上私部

遺跡（その2）の発掘調査成果報告書において提示されたものである。

上私部遺跡（その3）の発掘調査においては、出土遺物の時期幅や様相が上私部遺跡（その2）調査区ときわめて類似することから、時期区分に関してもこれを援用し、区画溝と建物群との対応関係を図る手がかりとしたい。

I・II期

I期は5世紀前半～中葉に、II期は5世紀後葉～6世紀初頭に相当する。当該期に属する可能性のある遺構は、上私部遺跡（その2）・（その3）調査区では検出されていない。

I期は上私部遺跡に、本格的な古墳時代集落が展開し始める時期と位置づけられる。この時期には韓式土器やそれを模倣した土師器も出土している。集落変遷図には当該期と確定できたもののみを示したので、すべて竪穴住居からなるが、当該期の可能性がある小型の掘立柱建物も数棟認められる。

その後の段階と比べて集落の居住域は狭く、最盛期の半分弱の範囲にまとまっているような印象を受ける。遺構の広がり、II期になるとI期よりもやや南に拡大する。

III期・A群

III期は6世紀初頭～6世紀中葉に相当する。B-1群との時期的な区分は難しく、「A群の時期を特定することは困難である」とのことだが、上私部遺跡（その2）の調査成果において見られる、この時期における最も顕著な変化は、「大型の掘立柱建物を中心とする建物群を有する方形区画が出現することである」。また「これに呼応するかのように03-1調査区でも、前代までは遺構が検出されていない南西部でも遺構が確認される」。つまり前段階に比べて集落の居住域が大幅に拡大し、それに伴って集落構造にも変化が生じることが指摘されている。

今回検出した掘立柱建物、もしくは建物の可能性のある柱穴列の中で、北に対して建物の主軸方向が明確に西に振るのは柱穴列7のみである。12 竪穴住居埋土からは、明らかに6世紀前半に遡る遺物は検出されていないが、柱穴列1に切られている関係性から、掘立柱建物に先行するものと想定し、竪穴住居の可能性のある土坑も含めてA群に含めた。

区画溝に関しては、方形区画の西を限る南北方向溝が北側へさらに延長することがわかった。その溝の東側には、柱穴列14に先行する柵が設けられ、上私部遺跡（その2）で検出された「柵2」と一連の施設を構成していた可能性がある。一方、方形区画の北側を限る東西方向溝は上私部遺跡（その2）と（その3）調査区境で途切れ、今回の調査区には延長しない。ただこの溝に直行する方向の20溝が掘り足されていることから、方形区画の北側にもそれとは別の居住区画が配されたことがうかがえる。20溝の東側に配置された柱穴列12もおそらくこの時期に対応するものだろう。

方形区画北側の調査域が限られることから、明確な定義付けはできないが、方形区画北側のエリアには、竪穴住居や小規模な掘立柱建物が配されていた可能性が指摘できる。方形区画内とその北側とで、建物の構成や密度に差があることは確実であろう。

ただ上私部遺跡（その1）調査区で検出された、当該期と判断される遺構をみると、竪穴住居を主体として小型の掘立柱建物が付随する様相がうかがえることから、方形区画内の状況がむしろ、集落全体からみて突出しているとするべきだろう。（その1）調査区においても、東西方向溝とそれにほぼ直交する溝に画された、ゆるやかな空間の単位を認めることができるが、その内部の建物配置はランダムで、前段階の状況と比べてそれほど大きな違いがあるようには思えない。このようにみると、空間的には連続する居住域の中に、階層差を思わせる集落構造が生じていることがうかがえる。

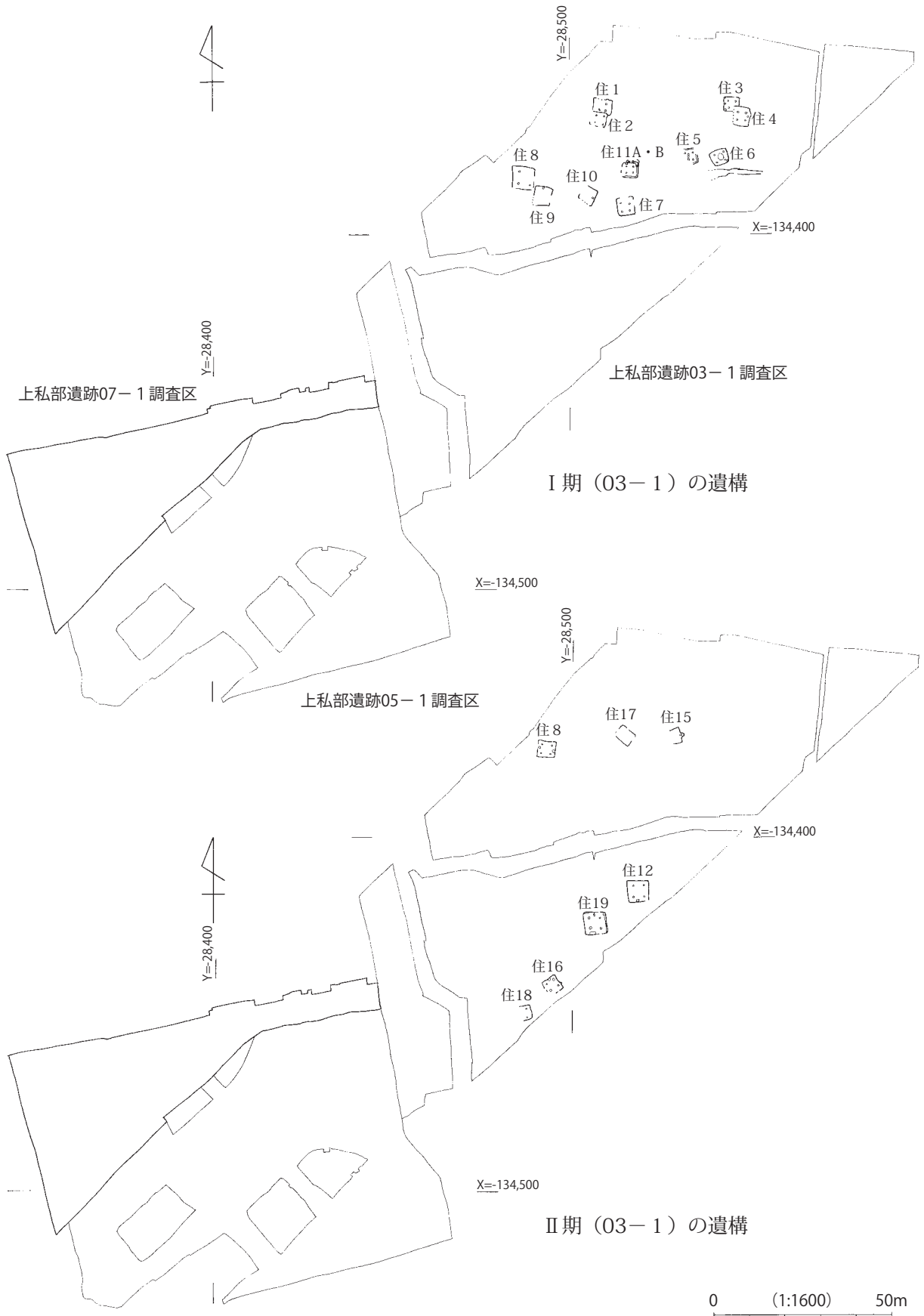


図 54 上私部遺跡変遷図 (1)

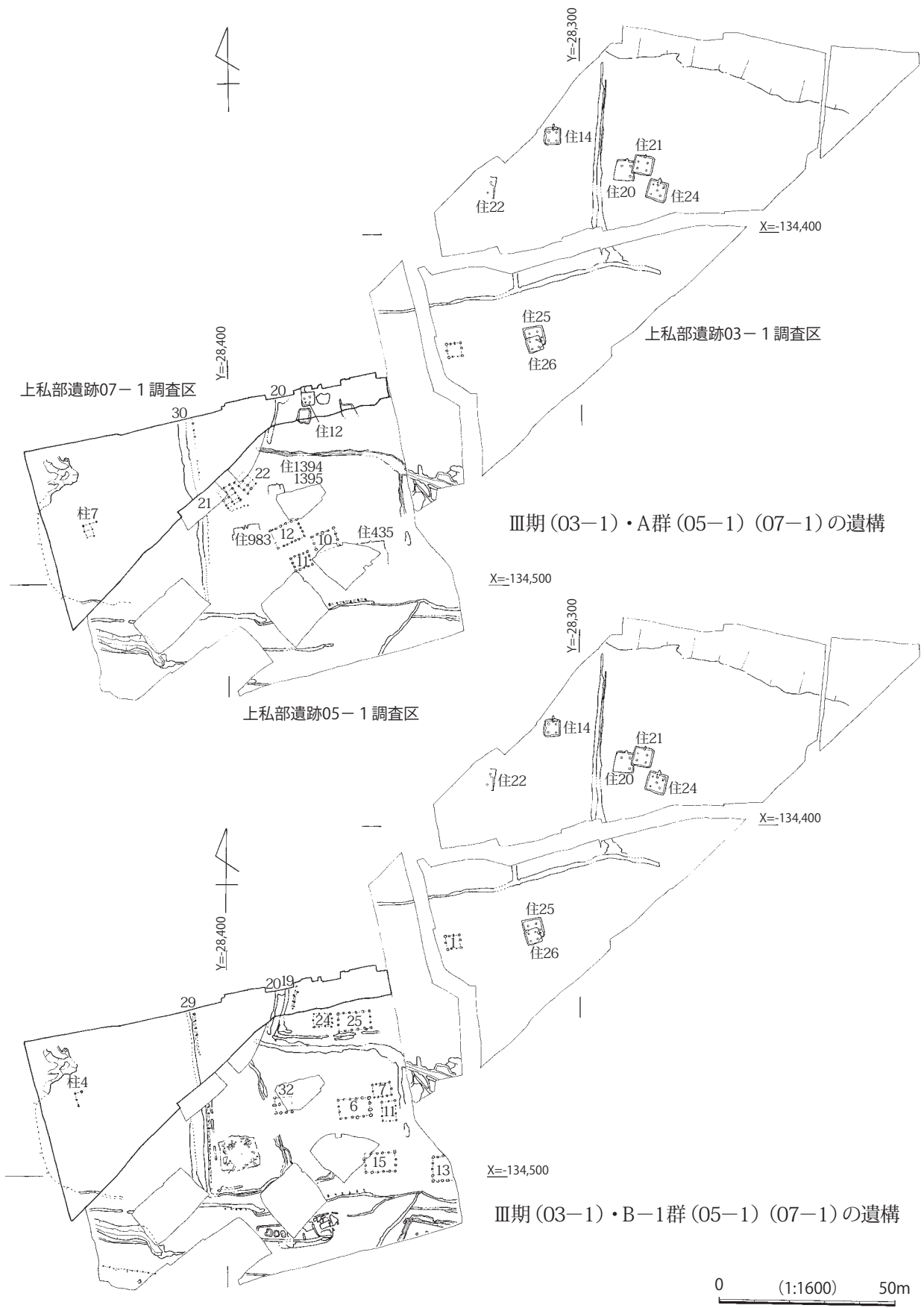


図 55 上私部遺跡変遷図 (2)

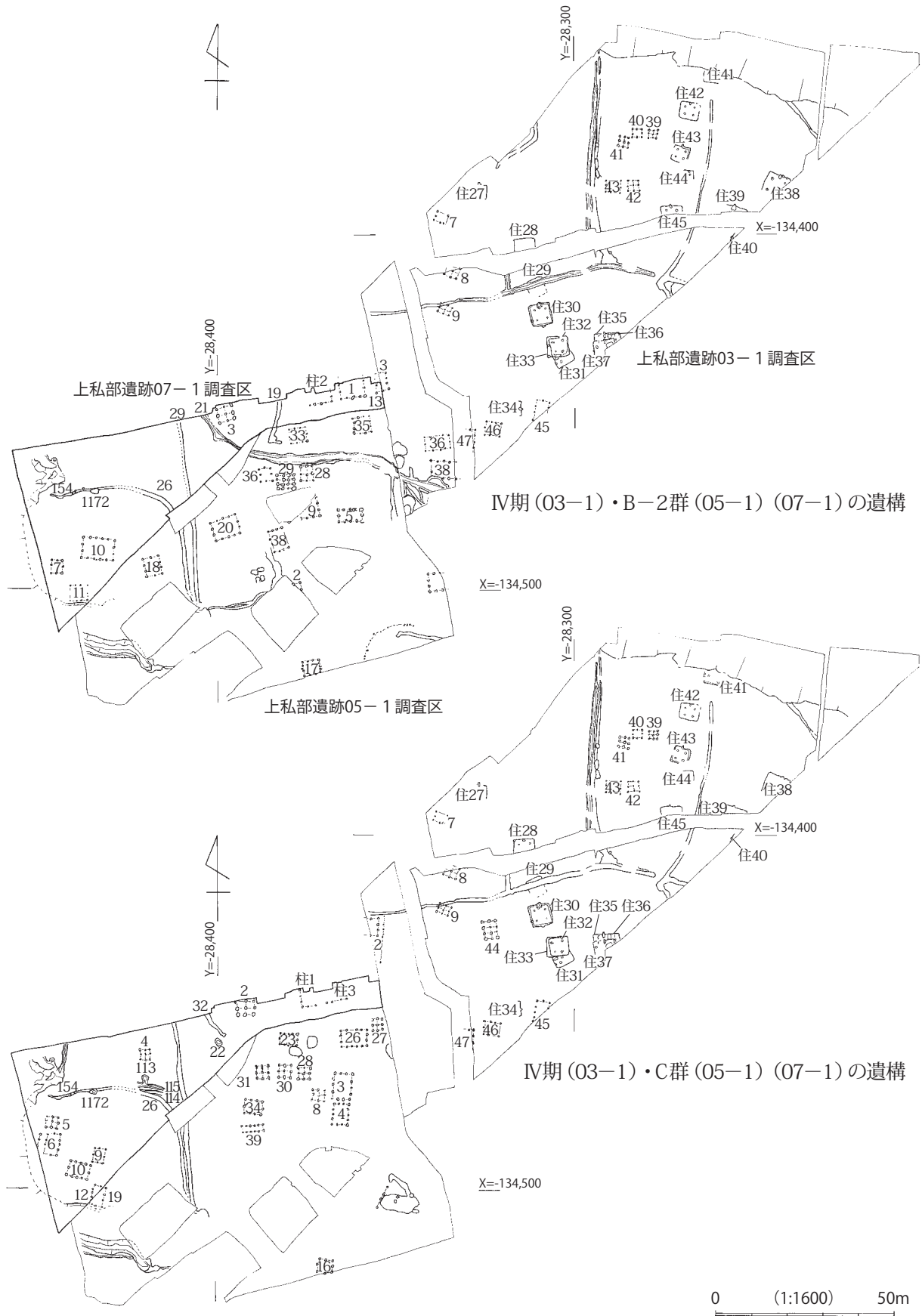


図 56 上私部遺跡変遷図 (3)

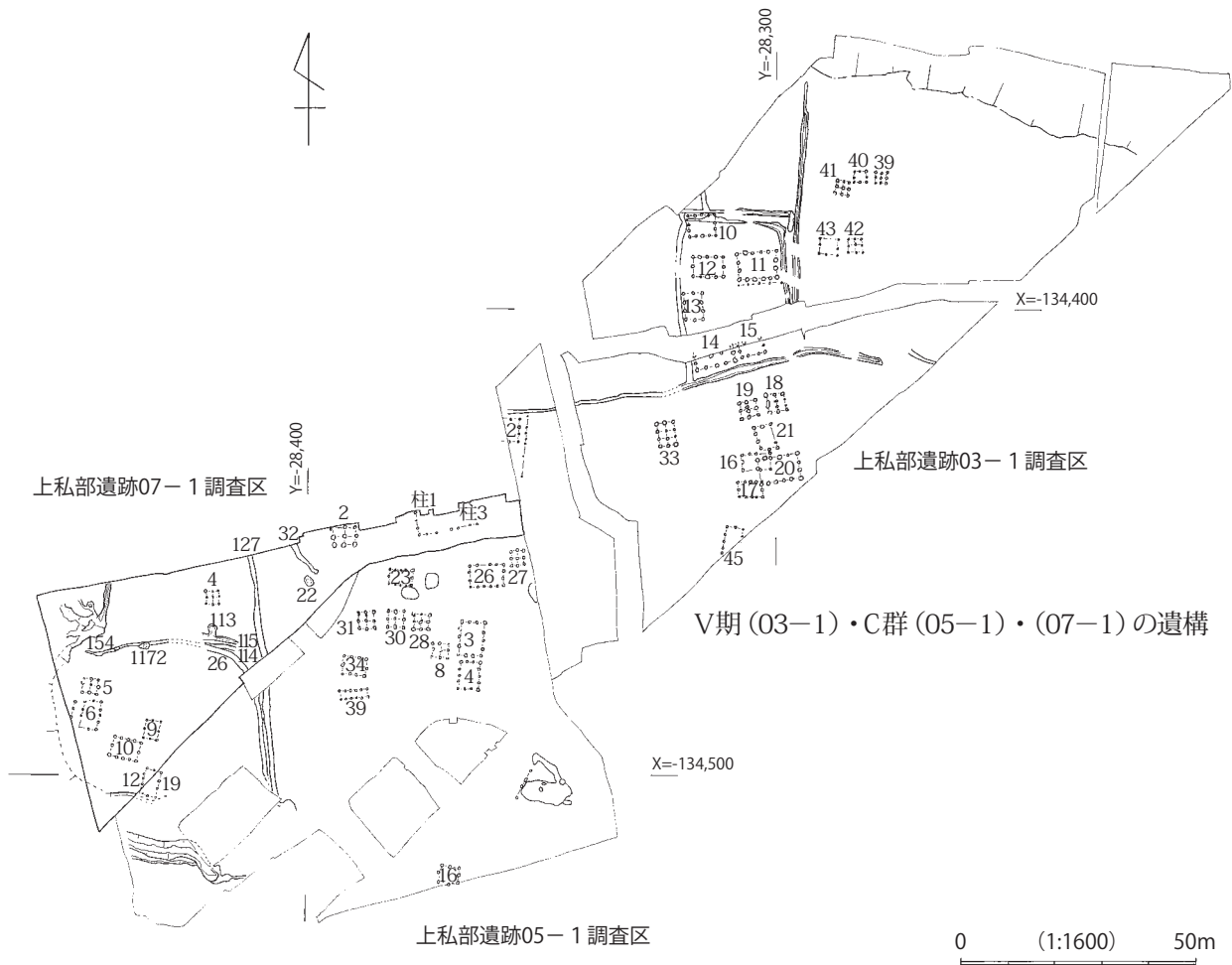


図 57 上私部遺跡変遷図 (4)

以上、今回の調査で検出した建物には、A群に含まれる主軸方向の掘立柱建物がほとんど認められない結果となった。ただこれは前回の調査報告書に、「区画溝あるいは谷状遺構で一括廃棄された土器群を見ると、6世紀前半から中頃の土器が大半を占める」とされるのに対し、今回の調査区では6世紀中頃から6世紀後半の土器が大半を占める状況と矛盾しない。したがってこの時期、集落域が南西方向に大きく拡大する一方、方形区画の部分が集落の最先端にあたる場所を占めており、その西もしくは南側を限る区画溝と柵が、集落の西限および南限を示していたと考えられる。

Ⅲ期・B-1群

当該期は6世紀前半～6世紀中頃で、A群に後続する。今回検出した建物もしくはその可能性のある柱穴列で、当該期のものとして抽出しえたのは柱穴列4のみにとどまる。ただしそれも、出土遺物や遺構の切り合い関係から積極的にこの時期と特定し得たものではない。柱穴列4は柱穴列7を北側にスライドさせたような位置関係で近接しており、振れの大きさは柱穴列7ほどではないにせよ、北に対して西に振ることから、柱穴列7の後にそれに変わるものとして再建されたものと考え、A群から間を置かない時期のB-1群に当てはめたものである。

29溝は方形区画の西を限る南北方向溝の北側延長部分にあたり、東側に配される柱穴列もこれに対応するものと考えられることから、それらを当該期の遺構とみなした。この見解は、29溝出土遺物の

時期とも矛盾しない。20 溝は出土遺物と遺構の重なりから見て、この時期に機能を失い、それに替る 19 溝が掘削されたと考える。19 溝の東側に配された柱穴列 11 が、この時期に対応する可能性もある。方形区画の北側で、19 溝の東側には前回の調査で検出された「建物 24」と「建物 25」が、この時期の建物群として抽出されている。これらは同一の主軸方向で、建物の北側辺の柱通りをそろえていることから、規則性を意識して計画的に配されたものとみることができる。方形区画内の建物配置と比較すると、19 溝の東側にも別の方形区画が存在していた可能性がある。

古墳時代集落の居住域の範囲は、A 群の時期とそれほど変わらないと考えられる。

IV 期・B-2 群

IV 期は 6 世紀後葉～7 世紀初頭、B-2 群は 6 世紀後半に想定される。この時期には、方形区画の西を限っていた南北方向溝の一つを分岐させるように、逆 L 字形に方向を転じる溝の延長部分が掘り足される。また方形区画の北限である東西方向溝の延長部分も掘り足される。こちらもゆるやかなカーブを描きながら、南北方向に近づくように方向を転じる。このように区画溝の配置は変化し、その東肩に沿って配されていた柵も姿を消す。

前述したように、今回検出した建物の主軸方向は B-2 類と C 類に含まれるものが大半を占める。ただ 2 つのグループの主軸方向の分布には重なる部分も大きいので、客観的に見て明確な分類基準を提示しにくい。そこでまず、複数の根拠から当該期と推定できる建物についてふれたい。

建物 3 は柱穴より、おそらく集落の最終段階の時期に対応するとみられる遺物が出土していること、建物の主軸方向が B-2 群の分布範囲以外にないことから当該期と判断した。

建物 1 は 6 世紀後半の遺物を含む 15 溝を切っていることから、その時期を建物の存続時期の上限とすると、B-2 群か C 群に含まれる。他方、柱穴列 2 は建物 1 の南辺と東西方向の柱筋が通ることから、両者は同時期に計画的に配置されたものと想定できる。柱穴列 2 は柱穴列 1 に切られていることから、後者を集落の最終段階にあたる C 群と位置づけると、その前段階である B-2 群に位置づけることができる。それらを根拠として、建物 1 と柱穴列 2 を当該期に属するものととらえる。建物 1 の東辺は、上私部遺跡（その 2）の調査で検出され、当該期に比定されている「建物 35」の東辺と同一ライン上に乗るが、これも前述の想定と矛盾しない。建物 13 は前回の調査報告書で当該期と想定されるが、隣り合う建物 1 と柱穴列 2、建物 3 の南辺と柱筋が同一ラインにのるように位置が揃えられており、当該期に計画的に配置されたものと考えないと矛盾がない。

建物 2 は建物 3 とほぼ同じ大きさで東西方向に隣り合う。したがって両者が同時期に存在していたととらえることも可能である。ただもしそうであれば、このように近接しながら両者の主軸方向が一致しない点に、やや不自然さを感じる。両者が別の時期に属するとしても、時期の比較が可能な遺物が建物 2 から出土しなかったため、前後関係を判断しにくい状況である。建物の主軸方向を判断の基準にするなら、建物 2 は北に対して若干東に振るので、C 群に含まれる可能性が高くなる。したがってここでは、建物 3 を B-2 群に、建物 2 は C 群に属すると想定する。

方形区画の西側に展開する建物群（建物 6～12）は、柱穴列 4・7 を除くと程度の差はあれ、おおむね北に対して東に振る。建物 8 と建物 9 との重複からみて、それらの建物群が 2 時期に分かれるのは明らかだが、出土遺物や他の遺構との重複を手がかりとした、同時性もしくは前後関係の把握をしにくい状況である。したがって建物の大きさや柱間の長さ、位置関係なども考慮して分類する。

まず前回の調査で検出された方形区画内の建物群を概観すると、B-2 群と C 群とでどのような違い

が見られるだろうか。一見するとC群に含まれる建物群では、大型建物の面積が小さくなり、大型建物と小型建物の面積差も縮まる状況がうかがえる。今回の調査で検出した建物8は、C群に含まれる大型建物と比較すると、それらよりもむしろ大きなものになってしまう。一方、B-2群に含まれる大型の「建物9」と比較すると、主軸方向は異なるが両者の大きさ、柱穴間の長さは極めて近似する。したがって、両者は共通の規格に則って作られたことがうかがえるのである。

建物8をB-2群に含まれるものとしてとらえると、これと近接する位置にあり、相互に主軸方向が近似する建物7と建物11も、同一時期の建物群としてとらえることが可能である。建物の主軸方向は若干異なるが、建物11と「建物18」の大きさや柱穴間の距離が近似する点もこれと矛盾しない。

以上を概観すると、この時期に集落の居住域が前段階よりも拡張することは明らかである。これと区画溝の延長、および溝と柵のセット関係の消滅はおそらく期を一にする現象ととらえられる。前回調査の報告書においても「西限溝では、少なくとも4時期にわたる溝の掘り直しが認められ、それに対応して南北方向の柵（柵2～4）が設けられ」、「南限溝である55溝や634溝にも柵が設けられており（柵6～8）、西方と南方とに対して閉鎖性の強いものであったことがわかる」とされている。

これは方形区画が成立した当初、それが集落の最先端に当たり、西側と南側を限る区画溝が、とりもなおさず集落全体の西限および南限を限る施設となっていたからと考えられる。20溝ないし19溝の東側に柵が伴うのも、おそらく同様の理由によるものとする。その後、南北方向溝群と19溝の西側に建物が建てられるようになると、区画溝と集落の境界が一致しないことになり、柵を併用した防御施設を継続して設ける必要性がなくなったものとする。

154溝は南北溝の西側に、新たに付け加わった居住空間を区画するために延長されたものと考えられる。また21溝は19溝の西側に付け加わった区画と、本来の方形区画とを仕切る必要から、延長されたものとする。結果的には21溝と南北方向溝にはさまれた部分が、方形区画内への出入り口としても機能したと考える。

一方、「建物17」が新たにつくられることにより、前段階まで方形区画の南側を区切っていた区画溝の必要性が薄れ、「81溝」のような、区画溝としてはやや不完全なものに置き換わっていくと考える。あるいは「柵9」の存在から、方形区画が前段階よりも南側に向けて拡張した可能性も考えられる。

なお今回検出された建物に関してみると、方形区画の北側と西側とで建物の主軸方向の振れが二分される。つまり北側のエリアでは北に対してやや西に振るのに対し、西側のエリアでは東に振る傾向をとらえることができる。このような差は、もともとは微地形を反映したものとみられるが、掘立柱建物群のまとまりを構成する集団ごとの独自性にも関わる可能性がある。

IV期・C群

今回検出した建物群から、A群・B-1群・B-2群に想定した建物を除いたものである。今回の調査では当該期のものが最も多い。南北溝の西側に展開する建物5・6・9・10・12をみると、その東側に展開する建物群と同様、建物の大小差が縮まり、全体に建物の平面積は小規模化する。また前者が北向きに開口する建物は位置であるのに対し、後者が南向きに開口する配置であるという違いは有るものの、それらが「コ」の字形の建物配置である点も共通する。

さらに建物5・6・9・10・12の建物配置を仔細に眺めると、相互に建物の辺を揃え、規則的な建物配置になるよう、意図していたことがうかがえる。具体的にみると、建物6の南側辺と建物10の北側辺、建物9の西側辺と建物10の東側辺、建物10の南側辺と建物12の北側辺が、柱筋が通るよう

に配されている。また建物5の東側辺は建物6の東辺より一間分西側の柱通りに揃えるような位置関係がみられる。他方、前段階までの方形区画の北側に位置する柱穴列1・3、建物2の配置では、南側辺がおおむね同一ライン上に乗ることがわかる。これは前段階の建物1・3・13と柱穴列2の位置関係を踏襲したものにとらえられる。

建物の主軸方向をみると、前段階までの方形区画の西側に位置する建物群は、北に対して東に振る。それに対して北側に位置する建物群は、北に対して西に振る。同様の傾向はB-2群の段階でもみられることは前述したが、当該期になるとそれぞれ振れがさらに大きくなるのが見てとれる。換言すれば、建物群の北に対する主軸方向の振れは、南北方向溝の西と東でそれぞれ前段階のあり方を踏襲しつつ、さらに増幅していることがみてとれるのである。一方、両者の間に位置する建物2・4の主軸方向は、より真北に近い。

なお建物4は、主軸方向だけを見ると、B-1群やB-2群に含まれうる。それを当該期に含めた理由は、建物の大きさや柱間の長さが、建物5や「建物8」・「建物28」に共通するからである。

調査区の西端部に位置する156溝とその東側に配される柱穴列5は、出土遺物から時期を判断することはできない。ただB-1群の項目で述べたように、内側に柵をともなう溝は、集落の最前面における施設と考えられることから、建物4とセットを成すと考えられる。南北溝よりも西側に居住域が拡大すれば、その西側に施設を設ける必要が生じるからである。したがって、建物4が当該期に含まれると想定するなら、156溝と柱穴列5もこの時期に含まれうると考える。なお建物5・6・9・10・12から成る建物群の西側は第3章第1節でも述べているように、谷地形がめぐっていたと考えられる。そのためこれが自然の防御施設となっていたと考える。

溝と柵を併用した防御施設が作られているのであれば、建物4の北側にも建物群が展開していた可能性は高いだろう。ただ156溝の埋土には、20溝や21溝、29・30・127溝とは対照的に、遺物が含まれていなかった。このことから156溝の東側にあるかもしれない建物群に関しては、建物の密度が低いか、もしくは存続期間が短いことが推測できる。

21溝とその延長部分は埋没し、変わって形骸化した32溝と井戸が掘削される。これにより南北溝の東側に展開する建物群は、その前段階のような、区画溝を介した建物群の区分が認められなくなる。

以上、集落全体としてみると掘立柱建物の平面積は縮小傾向を見せ、大型建物・小型建物の面積差も縮小するが、居住範囲は当該期に最大になる可能性がある。

V期・C群

V期は7世紀前半に想定されている。ただ前回発掘調査の報告書ではC群と、上私部遺跡（その1）の調査報告書で言うV期は、同時期に廃絶したと想定される。出土遺物の様相から見て、前回の調査内容と変わるところは認められないことから、今回もその見解にならうこととする。

上私部遺跡（その2）・（その3）調査区で見られる集落構造の推移と対照的に、上私部遺跡（その1）調査区ではV期に、区画溝で囲まれた建物群が成立する。その中の大型建物は、当該期の集落の中で最も大きなものである。このことから集落の中心が、この時期に東へ移動した可能性のあることがうかがえる。ただその方形区画は、上私部遺跡（その2）調査区で検出された方形区画より面積は小さい。また前段階までの方形区画の北側に、連続的に建物が配置されていた可能性があり、もしそうであれば、建物の配置密度は集落の西側の方が高かったということが出来る。

したがってむしろこの時期に、集落が二極化するか、もしくは全体としての居住域は西側に圧縮され

て、方形区画を伴う集落の核となる部分だけが、飛び出すととらえるべきなのかもしれない。ただいずれにせよ、前段階に引き続いて掘立柱建物の縮小傾向が認められることから、方形区画の部分を除けば集落構造の格差は縮小化するととらえられる。

集落全体としては均質化が進みつつも、部分的な改変が行われる状況を経て、当地における古墳時代集落は廃絶に向かったことがわかる。

なお、上私部遺跡（その3）の発掘調査終了後、（その1）調査区内に残されていた未調査部分や、（その1）・（その3）調査区の北側に三角形もしくは台形状に残る未調査区域の発掘調査を行った。その発掘調査成果については、本書の第Ⅱ部を参照されたい。

註

註1) 財団法人大阪府文化財センター 2007 『上私部遺跡Ⅱ』（財）大阪府文化財センター調査報告書第165集

表2-1 建物・柱穴列土層一覧表

遺構名	遺構番号	層番号	色	色	土質	備考			
建物1	68 71 72 73 74 84 柱穴	1	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	炭化物僅かに入る			
		1'	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	1と地山ブロックが混ざりあう			
		2	暗灰黄	2.5 Y 3 / 2	中～粗粒砂混じり細粒砂	1より粘性低い 炭化物僅かに入る			
		3	灰	5 Y 4 / 1	細粒砂混じり中～粗粒砂				
		4	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり中粒砂	地山の再堆積層がベースになる			
		5	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり中粒砂	3に似る 地山の粗粒砂ブロック入る			
		6	灰オリーブ	5 Y 4 / 2	細粒砂混じり粗粒砂	地山の再堆積層			
		7	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂				
		8	灰オリーブ	5 Y 4 / 2	細粒砂混じり粗粒砂	地山の再堆積層			
		9	灰	7.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり中粒砂				
		10	黒褐	2.5 Y 3 / 1	中～粗粒砂混じり細粒砂	炭化物僅かに入る			
		11	黄灰	2.5 Y 4 / 1	細粒砂混じり中粒砂	10と地山の粗粒砂ブロックが混ざる			
		12	暗灰黄	2.5 Y 5 / 2	細粒砂混じり中粒砂				
		13	黄灰	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂				
〈3〉柱穴		14	オリーブ黒	7.5 Y 3 / 1	細粒砂混じり中～粗粒砂				
		14'	灰	7.5 Y 4 / 1	細粒砂混じり中～粗粒砂	地山の粗粒砂ブロック入る			
		1	灰	10 Y 4 / 1	粗粒砂混細粒砂				
		2	オリーブ黒	10 Y 3 / 1	細粒砂	1に似るがそれより粘性強い			
		建物2	94柱穴	1	黄灰	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり極細粒砂		
				2	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	中礫混じり細粒砂		
				3	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	細粒砂混じり極細粒砂		
				4	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり細粒砂		
				5	黒	2.5 Y 2 / 1	細粒砂混じり極細粒砂～シルト		
			96柱穴	1	黄灰	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり極細粒砂		
				2	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	中礫混じり細粒砂		
				3	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	細粒砂混じり極細粒砂		
				4	黄灰	2.5 Y 4 / 1	細粒砂混じり極細粒砂		
				5	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	細粒砂混じり極細粒砂		
95・98柱穴			1	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	中礫混じり細粒砂			
			2	黄褐	2.5 Y 5 / 4	中礫混じり細粒砂			
			3	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂			
			4	黄灰	2.5 Y 5 / 1	細粒砂混じり極細粒砂			
		5	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	細粒砂混じり極細粒砂				
		6	黄灰	2.5 Y 4 / 1	細粒砂混じり極細粒砂				
		7	黒褐	2.5 Y 3 / 1	細粒砂混じり極細粒砂	地山ブロック含む			
99柱穴		1	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	中礫混じり細粒砂				
		2	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	細粒砂混じり極細粒砂				
		3	黄灰	2.5 Y 4 / 1	細粒砂混じり極細粒砂				
		4	黒褐	2.5 Y 3 / 1	細粒砂混じり極細粒砂				
111・112柱穴		1	黄灰	2.5 Y 5 / 1	粗粒砂混じり細粒砂				
		2	オリーブ黒	5 Y 2 / 2	中礫混じり細粒砂				
		3	暗灰黄	2.5 Y 5 / 2	中礫混じり細粒砂				
		4	黒褐	2.5 Y 3 / 2	粗粒砂混じり極細粒～シルト				
		5	黄灰	2.5 Y 4 / 1	細粒砂混じり極細粒～シルト				
		6	黒褐	2.5 Y 3 / 2	細粒砂混じりシルト				
		7	黄灰	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり極細粒砂				
		8	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	中礫混じり細粒砂				
		9	暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	細粒砂混じり極細粒砂				
		10	黄灰	2.5 Y 4 / 1	細粒砂混じり極細粒砂				
(19)柱穴		1	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト	粘土ブロック20%入る			
			灰	5 Y 4 / 1		径0.3cm未満の礫少量入る			
		2	灰オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	粘土ブロック30%入る			
			黒褐	2.5 Y 3 / 2		径0.3cm未満の礫少量入る 植物遺体少量入る			
		3	灰オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	粗粒砂ブロック30%程度入る			
			オリーブ褐	5 Y 4 / 3		灰色粘土ブロック10%程度入る			
			黄灰	2.5 Y 4 / 1					
		4	灰	5 Y 4 / 1～4 / 2	粗粒砂混じりシルト				
		(20, 21)柱穴		1	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じりシルト	粗粒砂混じりシルトブロック20%入る	
					暗オリーブ	5 Y 4 / 3		径0.5cm未満の礫少量入る 植物遺体少量入る	
				2	黒褐	2.5 Y 3 / 1	粗粒砂混じりシルト	粗粒砂混じり粘土ブロック20%入る	
					オリーブ黒	5 Y 3 / 2		粗粒砂ブロック20%入る 径0.3cm未満の礫少量入る	
					暗オリーブ	5 Y 4 / 3		炭化物 植物遺体少量入る	
				3	黒	5 Y 2 / 1	粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の礫少量入る	
	オリーブ黒			5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	粗粒砂混じりシルトブロック10%入る			
	オリーブ			5 Y 5 / 4					
(22)柱穴		1	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫僅かに入る			
建物3	(24)柱穴	1	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じりシルト	粘土ブロック30%入る			
		2	黒褐	2.5 Y 3 / 1	粗粒砂混じりシルト	粘土ブロック40%入る			
				オリーブ黒	5 Y 3 / 2		粗粒砂混じりシルトブロック20%入る		
				暗オリーブ	5 Y 4 / 3		径0.3cm未満の礫少量入る		
			3	暗オリーブ	5 Y 4 / 4	粗粒砂混じりシルト	2層に似る 粗粒砂が筋状に入る20%		
			4	オリーブ黒	2.5 Y 3 / 2		径0.3cm未満の礫少量入る		
			5	緑灰	5 G 6 / 1	粗粒砂混じりシルト	4層に近似 シルトブロック10%入る		
	(25)柱穴		1	黒褐	2.5 Y 3 / 1	粗粒砂混じりシルト	粗粒砂混じり粘土ブロック30%入る		
						オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂～シルトブロック20%入る	
						暗オリーブ	5 Y 4 / 3	径0.5cm未満の礫少量入る 植物片入る	
					2	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じりシルト	粗粒砂混じりシルトブロック10%入る
						オリーブ黒	5 Y 3 / 1		径0.3cm未満の礫少量入る
						灰オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	2層に近似 シルトブロック30%入る
	(26)柱穴		1	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	粘土ブロック30%入る		
					オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルトブロック10%入る		

表2-2 建物・柱穴列土層一覽表

遺構名	遺構番号	層番号	色	色	土質	備考	
建物3			灰オリブ	5Y4/2		径0.5cm未満の礫少量入る 炭化物入る	
		2	オリブ黒	5Y3/1	粗粒砂混じりシルト		
		3	灰オリブ	5Y4/2	粗粒砂混じりシルト	2層に粗粒砂混じりシルトブロック30%入る 径0.3cm未満の礫少量入る 軟質	
	116柱穴	1	黒褐	10YR3/1	粗粒砂混じり細粒砂		
		2	黒褐	2.5Y3/1	中礫混じり細粒砂		
		3	黄灰	2.5Y4/1	粗粒砂混じり細～極細粒砂	地山ブロック多く含む	
		4	黒	2.5Y2/1	細粒砂混じり極細粒砂	地山ブロック多く含む	
	117柱穴	1	黄灰	2.5Y4/1	中礫混じり細粒砂	地山ブロックをかなり密に含む	
		2	黒褐	2.5Y3/1	細粒砂混じり極細粒砂	地山ブロックをまばらに含む	
		3	黒褐	2.5Y3/1	細粒砂混じり極細粒砂	地山ブロックを密に含む	
	118柱穴	1	オリブ黒	5Y3/1	中礫混じり細粒砂	地山ブロック含む	
		2	黒褐	2.5Y3/1	粗粒砂混じり極細粒砂		
3		オリブ黒	5Y3/1	細粒砂混じり極細粒～シルト			
4		オリブ黒	5Y3/1	細粒砂混じり極細粒～シルト			
119柱穴	1	黒褐	10YR3/1	粗粒砂混じり細粒砂	地山ブロック 中礫多く含む		
	2	黄灰	2.5Y4/1	粗粒砂混じり細粒砂	まれに中礫含む		
	3	黒褐	2.5Y3/1	粗粒砂混じり細粒砂			
	4	オリブ黒	5Y3/1	細粒砂混じり極細粒～シルト	地山ブロック含む		
120柱穴	1	黒褐	10YR3/1	粗粒砂混じり細粒砂	地山ブロック含む		
	2	黒褐	2.5Y3/1	中礫混じり細粒砂	地山ブロック含む 古墳包含層と若干異なる		
	3	褐灰	10YR4/1	粗粒砂混じり細～極細粒砂	地山ブロック少量含む		
	4	灰	5Y4/1	細粒砂混じり極細粒～シルト	地山ブロック含む		
121柱穴	1	オリブ黒	5Y3/1	中礫混じり細粒砂	地山ブロック～極細粒砂含む		
	2	黄灰	2.5Y4/1	粗粒砂混じり細粒砂	ただし中礫まばらに含む		
	3	黒褐	2.5Y3/1	粗粒砂混じり細粒砂	地山ブロック含む		
	4	オリブ黒	5Y3/1	細粒砂混じり極細粒砂	地山ブロック含む		
	5	黒褐	10YR3/1	粗粒砂混じり極細粒～シルト	地山ブロック含む		
建物4	75・76・ 77・78・ 79・81・ 82・83柱穴	1	灰	5Y5/1	中粒砂混じり細粒砂		
		2	オリブ黒	5Y3/1	細礫混じり細～極細粒砂	地山ブロックを含むことあり	
		3	黒褐	2.5Y3/1	中粒砂混じり極細粒～シルト		
		4	灰	5Y4/1	中粒砂混じり極細粒～シルト		
	80柱穴	5	オリブ黒	5Y3/1	細粒砂混じり極細粒砂		
		6	黒	5Y2/1	細粒砂混じり極細粒砂		
		1	オリブ黄	5Y6/4	細粒砂混じり極細粒砂	地山ブロック含む	
		2	灰	5Y4/1	細粒砂混じり極細粒砂		
		3	灰オリブ	5Y6/2	細粒砂混じり極細粒砂		
		4	オリブ黄	5Y6/3	細粒砂混じり極細粒砂		
建物5	267・269柱 穴	1	オリブ黒	5Y3/2	粗粒砂混じりシルト	土師器片入る 10%入る	
			灰オリブ	5Y4/2	シルトブロック		
		2	オリブ黒	7.5Y3/2	粗粒砂混じりシルト	径0.5%未満の礫入る 炭化物少量入る	
		3	オリブ黒	5Y3/2	粗粒砂混じりシルト	しまり悪い	
			オリブ褐	2.5Y4/3	細粒砂混じり粘土ブロック	40%程度入る 炭化物少量入る	
		4	オリブ黒	5Y3/2	粗粒砂混じりシルト		
		4'	オリブ黒	5Y3/2	粗粒砂混じりシルト	4より軟質	
		5	オリブ黒	7.5Y3/2	粗粒砂混じりシルト		
			灰	10Y6/1	粗～細粒砂質シルト	シルトブロック10%程度入る 5より軟質	
		5'	5層に近似				
	268柱穴	1	暗灰黄	2.5Y4/2	粗粒砂混じりシルト	炭化物片 少量入る	
			黄灰	2.5Y5/1	粘土ブロック	10%程度入る	
			オリブ褐	2.5Y4/3	砂質シルト～細砂ブロック	土器片入る	
		2	灰	5Y4/1	粗粒砂混じりシルト	径0.3%未満の礫少量入る	
			灰	2.5Y4/3	細粒砂ブロック	5%程度入る	
		3	黒褐	5Y3/1	粗粒砂混じりシルト		
		4	黄灰	2.5Y4/1	粗粒砂混じりシルト	径0.2%未満の礫少量入る	
		5	灰	7.5Y4/1	粗粒砂混じりシルト		
		6	オリブ灰	7.5Y3/1	シルト	地山ブロック5%程度入る	
		271柱穴	1	灰	7.5Y4/1	シルト混じり粗粒砂	径0.5cm未満の白色礫少量入る
		272・273柱 穴	1	オリブ黒	7.5Y3/2	粗粒砂混じりシルト	
				灰オリブ	5Y4/2	細粒砂ブロック	30%程度入る
2	黒褐		2.5Y3/2	粗粒砂混じりシルト			
	黄灰		2.5Y4/1	粘土ブロック	20%程度入る		
	オリブ褐		2.5Y4/3	砂質シルト～細粒砂ブロック	20%程度入る 土器片入る		
3	オリブ黒		7.5Y3/2	粗粒砂混じり砂質シルト	径0.4cm未満の礫少量入る		
	オリブ		5Y5/4	細粒砂ブロック	30%入る		
4	オリブ黒		7.5Y3/2	粗粒砂混じり砂質シルト			
5	黒褐		2.5Y3/2	粗粒砂混じりシルト			
312柱穴	1		灰	7.5Y4/1	シルト混じり粗粒砂	径0.5cm未満の白色礫少量入る	
270柱穴	1	オリブ黒	5Y3/2	粗粒砂混じりシルト	土器片入る		
	2	灰	5Y4/1	細粒砂ブロック	20%入る		
	3	オリブ黒	7.5Y3/2	粗粒砂混じり粘土質シルト	植物茎根入る 土器片入る		
	4	オリブ黒	7.5Y3/2	粘土ブロック	40%入る		
	5	オリブ黒	7.5Y3/2	粗砂混じりシルト			
178柱穴	1	オリブ黒	5Y3/2	粗砂混じりシルト	しまる土		
	2	オリブ黒	5Y3/2	粗砂混じりシルト			
		灰オリブ	7.5Y4/2	粗砂混じりシルト	30%入る 径0.3cm～		
	3	オリブ黒	7.5Y3/2	粗砂混じり粘土シルト	軟質 径0.5cm以上の砂礫含む		
	4	灰オリブ	5Y4/2	細砂混じり粘土	軟質 径0.3cm以上の砂礫含む		
建物6	251・252柱 穴	1	オリブ黒	5Y3/2	粗粒砂混じりシルト	径0.2cm未満の礫少量入る	
			オリブ黒	5Y3/2	粘土ブロック	10%入る	
			暗オリブ	5Y4/3	細粒砂ブロック	5%入る	

表2-3 建物・柱穴列土層一覧表

遺構名	遺構番号	層番号	色	色	土質	備考	
建物6		2	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト		
		3	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト		
			灰オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂	10%入る	
		4	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト		
	250・253柱穴	1	灰オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂	30%入る	
			オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	径0.2cm未満の礫少量入る	
			オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粘土ブロック	10%入る	
	249・254・277柱穴	2	暗オリーブ	5 Y 4 / 3	細粒砂ブロック	5%入る	
						3層のマンガン粒集結して褐色化	
			オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	マンガン粒少量入る 径0.2cm未満の礫少量入る	
			オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト		
			灰オリーブ	7.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	30%入る 径0.2cm未満の礫少量入る	
	255・256柱穴	1	オリーブ	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト		
			オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	粘質	
			オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト		
			オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト		
		2	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	30%程度入る	
			オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の白色礫少量入る	
			オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	20%程度入る	
		295柱穴	3	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	10%入る
				オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫僅かに入る
			4	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂	10%入る
	灰オリーブ			5 Y 4 / 2	粗粒砂	30%入る	
	3		オリーブ黒	7.5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト		
オリーブ褐			2.5 Y 4 / 3	細粒砂混じり粘土質シルト	粘土ブロック 10%入る		
オリーブ褐		2.5 Y 4 / 1	粘土ブロック	10%入る 径0.3cm未満の礫少量入る			
建物7	241柱穴	1	オリーブ	2.5 Y 4 / 3	粗粒砂混じりシルト	1層20%入る ややしまり悪い	
			灰オリーブ	7.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	しまり悪い 軟質	
		242柱穴	1	灰	7.5 Y 4 / 1	砂質シルト	
				灰	7.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト	10%入る 径0.5cm未満の礫少量入る
				暗オリーブ褐	2.5 Y 3 / 3	粗粒砂混じりシルト	40%入る しまり悪い
				灰	7.5 Y 4 / 1	砂質シルト	しまりやや良い 径0.8cm未満の礫少量入る 同色 粘土ブロック 10%入る
				オリーブ黒	7.5 Y 3 / 2	細粒砂混じり砂質シルト	炭化物 少量入る しまり悪い
				オリーブ黒	7.5 Y 2 / 2	粗粒砂混じりシルト	やや軟質 しまりやや良い
				オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	
				オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	
				暗オリーブ黒	5 Y 4 / 4	細粒砂ブロック	30%入る
				灰	7.5 Y 4 / 1	粘土ブロック	10%入る しまり悪い
	灰			7.5 Y 4 / 1	砂質シルト	しまりやや良い 径0.8cm未満の礫少量入る 同色 粘土ブロック 10%入る	
	243柱穴	2	オリーブ黒	7.5 Y 3 / 2	細粒砂混じり砂質シルト	炭化物 少量入る しまり悪い	
			オリーブ黒	7.5 Y 2 / 2	粗粒砂混じりシルト	やや軟質 しまりやや良い	
			オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト		
		1	灰	7.5 Y 4 / 1	砂質シルト	245ピット埋土に似るが、それより軟質(2~5層も同じ)	
			灰	7.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト	10%入る 径0.5cm未満の礫少量入る	
			暗オリーブ褐	2.5 Y 3 / 3	粗粒砂混じりシルト	40%入る しまり悪い	
			灰	7.5 Y 4 / 1	砂質シルト	しまりやや良い 径0.8cm未満の礫少量入る 同色 粘土ブロック 10%入る	
			オリーブ黒	7.5 Y 3 / 2	細粒砂混じり砂質シルト	炭化物 少量入る しまり悪い	
		244柱穴	3	オリーブ黒	7.5 Y 2 / 2	粗粒砂混じりシルト	やや軟質 しまりやや良い
				オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	
			1	灰	7.5 Y 4 / 1	砂質シルト	
灰	7.5 Y 4 / 1			粗粒砂混じりシルト	10%入る 径0.5cm未満の礫少量入る		
暗オリーブ褐	2.5 Y 3 / 3			粗粒砂混じりシルト	40%入る しまり悪い		
2	灰		7.5 Y 4 / 1	砂質シルト	しまりやや良い 径0.8cm未満の礫少量入る 同色の粘土ブロック 10%入る		
	オリーブ黒		7.5 Y 3 / 2	細粒砂混じり砂質シルト	炭化物 少量入る しまり悪い		
	オリーブ黒		7.5 Y 2 / 2	粗粒砂混じりシルト	やや軟質 しまりやや良い		
	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト				
	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト				
245柱穴	1	灰	7.5 Y 4 / 1	砂質シルト			
		灰	7.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト	10%入る 径0.5cm未満の礫少量入る		
		暗オリーブ褐	2.5 Y 3 / 3	粗粒砂混じりシルト	40%入る しまり悪い		
	2	灰	7.5 Y 4 / 1	砂質シルト	しまりやや良い 径0.8cm未満の礫少量入る 同色 粘土ブロック 10%入る		
		オリーブ黒	7.5 Y 3 / 2	細粒砂混じり砂質シルト	炭化物少量入る しまり悪い		
246柱穴	4	オリーブ黒	7.5 Y 2 / 2	粗粒砂混じりシルト	やや軟質 しまりやや良い		
		オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト			
		オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト			
	1	灰	7.5 Y 4 / 1	砂質シルト	炭化物 細かい土師片入る しまりやや悪い		
		オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	軟質 しまり悪い		
		オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	軟質 しまり悪い		
		灰	5 Y 4 / 1	細粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫少量入る やや軟質 しまりやや悪い		
	5	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト			
		オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト			
	247柱穴	1	オリーブ黒	7.5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の礫少量入る 植物遺体(茎根)少量入る やや軟質	
暗オリーブ		5 Y 4 / 3	細粒砂混じりシルト	1層ブロック10%入る 径0.8cm未満の礫多量入る			
248柱穴	1	灰	7.5 Y 4 / 1	砂質シルト			
		暗オリーブ	5 Y 4 / 3	粗粒砂混じりシルト	径0.3cmの白色礫少量入る		
建物8	220柱穴	灰	5 Y 4 / 1	シルト	網目状に入る しまり悪い		
		暗灰黄	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫少量入る		
	2	黒褐色	2.5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	40%程度入る		
		黒褐色	2.5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	炭化物少量入る 径0.3cm未満の礫少量入る やや軟質 しまり悪い		

表2-4 建物・柱穴列土層一覧表

遺構名	遺構番号	層番号	色	色	土質	備考
建物8		3	オリーブ黒	5Y3/2	細粒砂混じりシルト	非常に軟質
			オリーブ黒	5Y3/1	粘土ブロック	10%程度入る
	4		灰オリーブ	5Y4/2	粗粒砂混じりシルト	しまりやや悪い 径0.3cm未満の礫少量入る
			灰	5Y4/1	シルトブロック	10%程度入る
	5		オリーブ黒	7.5Y3/2	粗粒砂 粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の礫少量入る
			灰	5Y4/1	シルトブロック	10%程度入る
221柱穴	1		オリーブ黒	7.5Y3/2	粗粒砂混じりシルト～シルト	炭化物少量入る 径0.3cm未満の礫少量入る
	2		オリーブ黒	5Y3/1	粗粒砂混じりシルト	
	3		灰オリーブ	5Y4/2	粗砂混じり粘土質シルト	径0.3cm未満の礫少量入る
	4		オリーブ黒	5Y3/1	細砂混じり粘土質ブロック	
222柱穴	1		オリーブ黒	5Y3/2	粗粒砂混じりシルト	
			灰オリーブ	5Y4/2	シルトブロック	30%入る
212柱穴	1		オリーブ黒	5Y3/2	粗粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫少量入る
			オリーブ黒	5Y3/1	粘土ブロック	20%入る
	2		オリーブ黒	5Y3/2	粗粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫少量入る
			灰オリーブ	5Y4/2	シルトブロック	30%入る
	3		オリーブ黒	5Y3/2	粗粒砂混じりシルト	炭化物少量入る 径0.3cm未満の礫少量入る
	4		オリーブ黒	7.5Y3/1	粗粒砂～粘土質シルト	しまり悪い 軟質 径0.3cm未満の礫少量入る
	5		オリーブ黒	5Y3/1	粗粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫少量入る 非常に軟質 植物遺体少量入る
213柱穴	1		オリーブ黒	5Y3/2	粘土30% 粗粒砂混じりシルト40%	混合層
			灰オリーブ	5Y4/2	シルト	
	2		灰	10Y4/1	砂質シルト	軟質 黒色化する
	3		オリーブ黒	5Y3/1	シルト	径0.3cm未満の礫少量入る
			暗灰黄	2.5Y4/2	粗粒砂混じりシルト	網目状に入る 10%入る
			黄褐	2.5Y5/3	粗粒砂混じりシルトブロック	10%入る
	4		オリーブ黒	7.5Y3/2	粗粒砂混じり粘土 同色粗粒砂混じり粘土ブロック	30%入る
			黒褐	2.5Y3/2	シルトブロック	10%入る 軟質 しまりやや悪い
	5		オリーブ黒	7.5Y3/2	粗粒砂混じりシルト	
214柱穴	1		オリーブ黒	5Y3/1	シルト	径0.3cm未満の礫少量入る
			暗灰黄	2.5Y4/2	粗粒砂混じりシルト	網目状に入る 10%入る
			黄褐	2.5Y5/3	粗粒砂混じりシルトブロック	10%入る
	2		オリーブ黒	7.5Y3/2	粗粒砂混じり粘土	30%入る
			黒褐	2.5Y3/2	シルトブロック	10%入る 軟質 しまりやや悪い
	3		オリーブ黒	5Y3/2	粗粒砂混じりシルト	下位は粘質化する
			暗オリーブ	5Y4/3	シルトブロック	水平方向に10%入る 下位軟質
215柱穴	1		オリーブ黒	5Y3/2	細粒砂混じりシルト～シルト	径0.3cm未満の礫少量入る 下位軟質化
			暗灰黄	2.5Y4/2	細粒砂混じりシルトブロック	20%入る しまり悪い
	2		オリーブ黒	5Y3/2	細粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫少量入る
			黒褐	2.5Y3/2	シルトブロック	20%入る
			灰オリーブ	5Y4/2	粗粒砂混じりシルトブロック	10%入る 炭化物少量入る 土器片あり
	3		オリーブ黒	5Y3/2	細粒砂混じり粘土～シルト	
			オリーブ黒	5Y3/2	細粒砂混じりシルトブロック	30%入る
	4		オリーブ黒	5Y3/1	粗粒砂混じりシルト	
	5		オリーブ黒	7.5Y3/2	粗砂混じりシルトブロック	30%入る 軟質
216柱穴	1		黒褐	2.5Y3/2	粗砂混じり粘土シルト	細かい土器片入る しまり良い
			オリーブ黒	7.5Y3/2	細砂～シルトブロック	30%入る
	2		オリーブ黒	5Y3/2	粗砂混じり粘土質シルト	
	3		オリーブ黒	7.5Y3/1	粗粒砂混じり粘～粘土質シルト	軟質
217柱穴	1		黒褐	2.5Y3/2	粗砂混じり粘土シルト	細かい土器片入る しまり良い
			オリーブ黒	7.5Y3/2	細砂～シルトブロック	30%入る
	2		オリーブ黒	5Y3/2	粗砂混じりシルト	しまり悪い
	3		オリーブ黒	5Y3/1	粗砂混じり粘土質シルト	
			灰オリーブ	5Y5/3	粗砂ブロック	10%入る
218柱穴	1		黒褐	2.5Y3/2	粗砂混じり粘土シルト	細かい土器片入る しまり良い
			オリーブ黒	7.5Y3/2	細砂～シルトブロック	30%入る
	2		黒褐	2.5Y3/1	細砂まじりシルト 粗砂ブロック	10%入る
			オリーブ褐	2.5Y4/3	粘土質シルト	20%入る
	3		灰オリーブ	5Y4/2	粗砂混じりシルト	しまり悪い
			黒褐	5Y3/2	粘土質シルトブロック	20%入る
	4		オリーブ黒	7.5Y3/1	粗粒砂混じり粘～粘土質シルト	軟質
219柱穴	1		オリーブ褐	2.5Y4/3	細粒砂混じり砂質シルトブロック	40%入る
			黒褐色	2.5Y3/2	粗粒砂混じりシルトブロック	30%入る
			黒褐色	5Y3/1	細粒砂混じり粘土ブロック	径0.3cm未満の礫少量入る
	2		黒褐色	2.5Y3/2	細粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫少量入る しまり悪い
	3		暗灰黄	2.5Y4/2	細粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫少量入る
	4		オリーブ黒	5Y3/1	粗粒砂混じりシルト	
			灰	5Y4/1	細粒砂ブロック	20%入る やや軟質
223柱穴	1		オリーブ黒	5Y3/2	粗粒砂混じりシルト	
			灰オリーブ	5Y4/2	粘土ブロック	20%入る
	2		灰	7.5Y4/1	粗粒砂混じりシルト	
	3		オリーブ黒	7.5Y3/1	粗粒砂混じりシルト	しまり悪い 軟質
	4		灰	7.5Y4/1	細粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫少量入る 炭化物片 多量に入る しまり悪い
	5		灰	7.5Y4/1	細粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の礫小入る しまり悪い
224柱穴	1		黒褐	2.5Y3/2	粗粒砂混じり粘土シルト	細かい土器片入る しまり良い
			オリーブ黒	7.5Y3/2	細粒砂～シルトブロック	30%入る
	2		オリーブ黒	7.5Y3/1	粗粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫少量入る 土師片入る
			1層に近似			ややしまり悪い
	4		灰オリーブ	5Y4/2	粗粒砂混じりシルト	5) 層ブロック20%入る
	5		灰オリーブ	7.5Y4/2	粗粒砂混じりシルト	よくしまる 径0.5%の礫少量入る
225柱穴	1		黒褐	2.5Y3/2	粗粒砂混じりシルト	細かい土器片入る しまり良い
			オリーブ黒	7.5Y3/2	細粒砂～シルトブロック	30%入る
	2		黒褐	2.5Y3/1	細粒砂まじりシルト	粗粒砂ブロック 10%入る

表2-5 建物・柱穴列土層一覧表

遺構名	遺構番号	層番号	色	色	土質	備考				
建物8	225柱穴	2	オリーブ褐	2.5Y 4 / 3	シルト	20%入る				
		3	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じりシルト					
				灰	7.5Y 5 / 1	細粒砂ブロック	10%入る しまり悪い			
				灰	7.5Y 5 / 1	細粒砂ブロック	ややしまり悪い			
	226柱穴	1	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト					
				オリーブ黒	7.5Y 3 / 1	シルトブロック	40%入る しまり悪い			
				2	オリーブ灰	10Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫中量入る		
				3	灰オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の礫中量入る		
	227柱穴	1		黒褐	2.5Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	細かい土器片入る しまり良い			
				オリーブ黒	7.5Y 3 / 2	細粒砂～シルトブロック	30%入る			
		2		オリーブ黒	7.5Y 3 / 2	細粒砂混じりシルト				
					灰	5 Y 5 / 1	シルトブロック	10%入る しまり悪い 径0.3cm未満の礫少量入る		
					3	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト	しまり悪い	
						灰オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり砂質シルトブロック	10%入る	
				灰オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり砂質シルト				
				灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルトブロック	10%入る 径0.5cm未満の礫多量入る			
建物10	191・202・201・200・199柱穴	1	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト					
				灰オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり粘土ブロック	20%入る			
					灰オリーブ	5 Y 5 / 2	粗粒砂ブロック	10%入る 径0.3cm未満の礫少量入る よくしまる 炭化物、土師片入る		
					2	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	しまり悪い 軟質	
					3	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	しまり悪い 軟質	
					4	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	しまり悪い 軟質 5層ブロック20%入る	
					5	灰オリーブ	7.5Y 4 / 2	シルト混じり粗粒砂～シルト	しまり悪い 軟質	
	196・195・194・197・193柱穴	1		暗灰黄	2.5Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	しまりやや悪い			
					オリーブ褐	2.5Y 4 / 3	シルトブロック	20%入る 径0.3%未満の礫少量入る		
		2		黒褐	2.5Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	同色粘土ブロック10%入る			
					暗褐	10Y 3 / 4	シルトブロック	20%入る しまりやや悪い		
					3	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質	
						4	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	3層ブロック10%入る 地山ブロック10%入る しまり悪い 軟質
						5	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト～砂質シルト	しまりやや良い
	198柱穴	1		オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト				
					灰オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり粘土ブロック	20%入る		
						灰オリーブ	5 Y 5 / 2	粗粒砂ブロック	10%入る 径0.3cm未満の礫少量入る よくしまる 炭化物、土師片入る	
						2	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	しまり悪い 軟質
						3	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	しまり悪い 軟質 5層ブロック20%入る
					4	灰オリーブ	7.5Y 4 / 2	シルト混じり粗粒砂～シルト	しまり悪い 軟質	
					5	灰	7.5Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト		
						灰	7.5Y 4 / 1	粘土ブロック	10%入る 径0.3%未満の礫少量入る 炭化物少量入る	
建物11	203・204・205柱穴	1		オリーブ黒	5 Y 3 / 2	細粒砂混じりシルト	40%混合層			
					オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粘土ブロック	30%混合層 しまり良い		
						灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり砂質シルト	30%混合層	
					2	灰オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり砂質シルト	下位軟質 しまりやや悪い	
					3	灰オリーブ	5 Y 4 / 2	シルト		
	206柱穴	1		緑灰黄	2.5Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト～シルト	ブロック30%入る			
					緑灰	5 G 6 / 1	粗粒砂混じりシルト～シルト	径0.3cmの礫少量入る		
						オリーブ黒	5 Y 3 / 2	細粒砂混じりシルトブロック	細粒砂混じりシルトブロック20%入る	
	207柱穴	1		オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト				
					灰オリーブ	5 Y 5 / 3	粗粒砂ブロック	10%入る		
						灰オリーブ	7.5Y 4 / 1	微粒砂ブロック	20%入る	
					2	灰オリーブ	7.5Y 4 / 2	微粒砂～シルト		
	208柱穴	1		オリーブ黒	5 Y 3 / 2	シルトブロック	10%入る 径0.3cm未満の礫少量入る			
					暗灰黄	2.5Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト			
					オリーブ褐	2.5Y 4 / 3	シルト～粗粒砂ブロック	20%入る ややしまり良い		
						2	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	
						オリーブ灰	10Y 4 / 2	細粒砂ブロック	10%入る	
						3	オリーブ灰	10Y 4 / 2	細粒砂～シルト	径0.3cm未満の礫少量入る
						209・210柱穴	1	暗灰黄	2.5Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト
							オリーブ褐	2.5Y 4 / 3	シルト～粗粒砂ブロック	20%入る ややしまり良い
						2	灰オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	
							オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルトブロック	30%入る しまり悪い
						3	2層に近似		ややしまり良い	
						灰	7.5Y 4 / 1	粗粒砂混じり砂質シルト		
						オリーブ褐	2.5Y 4 / 3	シルトブロック	20%入る しまり悪い	
						灰	7.5Y 4 / 1	粗粒砂混じり砂質シルト		
						黄灰	2.5Y 4 / 1	シルト	20%入る しまり悪い	
211柱穴	1		暗灰黄	2.5Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト～シルト	径0.4cm未満の礫少量入る しまり悪い				
				暗灰黄	2.5Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト				
	2			黒褐	2.5Y 3 / 2	粘土ブロック	20%入る ややしまり悪い 径0.5cm未満の礫少量入る			
					オリーブ褐	2.5Y 4 / 3	粗粒砂混じり砂質シルト	ややしまり良い 径0.3cm未満の礫少量入る		
建物12	236・238・239・240柱穴	1	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト					
				灰	7.5Y 4 / 1	細粒砂混じりシルトブロック	10%入る 径0.5cm未満の礫少量入る 炭化物小片			
					2	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	軟質 しまり悪い	
					3	オリーブ黒	7.5Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫少量入る 土師片入る しまり悪い 軟質	
	237柱穴	1	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト					
				灰	7.5Y 4 / 1	細粒砂混じりシルトブロック	10%入る 径0.5cm未満の礫少量入る 炭化物小片			
					2	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	細粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫少量入る	

表2-6 建物・柱穴列土層一覽表

遺構名	遺構番号	層番号	色	色	土質	備考
建物13		3	灰オリーブ	5Y4/2	粗粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の礫少量入る しまり悪い
	38柱穴	1	黄灰	2.5Y4/1	粗粒砂混じり細粒砂	
		2	暗灰黄	2.5Y4/2	粗粒砂混じり細粒砂	1に似るがそれより粘性低い
		3	灰オリーブ	5Y4/2	細粒砂混じり中～粗粒砂	
		4	オリーブ黒	5Y3/1	粗粒砂混じり細粒砂	地山のシルトブロックが僅かに入る
	37柱穴	1	灰	7.5Y4/1	中粒砂混じり細粒砂	粗粒砂僅かに入る
		2	灰	5Y4/1	細粒砂混じり中～粗粒砂	
		3	灰	7.5Y4/1	細粒砂混じり中～粗粒砂	2に似るがそれより粘性低い 炭化物僅かに入る
		4	オリーブ褐	2.5Y4/3	中粒砂混じり粗粒砂	地山の再堆積層
		5	黄灰	2.5Y4/1	細粒砂混じり中粒砂	
柱穴列1	108柱穴	1	黄灰	2.5Y4/1	中粒砂混じり細粒砂	
		2	暗灰黄	2.5Y4/2	細粒砂混じり中粒砂	地山の黄褐色シルトブロック含む
	103柱穴	2	黄灰	2.5Y4/1	粗粒砂混じり中～細粒砂	炭化物僅かに含む
		10	暗灰黄	2.5Y4/2	細粒砂混じり中粒砂	地山の黄褐色シルトブロック入る
	100・101・102柱穴	1	褐灰	10YR4/1	粗粒砂混じり細粒砂	
		2	黄灰	2.5Y4/1	粗粒砂混じり中～細粒砂	炭化物僅かに含む
		3	黒褐	2.5Y3/1	粗粒砂混じり砂～細粒砂	地山のシルトブロック含む
		4	褐灰	10YR4/1	細粒砂混じり中粒砂	
		5	黄灰	2.5Y4/1	細粒砂混じり中粒砂	
		6	灰	5Y4/1	中粒砂混じり細粒砂	
		7	灰	7.5Y4/1	粗粒砂混じり中～細粒砂	地山の緑灰色中～細粒砂ブロック入る
柱穴列2	91・92・93柱穴	1	灰	5Y4/1	中粒砂混じり細粒砂	炭化物含む
		2	暗灰黄	2.5Y4/2	細粒砂混じり粗粒砂	
		3	黒褐	2.5Y3/2	粗粒砂混じり中～細粒砂	
		4	灰オリーブ	5Y4/2	粗粒砂混じり細粒砂	地山シルトの再堆積層
		5	暗灰黄	2.5Y5/2	粗粒砂混じり中～細粒砂	
		6	黒褐	2.5Y3/2	粗粒砂混じり細粒砂	
		7	黄灰	2.5Y4/1	粗粒砂混じり中～細粒砂	
		8	暗灰黄	2.5Y4/2	粗粒砂混じり中～細粒砂	
		9	灰	5Y4/1	粗粒砂混じり細粒砂	
		10	灰オリーブ	5Y4/2	中～粗粒砂混じり細粒砂	
	110・109柱穴	1	オリーブ黒	5Y3/1	細粒砂混じり中～粗粒砂	炭化物僅かに入る
		2	黄灰	2.5Y4/1	粗粒砂混じり細粒砂	炭化物僅かに入る
		3	暗灰黄	2.5Y4/2	細粒砂混じり中～粗粒砂	炭化物僅かに入る 地山の粗砂ブロック入る
柱穴列3	55柱穴	1	灰	5Y4/1	粗粒砂～礫混じり細粒砂	
		2	灰	7.5Y4/1	中～粗粒砂混じり細粒砂	1に似るがそれより粘性低い
		3	オリーブ黒	5Y3/1	細粒砂混じり中～粗粒砂	
	85・86柱穴	1	黄灰	2.5Y4/1	粗粒砂混じり細粒砂	地山の細粒砂ブロックが混ざる 炭化物僅かに入る
		2	暗灰黄	2.5Y4/2	中～粗粒砂混じり細粒砂	地山の中～粗粒砂の再堆積層をベースに1のブロックが僅かに入る
		3	オリーブ黒	5Y3/1	中～粗粒砂混じり細粒砂	1に似るがそれより粘性低い
		4	灰	5Y4/1	細粒砂混じり中～粗粒砂	
		5	灰オリーブ	5Y4/2	細粒砂混じり中～粗粒砂	地山の中～粗粒砂ブロックが混入する
柱穴列4	172・173・174・175柱穴	1	黒褐	7.5Y3/2	細粒砂混じりシルト	
			灰オリーブ	5Y4/2	細粒砂ブロック30%入る	
			オリーブ褐	2.5Y4/3	砂質シルトブロック20%入る	炭化物、土器片入る しまり良い
		2	灰	7.5Y4/1	粗粒砂混じりシルト	
			灰	7.5Y4/1	粘土ブロック20%	
			灰オリーブ	5Y4/2	細粒砂ブロック20%	
			オリーブ黒	5Y3/1	粘土ブロック20%	しまり悪い
		2'			2層よりさらにしまり悪く軟質	
		3	暗灰黄	2.5Y4/2	粗粒砂混じりシルト	しまり悪い やや軟質
		3'	暗灰黄	2.5Y4/2	粗粒砂混じりシルト	しまり悪い さらに軟質
柱穴列5	157・158・313柱穴	1	暗オリーブ褐	2.5Y3/3	粘質シルト	しまり悪い 土器片入る 径0.3cm未満の礫少量入る
		2	黒褐	2.5Y3/2	粗粒砂混じりシルト	軟質
		3	黄褐	2.5Y5/4	粗粒砂混じりシルト	
			黄褐	2.5Y5/4	粗粒砂ブロック	40%入る
柱穴列6	257柱穴	1	黒褐	7.5Y3/2	細粒砂混じりシルト	
			灰オリーブ	5Y4/2	細粒砂ブロック30%入る	
			オリーブ褐	2.5Y4/3	砂質シルトブロック20%入る	炭化物 径5mm未満の礫少量入る しまり悪い
		2	灰	5Y4/1	粗粒砂混じりシルト	
			灰	5Y4/1	シルトブロック10%入る	しまり悪い 5mm未満の礫少量入る
		3	オリーブ黒	7.5Y3/1	粘土質シルト～粘土	しまり悪い 粘質
			オリーブ黒	5Y3/1	粗粒砂混じりシルトブロック20%入る	径5mm未満の礫僅かに入る
		4	オリーブ黒	5Y3/1	シルト	
			灰	5Y4/1	シルトブロック20%入る	径5mm未満の礫僅かに入る 軟質
		5	1層に近似			しまり良い
		6	2層に近似			しまりやや良い
		7	オリーブ灰	7.5Y4/2	粗粒砂混じりシルト	植物遺体入る やや軟質 径5mm未満の礫少量入る
		8	オリーブ灰	5Y3/1	粘土～粗粒砂混じり粘土	軟質 径5mm未満の礫少量入る
	258・259柱穴	1	暗オリーブ褐	2.5Y3/3	粗粒砂混じりシルト	径3mm未満の礫少量入る 植物遺体多量入る 軟質 しまり悪い
		2	オリーブ褐	7.5Y3/2	細粒砂混じりシルト	
			オリーブ褐	7.5Y3/2	粘土ブロック40%入る	軟質
		3	灰	10Y4/1	粗粒砂混じりシルト	径3mm未満の礫多量入る しまり悪い 軟質
		4	オリーブ黒	7.5Y3/1	シルト	
			オリーブ黒	5Y3/1	粗粒砂混じりシルトブロック20%入る	径5mm未満の礫僅かに入る
		5	オリーブ黒	5Y3/1	粗粒砂混じりシルト	
			灰オリーブ	5Y4/2	シルト筋状に入る	しまり悪い 軟質

表2-7 建物・柱穴列土層一覧表

遺構名	遺構番号	層番号	色	色	土質	備考	
柱穴列7	182・183柱穴	6	灰	7.5Y 5 / 1	地山ブロック10%入る	しまり悪い 軟質	
		1	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粗粒砂混じり粘土質シルト40%入る	径3mm未満の礫少量入る	
			オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粘粒土ブロック10%入る		
柱穴列7			オリーブ黒	7.5Y 3 / 2	細粒砂混じりシルトブロック30%入る		
			暗オリーブ	7.5Y 4 / 3	細粒砂ブロック20%入る	植物遺体多量に入る 土器片入る	
		2	オリーブ黒	7.5Y 3 / 2	細粒砂混じり粘土質シルト	径2mm未満の礫少量入る やや軟質	
		3	オリーブ黒	7.5Y 3 / 2	細粒砂混じり粘土質シルト		
			暗オリーブ	5 Y 4 / 3	粗粒砂混じりシルトブロック20%入る	軟質	
186柱穴		4	オリーブ黒	7.5Y 3 / 2	細粒砂混じり粘土質シルト	径3mm未満の礫少量入る 軟質	
		5	オリーブ黒	7.5Y 3 / 2	細粒砂混じり粘土～シルト		
		1	183-1層に同	5 G 6 / 1	微砂ブロック10%入る		
		2～5	183に同				
柱穴列8	285柱穴	1	オリーブ黒	10Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト		
			黄褐	2.5Y 5 / 4	細粒砂ブロック10%入る	径3mm未満の礫少量入る 炭化物含む しまり悪い	
		2	オリーブ黒	10Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	しまりやや悪い	
	286柱穴	1	オリーブ黒	10Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト		
		2	黄褐	2.5Y 5 / 4	細粒砂ブロック10%入る	径3mm未満の礫少量入る 炭化物含む しまり悪い	
		3	黒褐	2.5Y 3 / 2	粗粒砂混じり粘土質シルト	径5mm未満の礫少量入る	
	287柱穴	1	オリーブ黒	10Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト		
		2	黄褐	2.5Y 5 / 4	細粒砂ブロック10%入る	径3mm未満の礫少量入る 炭化物含む しまり悪い	
		3	オリーブ黒	7.5Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	しまり悪い	
	柱穴列9	283・284柱穴	1	暗灰黄	2.5Y 5 / 2	粗粒砂混じり細粒砂	
2			黄灰	2.5Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	1に似るがそれより粗粒砂の含有量高い	
3			褐灰	10Y R 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	径2mm大の花崗岩礫含む	
4			暗灰黄	2.5Y 4 / 2	細粒砂混じり中粒砂	地山の花崗岩パイラン土に似るが、それより粘性あり	
5			オリーブ褐	2.5Y 4 / 3	細粒砂混じり中粒砂～粗粒砂		
6			黄灰	2.5Y 4 / 1	細粒砂混じり中粒砂～粗粒砂	3に似るが、それより粘性強い	
柱穴列10	132・133 134柱穴	1	にぶい黄褐	10Y R 4 / 3	細粒砂混じり中～粗粒砂		
		2	灰黄褐	10Y R 4 / 2	細粒砂混じり中～粗粒砂		
		3	褐灰	10Y R 4 / 1	細粒砂混じり中粒砂		
		4	黒褐	2.5Y 3 / 1	中～粗粒砂混じり細粒砂		
		12	黒褐	10Y R 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂		
		13	黒褐	2.5Y 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	12に似るがそれより粘性低い	
柱穴列11	104・105 106・132・ 135柱穴	1	にぶい黄褐	10Y R 4 / 3	細粒砂混じり中～粗粒砂		
		2	灰黄褐	10Y R 4 / 2	細粒砂混じり中～粗粒砂		
		3	褐灰	10Y R 4 / 1	細粒砂混じり中粒砂		
		4	黒褐	2.5Y 3 / 1	中～粗粒砂混じり細粒砂		
		5	暗灰黄	2.5Y 4 / 2	中粒砂混じり細粒砂	径2mm大の礫入る	
		6	灰黄褐	10Y R 4 / 2	中粒砂混じり細粒砂	径2mm大の礫入る	
		7	オリーブ黒	5 Y 3 / 2	細粒砂混じり中～粗粒砂	地山の粗砂ブロック入る	
		8	灰オリーブ	5 Y 4 / 2	細～中粒砂混じり粗粒砂	地山の再堆積層	
		9	褐灰	10Y R 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂		
		10	黄灰	2.5Y 4 / 1	中～粗粒砂混じり細粒砂	径5mm以下の礫入る	
		11	灰	5 Y 4 / 1	細粒砂混じり中～粗粒砂		
柱穴列12	129・130・ 131柱穴	1	黒褐	2.5Y 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂		
		2	灰	5 Y 4 / 1	中粒砂混じり細粒砂		
		3	黄灰	2.5Y 4 / 1	中粒砂混じり細粒砂	2に似るがそれより粘性あり	
		4	暗灰黄	2.5Y 4 / 2	中～粗粒砂混じり細粒砂		
		5	灰	5 Y 4 / 1	細粒砂混じり中粒砂		
柱穴列13-14	52・66柱穴	1	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	細粒砂混じり細粒砂		
		2	灰	5 Y 4 / 1	中粒砂混じり細粒砂		
		3	灰	5 Y 5 / 1	中粒砂混じり細粒砂		
		4	黒褐	2.5Y 3 / 1	細粒砂混じり極細粒砂		
	46柱穴	1	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	細粒砂混じり細粒砂		
		2	灰	5 Y 4 / 1	中粒砂混じり細粒砂		
		3	灰	5 Y 5 / 1	中粒砂混じり細粒砂		
		4	黒褐	2.5Y 3 / 1	細粒砂混じり極細粒砂		
		12	灰オリーブ	5 Y 5 / 2	細粒砂混じり細粒砂		
		47・50・ 51・53・ 54・64・65 柱穴	1	オリーブ黒	5 Y 3 / 1	細粒砂混じり細粒砂	
			2	灰	5 Y 4 / 1	中粒砂混じり細粒砂	
			3	灰	5 Y 5 / 1	中粒砂混じり細粒砂	
			4	黒褐	2.5Y 3 / 1	細粒砂混じり極細粒砂	
			5	灰オリーブ	5 Y 4 / 2	細粒砂混じり細粒砂	
			6	灰	5 Y 4 / 1	細粒砂混じり細粒砂	
7	灰		5 Y 5 / 1	中粒砂混じり細粒砂			
8	灰		5 Y 6 / 1	中粒砂混じり細粒砂			
9	灰		5 Y 5 / 1	中粒砂混じり細粒砂			
10	灰		5 Y 6 / 1	中粒砂混じり細粒砂			
11	灰		5 Y 6 / 1	中粒砂混じり細粒砂			
12	灰オリーブ		5 Y 5 / 2	細粒砂混じり細粒砂			
13	灰		5 Y 5 / 1	細粒砂混じり細粒砂			
14	灰		5 Y 4 / 1	中粒砂混じり細粒砂			
15	黒褐		2.5Y 3 / 1	中粒砂混じり細粒砂			

表3-1 土器・土製品・石器等観察表

遺物番号	出土遺構名・層名	種別 器種	口径 器高	その他の法量	色調		形態・手法の特徴	残存率	備考
					胎土	焼成			
1	12竪穴住居	須恵器 杯身	12.0 (2.7)		内: 7.5Y7/1灰白 外: 7.5Y7/1灰白 断: 7.5Y7/1灰白 胎土: 緻密 焼成: ややあまい		受部は短くほぼ水平に張り出し、端部は丸みを帯びる。立ち上がりは短く内傾し、口縁端部はやや丸い。底部を欠損するが残存部分は内外面とも回転ナデで調整する。	10%	口縁部の残存率が低いため、口径には誤差が含まれる可能性あり。最大でも14cmまで。
2	12竪穴住居	土師器 壺	14.4 (4.7)	頸部径13.2	内: 10YR6/2灰黄褐 外: 7.5YR6/3にぶい褐・黒班部分 7.5Y4/2灰褐 胎土: 径1cm以下の長石と若干の雲母、赤色粒を含む 焼成: 良好		口縁部は内外面ともヨコナデ。口縁端部はつまみ上げ、丸くおさめる。体部外面は摩滅しており、調整痕は明瞭でないが、ナデとみられる。体部内面は強いヨコナデ。	30%	頸部径の復元値から口縁径をもとめた。
3	12竪穴住居	土師器 壺	13.0 (6.7)		内: 5YR6/3にぶい橙、5/2灰褐 外: 5YR6/4にぶい橙、4/1褐灰 断: 5YR6/3にぶい橙 胎土: 緻密 焼成: 良好		口縁部は内外面ともヨコナデ。口縁端部はつまみ上げて丸くおさめる。体部外面は摩滅しており、ユビオサエの痕跡のみ残る。体部内面は頸～胴部に粘土の年度の接合痕が残る。ユビオサエの後ヘラケズリが施したと見られるが、摩滅により調整痕は不明瞭。	口縁部40%	内外面ともうつすらと煤付着。
4	12竪穴住居	須恵器 壺	21.2 (4.8)	頸部径17.5	内: 5Y5/2灰オリーブ 外: 5PB6/1青灰 断: N5/灰 胎土: 径0.5mm以下の長石含む 焼成: 良好		口頸部は外反して立ち上がる。口縁部で下方に肥厚させ、面を成す。残存する口頸部の調整は、内外面とも回転ナデで、内面に多く自然釉がかかるが、外面の屈曲部分にもわずかに釉がかかる。	10%以下	
5	298ピット (柱穴列7)	須恵器 高杯	— (3.9)	杯部最大径19	被釉部分: 2.5GY3/1暗オリーブ灰 無釉部分: 10Y5/1灰 断面: 2.5Y5/2暗灰黄 胎土: 径1mm以下の長石含む(わずかに径3mm大のものも入る) 焼成: 良好		薄い粘土板を折り曲げて取り付け把手とし、その後には波状文を施す。上方から自然釉がかり、わずかに造りだされた受部にはガラス状の釉の被膜が付着する。底部外面には左回りの回転ヘラケズリが施され、それ以外は回転ナデが施される。	杯部15%	杯部に焼けて火ぶくれしている部分があるため、杯の復元最大径は19cmをやや下まわる可能性あり。
6	(25)柱穴 (建物3)	土師器 鉢か?	— (2.9)		5YR6/6橙 胎土: 雲母と径0.5mm以下の長石含む 焼成: 良好		口縁部はやや内湾しつつ外方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。体部内面から口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデを施す。体部外面はナデとみられるが、器壁の剥落により調整痕は不明瞭である。	破片	口縁の残存部分がわずかなため、器形の傾きは推定による。
7	121柱穴(建物3)	須恵器 高杯	— (2.8)	底部10.0	内: N5/灰 外: N5/灰 断: N5/灰 胎土: 緻密 焼成: 良好		脚柱部はやや外反気味に広がり、裾部で屈曲し内湾する。屈曲部の外面に浅い凹線が3条めぐる。裾端部は内傾する凹面を呈する。内外面とも回転ナデで仕上げられる。	10%	
8	199柱穴 (建物10)	須恵器 杯蓋	— (2.4)	体部高1.7	表面: N4/0灰 断面: 7.5YR5/2灰褐 胎土: 径1mm以下の長石が含まれる 焼成: 良好		縁線部分は一条の凹線に置き換わっており、鈍い。口縁端部はやや鋭く、内側に段を有している。欠損している天井部を除くと、回転ナデで仕上げる。	破片	口縁部の残存率が低いため(1/8以下)口径は特定できないが、おそらく10~12cmの中に含まれるとみられる。
9	37柱穴(建物13)	須恵器 杯身	— (3.6)		内: N6/灰 外: N6/灰 断: N6/灰 胎土: 緻密 焼成: 良好		底部は欠損するが、体部外面下半部に回転ヘラケズリの痕跡が若干認められる。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。受部はほぼ水平で端部はやや鋭い。やや外反気味に口縁部が立ち上がる。	10%	口縁部の残存がわずかなため、口径は特定できない
10	15溝	須恵器 杯蓋	13.7 4.0		内: N6/灰 外: N6/灰 断: N6/灰 胎土: 緻密 焼成: 良好		平坦な天井部分外面に右回りの回転ヘラケズリが施され、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。天井部と体部の境にはわずかな屈曲が残るのみである。口縁部内面がわずかに凹面を呈し、口縁端部はやや鋭い。	25%	
11	15溝	須恵器 杯蓋	13.6 (3.5)		N6/灰 胎土: 緻密 焼成: 良好		天井部はほぼ欠損するが、やや丸みを帯びる形状だったとみられ、右回りのヘラ切り後、無調整だったことが伺える。縁線はなく、天井部と体部の境にわずかな屈曲が残るのみである。口縁内面に凹面を作りだしつつ、端部に丸みを持たせる。底部外面以外は回転ナデで仕上げている。	10%	口縁の残存部分がわずかなため、復元口径には誤差を含む可能性あり
12	15溝	土師器 壺	14.8 (5.5)		内: 10YR7/2にぶい黄褐、4/2灰黄褐 外: 10YR6/2灰黄褐、7/2にぶい黄橙 断: 10YR7/2にぶい黄褐 胎土: 緻密 焼成: 良好		口縁部内面には横方向のハケ、体部外面には縦方向のハケ調整をおこなう。体部内面はヘラケズリ、口縁部から体部上端にかけてはヨコナデを施す。口縁端部はわずかにつまみ上げ、丸く仕上げる。	口縁部25%	内面全体にうつすらと煤付着
13	15溝	土師器 高杯	13.7 (3.1)		内: 7.5YR7/3にぶい橙 外: 10YR8/3浅黄橙 断: 2.5Y6/2灰黄 胎土: 緻密 焼成: ややあまい		杯部の上半のみ残存する。体部外面にわずかに縦方向のハケ調整が残存する。口縁部付近と体部内面はナデ調整を施すとみられるが、摩滅のため調整痕は不明瞭である。	口縁部25%	

単位: cm () : 残存値 - : 計測不可能 / : 計測項目無

表3-2 土器・土製品・石器等観察表

遺物番号	出土遺構名・層名	種別 器種	口径 器高	その他の法量	色調		形態・手法の特徴	残存率	備考
					胎土	焼成			
14	15溝	土師器 鉢	5.5 3.7		内:10YR7/3にふい黄橙	胎土:緻密・径2mm以下の白砂粒と、若干の赤色粒を含む	底部内面と体部外面にユビオサエの痕跡が残る。成形後はナデで仕上げたとみられる。	50%	口縁の残存部分がわずかなため、復元口径には誤差を含む可能性あり。ミニチュア
					外:10YR7/2にふい黄橙				
					断:10YR7/2にふい黄橙				
					焼成:ややあまい				
15	15溝	土師器 甕(平底鉢か?)	13.4 (9.9)		内:10YR4/1灰褐	胎土:緻密	口縁部外面には横方向のハケ調整、体部外面には縦方向のハケ調整が施される。体部内面はヘラケズリ、口縁部外面はヨコナデで仕上げる。体部下半および底部は欠損する。	口縁部10%	
					外:10YR8/1~2灰白4/2灰黄褐				
					断:10YR8/1灰白				
					焼成:良好				
16	20溝	須恵器 杯蓋	13.6 4.75		内:N6/灰	胎土:緻密	天井部はゆるやかな丸みを帯びるが、頂部は平坦に仕上げる。天井部上半には左回りの回転ヘラケズリが施されるが、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。稜線は体部側に沈線状のくぼみを作ることによって形成されており、端部は丸みを帯びる。口縁部内面にやや外傾するゆるやかな凹面が作り出される。	40%	
					外:N6/灰				
					断:N6/灰				
					焼成:良好				
17	20溝	須恵器 杯蓋	14.2 3.8		内:N6/灰	胎土:緻密・黒色粒若干含む	天井部と体部との境に浅い凹線をめぐらせることにより、かろうじて稜線を表現している。天井部は稜線付近まで右回りの回転ヘラケズリが施される。それ以外はおおむね回転ナデで仕上げるが、天井部内面のみ、一定方向のナデが認められる。	40%	
					外:N6/灰				
					断:N6/灰				
					焼成:良好				
18	20溝	須恵器 杯蓋	13.8 5.0		内:N6/灰	胎土:緻密・黒色粒若干含む。	体部側をわずかに押し下げることにより、かろうじて稜線を表現している。天井部は全体に丸みをおび、左回りの回転ヘラケズリを施す。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。口縁部はやや外反気味で、内面に緩やかに段をつくるため、やや鋭い印象。天床部に焼けひずみが生じている。	40%	
					外:N6/灰				
					断:N6/灰				
					焼成:良好				
19	20溝	須恵器 杯蓋	— (3.5)		内:N6/灰	胎土:緻密	体部側に段を造ることで、何とか稜線を表現している。天井部上半をほぼ欠損する。残存部分は回転ナデで仕上げている。口縁内面に段を作り出し、口縁部は丸くおさめる。	破片	口縁部の残存率が低いため、口径は特定できない
					外:N6/灰				
					断:N6/灰				
					焼成:良好				
20	20溝	須恵器 杯身	14.0 (4.8)		内:N6/灰	胎土:緻密・黒色粒若干含む。	受部はやや上向き加減に作りだされる。立ち上りはやや内傾気味で、口縁部で直立する。口縁内面に一条の凹線めぐる。体部下半に右回りの回転ヘラケズリが施される。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。	30%	
					外:N6/灰				
					断:N6/灰				
					焼成:良好				
21	20溝	須恵器 杯身	13.3 4.5		内:N6/灰	胎土:やや粗・径2mm以下の長石を含む	底部には右回りの回転ヘラケズリが施されるが、底部中央にヘラ切りの際にくぼみが生じた部分があり、そこにはヘラケズリが達していない。それ以外の部分は回転ナデで仕上げている。受部は上向き加減に作りだされており、端部は丸い。立ち上がりはやや内傾し、口縁部はやや丸みをおびる。底部に工具があたって生じたキズがある	60%	
					外:N6/灰				
					断:N6/灰				
					焼成:良好				
22	20溝	須恵器 提瓶	7.0 25.5	頸部径6.3 胴部最大径21.4	内:5PB6/1青灰	胎土:緻密・径1mm以下の白砂粒と、若干の小礫(径2mm以下)を含む	体部と口縁部との間の接点がないため、器高は推定である。カキメを施す面をA面、その反対側をB面とすると、B面にはオサエの後、ナデ調整が施される。側面には回転ヘラケズリが施される。A面はやや丸みを帯び、側面まで密にカキメが施される。B面に近い部分ではカキメの後、ナデを施す。体部内面はオサエ後、側面付近にナデ調整を行い、その後部分的にユビオサエを施す。口縁部は下方に折り曲げ、断面方形に仕上げる。口縁部内外面は回転ナデで仕上げる。	60%	
				外:N6/灰					
				断:2.5Y5/2暗灰黄					
				焼成:良好					
23	20溝	土製品	/	残存長6.2 断面最大径1.8	7.5YR8/3浅黄橙	胎土:径1mm以下の石英、長石、チャートを含む(チャートは微量)	円柱状で、両端は折損する。きめの細かい粘土を使用し、表面は長軸方向に丁寧になでて仕上げる。	破片	
				胎土:径1mm以下の石英、長石、チャートを含む(チャートは微量)					
				断:7.5YR8/3浅黄橙					
				焼成:良好					
24	20溝	礫石器か?	/	最大長6.8 最大幅6.0			折損しており、加工痕或使用痕は認められない。堅緻な石材で、全体的に丸みを有するため、川原の転石を意図的に持ち込んだものと見られる。		石材:石英
				胎土:径1mm以下の石英、長石、チャートを含む(チャートは微量)					
				断:7.5YR8/3浅黄橙					
				焼成:良好					
25	21溝・22井戸	須恵器 杯蓋	13.3 (3.3)		内:5RP7/1明紫灰	胎土:径0.5mm以下の長石含む	全体に丸みを帯びた形状とみられる。稜線は天井部の下端と体部の上端に凹線状のくぼみをめぐらせて凸帯状の張り出しを作り出すことによって表現している。天井部外面には右回りの回転ヘラケズリを施す。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。内面の口縁部付近に凹線が1条めぐる。口縁部外面に刻み目状調整痕あり。	30%	
					外:10YR6/1褐灰				
					断:7.5YR8/3浅黄橙				
					焼成:良好				

単位:cm () :残存値 - :計測不可能 / :計測項目無

表3-3 土器・土製品・石器等観察表

遺物番号	出土遺構名・層名	種別 器種	口径 器高	その他の法量	色調		形態・手法の特徴	残存率	備考
					胎土	焼成			
26	21溝・22井戸	須恵器	12.8		内: N6/灰	胎土: 径1mmの石英、長石を含む 焼成: 良好	受部はほぼ水平で端部は丸みを帯びる。立ち上がりは内傾気味で口縁端部は丸くおさめる。底部はやや丸みを帯びた形状である。底部外面は右回りの回転ヘラケズリ。底部内面に一定方向のナゲ、それ以外の部分は回転ナゲで仕上げる。	30%	
		杯身	4.0		外: 5Y7/1灰白N6/灰				
27	21溝・22井戸	須恵器	12.7		内: 2.5Y7/1灰白	胎土: 径1mmの長石、黒色粒を含む 焼成: ややあまい	扁平な底面から外方に直線的に立ち上がる器形である。受部は短く水平に伸び、端部を丸くおさめる。立ち上がりは短く内傾し、口縁端部を丸くおさめる。底部は右回りの回転ヘラケズリで、それ以外の部分は回転ナゲで仕上げる。	90%	
		杯身	3.8		外: 5Y7/1灰白				
28	21溝	須恵器	14.0		内: N5/灰	胎土: 径1mm以下の石英若干含む 焼成: 良好	体部側をわずかに押し下げるにより、かろうじて稜線を表現している。天井部は欠損するが、残存部分は回転ナゲで仕上げる。口縁端部外面に刻み目状調整痕あり。稜線から口縁端部まではやや内湾気味で、口縁内面には段をつくる。	破片	口縁部の残存率が極めて低いため、口径は推定値である
		杯蓋	(2.7)		外: N4/灰				
29	21溝	須恵器	12.3		2.5Y7/1灰白	胎土: 径1mm以下の長石若干含む 焼成: あまい	受部はほぼ水平で端部は丸みを帯びる。内傾する短い立ち上がりは、口縁端部付近でわずかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。底部は丸みを帯びた形状である。底部外面は右回りの回転ヘラケズリ。それ以外の部分は回転ナゲで仕上げる。	40%	
		杯身	4.7		胎土: 径1mm以下の長石若干含む				
30	21溝	須恵器	11.8		2.5Y7/1灰白	胎土: 径1mm以下の長石と黒粒を含む 焼成: ややあまい	受部はやや上向き加減で短く、端部は丸い。内傾する短い立ち上がりは口縁端部付近でわずかに外反し、端部を丸くおさめる。全体に器壁が薄く、華奢な印象を受ける。底部外面は左回りの回転ヘラケズリで、それ以外の部分は回転ナゲで仕上げる。	20%	
		杯身	(3.6)		胎土: 径1mm以下の長石と黒粒を含む				
31	21溝	須恵器	13.5		内: N5/灰	胎土: 緻密 焼成: 良好	天井部と体部との境をわずかに肥厚させて屈曲させることにより、かろうじて稜線を表現している。口縁端部はやや外反させて端部を丸くおさめる。天井部はほぼ欠損するが、残存部分は回転ナゲで仕上げる。	15%	
		杯蓋	(2.7)		外: N6/灰 断: N7/灰白				
32	21溝	須恵器	15.0		内: N6/灰	胎土: 径1mmの長石を含む 焼成: 良好	天井部はほぼ欠損するが、丸みを帯びる形状とみられる。天井部と体部の境をわずかに肥厚させてかろうじて稜線を表現している。口縁端部は丸く仕上げる。残存部分は回転ナゲで仕上げる。	口縁部20%	
		杯蓋	(3.4)		内: N5/灰				
33	21溝	須恵器	14.4		N6/灰	胎土: 径1mm以下の長石を若干含む 焼成: 良好	平坦な底面から丸みを持たせて体部が立ち上がる器形である。受部は断面円形の突線状の張り出しで表現される。立ち上がりは直立気味で短く、口縁端部は丸くおさめるが、薄くてやや華奢な印象を受ける。底部は右回りの回転ヘラケズリ、それ以外の部分は回転ナゲで仕上げる。	口縁部10%	
		杯身	(3.9)		胎土: 径1mm以下の長石を若干含む				
34	21溝	須恵器	12.8		N6/灰	胎土: 径0.5mmの長石、石英含む 焼成: 良好	底部はほぼ欠損するが、丸みを帯びる形状とみられる。受部は断面円形の突線状の張り出しを、やや上向き加減に作りだして表現する。内傾する短い立ち上がりが付く。口縁端部は丸くおさめるが、薄くてやや華奢な印象を受ける。底部は右回りの回転ヘラケズリ、それ以外の部分は回転ナゲで仕上げる。	口縁部12%	
		杯身	(3.8)		胎土: 径0.5mmの長石、石英含む				
35	21溝	土師器	13.5		内: 10YR7/3にぶい黄橙	胎土: 径1.5mm以下の長石、石英含む。雲母もわずかに含む。 焼成: 良好	口縁端部はかるくつまみあげて丸くおさめる。内面の底部付近はナゲ、体部上半と外面口縁部付近はヨコナゲ。体部外面は縦方向に細かいハケ、その後粗いハケで調整する。	口縁部25%	
		杯	(5.0)		外: 2.5Y7/3浅黄				
36	21溝	須恵器	13.7		内: 7.5YR5/1褐灰	胎土: 緻密 焼成: 良好	底部は欠損するが、体部から受部にかけては上外方に直線的にのび、受部端部はやや丸くおさめる。立ち上がりは直立気味で、口縁端部を丸くおさめる。残存部分は回転ナゲで仕上げる。	20%	口縁部の残存率が低いため、口径には誤差が含まれる可能性がある。
		杯身	(3.0)		外: 10YR6/1褐灰 断: 7.5YR6/2灰褐				
37	21溝	土師器	17.0		5YR4/6赤褐	胎土: 径1mmの長石、石英若干含む 焼成: 良好	口縁端部はわずかにつまみあげて丸く仕上げる。体部は縦方向のハケ調整、口縁部は内外面ともヨコナゲで仕上げる。口縁部内面はナゲ調整の前に横方向のハケ調整を施す。体部内面は摩滅により調整痕は不明。	口縁部12%	
		壺	(5.4)		胎土: 径1mmの長石、石英若干含む				
38	21溝	土師器	-		内: 7.5YR6/4にぶい橙	胎土: 緻密 焼成: 良好	口縁端部はわずかにつまみあげて丸くおさめる。体部内面はナゲ、外面は縦方向のハケ調整、口縁部は内外面ともヨコナゲで仕上げる。	10%	
		壺	(4.6)		外: 7.5YR5/6明褐 断: 7.5YR6/4にぶい橙				
39	21溝	土師器	13.0		10YR8/3~8/4浅黄橙 10YR4/1褐灰	胎土: 径1mmの長石、石英含む 焼成: 良好	体部内外面に粘土紐の接合痕が残る。体部内面と外面上半はナゲ調整で仕上げる。体部外面下半はハケ調整の後、ケズリを施し、その後ナゲ調整を行う。体部外面中央部にうすく円板状に剥落する部分が2ヶ所あり(径2~3cmと径0.5~1cm)。体部外面下半部を中心に楕円形に剥落する。	胴部90%	体部外面下半部、全体的にうすく煤が付着する。
		壺	(9.4)		胎土: 径1mmの長石、石英含む				

単位: cm () : 残存値 - : 計測不可能 / : 計測項目無

表3-4 土器・土製品・石器等観察表

遺物番号	出土遺構名・層名	種別 器種	口径 器高	その他の法量	色調		形態・手法の特徴	残存率	備考
					胎土	焼成			
40	21溝	須恵器	13.8		内:N7/灰白	胎土:径1~2mmの長石多く含む 焼成:良好	平坦な底部から上外方へ直線的に体部が立ち上がる。受部も上向き加減に直線的に伸び、立ち上りはやや内傾気味。全体的に器壁は薄く、受部・口縁部はいずれも丸くおさめるが、華奢な印象を受ける。底部はヘラ切り後、円を描くようなるし程度の左回りの回転ナデを施す。それ以外は回転ナデで仕上げる。	35%	
		杯身	3.9		外:N6/灰 N3/暗灰				
41	21溝	土師器	19.8		内:10YR7/3にぶい黄橙	胎土:径1.5mmの長石、石英若干含む 焼成:良好	口縁部は丸くおさめる。体部外面に縦方向のハケ調整、口縁部内面に横方向のハケ調整を施した後、口縁部内外面にヨコナデを施す。体部内面はヨコナデで仕上げる。	口縁部20%	外面は全体に、うっすらと煤が付着
		甕	(5.0)		外:10YR7/3にぶい黄橙 7.5YR4/3褐				
42	21溝	須恵器	13.6		内:10YR7/1灰白	胎土:径1~2mmの長石、石英含む 焼成:良好	杯部は全体に丸みを帯びる器形で、受部は水平で端部を丸くおさめる。内傾する直線的な立ち上がりで、口縁部は丸くおさめる。底部外面は右回りの回転ヘラケズリ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。脚部は基部が残存するのみで、3方に方形の透かし窓を設ける。	胴部70%	
		高杯	(6.0)		外:N6/灰				
43	21溝	須恵器	6.2	胴部最大径21.3	外:10YR8/3 8/4浅黄橙	胎土:緻密 焼成:ややあまい	口縁部はやや外傾しつつ直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。体部外面はふたの接合部分にナデ、その周辺に回転ナデを施す。その反対側の面にはカキメ調整を施すが、摩滅が著しく、中央部ではほとんどカキメが消えている。口縁部内外面には回転ナデを施すが、頸部内面に粘土紐の接合痕が残る。	100%	全体に摩滅が著しく、特に中央部分では摩滅によりカキメがほとんど消えている。
		提瓶	23.8		胎土:緻密				
44	22井戸	須恵器	13.6		内:N6/灰	胎土:緻密・径0.5~1mm大の長石、石英極微量含む 黒色粒子極微量含む 焼成:良好	平坦な天井部分外面に左回りの回転ヘラケズリが施され、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。稜線は表現されない。わずかに外反する口縁部は丸くおさめられる。全体的に器壁は薄く、華奢な印象を受ける。	15%	
		杯蓋	3.35		外:N4/灰 断:中心部7.5YR5/2灰褐 口縁部N7/1灰白				
45	22井戸	須恵器	13.9		内:N5/灰	胎土:緻密・径5mm大チャート、径0.5mm~1mm大の長石、石英極微量含む。径1mm以下の白砂粒含む 焼成:良好	平坦な底部から上外方へ直線的に体部が立ち上がる。受部も上向き加減に直線的に伸び、立ち上がりはやや内傾気味。全体的に器壁は薄く、受部・口縁部はいずれも丸くおさめるが、華奢な印象を受ける。底部外面に右回りの回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデで仕上げる。外面4分の1程度の範囲に自然釉がかかる。	100%	
		杯身	4.1		外:5B5/1青灰				
46	22井戸	須恵器	15.0		外:N5/灰 10BG5/1青灰	胎土:径4mm以下の長石と、0.5mm大の石英含む 焼成:良好	底部から受部への立ち上がりは直線的で、器高も低いことから、全体として平たい印象を受ける。受部は水平方向に短く伸び、端部は丸くおさめる。口縁部は内傾して短く立ち上がり、端部付近でやや外反する。底部外面には右回りの回転ヘラケズリ、底部内面には一定方向のナデ調整が施されるが、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。回転ナデの際、胎土中に含まれる砂粒が動いてきたとみられる。沈線上のくぼみが多数ある。	30%	
		杯身	(3.7)		断:10YR6/4黄橙				
47	22井戸	土師器	13.2		内:10YR6/4にぶい黄橙	胎土:1mm以下の長石、石英を含む。雲母と微量の赤色粒含む。 焼成:良好	口縁部はかるくつまみあげて丸くおさめる。口縁部内面には横方向のハケ調整、体部外面には縦方向のハケ調整を施す。口縁部外面はエビオサエの後、強いヨコナデ。体部内面はケズリの後、部分的にナデ調整を施す。	30%	外面は全体的に煤付着
		甕	(10.5)		外:10YR6/3にぶい黄橙 断:10YR8/3浅黄橙				
48	22井戸	土師器	11.8		内:5YR6/8橙	胎土:やや粗・径0.5~1mm大の長石、石英極微量含む 焼成:ややあまい	外面はエビオサエの後、ナデ調整で仕上げており、らせん状に粘土紐の接合痕が残る。体部内面は横方向にヘラケズリで仕上げる。全体に器壁が薄く、華奢な印象を受ける。口縁部は丸くおさめる。	100%	
		椀	4.4		外:5YR6/8橙~10YR8/2灰白				
49	22井戸	土師器	12.3		内:2.5Y6/3にぶい黄	胎土:やや粗・径0.5~1mm大の長石、石英、径0.5mmの赤色粒子微量含む。雲母混じる。 焼成:良好	体部外面はエビオサエの後、ナデ調整で仕上げ、粘土紐の接合痕が残る。体部内面は横方向のヘラケズリを施すが、所々板状工具の縁が、器壁を削りこんでいる。	100%	
		椀	5.2		外:2.5Y7/3浅黄				
50	22井戸	須恵器	—		2.5Y5/2暗灰黄	胎土:径1mm以下の長石、石英と若干の雲母を含む 焼成:良好	外面は縦方向のハケ調整を施すが、底部のみ部分的にナデ調整を施したようで、ハケがまだらに残る。内面は主に横方向のケズリで調整し、底部とその付近のみ、ケズリの後ナデを施す。底部と体部の境には粘土紐のつなぎ目が若干残る。	40%	内・外面ともに全体的にうっすらと煤が付着している
		平底鉢	(9.5)		胎土:径1mm以下の長石、石英と若干の雲母を含む				
51	32溝	須恵器	15.6		内:2.5Y7/1灰白	胎土:緻密 焼成:ややあまい	天井部は緩やかに丸みをおびる。体部上端に凹線を一条めぐらせることで、かろうじて稜線を表現する。天井部外面には右回りの回転ヘラケズリ、内面には一定方向のナデ調整を施す。それ以外の部分は回転ナデで仕上げるが、天井部内面に部分的にハケが認められる。口縁部内面に一条の凹線をめぐらせ、端部は丸くおさめる。	20%	
		杯蓋	4.3		外:2.5Y6/1~5/1黄灰 断:2.5Y6/1~5/1黄灰				

単位:cm () :残存値 - :計測不可能 / :計測項目無

表3-5 土器・土製品・石器等観察表

遺物番号	出土遺構名・層名	種別 器種	口径 器高	その他の法量	色調		形態・手法の特徴	残存率	備考
					胎土	焼成			
52	32溝	土師器 杯	14.2 (4.6)		内:10YR7/2にぶい黄橙 外:10YR7/2にぶい黄橙 断:10YR7/2にぶい黄橙 胎土:良好 焼成:ややあまい		口縁端部はわずかにつまみあげて丸くおさめる。口縁部は内外面ともヨコナデを施す。体部外面は縦方向のハケ調整を施す。内面は器壁の摩擦により、調整は不明である。	10%	
53	29・30溝	須恵器 甗	11.3 (5.8)	頸部径5.9	内:5P5/1紫灰 外:5PB4/1暗青灰 7.5R5/2灰赤 断:10R4/2灰赤 胎土:良好・径1mm以下の長石と、わずかに赤色粒を含む。 焼成:良好		口頸部のみが残存する。外反して開き、口縁部でやや上方へ屈曲する。口縁端部は内傾する面をもつ。口縁部と口頸部の境は、削りだしによって凸帯がめぐる。口頸部には9条からなる波状文が施される。	口縁部70%	
54	29・30溝	須恵器 杯蓋	— (3.8)		内:N6/灰 外:N6/灰 断:N6/灰 胎土:良好 焼成:良好		稜線は体部側に凹線状のくぼみを創ることにより、かろうじて表現される。口縁端部内面にわずかに段をつくり、内傾する面をもうけ、端部は丸くおさめる。	破片	口径は、口縁部の残存率が低いため特定できなかったが、14.0～16.0cmの中に含まれる。
55	29・30溝	須恵器 杯身	13.3 (4.4)		内:N6/灰 外:N6/灰 断:N6/灰 胎土:緻密・径0.5mm以下の長石と黒色粒が含まれる。わずかに径3mmの小礫を含む 焼成:良好		底部は欠損するが、全体に丸みを帯びる器形だったとみられる。口縁部はほぼ水平に短く伸び、端部は丸い。立ち上りはわずかに内傾しながら直線的に伸び、口縁端部は丸くおさめる。残存部分は回転ナデで仕上げる。	口縁部95%	
56	29・30溝	須恵器 杯身	13.6 4.8		内:N5/灰 外:N5/灰 断:N5/灰 胎土:良好・径2mm以下の長石、石英と、黒色粒、赤色粒を含む 焼成:良好		平坦な底部の外面には右回りの回転ヘラケズリを施し、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。受部は上向き加減に短く伸び、端部は丸くおさめる。立ち上りは長く、内傾し、口縁端部は丸くおさめる。底～体部内面にわずかにあて具痕が認められる。	50%	
57	29・30溝	須恵器 杯身	12.4 3.6		内:N4/灰 外:N4/灰 断:N4/灰 胎土:良好・径1mm以下の長石と、赤色粒を含む。 焼成:良好		底部は丸みを帯びるが、器高は低いため全体としては平たい印象を受ける器形である。受部は水平で端部は丸い。立ち上りは長くやや垂直で、口縁端部は丸くおさめる。底部は左回りの回転ヘラケズリで、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。底部内面にあて具痕が見られる。	20%	
58	29・30溝	須恵器 杯身	12.0 (3.3)		内:N5/灰 外:N5/灰 断:10R4/2灰赤 胎土:良好・径1mm以下の長石と径2mm以下の赤色粒を含む 焼成:良好		受部は上方に向けて短く張り出し、端部は丸い。立ち上りはやや長く、ほぼ直立し、口縁端部は丸くおさめる。残存部分は回転ナデで仕上げる。立ち上り裾の屈曲部分内面に、当て具痕がわずかに残存する。	口縁部20%	
59	29・30溝	須恵器 杯身	13.4 (4.2)		内:7.5Y6/1灰 外:N6/灰 断:7.5Y7/1灰白 胎土:緻密・径0.5mm以下の白砂粒と若干の小礫(径2mm以下)を含む 焼成:ややあまい		底部は欠損するが、やや丸みを帯びる形状だったとみられる。受部は水平に張り出し、端部は丸い。立ち上りはやや長く、中ほどで若干外反して直立する。底部外面は右回りの回転ヘラケズリ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。	30%程度	復元口径には誤差の含まれる可能性あり(口径は受部径から逆算して割り出した)
60	29・30溝	須恵器 杯身	11.7 (3.8)		内:N6/灰 外:N6/灰 N3/暗灰 断:N6/灰 7.5R4/2灰赤 胎土:良好・黒色粒と径2mm以下の白砂粒を含む 焼成:良好		受部はやや上向き加減に短く張り出し、端部は丸くおさめる。立ち上りは長く、直立する。口縁端部はやや鋭く、内面に一条の凹線をめぐらす。底部付近にわずかに回転ヘラケズリの痕跡があり、それ以外は回転ナデで仕上げる。	口縁部10%	
61	29・30・127溝	須恵器 杯蓋	14.6 (3.5)		内:N5/灰 外:N6/灰 断:N6/灰 胎土:緻密 焼成:良好		天井部はほぼ欠損するが、丸みを帯びる器形だったとみられる。稜線は、器壁をわずかに肥厚させ、体部側に浅い凹線状のくぼみを作り出す事でかろうじて表現される。口縁端部はわずかに外反させ、内面にゆるやかな段を作り出す。残存部分は回転ナデで仕上げる。	15%	
62	29・30・127溝	須恵器 杯蓋	16.1 4.0		内:10YR6/1褐灰 外:2.5Y6/1黄灰 断:2.5Y7/1灰白 胎土:緻密 焼成:良好		天井部は平坦で、稜線は体部側をやや押し下げること、かろうじて表現される。口縁端部をわずかに外反させ、内面にゆるやかに段を作り出す。天井部外面は右回りの回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデで仕上げる。やや焼けひずんでいる。	20%	
63	29・30・127溝	須恵器 杯身	13.9 (5.2)		内:N7/灰白 外:5Y6/1灰 断:N7/灰白 胎土:緻密 焼成:良好		底部はやや丸く、体部の立ち上りも丸みをおびる。受部は上向き加減に短く張り出し、端部は丸くおさめる。立ち上りは口縁部でわずかに外反しつつ内傾し、口縁端部は丸くおさめる。底部外面は左回りの回転ヘラケズリ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。底体部外面に自然釉がかかる。	20%	
64	29・30・127溝	須恵器 杯身	— (3.2)		内:N6/灰 外:N7/灰白 断:N7/灰白 胎土:緻密 焼成:良好		底部は欠損するが、おそらくやや平たい形状のものと考えられる。器壁は薄く、華奢な印象を受ける。直線的にのびる体部と一体化するように、やや上方に伸びる受部は、端部を丸くおさめるが、やや鋭い。立ち上りは短く、中程で外反させつつやや内傾する。口縁端部は丸くおさめる。底部外面は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデで仕上げる。	15%	細片であり、ゆがんでいるため、口径には誤差が含まれる可能性が高い。おそらく12.1～16.6cmの間に含まれる

単位:cm () :残存値 — :計測不可能 / :計測項目無

表3-6 土器・土製品・石器等観察表

遺物番号	出土遺構名・層名	種別 器種	口径 器高	その他の法量	色調		形態・手法の特徴	残存率	備考
					胎土	焼成			
65	29・30・127 溝	須恵器 杯身	— (2.5)		内:N6/灰 外:N7/灰白 断:6/灰 胎土:緻密 焼成:良好	底辺は欠損するが、おそらくやや平たい形状のものと考えられる。受部は水平に短く張り出し、端部を丸くおさめる。立ち上りは短く、外反しながら直立する。受部と立ち上りの境に凹線をめぐらせて区別をつけている。残存部分は回転ナデで仕上げる。	破片	細片のため、口径に誤差が含まれる	
66	29・30溝	須恵器 壺	— (9.8)	頸部径24	内:7.5YR5/1褐灰 外:N4/灰 断:N6/灰 胎土:緻密・径1mm以下の白砂粒を含む 焼成:良好	外面に凹線を併用して凸線を2条表現し、その間に2条の波状文を充填する。またそれらの上段にも2条の波状文を重ねて施す。内面にユビオサエの痕跡が見られるが、最終的には回転ナデで仕上げる。	10%		
67	29溝	須恵器 杯身	14.0 (3.5)		内:N5/灰 外:N5/灰 断:7.5Y5/1灰白 胎土:緻密・径1mm以下の白砂粒と、赤色粒、黒色粒を若干含む 焼成:良好	全体に器壁が薄く、華奢な印象を受ける。受部は上方に張り出し端部はやや鋭い。立ち上りはやや長く、基部付近で外反しつつ、内傾気味で端部は丸くおさめる。残存部分は回転ナデで仕上げる。	20%弱		
68	29溝	須恵器 甕	19.8 (6.3)		内:7.5YR5/2灰褐 N7/灰白 外:2.5Y7/1灰白 断:N7/灰白 10YR7/4にぶい黄橙 胎土:赤色粒と白砂粒を含む 焼成:ややあまい	口頸部は直線的に外反させる。口縁端部は下端に粘土を張り足して角ばらせる。またその上端はややつまみあがる。体部外面は平行タタキを施した後、カメ調整を行う。体部内面に同心円の当て具痕が残る。	20%	口縁部の残存率が極めて低いため、頸部の傾きは推定を含む	
69	29溝	須恵器 甕	15.3 (5.5)		内:5Y7/1灰白 外:5Y7/1灰白 断:5Y7/1灰白 胎土:緻密 焼成:ややあまい	口頸部は丸みをもたせて短く外反し、口縁端部は肥厚させて丸くおさめる。全体に厚ぼったい印象を受ける。体部内面に同心円の当て具痕が残る。口頸部は内外面とも回転ナデで仕上げる。	20%		
70	29溝	磨石	/	長軸(7.1) 短軸(10.0)	— —	円礫を使用したものとみられる。端部に敲打痕がみられるが、全体的には磨かれて表面は滑らか。	50%	石材:砂岩	
71	29・30・127 溝	土師器 甕(把手部分)		短軸(4.0) 最大厚2.1	内:10YR7/2にぶい橙 外:7.5YR6/4にぶい橙 断:7.5YR7/4にぶい橙 胎土:緻密・赤色粒と雲母径0.5mm以下の白砂粒を含む 焼成:良好	断面は長方形に近い楕円形。体部外面にハケ調整を施した後、把手を付ける。把手はユビオサエで整形後、ナデ調整を施す。体部内面は摩滅のため、調整痕は不明。	破片		
72	29・30溝	礫石器か?		最大幅6.6 最大厚5.25 最大長7.6	— — —	堅緻な石材で、加工痕・使用痕跡等は認められないが、川原の転石を意図的に持ち込んだものである可能性あり。		石材:チャート	
73	30溝	須恵器 杯蓋	13.5 3.7	最大厚0.8	内:N5/灰 外:N5/灰 断:N5/灰 胎土:緻密 焼成:良好	天井部は平たく、稜線は体部側に浅い凹線状のくぼみを設けることでかろうじて表現される。口縁内面には浅い凹線状の段をつくる。そのため口縁端部はやや鋭い。天井部外面は右回りの回転ヘラズリ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。天井部内面にわずかに当て具痕が残る。	40%		
74	30溝	須恵器 杯蓋	15.0 (4.4)	最大厚0.5	内:N5/灰 外:N6/灰 断:N6/灰 胎土:良好・径2mm以下の白砂粒と黒色粒を含む 焼成:良好	天井部はほぼ欠損するが、丸みを帯びる器形だったとみられる。稜線は、体部側に浅い凹線状のくぼみを作り出す事でかろうじて表現される。口縁端部はやや鋭く、内面に内傾する面をもつ。またその面には凹線が一条めぐる。天井部外面は右回りの回転ヘラズリ、他の部分は回転ナデで仕上げる。	口縁部20%		
75	30溝	須恵器 杯身	12.6 4.8	最大厚0.6	内:N5/灰 外:N5/4/灰 断:7.5R4/2灰赤 胎土:良好・黒色粒と径2~3mmの小礫、径0.5mm以下の白砂粒を含む 焼成:良好	底辺は緩やかに丸みをおび、受部は水平に張り出し、端部はやや鋭い。立ち上りは長く、直線的にやや内傾して伸びるが、口縁端部でやや外反して直立する。口縁端部は丸みをおび、口縁内面に内傾する凹面を作り出す。底部外面は右回りの回転ヘラズリ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。底部外面に格子状のヘラ記号あり。	25%		
76	30溝	弥生土器 甕	— (4.4)	底部径4.3	内:10YR8/3浅黄橙 外:10YR7/2にぶい黄橙 胎土:雲母・赤色粒と、径1mm以下の石英、長石を含む 焼成:ややあまい	底部のみが残存する。外面は底部付近にかろうじてタタキの痕跡が残るが、器壁の摩滅により体部の調整痕は不明。内面の調整も摩滅のため不明瞭だが、わずかにハケ調整の痕跡あり。底部は内外面にユビオサエの痕跡あり。	30%程度		
77	30溝	須恵器 鉢	— 4.0	底部径11.6	内:N5/灰 外:N5/灰 断:7.5Y8/1灰白 胎土:緻密、白砂粒含む 焼成:良好	平坦な底面からゆるやかに体部が立ち上がる。体部外面には格子タタキ、底部内面に当て具痕が残る。底部内面は右回りの回転ナデが施される。	破片		
78	30溝	須恵器 杯身	14.0 4.2		内:N5/灰 外:N5/灰 断:N5/灰 5YR5/2灰褐 胎土:緻密、白砂粒含む 焼成:良好	平坦な底面から丸みを帯びて体部が立ち上がる。受部は水平に張り出し、端部は丸くおさめるが、薄くて華奢な印象を受ける。立ち上りはやや短く、緩やかに外反させつつほぼ直立する。口縁端部は丸くおさめる。			
79	30溝	須恵器 杯身	12.0 (3.85)	最大厚0.5	内:N6/灰 外:N6/灰 断:10R5/2灰赤 胎土:良好・1~2mm大の小礫、径0.5mm以下の白砂粒、若干の赤色粒、黒色粒を含む 焼成:良好	受部は上方に短く張り出し、端部はやや鋭い。立ち上がりは長く、ほぼ直立する。口縁端部内面に浅い凹線を一条めぐらせることで、丸みをおびるもの内傾する面を作りだしている。底部外面にはおそらく右回りの回転ヘラズリが施され、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。	口縁部20%		

単位:cm () 残存値 - :計測不可能 / :計測項目無

表3-7 土器・土製品・石器等観察表

遺物番号	出土遺構名・層名	種別 器種	口径 器高	その他の法量	色調		形態・手法の特徴	残存率	備考
					胎土	焼成			
80	30溝	須恵器 杯身	12.1 (3.1)		内:N7/灰白 外:N7/灰白 断:N7/灰白 胎土:緻密、黒色粒と直径2mm以下の白砂粒含む 焼成:良好	底部はほぼ欠損するが、やや丸みをおびた形状とみられる。受部はやや上向き加減で短く張り出し、端部は丸くおさめる。立ち上りは下半が内傾し、上半で外反して直立する。底部外面は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデで仕上げる。	15%		
81	30溝	須恵器 杯身	— (2.5)		内:N5/灰 外:N4/灰 断:5P7/1明紫灰 胎土:緻密 焼成:良好	分厚くて平坦な底部から、上外方に低く体部が立ち上がる。受部は短くやや下向き加減に張り出し、端部を丸くおさめる。底部外面は回転ヘラケズリ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。底部内面に同心円の当て具痕跡が残る。	20%		
82	30溝	須恵器 杯身	13.3 4.5		内:2.5Y7/2灰黄 外:N5/灰 2.5Y7/1灰白 断:2.5Y7/2灰黄 2.5Y7/1灰白 胎土:良好・黒色粒と、径2mm大の小礫、径1mm以下の白砂粒と赤色粒を含む 焼成:良好	底部は平坦で、受部はやや上向き加減に張り出し、端部は丸くおさめる。立ち上りはやや長く、中ほどでわずかに外反しながらやや内傾する。口縁端部は丸くおさめる。底部外面は左回りの回転ヘラケズリ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。底部内面に当て具痕跡が残る。	30%	口径の残存率が低いため、復元口径には誤差が含まれる可能性大きい	
83	30溝	須恵器 壺	17.5 (8.9)		内:5Y7/1灰白 外:5Y5/1灰 断:5Y7/1灰白 胎土:粗 焼成:あまい	口縁端部はやや外方に張り出させ、やや下がったところに粘土を貼り足して、粘土を折り返したように見せている。外面は口頸部から体部にカキメ調整を施した後、体部にはタタキ調整を施す。体部内面に同心円の当て具痕跡が残る。口頸部は最終的に回転ナデで仕上げる。	1/10未満		
84	30溝	須恵器 壺	12.5 (7.5)		内:N6/灰 外:N6/灰 断:N6/灰 胎土:緻密、直径2mm大の白砂粒含む 焼成:良好	口頸部は丸みをもたせて短く外反し、口縁端部は肥厚させて丸くおさめる。体部外面は格子目吹き後ナデ、体部内面は頸部下端をわずかに削って整形し、同心円の当て具痕跡を残す。口頸部は内外面とも回転ナデで仕上げる。	15%		
85	26溝	須恵器 壺	— (4.5)		内:5YR5/2灰褐 外:5YR4/2灰褐 断:5YR5/2灰褐 胎土:緻密、赤色粒・直径1mm以下の白砂粒含む 焼成:良好	口頸部のみ残存する。口頸部は外反して立ち上がり、口縁端部で下方と上外方に若干肥厚させて、面を作りだす。口縁端部直下の外面に波状文をめぐらせる。	10%		
86	26溝	須恵器 壺	18.0 (5.8)		内:N5/灰 外:N5/灰 断:N5/灰 胎土:径3mm以下の石英を多く含む 焼成:良好	口頸部はわずかに外反しながら立ち上がり、口縁部をわずかに内湾させる。口縁端部に面をもたせる。体部は平行タタキの後、カキメ調整を施し、内面には同心円の当て具痕跡が残る。口頸部は回転ナデで仕上げる。	10%		
87	26溝	須恵器 壺	15.8 (4.5)		内:2.5Y7/1灰白 外:10Y5/1灰 断:2.5Y7/1灰白 胎土:緻密・径1mm以下の白砂粒、若干の赤色粒、黒色粒を含む 焼成:ややあまい	口頸部はやや外反して立ち上がり、口縁端部は外側に肥厚させてやや稜線をつくる。頸部外面にはカキメ、それ以外の部分には回転ナデを施す。	破片		
88	26溝	須恵器 壺	22.2 (7.9)		内:N7/灰白 外:N7/灰白 断:N7/灰白 胎土:緻密、黒色粒と白砂粒含む 焼成:良好	口縁に一部ひずみが生じる。全体に丸みを帯びるが、頂部はやや平坦。天井部外面は右回りの回転ヘラケズリ、内面には一定方向のナデを施す。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。口縁端部はまるくおさめる。	20%		
89	154溝	須恵器 壺蓋	11.85 5.15		内:N6/灰 外:N6/灰 断:N6/灰 胎土:緻密、黒色粒と白砂粒含む 焼成:良好	天井部がやや平坦な器形で、天井部と体部の境の屈曲部にわずかな段を作りだす。天井部外面には右回りの回転ヘラケズリ、内面には一定方向のミガキを施す。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。口縁端部は丸くおさめる。直口壺に対応。	90%		
90	1172土坑	須恵器 壺	19.4 (5.0)		内:N7/灰白 外:N7/灰白 断:N7/灰白 胎土:緻密、白砂粒含む 焼成:ややあまい	口頸部付近のみ残存する。口頸部の立ち上りは短く、口縁端部は外面下方にわずかに粘土を貼り足して、粘土を折り返したような体裁をとっている。体部外面はカキメ後タタキ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げている。	10%		
91	1172土坑	須恵器 器台	— (4.5)	底径21.0	内:N7/灰白 外:N7/灰白 10YR4/1褐灰 断:N7/灰白 胎土:緻密、白砂粒含む 焼成:良好	脚裾部のみ残存する。外面に凹線を2条めぐらせる。脚裾部はわずかに外傾する平坦な面を作り出しており、回転ナデで仕上げる。	10%		
92	1172土坑	須恵器 壺	21.5 (6.8)		内:N6/灰 外:N5/灰 断:10YR7/1灰白 胎土:緻密、白砂粒含む 焼成:ややあまい	頸部は外湾しながら上外方に立ち上がる。口縁端部はわずかに肥厚させて丸くおさめる。体部外面には格子目吹き、内面には同心円の当て具の痕跡が残る。口縁部は内外面とも回転ナデが施される。	20%		

単位:cm () :残存値 — :計測不可能 / :計測項目無

表3-8 土器・土製品・石器等観察表

遺物番号	出土構名・層名	種別 器種	口径 器高	その他の法量	色調		形態・手法の特徴	残存率	備考
					胎土	焼成			
93	1172土坑	土師器 甕	16.1 16.5		内:2.5Y7/4浅黄 外:2.5Y7/3浅黄 断:2.5Y7/3浅黄 胎土:緻密、直径2mm大の石英・長石含む 焼成:ややあまい		口縁部はやや外湾気味に上外方へ立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。頸部の屈曲はゆるく、底部はやや平たい。器壁の摩滅により、調整痕は不明瞭ではないが、外面はナデで仕上げられているとみられる。	80%	
94	1172土坑	鉄滓(スラグ)	/	最大長2.5 最大幅3.0 最大厚1.2 重さ12.1g	— — —		上面はほぼ平坦で、下面はやや湾曲する。上面には明瞭な気泡が認められるが、下面の気泡は小さくてまばらである。	—	
95	1172土坑	須恵器 高杯	— (6.4)		内:N7/灰白 外:N6/灰 断:N7/灰白 胎土:緻密 焼成:良好		杯底部と脚上半のみ残存する。3方に長方形で2段の透かし窓を設ける。上下の透かし窓の間には浅く幅広の凹線を1条めぐらせる。脚の上端付近にカキメが残るが、残存部分は回転ナデで仕上げている。	30%	
96	1172土坑	須恵器 甕	20.5 39.8	胴部最大径37.0 頸部径13.9	内:7.5Y6/1灰 外:上半5Y6/1灰 下半N4/灰 断:10Y6/1灰 胎土:緻密・径1mm以下の白砂粒を含む 焼成:良好		丸底気味で、やや肩が張る器形を呈する。口縁部の立ち上がりは緩やかで、丸みを帯びる。口縁端部からやや下がったところに凹線が3条めぐり、口縁部内外面は回転ナデ、体部外面は平行引き、内面には同心円文の当て具痕が残る。底部付近に溶着物あり。また体部肩部外面に上から降りかかったような状態で、自然釉がかかる。	90%	
97	14土坑	須恵器 杯蓋	13.9 3.1		内:7.5Y6/1灰 外:N5/灰 5Y8/1灰白 断:N5/灰 胎土:緻密 焼成:良好		やや平たい印象を受ける器形である。器壁はやや薄く、華奢な印象を受ける。天井部と体部の境に稜線はなく、口縁端部内面に外傾する凹面をもつ。天井部は回転ヘラケズリを施すが、頂部はヘラ切り後、無調整である。それ以外の部分は回転ナデを施す。	20%	
98	49土坑	須恵器 杯蓋	13.0 (3.7)		内:N6/灰 外:N6/灰 断:N6/灰 胎土:緻密 焼成:良好		天井部がほぼ欠損するが、やや丸みを帯びた器形だったと見られる。天井部と体部の境に強い回転ナデを施すが、稜線の明確な表現はみられない。口縁端部に凹面を作りだす。天井部外面は左回りの回転ヘラケズリ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。	10%	口縁部の残存率が低いため、復元口径には誤差の含まれる可能性あり
99	278土坑	須恵器 杯蓋	14.0 (3.3)		内:N6/灰 外:10Y4/1灰 胎土:径0.5mm以下の長石を含む(径1~2mm大の長石もわずかに混じる)		器壁を若干肥厚させると共に、体部上端に凹線状のくぼみをめぐらせて稜線を表現する。口縁部をわずかに外反させて、端部にゆるやかな凹面を作りだす。天井部がほぼ欠損するが、残存部分は内外面とも回転ナデで仕上げる。	10%	復元口径には誤差が含まれる可能性が高い。天井部外面にうっすらと自然釉がかかる。
100	1009土坑	砥石	/	最大長7.6 最大幅4.3 最大厚3.1	外面:2.5Y8/2灰白 — —		柱状で、使用されている4面はいずれも使い減りして緩やかな凹面を呈する。きめの細かい石材で、仕上げ砥石として利用されたと考えられる。		
101	153土坑	土師器 杯	12.2 (4.1)		内:7.5YR7/4にぶい橙 外:7.5YR7/4にぶい橙 断:7.5YR7/4にぶい橙 胎土:緻密、赤色粒・直径1mm以下の石英・チャート含む 焼成:良好		全体に丸みを帯びた形状で、口縁部のみわずかに外反させる。口縁部は内外面ともヨコナデ、底部外面は横方向のケズリ、それ以外はナデ調整で仕上げる。	30%	
102	153ピット	土師器 甕	23.8 (6.2)		内:7.5YR6/6橙 外:10YR6/4にぶい黄橙 断:10YR4/2灰黄褐 胎土:緻密、雲母・赤色粒・直径1mm以下の石英・チャート含む 焼成:良好		口縁部は直線的に上外方に伸び、口縁端部には面を作りだす。体部外面にはハケ調整、内面には縦方向のナデ調整を施す。口縁部は内外面ともヨコナデで仕上げる。	20%	
103	266ピット	弥生土器 甕	— (6.4)	底部径3.5 胴部径11.2	内:10YR6/3にぶい黄橙 外:2.5Y7/3浅黄 胎土:径2mm以下の石英、長石、チャートを多く含む(チャートの含有量が最も少ない) 焼成:良好		底部から球形に体部が膨らむ形状を呈する。体部上半は欠損する。体部外面に粘土紐の接合痕が残る。外面には平行引き、内面は下から上に向けてヘラケズリの痕跡がみられ、底部にはオサエの痕跡あり。全体に摩滅しており、調整痕は不明瞭。	20%	残存部分のうち、底部から体分の半分の面まで黒班あり。
104	266土坑	弥生土器 壺	— (17.0)	胴部径26.0	10YR6/4にぶい黄橙 胎土:雲母と径1mm以下の石英、長石、チャートを含む。石英が最も少なく、長石が最も多い。 焼成:良好		内面は摩滅がすすみ、調整痕は不明瞭だが、ハケ調整の後ヘラミガキをほどこしたことがうかがえる。外面は下半部に縦方向のミガキ、中位に横方向のミガキを施す。	30%	
105	北西隅谷古墳時代堆積層	須恵器 杯蓋	13.5 (4.0)		内:N7/灰白 外:N6/灰 断:N7/灰白 胎土:緻密、直径1mm以下の白砂粒含む 焼成:良好		本来はやや平坦な天井部を有する器形とみられる。天井部と体部の境をはきむように、2条の凹線をめぐらせて稜線をかろうじて表現する。口縁端部は内面に内傾する凹面を作り出し、やや外反させつつ丸くおさめる。天井部外面はヘラ切り後、回転ヘラケズリを施すが、ヘラ切りの際に生じたゆがみをきちんとは整えていない。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。	20%	
106	北西隅谷古墳時代堆積層	須恵器 杯蓋	13.4 4.25		内:N6/灰 外:10YR5/1灰 断:10Y4/2灰黄褐 胎土:緻密・径1mm以下の白砂粒を含む 焼成:良好		天床部内面に、粘土紐の巻上げ痕が僅かに残る。天井部がやや平たい形状で、稜線はない。口縁部はわずかに外反し、口縁端部内面に内傾する面を作りだす。天井部外面に左回りの回転ヘラケズリ、内面には一定方向のナデを施す。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。外面1/3~1/2ほどに、うっすらと自然釉がかかっていたとみられる。	30%	口径は、天床部径を基準に、立ち上がりの傾きも参考にして割り出しており、誤差を含む可能性あり。

単位:cm () :残存値 — :計測不可能 / :計測項目無

表3-9 土器・土製品・石器等観察表

遺物番号	出土遺構名・層名	種別 器種	口径 器高	その他の法量	色調		形態・手法の特徴	残存率	備考
					胎土	焼成			
107	北西隅谷古墳時代堆積層	土師器	10.3		内: 10YR8/3浅黄橙	胎土	底部はやや平たく、体部との境にやや不明瞭ながら稜線を表現する。口縁端部内面には、やや丸みをおびつつ内傾する面を作り出している。回転ナデで仕上げている。須恵器の杯蓋の器形をまねて作られたものと考えられる。	20%	天床部と口縁の境の屈曲部から、復元口径を割り出した。よって誤差が含まれる可能性あり。
		杯蓋(口くち使用)	4.0	外: 10YR8/4浅黄橙 断: 10YR8/3浅黄橙 胎土: やや粗・雲母と径2mm以下の石英、長石、赤色粒を含む 焼成: 良好					
108	北西隅谷古墳時代堆積層	須恵器	—	脚部(杯との接合部)径4.4	脚部外面: 自然釉付着部分N3/暗灰 それ以外N5/灰	胎土	3方に長方形の透かし窓があり、うち貫通しているのは1箇所のみ。透かし窓の下には2条の浅い凹線がめぐる。脚内部にシボリメが生じている。杯底部内面に当て具痕があり、部分的に軽く一定方向のナデを施すが、おさなりの感じで終えている。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。	40%	脚部外面の半分と杯部外面に、うっすらと自然釉がかかる。
		高杯	(9.6)	杯部外面: 5Y6/1灰 杯部内面: 5Y5/1灰 断: 2.5Y5/1黄灰 胎土: 緻密・径2mm以下の白砂粒を含む 焼成: 良好					
109	北西隅谷古墳時代堆積層	須恵器	11.0		内: 2.5Y5/1黄灰	胎土	底部は丸く、全体的に丸みを帯びた器形である。受部はやや上向き加減に短く張り出し、端部を丸くおさめる。立ち上りはやや外湾気味に内傾し、口縁端部は丸くおさめる。底部外面は回転ヘラケズリ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。底部内面にわずかにあて具痕が残る。	95%	
		杯身	5.0	外: 2.5Y5/1黄灰 断: 2.5Y5/1黄灰 胎土: 緻密、直径2mm以下の白砂粒・チャートを含む 焼成: 良好					
110	北西隅谷古墳時代堆積層	須恵器	10.0		内: N5/灰	胎土	丸みをおびた天井部中に、近接する2条の平行沈線を入れて区画を設け、そのなかに数条の直線をヘラ書きして装飾している。天井部と体部の境は、体部側に極めて浅い凹線状のくぼみを設けて屈曲部分をやや強調している。口縁端部はやや薄く、端部を丸くおさめる。回転ナデで仕上げる。	30%	
		杯蓋	(3.2)	外: N7/灰白 断: 5Y6/1灰 胎土: 緻密・径0.5mm以下の白砂粒を含む 焼成: 良好					
111	北西隅谷古墳時代堆積層	須恵器	9.8		内: N4/灰	胎土	天井部は丸みをおびるが、ややゆがんでいる。口縁端部には軽く湾曲する面を作り出しており、断面はやや角ばっている。全面回転ナデで仕上げる。	ほぼ100%	
		壺蓋	2.8	外: N5/灰 胎土: 緻密、白砂粒を含む 焼成: 良好					
112	北西隅谷古墳時代堆積層	土師器	12.0		内: 10YR7/2にぶい黄橙	胎土	口縁部は内外面ともヨコナデ、それ以外はナデ調整で仕上げる。口縁端部は丸くおさめる。全体的に丸みをおびた形状を呈する。	40%	
		椀	(3.9)	外: 7.5YR6/4にぶい黄橙 断: 10YR7/2にぶい黄橙 胎土: 緻密、直径2mm大の白砂粒をわずかに含む 焼成: 良好					
113	北西隅谷古墳時代堆積層	土師器	—	脚部最大径9.35	内: 10YR7/3にぶい黄橙	胎土	脚部のみ残存する。外面中にユビオサエ、内面にシボリメあり。ナデ調整で仕上げたものと見られる。粘土の接合部分で杯部が剥落した状態。	40%	
		高杯	(6.4)	外: 10YR6/4にぶい黄橙 断: 10YR7/3にぶい黄橙 胎土: 緻密・雲母、径1mm以下の石英、長石、赤色粒を含む 焼成: 良好					
114	北西隅谷古墳時代堆積層	土師器	—	脚部最大径9.0	内: 10YR6/3にぶい黄橙	胎土	脚部のみが残存する。下から3分の1あたりで屈曲して裾広がりになり、裾端部は丸くおさめる。全体に器壁が摩滅しており、調整痕は不明瞭だが、上端におわずかに縦方向のハケ、内面上半にはシボリメ、裾部にはユビオサエの痕跡あり。最終的にはナデ調整で仕上げたとみられる。	40%	
		高杯	(5.9)	外: 7.5YR6/4にぶい黄橙 断: 7.5YR5/3にぶい黄橙 胎土: 緻密 焼成: 良好					
115	北西隅谷古墳時代堆積層	土師器	—	脚部最大径9.2	内: 5YR7/4にぶい黄橙	胎土	脚部外面はオサエ後ナデ調整、内面もナデ調整で仕上げるが、最深部にはナデがおよばず指頭圧痕のみ残る。内面にシボリメあり。	40%	
		高杯	(5.8)	外: 7.5YR7/4にぶい黄橙 断: 7.5YR7/3にぶい黄橙 胎土: 緻密・雲母と、微量の径0.5mm以下の白砂粒、赤色粒を含む 焼成: 良好					
116	北西隅谷古墳時代堆積層	須恵器	13.6	脚部最大径11.8	内: N5/灰	胎土	2方に、2段の透かし窓を施すが、ほとんどふさがっている。透かし窓の切り込みは裏側まで達している。一旦開口した後、脚部を強くしぼったためにふさがったとみられる。上下の透かし窓の間に一条の浅い凹線がめぐる。杯部内面には火ぶくれで生じた細かい亀裂が無数にみられることから、脚部中央の孔も焼け損じて生じた可能性あり。またひび割れ部分に、うるし様の黒色塗布物がみられる。	90%	
		高杯	13.5	外: N4/灰 断: N5/灰 胎土: 緻密、白砂粒多く含む 焼成: 良好					
117	北西隅谷古墳時代堆積層	須恵器	—	脚部最大径9.3	内: N6/灰	胎土	杯部はほぼ欠損する。脚部はわずかに外湾しながら、下方へひろがる。裾部は、端部へ向けて徐々に器壁が薄くなり、端部でこころもち上方へつまみあげて面を成す。透かし窓はもたない、内面に粘土紐の接合痕が残る。杯底部内面に一定方向のナデ調整が認められるが、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。	25%	
		高杯	(6.05)	外: N6/灰 断: N6/灰 胎土: 緻密、白砂粒を含む 焼成: 良好					
118	北西隅谷古墳時代堆積層	土師器	—	残存脚部径2.1	内: 7.5YR7/3にぶい黄橙	胎土	脚部の上半のみの残存で、杯部との接合部分で、はがれた状態である。表面の剥落も著しい。脚部外面に粘土の接合痕が残り、杯部との境にユビオサエの痕跡残り、縦方向にナデる。内面にシボリメあり。ミニチュア土器	10%	
		高杯	(2.65)	外: 7.5YR7/6橙 断: 7.5YR5/2灰褐 胎土: 緻密・赤色粒と径1mm以下の白砂粒を含む 焼成: 良好					

単位: cm () : 残存値 — : 計測不可能 / : 計測項目無

表3-10 土器・土製品・石器等観察表

遺物番号	出土遺構名・層名	種別 器種	口径 器高	その他の度量	色調		形態・手法の特徴	残存率	備考
					胎土	焼成			
119	北西隅谷古墳時代堆積層	須恵器 高杯	— (7.3)	脚部最小径3.7	内:7.5Y6/1灰	内:7.5Y6/1灰 外:N6/灰 断:7.5Y6/1灰 胎土:緻密・径1mm以下の白砂粒含む 焼成:良好	文様構成は趣の口頸部に似るが、器壁が厚ぼったく、内面にシボリメがあることから、高杯の脚部と判断した。2条の浅い凹線をめぐらせ、その間に列点文を配する。	30%	
					外:N6/灰				
					断:7.5Y6/1灰				
120	北西隅谷古墳時代堆積層	土師器 高杯	— (5.2)	脚部最大径8.7	内:10YR6/4にぶい黄橙	内:10YR6/4にぶい黄橙 外:7.5YR6/4にぶい黄橙 断:7.5YR6/4にぶい黄橙 胎土:緻密・雲母、赤色粒、径1mm以下の砂粒含む 焼成:良好	脚部のみ残存。裾部内面にユビオサエ、外面上半に縦方向に立て上げたような痕跡あり。全体はナデで仕上げたと見られる。内面にシボリメあり。	40%	
					外:7.5YR6/4にぶい黄橙				
					断:7.5YR6/4にぶい黄橙				
121	北西隅谷古墳時代堆積層	須恵器 長頸壺	11.7 (14.3)	—	内:N5/灰	内:N5/灰 外:N6/灰 断:N6/灰 胎土:緻密、白砂粒含む 焼成:良好	頸部はわずかに外反しながら上外方に立ち上がる。口縁端部はわずかに肥厚させて丸くおさめる。口頸部から体部の外面はカキメを施し、体部はその後、部分的に回転ナデを施す。内面は回転ナデを施す。	30%程度	
					外:N6/灰				
					断:N6/灰				
122	北西隅谷古墳時代堆積層	須恵器 杯	— (1.5)	高台径9.5	内:2.5Y7/1灰白	内:2.5Y7/1灰白 外:2.5Y6/1黄灰 断:2.5Y7/1灰白 胎土:緻密、直径2mm以下の白砂粒含む 焼成:良好	底部のみ残存する。底部内外面ともに研磨されて平滑になっている。硯などに2次利用された可能性が高いが、附着物は認められない。	30%	B類
					外:2.5Y6/1黄灰				
					断:2.5Y7/1灰白				
123	北西隅谷古墳時代堆積層	土師器 甌	— (4.05)	底部径10.0	内:7.5YR8/3浅黄橙	内:7.5YR8/3浅黄橙 外:10YR6/2灰黄褐 断:7.5YR8/3浅黄橙 胎土:緻密・雲母と、径1mm以下の赤色粒、白砂粒を含む 焼成:良好	残存部位はわずかだが、器壁の厚さが一定で、丁寧に作られている印象を受ける。内面の調整は縦方向のケズリ、外面はナデ調整で仕上げる。	10%	底部外面に木の葉の圧痕あり。
					外:10YR6/2灰黄褐				
					断:7.5YR8/3浅黄橙				
124	北西隅谷古墳時代堆積層	土師器 甌	18.9 (6.15)	—	内:10YR7/3にぶい黄橙	内:10YR7/3にぶい黄橙 外:10YR7/3にぶい黄橙 断:10YR7/3にぶい黄橙 胎土:緻密・雲母・直径2mm以下の長石・石英・チャート含む 焼成:良好	体部内面はケズリ調整で、調整が達していない頸部付近に粘土の接合痕が残る。口縁部は内面に横方向のハケ調整をした後、内外面をヨコナデする。口縁端部はつまみ上げ加減に丸くおさめる。体部外面は縦方向のハケ調整。	10%	
					外:10YR7/3にぶい黄橙				
					断:10YR7/3にぶい黄橙				
125	北西隅谷古墳時代堆積層	土師器 甌	42.4 (7.0)	—	内:10YR7/3にぶい黄橙	内:10YR7/3にぶい黄橙 外:10YR6/3にぶい黄橙 断:10YR7/3にぶい黄橙 胎土:緻密・雲母・直径1mm以下の石英・長石含む 焼成:良好	丸みをおびる体部から、緩やかに外反させて口縁部を立ち上げる。口縁端部は丸くおさめる。体部内面に粘土紐の接合痕がわずかに残る。体部外面はオサエ後縦方向のハケ調整、内面はユビオサエ後ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデを施す。	10%	外面は全体的に煤附着
					外:10YR6/3にぶい黄橙				
					断:10YR7/3にぶい黄橙				
126	北西隅谷古墳時代堆積層	弥生土器 壺(壺D)	— (8.3)	頸部径13.6	内:2.5Y5/2暗灰黄	内:2.5Y5/2暗灰黄 外:10YR6/1褐灰 断:10YR6/1褐灰 胎土:やや粗い・径4mm以下の石英、長石を多く含む 焼成:良好	頸部のみ残存。全体に器壁の摩擦が著しく、調整痕は外面に部分的に縦方向のハケを認めるのみである。内面頸部下にオサエとも見られる凹凸あり。	10%	中期後半〔IV様式〕
					外:10YR6/1褐灰				
					断:10YR6/1褐灰				
127	北西隅谷古墳時代堆積層	須恵器 甌	— (12.0)	頸部径5.85 胴部径11.15	内:N4/灰	内:N4/灰 外:N5/灰 断:N5/灰 胎土:緻密・黒色粒と、径1mm以下の白砂粒含む 焼成:良好	体部中ほどに1cm強の幅でカキメを施す。底部外面は右回りの回転ヘラケズリ、それ以外の部分は回転ナデを施す。カキメより下に2cmほどの幅で、回転ヘラケズリの上に回転ナデを施す。体部中位に直径約2cmの穿孔あり。口縁部は打ち欠いている。	80%	穿孔の下半部の縁がかける(破線部は穿孔の復元ライン)
					外:N5/灰				
					断:N5/灰				
128	北西隅谷古墳時代堆積層	砥石兼台石	/	最大長(23.1)	—	—	全体的に火を受けたものとみられ、赤変もしくは黒変した部分が認められる。風化がすすみ、表面が剥落する部分が見受けられるものもためとみられる。柱状の礫で、おおむね研磨されて平滑な面を呈するが、側面に敲打痕があり、くぼんでいる部分あり。砥石から台石に転用された可能性もあり。	—	砂岩製
				最大幅13.3					
				最大厚8.1					
129	II-3	土師器 移動式竈	/	残存長8.3	7.5YR7/2にぶい橙	胎土:径1mm以下の長石、チャート、赤色粒を含む 焼成:良好	脚部の破片である。凸部の粘土の断面は台形で、裾部は外側にさらに粘土を貼り足して補強している。外面は粘土の接合部に沿ってナデを施す。内面はオサエ後ナデ調整で仕上げる。内面は全体に煤が付着する。	破片	
				残存幅6.3					
				最大厚4.3					
130	19溝	土師器 移動式竈	/	残存長7.8	A面:10YR6/4にぶい黄橙 B面:10YR6/2灰黄褐 断面:7.5YR7/4にぶい橙	胎土:緻密・径2mm以下の長石、チャート、若干の赤色粒と雲母を含む 焼成:良好	端部に水平な面を作りだしており、掛口部分の破片と見られる。端部内面に横方向に削った痕跡があるが、こすれてやや摩擦している。掛口部分がやや内湾して立ち上がる器形だったと考えられる。器壁の摩擦により、調整痕は明瞭ではないが、外面は粗いハケの後、部分的に細かいハケで調整したことが伺える。内面はユビオサエの後、ナデ調整を施したと見られる。	破片	
				残存幅8.5					
				最大厚1.3					
131	II-3	土師器 移動式竈	/	残存長8.6	7.5YR7/4にぶい橙	胎土:赤色粒と径1mm以下の石英、長石、チャートを含む 焼成:良好	基部と考えられる部分で、下端部平坦な面が作り出される。付け此、もしくは凸帯のつけ根とみられる部分で折損した状況がうかがえる。また基部部のラインがその折損部分においてわずかに下がることから、脚部を有していた可能性もある。基部部内面に強いヨコナデを施すが、それ以外はナデ調整で仕上げる。	破片	
				残存幅5.3					
				最大厚1.3					
132	1172土坑埋土上面	土師器 移動式竈	/	残存長5.5	7.5YR7/4にぶい橙	胎土:径1mm以下の石英、長石含む(径3mm大のものもわずかに入る) 焼成:良好	付け底もしくは凸帯の破片である。断面台形で張り出しもそれほど大きくないことから、後者の可能性が高いと考える。全体に摩擦が著しく、調整痕等は判別できないが、粘土接合は丁寧にされている。	破片	
				残存幅3.6					
				最大厚2.5					

単位:cm () :残存値 - :計測不可能 / :計測項目無

表3-11 土器・土製品・石器等観察表

遺物番号	出土遺構名・層名	種別 器種	口径 器高	その他の法量	色調		形態・手法の特徴	残存率	備考
					胎土	焼成			
133	北西隅谷古墳時代堆積層	土師器	/	残存長6.4	表面:7.5YR7/4にぶい橙	付け底部分の破片である。張り出し部分は図面左側に向けてやや湾曲する。凸帯の左側面は、凸帯に沿って強いナデ調整を施すが、右側面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。内面はナデ調整で仕上げる。	破片		
		移動式竈	/	残存幅5.2	断面:7.5YR7/3にぶい橙				
				最大厚3.9	胎土:緻密・赤色粒が若干と、径2mm以下の石英、長石、チャートを含む 焼成:良好				
134	21溝	土師器	/	残存幅(横方向) (17.4)	内・外・断:10YR6/3にぶい黄橙	曲げ底の破片である。やや内湾する体部からゆるやかに底が立ち上がる。底端部は丸くおさめる。体部外面には縦方向のハケ調整の痕跡が認められるが、内面はナデ調整で仕上げる。底の部分はおおむね内外面ともヨコナデで仕上げる。	破片	上端部を欠すため、傾きは任意である。ひさし端部を水平とみなして計測している。	
		移動式竈	/	残存長(縦方向) (5.7)	胎土:雲母と、径1mm以下の石英、長石を含む				
				残存高(5.1)	焼成:良好				
135	北西隅谷古墳時代堆積層	土師器	/	残存長6.4	内:10YR7/3にぶい黄橙	底部分の破片である。端部に作りだされる面には、上端部をかるくつまみあげながら強いヨコナデが施され、凹面を呈する。底部分は内外面とも横方向にハケ調整を施した後、ナデで仕上げる。端部付近は、内外面ともヨコナデで仕上げる。	破片		
		移動式竈	/	残存幅15.4	外:10YR7/4にぶい黄橙				
				残存厚1.65	断:10YR7/4にぶい黄橙 胎土:緻密・雲母と、径1mm以下の赤色粒、長石、チャートを含む 焼成:良好				
136	1172土坑埋土上面もしくはその付近	土師器	/	残存長5.8	内:10YR7/2にぶい黄橙	底部分の破片である。粘土の接合部分で体部から剥落したとみられる。底の幅が左右でことなるため、焚口のコーナーに近い部分の破片と考えられる。口縁端部を丸くおさめる。内面に粘土接合痕がわずかに残存する。内外面ともユビオサエで、ナデ調整を施す。内面にはうすすらと煤が付着する。	破片		
		移動式竈	/	残存幅5.8	外:10YR8/4浅黄橙				
				最大厚1.1	胎土:赤色粒と、径2mm以下の長石、チャートを含む 焼成:良好				
137	北西隅谷古墳時代堆積層	土師器	/	最大幅11.0	A面:10YR7/3にぶい黄橙	B面と図化した端面に、うすすらと煤付着。このことから焚口の向かって右側に、A面を作り付け竈に接着させて用いたものと考えられる。A面はケズリおよびユビオサエで表面を調整した後、ナデ調整を施す。B面は板状工具、もしくはハケとユビオサエで器壁を調整した後、ナデ調整を施す。	破片		
		U字状土製品	/	最大長14.25	B面:2.5Y6/3にぶい黄				
				最大厚2.1	断面:2.5Y7/2灰黄 胎土:緻密 焼成:良好				
138	II-3	須恵器	12.9		内:N6/灰	天井部がほぼ欠損するが、やや丸みをおびた器形だったと見られる。稜線の表現はみられない。口縁端部は丸くおさめる。天井部外面は右回りの回転ヘラケズリ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。	15%		
		杯蓋	(3.4)		外:N5/灰 断:N7/灰白 胎土:緻密、白砂粒含む				
					焼成:良好				
139	II-3	須恵器	12.4		内:N7/灰白	底部から体部にかけてゆるやかな丸みをおび、やや厚ぼったい印象を受ける。受部はほぼ水平に張り出し、端部はまるくおさめる。立ち上りはやや内傾し、口縁端部は丸い。受部と立ち上りの境に間線状のくぼみをめぐらせる。底部外面は右回りの回転ヘラケズリ、内面は静止した状態でナデ調整、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。	20%	底部外面にうすく自然軸がかかっている	
		杯身	4.0		外:10YR7/1灰白 断:10YR7/1灰白 胎土:緻密				
					焼成:良好				
140	II-2	須恵器	—	底径10.0	内:N6/灰	脚部のみ残存する。3方に方形の透かし窓を設ける。透かし窓の下で、脚部の裾に近い部分がわずかに張り出す。裾端部は丸くおさめる。	30%		
		高杯	(4.7)		外:N6/灰 断:N6/灰 胎土:緻密、白砂粒含む				
					焼成:良好				
141	II-3	土錘	/	横幅1.95	7.5Y7/1灰白	土師質で均整の取れた紡錘形である。	完形		
			/	最大長6.2					
			/	最大長8.6	7.5YR7/4にぶい橙				
142	II-1	土師器	/	最大長8.6	胎土:緻密・径2mm以下の石英、長石、赤色粒を含む	ユビオサエ、ナデで整形する。断面は隅丸長方形。基部に体部と接続させるための、ソケット状の突起あり。	破片		
			/	最大幅8.2	焼成:良好				
			/	最大厚5.35	焼成:良好				
143	II-1	土師器	/	最大長7.05	内・外:10YR6/2にぶい黄橙	ユビオサエ、ナデで整形する。断面は円形。	破片		
			/	中央部最大厚2.65	胎土:緻密・雲母と、径1mm以下の石英、長石を含む				
			/		焼成:良好				
144	II-1	円筒埴輪	—	復元径17.6~18.4	内:2.5Y8/2灰白 外:2.5Y8/2灰白 断:2.5Y8/3淡黄	籬の断面は台形。内面の、籬の直下あたりに粘土紐の接合痕あり。器壁の摩滅により、調整痕は不明瞭だが、内面に横方向のハケがわずかに残る。外面は横方向のハケの後、縦方向のハケ調整か。籬の部分はヨコナデ。	破片	破片のため、径には誤差の含まれる可能性が大。	
			(6.0)		胎土:緻密・径1mm以下の白砂粒と若干の径2~3mm大の角礫含む				
					焼成:ややあまい				
145	20溝	須恵器	/		内:N7/灰	右回りの回転ヘラケズリ調整を施した上に、先端の丸い工具で、はっきりした直線を引く。内面は回転ナデ調整で仕上げる。	破片	底部外面にヘラ書き記号あり	
		杯	(2.1)		外:N6/灰 断:Y5/1灰 胎土:緻密・黒色粒と直径2mm以下の白砂粒含む				
					焼成:良好				
146	20溝	須恵器	/		内・断:5Y6/1灰	右回りの回転ヘラケズリ調整を施した上に、先端の鋭利な工具で、はっきりした直線を引く。内面は回転ナデ調整で仕上げる。	破片	底部外面にヘラ書き記号あり	
		杯	/		外:N6/灰 胎土:緻密、直径2mm以下の白砂粒を含む				
					焼成:良好				
147	北西隅谷古墳時代堆積層	須恵器	/		内・外:5Y5/1灰	右回りの回転ヘラケズリ調整を施した上に、先端の鋭利な工具で、はっきりした直線を引く。内面は回転ナデ調整で仕上げる。	破片	底部外面にヘラ書き記号あり	
		杯	/		断:5Y6/1灰 胎土:黒色粒・直径1mm以下の白砂粒を含む				
					焼成:良好				
148	21溝・22井戸	須恵器	/		内・外:10Y6/1灰	左回りの回転ヘラケズリ調整を施した上に、先端の丸い工具で、わずかに器壁をかすったような、不明瞭な直線を引く。内面は回転ナデ調整で仕上げる。	破片	底部外面に非常に浅いヘラ書き記号あり	
		杯	/		断:N6/灰 胎土:緻密、直径2mm以下の白砂粒をやや多く含む				
					焼成:良好				

単位:cm ():残存値 - :計測不可能 / :計測項目無

表3-12 土器・土製品・石器等観察表

遺物番号	出土遺構名・層名	種別 器種	口径 器高	その他の法量	色調		形態・手法の特徴	残存率	備考
					胎土	焼成			
149	26溝	須恵器 杯	/ (2.6)		内・断: 7.5Y7/1灰白 外: 10Y5/1灰 胎土: 緻密・直径2mm以下の白砂粒を含む 焼成: 良好		右回りの回転ヘラケズリ調整を施した上に、先端の丸い工具で、わずかに器壁をかすったような、不明瞭な直線を引く。内面は回転ナデ調整で仕上げる。直線は少なくとも2本あり、十字に引かれたものか。	30%	底部外面にヘラ書き記号あり
150	14土坑	須恵器 杯	/ (2.6)		内: 2.5Y6/1黄灰 外: N5灰 断: 5Y7/1灰白 胎土: 緻密・黒色粒と直径1mm以下の白砂粒を含む 焼成: 良好		右回りの回転ヘラケズリ調整を施した上に、先端の丸い工具で、はっきりとした直線を引く。内面は回転ナデ調整で仕上げる。	破片	底部外面にヘラ書き記号あり
169	151落込み	瓦器 椀(高台部分)	— (0.8)	高台径5.5 高台高3.5	内: 7.5Y6/1灰 外: 10Y5/1灰 断: 2.5Y8/2灰白 胎土: 緻密 焼成: ややあまい		底部のみ残存する。貼り付け高台は断面逆台形を呈する。器壁の摩擦により、調整痕は不明である。	10%	
170	151落込み	瓦器 皿	9.4 2.05		内: 2.5Y7/2灰黄 外: 2.5Y7/2灰黄 N4/灰 断: 2.5Y7/2灰黄 胎土: 径2mm以下の石英、長石、赤色粒が若干入る 焼成: 良好		やや丸みをおびた底部から、短い口縁部がやや外傾しつつ立ち上がる。口縁部は丸くおさめ、底部と口縁部との間に稜線はない。底部外面はオサエ後ナデ、口縁部外面はヨコナデ、内面はナデ調整で仕上げる。	40%	
171	北西隅谷中 世耕作土	土師器 皿	8.2 (1.3)		内: 10YR7/3にふい黄橙 外: 10YR7/3にふい黄橙 断: 10YR7/3にふい黄橙 胎土: 緻密 焼成: 良好		上外方に短くゆるやかに立ち上がる口縁部と、底部との間には明確な稜線はもたない。口縁部はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はオサエ後ナデで仕上げる。	40%	
172	北西隅谷中 世耕作土	瓦質 土管	14.8 (7.0)		内: N4/灰 外: N3/暗灰 断: 5Y7/1灰白 胎土: 緻密・径0.5mm以下の白砂粒を僅かに含む 焼成: 良好		受部は緩やかに湾曲させて外側に拡張する。端部は内側に若干器壁を肥厚させて平坦な面を作りだす。内面にオサエの痕跡が残るが、全体は回転ナデで仕上げる。	破片	
173	1~3溝	瓦器 椀	13.6 (3.0)		内: 10YR6/4にふい黄橙 外: 10YR6/4にふい黄橙 断: 10YR6/4にふい黄橙 胎土: 緻密 焼成: ややあまい		口縁部をまるくおさめる。体部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ後、ミガキ調整を施す。ミガキは幅0.5~1mmで、まばらにしかみられない。	10%	細片のため、口径に誤差が含まれる可能性が高い
174	6溝	瓦器 椀	12.0 (3.3)		内: N4/灰 外: N3/暗灰 断: 2.5Y8/1灰白 胎土: 緻密 焼成: 良好		口縁部に強いヨコナデを施すため、やや外反する。口縁部は丸くおさめる。体部外面はオサエ後ナデ、口縁部外面はヨコナデ、内面はハケ調整後ナデ調整を行い、最終的にミガキ調整を施す。ミガキは幅0.5~1mmで、まばらにしかみられない。	10%	細片のため、口径に誤差が含まれる可能性が高い
175	I -2-2	土師器 皿	10.4 (2.25)		内: 2.5Y8/2灰白 外: 2.5Y8/2灰白 断: 2.5Y8/2灰白 胎土: 緻密・径0.5mm以下の長石、チャート若干を含む 焼成: 良好		底部はほぼ欠損するが、全体に丸みをおびる器形と見られる。口縁部付近でやや拡張する器形は、高台消滅後の瓦器椀の形状に似る。口縁部はヨコナデ、体部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ調整で仕上げる。	破片	
176	I -2-2	東播系須恵器 鉢	26.0 (2.3)		内: 5Y6/1灰 外: 5Y6/1灰 断: 5Y5/1灰 胎土: やや粗・径1mm以下の白砂粒を含む 焼成: 良好		口縁部が残存するのみである。口縁部は上下にわずかに拡張させて面を作りだす。口縁部上端を丸く仕上げる。口縁部に強い回転ナデを加える。	10%	東播系須恵器
177	I -2-1	土師器 皿	8.7 1.4		内: 2.5Y7/2灰黄 外: 2.5Y7/2灰黄 断: 2.5Y7/2灰黄 胎土: 緻密 焼成: 良好		口縁部は上外方に緩やかに立ち上り、底部との境に明確な稜線はもたない。口縁部は水平方向にわずかに外反させた後、若干つまみあげて丸くおさめる。口縁部をヨコナデ、それ以外はナデで仕上げる。	20%	
178	I -2-1	土師器 椀	12.0 (3.7)		内: 2.5Y7/2灰黄 外: 10YR7/2にふい黄橙 断: 2.5Y6/2灰黄 胎土: 緻密・雲母と、径1mm以下の石英、チャートを含む 焼成: 良好		ゆるやかな丸みをおびる形状で、口縁部をわずかに外反させる。口縁部は丸くおさめる。体部外面はオサエ後ナデ、それ以外の部分はおそらく横方向のナデで仕上げたと考える。貼り付け高台がなくなる前後の瓦器椀の形状に似ると考える。	20%	
179	I -2-1	備前 播鉢	— (4.5)		内: 2.5YR5/3にふい赤褐 外: 2.5YR5/3にふい赤褐 断: 2.5YR5/1赤灰 胎土: 緻密・径1mm以下の白色粒を含む 焼成: 良好		口縁部のみ残存。端部は下方に若干粘土を貼り足して面を作る。回転ナデで仕上げる。内面に擦り目が1箇所だけ残存する。	破片	
180	I -2-1	瓦質 火舎	— (7.4)		内: N3/暗灰 外: N4/灰 断: 7.5Y7/1灰白 胎土: 緻密・雲母と、若干の白砂粒(径0.5mm以下)を含む 焼成: 良好		体部がわずかに外傾しつつ立ち上がる。やや湾曲することから、円筒形の器形と考える。口縁部は内側にやや肥厚し、上端にわずかに外傾する平坦な面を作りだす。口縁内外面はヨコナデ、それ以外はナデもしくはヨコナデ後、外面に方向の一定しないミガキを施して仕上げる。	破片	
181	34ピット	陶器 壺	— (7.0)		内: 2.5YR6/1赤灰 外: 2.5YR6/1赤灰 6/2灰赤 断: N8/灰白 内(釉): 2.5YR4/1赤灰 胎土: 緻密 焼成: 良好		口縁部は外面下方に粘土を貼り足して、下方に垂下する面を作りだす。口縁部内面に、上方から降りかかった自然釉が付着する。回転ナデで仕上げる。	10%	

単位: cm () 残存値 - : 計測不可能 / : 計測項目無

表3-13 土器・土製品・石器等観察表

遺物番号	出土遺構名・層名	種別 器種	口径 器高	その他の法量	色調		形態・手法の特徴	残存率	備考
					胎土	焼成			
182	I-2	土師器 皿	8.0 0.85		内:10YR8/3浅黄橙 外:7.5YR7/4にぶい橙 断:10YR8/3浅黄橙 胎土:緻密・径1mm以下の石英、長石、チャート含む 雲母も若干入る 焼成:良好		上外方に短くゆるやかに立ち上がる口縁部と、平坦な底部との間には明確な稜線はもたない。底部外面をオサエ後、全体はナデで仕上げる。	20%	
183	I-2	土師器 皿	7.7 1.1		内:7.5YR7/4にぶい橙 外:7.5YR8/4浅黄橙 断:7.5YR8/4浅黄橙 10YR6/1褐灰 胎土:緻密・赤色粒含む 焼成:良好		口縁部外面にやや強めにヨコナデを施すことにより、底部とやや外反気味に上外方に短く立ち上がる、口縁部との境にわずかな段が生じている。底部外面と、内面はナデ調整で仕上げる。	20%	
184	I-2	土師器 皿	9.8 1.5		内:10YR6/2灰黄褐 外:10YR8/2灰黄褐 断:10YR7/2にぶい黄橙 胎土:緻密 焼成:良好		底部外面はユビオサエ後ナデ調整、口縁部は内外面ともヨコナデ、底部内面はナデ調整で仕上げる。口縁部は上外方に緩やかに立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。	20%	
185	I-2	瓦器 皿	9.6 (1.8)		内:10YR6/4にぶい黄橙 10YR4/1褐灰 外:10YR7/4にぶい黄橙 断:10YR7/4にぶい黄橙 胎土:緻密 焼成:ややあまい		底部内面にはナデ後平行暗文、底部外面はユビオサエ後ナデ調整を施す。口縁部外面の強いヨコナデにより口縁端部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。	20%	
186	I-2	瓦器 椀	12.0 (3.5)		内:N4/灰 外:N3/暗灰 断:2.5Y7/1灰白 胎土:緻密 焼成:良好		体部内面にはナデ後、幅1mm弱のミガキが施される。体部外面はオサエ後ナデ調整、口縁部はヨコナデで仕上げる。器壁の厚さは3mm前後で、全体に華奢な印象を受ける。	20%	
187	I-2	瓦器 椀	13.0 (2.7)		内:N5/灰 外:N4/灰 断:N8/灰白 胎土:緻密 焼成:良好		底部から体部にかけては緩やかな丸みをもち、口縁部内外面にヨコナデを施して、口縁部を軽く外反させる。口縁端部内面に器壁に対して上方から工具を当てて、軽く段を作りだす。内面はナデ後ミガキ、外面はユビオサエ後ナデ調整を施す。	10%	
188	I-2	磁器 椀	15.0 (3.3)		内:2.5Y5/3黄褐 外:2.5Y5/3黄褐 断:2.5Y8/1灰白 胎土:緻密 焼成:良好		体部はわずかに丸みをおびつつ上外方に立ち上がり、口縁付近で軽く外反する。口縁端部は丸くおさめる。全体に黄白色の、やや透明感のある釉がかる。	10%	
189	I-2	白磁 碗	— (2.8)		釉:5GY8/1灰白 断:10Y8/1灰白 胎土:緻密 焼成:良好		口縁部のみ残存。玉縁の断面形はやや下膨れ気味で、やや平たい印象を受ける。	破片	口径は、細片のため特定できないが、13~15cm程度とみられる
190	I-2	東播系須恵器 鉢	— (5.0)		内:7.5Y6/1灰 外:N6/灰 断:10Y6/1灰 胎土:やや粗・径1mm以下の白砂粒含む 焼成:良好		体部は直線的に立ち上がり、口縁端部外面に粘土を張り足して面を作りだす。上方への拡張はわずかである。口縁端部上面に、伏せて何かにこすり付けたような線状痕が認められる。回転ナデで仕上げるが、内面の口縁部に近い部分にやや強く横方向にナデた痕跡が認められる。	破片	東播系須恵器
191	I-2	東播系須恵器 鉢	25.8 (4.7)		内:10Y6/1灰 外:5Y6/1灰 断:5Y6/1灰 胎土:緻密・径1mm以下の白砂粒と黒色粒含む 焼成:良好		体部は上外方に直線的に立ち上がり、口縁部は端部下方に粘土を貼り足して、ユビの幅程度の面を作りだす。口縁端部上面に、伏せて何かに押し付けて生じたような線状痕が認められる。体部外面にオサエの痕跡あり。回転ナデで仕上げるが、体部内面のみ、さらに静止した状態でナデ調整を施す。	破片	口縁部の残存率が低く、ややゆがみがみられることから、復元口径には誤差が含まれる可能性あり。東播系須恵器
192	I-2	斧	/	最大長12.9 幅1.1	10YR3/2黒褐 —		体部に楕定規をもつ。耳かきは頸部と同じ幅の小さなもので、楕定規を有する面の反対側に作られる。しっかりとつくりで、全体に光沢を帯びる。	完形	
193	I-1-2	伊賀(京)焼 碗	9.4 (3.8)		内:7.5Y7/2灰白 外:7.5Y7/2灰白 断:5Y8/1灰白 胎土:緻密 焼成:良好		器壁が薄く、小ぶりで華奢な印象を受ける。下半部に緩やかな丸みをもたせ、口縁部を軽く外反させて端部を丸くおさめる。全体に乳白色の釉薬が薄くかる。	15%	
194	I-1-2	瀬戸美濃焼 天目茶碗	11.2 (5.65)		内:7.5Y5/4にぶい褐 外:7.5Y5/4にぶい褐 断:2.5Y8/2灰白 胎土:緻密 焼成:良好		底部は回転ヘラケズリで、高台は欠損する。体部は上外方にゆるやかに立ち上がり、口縁部で屈曲して外反し、口縁端部は丸くおさめる。体部内外面には厚く釉がかるが、底部外面は無釉である。	30%	
195	I-1-2	唐津焼 皿	11.4 3.1		内:7.5YR5/3にぶい褐 外:7.5Y4/3褐 7.5YR6/4にぶい橙 断:7.5YR8/1灰白 胎土:緻密 焼成:良好		底部と体部の境にわずかな屈曲をもたせて、体部は上外方に直線的に立ち上がる。底部外面には削り出し高台が作りだされる。口縁部は一旦水平方向に外反させた後、端部を上方につまみあげて丸くおさめる。底部内面に表面を擦りおとした胎土目が一箇所残存する。	25%	
196	I-1-1	青磁 碗	— (3.1)		釉:5GY7/1明オリーブ灰 断:10Y8/1灰白 胎土:緻密 焼成:良好		外面に蓮華文あり。残存範囲はわずかだが、残存する文様の細工は丁寧である。釉は透明感がある。	破片	口縁部の残存率が低いため、口径は特定できなかったが、おそらく15~18cm内に含まれる

単位:cm ():残存値 —:計測不可能 /:計測項目無

表3-14 土器・土製品・石器等観察表

遺物番号	出土遺構名・層名	種別 器種	口径 器高	その他の法量	色調		形態・手法の特徴	残存率	備考
					胎土	焼成			
197	I-1-1	瀬戸美濃焼 天目茶碗	10.9 (5.0)		内:10YR3/1黒褐 外:10YR3/1黒褐 断:2.5Y8/1灰白 胎土:緻密 焼成:良好		底部は回転ヘラケズリで、高台は欠損する。体部はわずかに湾曲しつつ上方外にゆるやかに立ち上る。口縁端部は丸くおさめる。体部内外面には厚く釉がのびるが、底部外面は無釉である。	20%	
198	I-1-1	瓦器 椀	13.8 4.2		内:10YR5/3にぶい黄褐 外:2.5Y8/1灰白 断:2.5Y8/2灰白 胎土:緻密 焼成:良好		底部から体部にかけては緩やかな丸みを持ち、口縁部内外面にヨコナデをほどこして、口縁部を軽く外反させる。口縁端部内面に器壁に対して上方から工具を当てて、段を作りだす。内面はナデ後ミガキ、外面はユビオサエ後ナデ調整を施す。	30%	
199	I-1-1	土師器 獸足	/	残存長7.6 最大幅3.65	10YR8/2灰白 胎土:緻密・径2mm以下の石英・長石を含む 焼成:ややあまい		焼成不良で全体に軟質。足底は調整があまり、それ以外は丁寧なナデ調整を施す。		
200	I-1-1	銅銭 元豊通寶	/	直径2.3 孔部1辺約0.7 最大厚0.1			裏面は無文	ほぼ完形	初鑄:北宋1078年
201	側溝	青磁 碗(龍泉窯)	— (3.5)	高台径5.6 高台高1.2	釉:7.5GY6/1緑灰 無釉:2.5Y6/1黄灰 断:2.5GY7/1明オリーブ灰 胎土:緻密 焼成:良好		底部のみ残存する。削り出し高台はやや高く、端部に面取りが大きめに施される。底部内面に文様あり。全体に釉薬が施されるが、高台の内側は無釉である。	破片	
202	側溝	大小刀	/	残存全長21.4 残存刃部長17.5 最大厚0.25 最大幅1.9			柄端部、刀部先端を欠く。腐食が進み、刀身の申ほどで大きく曲がる。もとの長さは7寸強である。	90%	
212	26溝	土師器 移動式竈	/	最大幅6.7 残存長7.3	内面:10YR7/2にぶい黄橙 外面:10YR7/3にぶい黄橙 断面:10YR7/4にぶい黄橙 胎土:緻密・雲母・赤色粒・直径1mm以下の石英・長石含む 焼成:良好		端部に平坦な面が作り出され、それにむけて徐々に器壁が厚くなる。そして端部では内面にむけて、器壁がゆるやかにふくらむ。掛口に当たる部分と考えられる。内面はケズリ後ナデ、外面はオサエ後ナデ調整で仕上げる。内面は全体にやや煤けている。	破片	
213	26溝	土師器 移動式竈	/	最大幅:4.3 残存長:8.7	外面:7.5YR6/4にぶい橙 断面:10YR7/3にぶい黄橙 胎土:緻密・雲母・赤色粒・直径1mm以下の石英・長石含む 焼成:良好		長軸方向に軽く外湾する。粘土の接合部分で体部からはがれており、裏面はすべて剥離面からなる。おそらく底の基部を補強するために、貼り足した粘土片とみられる。器壁はオサエ後、ナデで仕上げている。	破片	
214	26溝	土師器 移動式竈	/	最大幅:6.4 残存長:5.1	内面:7.5YR7/4にぶい橙 外面・断面:10YR7/4にぶい黄橙 胎土:緻密・雲母・赤色粒・直径1mm以下の石英・長石含む 焼成:良好		横軸方向に軽く湾曲する。器壁の厚さは一定している。裏面に、板状の工具でナデつけたような痕跡が残る。表裏面ともナデ調整で仕上げる。	破片	
215	26溝	土師器 移動式竈	/	最大幅:10.6 残存長:11.0	内・外:10YR7/3にぶい黄橙 断面:10YR8/3浅黄橙 胎土:緻密・雲母・赤色粒・直径1mm以下の石英・長石含む 焼成:良好		焚口部分とみられ、底が粘土接合部分からはがれた状態。粘土の剥落範囲は焚口部までおよぶ。内面にわずかに粘土紐の接合痕が残る。内面に焚口の縁に沿ってユビオサエの痕跡あり。粘土の接合部分を両面から挟み込んだ痕跡と見られる。外面の粘土の接合部分にもユビオサエの痕跡あり。ナデ調整で仕上げている。	破片	
216	26溝	土師器 移動式竈	/	最大幅:10.6 残存長:3.7	外面:7.5YR6/4にぶい橙 断面:10YR7/3にぶい黄橙 胎土:緻密・雲母・赤色粒・直径1mm以下の石英・長石含む 焼成:良好		長軸方向に軽く外湾する。粘土の接合部分で体部からはがれる。おそらく底の基部を補強するために、貼り足した粘土片とみられる。器壁はオサエ後、ナデで仕上げている。	破片	
217	26溝	土師器 移動式竈	/	最大幅:7.1 残存長:9.5	内面:10YR6/1褐灰 外面:10YR7/3にぶい黄橙 断面:10YR7/4にぶい黄橙 胎土:緻密・雲母・赤色粒・直径1mm以下の石英・長石含む 焼成:良好		おそらく掛口部分とみられる。掛口端部はわずかに肥厚させて丸くおさめる。内面はケズリ後ナデ、内面はオサエ後、ナデ調整で仕上げる。内側は、全体にやや煤けている。	破片	
218	26溝	土師器 移動式竈	/	最大幅:5.3 残存長:7.8	外・断:10YR7/3にぶい黄橙 内:7.5YR6/4にぶい橙 胎土:緻密・雲母・赤色粒・直径1mm以下の石英・長石含む 焼成:良好		長軸方向にわずかに湾曲し、底の先端とみられる部分を含む。底端部はやや下向き加減に丸くおさめる。表裏面ともオサエ後、ナデ調整を施す。	破片	
219	26溝	土師器 移動式竈	/	最大幅:7.6 残存長8.1	内:10YR7/4にぶい黄橙 内:10YR6/2灰黄褐 胎土:緻密・雲母・赤色粒・直径1mm以下の石英・長石含む 焼成:良好		おそらく焚口のコーナー付近に取り付けられた付け底の破片とみられる。粘土接合箇所では体部から剥落している。張り出しの先端部分も欠損している。張り出し部分の内側は、全体にやや煤けている。オサエ後、ナデ調整で仕上げる。	破片	
220	26溝	土師器 移動式竈	/	最大幅:8.7 最大長:6.85	内面:10YR6/2灰黄褐 外面:7.5YR6/4にぶい橙 断面:10YR8/3浅黄橙 胎土:緻密・雲母・赤色粒・直径1mm以下の石英・長石含む 焼成:良好		器壁の厚さはほぼ一定しており、全体に軽く湾曲している。粘土接合部での剥落痕は認められない。オサエ後、ナデ調整で仕上げる。	破片	
224	北西隅谷古墳時代堆積層	土師器 煮沸具(把手)	/	最大長:5.6 最大厚:3.95	表面:10YR6/3にぶい黄橙 胎土:緻密・雲母・赤色粒・直径1mm以下の石英・長石含む 焼成:ややあまい		ユビオサエで成形した後、全体を軽くなでて仕上げる。把手の先端部分に竹管状の工具痕が認められる。	破片	
225	5溝	青磁 碗	/	残存長:6.4 最大厚:0.65	外面:7.5Y5/2灰オリーブ 内面:7.5Y5/1灰 内面:N6/灰 胎土:緻密 焼成:良好		体部下部分の破片で、透明感のある釉薬が、全体に薄くかかる。表面の花弁の模様はシャープである。	破片	

単位:cm () :残存値 - :計測不可能 / :計測項目無

表4-1 木器観察表

木器							
遺物番号	実測番号	出土遺構名・層名	種別	最大長 最大幅 最大厚	その他の法量	備考	樹種
151	199	21溝	弓(弓はず部分含む)	17.5	径1.1~1.4	全体に長軸方向に削ったような加工痕あり。丁寧に整形されている。先端に近い部分に浅く溝を切ったような痕跡があり、その周囲に繊維質なもので縛ったような痕跡あり。	ヤマフジ
152	200	21溝	弓(弓はず部分含む)	18.4	径1.1~1.5	全体に長軸方向に削ったような加工痕あり。丁寧に整形されている。先端に近い部分に浅く幅広な溝状のくぼみあり。	ヤマフジ
153	201	21溝	板状木製品	27.5		加工痕は明確にはとらえられないが、a面と側面は平坦になるように加工されたものとみられる。b面は、中位にふしが残っており、a面ほど丁寧に仕上げられていないが、おおむね平坦になるようには加工されたものとみられ、結果としてやや扁平な柱状の形態を呈する。	スギ
				6.2			
				2.9			
154	205・206	21溝	木桶	256.3		実測した面は、丸太を長軸に平行する方向で分割した後、大まかに割れ口を整えつつ、中央部をややくぼめている。粗い作りだが、木桶と考えられる。裏面には加工痕はなく、所々に樹皮が残存する。	スギ
				約34.0			
				8.7			
155	194	21溝	板状木製品	77.0		全体に火を受けたとみられ、特にa面は炭化している。加工痕跡はとどめないが、a面は平滑な面を呈する。一方、b面は、樹皮をはがしただけのように見受けられ、細かい凹凸が顕著である。	スギ
				15.0			
				約2.5			
156	202	22井戸	板状木片	28.4		両面ともに長軸方向に表面を削いだような加工痕跡あり。	スギ
				2.1			
				0.6			
157	188	242土坑	建築部材か	14.5	長軸10.9 短軸7.9	全体に長軸方向に削ったような加工痕あり。下端は粗く断ち切ったような形状。上部は欠損する。断面円形もしくは楕円形の柱状の部材だったとみられる。ほぞ孔が穿たれていたとみられるが、加工は粗い。	クスノキ
158	198	273ピット	柱根	17.3	径9.8	丸太を長軸方向に割いたような形状を呈する。表面は樹皮をはいだような形状で、明瞭な加工痕は認められない。	ヒノキ
159	187	231ピット	柱か?	21.6	長軸6.7 短軸5.0	断面は不整形な楕円形を呈する。縦方向にはつたような加工痕跡が部分的に見られる。	コナラ亜属
160	189	254ピット	建築部材か	33.2		一見自然木のように見えるが、二面を平坦に加工している可能性あり。ただ加工痕跡は認められない。	スギ
				5.3			
				4.3			
161	204	1172土坑	木桶	44.9		明確な加工痕は認められないが、平滑な面が作りだされている。裏面は縦方向に凹凸が顕著で、丁寧に加工は施されていないとみられる。樹皮は認められないが、表皮に近い部分と考えられる。	ヤナギ属
				28.9			
				2.1			
162	190	北西隅谷埋土最下層	板状木片	53.9		明確な加工痕は認められず、表面が整形されたような痕跡もみとめられないが、全体として、板状の形態を呈する。板材を作りだす際に生じた残片か。	スギ
				5			
				2.7			
163	193	北西隅谷埋土最下層	板状木製品	38.2		断面が台形になるよう、全体を加工していたとみられる。加工痕跡は認められないが、表面は平滑に作りだされている。大きく縦方向に欠損しているため、もとの形状は不明である。	スギ
				6.5			
				3.8			
164	192	北西隅谷埋土最下層	板状木製品	28.6		丸太を縦方向に分割しているため、断面が長方形を呈する。分割された面には加工痕跡はみとめられない。分割されて生じた面以外には、樹皮が残る。	スギ
				5.6			
				2.9			
165	191	北西隅谷埋土最下層	板状木製品	32.25		薄い板状に作りだされる。側面は丁寧に整形されて平滑に作りだされる。全体に、工具痕跡は把握できない。	クリ
				4.35			
				1.0			
166	203	北西隅谷埋土最下層	板状木製品	31.9		もとは平面形が長方形の板状を呈していたとみられる。表裏面とも縦方向にはつたような加工痕跡が若干みとめられる。	アカガシ亜属
				8.3			
				2			
167	207	北西隅谷埋土最下層	板状木製品	90.8		A面はほぼ平坦になるまで加工されたものとみられるが、B面は木割りの際に生じた凹凸が残る。側面は丁寧に整形され、平滑な面を呈する。	スギ
				9.9			
				3.3			
168	197	北西隅谷埋土最下層	板状木製品	23.5		加工痕は明確にはとらえられないが、両面とも平滑な面が作りだされる。	アカガシ亜属
				10.2			
				1.8			
209	196	I-2-1	漆器椀		残存器高1.9	口縁部分のみわずかに残存する。内外面とも赤漆で着色され、口縁端部のみ黒漆で着色される。	—
210	195	北西隅谷斜面付近	円板状木製品	11.8		曲物のふたもしくは底部の転用品か?直線部分の側面にも面取りが施されており、a-a'の断面でわかるように、上半部は両面から斜めに削って縁を尖らせている。	スギ
				4.6			
				0.8			
221	登録番号168	77柱穴(建物4)	柱根	61.5	長軸13.6 短軸12.1	断面が楕円形を呈する	ヤナギ属
222	登録番号167	76柱穴(建物4)	柱根	34.4	径8.4		コナラ亜属
223	登録番号170	99ピット	柱根	34	長軸18.5 短軸15	断面が楕円形を呈する	クリ

単位:cm ():残存値 —:計測不可 / :計測項目無

表4-2 木器観察表

224	登録番号 356	198柱穴(建物10)	柱根	22.4	長軸9.7 短軸5.8	断面が楕円形を呈する	スギ
225	登録番号 390	29ピット	柱根	44	長軸16.95 短軸14.8	断面が楕円形を呈する。全体に炭化している。	クリ
226	登録番号 169	78柱穴(建物4)	柱根	39.4	長軸15.5 短軸11.8	断面が楕円形を呈する	ヒノキ
	登録番号 171	99柱穴(建物2)	柱根か	15	直径6	腐食が進み、細片になっている	—

表5 瓦観察表

遺物番号	実測番号	出土遺構名・層名	種別	長さ		色調	形態・手法の特徴	残存率
				幅・径	厚み			
203	179	I - 1 - 2	丸瓦	33.4		内:N4/灰	凸面はタテ縄叩き後にナデ。玉縁部はヨコナデ。凹面は細かい布目痕で覆われると共に、糸切り痕跡も見られる。また、太縄による釣り紐痕が残る。凹面面取りは胴部側面から玉縁部は2cm弱、広端面は6.5cm、玉縁面は1cm弱である。	95%
				14.2		外:N6/灰		
				2.15		断:N8/灰白		
204	178	I - 1 - 1	丸瓦	28.2		内:N5/灰	玉縁部は欠損する。凸面はタテ縄叩き後にナデ。凹面は細かい布目痕で、太縄による釣り紐痕が残る。凹面面取りは胴部側面は1~1.5cm弱、広端面は4cm前後である。	80%
				14.4		外:N5/灰		
				2.4		断:N7/1灰白		
205	83	I - 1 - 1	丸瓦	33.8		内:N6/灰	凸面はタテ縄叩き後にタテナデ。玉縁部はヨコナデ。凹面は細かい布目痕で覆われると共に、糸切り痕跡も見られる。また太縄による釣り紐痕が残る。凹面面取りは胴部側面から玉縁部は約1.5cm、広端面は6cm前後、玉縁面は1.5cm弱である。	90%
				14.5		外:N6/灰		85%
				2.6		断:N6/灰		
206	180	I - 2 - 2	丸瓦	28.0		内:N4/灰	凸面はナデ調整で仕上げる。玉縁部はナデ。凹面は細かい布目痕で覆われる。玉縁のやや下の部分に粘土の接合痕が残る。釣り紐痕はない。凹面面取りは胴部側面から玉縁部は2cmである。	破片
				13.6		外:N5/灰		
				2.1		断:N5/灰		
207	146	II - 1	丸瓦	残存長9.65		内:10YR6/4にぶい黄橙	側縁部分の破片である。凹面にこまかい布目痕あり。	破片
				残存幅7.8		外:2.5Y7/2灰黄		
				2.4		断:2.5Y6/2灰黄		
208	181	I - 1 - 1	平瓦	32.2		内:2.5Y6/2灰黄	凹面はていねいなナデで、糸切り痕跡がかすかに残る。狭端部には最大約1cmの面取りを行う。凸面は粗いナデで、糸切り痕跡が明瞭に残り、離れ砂が付着する。側端面は平坦にケズリ後、ナデ。	98%
				23.0		外:2.5Y6/2灰黄		
				2.3				

単位:cm ():残存値 - :計測不可 / :計測項目無

付章 自然科学分析

第1節 上私部遺跡（その3）発掘調査に伴う花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、古墳時代の須恵器甕を土坑に埋設した埋甕遺構において、埋甕埋土の上部と下部、木樋の3層、木樋底部の24層と25層、サブトレンチの1層、3層、4層、5層から採取された計9点である。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。またこの処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉28、樹木花粉と草本花粉を含むもの5、草本花粉25、シダ植物孢子2形態の計60である。これらの学名と和名および粒数を表6に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図58に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属ーアサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属ーケヤキ、エノキ属ームクノキ、サンショウ属、モチノキ属、ニシキギ科、トチノキ、ブドウ属、グミ属、ミズキ属、ハイノキ属
〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科ーイラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属ーガマズミ属
〔草本花粉〕

ガマ属ーミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科ーヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ベンケイソウ科、ノアズキ属、ツリフネソウ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

(2) 花粉群集の特徴

1) 埋糞

・埋糞（下）

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、シイ属、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、スギが比較的多い。樹木花粉と草本花粉を含むクワ科ーイラクサ科、ニワトコ属ーガマズミ属が低率に出現する。草本花粉ではヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科などが出現する。

・埋糞（上）

花粉密度が極めて低くなり、草本花粉の占める割合が高くなる。とくにイネ科が高率に出現し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アブラナ科などが伴われ、ソバ属が出現する。樹木花粉と草本花粉を含むニワトコ属ーガマズミ属は減少する。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属が減少する。

2) 木樋

・3層

樹木花粉より草本花粉の占める割合がやや高い。草本花粉ではヨモギ属、イネ科を主に、カヤツリグサ科、セリ亜科、キク亜科、サジオモダカ属、タンポポ亜科などが出現する。樹木花粉ではスギ、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、クリ、コナラ属コナラ亜属、ツガ属、マツ属複維管束亜属などが出現する。

・24層、25層（木樋底）

両者は類似した出現傾向を示す。樹木花粉より草本花粉の占める割合がやや高い。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが出現する。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、スギ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、クリ、マツ属複維管束亜属などが出現する。24層では、花粉密度が低くなり、イネ属型、ソバ属が出現する。

3) サブトレンチ（1層、3層、4層、5層）

下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

5層および4層では、樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉では、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、スギ、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、コナラ属コナラ亜属、マツ属複維管束亜属な

表6 上私部遺跡(その3) 07-1 発掘調査における花粉分析結果

学名	分類群	和名	埋藏		木種			サブトレンチ					
			上	下	3層	24層	25層	1層	3層	4層	5層		
Arboreal pollen		樹木花粉											
<i>Podocarpus</i>		マキ属		1	1	1			2				1
<i>Abies</i>		モミ属		5	1	9	3		2	5			2
<i>Tsuga</i>		ツガ属		3	7	4	2		2	3			2
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属複雑維管束亜属	1	7	5	18	8	1	5	17			12
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	4	33	47	29	31	5	8	21			38
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ		3		2	1	1	1				3
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3	49	35	25	33	4	6	25			20
<i>Juglans</i>		クルミ属		2								1	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ										1	1
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	5			1	2			1			
<i>Betula</i>		カバノキ属		2	2	1							1
<i>Corylus</i>		ハシバミ属					1		1	3			
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ		1	1	4	2	1		1			4
<i>Castanea crenata</i>		クリ	14	19	25	16	10	4	15	18			7
<i>Castanopsis</i>		シイ属	6	65	36	39	25	15	36	58			73
<i>Fagus</i>		ブナ属	1		4		1	1					1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	5	16	19	33	23	4	21	24			28
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	2	86	41	29	49	1	13	67			51
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ				1	1						1
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ		1	1								
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウ属		1			1						5
<i>Ilex</i>		モチノキ属		1									
Celastraceae		ニシキギ科										1	
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ			1			1		2			
<i>Vitis</i>		ブドウ属		1		1							1
<i>Elaeagnus</i>		グミ属						1					
<i>Cornus</i>		ミズキ属							1				
<i>Symplocos</i>		ハイノキ属										1	1
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉											
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	3	15	1		1		1	1			4
Rosaceae		バラ科		2									
Leguminosae		マメ科		1	4	3	8		5	1			6
Araliaceae		ウコギ科			1					1			1
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属		20	2	2						1	2
Nonarboreal pollen		草本花粉											
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属				5	1	6	1	1			1
<i>Alisma</i>		サジオモダカ属											
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属		1	2	4	3	1		1			
Gramineae		イネ科	55	52	103	129	81	39	20	31			37
<i>Oryza type</i>		イネ属型				5	1						
Cyperaceae		カヤツリグサ科	5	22	18	42	29	8	7	4			5
<i>Aneilema keisak</i>		イボクサ		2	1								
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節			2	1	2		2	2			1
<i>Rumex</i>		ギンギシ属		2	2	4	2						
<i>Fagopyrum</i>		ソバ属	1			1							
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	1	4	4	2	1	1	7	3			3
Caryophyllaceae		ナデシコ科			4	1		1					
<i>Ranunculus</i>		キンポウゲ属		1									1
Cruciferae		アブラナ科	4	2		2	1						2
Crassulaceae		ベンケイソウ科		4		2							
<i>Dumbaria</i>		ノアズキ属					3		2	2			
<i>Impatiens</i>		ツリフネソウ属		2									
Hydrocotyloideae		チドメグサ亜科		3	2	4	4					3	2
Apioidae		セリ亜科	2	5	13	1	11	4	11	11			5
<i>Plantago</i>		オオバコ属										1	
Valerianaceae		オミナエシ科			1								
Lactuoidae		タンポポ亜科	2		5	4	2	3	2	3			1
Asteroidae		キク亜科	2	2	9	3	6	1	1				3
<i>Xanthium</i>		オナモミ属		3				1					
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	10	55	110	55	60	19	33	56			40
Fern spore		シダ植物胞子											
Monolate type spore		単条溝胞子	1	2	3	4	4	3	15	1			1
Trilate type spore		三条溝胞子	2	7	18	8	5	6	7	9			6
Arboreal pollen		樹木花粉	41	296	226	213	194	39	112	249			252
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	3	38	8	5	9	0	6	4			13
Nonarboreal pollen		草本花粉	82	160	281	261	212	79	86	118			100
Total pollen		花粉総数	126	494	515	479	415	118	204	371			365
Pollen frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の花粉密度	9.6	4.4	1.1	1.4	3.8	5.7	1.3	1.1			9.0
			$\times 10^2$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^2$	$\times 10^3$	$\times 10^4$			$\times 10^3$
Unknown pollen		未同定花粉	11	21	9	9	7	7	9	13			14
Fern spore		シダ植物胞子	3	9	21	12	9	9	22	10			7
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)			(-)
Digestion rimeins		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)			(-)
Charcoal fragments		微細炭化物	(-)	(-)	(++)	(+)	(++)	(-)	(+++)	(-)			(-)

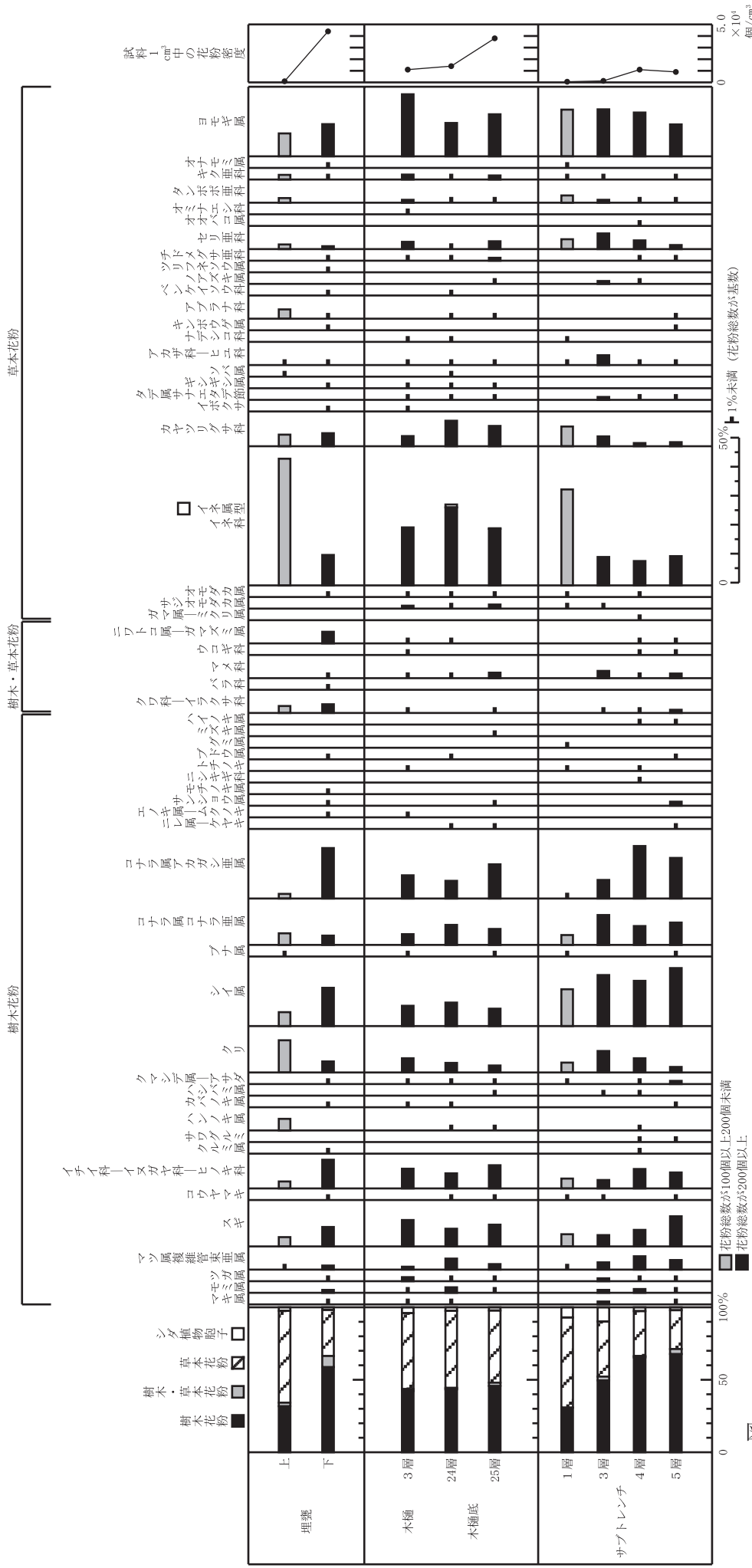
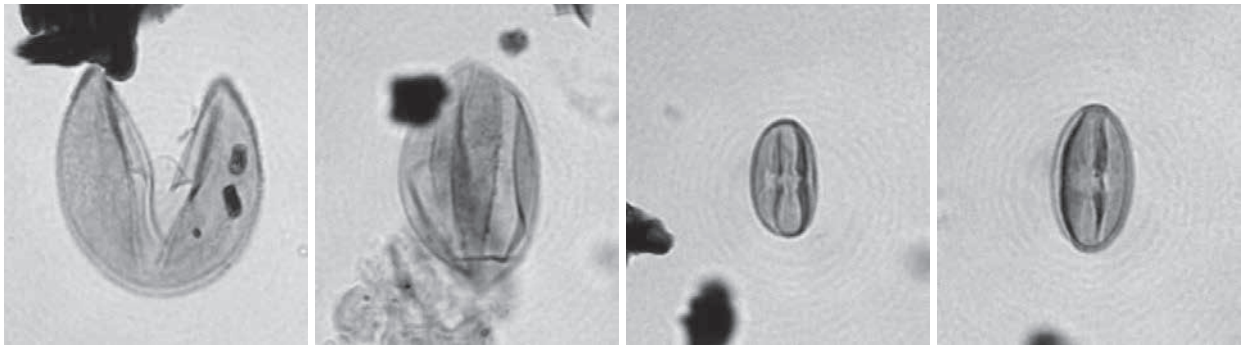


図 58 上私部遺跡 (その3) 07-1 発掘調査における花粉ダイアグラム

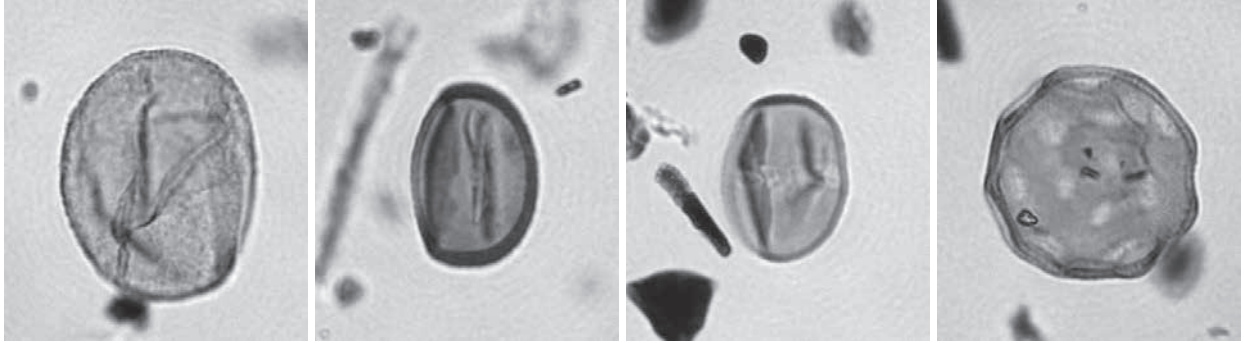


1 スギ

2 イチイ科-イヌガヤ科
-ヒノキ科

3 クリ

4 シイ属

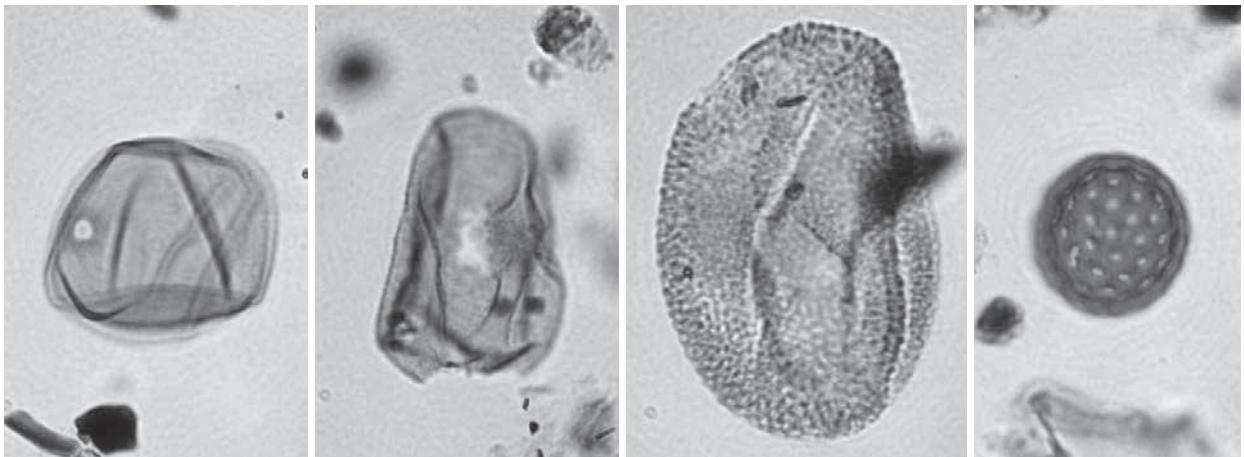


5 コナラ属コナラ亜属

6 コナラ属アカガシ亜属

7 マメ科

8 サジオモダカ属

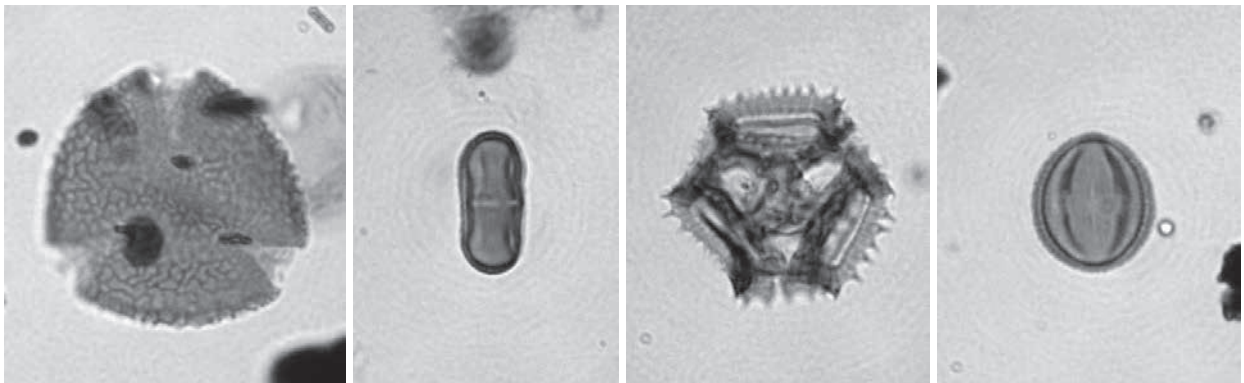


9 イネ科

10 カヤツリグサ科

11 ソバ属

12 アカザ科-ヒユ科



13 ノアズキ属

14 セリ亜科

15 タンポポ亜科

16 ヨモギ属

— 10 μm

図 59 上私部遺跡の花粉

どが比較的多い。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科などが出現する。

3層では、花粉密度は低くなり、草本花粉の占める割合がやや増加する。樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、スギが減少し、クリが微増する。

1層では、さらに花粉密度が低くなり、草本花粉の占める割合が高くなる。イネ科が増加し、樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、マツ属複維管束亜属などが減少する。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

花粉構成と花粉組成の変化の特徴から植生の復元を行う。

(1) 埋嚢

1) 埋嚢 (下)

樹木花粉の占める割合がやや高く、周辺の植生が反映されたと考えられる。周辺には、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの照葉樹林と、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、スギなどの針葉樹林が分布していたと推定される。樹木花粉と草本花粉を含むクワ科ーイラクサ科、ニワトコ属ーガマズミ属（ここではカナムグラ、カラムシ、ソクズなどの草本が近似し、生態的にも一致する）、草本花粉のヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科などが周囲に生育していたとみなされる。シイ属やクリなど乾燥したところに生育する樹木がやや多い。草本では虫媒花植物で花粉生産の少ないオモダカ属やイボクサなどの水生植物が検出され、これら草本が近接して生育していたか、埋嚢が水利に関連していたことが考えられる。

2) 埋嚢 (上)

花粉密度が極めて低くなり、堆積速度が速かったことが考えられる。ただし、草本花粉の占める割合が高くなっており、埋嚢 (下) とは異なる花粉群集であり両者には時間差が考えられる。栽培植物を多く含むイネ科、アブラナ科、ソバ属が出現し、周辺には農耕地が分布し、コナラ属アカガシ亜属、シイ属の照葉樹林は減少し、クリの二次林が増加していたと推定される。

(2) 木樋

花粉の出現傾向は埋嚢の下層の時期とやや類似する。周辺には、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの照葉樹林と、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、スギなどの針葉樹林が分布し、木樋周囲にヨモギ属、イネ科が生育していたと思われる。オモダカ属、サジオモダカ属、タデ属サナエタデ節などの水草も出現し、木樋が滞水していたか、水草などが生育する水域の影響を受けるような木樋であったと推定される。

(3) サブトレンチ (1層、3層、4層、5層)

花粉構成と花粉組成の変化の特徴から下位より植生の復元を行う。

1) 5層および4層

シイ属、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹林が比較的近接して分布していたと考えられ、やや遠方にスギ、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、マツ属複維管束亜属などの針葉樹林が分布していた。周囲はヨモギ属、イネ科などの草本が生育し、日当たりの良い環境であったと考えられる。台地や斜面の乾燥地を好むシイ属が多く、周辺には台地等のやや乾燥したところが多かったと推定される。

2) 3層

コナラ属アカガシ亜属の照葉樹林要素が減少する、一方、ヨモギ属やクリの人為ないし二次林要素が増加し、人為干渉地が拡大したと推定される。

3) 1層

イネ科が増加しヨモギ属とともに草本がより多くなり、森林が減少する。埋嚢（上）の花粉群集とは草本の多いことで類似し、草本が優勢な人為干渉の著しい植生が分布していたと推定される。

6. まとめ

埋嚢（下）と木樋は類似する花粉群集である。すなわち、周囲にヨモギ属、イネ科が生育し、周辺にコナラ属アカガシ亜属、シイ属などの照葉樹林と、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、スギなどの針葉樹林の分布が示唆された。埋嚢と木樋は、オモダカ属などの水生植物が生育する水域とつながっており、その影響を受けていたと推定された。下部にあたるサブトレンチの4層、5層では森林が比較的多く、シイ属、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹林が比較的近接して分布していた。最上部とみなされる埋嚢(上)およびサブトレンチの1層の時期は、森林が減少し草本の優勢な人為干渉の著しい植生が分布していたと推定された。

参考文献

- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.
- 中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として．第四紀研究，13,p.187-193.
- 中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.
- 中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

第2節 放射性炭素年代測定

1. はじめに

大阪府交野市所在の上私部遺跡（その3）より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料の調製は廣田、瀬谷、Lomtadze、Jorjoliani、測定は小林、丹生、伊藤、本文は伊藤、中村が作成した。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表7のとおりである。試料は部位不明で生の木材1点である。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

結果

表8に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲を、表8下図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

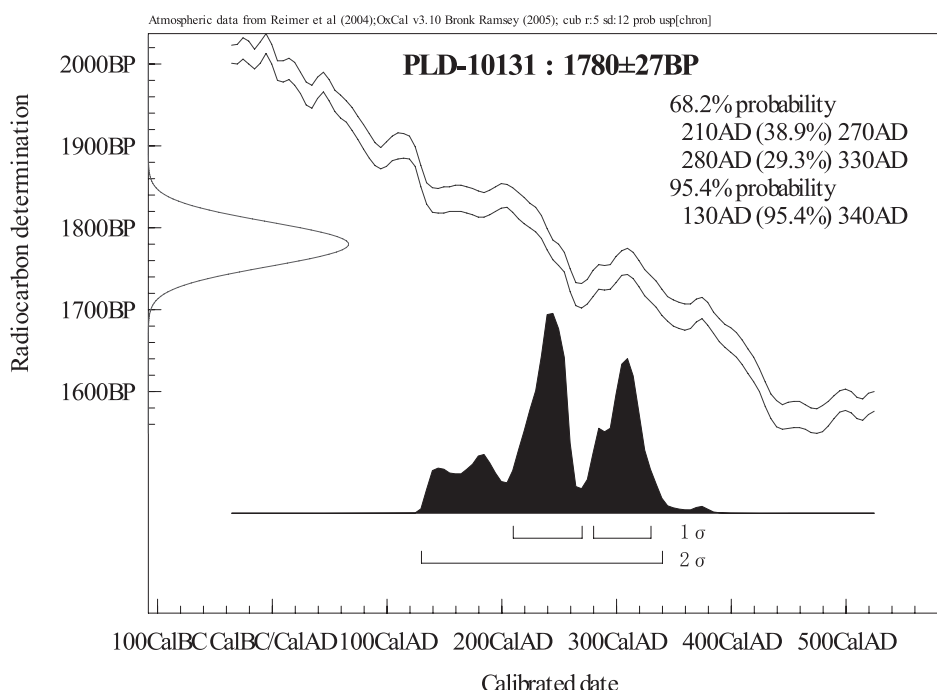
¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、

表7 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-10131	遺跡名：上私部遺跡(その3)	試料の種類：生材 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)

表8 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-10131	-25.11 \pm 0.35	1780 \pm 27	1780 \pm 25	210AD (38.9%) 270AD 280AD (29.3%) 330AD	130AD (95.4%) 340AD



測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期5730 \pm 40年)を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal3.10(較正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その

範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

3. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。試料(PLD-10131)の2σ暦年代範囲は130-340calAD(95.4%)であり、弥生時代後期から古墳時代前期に相当する。

なお、木材の¹⁴C年代は試料とする部位が生育していた年代を示す。木材は部位によって形成された時期が異なるため、古い時期に形成された組織はその分古い年代を示す。たとえば、最外年輪の年代は枯死・伐採年を示し、内側の年輪ほど古い年代を示す。今回測定した試料は部位不明の木材であったため、枯死・伐採年よりも古い年代を示している可能性を考慮する必要がある。

写真図版



2 調査区東半部古墳時代遺構面全景（南から）



2 調査区西半部古墳時代遺構面全景（東から）



1 調査区北半部古墳時代遺構面全景（南東から）



1 調査区南半部古墳時代遺構面全景（東から）



14 土坑（南から）



39 土坑（南から）



建物1（北東から）



柱穴列1・柱穴列2
(北東から)



14 土坑土層断面
(西から)



12 竪穴住居・柱穴列1
(北から)



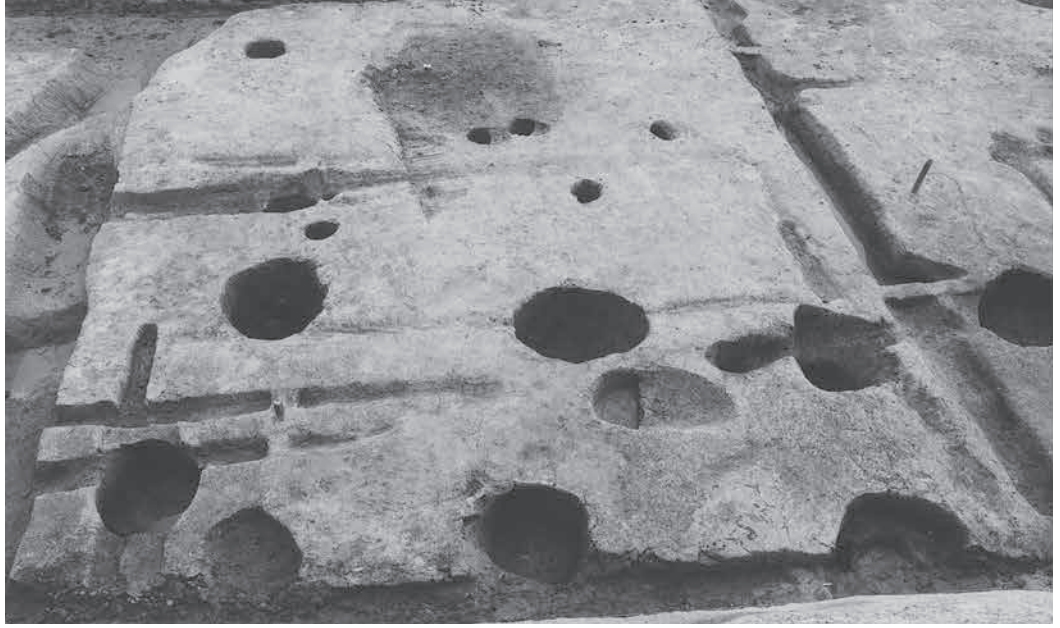
18 土坑（南から）



19 溝・20 溝
・柱穴列 12
（南から）



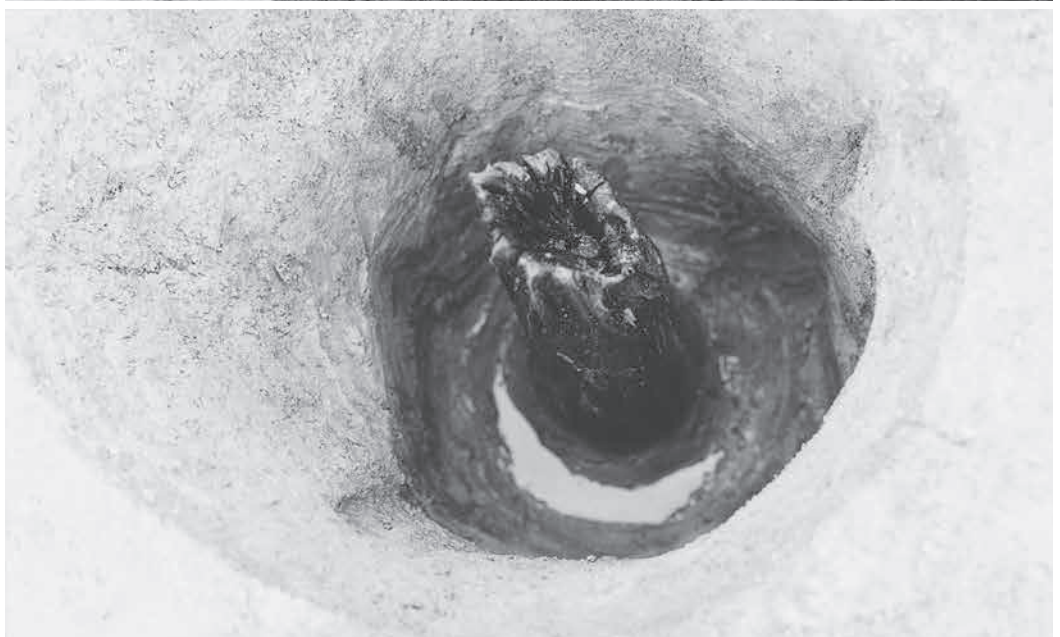
建物 2 検出状況
（北東から）



建物2完掘状況(北から)



建物3完掘状況(北から)



77柱穴(南西から)



21 溝遺物出土状況
(東から)



21 溝土層断面
(南から)



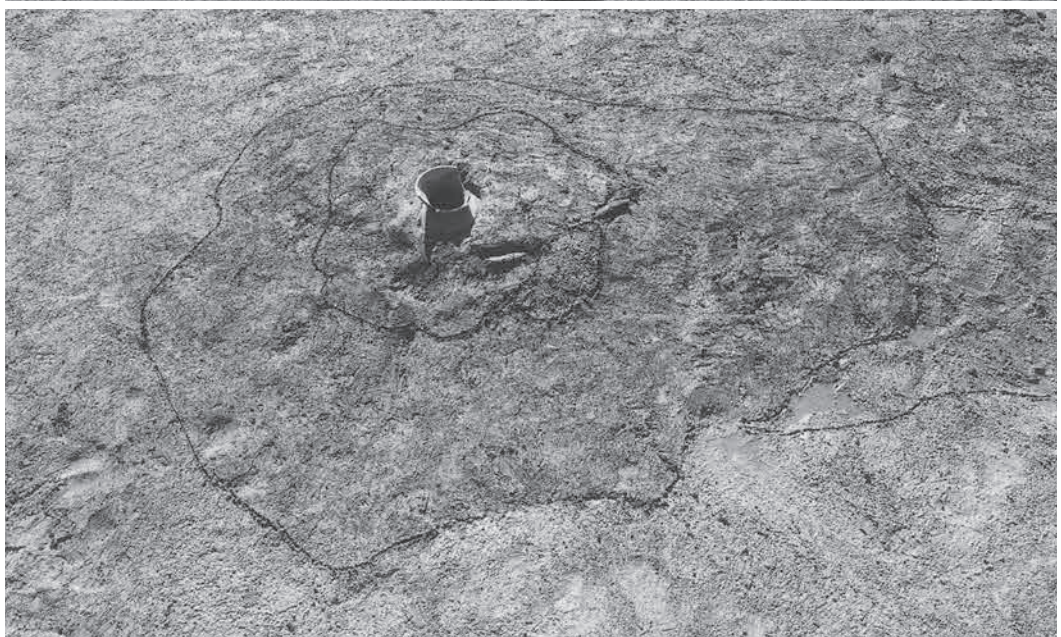
21 溝遺物出土状況
(東から)



30溝・127溝
・29溝（南から）



建物4（南から）



1172土坑検出状況
（北から）



1172 土坑出土壺
口縁部接写(北から)



1172 土坑 I 層
掘削状況(西から)



1172 土坑 VI 層
上面検出状況(南から)



1172 土坑土層断面
(南東より)



1172 土坑土層断面
(北西より)



1172 土坑VI層上面
検出状況(北東から)



1172 土坑Ⅵ層上面検出状況（南西から）



1172 土坑Ⅵ層断ち割り状況（北から）



1172 土坑完掘状況
(北から)



154 溝土層断面と遺物
検出状況 (東から)



153 ピット遺物出土状況
(東から)



調査区北西隅検出
谷地形（東から）



調査区北西隅検出谷地形
土層断面（東から）



建物 10・建物 7
（東から）



建物9・建物8(東から)



建物10(東から)



建物7(西から)



266 土坑遺物出土状況
(東から)



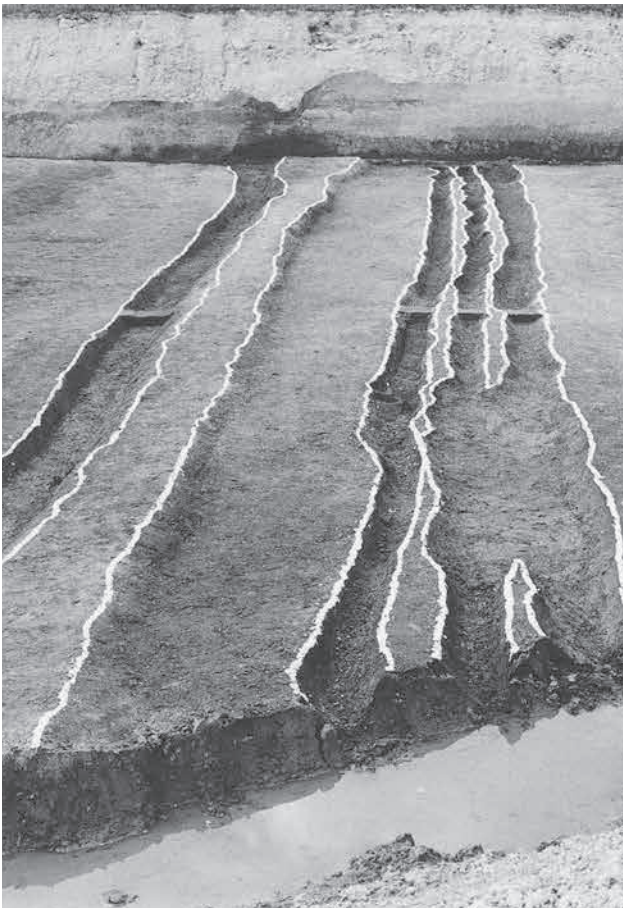
建物11(東から)



建物12(東から)



中世遺構面全景（南東から）



1溝・2溝・3溝・畦畔4・5溝（南から）



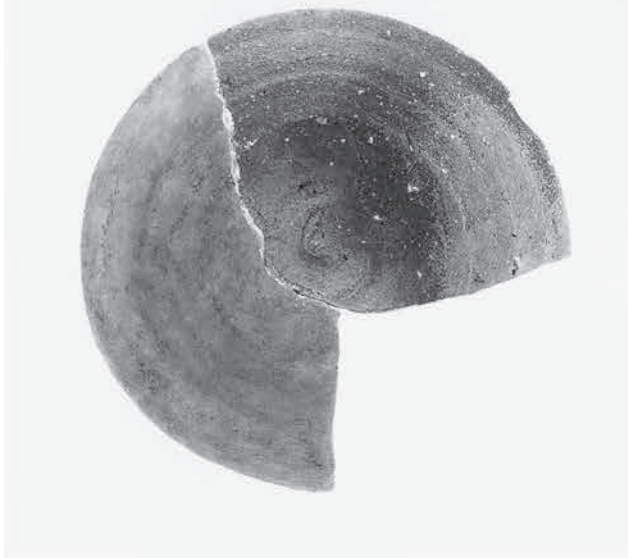
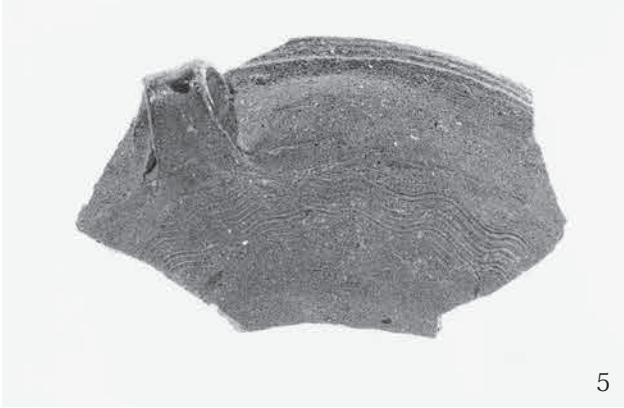
畦畔2・畦畔3（南から）



1 調査区北半部中世遺構面（東から）



1 調査区中世遺構面全景（南から）





43



47



50



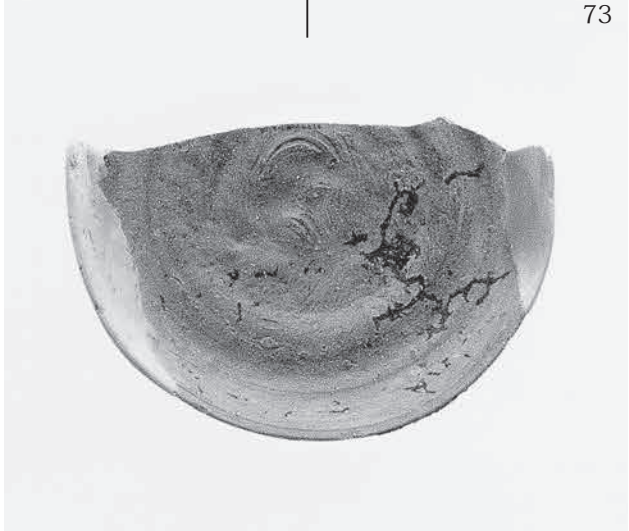
48



49



45





89



91



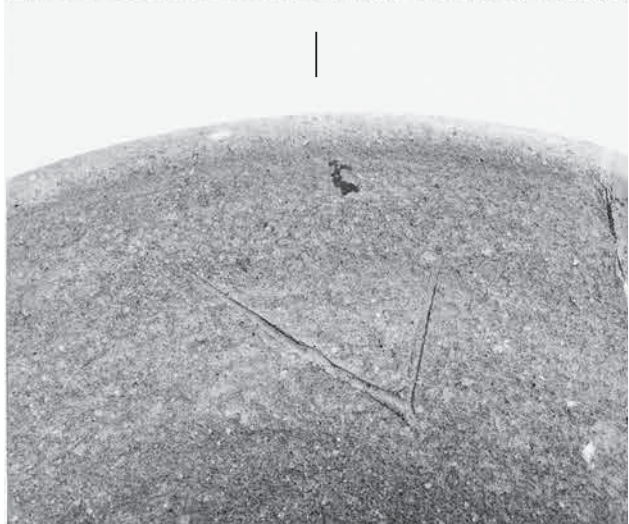
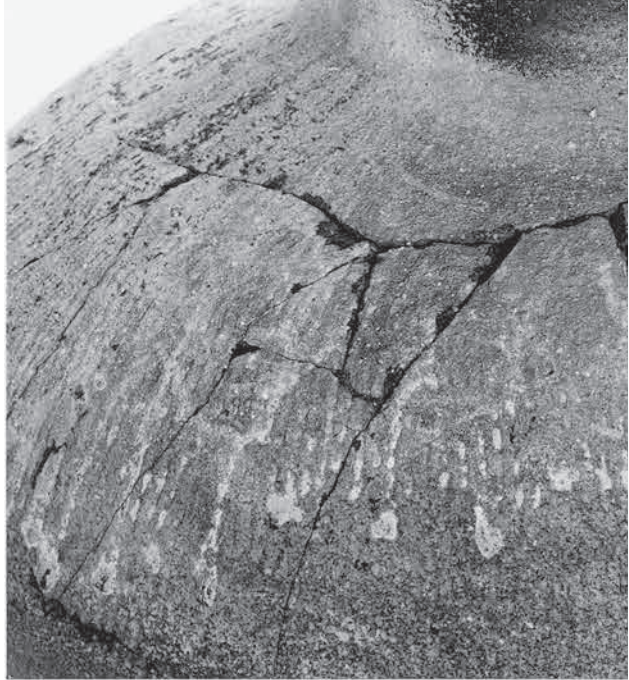
93

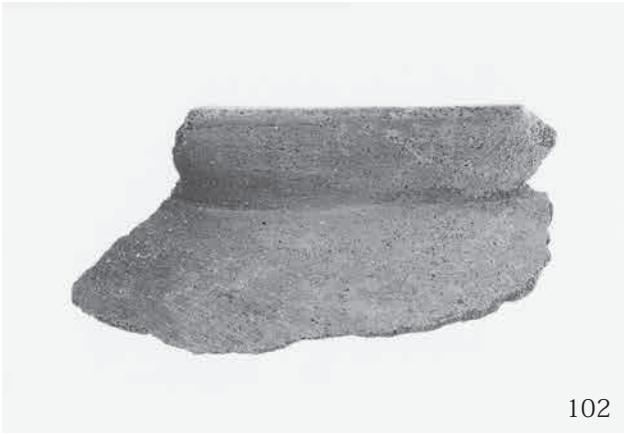
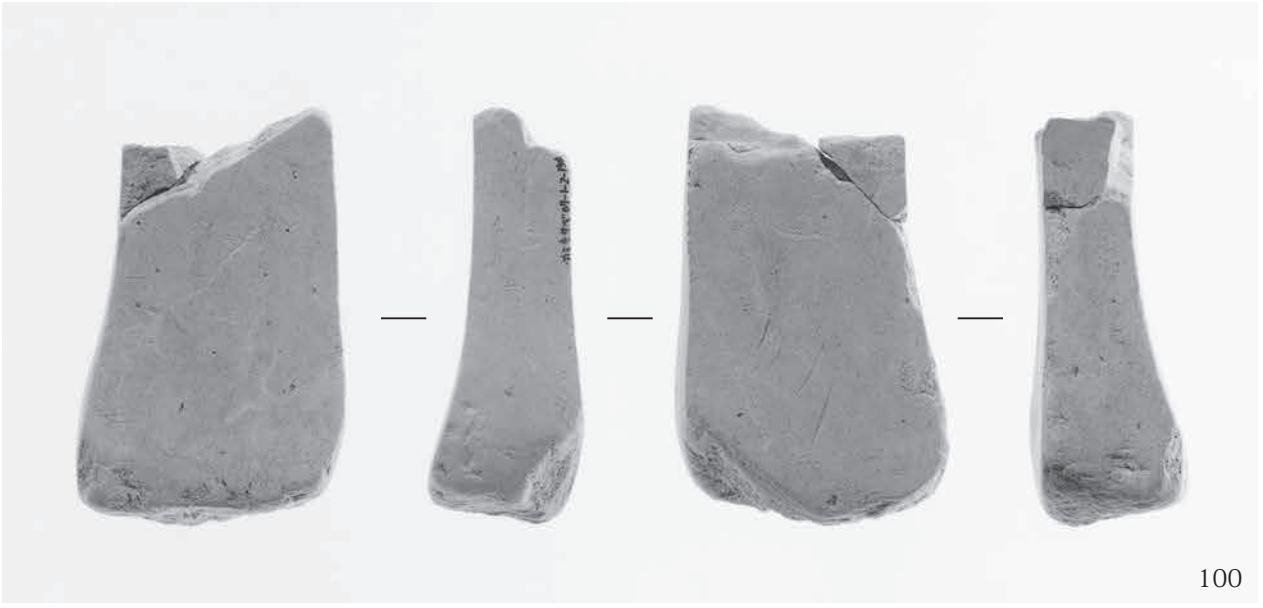


97

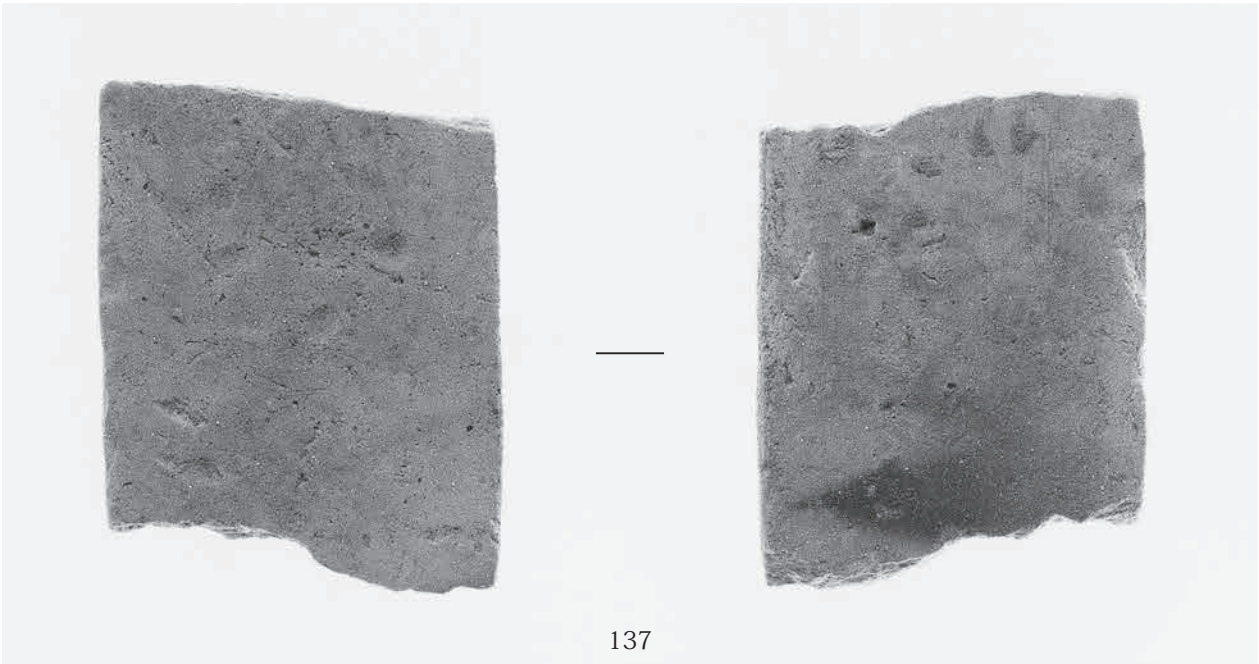


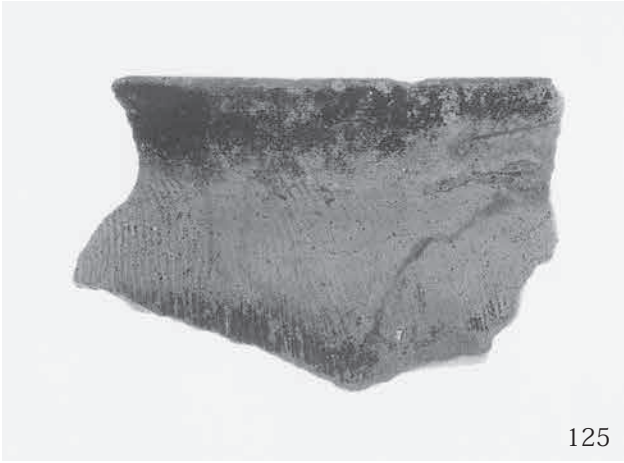
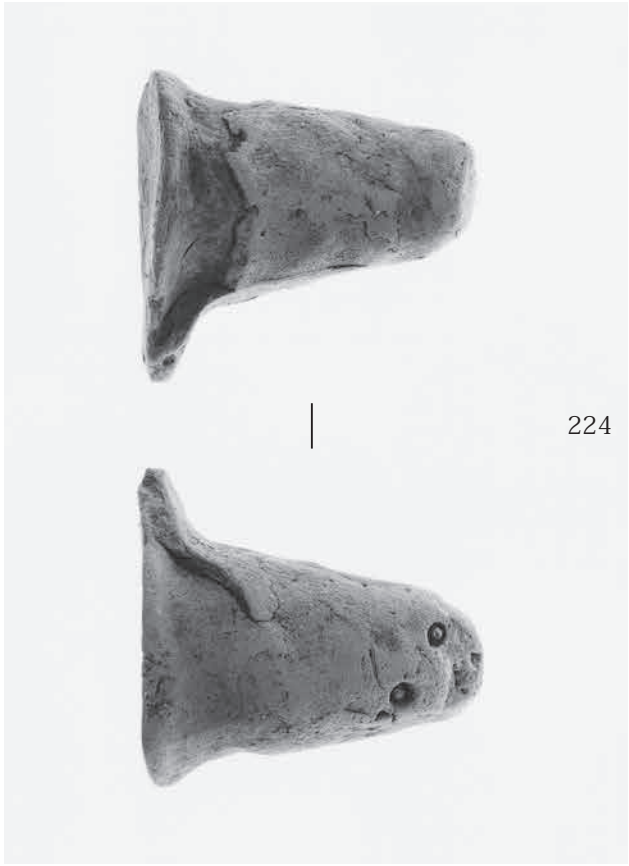
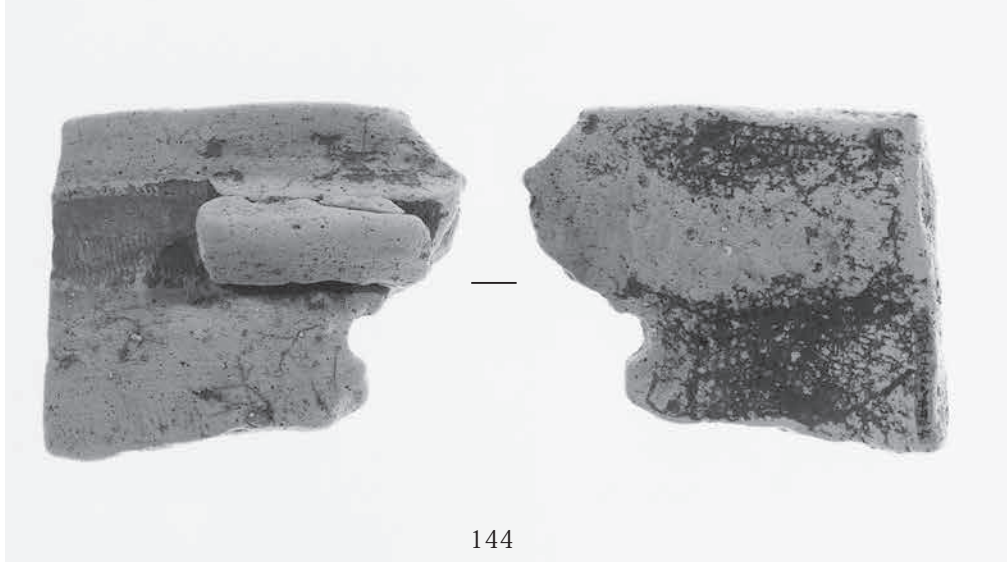
96

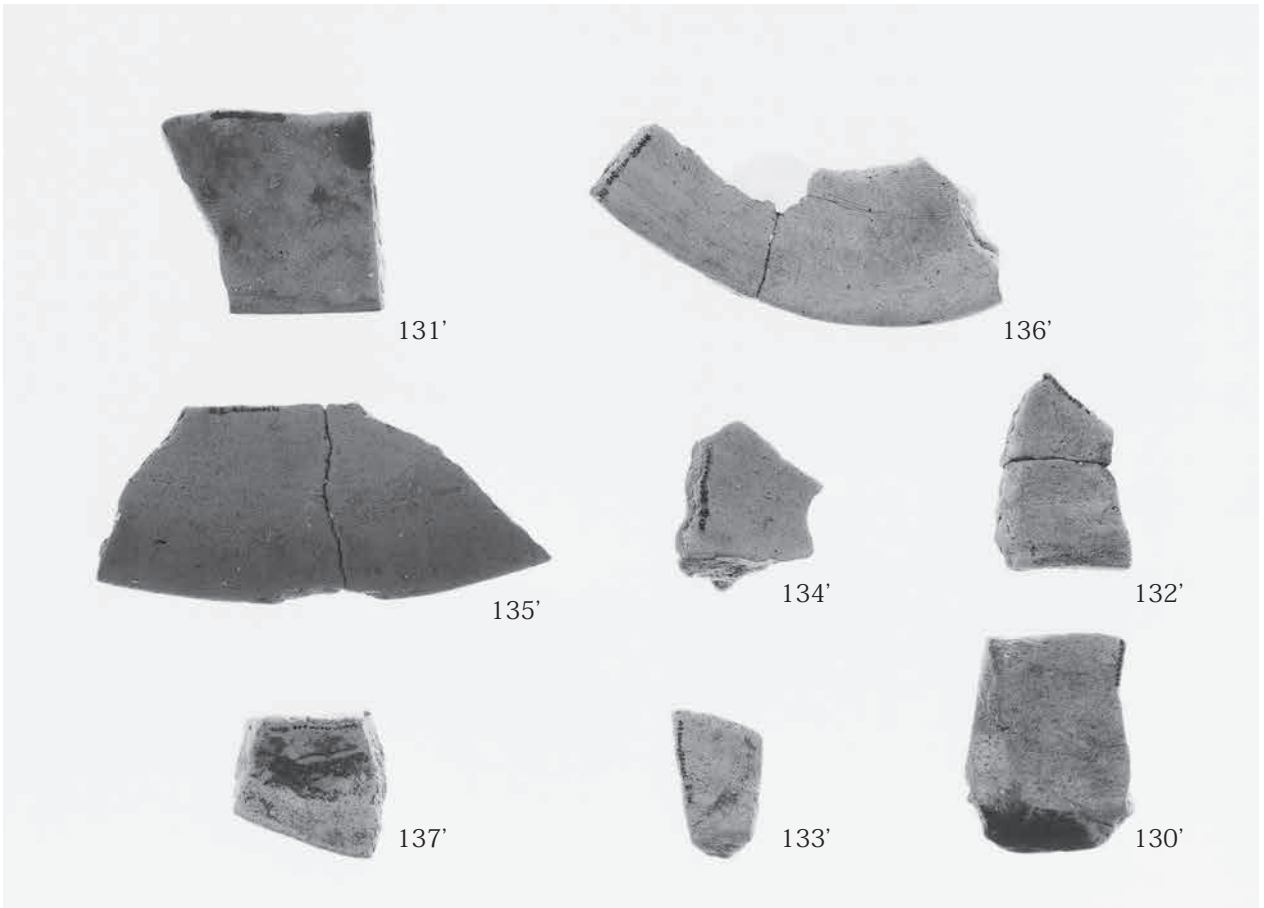
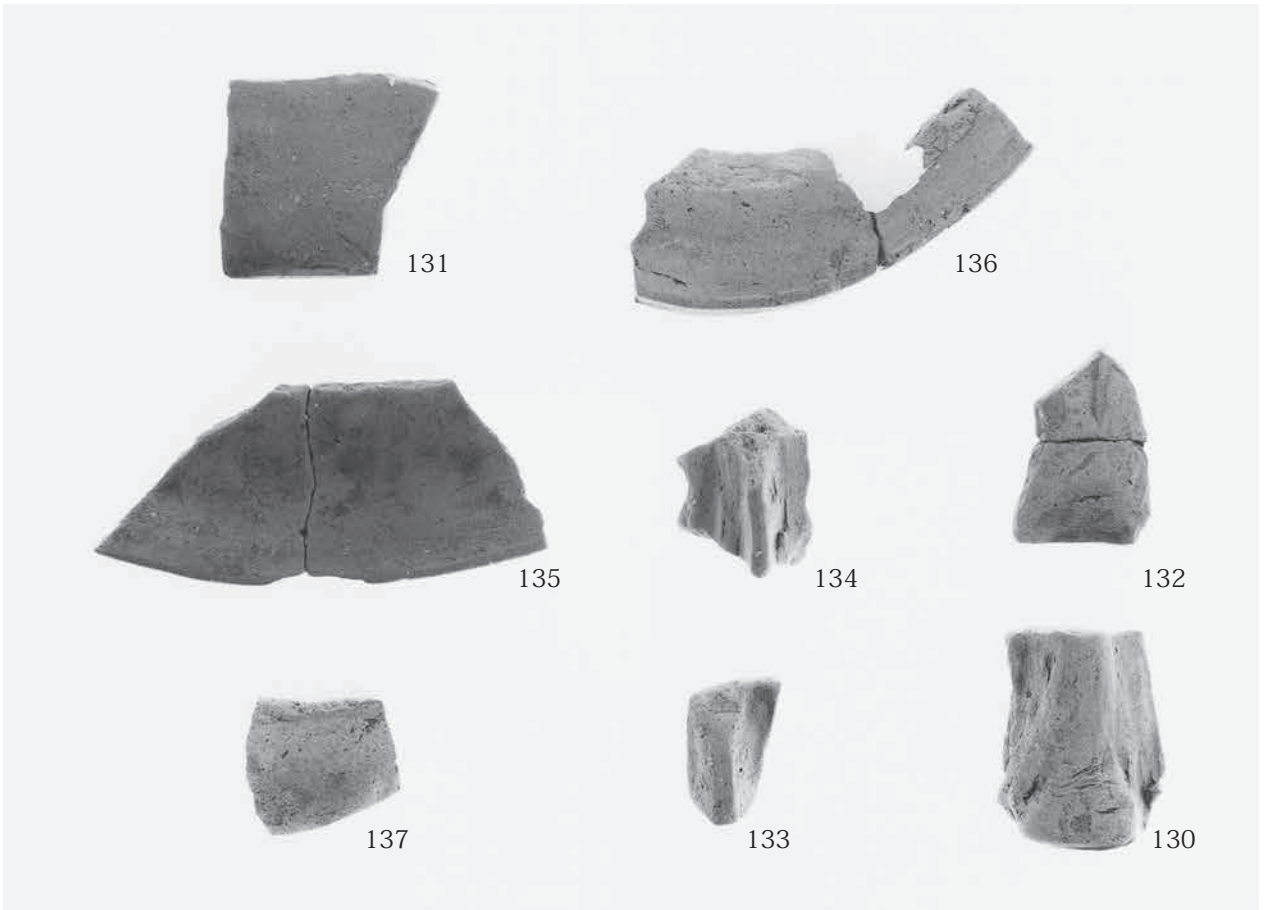


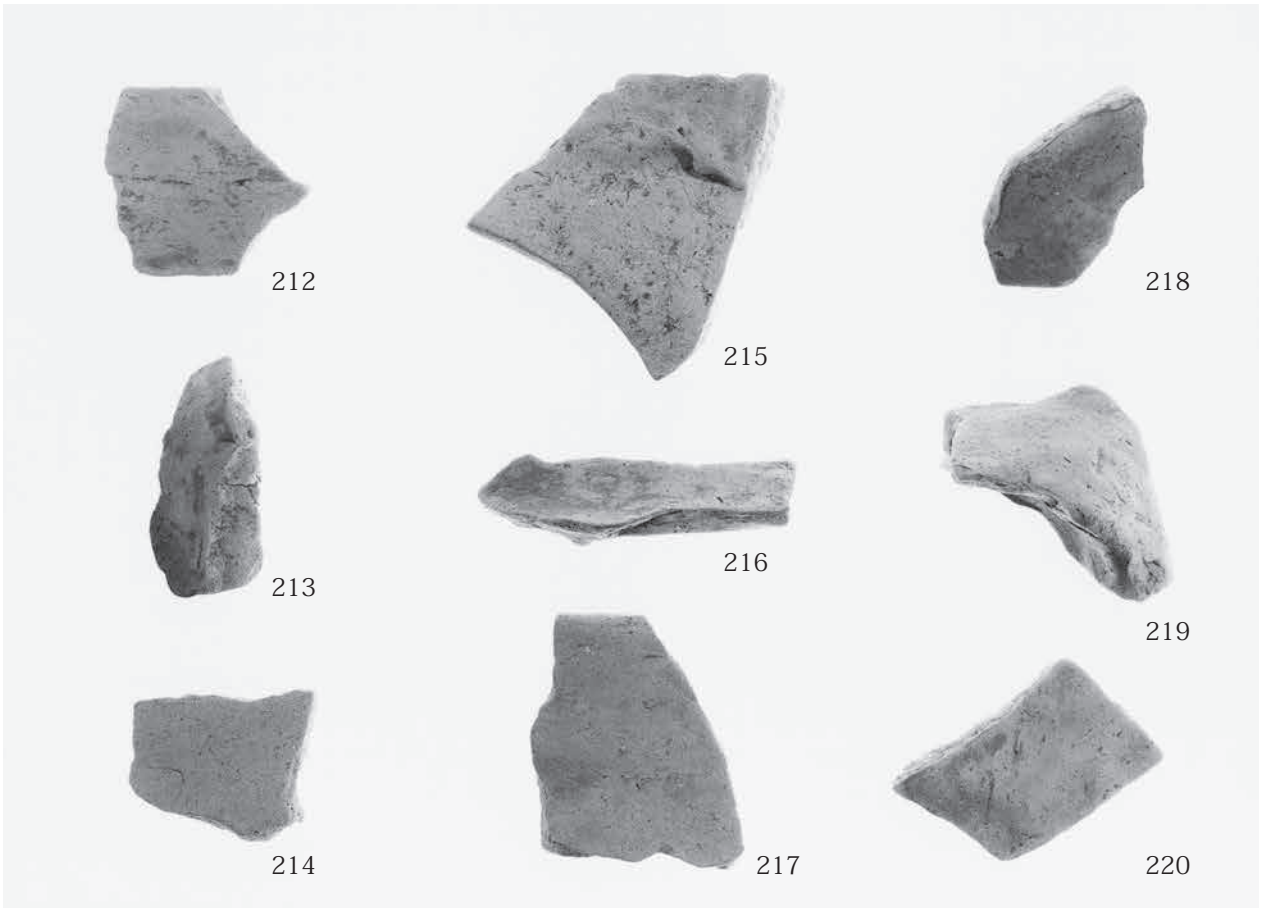
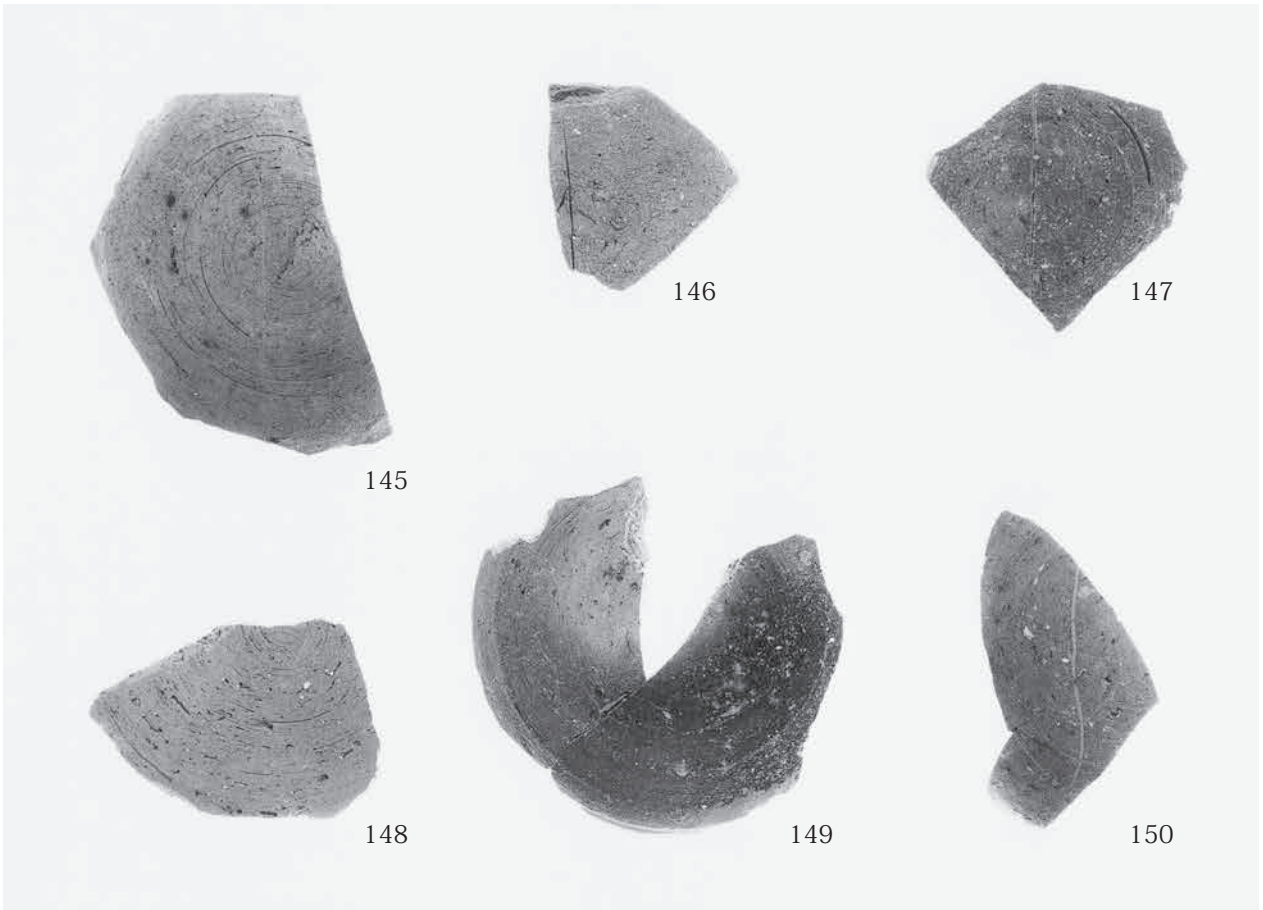


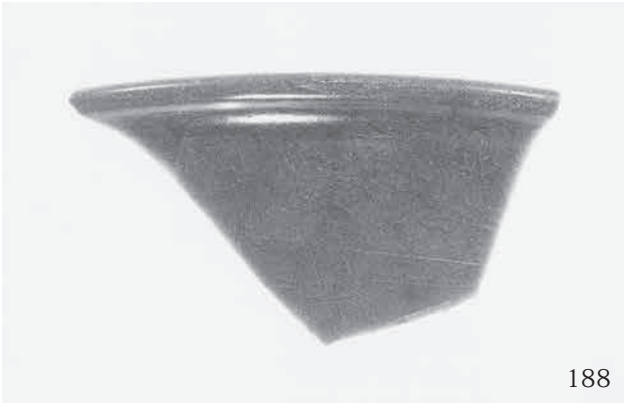


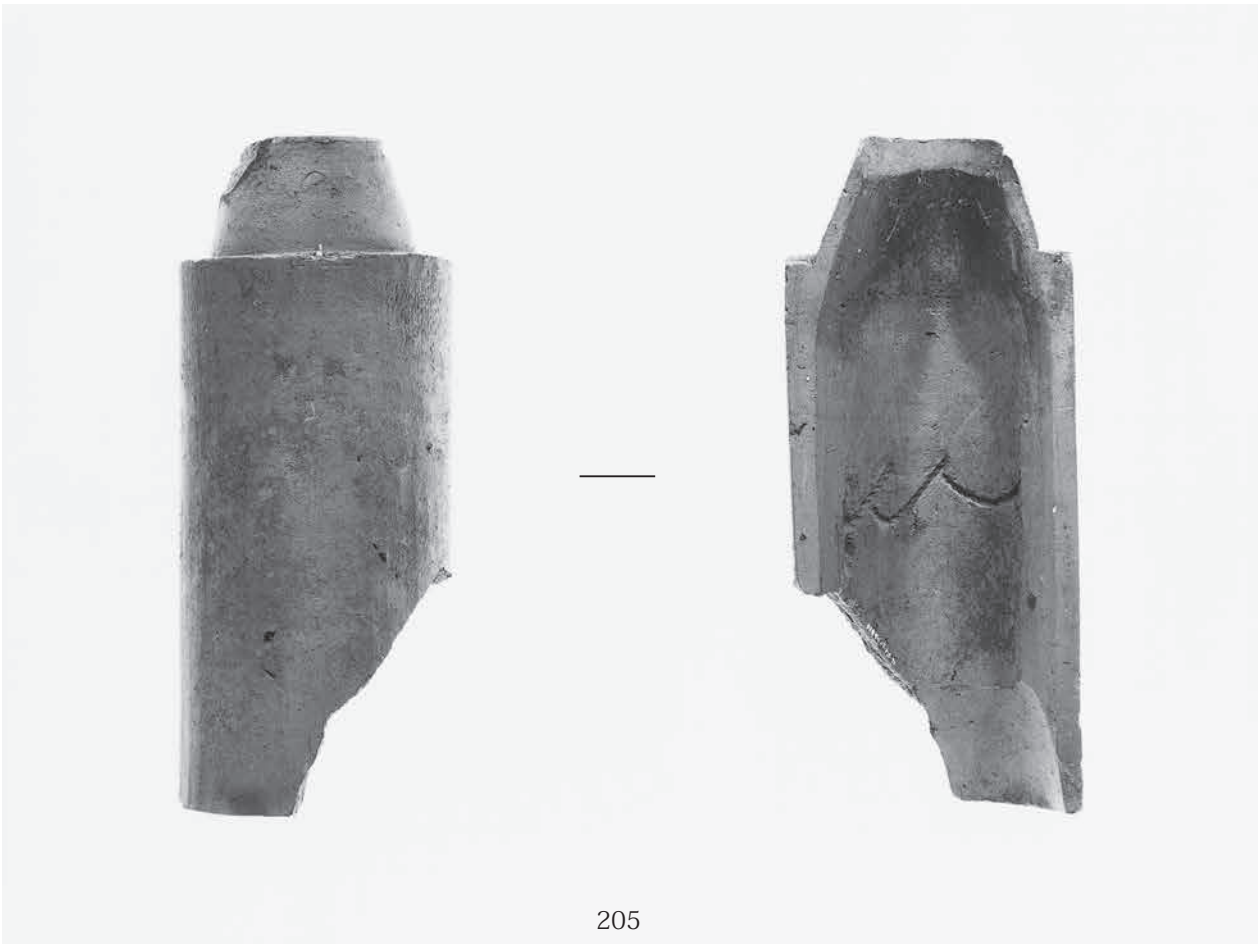
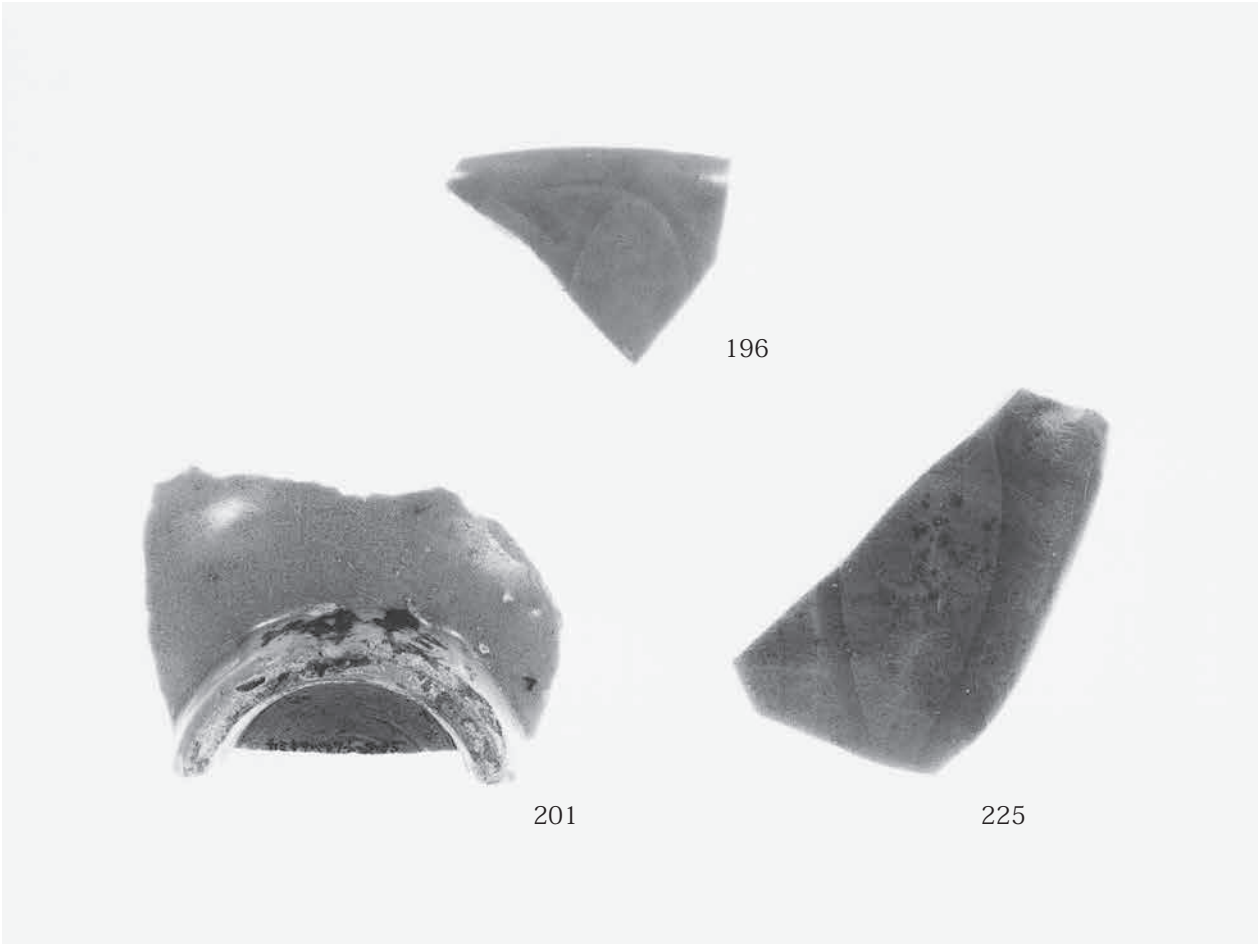




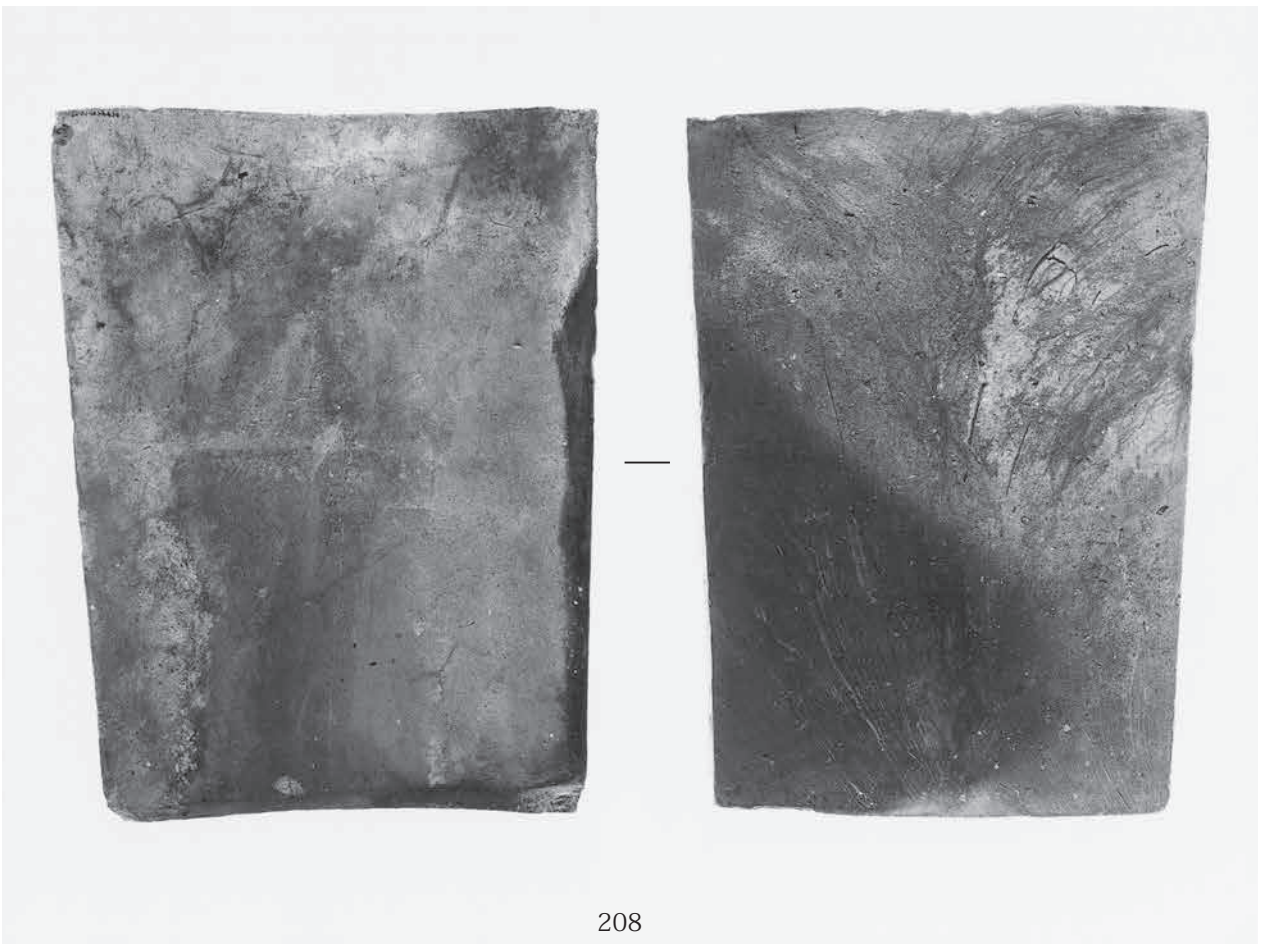
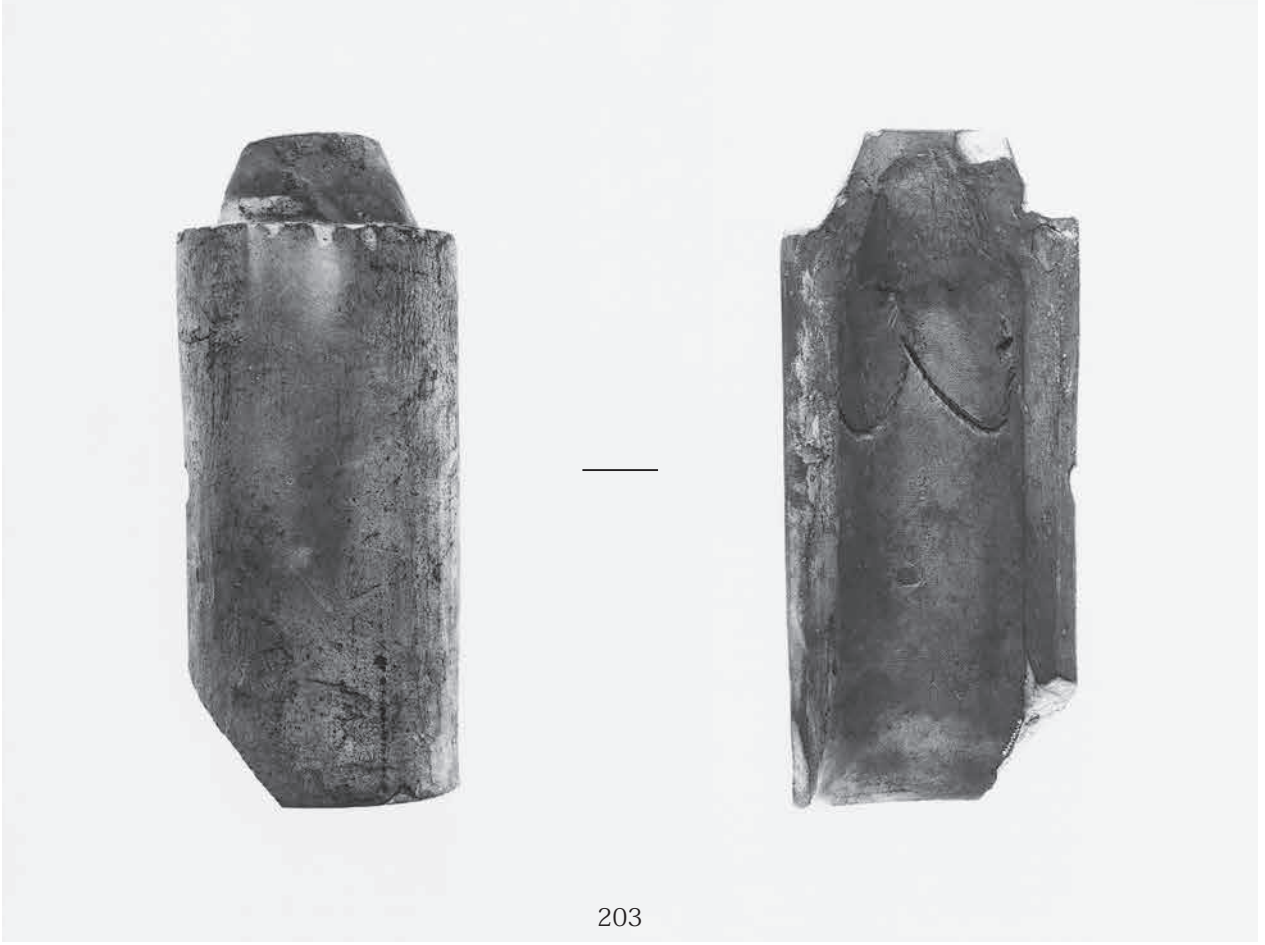


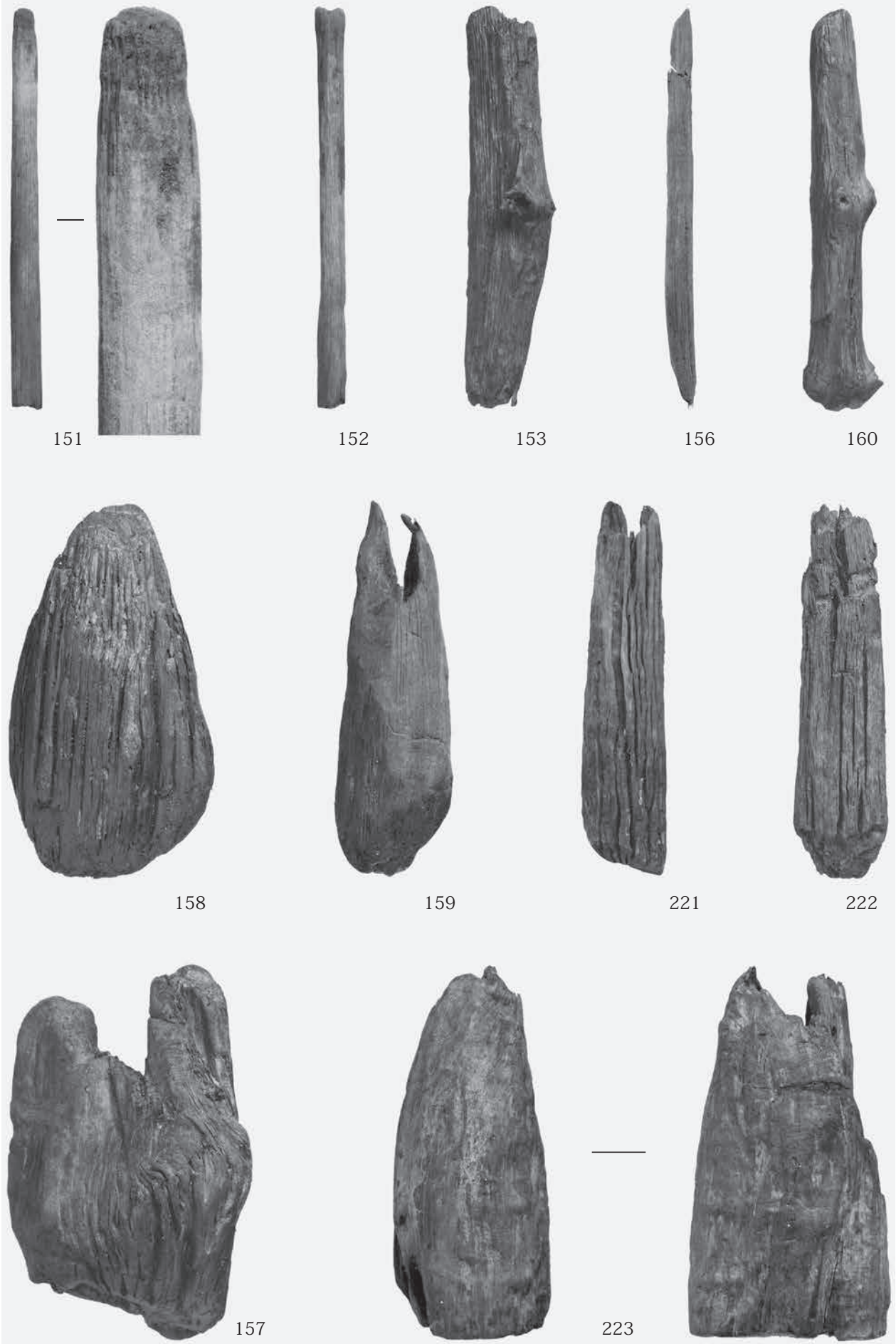


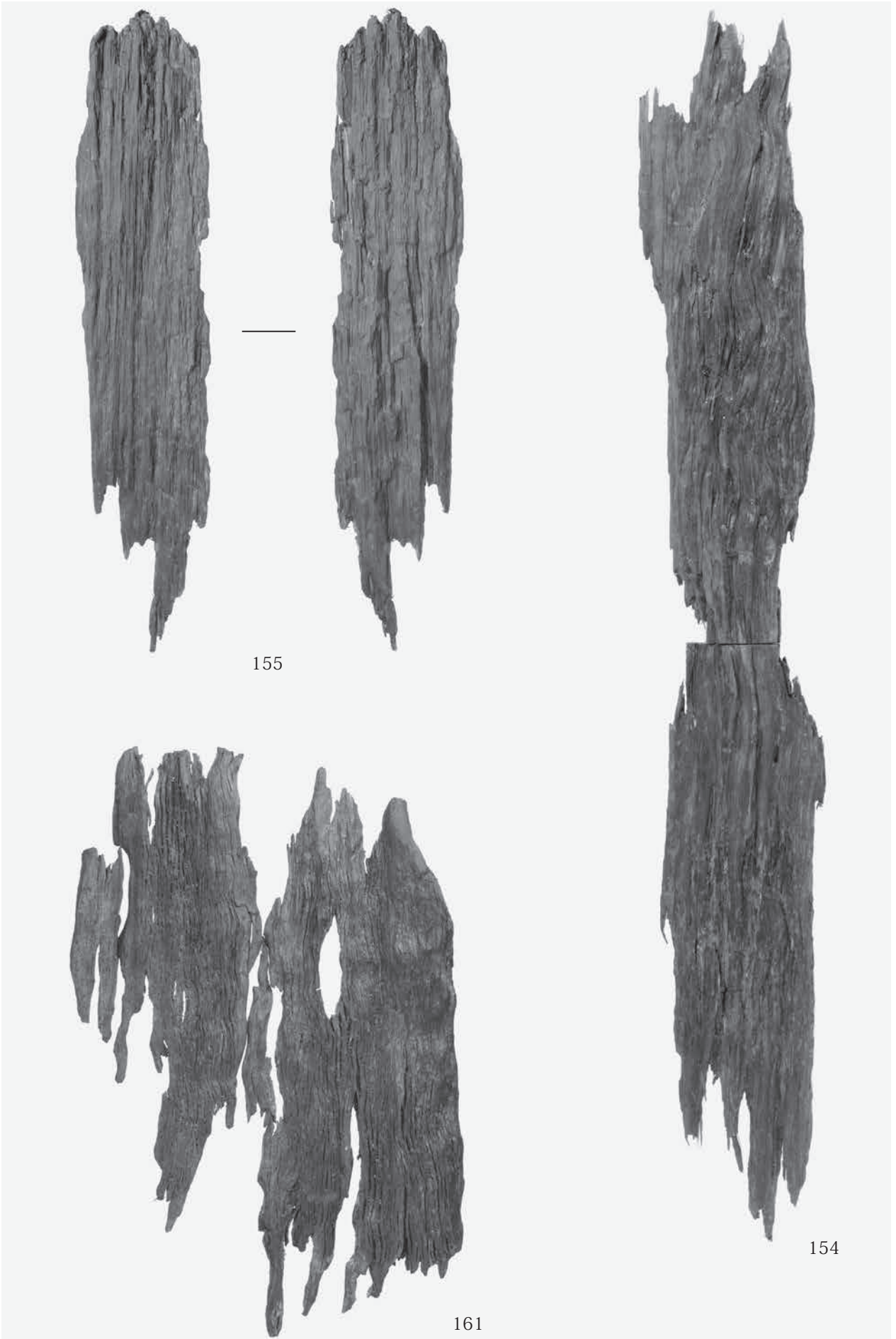


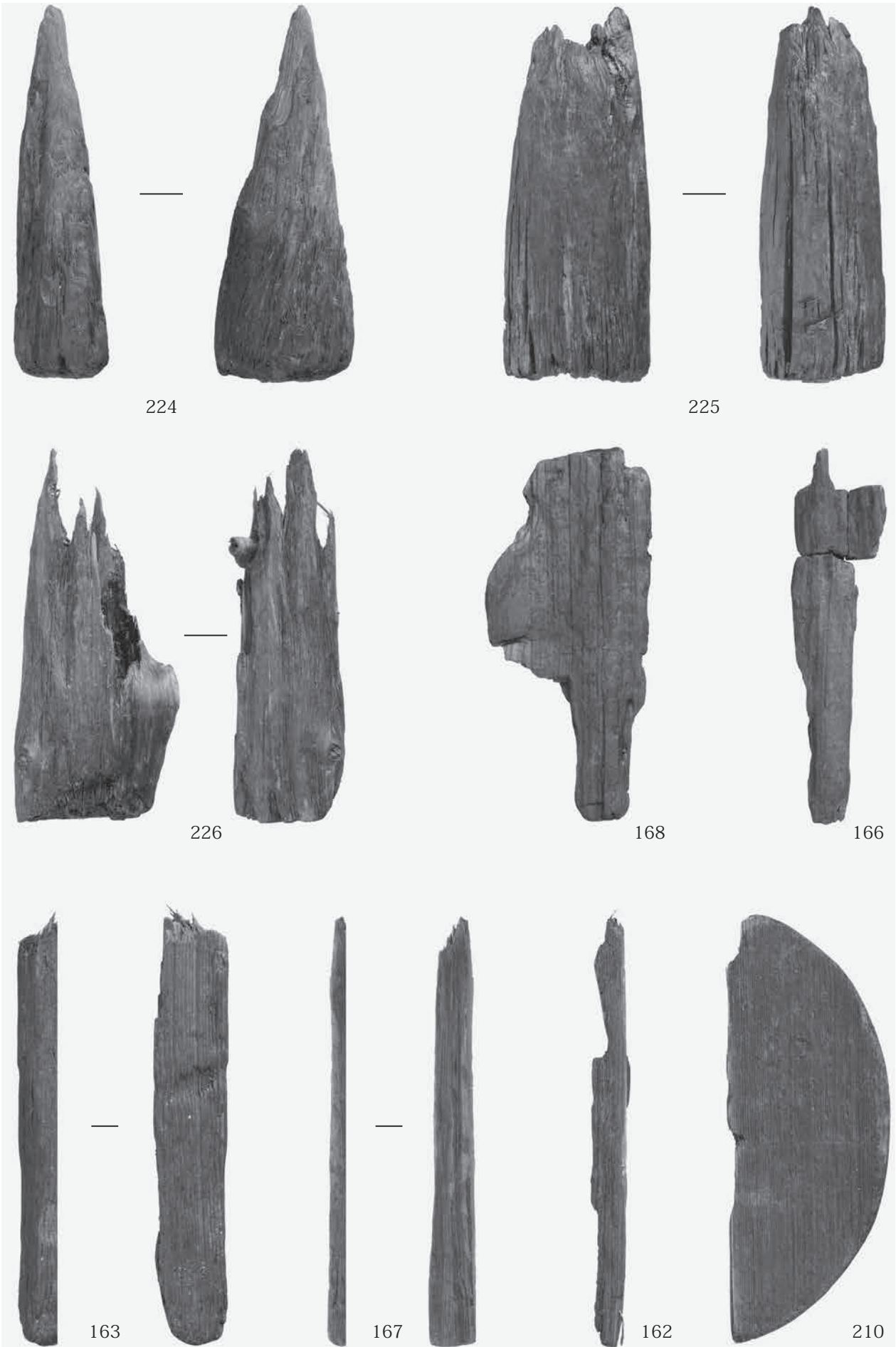


205









〔第Ⅱ部〕

有池遺跡（その6）07－1

上私部遺跡（その4）07－2

上私部遺跡（その4）08－1

の発掘調査成果報告

凡 例

1. 本書に掲載した遺構実測図・地形図などに付された方位は、すべて座標北を示している。
2. 本書で使用した測量基準線は、世界測地系による国土座標を基準に、当センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル（暫定版）』（2003）に準拠している。座標値は、すべてmで統一した。
3. 本書で使用した標高値は、東京湾平均海水位（T.P.）を使用した。
4. 実測図の縮尺については、掘立柱建物は80分の1に統一した。その他の遺構については、それぞれスケールバーを用いて、縮尺を図中に明記した。なお、断面図・見通し図の位置は、平面図中に「T」字形で示し、断面図には方位を記入した。
5. 遺構番号は、全調査区にわたっておおむね発掘調査の段階で付した番号を、そのまま使用している。このため、遺構名の表記は、「105 竪穴住居」、「101 溝」のように、「番号＋遺構の属性」となっている。ただし、既往の調査において確認されている遺構を引用する場合は、既報告の名称をそのまま用い、〔 〕で括って区別した。今回検出した遺構と連続する場合は、「現調査遺構名＋〔既往の調査遺構名〕」で示した。
なお、遺構番号は、各調査区ごとに1から順に付した。
6. 遺構平面図には、極力、遺構名を掲載したが、ピットについては見辛くなるため、あえて番号のみを掲載したものがあある。
7. 遺物実測図の縮尺は、基本的には3分の1に統一したが、他の縮尺をとったものもある。縮尺は、図版ごとに示した。遺物番号は、図版ごとに付番した。
8. 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄著『新版 標準土色帖』2008年版 農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修 を基準とした。

目 次

凡 例

目 次

第1章 調査の経緯と調査方法	133
第1節 調査に至る経緯と経過	133
第2節 調査地の立地	134
第3節 調査区の設定	135
第4節 調査方法	136
第2章 調査成果	137
第1節 第1調査区	137
第2節 第2調査区	160
第3節 第3調査区	166
第4節 第4調査区	198
第5節 まとめ	209

挿 図 目 次

図1 調査地位置および周辺の遺跡分布図	133
図2 既往の調査範囲および今回の調査対象範囲	134
図3 調査区設定図	135
図4 第1調査区基本層序模式図	137
図5 1-3区西壁・中央壁土層断面図	138
図6 第1調査区遺構面全体図（中近世）	139
図7 第1調査区遺構面平面図（1）・1-2区遺構平面・断面図	143
図8 第1調査区遺構面平面図（2）	144
図9 1-5区遺構平面・断面図	145
図10 第1調査区遺構面平面図（3）	146
図11 1-3区遺構平面・断面図	147
図12 第1調査区遺構面平面図（4）	148
図13 1-3区遺構平面・断面図	149
図14 第1調査区遺構面平面図（5）	150
図15 1-3区遺構平面・断面図	151
図16 第1調査区遺構面平面図（6）	152
図17 1-4区遺構平面・断面図（1）	153

図 18	1-4区遺構平面・断面図(2)	154
図 19	1-4区遺構平面・断面図(3)	155
図 20	第1調査区遺構面平面図(7)・1-1区遺構平面・断面図	156
図 21	第1調査区出土遺物(1)	157
図 22	第1調査区出土遺物(2)	158
図 23	第1調査区出土遺物(3)	159
図 24	第2調査区基本層序模式図	160
図 25	2-1区北西壁断面図	161
図 26	2-2区北西壁断面図	162
図 27	第2調査区遺構面全体図(中近世)	163
図 28	213 竪穴住居周辺遺構平面・断面図	164
図 29	第2調査区出土遺物	165
図 30	第3調査区基本層序模式図	166
図 31	第3調査区壁・畦断面図	167
図 32	第3調査区遺構面全体図(古墳時代後期～古代初頭)	169
図 33	第3調査区遺構面平面図(1)	171
図 34	第3調査区遺構面平面図(2)	172
図 35	第3調査区遺構面平面図(3)	173
図 36	第3調査区遺構面平面図(4)	174
図 37	第3調査区遺構面平面図(5)	175
図 38	第3調査区遺構面平面図(6)	176
図 39	第3調査区遺構面平面図(7)	177
図 40	99 竪穴住居平面・断面図	178
図 41	105 竪穴住居平面・断面図	179
図 42	117・118 竪穴住居平面・断面図	180
図 43	167 竪穴住居平面・断面図	181
図 44	120 竪穴住居平面・断面図	182
図 45	296 竪穴住居平面・断面図	183
図 46	297 竪穴住居平面・断面図・296 竪穴住居柱穴平面・断面図	184
図 47	303 竪穴住居および周辺遺構平面・断面図	185
図 48	[建物 14] 平面・断面図	186
図 49	[建物 15]・[建物 26] 平面・断面図	187
図 50	[建物 28]・[建物 37] 平面・断面図	188
図 51	[建物 38]・[建物 47] 平面・断面図	189
図 52	[建物 52]・[建物 54] 平面・断面図	190
図 53	建物 391 平面・断面図	191
図 54	建物 392 平面・断面図	192
図 55	第3調査区溝断面図	192

図 56	第 3 調査区土坑断面図	193
図 57	第 3 調査区出土遺物 (1)	195
図 58	第 3 調査区出土遺物 (2)	196
図 59	第 3 調査区出土遺物 (3)	197
図 60	第 4 調査区基本層序模式図	199
図 61	第 4 調査区壁断面図	200
図 62	第 4 調査区遺構面全体図 (古墳時代後期～古代初頭)	201
図 63	建物 431 平面・断面図	202
図 64	建物 432 平面・断面図	203
図 65	建物 433 平面・断面図	204
図 66	建物 460 平面・断面図	205
図 67	建物 461 平面・断面図	206
図 68	建物 572 平面・断面図	207
図 69	建物 573・建物 576 平面・断面図	208

挿入写真目次

写真 1	現地調査 機械掘削状況	136
写真 2	現地調査 人力掘削状況	136
写真 3	写真測量 実施状況	136
写真 4	現地調査 測量作業状況	136

写真図版目次

図版 1	遺構	1. 1-1 区 中世遺構面全景 (北西から)
		2. 1-2 区 中世遺構面全景 (南東から)
図版 2	遺構	1. 1-3 区 中世遺構面全景 (東から)
		2. 1-3 区 85 溝完掘状況 (北西から)
		3. 1-2 区 30 土坑遺物出土状況 (北から)
		4. 1-3 区 87 井戸検出状況 (南西から)
図版 3	遺構	1. 1-3 区西半部 中世遺構面遺構完掘状況 (南東から)
		2. 1-4 区 中世遺構面全景 (北西から)
図版 4	遺構	1. 1-5 区 中世遺構面全景 (南東から)
		2. 1-5 区 130 土坑半掘状況 (北東から)
図版 5	遺構	1. 2-1 区 中世遺構面全景 (東から)
		2. 2-1 区 中世遺構面全景 (西から)

- 3. 2-1 区西半部 中近世遺構面全景（東から）
- 4. 2-1 区中央部 古墳時代後期～中世遺構面全景（南から）
- 5. 2-1 区 213 竪穴住居完掘状況（西から）
- 6. 2-2 区 中世遺構面全景（東から）
- 図版 6 遺構
 - 1. 3-1 区 中世遺構面全景（西から）
 - 2. 3-1 区 中世遺構面全景（東から）
 - 3. 3-1 区 102 溝完掘状況（南から）
 - 4. 3-1 区 111 溝完掘状況（南から）
- 図版 7 遺構
 - 1. 3-1 区東半部 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（西から）
 - 2. 3-1 区西半部 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（東から）
- 図版 8 遺構
 - 1. 3-1 区 105 竪穴住居周辺遺構検出状況（南から）
 - 2. 3-1 区 105 竪穴住居完掘状況（南から）
 - 3. 3-1 区 112 土坑完掘状況（南から）
 - 4. 3-1 区 117・118 竪穴住居完掘状況（北から）
 - 5. 3-1 区 120 竪穴住居完掘状況（南から）
- 図版 9 遺構
 - 1. 3-1 区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（西から）
 - 2. 3-1 区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（東から）
- 図版 10 遺構
 - 1. 3-2 区 中世遺構面全景（南から）
 - 2. 3-2 区 167 竪穴住居完掘状況（東から）
 - 3. 3-2 区 167 竪穴住居竈遺物出土状況
 - 4. 3-2 区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（東から）
- 図版 11 遺構
 - 1. 3-3 区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（北西から）
 - 2. 3-3 区 [建物 26] 検出状況（南西から）
- 図版 12 遺構
 - 1. 3-4 区 中世遺構面全景（北から）
 - 2. 3-4 区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（北から）
- 図版 13 遺構
 - 1. 3-3 区 303 竪穴住居完掘状況（西から）
 - 2. 3-4 区 296 竪穴住居検出状況（西から）
 - 3. 3-4 区 297 竪穴住居検出状況（南から）
 - 4. 3-4 区 296 竪穴住居竈検出状況
 - 5. 3-5 区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（南東から）
- 図版 14 遺構
 - 1. 3-6 区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（北から）
 - 2. 4-1 区 中世遺構面全景（西から）
 - 3. 4-2 区 中世遺構面全景（西から）
 - 4. 4-1 区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（西から）
- 図版 15 遺構
 - 1. 4-1 区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（南から）
 - 2. 4-1 区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（東から）
- 図版 16 遺構
 - 1. 4-2 区 古墳時代後期～古代初頭遺構面検出状況（西から）
 - 2. 4-2 区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（南から）

- 図版 17 遺物 1. 第 1 調査区 85 溝出土遺物 (1)
2. 第 1 調査区 85 溝出土遺物 (2)
- 図版 18 遺物 1. 第 1 調査区 85 溝出土常滑焼壺底部
2. 第 1 調査区 85 溝出土備前焼壺底部
3. 第 1 調査区 85 溝出土備前焼壺底部纖維付着部分拡大
4. 第 1 調査区 85 溝出土土師器皿
5. 第 1 調査区 85 溝出土青磁碗底部
6. 第 1 調査区 85 溝出土白磁碗底部
- 図版 19 遺物 1. 第 1 調査区 86 溝出土瓦質土器播鉢
2. 第 1 調査区 86 溝出土遺物
3. 第 1 調査区 87 井戸出土遺物
- 図版 20 遺物 1. 第 1 調査区 124 溝出土土師器皿
- 図版 21 遺物 1. 第 1 調査区 遺構内出土遺物 (1)
2. 第 1 調査区 遺構内出土遺物 (2)
- 図版 22 遺物 1. 第 1 調査区 122 溝出土遺物
2. 第 1 調査区 127 溝出土水晶製石鏃未成品
3. 第 1 調査区 中世包含層出土銭貨「皇宋通寶」「聖宋元寶」
4. 第 1 調査区 中世包含層出土遺物
- 図版 23 遺物 1. 第 2 調査区 出土遺物
2. 第 2 調査区 207 溝出土瓦質土器羽釜
3. 第 3 調査区 4 溝出土天目茶碗
4. 第 3 調査区 27 溝出土青磁碗
- 図版 24 遺物 1. 第 3 調査区 中世遺構・包含層出土遺物
2. 第 3 調査区 古墳時代遺構内出土遺物
- 図版 25 遺物 1. 第 3 調査区 34 溝出土須恵器杯身
2. 第 3 調査区 99 竪穴住居出土須恵器杯身
3. 第 3 調査区 57 溝出土須恵器甕
4. 第 3 調査区 105 竪穴住居出土遺物
5. 第 3 調査区 118 竪穴住居出土土師器高杯
- 図版 26 遺物 1. 第 3 調査区 111 溝出土遺物
2. 第 3 調査区 111 溝出土須恵器杯身
3. 第 3 調査区 111 溝出土壺
4. 第 3 調査区 111 溝出土鉄滓
5. 第 3 調査区 111 溝出土砥石
6. 第 3 調査区 111 溝出土須恵器甕口縁
7. 第 3 調査区 111 溝出土須恵器甕口縁
8. 第 3 調査区 111 溝出土須恵器甕口縁
- 図版 27 遺物 1. 第 3 調査区 106 溝出土須恵器杯蓋

- 2. 第3調査区 112 土坑出土土師器高杯
- 3. 第3調査区 119 土坑出土土師器高杯
- 4. 第3調査区 古墳時代溝出土遺物
- 5. 第3調査区 118 竪穴住居出土遺物
- 図版 28 遺物
 - 1. 第3調査区 214 ピット出土土師器高杯
 - 2. 第3調査区 214 ピット出土土師器高杯
 - 3. 第3調査区 222 竪穴住居出土須恵器杯身
 - 4. 第3調査区 296 竪穴住居土師器甕
 - 5. 第3調査区 303 竪穴住居出土土師器高杯
 - 6. 第3調査区 308 ピット出土須恵器杯蓋
 - 7. 第3調査区 308 ピット出土土師器高杯
 - 8. 第3調査区 310 ピット出土須恵器杯身
 - 9. 第3調査区 337 溝出土土師器甕
- 図版 29 遺物
 - 1. 第3調査区 296 竪穴住居出土遺物
- 図版 30 遺物
 - 1. 第3調査区 297 竪穴住居出土遺物
 - 2. 第3調査区 296・297 竪穴住居出土滑石製白玉・ガラス製小玉・ガラス片
 - 3. 第3調査区 296 竪穴住居竈内出土骨片
- 図版 31 遺物
 - 1. 第3調査区 古墳時代包含層出土遺物
- 図版 32 遺物
 - 1. 第1調査区 101 溝出土木製樋（中世末～近世初頭）
 - 2. 第1調査区 89 溝出土板状部材・杭（中世末～近世初頭）
 - 3. 第3調査区 1 水路出土漆器椀（近世）
 - 4. 第3調査区 1 水路出土板状部材（近世）
- 図版 33 遺物
 - 1. 第1調査区 199 井戸出土棒状部材（近世）
 - 2. 第2調査区 206 流路出土板状部材（近世）
 - 3. 第2調査区 206 流路出土角材状部材（近世）
 - 4. 第2調査区 206 流路出土漆器椀（近世）
 - 5. 第4調査区 407 ピット出土柱根（古墳時代後期～古代初頭）
 - 6. 第4調査区 411 ピット出土柱根（古墳時代後期～古代初頭）
 - 7. 第4調査区 490 ピット出土柱根（古墳時代後期～古代初頭）

況水路部分など、平成 14・15 年度に調査が及ばなかった未調査部分を対象とするものである（図 2 参照）。現地調査は平成 20 年 2 月より着手し、平成 20 年 10 月末日に完了した。平成 19 年度については、全調査区 1,360㎡のうち 954㎡を、平成 20 年度は残る 406㎡を調査対象とした（図 3 参照）。

限られた調査面積ではあるが、既往の調査成果から、希少な遺構および遺物の検出が予想された。

第 2 節 調査地の立地

調査地周辺の立地および環境については、既往の調査報告書である『有池遺跡 I』『上私部遺跡 I』および、本書第 I 部に詳述があるため、ここでは既往の調査成果を含めた概略を述べておきたい。

有池遺跡は東に交野山を臨み、生駒山地西麓から交野台地に移行する扇状地の末端に位置している。現在ではほぼ平坦な土地となっているが、最終遺構面に達すると、谷地形や微高地が櫛の目状につらなることから、本来は随所に凹凸をもつ景観を呈していたと考えられる。かつての谷地形上に形成された湿地部分は中世以降、水田等の生産域として利用されてきた。これに対し、微高地部分では主に居住域が形成され、濠をめぐらせた居館が建築されるなど、中世集落が盛行した。中世末～近世初頭になると集落は廃絶し、その後は生産域として、整地と耕作が繰り返され、平地化が進められた。

有池遺跡の西に接する上私部遺跡も、交野山の西麓に形成された扇状地の西端に位置しており、北川の旧流路もしくは扇状地を開析して形成された谷地形を臨む。調査区一帯はかつての自然堤防上にあたっており、古墳時代中期から後期、飛鳥時代には大規模な集落が営まれた。上私部遺跡の既往の調査面積は 15,554㎡であるが、そのほとんどが居住域にあたり、これまでに竪穴住居 51 棟、掘立柱建物 81 棟が復元されている。遺構の切り合い関係や出土遺物の考察から、5 世紀前半から 7 世紀前半までの時間幅において、少なくとも 5 回の建て替えが想定できる。今回の調査では、新たに竪穴住居 5 棟、掘立柱建物 10 棟を復元しており、今後さらに遺構数は増えるものと予想される。また、渡来系遺物である新羅土器など、希少な遺物の出土も報告されており、遺跡の特異性をさらに際立たせている。

なお、上私部遺跡の西隣には、弥生時代中期初頭から中世まで存続する私部南遺跡が立地する。現在、順次調査が進められており、その様相が徐々に明らかとなりつつある。上私部遺跡に近い調査区では、古墳時代中期～飛鳥時代の水田が検出されており、これを上私部遺跡集落の生産域と仮定するならば、集落の範囲はさらに西側へと拡大する可能性がある。また、私部南遺跡集落の居住域とも近く、この一帯が古墳時代中期～飛鳥時代の中心的集落であったことが、確実視されている。

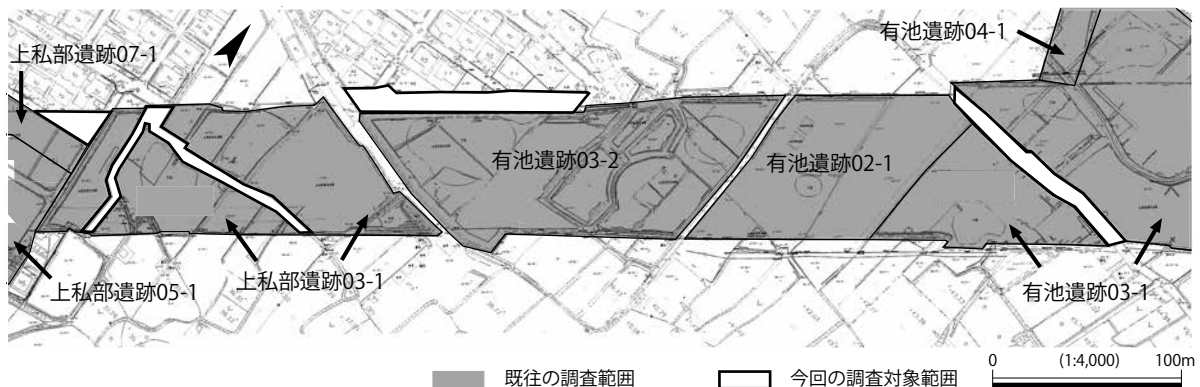


図 2 既往の調査範囲および今回の調査対象範囲

第3節 調査区の設定

今回の調査では、大きく4箇所に調査区を設定した。このうち、第1調査区が有池遺跡に、第2調査区・第3調査区・第4調査区が上私部遺跡の範疇に含まれている。現地調査では、本体工事と平行して調査をおこなったため、各種工程の都合上、調査区をさらに分割した。調査区名に枝番号を付して小調査区を設定し、作業を進めた。

第1調査区は、現況では市道にあたること、また2本の工事用道路が横断することから、調査区を5区に細分し、それぞれ付け替えをおこないながらの調査となった。まず、市道を調査対象外用地（既往の調査地）に振り替えるため、その取り付け部分である東西の先端部（1-1区・1-2区）を調査した。次に、市道を付け替え、その完了後に工事用道路以外の部分（1-3区）を開口した。その後、工事用道路の付け替えをおこない、その跡地である1-4区・1-5区の調査をおこなった。

第2調査区は、生活道路を挟んで2-1区と2-2区に二分した。第2調査区には、現在も使用されている上水道管が埋設されているため、はじめにその埋設状況と遺構面の遺存を確認するための試掘をおこなった。その結果、遺構面が水道管設置による攪乱を受けていることが判明したため、水道管埋設部分を畦状に残した状態で調査をおこなうこととなった。2-1区と2-2区の調査は並行しておこなった。

第3調査区は、現在農業用として使用されている2本の水路範囲および、その兩岸部分に相当する。水路および工事用道路、作業用通路付け替えの都合上、調査区は6箇所に細分した。現況の水路は、西側の1本が南から北へ、東側の1本が東から北へ向かって流れており、調査区北端部で合流して路線外へと続く。このため、調査に先立ち、用水を移設する手段を講じた。

東側の水路は素掘りで水量はさほど多くない。このため、調査区の東側に新たに小溝を掘削して調査区外の流末に連結させ、代替とした。東側水路を含む範囲のうち、工事用道路を除く部分を3-1区、工事用道路の跡地を3-3区、水路合流部付近を3-5区として調査を進めた。

西側の水路は、コンクリート擁壁およびブロック積みを伴う護岸が施されている大規模なもので、常時一定の水量を有している。擁壁周辺の数箇所で試掘をおこなったところ、工事用道路より北側部（3-2区）では、擁壁設置時の攪乱により、遺構面の破損が著しいことを確認した。このため、コンクリート擁壁の撤去はおこなわず、擁壁継目からの漏水を防ぐため、流頭にてポンプによる揚水をおこない、擁壁内に通したホースにて水を運び、流末へ放出するという二重の対策をとった。しかし、工事用道路を振り替えた跡地にあたる3-4区では、遺構面の標高が周辺よりも下がること、また盛土が厚く、



図3 調査区設定図

水路設置時の攪乱が遺構面にまで達していないことが掘削段階で判明し、急遽、コンクリート擁壁を含む構造物すべてを撤去し、その下面を調査することとなった。結果、竪穴住居2棟を含む遺構群を、良好な状態で検出することができた。

なお、地域住民の作業用通路となっていた範囲（3－6区）は、2日間の通行止めを申請し、地域住民協力のもと、完了することができた。

第4調査区は、現況里道および住宅跡地に相当する。里道は生活道路であるため、調査は住宅跡地を4－1区として先行掘削し、道路付け替えの後、残る里道跡地を4－2区として調査をおこなった。

第4節 調査方法

現地調査は、バックホーを用いて現代の盛土および近世・近代耕作土を除去した後、人力による掘削と精査をおこない、遺構面を検出した。また、主要な遺構面については、25 tトラッククレーンを用いた高所からの撮影により、写真測量をおこなった。

また、図面作成のほか、写真用足場からの撮影、各遺構および遺物の出土状況の接写撮影等を随時おこない、記録保存に努めた。遺物は調査区および遺構ごとに取り上げて、登録番号を付し、整理した。

作成図面は整合を確認した後、デジタルトレースを用いた版組みをおこなった。出土遺物は洗浄、注記後、可能なものについては実測および製図ペン等を用いたトレースを施した後、写真とともに本書に掲載した。今回の調査にかかわる一連の作業は、本書の刊行をもって完了した。



写真1 現地調査 機械掘削状況



写真2 現地調査 人力掘削状況



写真3 写真測量 実施状況



写真4 現地調査 測量作業状況

第2章 調査成果

第1節 第1調査区

1. 調査区の状況と基本層序

調査区の状況 第1調査区は、東西に細長い形状をもつ調査区である。標高は、山手に近い東端部が高く、西端が低い。さらに、南から北へ向かって緩やかに下がっており、最も高い1-4区東端の遺構面はT.P.43.2 m、最も低い1-5区北西部ではT.P.40.5 m程度を測る（図4参照）。

現況は道路（市道）である。この道路には下水管が埋設されており、調査区中央を縦方向に貫いて場外へと続く。また、この下水管の埋設以前には、木杭および矢板を伴う近現代の用水路が同方向に設けられていた。このため、調査区の中央付近は、幅1～3 mにわたり大きく攪乱を受けている。今回の調査では、攪乱による遺構面の破損範囲は、調査対象外として扱われた。

基本層序 道路のアスファルトおよび近現代の耕作土を除去すると近世耕作土があり、その下に中世包含層が残存する。この中世包含層は、中世後期包含層および中世末期～近世初頭包含層に分別できる。

中世末期～近世初頭包含層は、暗オリーブ灰色を呈する粗砂まじり粘土質シルトに細かいブロック土を多く含む攪拌層である。主として大型遺構の上層埋土およびその付近に厚く認められることから、周辺の凹凸を埋め立てた造成土であると考えられる。遺物の包含は少なく、稀に瓦器や中世の須恵器、天目茶碗の破片等が含まれている。

その下層にある中世後期包含層は、黒褐色を呈する粗砂まじりシルトを主体とする。黒褐色シルトブ

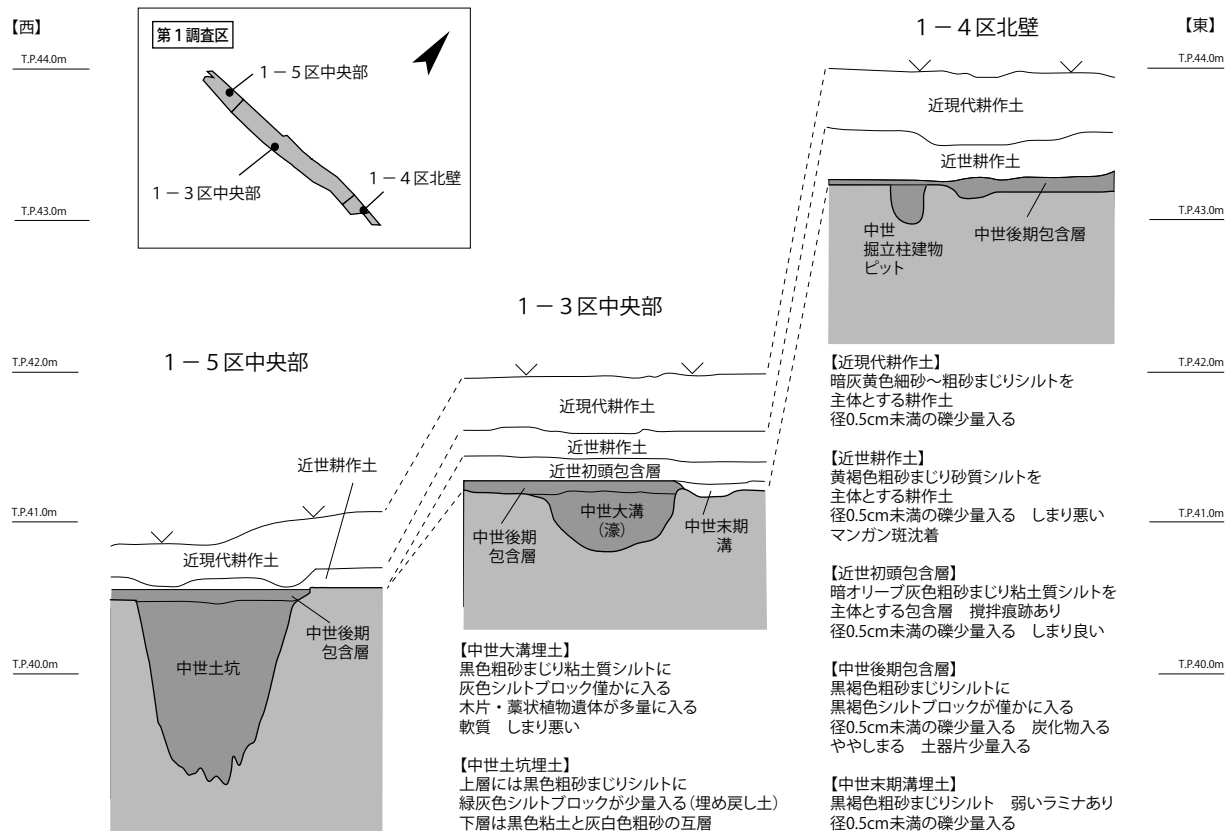


図4 第1調査区基本層序模式図

ロックがわずかに混じるものの、大幅な攪拌痕跡は認められない。10cm 前後の薄層であるため、後世の攪乱により、堆積が認められない地点もある。

中世後期包含層を除去した面において、地山を確認した。地山上面が主要遺構面に相当する。遺物の所属時期から、13 世紀～ 15 世紀頃まで存続した遺構面であると推測される。

なお、今回の調査では、調査区そのものが狹隘であるため、連続した調査区壁断面図を作成しにくい状況下にある。このため、任意で調査区内の一部を畦状に残し、柱状図として層序堆積の理解に努めた(図 5 参照)。

2. 検出遺構

調査区の両側では平成 14 年度に調査がおこなわれており、その結果、コの字状に大溝(濠)をめぐる大型掘立柱建物や、ピット群、列石を伴う溝、区画溝群、石組み井戸、石敷き土坑などを有する大規模な中世集落が検出されている。その中で、今回の調査区は、集落の居住域と生産域(水田)を隔てる地点にあっている(図 6)。

今回の調査では、中世遺構面において、ピット、土坑、溝、井戸を検出した。ピットには、掘立柱建物の柱穴となる可能性が高いものが含まれている。溝には、水田耕作に伴う区画溝や鋤溝のほか、大型

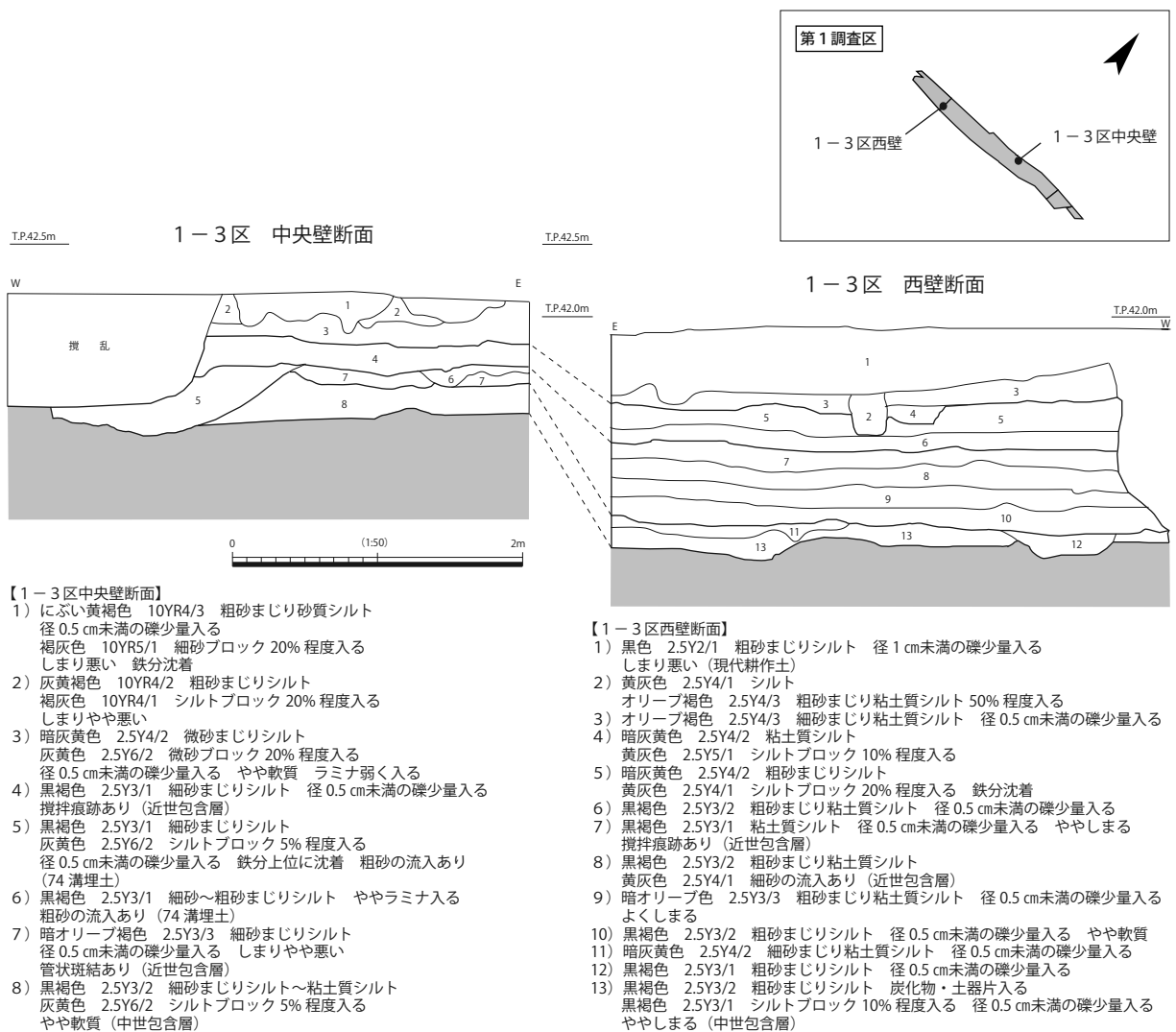


図 5 1-3 区西壁・中央壁土層断面図

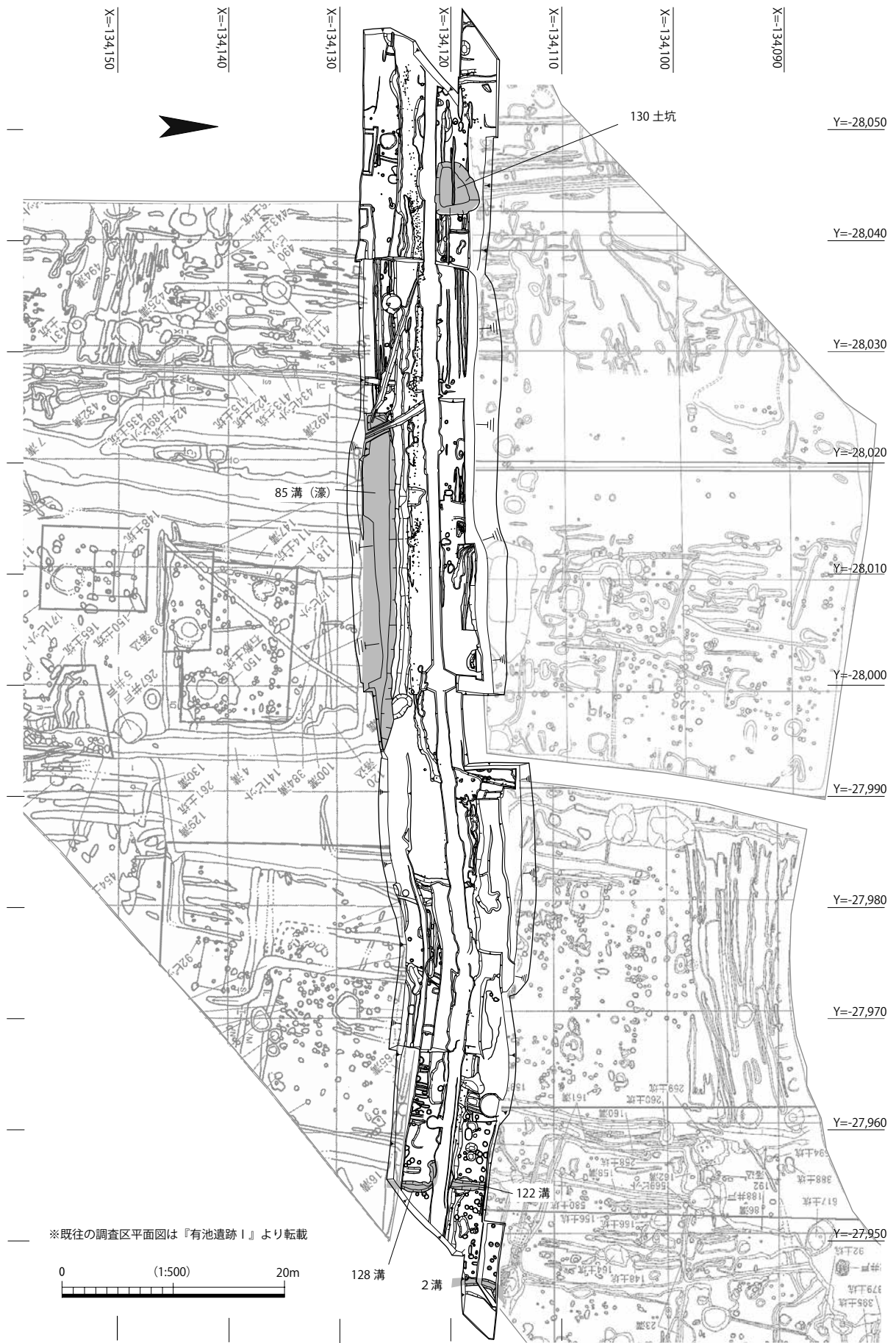


図6 第1調査区遺構面全体図 (中近世)

建物を取り囲む濠の一部が含まれる。土坑は、大型のものから小型のものまで多数あり、井戸は、石組み井戸1基、素掘り井戸3基を確認した。

これらの遺構を概括すると、埋土や出土遺物からおおむね三種に分類できる。ひとつは中世前期中に埋没した遺構で、数は少ないものの調査区東半部のピット群のいくつかや、土坑が該当する。埋土は、暗オリーブ灰色を呈する砂まじり粘土質シルトを主体とする。

次に掲げられるのが、中世前期から後期の遺物を含む遺構群であり、今回検出したものの中では最も多い。黒褐色粗砂まじりシルトを主体とする溝、ピット、土坑等が該当する。埋土は総じてしまりが悪い。集落が最も拡大したときに掘削されたものと見られ、埋土からは瓦器碗や三足釜、羽釜、東播系須恵器などが出土する。また、土師器皿が多数出土した溝もこの時期の遺構である。

最後は、中世末期から近世初頭に掘削された遺構である。前述のとおり、この地域では中世末期に多量の攪拌土による埋め立てがなされたが、このとき、遺構内に溜まった泥水を排水するために設けられた溝等の施設がこれに相当する。埋土からは瓦質土器や陶磁器類の出土が認められる。

これらの遺構のうち、主要なものについて以下に報告する。なお本書では調査区面積が狭小であるため、小区ごとの記述はせず、調査区を連続させた状態で西端から追って図示し、記述する。また、既往の調査区において報告された遺構に連続する場合は、遺構名を〔 〕で括り、並列して示した。

26 溝 (図7) 1-2区において検出した南北方向の溝である。検出長3.3m、最大幅0.7mを測る。北接する既往の調査区ではさらに北へと伸びる様相が確認されている。最大深度は5cm程度と浅く、埋土は砂質である。断面観察では弱い筋状のラミナを確認した。この溝より東側と西側では鋤溝の方向性を違えることから、水田区画に関連する溝であると考えられる。遺物の出土は認められなかった。

27 溝 (図7) 26溝の西側に位置する、やや大型の溝である。検出長1.3m、最大幅1.5m、最大深度は20cmを測る。既往の調査成果では、このまま北方向へ続くものの途中で幅狭となり、やがて消滅する。埋土は中世末期の埋め戻し土である地山ブロックを含む砂層が上位にあり、黄灰色～褐灰色を呈する粗砂～細砂が下位に堆積する。性格は不明であるが、流水痕跡が認められないことから、溝としての機能を有していなかった可能性がある。遺構内からは瓦器碗・土師器皿の破片が出土した。

28 土坑 (図7) 27溝の西側で検出した土坑である。平面形状は楕円形、断面形状は半円形を呈する。南辺は確認できていないが、最大長1.3m、最大幅0.85m程度の規模をもつと推測される。埋土は上層に造成土、下層は灰色～灰オリーブ色を呈する中砂～細砂である。上層の造成土は、近世時の整地に由来する層であり、遺構の最終埋没時期は、周辺の溝群に比べて時代が下がる可能性がある。性格は不明である。

29 溝 (図7) 調査区西端で検出した南北方向に走る溝である。南端部でやや東へと方向を変える。検出した最大長は0.9m、最大幅は0.4m、最大深度は6cmを測る。埋土は中砂～極細砂で構成される。既往の調査では確認できておらず性格が不明である。遺構内からは瓦器碗・陶磁器の破片が出土した。

30 土坑 (図7) 26溝および27溝を完掘した状況で検出した遺構である。不定形な隅丸三角形ともいべき平面形状を有しており、直径1.0～1.3m、最大深度50cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は上層・中層・下層に大別でき、上層は27溝埋土に由来するシルト、中層は黒褐色～オリーブ褐色を呈する砂まじり粘土質シルト、下層は灰色～オリーブ黒色粘土を主体とする。

中層を除去したところ、埋土中に拳大から人頭大の花崗岩を計7点検出した(写真図版2-3参照)。石肌は灰色～灰白色を呈するが、被熱のため部分的に黒色化が認められる。埋土中にも炭化物が多く含

まれていたため、土坑内で着火行為があったと推測できるが、燃焼した対象物は確認できていない。土器の碎片等は出土しておらず、土製品の焼成土坑であったとは考えにくい。また、石の被熱に対して出土した土器片には焼成痕跡がないことから、単なる廃棄土坑に点火したものとも考えがたい。遺構内からは、石のほか、瓦器椀・土師器羽釜が比較的大きな破片で出土した。

52 溝 (図 11・14) 調査区南辺から北方向へ続く溝である。但し、検出長は 0.7 m と短い。最大幅は 0.7 m、最大深度は 5cm 程度である。南接する調査区では南方向へ伸び、建物の周囲をめぐる溝として復元されている。その性格をもつ遺構ならば、東方向へ屈曲し 77 溝へと連続する可能性がある。埋土は、黒褐色シルトを主体とする。遺構内からは瓦質土器三足釜、土師器皿、瓦器椀の破片 (図 21 - 1) が出土した。

80 土坑 (図 13・14) 調査区東半部の南辺で検出した遺構である。東西に長い楕円形を呈しており、最大長 1.72 m、最大幅 0.82 m を測る。断面形状は、壁面がほぼ垂直に立ち上がる隅丸方形に似る。底面は平坦で、最大深度は 28cm 程度である。埋土は黒褐色～暗褐色粗砂まじりシルトを主体とする。遺構内からは、土師器皿が出土した。

85 溝〔8 溝〕 (図 10・11・12) 調査区中央南半部において検出した大型の溝である。今回の検出長は 28.8m、最大幅は 2.7 m、最大深度は 80cm を測る。既往の調査報告とあわせると、最大幅 3.0m、を測る大溝が、一辺 25～32m のコの字状を象り、大型建物を取り囲むように展開する。南側を除く東・北・西に溝がめぐっており、今回確認したのは北辺溝にあたる。断面形状は逆台形を呈しており、底面は平底に作られている。底面の標高を参照すると、掘削当初より北辺中央部分が最も低くなるように計画されたようである。掘り方の傾斜角度は、コの字状にめぐる内面側の傾斜は緩やかで、外面側の立ち上がりは急である。

埋土は上・中・下の 3 層に大別できる。上層は中世末期の埋め戻し土である。中層は、黒色～オリーブ黒色粘土や粘土質シルトを主体とする軟質層であり、小枝や藁、糞、草類などの植物遺体を多量に含む。このうち藁は、蓆や薦の腐食物である可能性がある。堆積状況からは、廃棄物とともに泥砂が堆積した状況を想像できる。上位には拳大の礫も随所に含まれている。下層には粘土の沈殿や粗砂と粘土の互層が認められることから、水が溜まった状況下で、徐々に堆積した土壌であると推測される。これらのことから、下層は濠が掘削され、比較的清浄に保たれていた時期の堆積、中層は集落の後退期に廃棄場所として埋没が進んだ時期の堆積、上層は平坦化が図られた時期の埋め戻し土と見ることができる。中層から陶磁器の出土が多く認められており、その堆積時期は中世中頃 (14 世紀後半～15 世紀初頭) の範囲で捉えられる。なお、既往の調査では、この大溝の開削を 13 世紀後半、埋没時期を 14 世紀以降と推測する。

遺構内からは、常滑焼甕、備前焼壺、土師器皿、蓮弁文青磁碗、白磁碗、瓦器椀、瓦質土器羽釜、三足釜、東播系須恵器鉢、縄目叩きをもつ平瓦等が出土した (図 22 - 20～24・写真図版 17・18)。

86 溝 (図 10・11) 調査区のほぼ中央を東西に向かって断続的に伸びる溝である。検出長は 25 m、最大幅は 0.7 m を図る。最大深度は 12～20cm 程度である。オリーブ黒色粗砂まじりシルトや粘土を埋土とし、所々に弱いラミナを形成する。調査区西半部の鋤溝群と同方向を示すことから、水田耕作にかかわる遺構であると考えられる。遺構内からは、瓦器椀、施釉陶器椀、東播系須恵器鉢 (以上写真図版 19 - 2)、瓦質土器搥鉢 (写真図版 19 - 1) が 1 点出土した。

87 井戸〔28 井戸〕 (図 12・15) 調査区中央の北辺で検出した遺構である。掘り方は直径 1.8m を測

る円形を呈する。段をつけて中央部を掘りくぼめており、段の底面に石組みを配する。中央部の深度は0.9 mを測る。埋土は中世包含層である上層と、井戸本来の埋土である下層に分層できる。ただし、遺物は、上層からの出土が多い。埋土からは、瓦器椀、瓦器皿、土師器皿、瓦質土器三足釜等の破片のほか、被熱した花崗岩1点が出土した（写真図版19－3）。

88 溝〔408 溝〕（図10・11） 調査区を南北方向に走る溝である。確認できた最大長は2.2 m、最大幅0.7 mを測る。南接する既往の調査区では、60 mほど南へ続き、西方向へ屈曲するようである。今回の調査では、その最大長をさらに伸ばしたことになるが、調査区中央の攪乱を隔てた対岸では、連続する遺構を確認できない。最大深度は15cm程度、埋土は黒褐色粗砂まじりシルトを主体とする。既往の調査をあわせてみると、この溝より西側では掘立柱建物が復元できないことから、ある時期の居住域と生産域を区切る溝として位置づけることができる。遺構内からは、瓦器椀・瓦質土器の破片が出土した。

89 溝・101 溝（図10・11） 85 溝の北西コーナーから斜め方向へ向かってそれぞれ西と北西方向に伸びる溝である。ともに近世初頭の遺構であり、図示した遺構の中では新しい類に属する。

89 溝の検出長は6.7 m、最大幅は0.8 mを測る。最大深度は52cmを測ることから、掘削幅の割には深い印象を与える。これは101 溝も同様で、最大長13.6 m、最大幅0.75 m、最大深度は85cmを測る。埋土は黒色やオリーブ黒色を呈する砂まじり粘土が主体である。

両溝に共通するのは、85 溝内からはじまること、その取り付け部に木製樋を設置することである。89 溝の木製樋は方形に切り出した木材の内部を削り抜いた作りである（写真図版32－W1）。101 溝の樋は破損が著しく、底面のみの出土であったが、本来は同形状を呈していたと推測される。両溝は、85 溝内から徐々に傾斜をつけて、西方、北西方へと下がっていることから、85 溝内に溜まった泥水を他方へと抜き出すための排水溝であったと推測される。埋土からは陶磁器類の小片が出土した。

97 溝・100 溝〔7 溝〕（図10・13） 85 溝を横切って南北方向に伸びる溝である。100 溝は85 溝との交点付近において、97 溝は、攪乱を挟んだその北側において検出した遺構であり、連続する可能性がある。100 溝は、85 溝とともに南接する既往の調査区において検出されており、ある時期に居住域の西限を区切る溝として報告されている。今回の調査では、断面観察によって、100 溝の埋没後に85 溝が掘削されたと考えられる切り合い関係を確認することができた。

100 溝の最大幅は2.2 m、最大深度は48cmである。但し、攪乱を大きく受けた箇所での検出であることから、本来は、既報告の通り、70cm前後の深度をもっていたものと推測される。埋土はオリーブ黒色粗砂まじり粘土質シルトを主体とする。端部には粗砂の流入が認められる。

97 溝の最大幅は1.5mを測る。但し、削平のため最大深度は5 cm程度を確認したに過ぎない。埋土はオリーブ黒色粘土質シルトを主体とする。遺構内から遺物の出土は認められなかった。

118 土坑（図12・13） 85 溝の北東コーナー付近において検出した土坑である。平面形状は瓢箪形、約3分の1程度を85 溝に削られている。検出長は2.2m、最大幅は1.5m、最大深度は50cmを測る。埋土はオリーブ黒色を呈するシルトを主体とする。遺物の出土が認められず、性格は不明である。

122 溝〔158 溝〕（図16・17） 調査区東半部において確認した南北方向に伸びる溝である。検出長は3.0m、最大幅は0.7 mを測る。既往の調査では、北側へ続くことが報告されている。今回の調査を含めると、20 m程度の長さをもって確認できたことになる。最大深度は20cm程度、埋土は暗オリーブ褐色粗砂まじりシルトを主体とする。溝状遺構であるが、明確な流水痕跡はない。遺構内からは、土師質土器羽釜、瓦器椀、内面に煤が付着した土師器皿等、12～13世紀の土器がまとめて出土した（図

22 - 1 ~ 5・写真図版 22 - 1)。

124 溝 (図 16・17) 調査区西半部で検出した溝状遺構である。検出長は 2.2 m、最大幅は 1.8m を測る。断面形状は逆台形で、東壁の立ち上がりが急である。最大深度は 45cm を測る。埋土は中世包含層である黒褐色粘土質シルトを主体とする上層と、黒褐色～黒色粘土を主体とする下層からなる。

埋土上層からは、土師器皿が折り重なるような状態で、一括して出土した。個体数は計 16 点以上を数える。完形に復元できるものが多い。内面に煤が付着するものがあり、灯明皿を一括廃棄したのではないかと考えている (図 22 - 6 ~ 19・写真図版 20)。

127 溝 [159 溝] (図 16・17) 124 溝の東側で検出した遺構である。周辺の溝群と同じ方向性を持ち、南南西から北北東方向へと伸びる。北接する既往の調査区では、連続する溝が確認されており、あわせると 20 m 弱の長さとなる。東側に大型の掘立柱建物が確認されていることから、居館をめぐる溝の西辺として想定することもできる。遺構内からは、瓦器椀や土師器皿が出土し、また、混入品であるが、水晶製石鏃未成品 (図 21 - 1・写真図版 22 - 2) が出土した。

128 溝 [16 溝] (図 16・17) 調査区東端部の南辺において検出した溝状遺構である。南から北へ向かって伸び、調査区内で西へと屈曲する。ただし屈曲後は浅くなり、そのまま消滅する。既往の調査では、

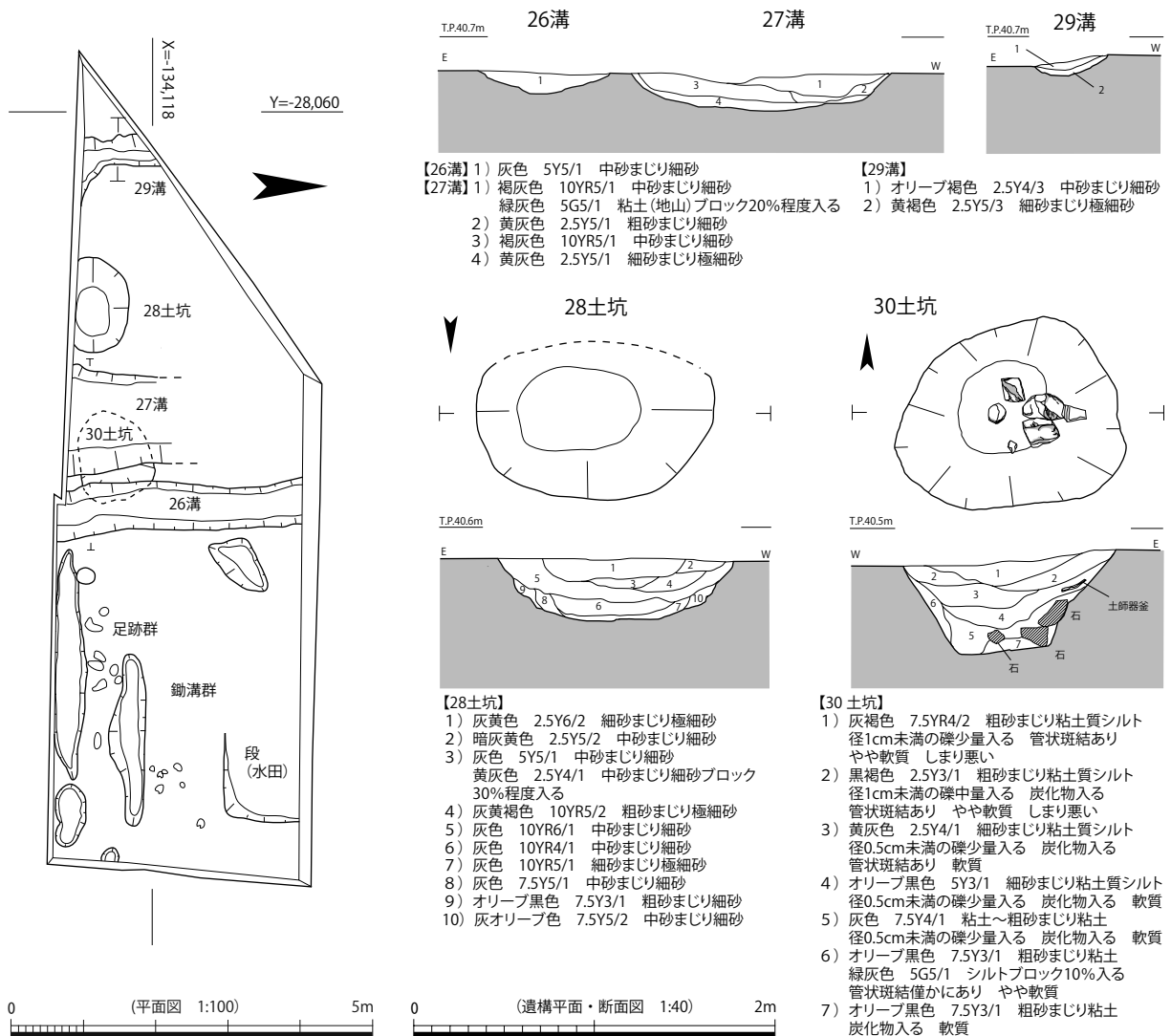


図 7 第 1 調査区遺構面平面図 (1)・1 - 2 区遺構平面・断面図

Y=-28,060

Y=-28,060

X=-134,130

X=-134,120

Y=-28,050

Y=-28,050

Y=-28,040

Y=-28,040

X=-134,130

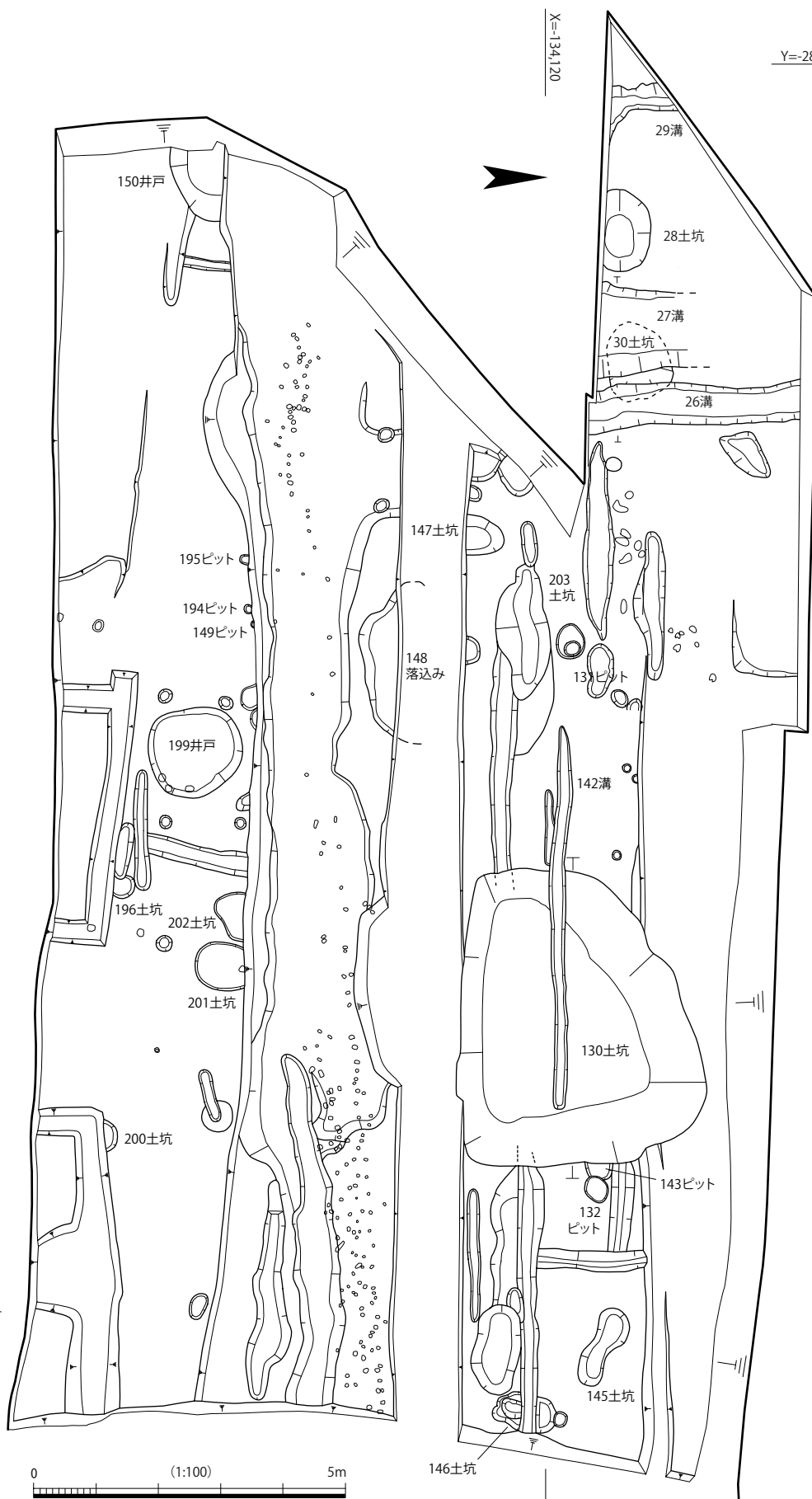
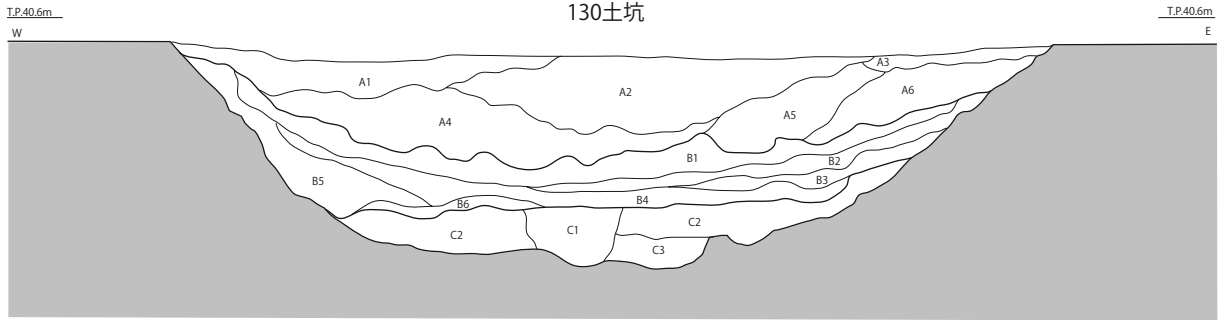


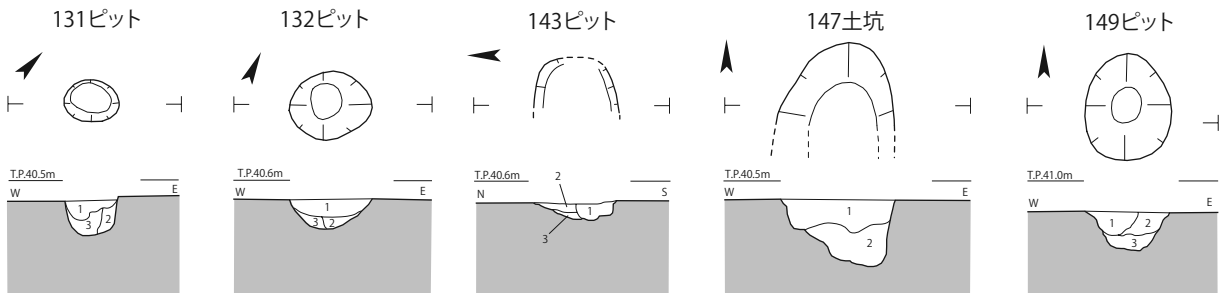
図8 第1調査区遺構面平面図(2)



【130土坑】

- A1) 黒色 7.5Y2/1 粗砂まじり粘土
 オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルトブロック 40% 程度入る
 オリーブ灰色 10Y5/2 粗砂まじり粘土ブロック 10% 程度入る
 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質 管状斑結僅かにあり
- A2) オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
 黒色 7.5Y2/1 粗砂まじり粘土ブロック 20% 程度入る
 オリーブ灰色 10Y5/2 粗砂まじり粘土ブロック 10% 程度入る
 灰オリーブ色 7.5Y4/2 粗砂まじり粘土ブロック 10% 程度入る
 径 0.5 cm未満の礫少量入る ややしみる 軟質 土器片入る
- A3) 黒色 7.5Y2/1 粗砂まじり粘土
 オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルトブロック 20% 程度入る
 灰オリーブ色 7.5Y4/2 粗砂まじり粘土ブロック 10% 程度入る
- A4) オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
 黒色 7.5Y2/1 粗砂まじり粘土ブロック 5% 程度入る
 オリーブ灰色 10Y5/2 粗砂まじり粘土ブロック 5% 程度入る
 径 1 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質
- A5) オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
 黒色 7.5Y2/1 粗砂まじり粘土ブロック 40% 程度入る
 灰色 10Y4/1 細砂～シルトブロック 10% 入る しまり悪い 軟質
- A6) オリーブ灰色 10Y5/2 粗砂まじり粘土
 オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルトブロック 5% 程度入る
 黒色 7.5Y2/1 粗砂まじり粘土ブロック 5% 程度入る しまり悪い 軟質

- B1) 黒色粘土とオリーブ黒色細砂の互層
 黒色 5Y2/1 粘土と
 オリーブ黒色 5Y3/1 粘土と
 オリーブ黒色 5Y3/2 細砂～微砂が筋状に入る
- B2) 黒色粘土とオリーブ黒色細砂の互層
 オリーブ黒色 5Y3/1 粘土と
 オリーブ黒色 5Y3/2 細砂～微砂が筋状に入る
- B3) 灰色～灰オリーブ色 5Y4/1-4/2 粗砂～細砂
- B4) 黒褐色 2.5Y3/1 微砂まじり粘土 非常に軟質
- B5) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
 黄灰色 2.5Y4/1 細砂ブロック 40% 程度入る
 径 0.3 cm未満の礫少量入る
- B6) B4) 層に近似
 B5) 層ブロック 20% 程度入る
- C1) 灰色 10Y4/1 細砂まじり粘土質シルト
 オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじりシルトブロック 30% 程度入る
 しまり悪い 軟質
- C2) オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじりシルト
 緑灰色 5G5/1 微砂ブロック 10% 程度入る
 径 0.5 cm未満の礫多量入る しまり悪い 軟質
- C3) 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 粗砂まじりシルト
 緑灰色 5G5/1 微砂ブロック 20% 程度入る
 径 0.5 cm未満の礫多量入る しまり悪い 軟質



【131ピット】

- 1) 黒褐色 2.5Y3/1
 粗砂まじり微砂
 径 0.3 cm未満の礫少量入る
- 2) 黄灰色 2.5Y4/1
 粗砂まじり微砂
 灰オリーブ色 5Y5/2
 粘土質シルトブロック
 30% 程度入る
 径 0.3 cm未満の礫少量入る
- 3) オリーブ黒色 5Y3/1
 粗砂まじり粘土質シルト
 径 0.3 cm未満の礫少量入る

【132ピット】

- 1) 黒色 5Y2/1
 粘土質シルト～粘土
 灰オリーブ色 5Y4/2
 粗砂まじり粘土質シルト
 ブロック 20% 程度入る
- 2) 灰オリーブ色 5Y4/2
 粗砂まじり粘土質シルト
 径 0.3 cm未満の礫少量入る
- 3) 灰色 7.5Y5/1
 粗砂まじり粘土質シルト
 径 0.3 cm未満の礫少量入る

【143ピット】

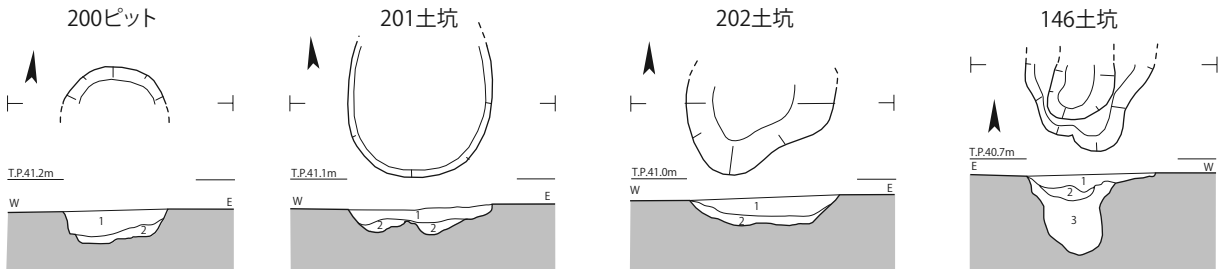
- 1) 灰色 5Y4/1-5/1
 細砂まじり微砂
 径 0.3 cm未満の礫少量入る
- 2) 灰色 5Y4/1 微砂
 径 0.3 cm未満の礫少量入る
- 3) オリーブ黒色 5Y3/1 微砂
 径 0.3 cm未満の礫少量入る

【147土坑】

- 1) 黒色 5Y2/1
 粗砂まじり粘土質シルト
 径 0.3 cm未満の礫少量入る
- 2) 灰オリーブ色 7.5Y5/2
 粗砂まじり粘土質シルト
 1) 層ブロック 10% 程度入る
 径 0.5 cm未満の礫少量入る

【149ピット】

- 1) オリーブ黒色 5Y3/1
 粘土質シルト
- 2) オリーブ黒色 5Y3/1
 粘土質シルト
 にぶい黄褐色 10YR4/3
 細砂ブロック 30% 程度入る
- 3) 灰オリーブ色 5Y4/2
 微砂～細砂
 にぶい黄褐色 10YR4/3
 細砂ブロック 10% 程度入る
 径 0.3 cm未満の礫少量入る



【200ピット】

- 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2
 粗砂まじりシルト
- 2) 灰色 5Y4/1 シルト

【201土坑】

- 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗砂まじりシルト
 径 0.5 cm未満の礫少量入る
- 2) 灰色 5Y4/1 粗砂まじりシルト

【202土坑】

- 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗砂まじりシルト
 径 0.5 cm未満の礫少量入る
- 2) 灰色 5Y4/1 粗砂まじりシルト
 径 0.3 cm未満の礫少量入る

【146土坑】

- 1) オリーブ褐色 2.5Y4/3
 粗砂まじり細砂
 径 0.5 cm未満の礫少量入る
- 2) 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルト
 径 0.3 cm未満の礫少量入る
- 3) 暗オリーブ色 2.5Y3/3
 粗砂まじりシルト
 径 0.3 cm未満の礫少量入る

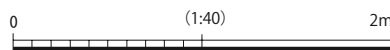


図9 1-5区遺構図平面・断面図

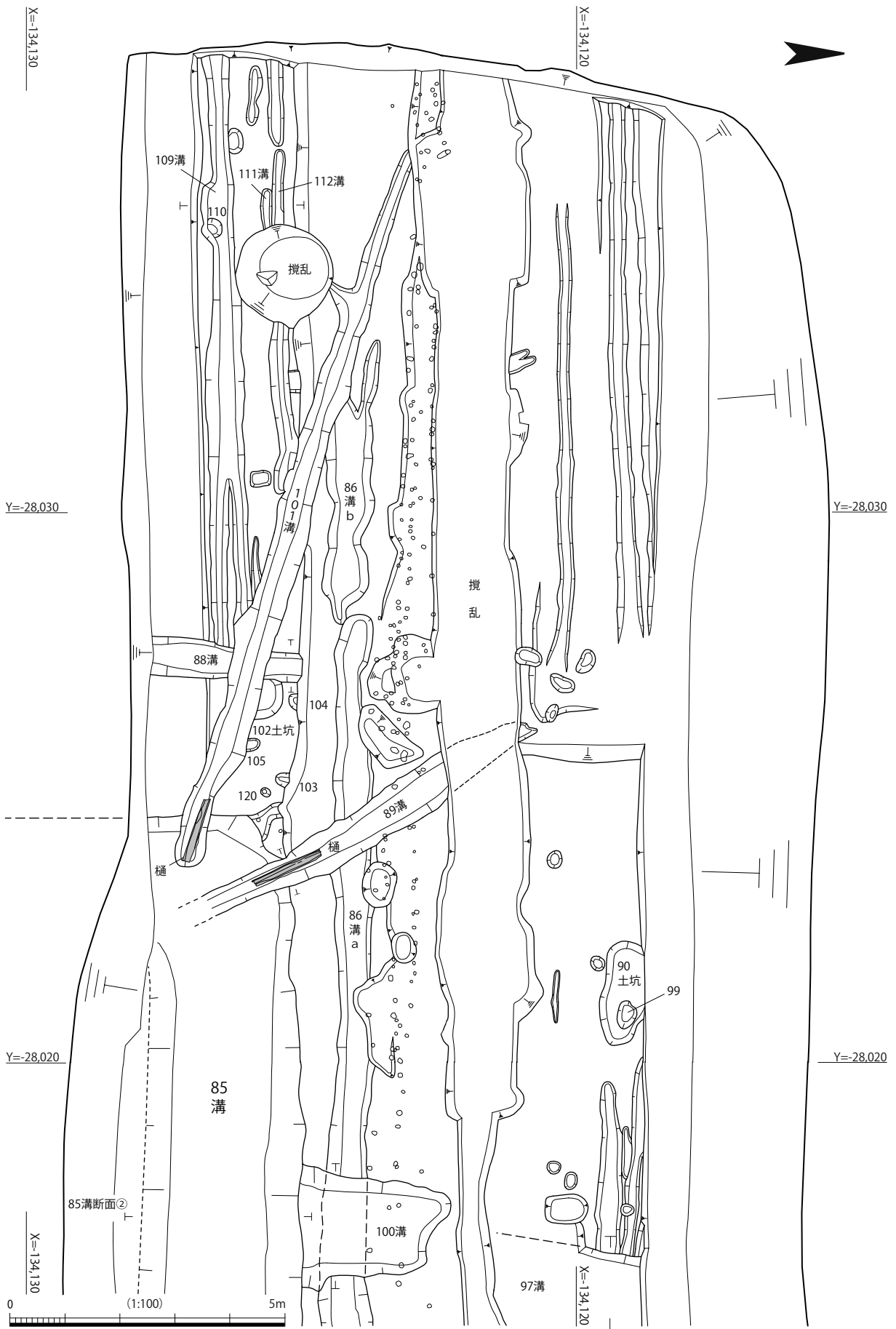
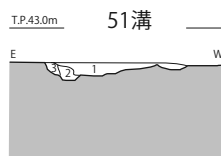
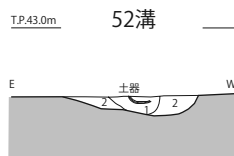


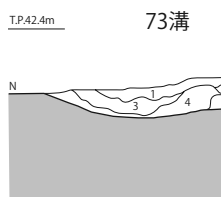
图 10 第 1 调查区遺構面平面図 (3)



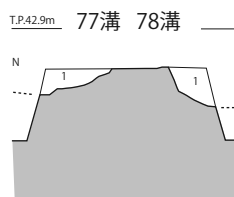
- 【51溝】**
- 1) 褐灰色 10YR4/1 粗砂～シルト
黒褐色 10YR3/1 粗砂まじり粘土質ブロック 40% 程度入る
しまり悪い 径 1cm未満の礫少量入る
 - 2) 褐灰色 10YR4/1 粗砂まじりシルト
黒褐色 10YR3/2 シルトブロック 20% 程度入る
 - 3) 黒褐色 10YR3/1 粗砂まじり粘土質シルト
径 0.5cm 未満の礫少量入る



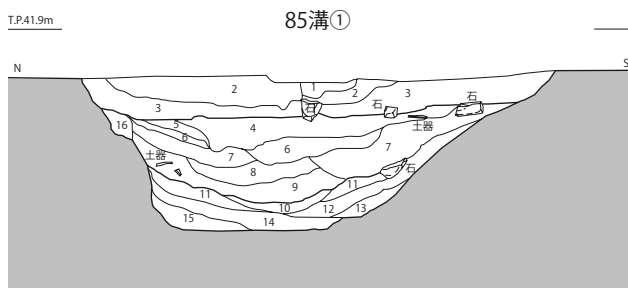
- 【52溝】**
- 1) 黒褐色 10YR2/2 シルト
径 0.3cm 未満の礫少量入る
しまりやや悪い やや軟質
 - 2) 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3
粗砂まじりシルト
径 0.5cm 未満の礫少量入る
ややしまる やや軟質



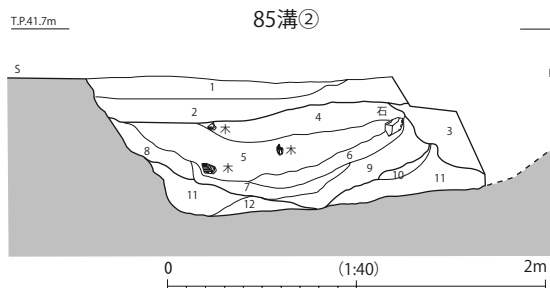
- 【73溝】**
- 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2 微砂まじりシルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る ややしまる
 - 2) 黒褐色 2.5Y3/2 粗砂まじり粘土質シルト
暗灰黄色 2.5Y4/2 シルトブロック 30% 入る
径 1 cm未満の礫少量入る ややしまる 軟質
 - 3) 黒褐色 2.5Y3/1 細砂まじり粘土～粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る 軟質
 - 4) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質
 - 5) 黄灰色～暗灰黄色 2.5Y4/1-2.5Y4/2
粗砂～粗砂まじりシルト しまり悪い



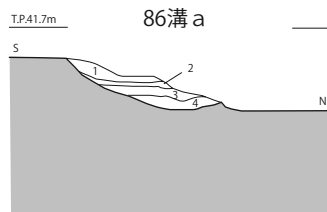
- 【77溝】 【78溝】**
- 1) 暗褐色 10YR3/3
細砂まじり粘土質シルト
にぶい黄褐色 10YR4/3
シルトブロック 5% 入る
しまり悪い



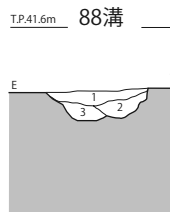
- 【85溝①】**
- 1) オリーブ褐色 2.5Y4/3 粗砂～細砂 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い
 - 2) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじりシルト (近世耕作土)
黒色 2.5Y2/1 粗砂まじり粘土ブロック 30% 程度入る
径 1 cm未満の礫少量入る ややしまる やや軟質
 - 3) 2) 層に近似 下に 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂の流入あり やや軟質
 - 4) 黒色 5Y2/1 粗砂まじり粘土～粘土質シルト 植物遺体多量に入る
灰色 7.5Y4/1 粘土ブロック 20% 程度入る しまり悪い 軟質
 - 5) 黒色 7.5Y2/1 粗砂まじり粘土 軟質 植物遺体入る (藁・粉・小枝等)
 - 6) 黒色 7.5Y2/1 粗砂まじりシルト 軟質 植物遺体入る (藁・粉・小枝等)
 - 7) オリーブ黒色 7.5Y2/2 粗砂まじり粘土質シルト 軟質 植物遺体入る
灰色 7.5Y6/1 粘土ブロック 40% 程度下位に入る
 - 8) 黒色 7.5Y2/1 粗砂まじりシルト 植物遺体多量に入る (藁・粉・小枝等)
 - 9) 黒色 7.5Y2/1 粗砂まじりシルト 植物遺体多量に入る
灰色 5Y4/1 粘土ブロック 10% 程度入る しまり悪い 軟質 粗砂の流入あり
 - 10) オリーブ黒色 5Y3/2 粘土～粘土質シルト 非常に軟質
 - 11) オリーブ黒色 5Y3/2-2/2 シルトまじり粗砂 ラミナあり
 - 12) 黒色 5Y2/2 粗砂まじりシルト～粘土質シルト 径 1 cm未満の礫少量入る
 - 13) オリーブ黒色 10Y2/2 粗砂まじり粘土質シルト
オリーブ黒色 10Y2/2 粘土ブロック 20% 程度入る しまり悪い 軟質
 - 14) 灰色 7.5Y4/1 粘土 しまり悪い 軟質
灰オリーブ色 7.5Y4/2 粗砂まじりシルトブロック 30% 程度入る
 - 15) 灰色 7.5Y4/1 粘土～粘土質シルト 軟質 炭化物少量入る
 - 16) 黒色 7.5Y2/1 粗砂まじり粘土質シルト 地山ブロック 10% 程度入る



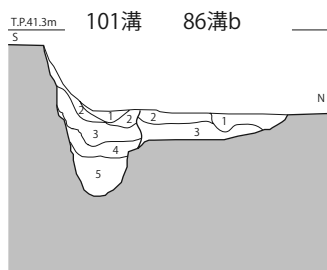
- 【85溝②】**
- 1) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじりシルト 径 0.5 cm未満の礫多量入る
しまり悪い 鉄分沈着
 - 2) オリーブ黒色 10Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る やや軟質 鉄分沈着
 - 3) オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじりシルト
オリーブ灰色 10Y5/2 シルトブロック 5% 入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る
 - 4) 黒色 7.5Y2/1 粗砂まじり粘土質シルト～シルト
径 1 cm未満の礫少量入る しまり悪い 木片入る
 - 5) 黒色 7.5Y2/1 粗砂まじり粘土質シルト～粘土
灰色 7.5Y5/1 シルトブロック 5% 程度入る しまりやや悪い 軟質
植物遺体・木片入る
 - 6) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
灰オリーブ色 5Y4/2 シルトブロック 10% 程度入る やや軟質
 - 7) オリーブ黒色 5Y3/1 粘土～粘土質シルト 軟質 炭化物・木片入る
 - 8) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト しまり悪い
やや軟質 炭化物多量に入る
 - 9) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじり粘土質シルト
灰オリーブ色 5Y5/2 細砂ブロック 30% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質
 - 10) 9) 層に近似 粘性強い
 - 11) 灰色 5Y4/1 粗砂と オリーブ黒色 5Y3/1 粘土の互層
部分的に 黒色 5Y2/1 粘土の沈み込みあり 軟質
 - 12) オリーブ黒色 5Y2/2 粘土～粗砂まじり粘土 軟質 地山の巻上げあり



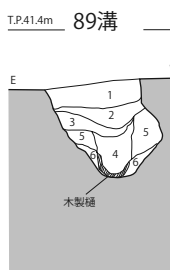
- 【86溝 a】**
- 1) オリーブ黒色 7.5Y3/2 粗砂まじりシルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る
 - 2) オリーブ黒色 5Y3/1 粘土
 - 3) 黒色 10Y2/1 細砂まじりシルト
 - 4) オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじりシルト
- 【86溝 b】**
- 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る
 - 2) 1) 層に 3) 層ブロック 10% 程度入る
 - 3) 灰オリーブ色 7.5Y4/2
粗砂まじり粘土質シルト ややしまる 軟質



- 【88溝】**
- 1) 黒褐色 2.5Y3/2 細砂まじりシルト
 - 2) 層ブロック 10% 程度入る しまり悪い
径 0.5 cm未満の礫少量入る
 - 2) オリーブ黒色 5Y3/2
粗砂まじりシルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い
 - 3) オリーブ黒色 7.5Y3/2 粘土質シルト
しまりやや悪い やや軟質



- 【101溝】**
- 1) オリーブ黒色 5Y3/2 粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまり悪い 鉄分沈着
 - 2) オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘土質シルト
3) 層ブロック 20% 程度入る
ややしまる やや軟質
 - 3) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじりシルト
2) 層ブロック 20% 程度入る 軟質
 - 4) オリーブ黒色 7.5Y3/1 細砂まじりシルト
灰色 7.5Y4/1 シルトブロック 40% 入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る 軟質
 - 5) 灰色～オリーブ灰色 10Y5/1-5/2
粗砂まじり粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまり悪い 軟質 植物遺体少量入る



- 【89溝】**
- 1) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじりシルト
暗灰黄色 2.5Y5/2 粗砂まじりシルト
ブロック 30% 程度入る 鉄分沈着
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い
 - 2) 黒褐色 2.5Y3/1
粗砂まじりシルト～粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る やや軟質
鉄分沈着 植物遺体少量入る
 - 3) 2) 層に 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1
シルトブロック 10% 程度入る やや軟質
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い
 - 4) オリーブ黒色 7.5Y3/1
粗砂まじり粘土質シルト
灰オリーブ色 7.5Y5/2 シルトブロック
5% 程度入る やや軟質 木製柱残存
 - 5) 4) 層に 灰色 7.5Y5/1 微砂ブロック
10% 程度入る
 - 6) 4) 層に暗オリーブ灰色 5GY4/1
粗砂まじり粘土質シルトブロック入る

図 11 1-3区遺構平面・断面図

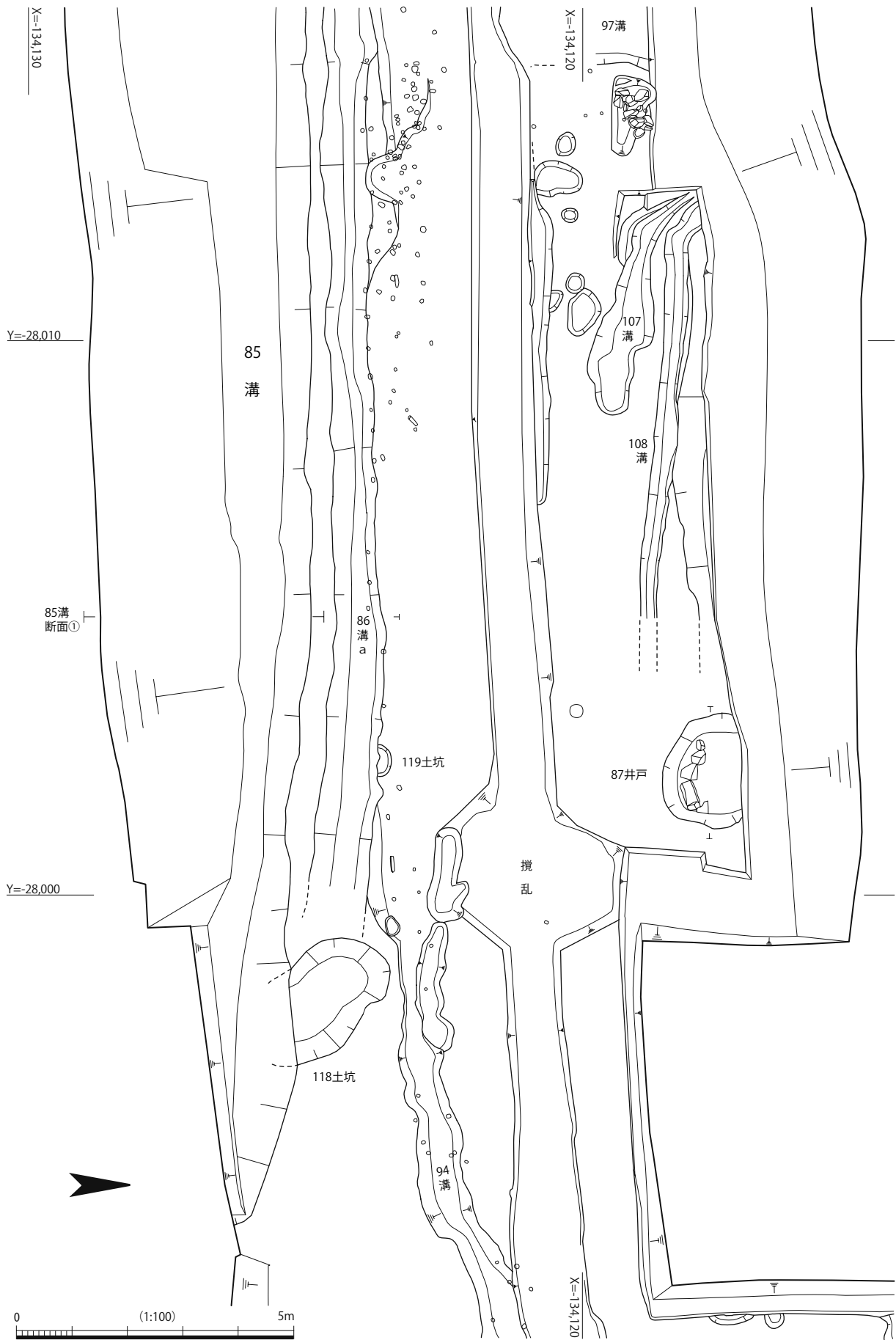


图 12 第 1 調査区遺構面平面図 (4)

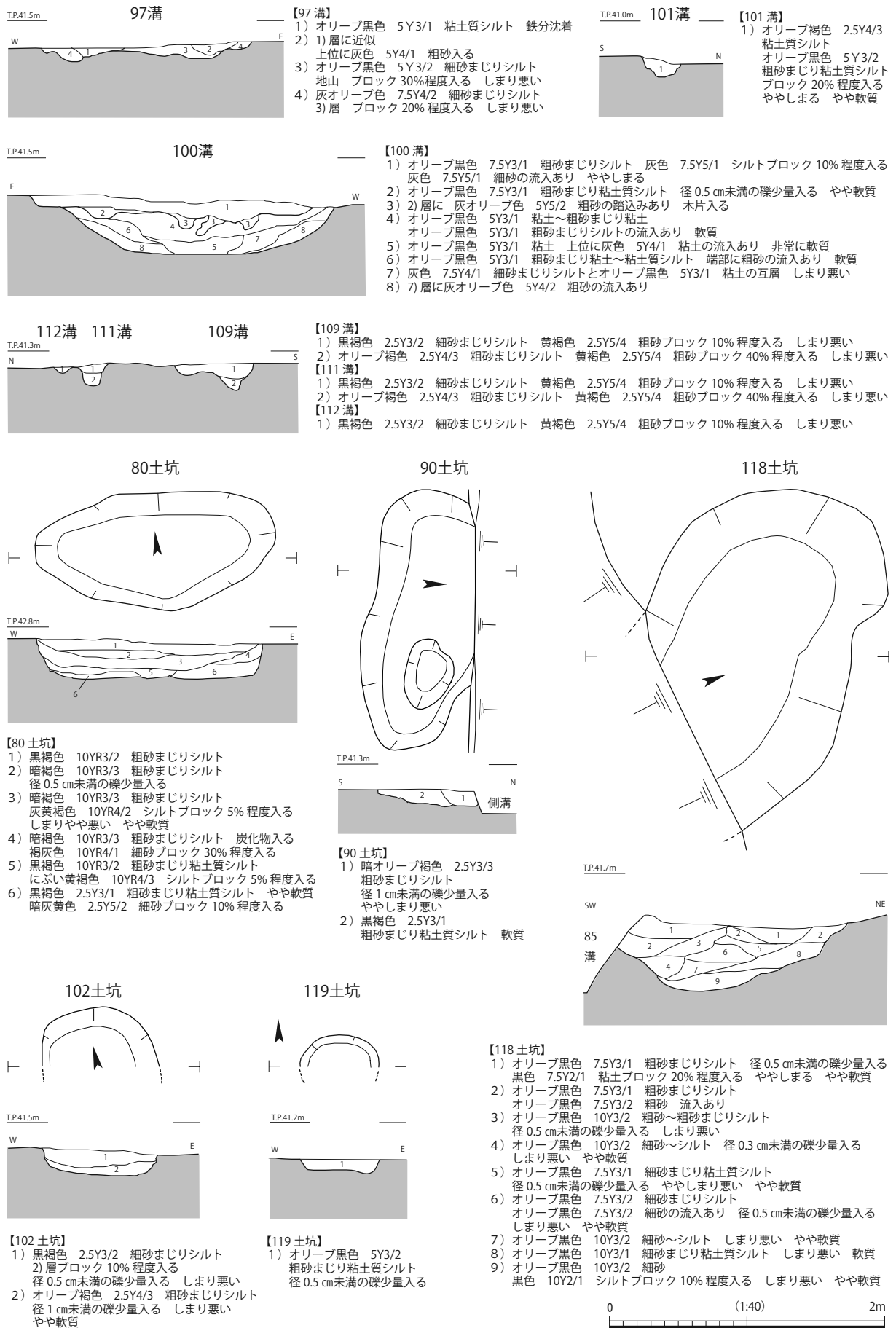


図 13 1-3区遺構平面・断面図

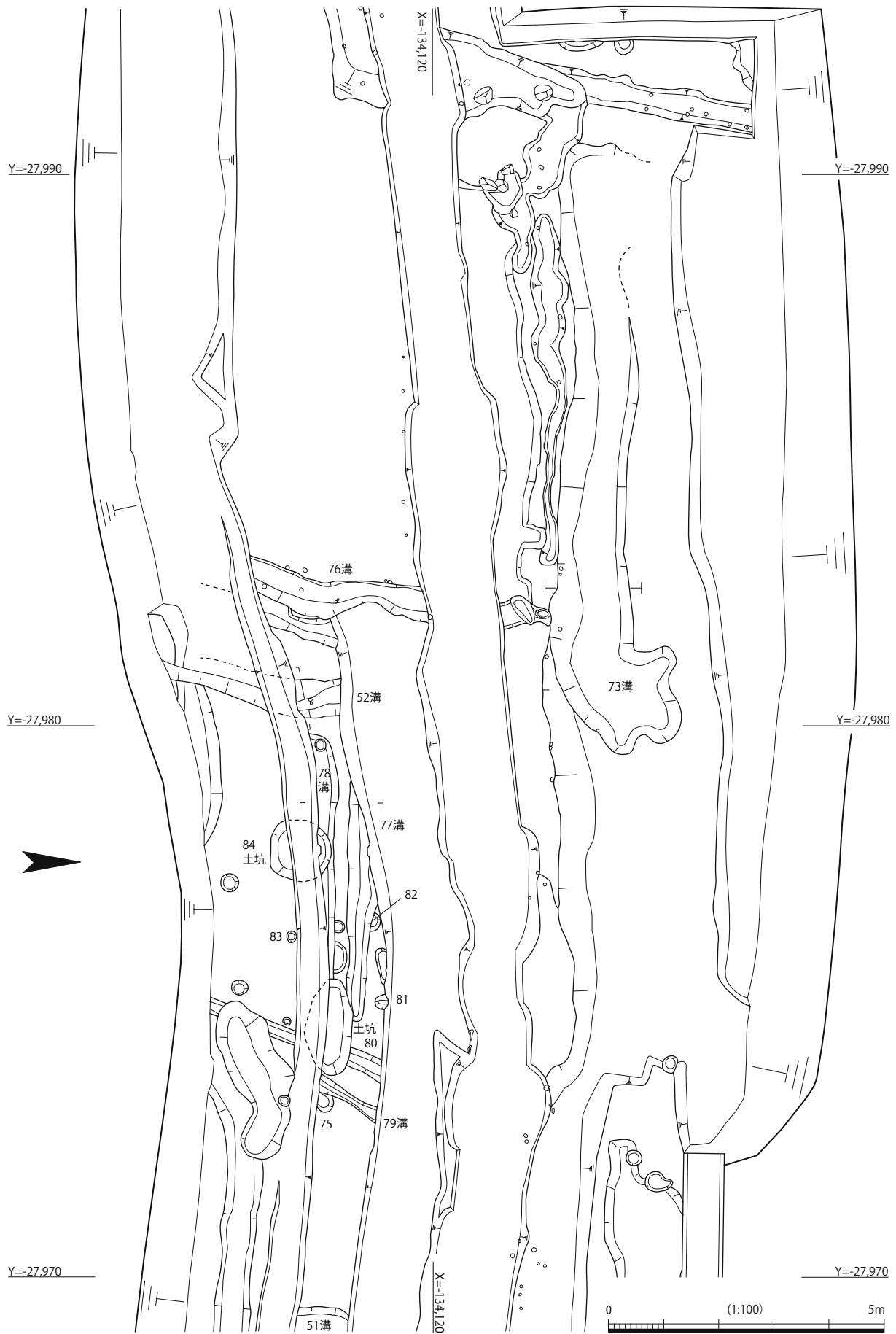


图 14 第 1 調査区遺構面平面図 (5)

建物をめぐる溝の1つである可能性が示されていた遺構である。屈曲してそのまま西へと連続した場合、その可能性はさらに高まる。また、屈曲せず、そのまま北へと伸びるならば、攪乱を隔てた対岸にある122溝と連続する可能性がある。

検出長は2.7m、最大幅は0.9mを測る。最大深度は29cm程度であり、底面には凹凸が目立つ。埋土は暗灰黄色・オリーブ褐色粗砂まじりシルトを主体とする。遺構内からは、土師器皿(図22-31・写真図版21-1)が1点出土した。

130土坑(図8・9) 1-5区中央北半部において検出した大型土坑である。平面形状は隅丸三角形を呈しており長径4.8m、短径4.0m、最大深度は1.1mを測る。断面形状は播鉢状を呈し、底面にはやや凹凸が認められる。埋土は大きく上層・中層・下層に分別することができる。上層(図9断面図A層)は、中世末期の埋め戻し層であり、黒色~黒色オリーブ粘土にオリーブ色を呈する地山ブロックを5~10%程度含む。中層(B層)は、ラミナを伴う水成層で、黒褐色粘土と灰色砂が筋状に重なり合う互層を主体とする。下層(C層)は、灰色~オリーブ黒色粘土からなる堆積層で、しまりが悪く非常

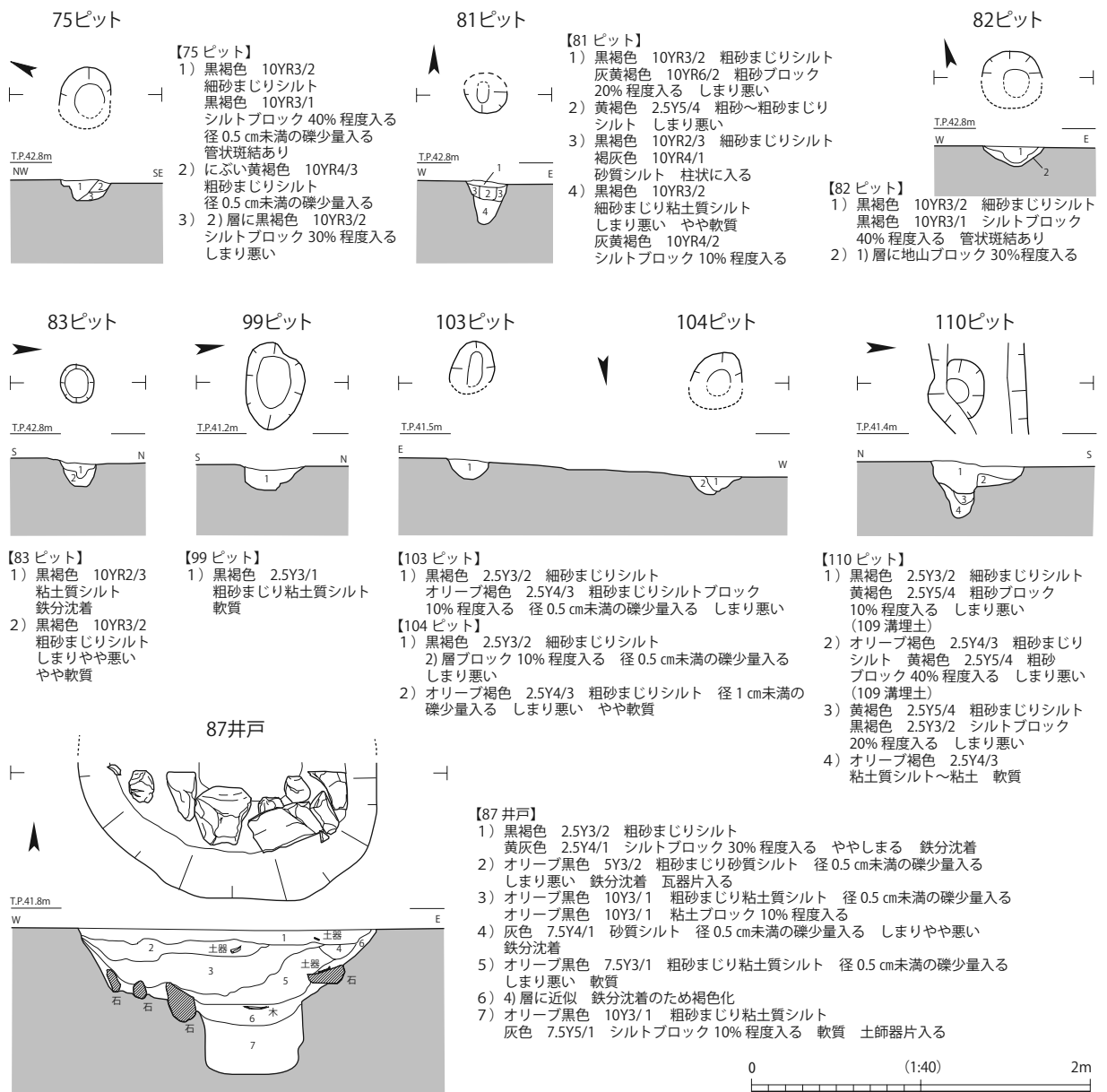


図15 1-3区遺構平面・断面図

Y=-27,970

Y=-27,970



Y=-27,960

Y=-27,960

Y=-27,950

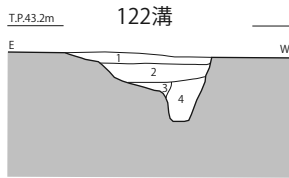
Y=-27,950

X=-134,120

X=-134,120

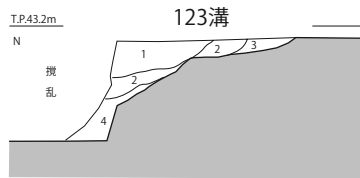


图 16 第 1 調査区遺構面平面图 (6)



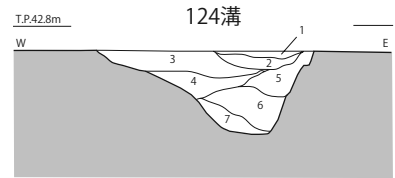
【122溝】

- 1) 暗褐色 10YR3/3 粗砂まじり粘土質シルト
褐色 10YR4/4 シルトブロック 20% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い
マンガン粒入る
- 2) 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 細砂まじりシルト
黒褐色 2.5Y3/1 シルトブロック 20% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い
- 3) 黒褐色 10YR2/3 細砂まじり粘土質シルト
黒褐色 10YR3/2 シルトブロック 30% 程度入る
しまり悪い やや軟質
- 4) 黒褐色 10YR3/2 粗砂まじり粘土質シルト
にぶい黄褐色 10YR4/3 シルトブロック 30% 程度
入る しまり悪い やや軟質



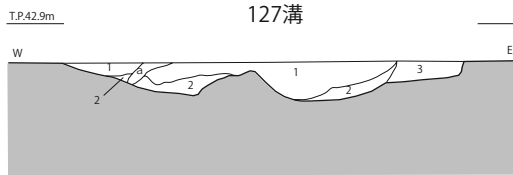
【123溝】

- 1) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
暗灰黄色 2.5Y5/2 シルトブロック 10% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質
(近世包含層)
- 2) 黒褐色 2.5Y3/2 粗砂まじりシルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る
- 3) 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルトブロック 10% 程度入る
暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粗砂まじりシルト
しまり悪い 軟質
- 4) オリーブ褐色 2.5Y4/3 粗砂まじりシルト
2)層ブロック 10% 程度入る しまり悪い



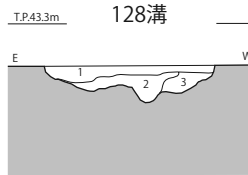
【124溝】

- 1) 黒褐色 2.5Y3/2 粘土質シルト
黄褐色 2.5Y5/3 粗砂ブロック 10% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い
- 2) 黒褐色 2.5Y3/2 粗砂まじり粘土質シルト
暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 シルトブロック
20% 程度入る 径 1 cm未満の礫少量入る
- 3) オリーブ褐色 5Y3/2 粗砂まじりシルト
暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 シルトブロック
20% 程度入る 径 1 cm未満の礫少量入る
しまり悪い
- 4) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
径 1 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質
- 5) 黒褐色 2.5Y3/2 粗砂まじり粘土質シルト
黄灰色 2.5Y4/1 シルトブロック 20% 程度
入る 径 1 cm未満の礫少量入る
しまりやや悪い やや軟質
- 6) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
黒褐色 2.5Y3/2 粗砂まじり粘土質シルト
ブロック 10% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る 軟質
- 7) 黒色 2.5Y2/1 粘土質シルト～粘土
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質



【127溝】

- a) 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗砂まじりシルトと
黒褐色 2.5Y3/1 粘土ブロックの混合層
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い (近世杭痕)
- 1) 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 シルト
オリーブ褐色 2.5Y4/3 粗砂まじりシルトブロック
30% 程度入る 径 1 cm未満の礫少量入る しまり悪い
 - 2) 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粗砂まじりシルト
オリーブ褐色 2.5Y4/3 粗砂まじり粘土質シルトブロック
40% 程度入る 径 1 cm未満の礫少量入る ややしまる
やや軟質
 - 3) オリーブ褐色 2.5Y4/3 粗砂



【128溝】

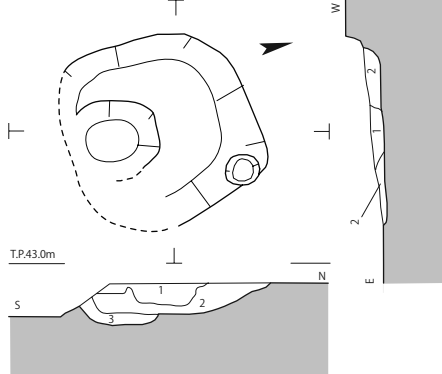
- 1) 黒褐色 2.5Y3/2 粗砂まじりシルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る
黒色 2.5Y2/1 粘土ブロック 30% 程度入る
しまり悪い やや軟質
- 2) 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗砂まじりシルト
黒褐色 2.5Y3/2 シルトブロック 10% 程度
入る 径 1.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い
- 3) オリーブ褐色 2.5Y4/3 粗砂まじりシルト
2)層ブロック 10% 程度入る しまり悪い



【129溝】

- 1) 黒褐色 2.5Y3/2 粗砂まじりシルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る
黒色 2.5Y2/1 粘土ブロック
30% 程度入る しまり悪い やや軟質
- 2) 黒色 2.5Y2/1 細砂まじりシルト
しまり悪い 軟質
- 3) 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3
粗砂まじりシルト

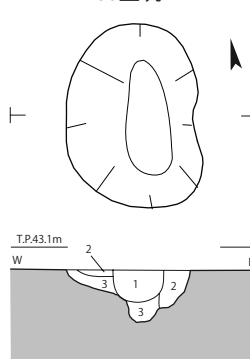
126土坑



【126土坑】

- 1) 灰色 5Y4/1 細砂～シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い
- 2) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじりシルト
灰色 5Y4/1 粘土ブロック 10% 程度入る
しまり悪い 炭化物少量入る
- 3) 2)層に オリーブ褐色 2.5Y4/3
粗砂ブロック 20% 程度入る しまり悪い

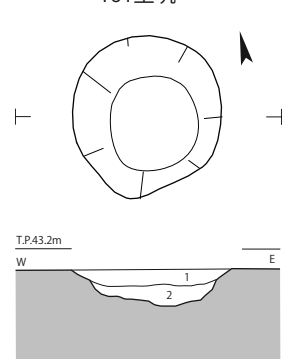
160土坑



【160土坑】

- 1) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質シルトブロック 20% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る ややしまる 鉄分沈着
- 2) 黒褐色 2.5Y3/2 シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 鉄分沈着
- 3) 1)層にオリーブ褐色 2.5Y4/3
粗砂ブロック 30% 程度入る しまり悪い

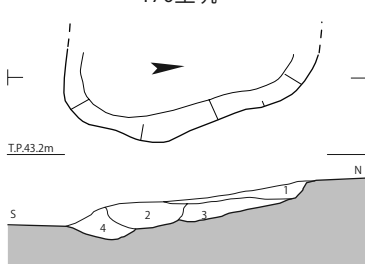
161土坑



【161土坑】

- 1) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質シルトブロック
20% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る
ややしまる
- 2) 黒褐色 2.5Y3/2 シルト 径 0.5 cm未満の
礫少量入る しまり悪い 鉄分沈着

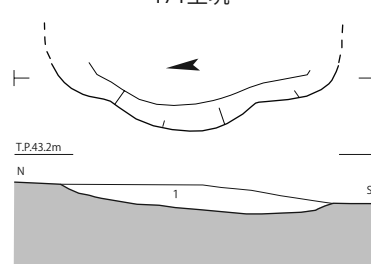
170土坑



【170土坑】

- 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2
粗砂まじりシルト
黒色 2.5Y2/1
シルトブロック 20% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまり悪い
- 2) 黒色 2.5Y2/1
細砂まじりシルト
しまり悪い 軟質
- 3) 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3
粗砂まじりシルト
- 4) 黒褐色 2.5Y3/2
粗砂まじりシルト しまり悪い

171土坑



【171土坑】

- 1) 暗オリーブ褐色
2.5Y3/3
細砂まじりシルト
黒褐色 2.5Y3/1
シルトブロック
20% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫
少量入る
しまり悪い

図 17 1-4区遺構平面・断面図(1)

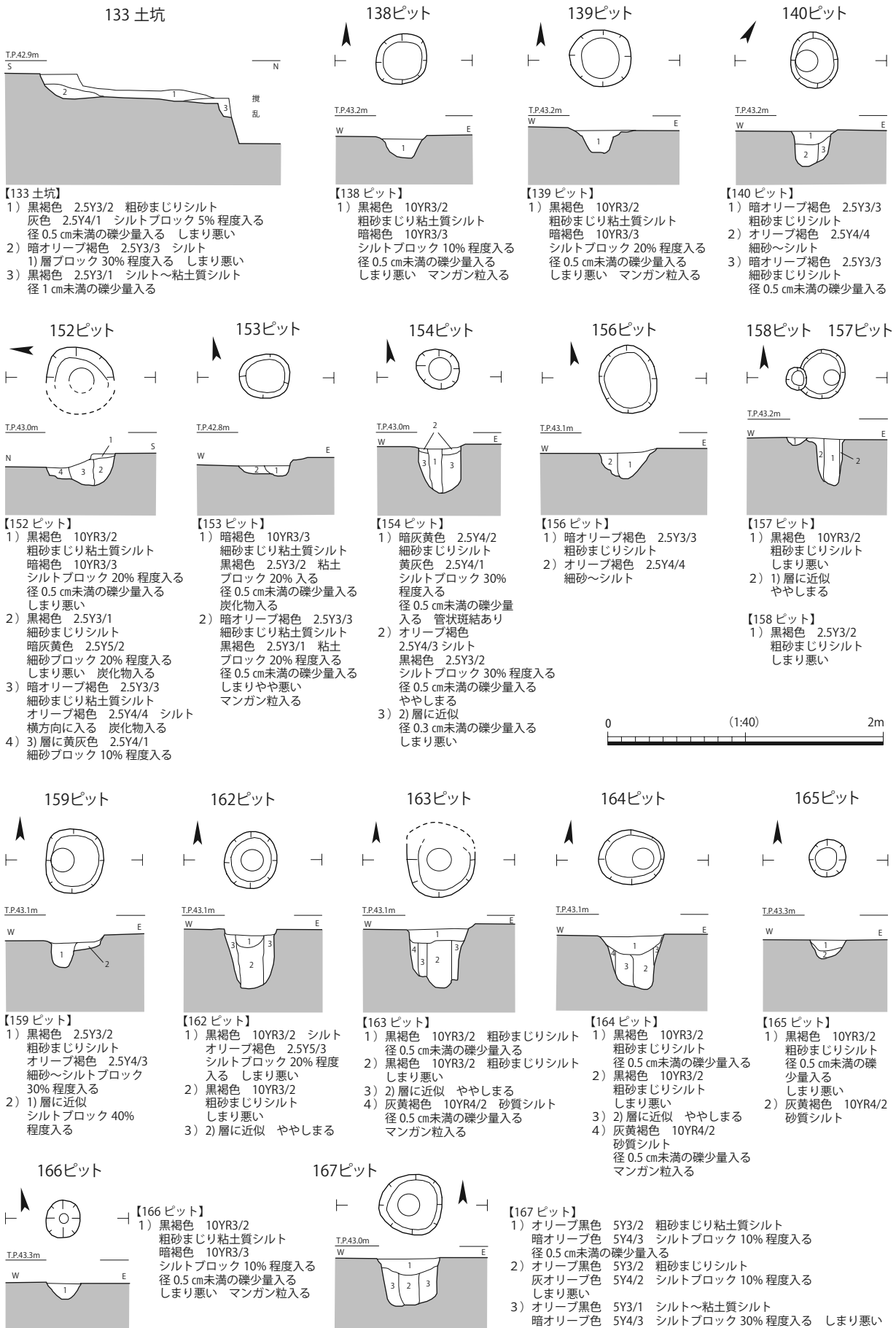


図 18 1-4区遺構平面・断面図(2)

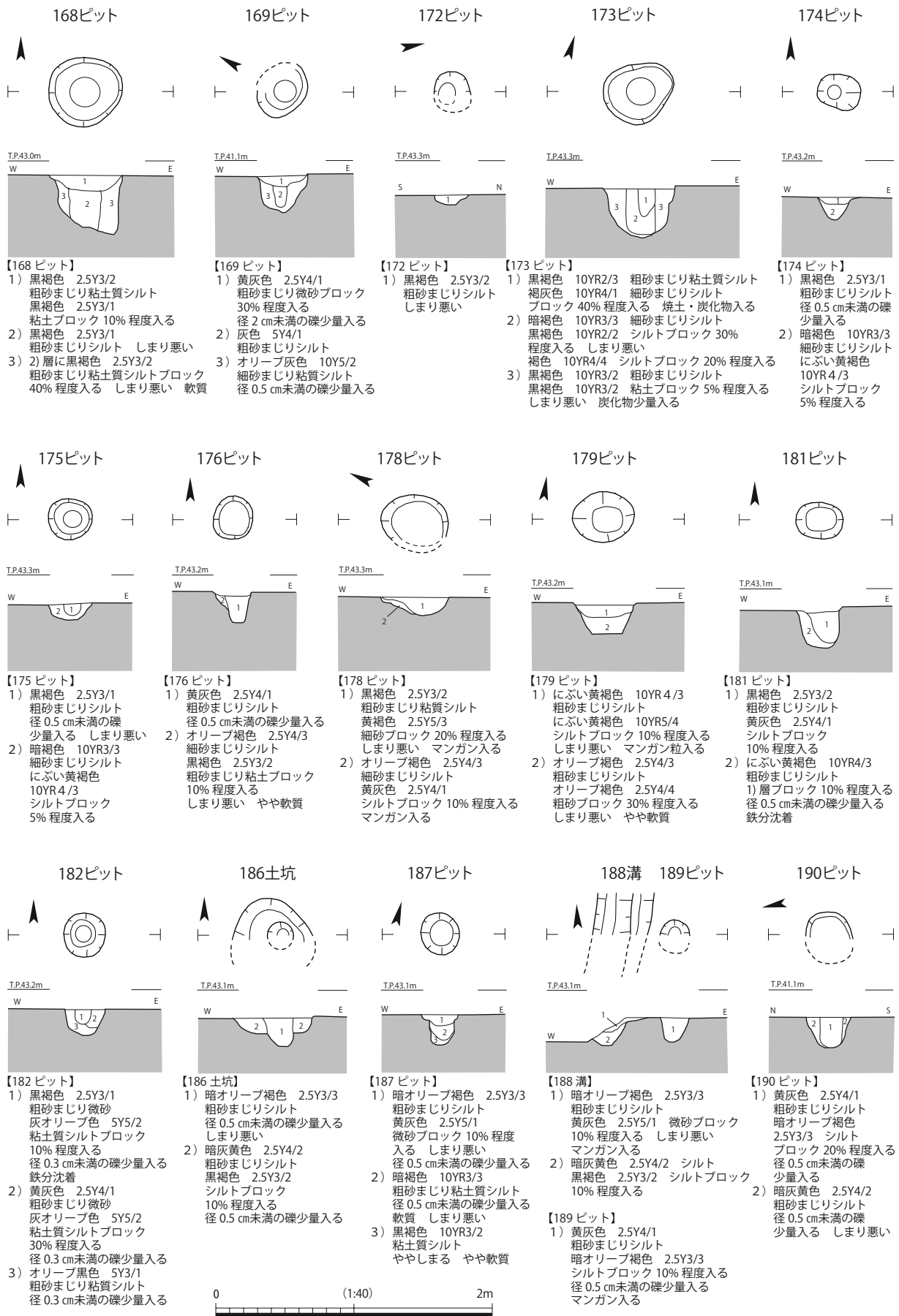


図 19 1 - 4 区遺構平面・断面図 (3)

に軟質である。

堆積状況からは、井戸または水溜め状の遺構であった可能性が高い。ただし、集落内には石組みの井戸なども設けられているため、飲料水を得る井戸というよりも、耕作に伴う水利施設のひとつであったと考えたい。なお、この周辺は、集落の居住域から生産域への変化点にあたり、既往の調査でも大型土坑が多く報告されている。遺構内からは瓦器碗（図 22 - 27）、土師器皿（図 22 - 26）、瓦質土器三足釜（図 22 - 28）等が出土した（すべて写真図版 21 - 1）。

ピット群（図 16・18・19） 調査区の西端部（1 - 4 区・1 - 1 区）では多くのピット群を検出した。明確な掘立柱建物としての復元は難しいが、東西方向に連続する方向軸を想定することができる。なおこの方向軸は、既往の調査区において確認された区画溝や建物群の主軸と同方位を指すとみられる。

これらのピットのうち、明確な掘り方をもつものについては図 18・19 に掲げた。この付近に数多くのピットを検出したことにより、集落の居住域がより東側へ連続することを確認することができた。

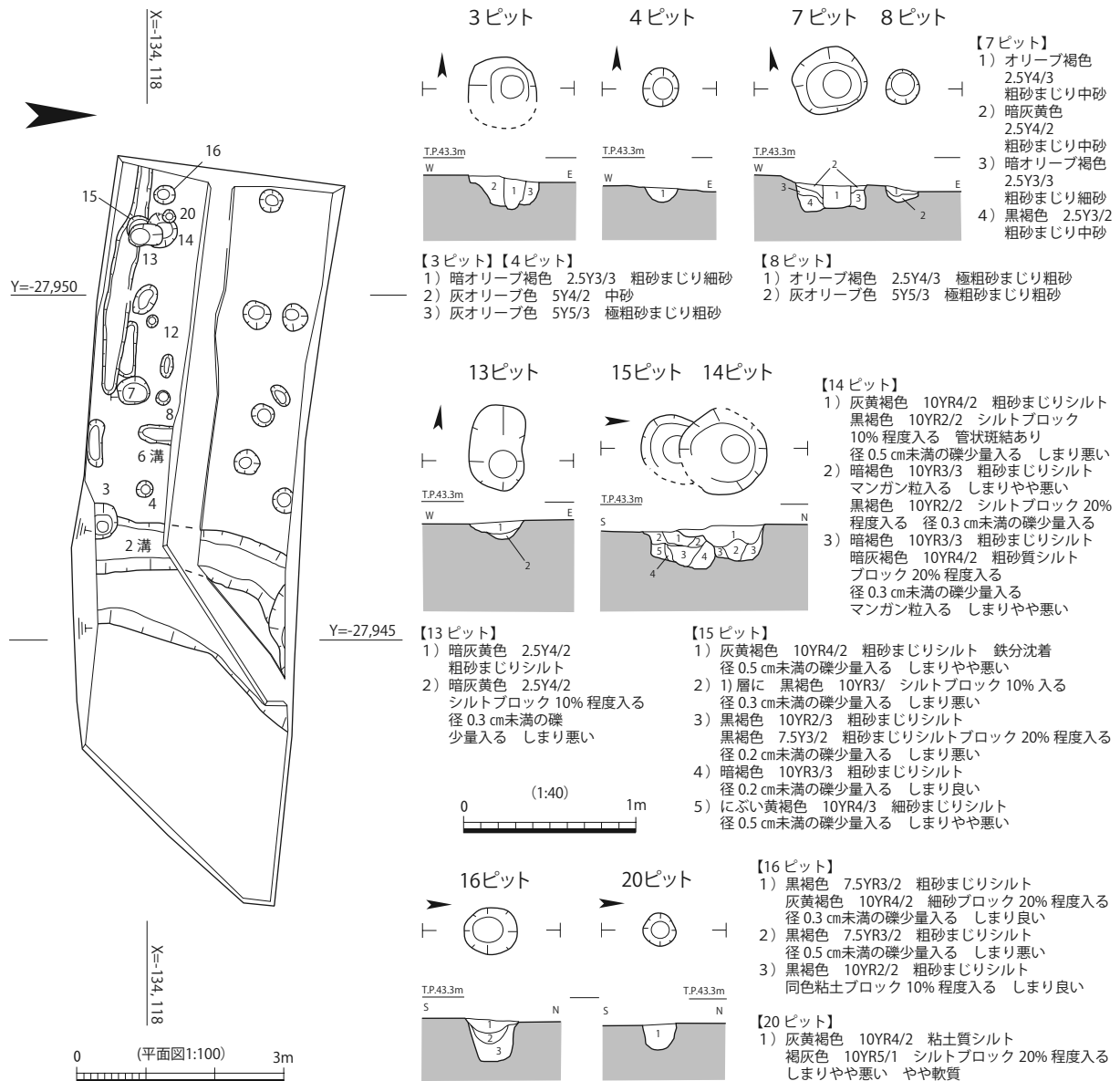


図 20 第 1 調査区遺構平面図（7）・1 - 1 区遺構平面・断面図

3. 出土遺物

石器・剥片 第1調査区から、それぞれが出土している。製作時期は縄文時代に遡ると推測されるが、周辺に該当する遺構や縄文土器の出土は確認できていない。今回の報告例も、中世遺構の埋土より出土した。

図21-1は水晶製の石鏃未成品である。最大長2.9cm、最大幅2.0cm、最大厚1.1cm、重量は5.8gを測る。石材は水晶、一部に自然面を残す。自然面は乳白色、加工された部分はやや黒味がかかった透明である。全体的な調整は粗く、主要剥離面を大きく残している。先端部および基部は他に比べて細かく調整する。有池遺跡の近隣では、京田辺市に所在する甘南備山（通称水晶山）で水晶の露頭が確認されている。有池遺跡や隣接する上私部遺跡、私部南遺跡でも、角礫または自然石の状態では水晶が出土する例がある。しかし、明確に石鏃として加工された製品はこれまで確認されておらず、希少な出土例である。1-4区127溝埋土より出土した。

図21-2は、サヌカイトの剥片である。両面ともに剥離面を大きく残す。上面と側面の一部に自然面を残す。1-2区30土坑より出土した。

銭貨 図21-3は、「皇宋通寶」である。北宋銭で、初鑄は1039年である。1-3区中世包含層より出土した。図21-4は、「聖宋元寶」である。同じく北宋銭で、初鑄は1101年である。1-3区中世遺構面の精査時に出土した。

土器 図22には遺構内より出土した土器を掲げた。図22-1～5は、122溝より出土した遺物である。図22-1は、土師器皿であり、壁面はヨコナデ、底面には指頭圧痕を残す。内部壁面に煤の付着が認められる。図22-2・3は大和型瓦器碗である。ともに内面に緻密なミガキを施す。口縁端部内面には沈線をめぐらせて段状に作る。22-2の底部内面には連結輪状暗文が認められる。ともに12世紀中葉の製品である。図22-4は、同じく大和型の瓦器碗であるが、器高が低く、やや直線的に器壁が立ち上がる。内面にはミガキを施す。13世紀前葉の製品である。図22-5は、土師質土器の羽釜口縁部である。内外面ともにヨコナデが認められる。口縁は内傾し、鏝は短い。13世紀の製品である。

図22-6～19は、124溝埋土より一括出土した土師器皿である。すべて、直径8cm前後の法量を持ち、ヨコナデによって器壁と口縁の調整をおこなう。内面にはハケ状工具で円を描くように、斜め上方向になであげた痕跡が残る。一部口縁の立ち上がりが緩いものや短いものがあり、必ずしも平面形は正円を描くものではない。内面に、煤が付着するものも認められる。

図22-20～24は85溝埋土より出土した。図22-20は、龍泉窯系青磁碗の底部である。外面に蓮弁文を施す。底部外面は、工具によってヘラケズリが施される。13世紀の製品である。図22-21は、厦門碗窯系白磁碗の底部である。外面は底部付近まで施釉、高台は露胎とする。内面底部には、重焼痕が残る。高台端面には、薄く釉が付着する。12世紀後半～13世紀初頭の製品である。

図22-22は、土師器皿である。器壁の一部の立ち上がりが低いため、口縁が大きく歪む。内面にはハケ状工具での調整痕が認められる。

図22-23は、常滑焼甕の底部である。外面は大きく指頭圧痕が残り、灰釉の釉垂れが筋状に付着する。内面には自然釉等が細かく付着す

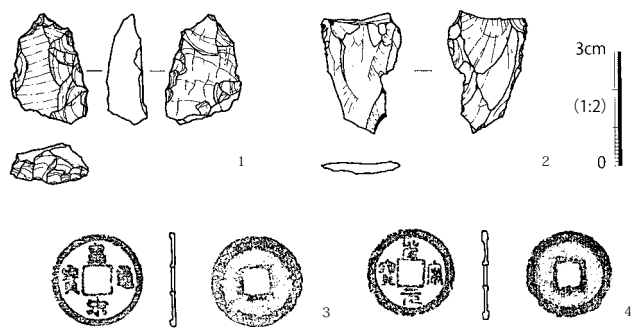


図21 第1調査区出土遺物(1)

る。底部外面は不調整、細かい砂礫の圧痕がある。図 22 - 24 は備前焼甕の底部である。器壁外面は指およびヘラ状の工具で、斜め上方向になであげる。割れ口付近には、布をあて、漆で接着し、補修を試みた痕跡が認められる。内面には自然釉が斑点状に付着する。

図 22 - 25 は、52 溝より出土した瓦器碗の底部である。底部外面には断面三角形の貼り付け高台をめぐらせる。底部内面には連結輪状暗文が施されている 13 世紀前半の製品である。

図 22 - 26 ~ 28 は、130 土坑より出土した。図 22 - 26 は、土師器の皿である。器壁は内外面ともにヨコナデ、底部内面には、縦方向のナデを施す。底部外面には指頭圧痕が残る。高台は認められない。図 22 - 27 は瓦器碗である。器高が低く、浅い。器壁は緩く屈曲して外反する。内面には疎らな

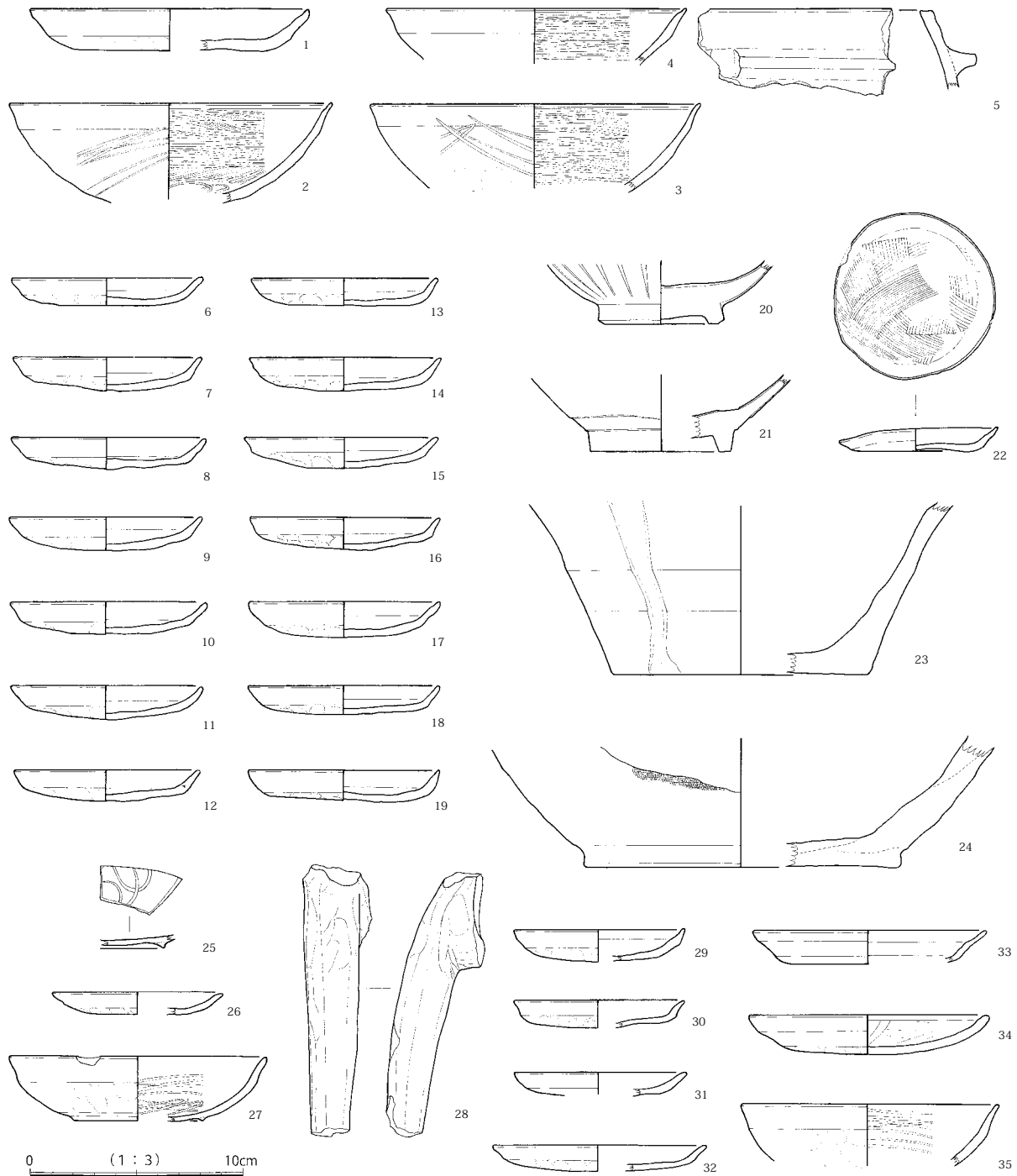


図 22 第 1 調査区出土遺物 (2)

ミガキを施す。底部外面に貼り付けられた高台は非常に低く、わずかに突出するのみであり、高台としての意味を成していない。口縁の一部に製作時に生じたとみられる欠損が残る。図 22 - 28 は瓦質土器三足釜の脚部である。ナデおよび指頭圧痕が顕著に残る。

図 22 - 29・30・32 は、ピット群から出土した土師器皿である。直径 8 cm 前後の小型品が多い。図 22 - 33 は 1 - 3 区西半部の 90 土坑から、図 22 - 34・35 は鋤溝内から出土した。図 22 - 33・34 は土師器皿、図 22 - 35 は楠葉型の瓦器椀である。34 の内面には細かいナデ痕が顕著に残る。

図 23 には、中・近世包含層より出土した遺物を掲げた。図 23 - 1 ~ 6 は、土師器皿である。器壁の外面に 1 段ないし 2 段のヨコナデを施す。図 23 - 7 は須恵質の甕である。短い頸部から続く口縁部は外反し、端部を丸く収める。外面には平行タタキ、内面には顕著な指頭圧痕が残る。図 23 - 8・9 はともに大和型の瓦器椀である。8 は、ミガキを内外面ともに施す。9 は口縁部に施したナデが強く、口縁部の開きが大きい。両者ともに口縁端部には沈線をめぐらせて段を作る。8 は 12 世紀中葉、9 は 12 世紀末から 13 世紀初頭の製品である。図 23 - 10 は、瓦器椀の底部である。底部外面に貼り付けた高台は剥落し痕跡のみを残す。内面には連結輪状暗文がわずかに残る。内面中央には焼成後に刻まれた線刻「×」が認められる。図 23 - 11 は、東播系須恵器の捏鉢である。13 世紀の製品である。

図 23 - 12・13 は、近世の溝付近より出土した。12 は、京・信楽系陶器の灯明皿である。内面と外面の口縁部には乳白色の釉が塗布されている。内面の釉には貫入が認められる。18 世紀の製品である。図 23 - 13 は、瓦質土製品の鼓形とちんである。色調は灰白色で、一部くすんだ銀色を呈する。最大長は 4.7cm、最大径は 3.1cm を測る。胎土はやや粗く、焼成はやや甘い。全体を手捏ねで成形し、左右に平坦面を作る。鼓形とちんは、平瓦の焼成時に使用する道具である。融着を防ぐため、瓦と瓦の間に挟んで使用する。通常は数個セットで使用するものである。中央部を細く作る例が多いが、13 は中央部を突帯状に加工する点に特徴がある。

以上、第 1 調査区の調査成果について報告した。今回の調査では中世遺構面において土坑・溝・ピット群・井戸などの遺構を検出することができた。このうちの多くが、既往の調査において報告された遺構と連続するものであり、その性格を補強することができた。

また、調査区東半部において、多くのピット群を検出し、有池遺跡の居住域がさらに広がることを追認した。また、調査区の西半部では、生産域である水田跡や大型土坑を確認し、居住域周辺部の土地利用の様相に新たな資料を加えることができた。

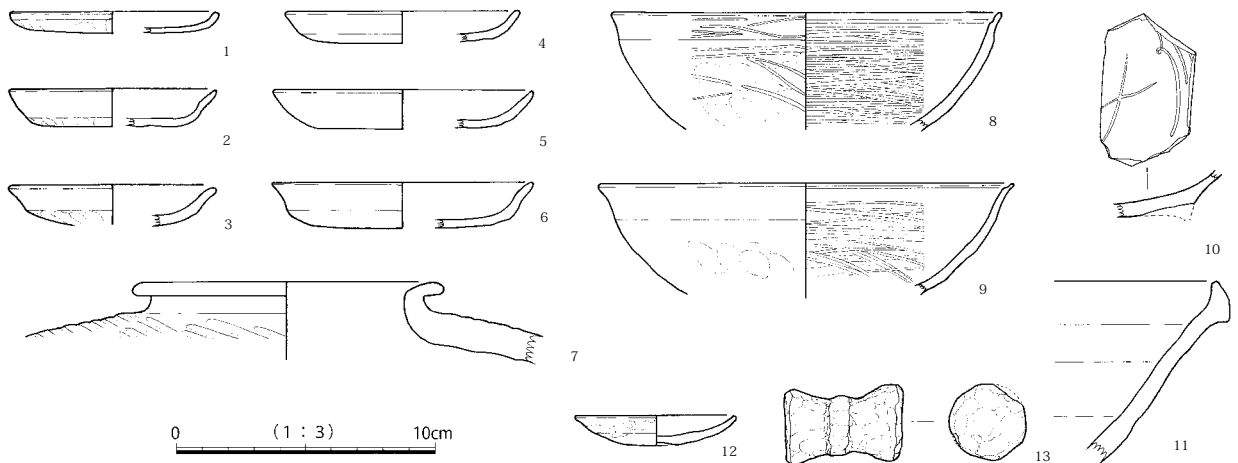


図 23 第 1 調査区出土遺物 (3)

第2節 第2調査区

1. 調査区の状況と基本層序

調査区の形状 第2調査区は、北東—南西に細長い形状をもつ調査区である。現在では北東から南西に向かって緩やかに下がる住宅地であるが、宅地造成がなされる以前は、随所に谷が横断するきわめて起伏に富んだ景観を呈していた。谷地は樹木が茂る沼地となって所々に横臥し、谷へと続く斜面では水田が営まれていた。

調査地は大部分が里道（生活道路）であるが、既述のとおりガス管や水道管、下水道管などのライフラインが縦断し、調査不可能と判断された範囲も大きい。特に古墳時代から古代の集落域に相当する微高地上では、造成前の削平や埋設管の敷設によって受けた攪乱が甚だしく、遺構面そのものの残存状況は悪い。しかし、住宅地の盛土によって守られた範囲では、遺構面の残存を確認することができた。

基本層序 盛土を除去すると、近現代耕作土、谷地を覆う腐植土層が認められた。近現代耕作土下には近世耕作土があり、その下にわずかではあるが中世包含層が存在する。中世包含層はオリブ黒色粘土質シルトを主体とし、地山土である灰オリブ色粘土ブロックを巻き上げて含む。基本的に耕作土であ

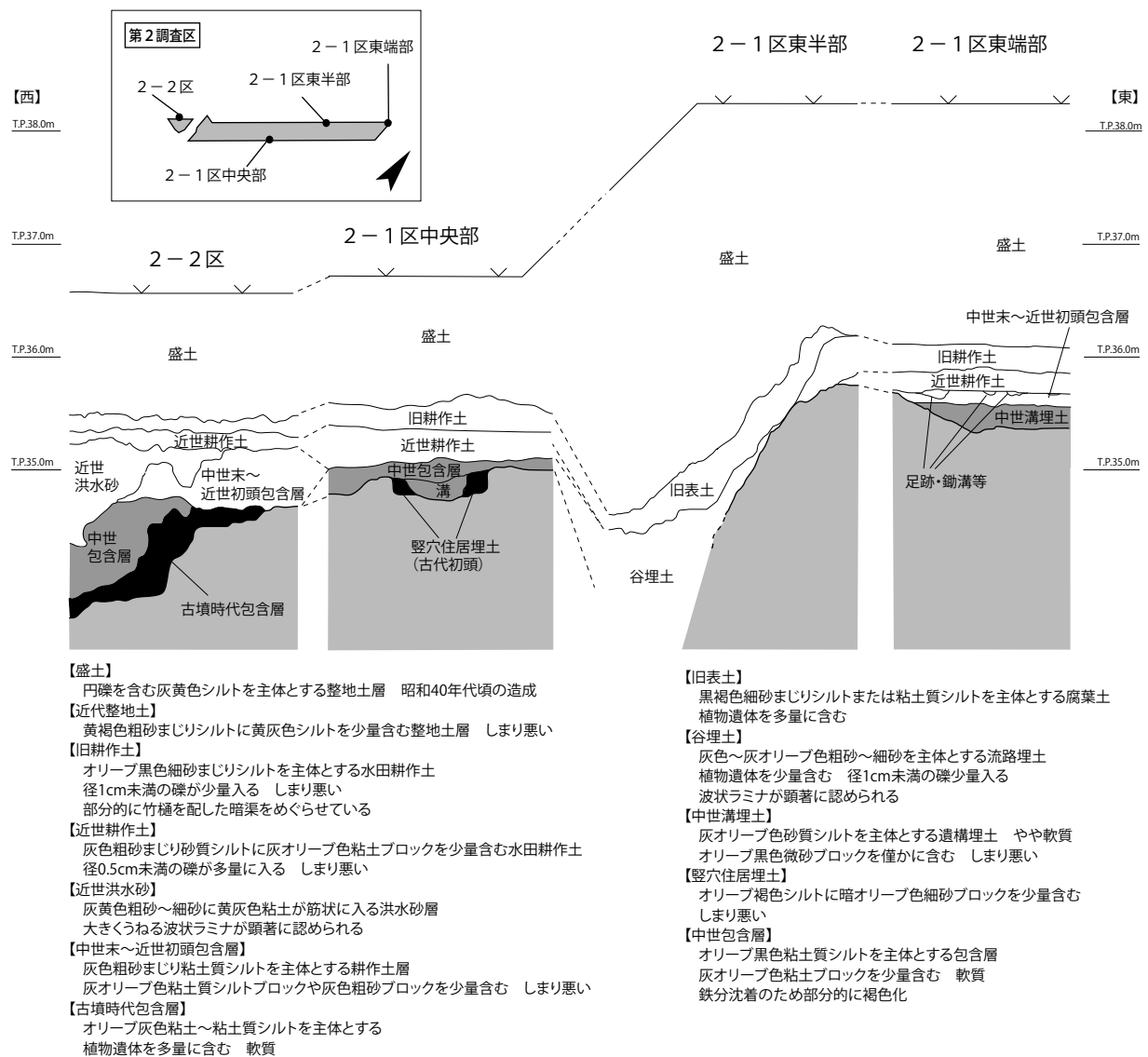
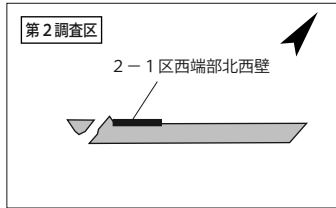
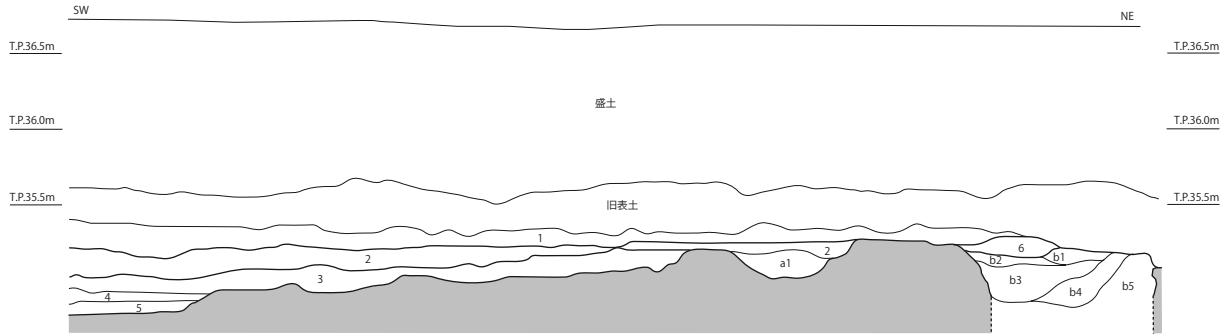


図 24 第2調査区基本層序模式図

2-1区西端部 北西壁断面



【2-1区西端部北西壁断面】

- 1) 黄褐色 2.5Y5/6 粗砂まじりシルト
黄灰色 2.5Y5/1 シルトブロック 30% 程度入る しまり悪い (近代整地土)
- 2) 暗緑灰色 5G4/1 粗砂まじりシルト 径 1 cm未満の礫少量入る
緑灰色 5G5/1 粘土ブロック 5% 程度入る しまり悪い 管状斑結あり (近世耕作土)
- 3) 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 粗砂まじり粘土質シルト
径 0.7 cm未満の礫少量入る 管状斑結あり (中世包含層)
- 4) 暗オリーブ灰色 5GY4/1 粗砂まじり粘土質シルト しまりやや悪い
緑灰色 7.5GY5/1 粘土ブロック 5% 程度入る やや軟質 鉄分沈着
- 5) オリーブ灰色 10Y4/2 粗砂～シルト 径 0.5 cm未満の礫多量入る ややしまる
- 6) オリーブ黒色 10Y3/2 微砂～粘土 やや軟質 管状斑結あり
地山) 暗緑灰色 10G4/1 粗砂まじり粘土質シルト しまり良い やや軟質

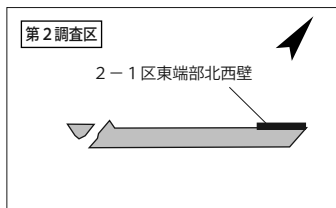
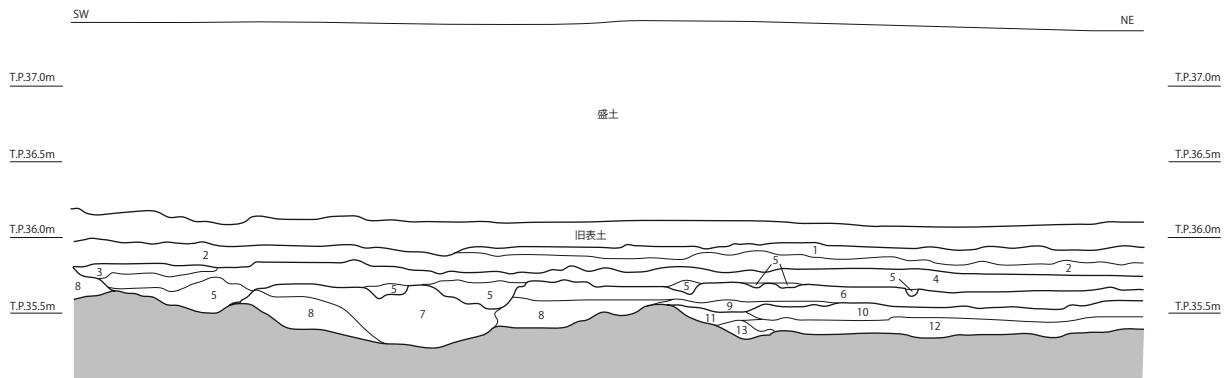
【近世溝埋土】

- a1) 暗オリーブ色 7.5Y4/3 微砂と 灰オリーブ色 10Y5/2 粘土の互層 波状ラミナあり

【近世井戸埋土】

- b1) 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 粗砂まじり粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る やや硬い 管状斑結あり
- b2) オリーブ黒色 10Y3/2 粗砂まじりシルト～細砂 やや軟質 ラミナあり
- b3) 灰～灰オリーブ色 10Y4/1～4/2 粗砂まじりシルト～シルト しまり非常に悪い
- b4) 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 粗砂まじり粘土質シルト
オリーブ黒色 10Y3/2 粗砂まじりシルトブロック 30% 程度入る
- b5) オリーブ灰色 10Y4/2 粗砂まじりシルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質

2-1区東端部 北西壁断面



【2-1区東端部北西壁断面】

- 1) 灰色 10Y4/1 細砂まじりシルト 径 0.3 cm未満の礫少量入る
しまり悪い 管状斑結あり (近現代耕作土)
- 2) 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 細砂まじりシルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る
ややしまる 管状斑結あり (近現代耕作土)
- 3) 黄灰色 2.5Y4/1 粗砂～シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い (近世耕作土)
- 4) 灰色 10Y4/1 細砂まじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る ややしまる
管状斑結あり (近世耕作土)
- 5) 黄褐色 2.5Y5/3 粗砂～細砂 (近世洪水砂・足跡埋土)
- 6) 灰色 10Y4/1 細砂まじりシルト しまり悪い 軟質
灰オリーブ色 7.5Y6/2～5/2 粗砂 波状ラミナあり 木片入る (近世耕作土)
- 7) 灰色 7.5Y4/1 粗砂まじりシルト (中世末～近世初頭流路)
- 8) 灰色 7.5Y4/1 粗砂～シルト 上位に微砂流入あり 粗砂ラミナあり
植物遺体少量入る (中世末～近世初頭流路)
- 9) オリーブ黒色 10Y3/1 粘土～粘土質シルト 微砂の流入あり
しまり悪い 軟質 ラミナあり (中世末～近世初頭流路)
- 10) 暗オリーブ灰色 5GY4/1 粗砂まじり粘土質シルト
下位に微砂の流入あり しまり悪い 軟質 (中世包含層)
- 11) 暗オリーブ灰色 5GY4/1 粘土 軟質 鉄分沈着 炭化物入る 9)層に近似 (中世包含層)
- 12) 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 粗砂～シルト しまり悪い 軟質 (中世包含層)
- 13) 暗オリーブ灰色 5GY4/1 粗砂まじりシルト～粘土質シルト
径 0.3 cm未満の礫少量入る 軟質 鉄分沈着 (中世包含層)

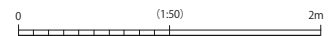


図 25 2-1区北西壁断面図

と解釈される。調査区の東半部では遺構面が高いため、中世包含層の堆積は谷地などの凹地に限られている。緩やかに西へと下がる調査区中央付近では、中世包含層は5 cm程度の層厚を保ち、西に向かって徐々に厚みを増す。調査区西端部の2-2区は谷筋にあたるため、中世包含層は厚く堆積し、約1 mを測る。なお、谷内には中世包含層の上に、中世末～近世初頭包含層、近世洪水砂の堆積が認められる。第2調査区の微高地上では、中世包含層を除去した段階で地山を確認した。地山上面が主要遺構面（古墳時代後期～中世）である。

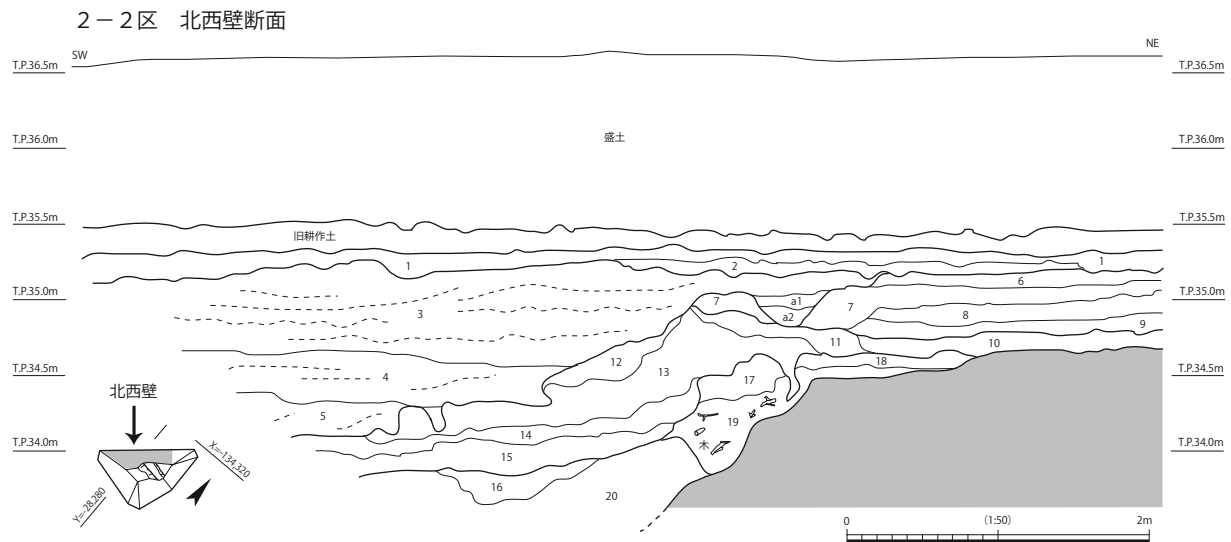
2. 検出遺構

2-1区では、中世水田跡や溝のほか、古墳時代後期の竪穴住居を1棟検出した。また2-2区では、谷地の落込みを確認した（図27）。

206 流路（図27） 2-1区東半部において確認した流路である。既往の調査では谷として報告されており、谷が埋設した最終形態の水流を遺構として捉えている。今回の調査では、東岸を階段状に成形し、杭列を打設した痕跡を検出した。

確認した最大幅は15 mを測る。近世洪水砂である粗砂～細砂の厚い堆積を除去すると灰色粘土が露呈した。この時点で掘削限界に達したため、深度2 mをもって掘削を終了した。埋土からは中世末～近世初頭とみられる陶磁器片と朱漆塗りの漆器椀（写真図版33-4・W18）が出土した。

207 溝（図27） 2-1区北東端で確認した東西方向へ伸びる大型の溝である。既往の調査区では直交



【2-2区北西壁】

- | | |
|---|--|
| <p>1) 灰色 7.5Y5/1 粗砂まじり砂質シルト 径0.5cm未満の礫多量入る
灰オリーブ色 5Y4/2 粘土ブロック10%程度入る
しまり悪い（近世耕作土）</p> <p>2) 灰オリーブ色 5Y5/2 細砂まじりシルト しまり悪い
灰オリーブ色 5Y5/2 粘土ブロック20%程度入る（近世耕作土）</p> <p>3) 灰黄色 2.5Y6/3～6/1 粗砂～細砂（近世洪水砂）
黄灰色 2.5Y5/1 粘土 筋状に入る 波状にラミナを形成（近世洪水砂）</p> <p>4) 黄灰色 2.5Y5/1 微砂
にぶい黄色 2.5Y6/3 粗砂～細砂が筋状に入る（近世洪水砂）</p> <p>5) 灰色 5Y5/1-6/1 粗砂
灰色 5Y4/1 粘土ブロック少量入る（近世洪水砂）</p> <p>6) 灰色 5Y5/1 粗砂まじり粘土質シルト～シルト（中近世耕作土）</p> <p>7) 灰オリーブ色 5Y4/2 粘土質シルト（中近世耕作土）
灰色 5Y4/1-6/1 粗砂ブロック30%程度入る しまり悪い</p> <p>8) 灰色 5Y4/1 粗砂まじり粘土質シルト しまり悪い やや軟質</p> <p>9) 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじり粘土質シルト しまり悪い
やや軟質 管状斑結沈着（中近世耕作土）</p> <p>10) 灰オリーブ色 5Y4/2 細砂まじり粘土質シルト
オリーブ褐色 2.5Y4/3 細砂まじりシルトブロック40%程度入る
やや軟質 管状斑結（中世耕作土）</p> | <p>11) 灰色 7.5Y4/1 粗砂まじり粘土質シルト 軟質 鉄分沈着（中世畦・耕作土）</p> <p>12) オリーブ黒色 10Y3/2 粘土 非常に軟質 植物遺体少量入る（中世畦・耕作土）</p> <p>13) オリーブ黒色 7.5Y3/2 粗砂まじり粘土質シルト
オリーブ色 5Y5/3～5/4 粗砂ブロック5%程度入る（中世畦&耕作土）</p> <p>14) オリーブ黒色 7.5Y3/2 粘土質シルト しまり悪い 軟質
灰オリーブ色 7.5Y4/2 粘土ブロック20%程度入る 鉄分沈着（中世耕作土）</p> <p>15) オリーブ黒色 10Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト しまり悪い
オリーブ黒色 10Y3/2 粘土ブロック10%程度入る 軟質（中世耕作土）</p> <p>16) 黒色 10Y2/1 粗砂まじり粘土質シルト
灰色 10Y5/1 粘土ブロック20%程度入る 軟質（古墳時代後期包含層）</p> <p>17) オリーブ黒色 7.5Y3/2 粗砂まじり粘土質シルト（古墳時代後期包含層）</p> <p>18) 灰オリーブ色 5Y5/3 粗砂ブロック20%程度入る しまり悪い やや軟質</p> <p>19) 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじりシルト しまり悪い（古墳時代後期包含層）</p> <p>20) オリーブ灰色 2.5GY5/1 粘土～粘土質シルト 径1cm未満の礫少量入る
植物遺体多量入る 軟質 しまり悪い（古墳時代後期包含層）</p> <p>20) 灰色 10Y4/1 粗砂まじり粘土質シルト 径1cm未満の礫少量入る
しまり悪い 軟質（古墳時代後期包含層）</p> |
|---|--|
- a1) 黄灰色 2.5Y4/1 粗砂～シルト 径0.5cm未満の礫少量入る（近世溝埋土）
a2) 黄褐色 2.5Y5/3 粗砂まじりシルト しまり悪い（近世溝埋土）

図26 2-2区北西壁断面図

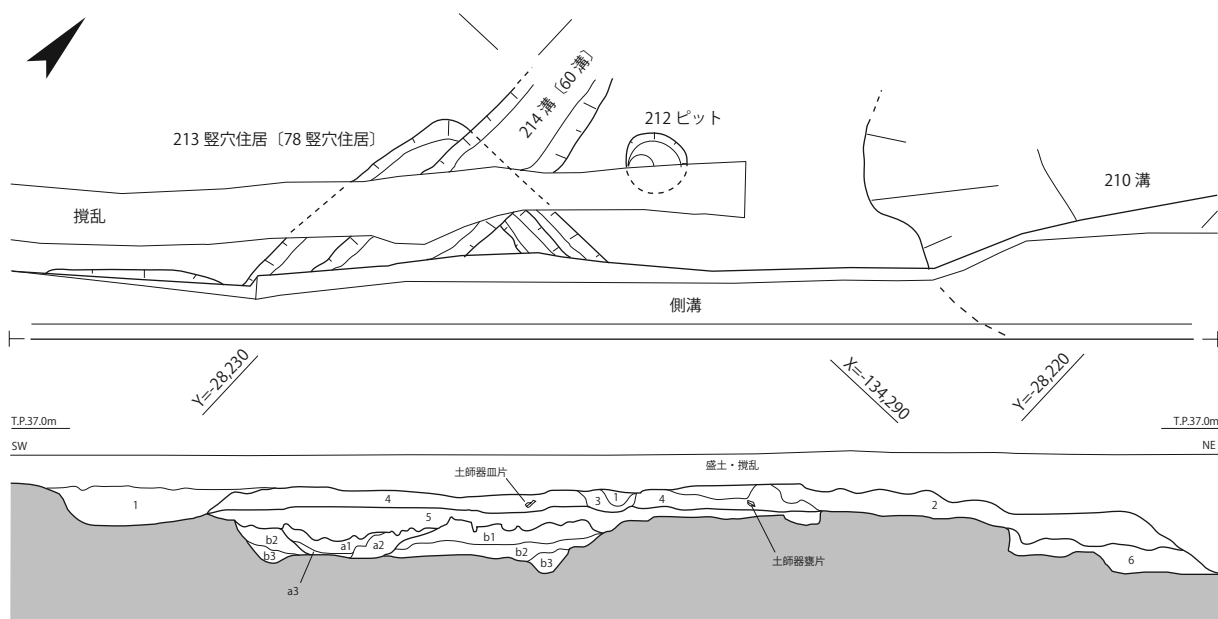


図 27 第 2 調査区遺構面全体図 (中近世)

する方向に、ほぼ同規模の溝が確認されており、類似した性格をもつ遺構であると考えられる。方位に沿って掘削されていることから、水田開発に伴う大規模な灌漑水路である可能性が高い。埋土は、暗オリーブ灰色粘土を主体とする（図 25 下段参照）。埋土からは瓦質土器の羽釜が、比較的大きな破片で出土した（図 29 - 8）。

208 溝（図 27） 2 - 1 区東半部で検出した、南北方向に伸びる溝である。周辺には方向を同じくする鋤溝を多数検出し、水田の区画溝であると考えられる。確認できた長さは 6.0m、最大幅は 1.0 m を測る。埋土からは、13 世紀後半の瓦器碗が 1 点出土した。

213 竪穴住居〔78 竪穴住居〕（図 28） 2 - 1 区の中央付近において検出した竪穴住居の一角である。隣接する既往の調査区では南半部が報告されており、今回の調査によって一辺 4 m を測る方形を呈するプランであることを確認した。ただし、検出遺構面では、この上面を中世の区画溝である 214 溝〔60 溝〕が走っており、攪乱の影響もあわせて、竪穴住居の残存状況はきわめて悪い状況にある。周溝の一部を



【2-1 区中央部東壁断面】

- 1) 灰色 10Y4/1 細砂まじりシルト 径 0.3cm 未満の礫少量入る
しまり悪い 鉄分沈着 (旧耕作土)
- 2) 灰オリーブ色 5Y4/2 砂質シルト 径 0.5 cm 未満の礫少量入る (中近世耕作土)
灰色 5Y5/1 シルトブロック 40% 程度入る ややしり悪い
- 3) 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルト 径 0.5 cm 未満の礫少量入る
しまり悪い 鉄分沈着 (近世水田区画溝)
- 4) オリーブ褐色 2.5Y4/4 粗砂まじりシルト
暗灰黄色 2.5Y4/2 シルトブロック 20% 程度入る ややしめる
土器片入る (中近世耕作土)
- 5) オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質シルト
黄褐色 2.5Y5/4 粗砂 ブロック 10% 程度入る しまり悪い
攪拌痕跡あり (中世耕作土)
- 6) 暗オリーブ色 5Y4/4 粘土質シルト
灰色 5Y5/1 シルトブロック 10% 程度入る しまり悪い

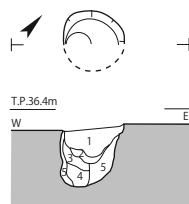
【214 溝 (60 溝)】

- a1) 灰オリーブ色 5Y4/2 粘土質シルト 径 0.3 cm 未満の礫少量入る
灰オリーブ色 5Y4/3 粗砂ブロック 5% 程度入る ややしめる
- a2) 灰オリーブ色 5Y4/2 砂質シルト
a1) 層ブロック 10% 程度入る ややしり悪い やや軟質
- a3) オリーブ黒色 7.5Y3/2 粘土質シルト
オリーブ黒色 7.5Y3/2 微砂ブロック 10% 程度入る やや軟質

【213 竪穴住居 (78 竪穴住居)】

- b1) オリーブ褐色 2.5Y4/3 粗砂まじりシルト
黄灰色 2.5Y4/1 シルトブロック 20% 程度入る ややしめる
- b2) オリーブ褐色 2.5Y4/4 シルト
暗オリーブ色 5Y4/2 細砂ブロック 30% 程度入る しまり悪い
- b3) 灰オリーブ色 7.5Y4/2 砂質シルト
灰オリーブ色 5Y5/3 粗砂ブロック 20% 程度入る しまり悪い やや軟質

212ピット



【212ピット】

- 1) オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質シルト～シルト
暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 シルトブロック 10% 程度入る
黄灰色 2.5Y4/1 シルトブロック筋状に 30% 程度入る
径 0.5 cm 未満の礫少量入る しまり悪い
- 2) 黄褐色 2.5Y5/3 細砂まじりシルト
径 0.5 cm 未満の礫少量入る しまり悪い
- 3) オリーブ褐色 2.5Y4/3 細砂まじりシルト
- 2) 層ブロック 10% 程度入る
- 4) 灰オリーブ色 5Y5/3 細砂～シルト
径 0.5 cm 未満の礫少量入る しまり悪い
- 5) 灰オリーブ色 5Y5/3 細砂～シルト
灰色 5Y4/1 シルトブロック 5% 程度入る
灰オリーブ色 5Y4/2 粘土ブロック 10% 程度入る しまり悪い

図 28 213 竪穴住居周辺遺構平面・断面図

確認したものの、竈跡や柱穴を検出することはできなかった（図 28）。

遺構の残存深度は 20cm 程度、埋土はオリーブ褐色シルトを主体とする。既往の調査成果を含めてみると、213 竪穴住居〔78 竪穴住居〕は、古墳時代後期に拡大した上私部遺跡集落のほぼ北東端に位置する遺構である。東西を谷に挟まれており、緊密に住居が立ち並ぶ中にある他の遺構とは立地状況を異にするようである。遺構内から、7 世紀初頭に製作時期をもつ須恵器杯身が出土した（図 29 - 1）。

3. 出土遺物

図 29 - 1 は、213 竪穴住居より出土した須恵器杯身である。口径は 13cm、器高は 3.0cm 程度に復元できる。口縁は短く立ち上がり、一部に自然釉が付着する。底部外面には回転ヘラケズリを施す。底部外面の一部に粘土塊の付着が認められる。TK 209 型式（7 世紀初頭頃）の製品である。

図 29 - 2 は、214 溝より出土した和泉型の瓦器碗である。大きく開く口縁をもつ。器壁内面にはまばらなミガキ、外面には指頭圧痕が残る。13 世紀後半の製品である。図 29 - 4 は土師器皿である。器高が高く、やや深い。器壁外面にはヨコナデを施す。底部付近には指頭圧痕が残る。

図 29 - 7 は、206 流路より出土した真鍮製の煙管である。吸口・羅宇・火皿の一体形である。薄く延ばした金属板を丸めて管状に作る。吸口より先はやや扁平に作り、先端部を短く立ち上げている。外面は腐食が進んでいるものの、部分的に金色に光る箇所が残る。近世以後の製品である。

図 29 - 8 は、207 溝より出土した瓦質土器の羽釜である。垂直に立ち上がる口縁は口径に比して高く、口縁端面に一条の沈線をめぐらせる。器壁内面は横または斜め方向のハケ調整後、斜め上方向へ向

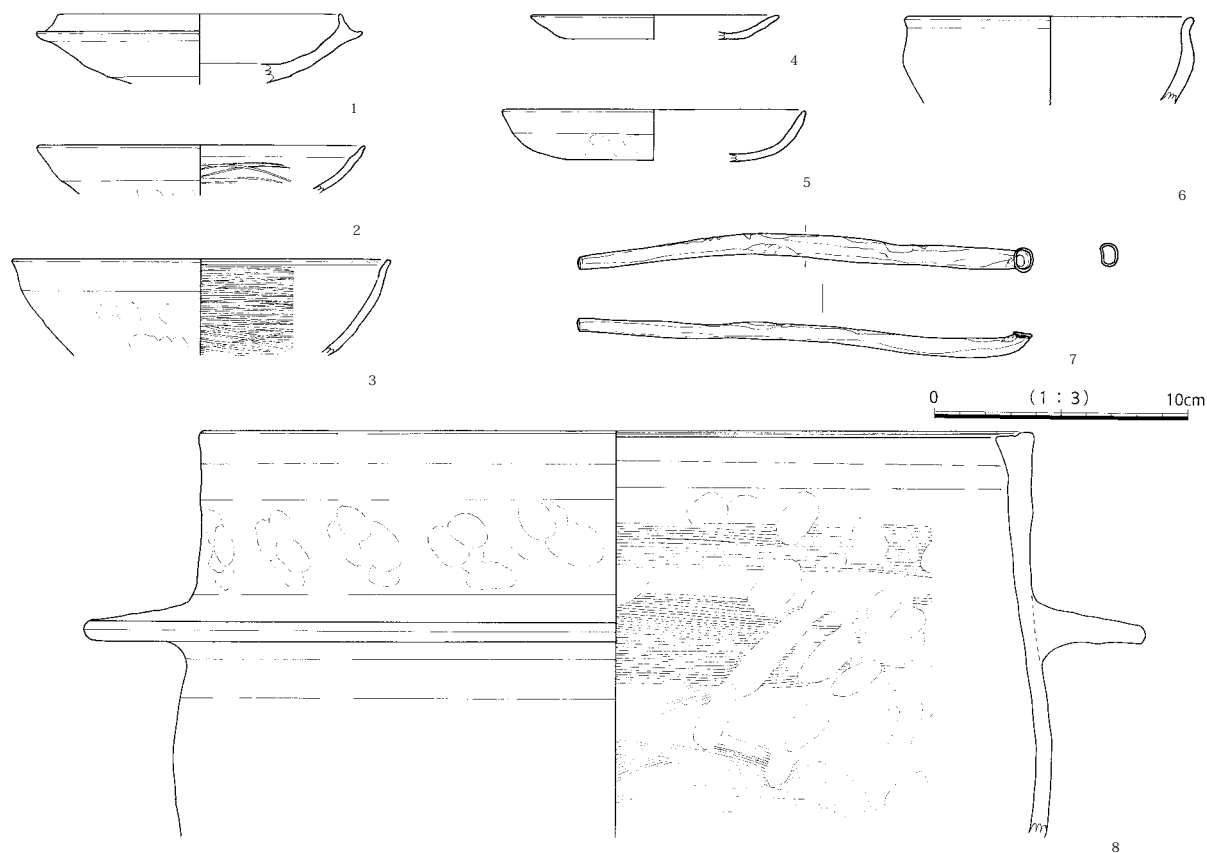


図 29 第 2 調査区出土遺物

かってヨコナデを施す。口縁部外面にはヨコナデ後、一定間隔での指頭圧痕を施すことにより、文様状の凹凸を作り出している。罅部以下は、ヨコナデを施す。器壁の外面には炭化物の付着が認められる。

図 29 - 3・4・6 は、包含層より出土した。図 29 - 3 は瓦器碗である。内面に緻密なミガキが認められる。12 世紀中葉の大和型の製品である。図 29 - 4 は土師器皿である。深みのある器形をもち、器壁が丸みをもって立ち上がる。外面には、ヨコナデを 1 段施す。図 29 - 6 は、瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。釉薬は暗褐色を呈する鉄釉である。口縁端部には使用による摩滅が認められる。

以上、第 2 調査区における調査成果を記述した。ここでは、中世遺構面において、谷地付近の土地活用のあり方を明らかにすることができた。谷に阻まれながらも、方位に即した水田地割がおこなわれていたことが推測される。また、既往の調査成果に連続して、古代初頭の竪穴住居の一角を検出することができた。ただし、当該期の遺構・遺物ともに残存が希薄であることから、この付近が集落の北限域にあたることが、改めて示される結果となった。

第 3 節 第 3 調査区

1. 調査区の状況と基本層序

調査区の状況 第 3 調査区は 2 本の水路と、これが下流にて合流する範囲に相当するため、調査区全体の平面形状は鉤形を呈する。現況では、3 - 3 区を上手にもつ東側水路が打設杭と横木で土留めを施す素掘り水路、3 - 4 区を上手にもつ東側水路がコンクリート擁壁とブロック積みの土留めをもつ水路である。

調査区の標高は、扇状地の裾野が複雑に入り込むため、東側水路の上手にあたる 3 - 3 区が最も高く、

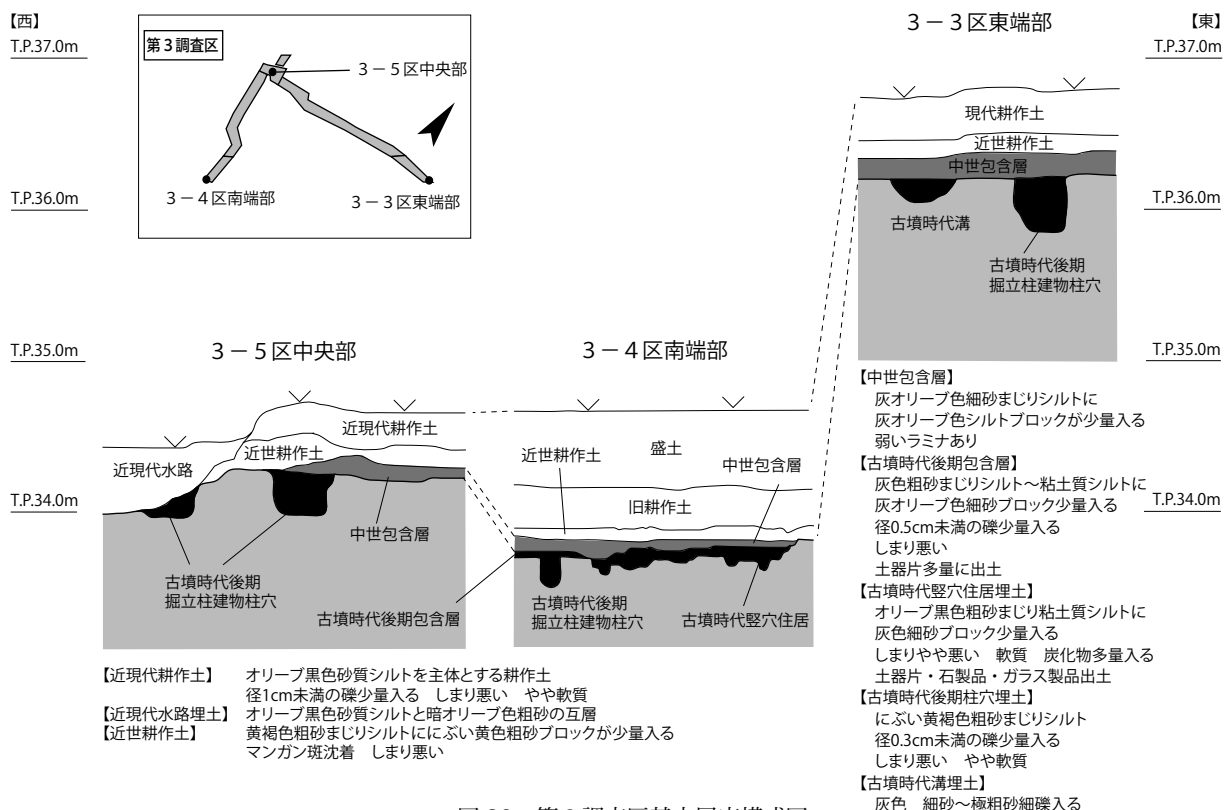
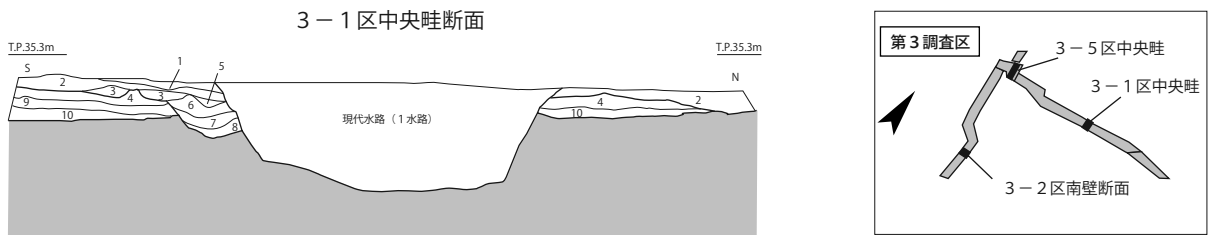


図 30 第 3 調査区基本層序模式図

西側水路の上手にあたる3-4区と、水路の流末である3-5区が低い(図30参照)。遺構面の高さを比べると、水路上手にあたる3-4区のほうが下手にあたる3-5区よりも40cm程度低い状況にある。この比高を補うため、3-4区付近は近現代において大きく盛土がなされた。これが、3-4区の遺構面を良好に保つ要因となった。

これに対して、素掘り水路の下面にあたる3-1区及び3-3区は、遺構面の標高が高く、その残存状態は悪い。素掘り水路は何度も掘削が繰り返されており、さらにその下には、水路の前身となる中世末期の水路が設けられていたようである(図31上段参照)。このため古墳時代の遺構面は、重ねて攪乱を受ける状況下にあった。

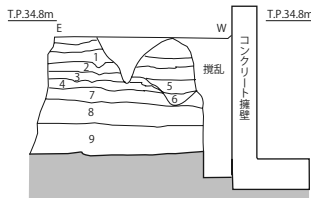
基本層序 第3調査区では、盛土および近現代耕作土の下に近世耕作土と中世包含層が堆積し、3-4区の一部にのみ、古墳時代後期包含層が存在する。中世包含層は基本的に耕作土であり、ブロック土を



【3-1区中央畦断面】

- 1) にぶい黄褐色 10YR4/3 細粒砂~中粒砂まじり細粒砂
- 2) にぶい黄褐色 10YR5/3 粗粒砂まじり中粒砂
1)層に似るがそれより粘性あり
- 3) 暗灰黄色 2.5Y4/2 中粒砂まじり細粒砂
地山の黄褐色シルトブロック僅かに入る
- 4) 黄褐色 2.5Y5/4 中粒砂~粗粒砂まじりシルト (中世遺構面基盤層)
- 5) 黄褐色 2.5Y5/3 細粒砂まじり中粒砂
- 6) 暗灰黄色 2.5Y5/2 中粒砂~粗粒砂まじり細砂 4)層に近似 やや粘性弱い (水路前身の溝埋土)
- 7) 暗灰黄色 2.5Y5/2 細粒砂まじり中粒砂 ラミナあり (水路前身の溝埋土)
- 8) 暗灰黄色 2.5Y5/2 細粒砂 (水路前身の溝埋土)
- 9) 黄褐色 2.5Y5/3 細粒砂まじりシルト 4)層に近似 より粘性強い (中世包含層)
- 10) 灰黄褐色 10YR4/2 細粒砂まじりシルト 径0.5cm未満の礫入る マンガン斑紋あり (中世包含層)

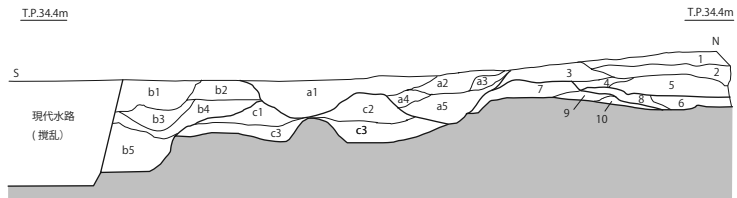
3-2区南壁断面



【3-2区南壁断面】

- 1) にぶい黄褐色 10YR5/3 細粒砂まじり
中粒砂~粗粒砂 径0.2cm大の円礫多量入る
- 2) 黄褐色 2.5Y5/3 中粒砂まじり細粒砂
- 3) 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂礫まじり中粒砂
径0.5cm未満の円礫多量入る
- 4) 暗灰黄色 2.5Y5/2 中粒砂
- 5) 黄灰色 2.5Y5/1 中粒砂まじり細粒砂
- 6) 灰オリーブ色 5Y5/2 中粒砂まじり細粒砂
- 7) 暗灰黄色 2.5Y5/2 中粒砂まじり細粒砂
- 8) にぶい黄褐色 10YR4/3 粗粒砂まじりシルト
径0.5cm未満の花崗岩礫入る
- 9) 灰黄褐色 10YR4/2 細粒砂まじり粗粒砂
炭化物僅かに入る

3-5区中央畦断面



【3-5区中央畦断面】

- a1) オリーブ黒色 5Y3/2 粘土質シルト (近現代水路埋土)
- a2) オリーブ黒色 5Y3/2 粘質シルト 暗オリーブ色 5Y4/4 粗砂が筋状に入る (近現代水路埋土)
- a3) 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじり粘土質シルト (近現代水路埋土)
- a4) オリーブ黒色 5Y3/1 微砂~シルト (近現代水路埋土)
- a5) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじりシルト 灰色 5Y4/1 細砂 ラミナ状に入る (近現代水路埋土)
- b1) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじりシルト (近現代水路埋土)
- b2) 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじりシルト (近現代水路埋土)
- b3) オリーブ黒色 5Y3/2 砂質シルト 灰色 5Y5/1 細砂ブロック 30%程度入る (近現代水路埋土)
- b4) 灰色 5Y4/1 粗砂まじりシルト (近現代水路埋土)
- b5) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじりシルト (近現代水路埋土)
- c1) 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじりシルト しまり悪い 鉄分沈着 (近世水路埋土)
- c2) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじりシルトと 暗灰黄色~黄褐色 5Y5/2-5/6 粗砂~細砂の互層
しまり悪い ラミナあり 鉄分沈着 (近世水路埋土)
- c3) 灰色 5Y4/1 粗砂まじりシルトと 灰色 5Y4/1 粘土の互層 ラミナあり
暗灰黄色~黄褐色 5Y5/2-5/6 粗砂の流入あり (近世水路埋土)
- 1) 黄褐色 10YR5/6 粗砂まじり砂質シルト
にぶい黄褐色 10YR6/4 細砂ブロック 30%程度入る しまり悪い 鉄分沈着 (近世耕作土)
- 2) 暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂まじりシルト しまり悪い 鉄分沈着 細かいマンガン粒入る (近世耕作土)
- 3) 黄褐色 2.5Y5/3 粗砂まじりシルト しまり悪い 鉄分沈着 マンガン粒入る
にぶい黄色 2.5Y6/3 細砂ブロック 20%入る (近世耕作土)
- 4) 暗灰黄色 2.5Y5/2 シルトまじり細砂~粗砂 僅かに鉄分沈着 (近世溝埋土)
- 5) 暗灰黄色 2.5Y5/2 粗砂まじりシルト 径0.5cm未満の礫少量入る しまり悪い 鉄分沈着
炭化物少量入る (近世耕作土)
- 6) 灰オリーブ色 5Y5/2 細砂まじりシルト 弱いラミナあり 鉄分沈着
暗灰黄色 2.5Y5/2 シルトブロック 10%程度入る (中世包含層)
- 7) オリーブ褐色 2.5Y4/3 細砂まじりシルト 径0.5cm未満の礫少量入る しまり悪い 鉄分沈着
マンガン粒僅かに入る (中世水田畦)
- 8) 7)層に近似 やや砂質 (中世包含層)
- 9) オリーブ褐色 2.5Y4/6 細砂まじり粘土質シルト
オリーブ褐色 2.5Y4/6 粘土ブロック 10%程度入る マンガン粒少量入る (中世包含層)
- 10) 9)層と地山の混合層 (中世包含層)
- 地山) 黄褐色 10YR5/6 粗砂まじり粘土質シルト~粘土 径0.5cm未満の礫少量入る やや軟質

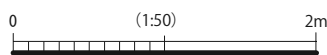


図31 第3調査区壁・畦断面図

含む灰オリーブ色細砂まじりシルトを主体とする。古墳時代包含層は、この中世期の開墾によって、削平されたとみられる。中世包含層には、古墳時代の遺物も多数含まれている。

これらの状況により、古墳時代の包含層は3－4区の一部にのみ残存が認められるほかは、すべて遺構埋土として存在する。オリーブ黒色粗砂まじりシルトやにぶい黄褐色粗砂まじりシルトを主体としており、土師器や須恵器といった土器類を多く包含する。中世包含層および古墳時代から古代包含層を除去した段階で、地山が露呈した。主要遺構面は、地山上面に相当する。

2. 検出遺構

第3調査区では、竪穴住居、掘立柱建物、ピット群、溝、土坑を検出した(図32)。周辺は、既往の調査において、古墳時代中期から古代初頭の遺構群が稠密に確認された区域にあたる。今回の調査では、既往の調査において確認した遺構に連続するもののほか、竪穴住居7棟、掘立柱建物2棟を新たに検出した。また、連続することが確認された遺構のうち、先後関係等が判明したものや柱列を復元できたものがある。以下、個別に記述する。

99 竪穴住居(図40) 3－2区において新たに検出した竪穴住居である。残存する一辺は、3.2 mを測る。削平を受けているため、さらに東側へ広がる可能性がある。遺構内に残存する埋土は20cm程度である。

埋土は、暗黄灰色粗砂まじり細粒砂を主体とし、底面付近の堆積土には炭化物の細片が含まれている。遺構内からは、細かい平行タタキを外面に施した須恵器甕、須恵器杯身、土師器甕、土師器高杯が出土した。遺構の時期はおおむね6世紀後半頃と考えられる。

105 竪穴住居〔住居28〕(図41) 3－1区西半部北辺において検出した遺構である。遺構の平面形状は、一辺5.6 mを測る隅丸方形に復元できる。既往の調査では北半部を検出し、北辺に竈跡を確認している。埋土は暗灰黄色粗砂まじりシルトであり、地山に由来するブロック土を少量含む。遺構の残存深度は20cm程度、床面は東辺2 m程度の範囲がわずかに高く、段を作るようである。

東辺の壁溝外側には、方形の角をもつ落込みがあり、建て替えがおこなわれた可能性がある。遺構埋土からは、土師器甕、須恵器甕のほか、弥生土器の底部破片が出土した。遺構の時期は6世紀である。

117・118 竪穴住居(図42) 3－1区において新たに検出した竪穴住居である。117 竪穴住居の南側に118 竪穴住居が重なって確認されたことにより、住居の建て替えが想定される。

118 竪穴住居は一辺4.5m程度、117 竪穴住居は、3.8 m以上の規模をもつ。118 竪穴住居は、西辺より2.2 m程度の範囲がわずかに高く、ベッド状の遺構を備えた住居であった可能性がある。埋土は暗灰黄色から灰黄色粗砂まじりシルトを主体とし、上位を黒褐色を呈する古墳時代包含層が覆う。底面付近の埋土の一部には、炭化物が含まれていた。

118 竪穴住居の埋土からは、土師器甕、須恵器甕の破片が出土した。ともに6世紀の製品である。攪乱が著しく、柱穴や竈の痕跡は確認できなかった。

120 竪穴住居〔住居45〕(図43) 既往の調査において、北半部が確認されていた遺構である。北辺には突出した竈をもつ。今回の調査では、これに続く南半部を検出した。

平面形状は、一辺6.0 mを測る方形を呈する。残存する遺構の深度は、18cm程度である。埋土はにぶい黄褐色を呈する粗砂まじり細粒砂であり、地山に由来するブロック土を含む。東辺部では、ほぼ同形状の遺構が重なるようであり、建て替えが行われたと考えられる。東西の周溝が良好に残存しており、柱穴も確認することができた。既往の調査成果を含めると、4基の柱穴をもつ住居であったことがわか

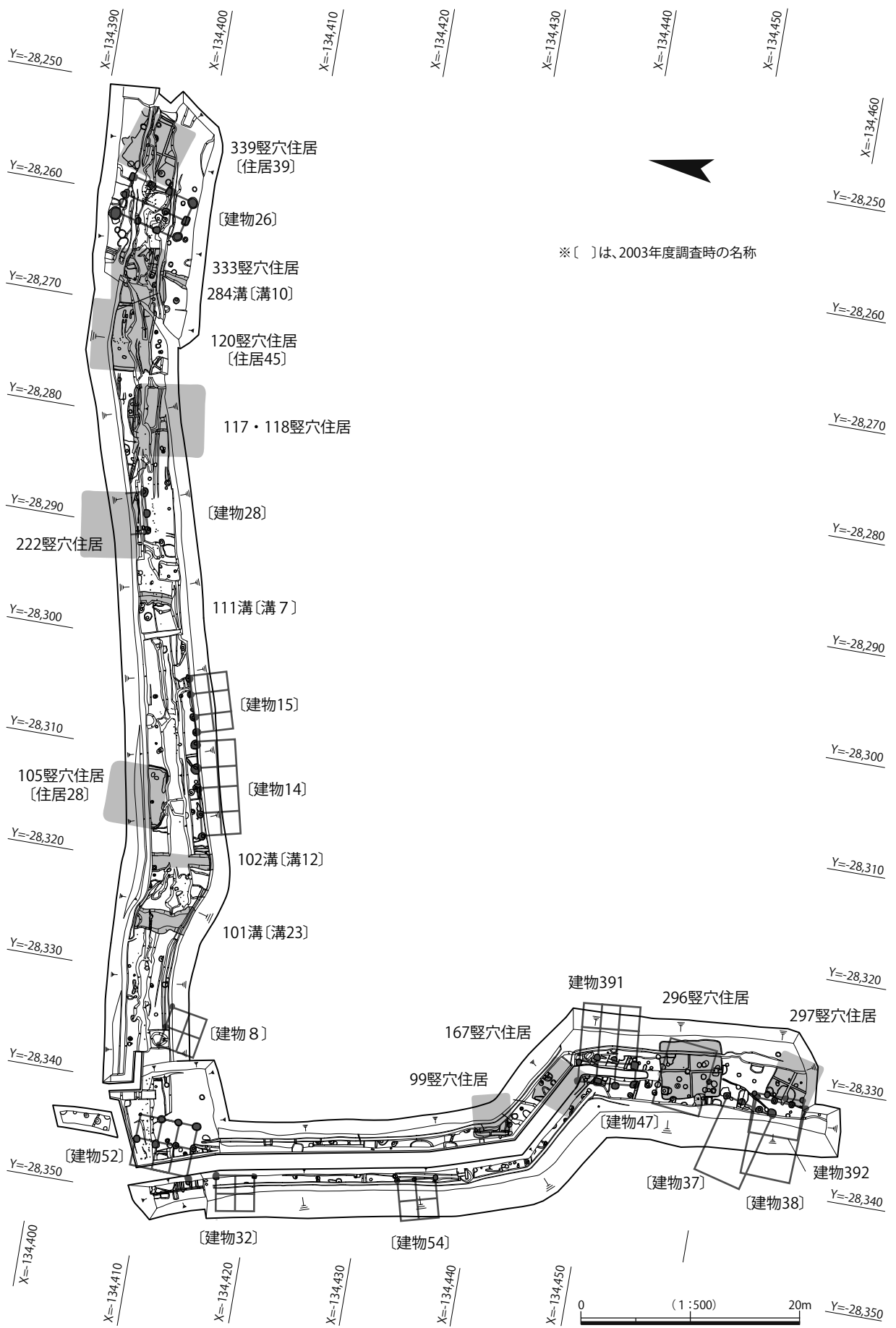


図32 第3調査区遺構面全体図（古墳時代後期～古代初頭）

る。遺構内からは、土師器甕と須恵器杯身・甕の小片が出土した。

167 竪穴住居 (図 44) 3-2 区において新たに発見した竪穴住居である。北西辺の一角のみの検出であるが、竈跡を確認できたことにより、一辺 4.8 m 程度の隅丸方形を呈する平面形状をもつ住居であったことが推測できる。

竈跡 (268 土坑) は、北西辺壁溝に近い地点で検出した。埋土はにぶい黄褐色粗砂まじりシルトであり、地山に由来するブロック土を含む。竈跡付近は被熱による土壌の変色が顕著であり、炭化物や焼土が散在する。竈跡の掘削を進めたところ、下面において土師器甕の破片がまとまって出土した。また、この住居に関連するとみられる柱穴 (219 ピット) を 1 点検出した。

295 竪穴住居 (図 45) 3-4 区で新たに検出した遺構である。既往の調査では、西側周溝の一辺が検出されていたものの、落込みの肩部として報告されていた。これが今回の調査において、竈をもつ竪穴住居であることが明らかとなった。

住居の平面形状は、一辺 5.5 m を測る方形である。削平を受けたため、遺構埋土の残存堆積は 5 cm 程度と薄い。柱穴は既往の調査とあわせて 4 基を確認することができた (図 45・46)。ともに直径 20cm 前後の柱痕跡をもつ。

北壁と西壁には炭化物の集積があり、この 2 箇所に竈を備えていた可能性がある。このうち、西壁の竈跡が良好に残存することから、北から西へ竈の作り替えをおこなった可能性がある。西側の竈は大きく住居外へと突出する。竈の埋土内には、土師器甕や高杯などの土器片のほか、炭化物や骨片の集積が認められた。

297 竪穴住居 (図 46) 297 竪穴住居は、3-4 区南端において検出した遺構である。南半部が調査区外へと続いたため、竪穴全体の規模は確認できていないが、竈跡の位置から、一辺 4 m 程度を測る方形プランをもつものと推測される。埋土は灰黄色粗砂まじりシルトであり、地山に由来するブロック土を若干含む。埋土からは、須恵器杯身、土師器甕等が出土した (図 62)。

竈は西壁に備えられており、わずかに突出する。周辺には黒色粘土や炭化物の集積があり、これを採取して洗浄したところ、炭化した植物遺体とともに滑石製白玉 2 点と水色を呈するガラス製小玉 1 点を検出した。

303 竪穴住居 (図 47) 3-3 区において新たに検出した竪穴住居である。284 溝に切られているため残存状態は悪いが、東壁付近に土師器高杯 (図 62-14) を逆位置に据えた竈跡らしき施設をもつ。埋土は暗灰黄色粗砂まじりシルトであり、地山に由来するブロック土を含む。埋土からは、土師器高杯のほか、土師器甕の破片が出土した。

〔建物 14〕 (図 48) 3-1 区中央南辺において検出した柱列である。既往の調査成果と連続して、4 間×3 間の規模をもつ掘立柱建物となる。柱間の長さは 1.8 ~ 2.2 m 程度である。

建物の主軸は方位北に対して 70 度東に振る。建物の長辺は 8.4 m、短辺は 3.7 m、床面積は 31.08 m² を測る。柱穴は、直径 60 ~ 90cm を測る円形ないし隅丸方形の平面形状をもつ。柱痕は、直径 18cm 前後である。柱穴埋土からは、須恵器甕の小片が出土した。

〔建物 15〕 (図 49 上段) 建物 14 の東側において検出した建物である。既往の調査成果と連続して 3 間×2 間の建物となる。柱間の長さは 1.4 ~ 2.0 m を測り、長辺中央の柱間がやや広く作られている。

建物の主軸は方位北に対して東へ 73 度振る。建物の長辺は 5.00 m、短辺は 3.00 m、床面積は 15.00m² を測る。柱穴の規模は〔建物 14〕に比べて小さく、直径 50 ~ 60cm 程度の円形ないし隅丸方



図 33 第 3 調査区遺構面平面図 (1)

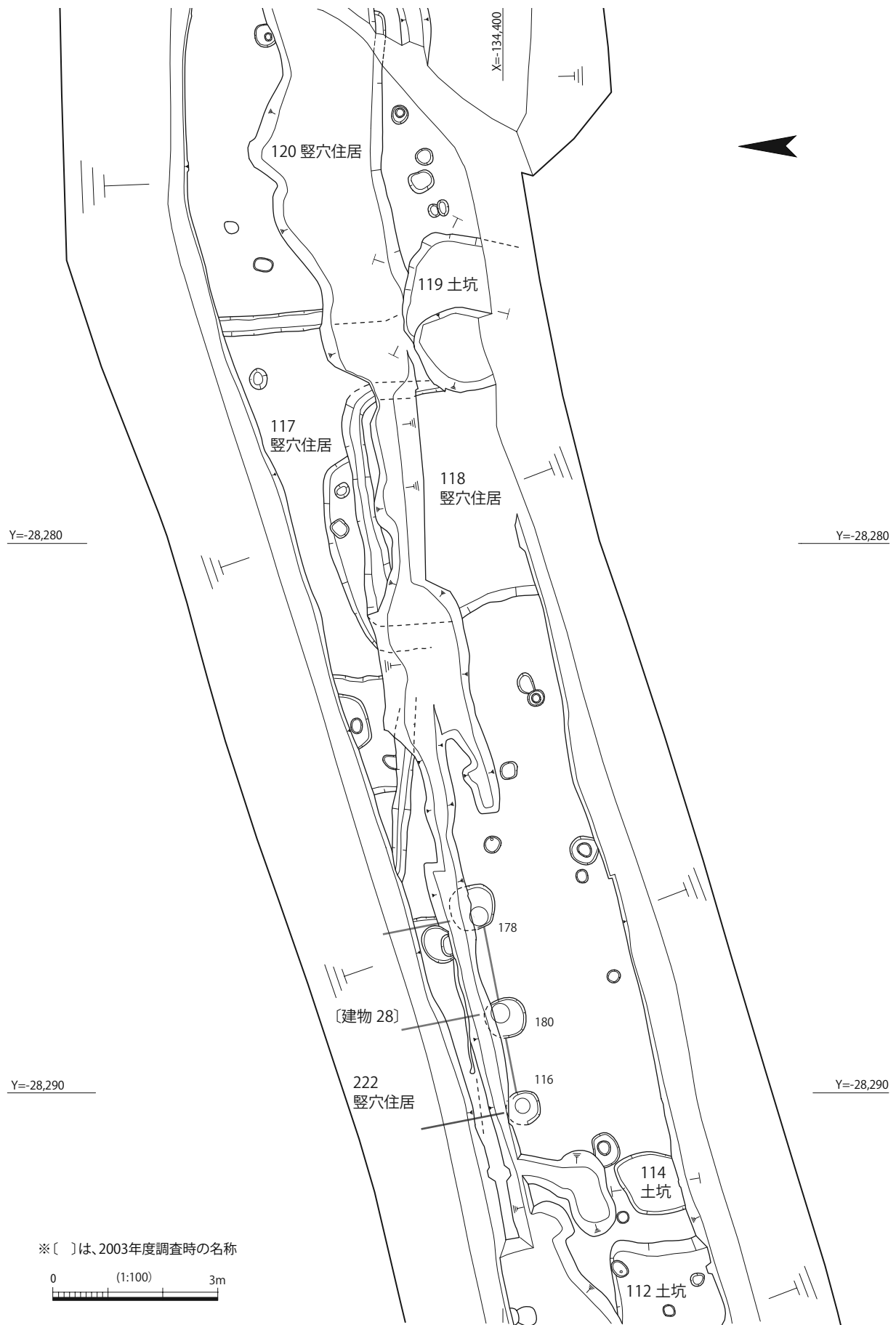


図 34 第 3 調査区遺構面平面図 (2)

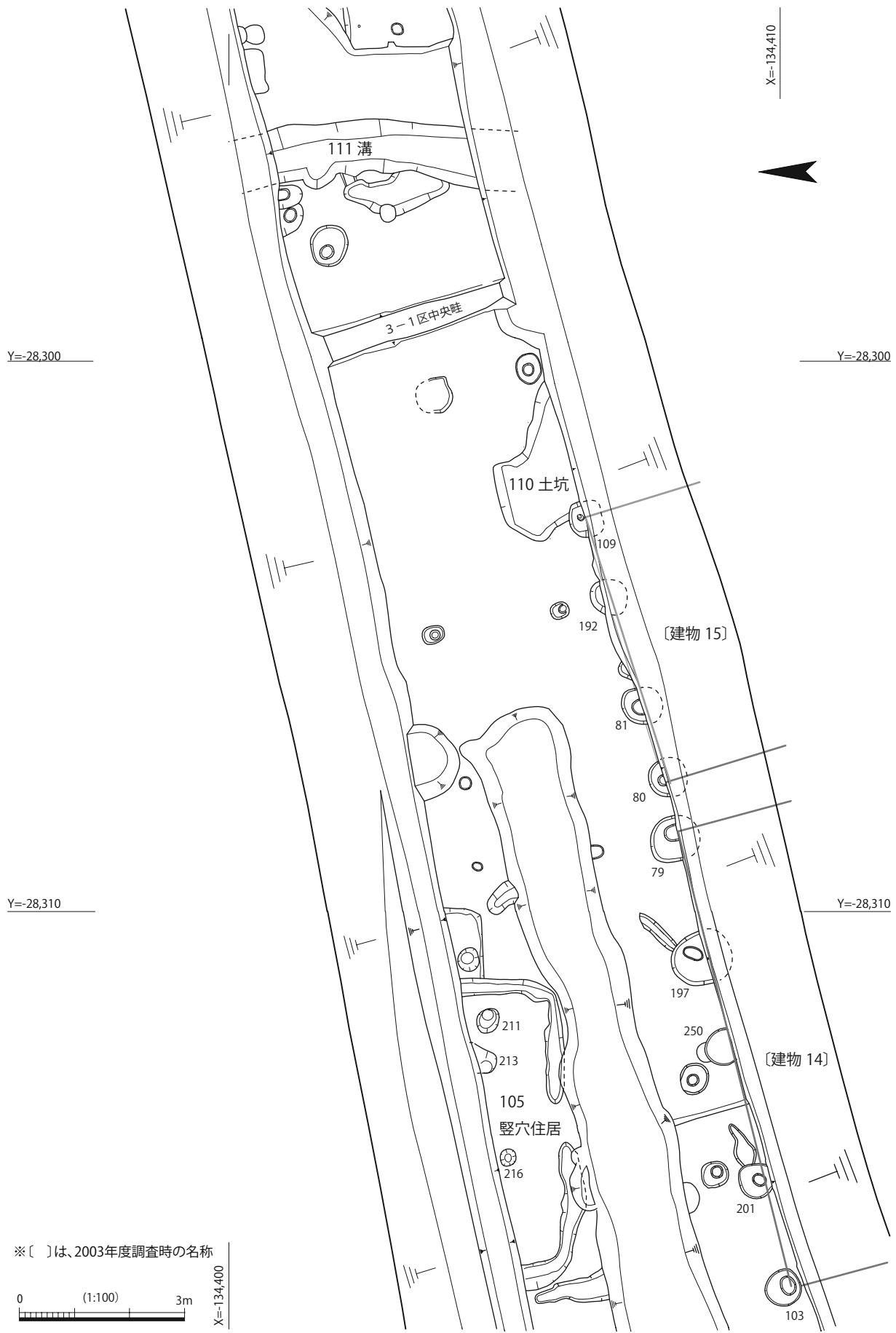


図 35 第3調査区遺構面平面図 (3)

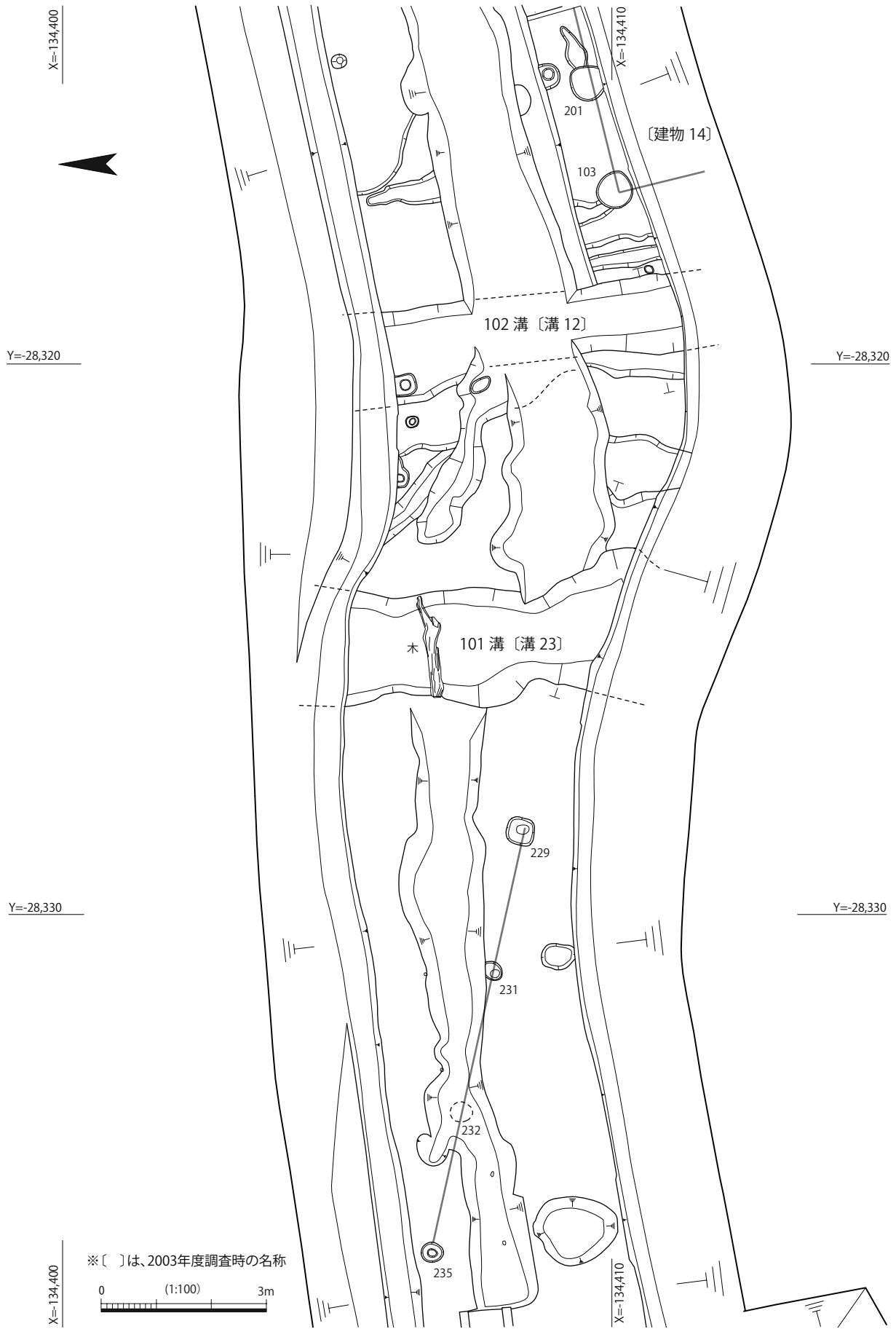
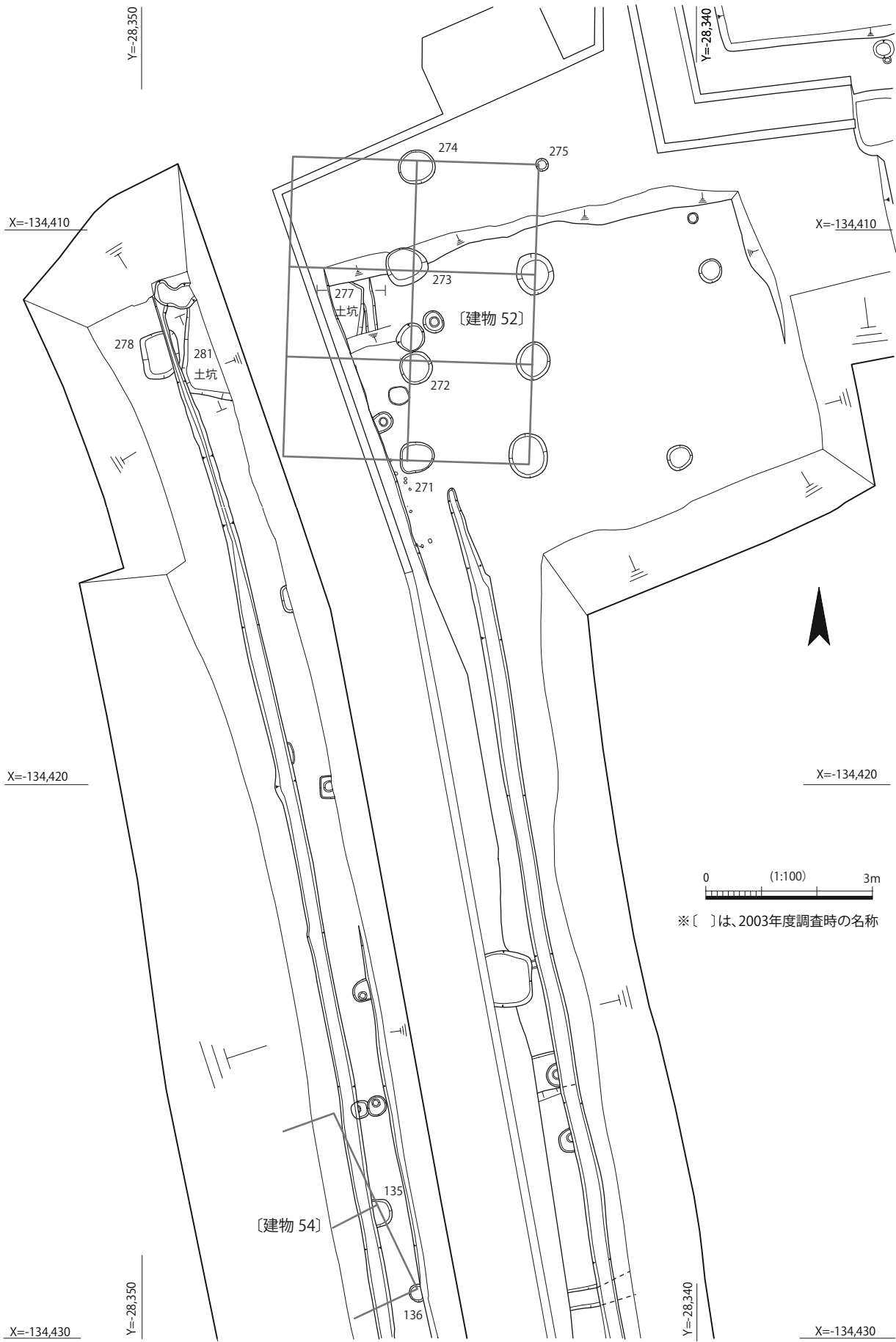


図 36 第 3 調査区遺構面平面図 (4)



※〔 〕は、2003年度調査時の名称

図 37 第3調査区遺構面平面図 (5)

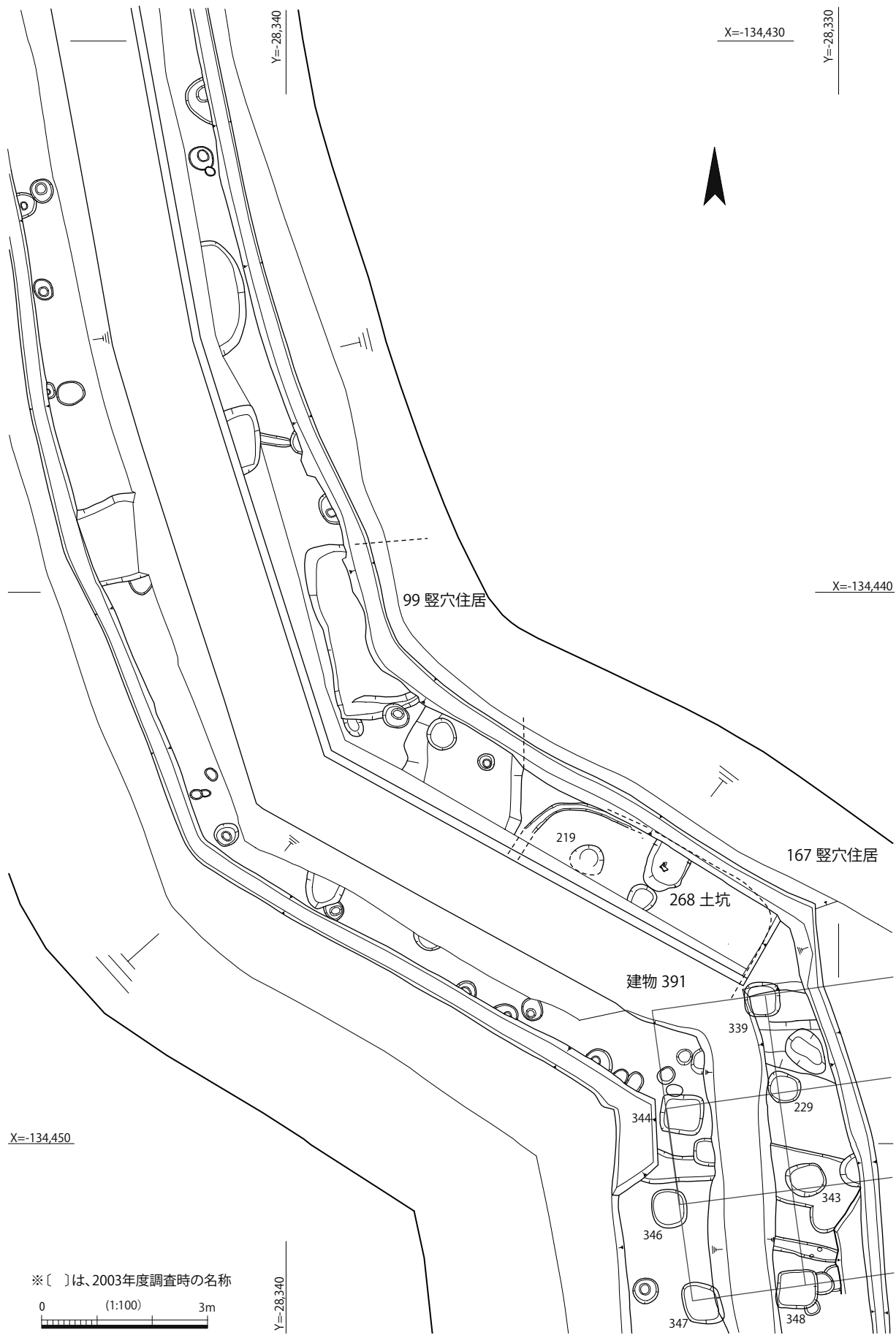


図 38 第 3 調査区遺構面平面図 (6)

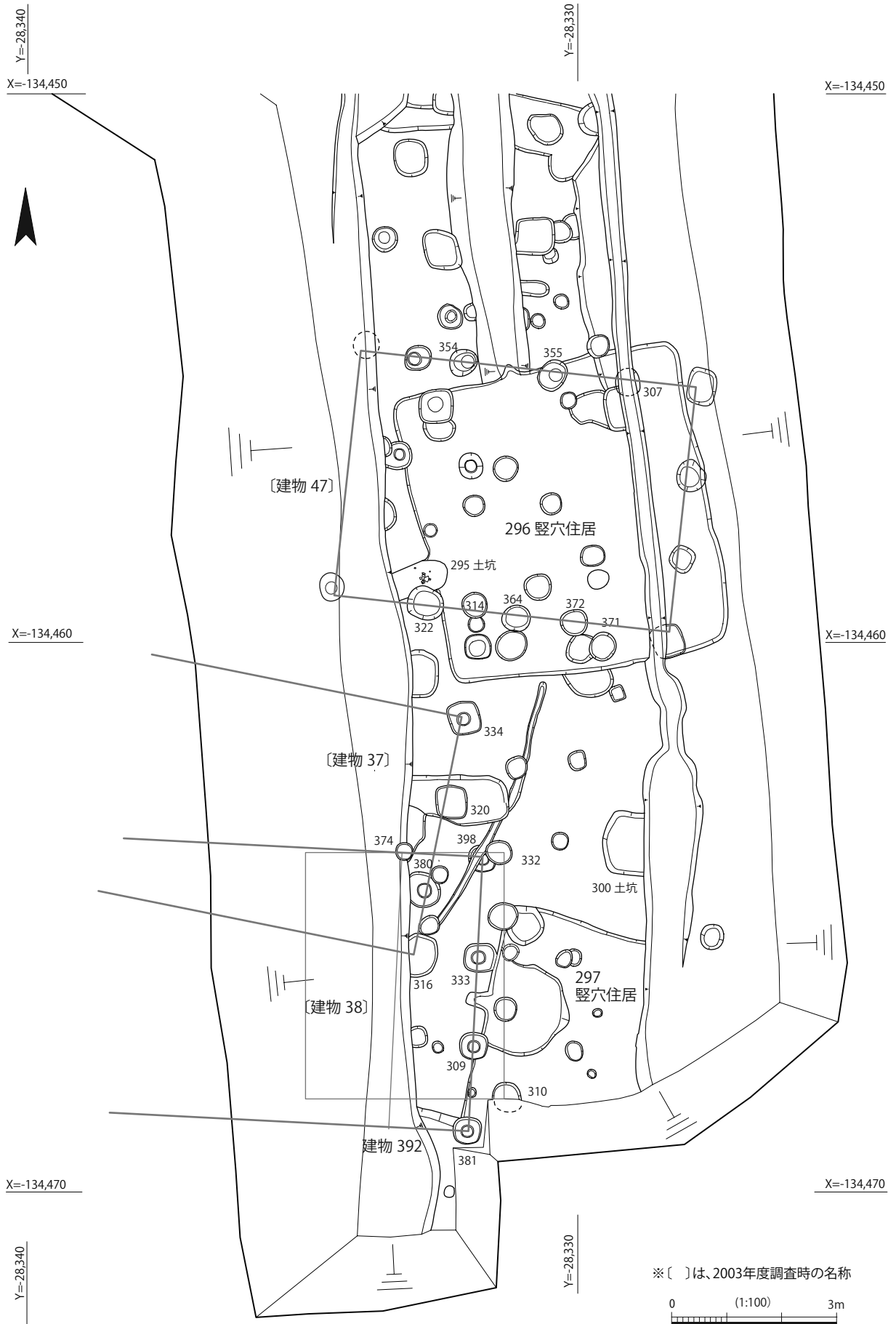


図 39 第 3 調査区遺構面平面図 (7)

形の平面形を呈する。柱痕は、20cm 未満のものが多い。

〔建物 26〕（図 49 下段） 3－3 区において検出した掘立柱建物である。3 間×2 間の柱間をもつ総柱建物であり、方位北より東へ 10 度振った方向を主軸とする。柱間は 1.92～1.95 m、建物の長辺は 5.80m、短辺は 3.60 m、床面積は 20.88㎡である。柱穴の規模は直径 60cm 程度のもので多く、円形もしくは隅丸方形を呈する。残存する柱痕は直径 20cm 程度である。

この建物は、既往の調査では、〔26－1〕〔26－2〕〔26－3〕を通した辺を長軸とする掘立柱建物として想定されていた。しかし、今回の調査によって、北側へ柱と続く柱列が検出され、さらに、既往報告の〔26－4〕〔26－5〕〔26－6〕とも連続することが明らかとなった。

攪乱および削平を著しく受けており、柱穴そのものの残存状態は良くないが、灰オリーブ色を呈する地山上面に黒褐色シルトを埋土とする柱痕は目立つため、検出することが可能であった。285 ピットの埋土からは、土師器高杯、須恵器甕の破片が出土した。

〔建物 28〕（図 50 上段） 3－1 区東半部で検出した柱列である。既往の調査では、2 間×2 間の総柱建物として復元されていたが、今回の柱列検出により、3 間×2 間の総柱建物であることが明らかとなった。

柱間の長さは 1.8～1.92 m を測る。主軸は方位北より西へ 10 度振った方向にもつ。建物の長辺は 5.6 m、短辺は 3.6 m、床面積は 20.16㎡を測る。柱穴は直径 40～80cm の円形を呈する。柱痕は、直径 20cm を下回るものが多い。

〔建物 37〕（図 50 下段） 3－4 区において検出した建物である。既往の調査において確認されている柱穴群と連続し、4 間×3 間を数える建物として復元することができた。建物の主軸は東西方向、長辺は 7.2 m、短辺は 4.6 m、床面積は 33.12㎡を測る。柱穴の平面形状は 50～60cm の円形、深度は 60cm 程度である。柱穴の埋土は、古墳時代包含層であるオリーブ黒色細砂まじり粘土質シルトを主体とする。柱痕は、直径 20cm を超えるものがある。埋土からは、土師器甕や高杯、須恵器甕の細片が出土した。

99 竪穴住居

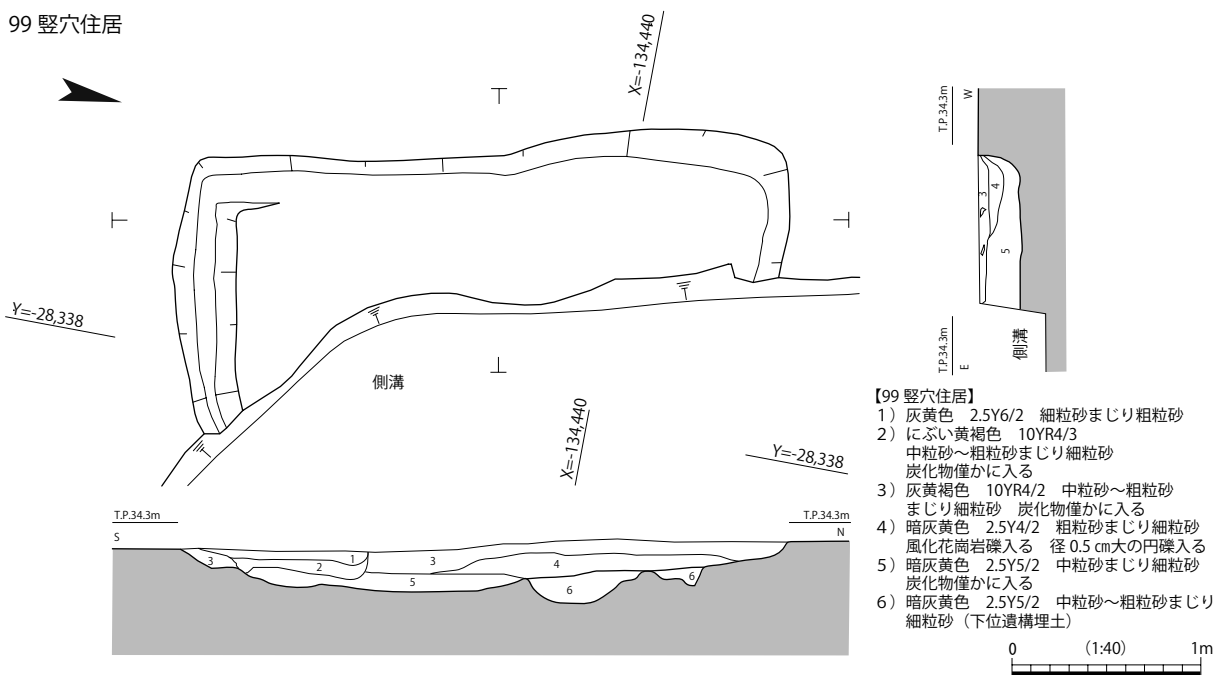
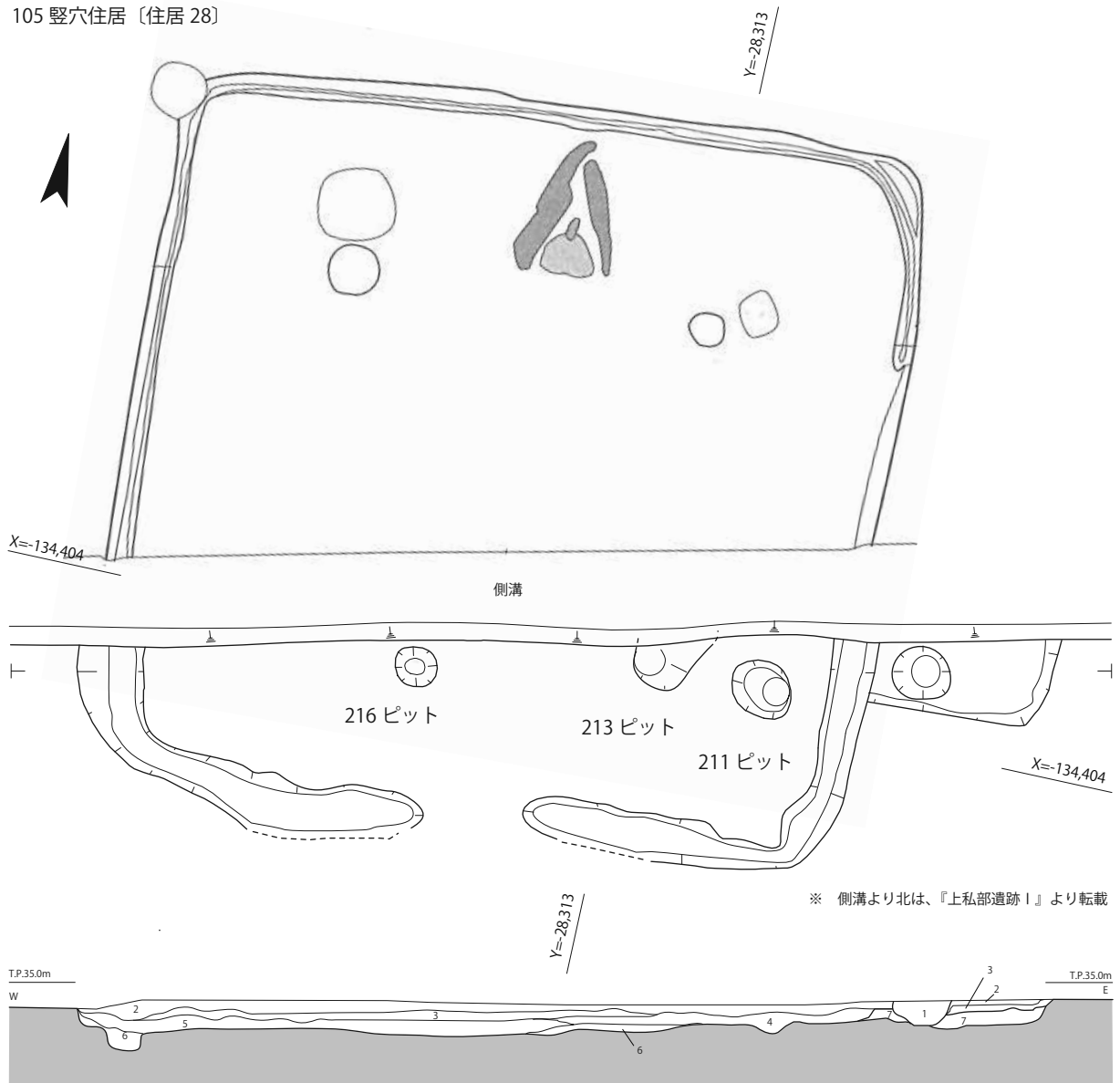


図 40 99 竪穴住居平面・断面図

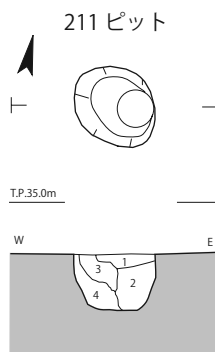
105 竪穴住居〔住居 28〕



【105 竪穴住居〔住居 28〕】

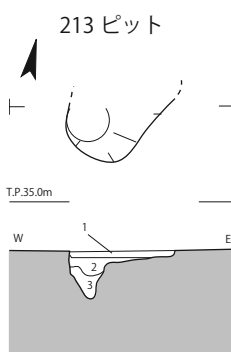
- 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂まじりシルト しまり悪い 鉄分沈着 炭化物・土器片入る
- 2) 黒褐色 2.5Y3/2 細砂まじりシルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 鉄分沈着
- 3) 黒褐色 2.5Y3/3 粗砂まじり粘土質シルトに 黄褐色 2.5Y5/3 シルトブロック 20% 入る やや軟質
- 4) 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルトに 黒褐色 2.5Y3/1 粘土ブロック 10% 程度入る しまり悪い やや軟質 鉄分沈着
- 5) 黒褐色 2.5Y3/2 中粒砂まじり細粒砂
- 6) 4) 層に近似 やや砂質強い
- 7) 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルトに オリーブ褐色 2.5Y4/4 粘土質シルト (地山) ブロック 30% 程度入る

※ 側溝より北は、『上私部遺跡 I』より転載



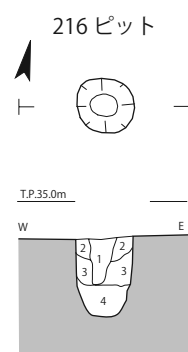
【211 ピット】

- 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2 中粒砂まじり細粒砂 僅かに粗粒砂入る
- 2) オリーブ褐色 2.5Y4/3 中粒砂まじり細粒砂 1) 層に近似 より中粒砂多量入る
- 3) 黒褐色 2.5Y3/2 中粒砂まじり細粒砂 1) 層に近似 より粘性強い
- 4) にぶい黄褐色 10YR4/3 中粒砂まじり細粒砂



【213 ピット】

- 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂まじりシルト しまり悪い
- 2) 黒褐色 2.5Y3/2 細砂まじりシルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い
- 3) 黒褐色 2.5Y3/3 粗砂まじり 粘土質シルト



【216 ピット】

- 1) 黒褐色 2.5Y3/2 中粒砂まじり細粒砂
- 2) オリーブ褐色 2.5Y4/3 中粒砂まじり細粒砂
- 3) 黒褐色 2.5Y3/2 中粒砂まじり細粒砂
- 4) 暗灰黄色 2.5Y4/2 中粒砂～粗粒砂 まじり細粒砂 地山に近似 より粘性あり

図 41 105 竪穴住居平面・断面図

〔建物 38〕（図 51 上段） 3－4 区において検出した建物である。既往の調査において確認されている柱穴群と連続し、5 間×3 間を数える建物として復元できる。建物の主軸は東西方向、長辺は 8.70 m、短辺は 5.00 m、床面積は 43.50㎡を測る。柱穴の平面形状は 50～60cm の円形、深度は 60cm 程度で、柱痕は 20～25cm 程度である。集落の中では最大級の床面積をもつ大型建物に類別される。〔建物 37〕とは、若干方向軸を違えて建てられており、同じ性格をもつ建物の建て替えであるとみることできる。

〔建物 47〕（図 51 下段） 3－4 区において検出した建物である。東辺の柱穴列を既往の調査によって検出する。今回の調査では連続する柱列を確認し、4 間×3 間の建物であったと推測する。柱間の長さは 1.00～1.40 m とばらつきがある。建物は主軸を東西方向にとる。建物の規模は長辺 6.20 m、短辺 4.40 m、床面積は 27.28㎡を測る。柱穴は直径 40cm 前後の円形または隅丸方形を呈する。

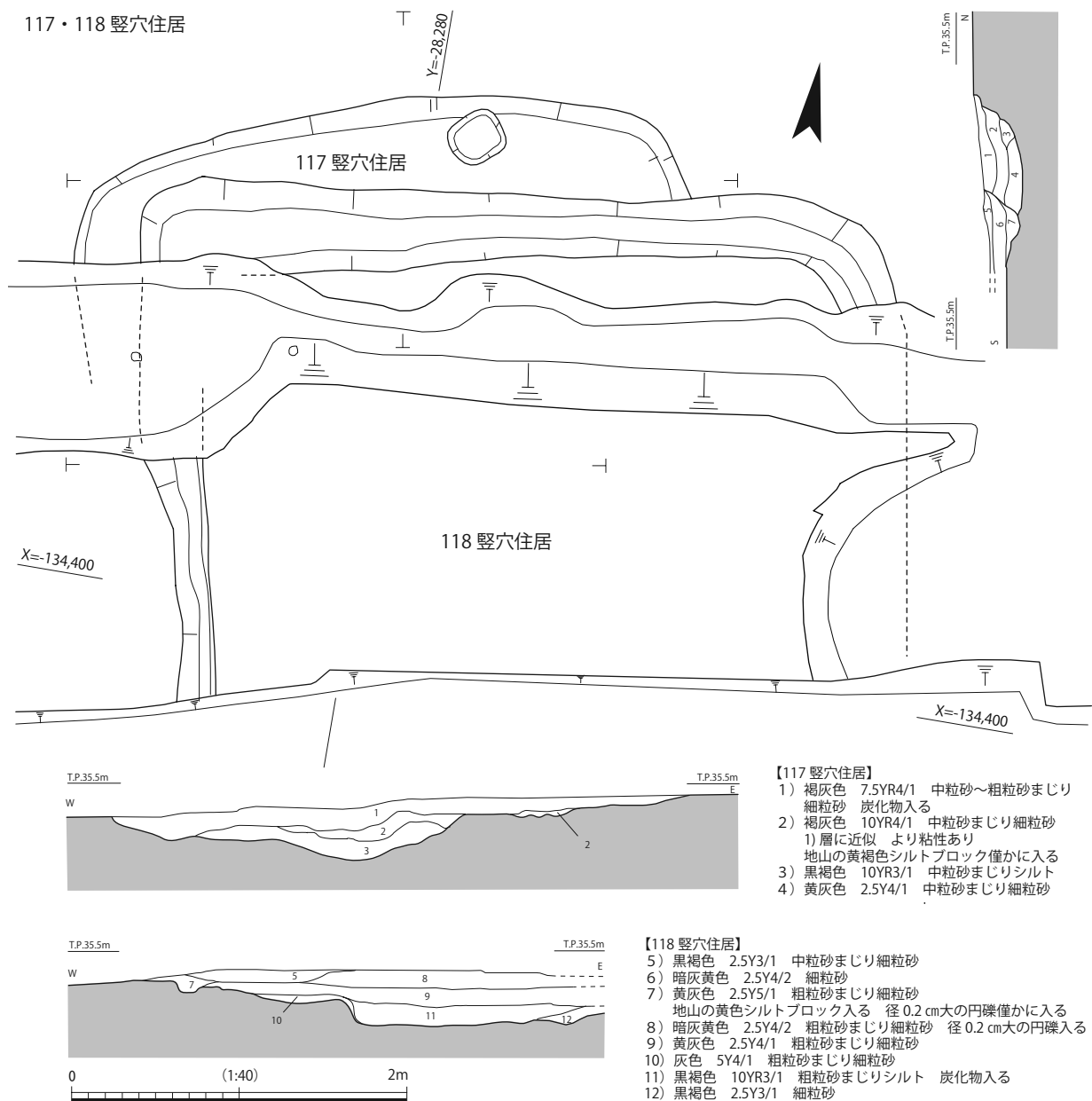
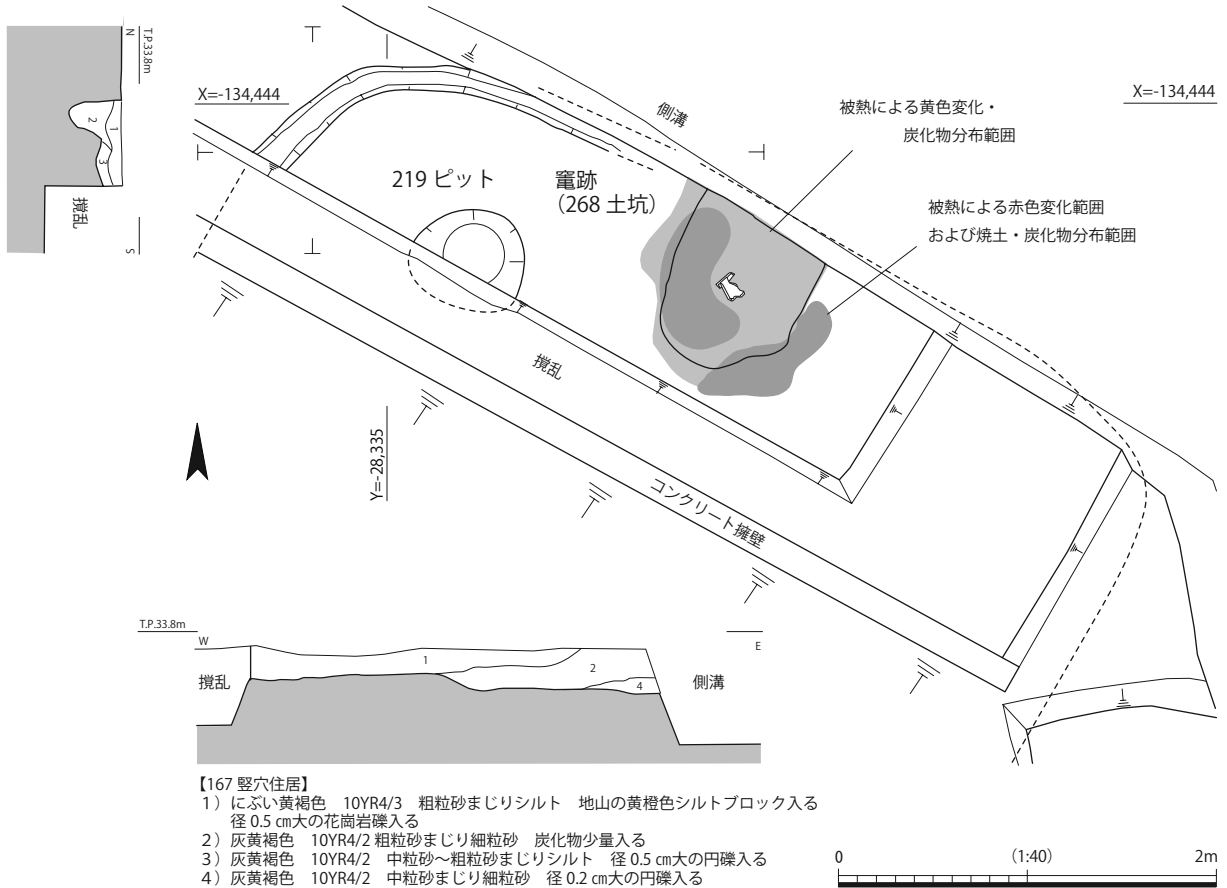


図 42 117・118 竪穴住居平面・断面図

〔建物 52〕（図 52 上段） 3－5 区において検出した掘立柱建物である。既往の調査では、3 間×1 間以上の掘立柱建物として復元されていたが、今回の調査によって、3 間×2 間以上の総柱建物であることが明らかとなった。柱間の長さは 1.70～2.00 m を測る。建物の主軸は、ほぼ方位北を指す。建物の長辺は 5.20 m、短辺は 4.40 m 程度であると推測される。柱穴の平面形状は、直径 50～80cm 程度の円形である。柱痕は 18～22cm 程度である。

〔建物 54〕（図 52 下段） 3－2 区の北半部西辺に位置する掘立柱建物である。既往の調査成果に加え、167 竪穴住居



167 竪穴住居竈（268 土坑）

（検出状況）

（下層遺物出土状況）

219 ピット

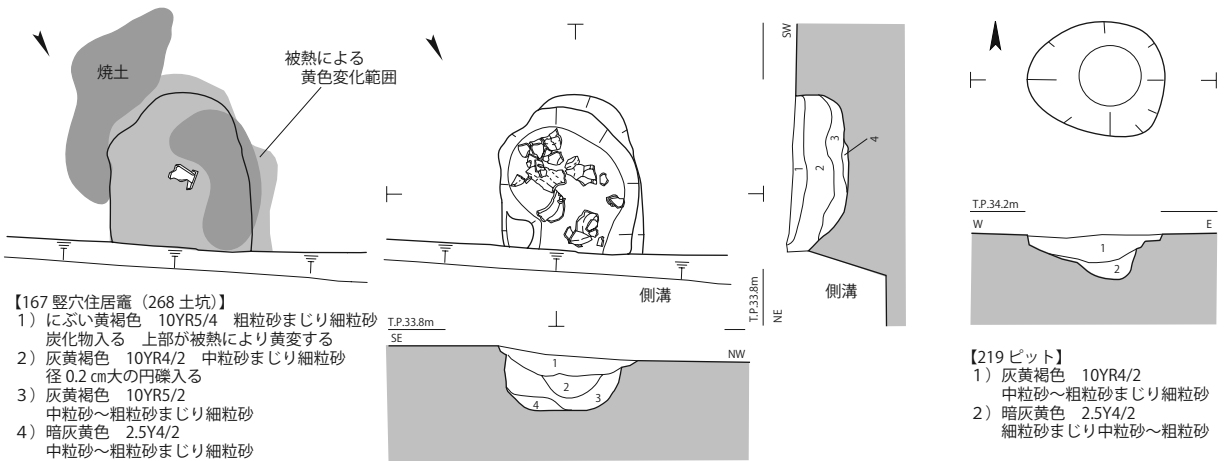
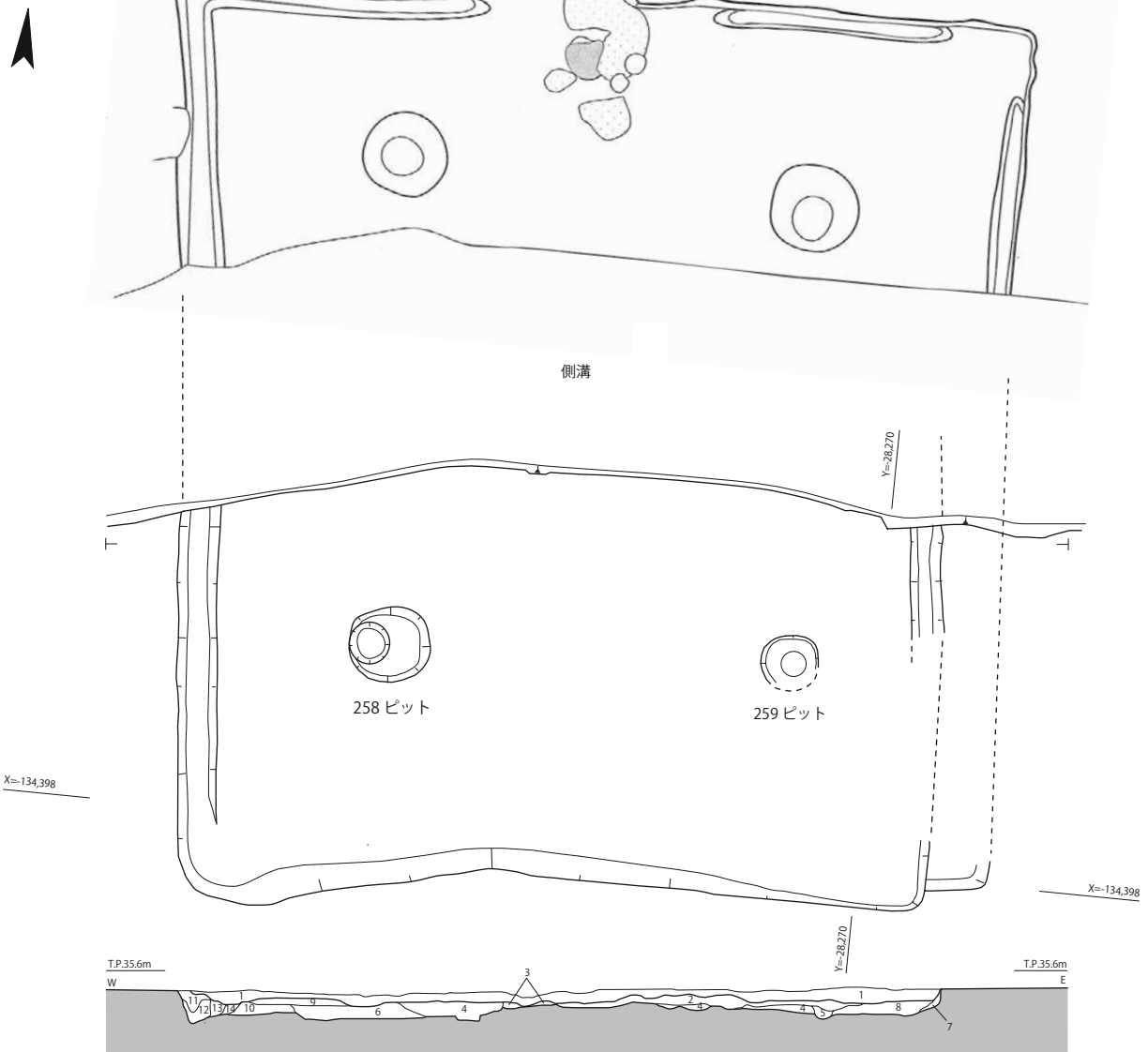


図 43 167 竪穴住居平面・断面図

120 竪穴住居〔住居 45〕

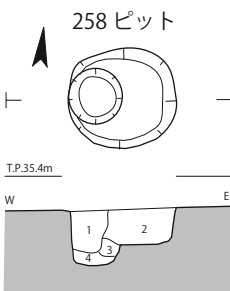
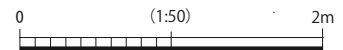
※ 側溝より北は、『上私部遺跡1』より転写



【120 竪穴住居 (竪穴住居 45)】

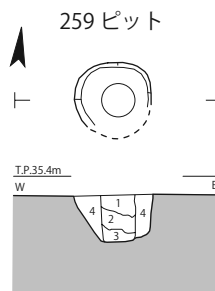
- 1) 黒褐色 2.5Y3/2 粗粒砂まじり細粒砂 径 0.5 cm未満の円礫入る
- 2) 黒褐色 2.5Y3/ 粗粒砂まじり細粒砂 地山の青灰色砂質土ブロック入る
- 3) 黒褐色 10YR3/1 細粒砂まじりシルト
- 4) 黒褐色 10YR3/2 中粒砂まじり細粒砂 地山の黄褐色砂質土ブロック 30% 程度入る
- 5) 褐灰色 10YR4/1 中粒砂～粗粒砂まじり細粒砂
- 6) にぶい黄褐色 10YR4/3 中粒砂～粗粒砂まじり細粒砂
- 4) 層に似るがそれより地山ブロックの径が小さい
- 7) 黄灰色 2.5Y4/1 微粒砂まじり細粒砂 径 0.2 cm大の円礫入る

- 8) にぶい黄色 2.5Y6/3 中粒砂～粗粒砂まじり微粒砂 管状斑結あり
- 9) にぶい黄褐色 10YR4/3 中粒砂～粗粒砂まじり細粒砂 地山の黄褐色砂質土ブロック入る
- 10) にぶい黄褐色 10YR5/4 中粒砂～粗粒砂まじり細粒砂 地山の黄褐色砂質土に近似 やや土壌化
- 11) 灰黄褐色 10YR4/2 粗粒砂まじり細粒砂 径 0.2 cm大の円礫入る
- 12) 暗褐色 10YR3/3 中粒砂まじり細粒砂
- 13) 黒褐色 10YR3/2 中粒砂～粗粒砂まじり細粒砂
- 12) 層に近似 地山ブロックの径が小さい
- 14) 灰黄褐色 10YR4/2 中粒砂まじり細粒砂



【258ピット】

- 1) にぶい黄色 10YR4/3 細砂まじりシルト 黄褐色 2.5Y5/4 粗砂まじりシルト ブロック 10% 程度入る 暗灰黄色 2.5Y5/2 粗砂ブロック 30% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い
- 2) 黄灰色 2.5Y4/1 粗砂まじりシルトと黄褐色 2.5Y5/4 粘土質シルトの混合層 径 0.5 cm未満の礫少量入る
- 3) 2) 層に近似 軟質
- 4) 1) 層に近似 軟質



【259ピット】

- 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗砂まじりシルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る 軟質
- 2) 黄灰色 2.5Y4/1 細砂まじりシルト 黄灰色 2.5Y4/1 粘土質シルトブロック 10% 程度入る しまり悪い 軟質
- 3) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじりシルト 黄褐色 2.5Y5/6 シルトブロック 10% 程度入る
- 4) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い

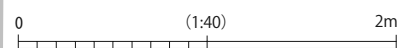
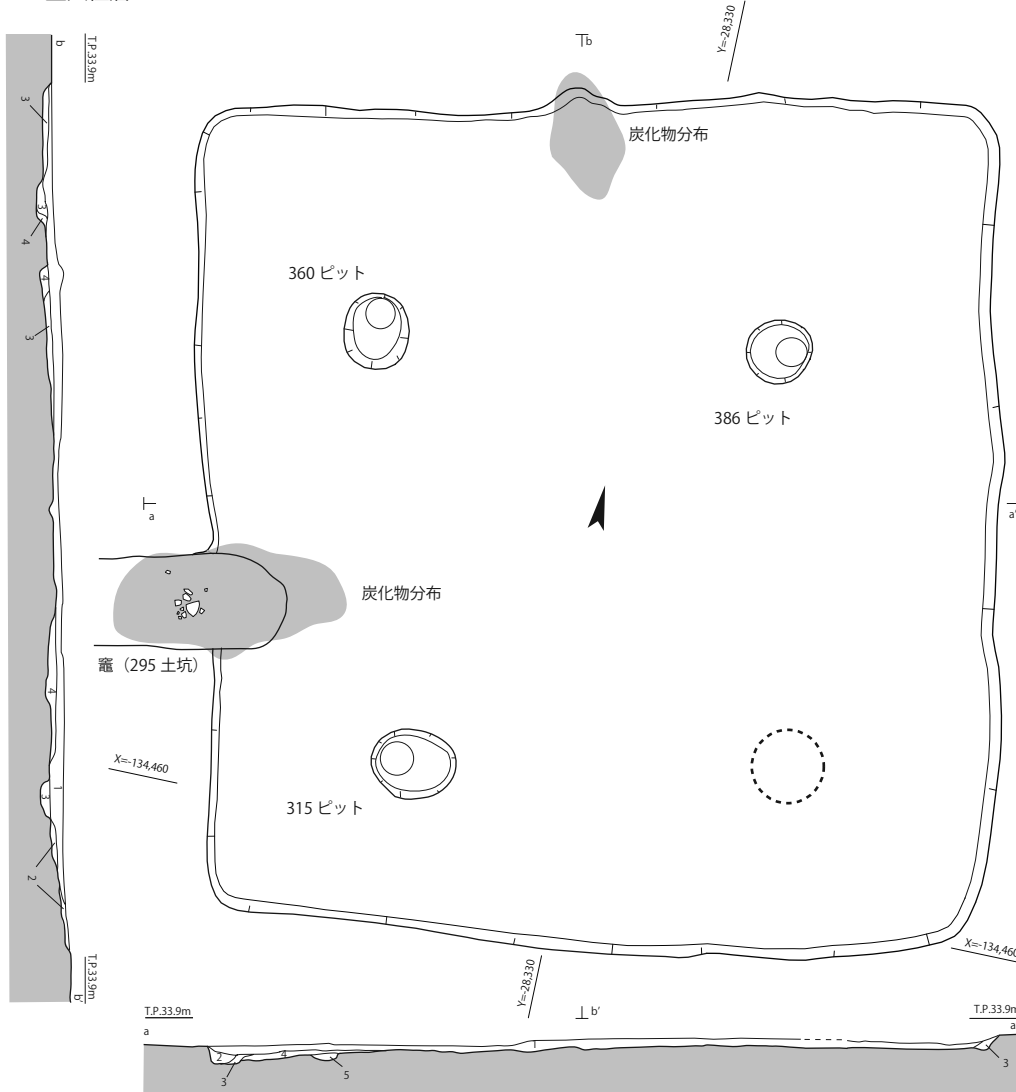


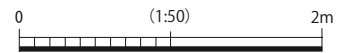
図 44 120 竪穴住居平面・断面図

296 竪穴住居

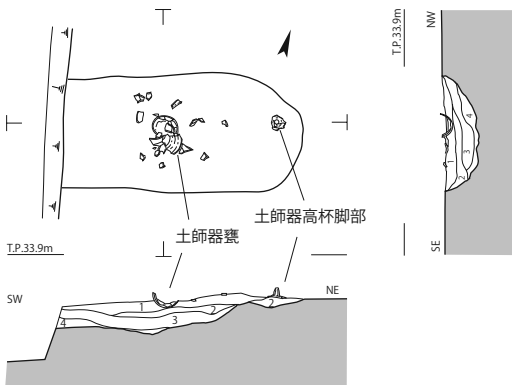


【296 竪穴住居】

- | | |
|--|---|
| <p>1) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじりシルト
オリーブ黒色 5Y3/2 粘土ブロック 30% 程度入る
灰オリーブ色 5Y5/3 粗砂ブロック 10% 程度入る しまりやや良い</p> <p>2) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト
灰色 5Y4/1 細砂ブロック 30% 程度入る 炭化物少量入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまりやや悪い やや軟質</p> | <p>3) オリーブ黒色 7.5Y3/1 細砂まじり粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質 炭化物少量入る</p> <p>4) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト
灰オリーブ色 5Y5/2 粗砂ブロック 10% 程度入る しまり悪い 軟質</p> <p>5) オリーブ黒色 5Y3/1 細砂まじりシルト しまり悪い 軟質
灰色 5Y4/1 シルトブロック 10% 程度入る</p> |
|--|---|



296 竪穴住居西側竈 (295 土坑)



【295 土坑】

- | | |
|---|---|
| <p>1) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじりシルト
オリーブ黒色 5Y3/2 粘土ブロック 30% 程度入る
炭化物少量・骨片少量入るしまりやや良い</p> <p>2) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト
灰色 5Y4/1 細砂ブロック 30% 程度入る 炭化物多量入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまりやや悪い やや軟質</p> | <p>3) オリーブ黒色 7.5Y3/1 細砂まじり粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質 炭化物少量入る</p> <p>4) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじりシルト しまり悪い 軟質
灰色 5Y4/1 シルトブロック 10% 程度入る</p> |
|---|---|

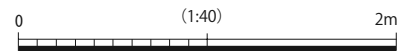
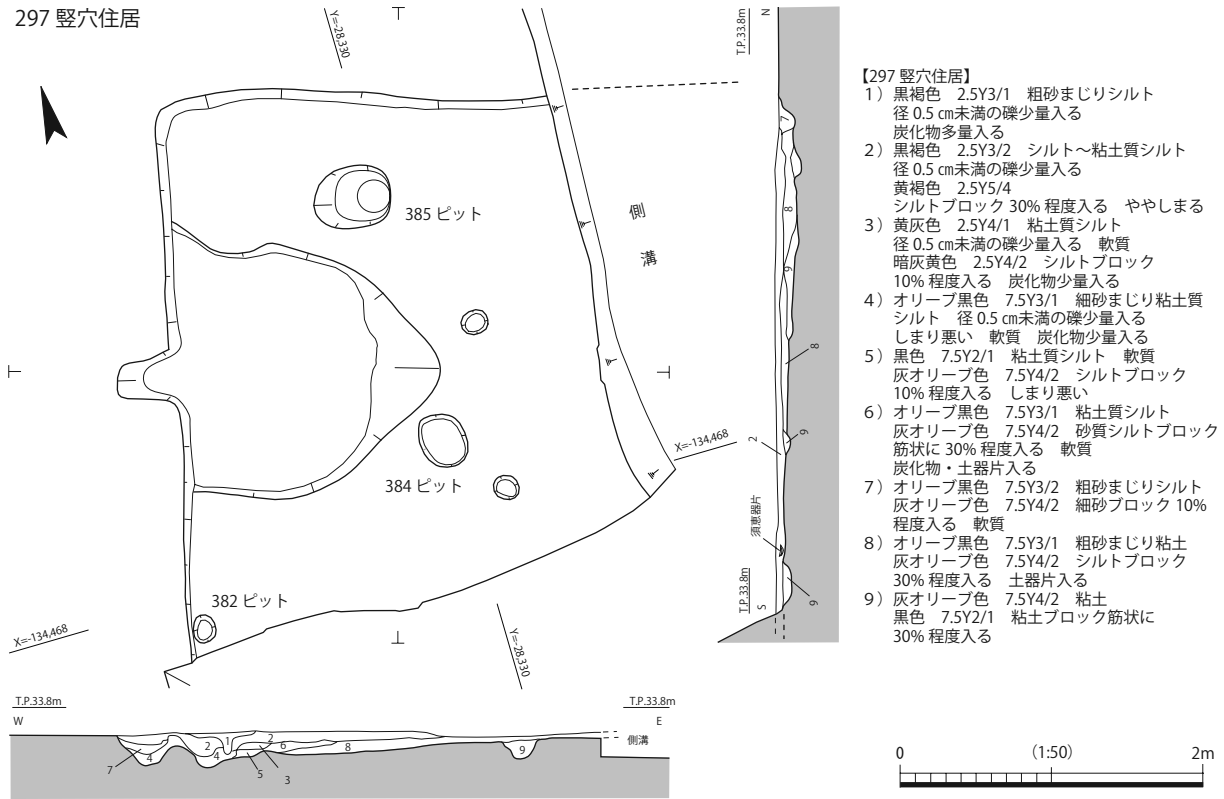
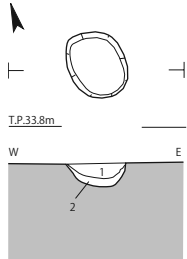


図 45 296 竪穴住居平面・断面図

297 竪穴住居

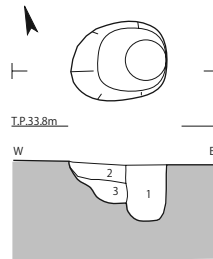


384 ピット



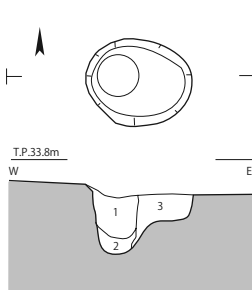
- 【384 ピット】**
- 1) オリーブ黒色 5Y3/1
細砂まじり粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまり悪い やや軟質
 - 2) オリーブ黒色 5Y2/2
粗砂まじり粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまり悪い やや軟質

385 ピット



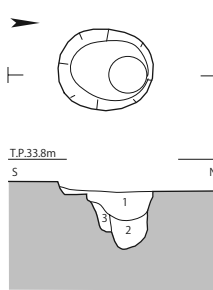
- 【385 ピット】**
- 1) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
径 1 cm未満の礫少量入る しまりやや悪い 軟質
 - 2) オリーブ黒色 5Y2/2 粗砂まじり粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質
 - 3) 2) 層に近似
灰オリーブ色 5Y4/2 粘土質シルトブロック 30% 程度入る
しまり悪い 軟質

315 ピット



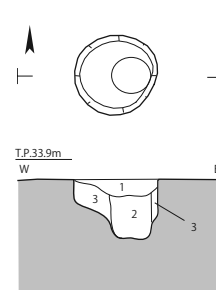
- 【315 ピット】**
- 1) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじりシルト
黒色 5Y2/1 粘土ブロック 20% 程度入る
灰オリーブ色 5Y4/2 粘土ブロック 10% 程度
入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い
やや軟質
 - 2) オリーブ黒色 7.5Y3/2 粗砂まじりシルト
灰色 5Y5/1 粗砂ブロック 20% 程度入る
オリーブ灰色 5Y4/1 粘土ブロック 10% 程度
入る しまりやや悪い 軟質
径 0.5 cm 未満の礫少量入る
 - 3) オリーブ黒色 5Y3/1 粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る 管状斑結沈着

360 ピット



- 【360 ピット】**
- 1) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじりシルト
黒色 5Y2/1 粘土ブロック 20% 程度入る
灰オリーブ色 5Y4/2 粘土ブロック 10%
程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまり悪い やや軟質
 - 2) オリーブ黒色 7.5Y3/2 粗砂まじりシルト
灰色 5Y5/1 粗砂ブロック 20% 程度入る
オリーブ黒色 5Y3/1 粘土ブロック 10%
程度入る しまりやや悪い 軟質
鉄分沈着
 - 3) オリーブ黒色 5Y3/1 粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る
灰色 5Y4/1 シルトブロック 30% 程度
入る 管状斑結沈着

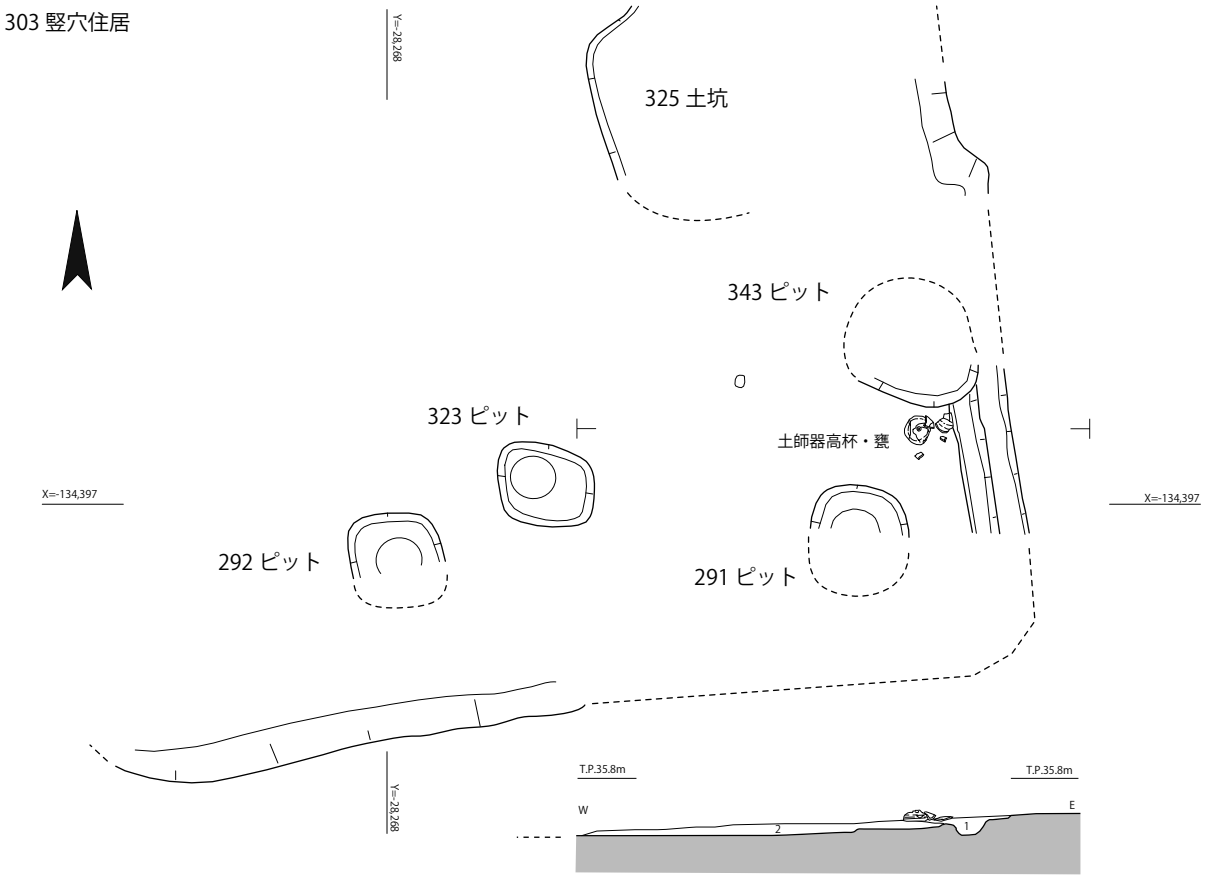
386 ピット



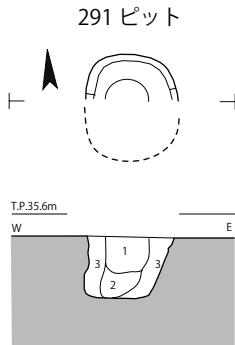
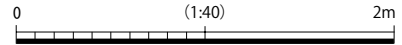
- 【386 ピット】**
- 1) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじりシルト
黒色 5Y2/1 粘土ブロック 20% 程度入る
灰オリーブ色 5Y4/2 粘土ブロック 10%
程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまり悪い やや軟質
 - 2) オリーブ黒色 5Y3/2 細砂まじりシルト
灰オリーブ色 5Y5/2 細砂～礫まじりシルト
径 0.3 cm未満の礫少量入る 軟質
 - 3) オリーブ黒色 5Y3/2 細砂まじり粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る 管状斑結沈着
灰オリーブ色 5Y5/2 シルトブロック 10% 程度入る
しまりやや悪い 軟質 炭化物入る 土器片入る

図 46 297 竪穴住居平面・断面図・296 竪穴住居柱穴平面・断面図

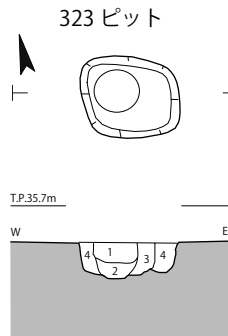
303 竪穴住居



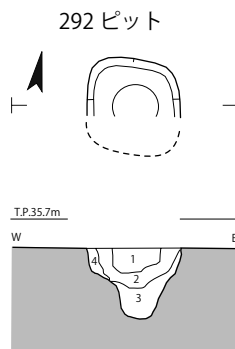
- 【303 竪穴住居】 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗砂まじりシルト 黄灰色 2.5Y5/1 シルトブロック 20% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質 管状斑結あり 焼土入る
 2) 暗灰黄色 2.5Y5/2 粗砂まじりシルト 灰オリーブ色 7.5Y5/2 シルトブロック 30% 程度入る 黄灰色 2.5Y5/1 シルトブロック 10% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 管状斑結あり



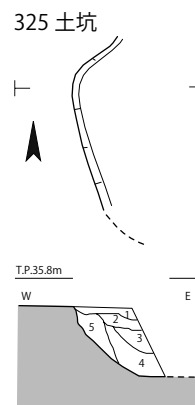
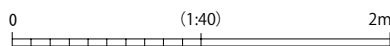
- 【291 ピット】
 1) 灰オリーブ色 7.5Y4/2 細砂まじりシルト 灰色 7.5Y5/1 細砂ブロック 40% 程度入る しまり悪い やや軟質 オリーブ黒色 5Y3/1 シルトブロック 10% 程度入る
 2) 黄褐色 2.5Y5/4 シルト～粗砂 オリーブ黒色 5Y3/1 シルトブロック 30% 程度入る
 3) 暗オリーブ色 5Y4/4 粗砂まじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質



- 【323 ピット】
 1) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじりシルト 黄灰色 2.5Y5/1 シルトブロック 10% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまりやや悪い 炭化物入る 土器片入る
 2) 1)層に近似 黄灰色 2.5Y5/1 シルトブロック 40% 程度入る 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 細砂ブロック 10% 程度入る しまりやや悪い やや軟質 鉄分僅かに沈着
 3) 灰オリーブ色 5Y4/ 粗砂まじりシルト 灰色 5Y5/1 シルトブロック 10% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫多量入る 軟質 鉄分沈着
 4) 灰色 7.5Y4/1 粗砂まじりシルト 灰オリーブ色 7.5Y5/3 細砂ブロック 10% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質



- 【292 ピット】
 1) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじりシルト 黄灰色 2.5Y5/1 シルトブロック 10% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまりやや悪い 炭入る 土器片入る
 2) 1)層に近似 黄灰色 2.5Y5/1 シルトブロック 40% 程度入る 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 細砂ブロック 10% 程度入る しまりやや悪い やや軟質 鉄分僅かに沈着
 3) 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじりシルト 灰色 5Y5/1 シルトブロック 10% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫多量入る 軟質 鉄分沈着
 4) 灰色 7.5Y4/1 粗砂まじりシルト 灰オリーブ色 7.5Y5/3 細砂ブロック 10% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質



- 【325 土坑】
 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂まじり粘土 黄灰色 2.5Y4/1 粘土質ブロック 10% 程度入る 管状斑結あり 軟質
 2) 黒褐色 2.5Y3/1 細砂まじり粘質シルト 暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質シルト 径 0.3 cm未満の礫少量入る 軟質 鉄分沈着
 3) オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質シルト 灰オリーブ色 7.5Y5/2 砂質シルト ブロック 10% 程度入る 炭化物少量入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る
 4) 3)層に近似 黄灰色 2.5Y4/1 粗砂まじりシルト ブロック 20% 程度入る
 5) 3)層に近似 黄灰色 2.5Y4/1 粗砂まじりシルト ブロック 10% 程度入る

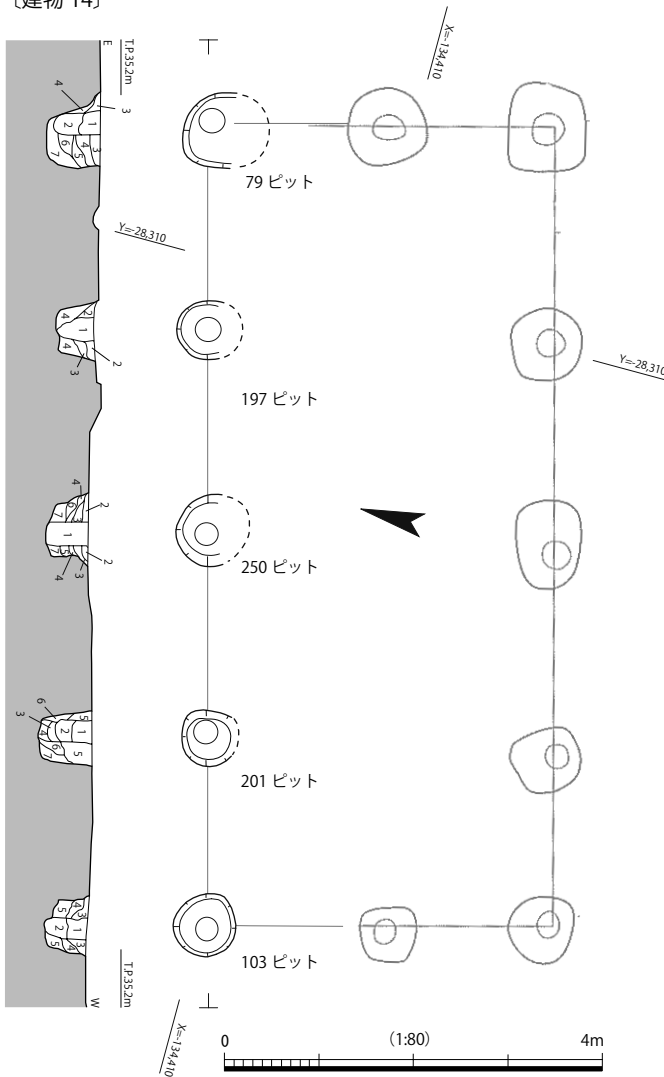
図 47 303 竪穴住居および周辺遺構平面・断面図

今回2基の柱穴を確認したことで、2間×2間の総柱建物であることが追認された遺構である。

建物の規模は長辺4.2m、短辺3.7mで、床面積は15.54㎡を測る。柱痕の直径は、20cm程度である。埋土は、古墳時代包含層である黒褐色粗砂まじり細粒砂を主体とする。

建物 391 (図 53) 3-4区北辺において検出した柱列から図上復元した建物跡である。既往の調査区において検出した柱列と連続し、3間×3間ないし4間×3間の総柱建物であった可能性が高い。建物は主軸を東西方向にもつ。建物の長辺は6.20m、短辺は4.40m、床面積は27.28㎡を測り、建物規模は大きい。柱穴の規模も大きく、平面形状は一辺80cmを測る隅丸方形を呈する。ただし、削平のため、掘り方の深度は20cm程度と浅く残存する。

〔建物 14〕



【79ピット】

- 1) にぶい黄褐色 10YR4/3 粗砂まじり粘土質シルト
黄褐色 2.5Y5/4 粗砂まじりシルトブロック 20% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る 鉄分沈着
- 2) 暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂まじりシルト 下位軟質化
- 3) 2)層に近似
黄褐色 2.5Y5/6 粗砂まじり粘土質シルトブロック 30% 程度入る
- 4) 暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂まじりシルト 軟質
- 5) 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじり粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る やや軟質
- 6) 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗砂まじりシルト～砂質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る
- 7) オリーブ褐色 2.5Y4/6 粗砂まじりシルト
黒褐色 2.5Y3/2 粘土質シルトブロック 50% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質

【197ピット】

- 1) オリーブ褐色 2.5Y4/3 粗砂まじりシルト 炭入る 土器入る
黄灰色 2.5Y4/1 シルトブロック 30% 程度入る しまり悪い 軟質
- 2) 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘土質シルト
オリーブ褐色 2.5Y4/4 シルトブロック 30% 程度入る 鉄分沈着
- 3) 黒褐色 2.5Y3/2 細砂まじりシルト
オリーブ褐色 2.5Y4/4 シルトブロック 10% 入る
しまり悪い 軟質
- 4) オリーブ褐色 2.5Y4/6 粗砂まじりシルトと
黒褐色 2.5Y3/2 粘土質シルトの混合層
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質

【250ピット】

- 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗砂まじり粘土質シルト
黄褐色 2.5Y5/6 粘土ブロック 20% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質
- 2) オリーブ褐色 2.5Y4/3 細砂まじりシルト
径 0.3 cm未満の礫少量入る
黄灰色 2.5Y4/1 シルトブロック 30% 程度入る しまり悪い
- 3) 暗オリーブ色 5Y4/3 細砂まじりシルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまり悪い やや軟質
- 4) 灰オリーブ色 5Y4/2 シルト～粘土質シルト
オリーブ色 5Y5/6 シルトブロック 10% 程度入る 軟質
- 5) 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじり粘土質シルト
オリーブ色 5Y5/6 シルトブロック 30% 程度入る 軟質
- 6) 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじり粘土質シルト
オリーブ色 5Y5/6 シルトブロック 40% 程度入る 軟質
- 7) 灰オリーブ色 5Y4/2 細砂まじりシルト～粘土質シルト
径 0.3 cm未満の礫少量入る 軟質

【201ピット】

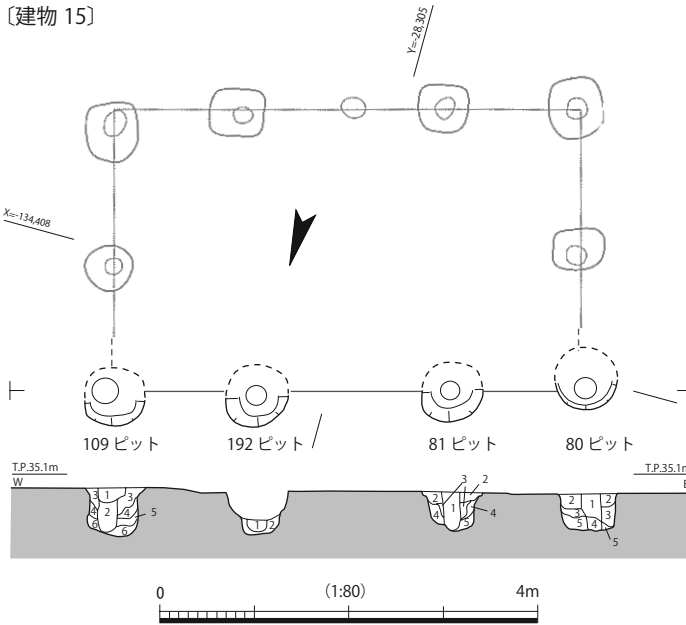
- 1) にぶい黄褐色 10YR4/3 粗砂まじり粘土質シルト
黄褐色 2.5Y5/4 粗砂まじりシルトブロック 20% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る 鉄分沈着
- 2) 暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂まじりシルト 下位軟質化
- 3) 2)層に近似
黄褐色 2.5Y5/6 粗砂まじり粘土質シルトブロック 30% 程度入る
- 4) 暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂まじりシルト 軟質
- 5) 黄褐色 2.5Y5/4 粗砂まじりシルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る 鉄分沈着
- 6) 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじり粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る やや軟質
- 7) 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗砂まじりシルト～砂質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る

【103ピット】

- 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗砂まじり粘土質シルト
オリーブ褐色 2.5Y4/3 シルトブロック 10% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る 鉄分沈着
- 2) 黒褐色 2.5Y3/2 粗砂まじり粘土質シルト
オリーブ褐色 2.5Y4/3 シルトブロック 30% 程度下位に入る
- 3) にぶい黄褐色 10YR4/3 細砂まじりシルト～粘土質シルト
黄褐色 2.5Y5/4 シルトブロック 10% 程度入る しまり悪い
- 4) 3)層に近似
黄褐色 2.5Y5/6 シルトブロック 40% 程度入る
- 5) 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗砂まじりシルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまり悪い 軟質

図 48 〔建物 14〕 平面・断面図

〔建物 15〕



【81ピット】

- 1) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじり粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い
- 2) 灰色 7.5Y4/1 粗砂まじり粘土質シルト
灰オリーブ色 5Y5/3 粗砂ブロック 5%程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る ややしまる 鉄分沈着
- 3) 2)層に近似 灰オリーブ色 5Y5/3 シルトブロック 40%程度入る
- 4) 3)層に近似 灰オリーブ色 5Y5/3 シルトブロック 50%程度入る
- 5) 暗オリーブ色 5Y4/3 粗砂まじり粘土質シルト しまり悪い 軟質

【80ピット】

- 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗砂まじり粘土質シルト 鉄分沈着
- 2) 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗砂まじりシルト
黄灰色 2.5Y4/1 細砂ブロック 10%程度入る
- 3) 灰オリーブ色 5Y4/2 細砂まじり粘土質シルト
オリーブ褐色 2.5Y4/3 シルトブロック 20%程度入る
- 4) 黒褐色 2.5Y3/2 粗砂まじりシルト 軟質
- 5) 4)層に近似 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗砂まじり粘土ブロック
10%程度入る

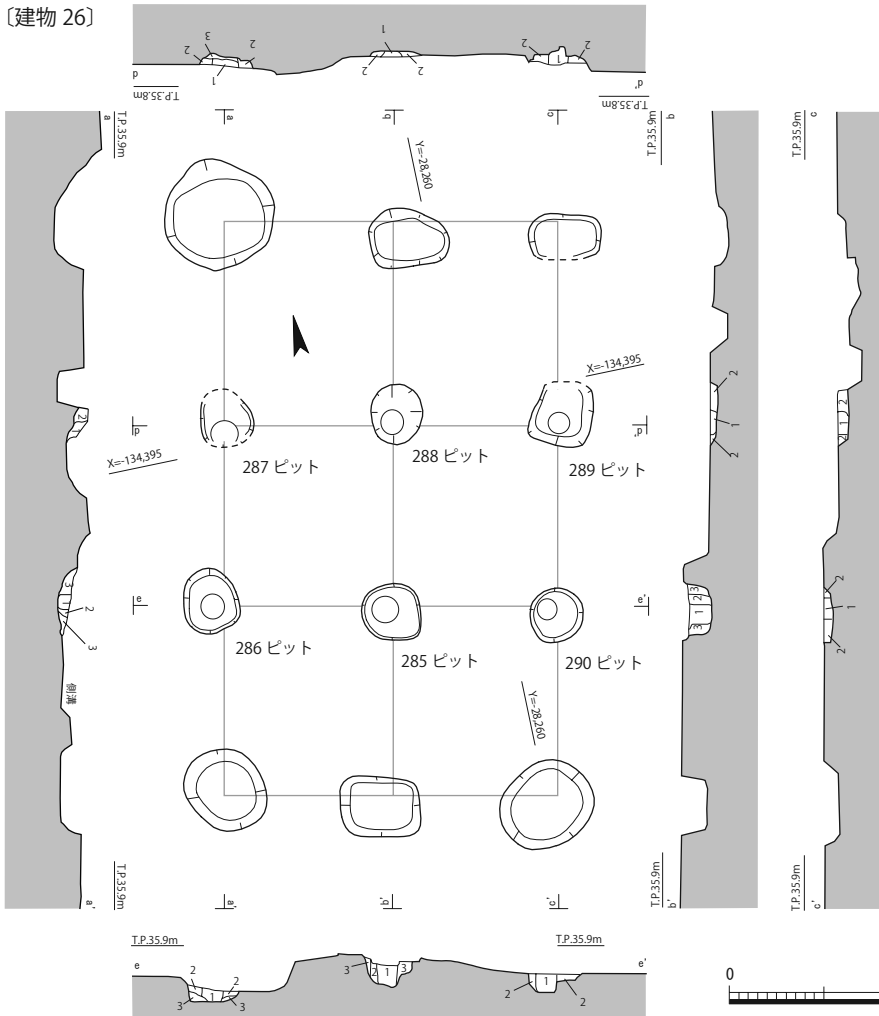
【109ピット】

- 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗粒砂まじり細粒砂
- 2) 黄褐色 2.5Y5/3 中粒砂～粗粒砂まじり細粒砂
- 3) 暗灰黄色 2.5Y4/2 中粒砂まじり細粒砂
- 4) にぶい黄褐色 10YR5/4 細粒砂まじり中粒砂 炭化物僅かに入る
地山の再堆積層
- 5) 暗灰黄色 2.5Y4/2 中粒砂まじり細粒砂 炭化物僅かに入る
- 6) 暗灰黄色 2.5Y5/2 中粒砂まじり細粒砂 地山の再堆積層

【192ピット】

- 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2 中粒砂まじり細粒砂 炭化物僅かに入る
- 2) 暗灰黄色 2.5Y5/2 中粒砂まじり細粒砂 地山の再堆積層

〔建物 26〕



【285ピット】

- 1) 暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂まじりシルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る
下位軟質化 管状斑結あり
- 2) 黒褐色 2.5Y3/2 シルト
黄灰色 2.5Y5/1 細砂ブロック 20%
程度入る しまり悪い
径 0.5 cm未満の礫少量入る 炭化物入る
- 3) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじりシルト
黄灰色 2.5Y5/1 細砂ブロック 40%
程度入る しまり悪い やや軟質
鉄分沈着

【286ピット・287ピット】

- 1) 黄灰色 2.5Y4/1 細砂まじりシルト
黒褐色 2.5Y3/1 粘土質シルトブロック
40%程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い
- 2) 黒褐色 2.5Y3/2 細砂まじりシルト
黄灰色 2.5Y5/1 シルト～細砂ブロック
10%程度入る
径 1 cm未満の礫少量入る しまり悪い
- 3) 黒褐色 2.5Y3/1 細砂まじり粘土質シルト
黄灰色 2.5Y5/1 シルトブロック
10%程度入る しまり悪い

【288ピット・289ピット】

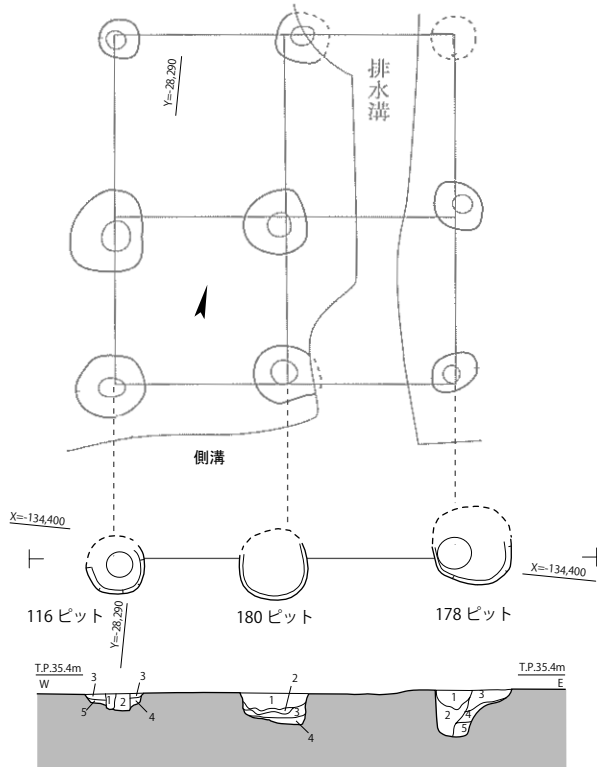
- 1) 灰色 7.5Y4/1 砂質シルト
オリーブ黒色 5Y3/2 粘土質シルト
ブロック 20%程度入る しまり悪い
軟質 土器片入る
- 2) 灰色 7.5Y4/1 砂質シルト
オリーブ黒色 5Y3/2 粘土質シルト
ブロック 10%程度入る
オリーブ黄色 5Y6/3 粗砂ブロック
10%程度入る しまり悪い 鉄分沈着

【290ピット】

- 1) 黄灰色 2.5Y4/1 細砂まじりシルト
黒褐色 2.5Y3/1 粘土質シルトブロック
40%程度入る しまり悪い
径 0.5 cm未満の礫少量入る
- 2) 黒褐色 2.5Y3/2 細砂まじりシルト
黄灰色 2.5Y5/1 シルト～細砂ブロック
10%程度入る

図 49 〔建物 15〕・〔建物 26〕平面・断面図

〔建物 28〕



【116ピット】

- 1) 黄灰色 2.5Y4/1 粗粒砂まじり細粒砂
オリブ灰色砂質土の地山ブロック入る
- 2) 黄灰色 2.5Y4/1 中粒砂まじり細粒砂
- 3) 灰オリブ色 5Y5/3 中粒砂～粗粒砂まじりシルト
地山の灰オリブ色シルトブロックと1)層ブロックが僅かに入る
- 4) オリブ黒色 5Y3/1 中粒砂まじり細粒砂

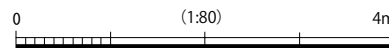
【178ピット】

- 1) 黄灰色 2.5Y4/1 粗粒砂まじり細粒砂
オリブ灰色砂質土の地山ブロック入る
- 2) 黄灰色 2.5Y4/1 粗粒砂まじり細粒砂
オリブ灰色砂質土の地山ブロック僅かに入る
- 3) 黄灰色 2.5Y4/1 中粒砂まじり細粒砂 2)層に近似 より粘性低い
- 4) 灰色 5Y4/1 中粒砂まじり細粒砂
径0.5cm大の花崗岩礫とオリブ灰色砂質土の地山ブロック僅かに入る
- 5) オリブ黒色 5Y3/1 中粒砂まじり細粒砂

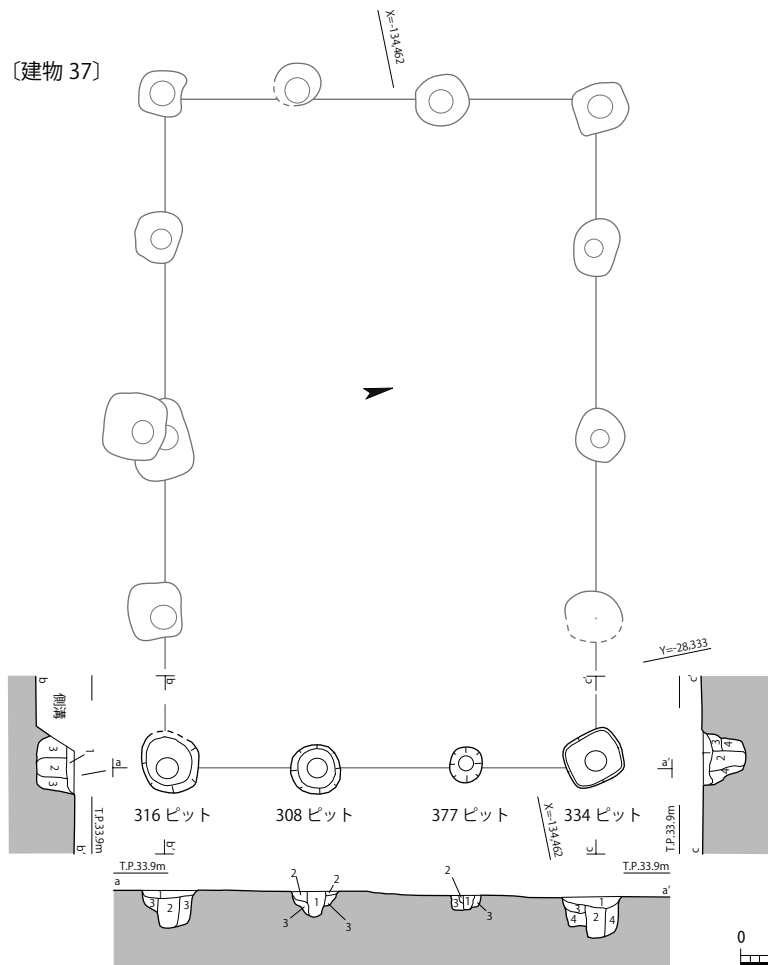
【180ピット】

- 1) 黄灰色 2.5Y4/1 中粒砂まじり細粒砂
- 2) 灰オリブ色 5Y5/3 中粒砂～粗粒砂まじりシルト
地山の灰オリブシルトブロックと1)層ブロックが僅かに入る
- 3) 灰色 5Y4/1 中粒砂まじり細粒砂
径0.5cm大の花崗岩礫とオリブ灰色砂質土の地山ブロック僅かに入る
- 4) オリブ黒色 5Y3/1 中粒砂まじり細粒砂

※ 側溝より北の遺構平面図は、『上私部遺跡I』より転載



〔建物 37〕



【316ピット】

- 1) オリブ黒色 5Y3/1 細砂まじり粘質シルト
灰色 7.5Y4/1 細砂まじりシルトブロック 30% 程度入る
径0.5cm未満の礫少量入る しまりやや悪い やや軟質
鉄分沈着 細かい土器片入る
- 2) オリブ黒色 5Y2/2 粗砂まじり粘質シルト
径0.5cm未満の礫少量入る
灰オリブ色 5Y4/ 粘土ブロック 20% 程度入る 軟質
- 3) 2)層に近似
灰オリブ色 5Y4/2 粘土ブロック 40% 程度入る
径0.5cm未満の礫少量入る やや軟質

【308ピット】

- 1) オリブ黒色 5Y3/1 細砂まじりシルト
灰色 5Y4/1 シルトブロック 10% 程度入る
鉄分沈着 径0.5cm未満の礫少量入る
- 2) オリブ黒色 5Y3/2 細砂まじり粘質シルト
暗オリブ色 5Y4/3 シルトブロック 30% 程度入る
- 3) 灰オリブ色 5Y4/2 粗砂まじり粘質シルト
径0.5cm未満の礫少量入る
暗オリブ色 5Y4/3 シルトブロック 10% 程度入る

【377ピット】

- 1) 灰色 7.5Y4/1 粗砂まじりシルト
径0.5cm未満の礫少量入る
オリブ黒色 7.5Y3/1 粘土ブロック 30% 程度入る
- 2) オリブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト
灰色 7.5Y4/1 シルトブロック 10% 程度入る
- 3) オリブ黒色 7.5Y3/2 粗砂まじり粘質シルト
径0.5cm未満の礫少量入る
- 4) 3)層に近似 さらに軟質

【334ピット】

- 1) オリブ黒色 5Y3/1 細砂まじり粘質シルト
灰色 7.5Y4/1 細砂まじりシルトブロック 30% 程度入る
径0.5cm未満の礫少量入る しまりやや悪い やや軟質
鉄分沈着 炭少量入る 細かい土器片入る
- 2) 黒色 7.5Y2/1 粗砂まじり粘質シルト
径0.5cm未満の礫少量入る 軟質
- 3) 黒色 7.5Y2/2 粗砂まじり粘質シルト
径0.5cm未満の礫少量入る しまり悪い
- 4) 3)層に近似
灰色 7.5Y4/1 シルトブロック 20% 程度入る 軟質

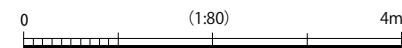
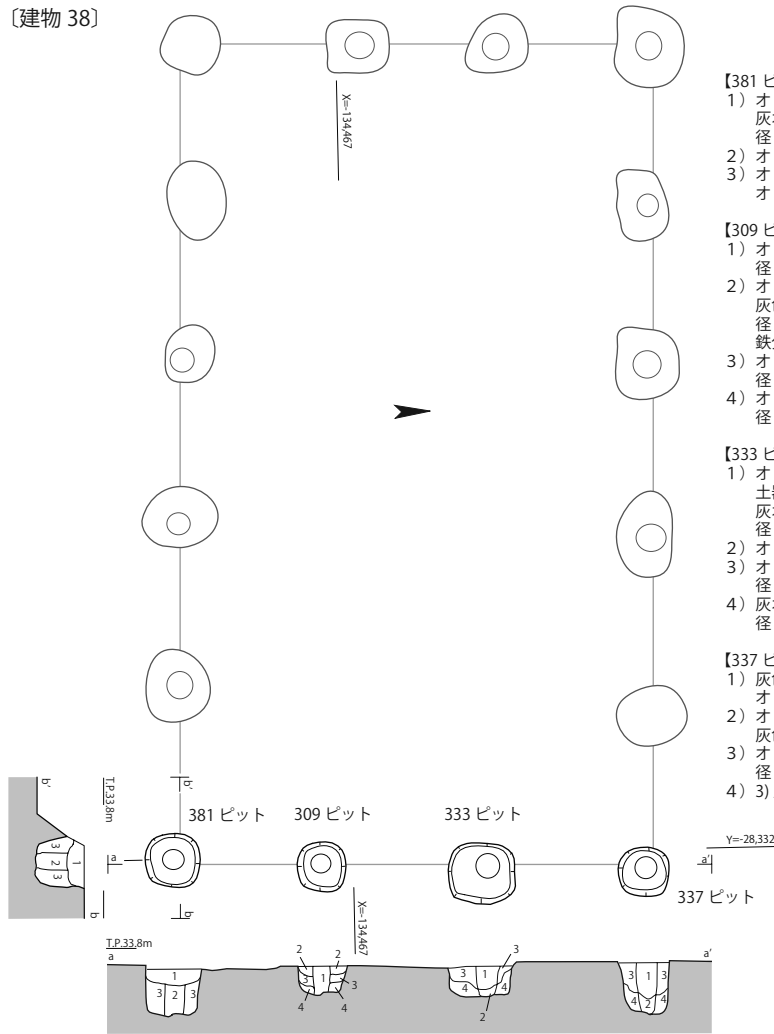


図 50 〔建物 28〕・〔建物 37〕平面・断面図

〔建物 38〕



【381 ビット】

- 1) オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト
灰オリーブ色 7.5Y4/2 シルトブロック 30% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質
- 2) オリーブ黒色 7.5Y3/1 砂質シルト しまり悪い 軟質
- 3) オリーブ黒色 7.5Y3/1 粘土
オリーブ黒色 7.5Y3/2 砂質シルトブロック 50% 入る

【309 ビット】

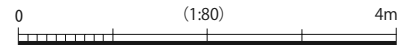
- 1) オリーブ黒色 7.5Y3/1 細砂まじり粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る 軟質
- 2) オリーブ黒色 5Y3/1 細砂まじり粘質シルト
灰色 7.5Y4/1 細砂まじりシルトブロック 30% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまりやや悪い やや軟質
鉄分沈着 炭化物少量入る 細かい土器片入る
- 3) オリーブ黒色 7.5Y3/1 細砂まじり粘土
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 非常に軟質
- 4) オリーブ黒色 10Y3/1 粗砂まじりシルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質

【333 ビット】

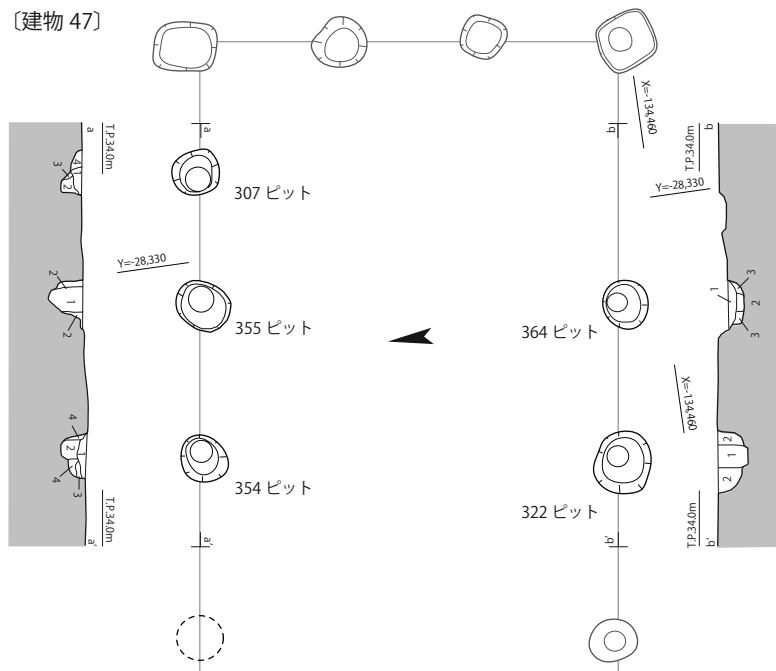
- 1) オリーブ黒色 7.5Y3/1 細砂まじりシルト 炭入る
土器片入る
灰オリーブ色 5Y5/3 細砂ブロック 20% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまりやや悪い
- 2) オリーブ黒色 7.5Y3/1 細砂まじりシルト 軟質
- 3) オリーブ黒色 7.5Y3/2 粗砂まじり粘質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質 炭入る
- 4) 灰オリーブ色 7.5Y4/2 細砂まじり粘土
径 0.5 cm未満の礫少量入る 軟質

【337 ビット】

- 1) 灰色 7.5Y4/1 粗砂まじりシルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る
オリーブ黒色 7.5Y3/1 粘土ブロック 30% 程度入る 鉄分沈着
- 2) オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト
灰色 7.5Y4/1 シルトブロック 10% 程度入る 軟質
- 3) オリーブ黒色 7.5Y3/2 粗砂まじり粘質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る やや軟質
- 4) 3) 層に近似 さらに軟質



〔建物 47〕



【322 ビット】

- 1) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじりシルト
黒色 5Y2/1 粘土ブロック 20% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質
- 2) オリーブ黒色 7.5Y3/2 粗砂まじり粘質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質
- 3) 2層に近似 やや砂質
- 4) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじり粘質シルト
灰色 5Y4/1 シルトブロック 20% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る 鉄分沈着

【307 ビット・354 ビット】

- 1) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじりシルト
黒色 5Y2/1 粘土ブロック 20% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質
- 2) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじりシルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る
オリーブ黒色 5Y3/2 粘土ブロック 10% 程度入る
しまり悪い 軟質
- 3) オリーブ黒色 7.5Y3/2 細砂まじり粘質シルト
しまり悪い 軟質
- 4) 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじりシルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質

【355 ビット】

- 1) オリーブ黒色 7.5Y3/2 粗砂まじり粘土～粘質シルト
灰色 7.5Y5/1 粗砂ブロック 10% 程度入る
しまり悪い 軟質 径 0.5 cm未満の礫少量入る
- 2) 灰色 5Y4/1 粗砂まじりシルト
径 0.8 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質

【364 ビット】

- 1) 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粗砂まじりシルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る
- 2) 灰色 5Y4/1 粗砂まじりシルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質
オリーブ黒色 5Y3/1 シルトブロック 30% 程度入る
- 3) 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじり粘質シルト
しまり悪い 軟質

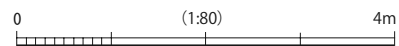
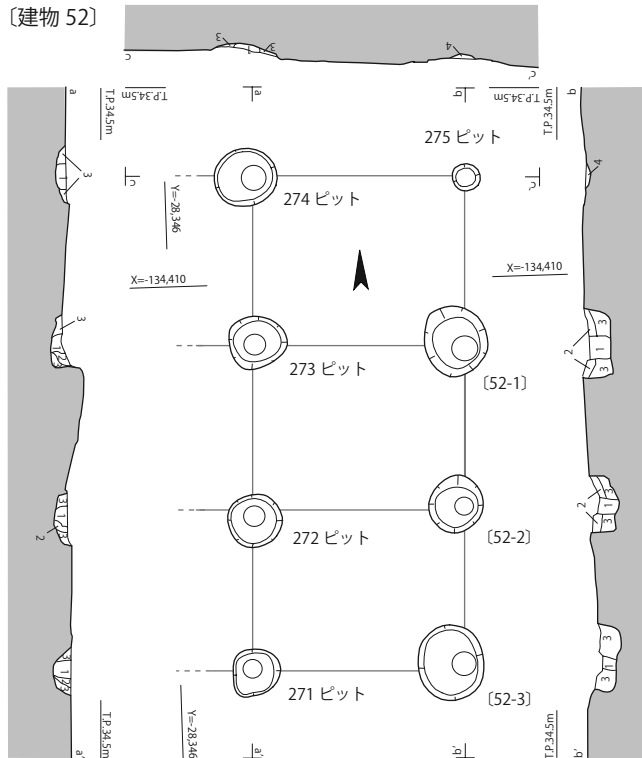


図 51 〔建物 38〕・〔建物 47〕平面・断面図

建物 392 (図 54) 3-4 区も西南端で検出した柱穴列からなる遺構である。297 竪穴住居とは切り合う関係にある。既往の調査区において検出した柱列と対応し、3 間×2 間を数える建物として復元できる。建物の主軸は南北方向にもつ。建物の長辺は 4.40m、短辺は 3.20 m、床面積は 15.84㎡を測る。柱穴の平面形状は 50～60cm の円形、深度は 60cm 程度である。

101 溝 [溝 23] (図 55) 3-1 区の西半部を南北方向へ走る溝である。検出長は 4.5m、最大幅は 2.3 m、最大深度は 80cm を測る。埋土はシルトを主体とする上層と、粗砂～細砂を主体とする下層に大別できる。下層からは、古墳時代後期～古代初頭の遺物が多数出土した。断面観察では斜め方向のラミナが顕著に認められることから、激しい水流を受けて埋没したことが推測できる。埋土からは、土師器

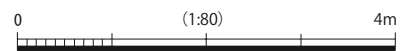
〔建物 52〕



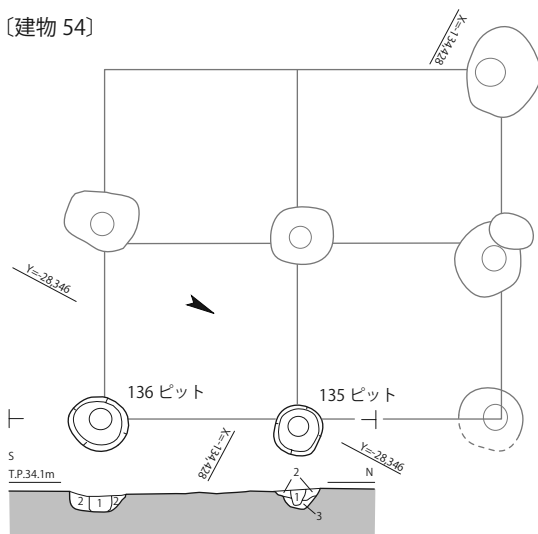
【271・272・273・274・275 ピット】

- 1) オリブ黒色 5Y3/2 細砂まじり砂質シルト
灰オリブ色 5Y4/2 粘土ブロック 30% 程度入る
径 0.5 cm 未満の礫入る 非常に軟質
- 2) オリブ黒色 5Y3/2 微砂まじり粘土質シルト
灰オリブ色 5Y4/2 粘土ブロック 40% 程度入る
非常に軟質
- 3) 灰オリブ色 5Y4/2 細砂まじりシルト
灰色 5Y5/1 粗砂まじりシルトブロック 30% 程度入る
しまり悪い
径 0.5cm 未満の礫少量入る やや軟質
- 4) オリブ黒色 5Y3/2 粗砂まじりシルト 軟質
径 0.5cm 未満の礫少量入る

※〔52-1〕〔52-2〕〔52-3〕は、
既報告図を再トレースして掲載。



〔建物 54〕



【135 ピット】

- 1) 黒褐色 10YR3/1 粗粒砂まじり微粒砂 径 0.5 cm 未満の白砂礫入る
- 2) 黒褐色 10YR3/2 粗粒砂まじり微粒砂
1) 層に似るがそれより礫の含量多い
- 3) 褐色 10YR4/1 中粒砂～粗粒砂まじり微粒砂

【136 ピット】

- 1) 黒褐色 10YR3/1 粗粒砂まじり微粒砂 径 0.5 cm 未満の白砂礫入る
- 2) 黒褐色 10YR3/2 粗粒砂まじり微粒砂
1) 層に似るがそれより礫の含量多い

※135・136 ピット以外は、
既報告図を再トレースして掲載。

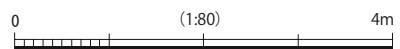
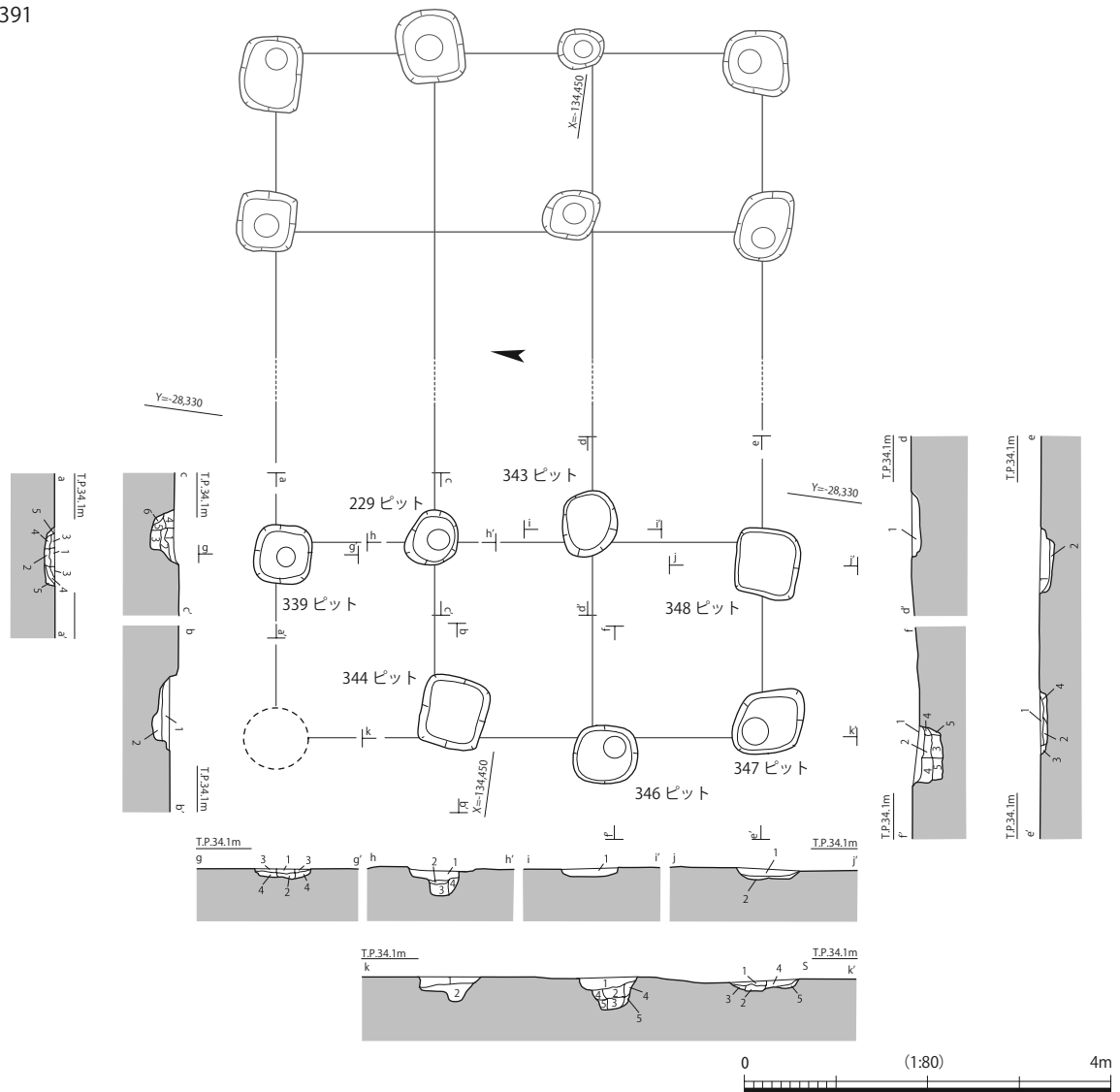


図 52 〔建物 52〕・〔建物 54〕 平面・断面図



【299ピット】

- 1) オリーブ黒色 5Y3/2 シルト質粘土 径 0.3 cm未満の礫少量入る 鉄分沈着
- 2) オリーブ黒色 5Y3/2 細砂まじりシルト 軟質
- 3) 灰オリーブ色 5Y5/2 細砂～礫まじりシルト 径 0.3 cm未満の礫少量入る
- 4) 灰オリーブ色 5Y4/2 細砂まじりシルト 径 0.3 cm未満の礫少量入る 軟質 鉄分沈着
- 5) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじりシルト 黒色 5Y2/1 粘土ブロック 20% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質
- 6) オリーブ黒色 7.5Y3/2 粗砂まじり粘土 しまり悪い 軟質
- 7) 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る
- 8) オリーブ褐色 2.5Y4/4 シルトブロック 30% 程度入る しまりやや悪い やや軟質

【339ピット】

- 1) 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粗砂まじり粘質シルト しまり悪い
- 2) 灰オリーブ色 5Y4/2 シルト 灰色 5Y4/1 シルトブロック 10% 程度入る しまり悪い 軟質
- 3) オリーブ黒色 5Y3/2 粘質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質 鉄分沈着
- 4) オリーブ黒色 5Y3/2 シルト質粘土 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質
- 5) 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじりシルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質

【343ピット】

- 1) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじりシルト 黒色 5Y2/1 粘土ブロック 20% 程度入る 灰オリーブ色 5Y4/2 粘土ブロック 10% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質

【344ピット】

- 1) オリーブ黒色 7.5Y3/2 粗砂まじり粘質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質
- 2) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじりシルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る オリーブ黒色 5Y3/2 粘土 ブロック 20% 程度入る 軟質

【346ピット】

- 1) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじりシルト 黒色 5Y2/1 粘土ブロック 20% 程度入る 灰オリーブ色 5Y4/2 粘土ブロック 10% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質
- 2) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじり粘質シルト オリーブ灰色 2.5GY5/1 細砂ブロック 10% 程度入る 管状斑結あり
- 3) 暗オリーブ褐色 5Y4/3 粗砂まじり粘質シルト 軟質 管状斑結あり
- 4) 灰色 5Y4/1 粗砂まじり粘質シルト 径 3 cm未満の礫少量入る 鉄分沈着
- 5) 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじり粘質シルト 灰色 5Y4/2 粘土ブロック 10% 程度入る しまり悪い 軟質

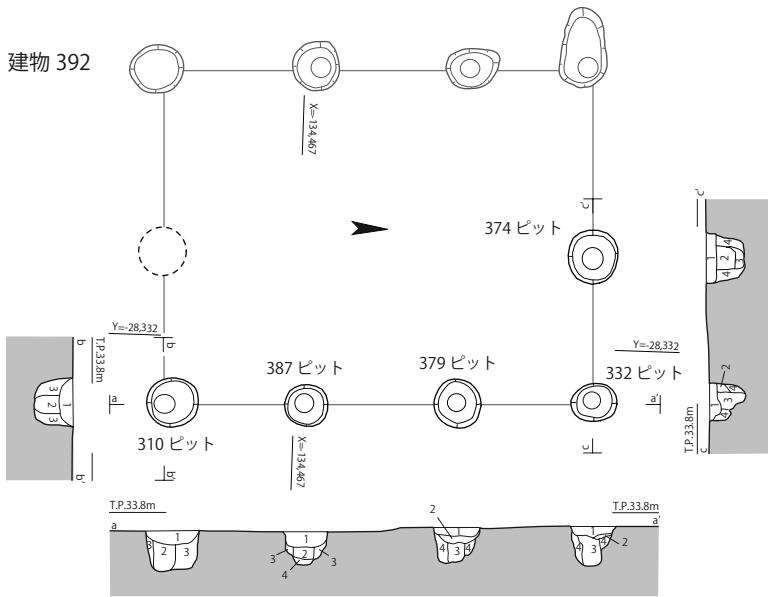
【347ピット】

- 1) オリーブ褐色 2.5Y4/3 粗砂まじり粘質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルトブロック 10% 程度入る 鉄分沈着
- 2) 黄灰色 2.5Y4/1 粗砂まじりシルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質 鉄分沈着 炭化物入る
- 3) 2)層に近似 ややしまる 炭化物入る
- 4) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじり粘質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る 軟質 鉄分沈着
- 5) オリーブ黒色 5Y3/1 細砂まじり粘質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る

【348ピット】

- 1) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじりシルト 灰色 5Y4/1 細砂まじりシルトブロック 10% 程度入る
- 2) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじり粘土質シルト 灰オリーブ色 5Y6/1-6/2 粗砂～細砂 礫まじりブロック 10% 程度入る

図 53 建物 391 平面・断面図



【379ピット】

- 1) オリーブ黒色 5Y3/1 細砂まじり粘質シルト
灰色 7.5Y4/1 細砂まじりシルトブロック
30% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまりやや悪い やや軟質 鉄分沈着
炭化物少量入る 細かい土器片入る
- 2) 灰オリーブ色 7.5Y4/2 粗砂まじりシルト
オリーブ黒色 7.5Y3/1 粘土質シルトブロック
40% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまり悪い やや軟質
- 3) オリーブ黒色 7.5Y3/2 細砂まじり粘質シルト
しまり悪い やや軟質
- 4) オリーブ黒色 7.5Y3/1 細砂～シルト
灰色 7.5Y5/1 細砂ブロック 10% 程度入る
しまり悪い やや軟質

【387ピット】

- 1) 黒褐色 2.5Y3/2 シルト～粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る ややしまる
黄褐色 2.5Y5/4 シルトブロック 30% 程度
入る 炭化物少量入る
- 2) 黄灰色 2.5Y4/1 粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る 軟質
暗灰黄色 2.5Y4/2 シルトブロック 10% 程度
入る 炭化物少量入る
- 3) オリーブ黒色 7.5Y3/1 細砂まじり粘土質
シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまり悪い 軟質 炭化物少量入る
- 4) 黒色 7.5Y2/1 粘土質シルト
灰オリーブ色 7.5Y4/2 シルトブロック
10% 程度入る しまり悪い 軟質
炭化物少量入る

【310ピット】

- 1) オリーブ黒色 5Y3/2 細砂まじり粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る
灰オリーブ色 5Y5/2 シルトブロック 10% 程度
入る しまりやや悪い 軟質
- 2) オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト
灰色 7.5Y4/1 シルトブロック 10% 程度入る
軟質
- 3) 層近似 暗オリーブ色 5Y4/3 粗砂まじりシルト
ブロック 30% 程度入る しまり悪い 軟質

【332ピット】

- 1) オリーブ黒色 5Y3/1 細砂まじり粘質シルト
灰色 7.5Y4/1 細砂まじりシルトブロック 30%
程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまりやや悪い やや軟質
- 2) 灰オリーブ色 7.5Y4/2 粗砂まじり粘質シルト
オリーブ黒色 7.5Y3/1 粘土質シルト 20% 程度
入る しまりやや悪い 軟質
- 3) オリーブ黒色 7.5Y3/1 細砂まじりシルト
2) 層ブロック 10% 程度入る しまり悪い
やや軟質
- 4) オリーブ黒色 7.5Y3/2 細砂まじりシルト
灰色 7.5Y4/1 シルトブロック 20% 程度入る
しまり悪い やや軟質

【374ピット】

- 1) オリーブ黒色 5Y3/1 細砂まじり粘質シルト
灰色 7.5Y4/1 細砂まじりシルトブロック
30% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまりやや悪い やや軟質
- 2) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘土質
シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い
軟質
- 3) オリーブ黒色 5Y3/2 細砂まじり粘土
しまり悪い 軟質
- 4) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじり粘土質シルト
黒色 5Y2/1 粘土ブロック 30% 程度入る
しまり悪い 軟質
- 5) 黒色 7.5Y2/1 粗砂まじり粘質シルト
灰色 7.5Y4/1 細砂まじりシルトブロック
40% 程度入る しまり悪い

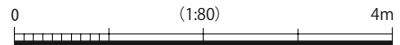
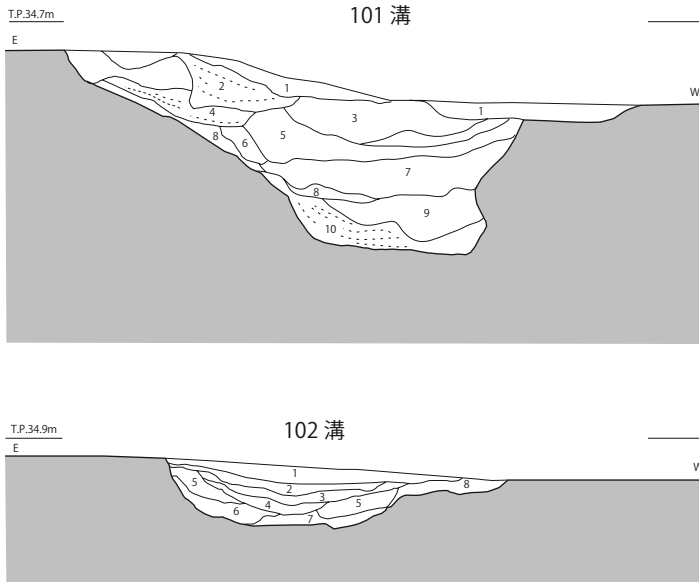
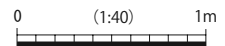


図 54 建物 392 平面・断面図



【101 溝】

- 1) 灰色 5Y4/1 粗砂まじりシルト～粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る
灰オリーブ色 5Y5/2 細砂ブロック 30% 程度入る
しまり悪い 鉄分沈着
- 2) 黄灰色～暗灰黄色 2.5Y5/1-5/2 粗砂～細砂 しまり悪い
ラミナあり
- 3) 灰色～オリーブ黒色 5Y4/1-3/1 粗砂まじり粘土質シルト
灰色 5Y5/1 細砂の流入あり
径 0.5 cm未満の礫少量入る ややしまる やや軟質
鉄分沈着
- 4) 灰色～灰オリーブ色 5Y5/1-5/3 粗砂～細砂 ラミナあり
- 5) オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり良い やや軟質
鉄分沈着
- 6) 灰オリーブ色 5Y4/2 細砂～砂質シルト
- 7) オリーブ黒色 7.5Y3/1 細砂まじり粘土質シルト
黒褐色 2.5Y3/1 粘土ブロック 20% 程度入る しまり良い
やや軟質 植物遺体僅かに入る
- 8) 灰色 2.5Y6/1-5/1 細砂～粗砂 ラミナあり
黒褐色 2.5Y3/1 粘土ブロック 30% 程度入る しまり悪い
植物多量入る
- 9) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト～シルト
径 1 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質
炭化物入る・植物遺体入る
- 10) 灰色 5Y4/1 粗砂まじりシルトと
オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘土の互層 しまり悪い
植物少量入る



【102 溝】

- 1) 暗褐色 10YR3/4 粗砂まじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る 鉄分沈着
褐灰色 10YR4/1 シルトブロック 10% 程度入る しまり悪い 炭化物入る 土器入る
- 2) にぶい黄褐色 10YR4/3 細砂まじり砂質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る
鉄分沈着 炭化物入る 土器入る
- 3) 灰黄褐色 10YR4/2 細砂まじりシルト
褐色 10YR4/4 シルトブロック 10% 程度入る 鉄分沈着 マンガン粒入る
- 4) にぶい黄褐色 10YR4/3 粗砂まじりシルト 径 0.3 cm未満の礫少量入る
しまり悪い やや軟質

- 5) にぶい黄褐色 10YR4/3 細砂まじりシルト
にぶい黄褐色 10YR4/3 微砂ブロック 10% 程度入る
- 6) 灰黄褐色 10YR4/2 粗砂まじり粘土質シルト やや軟質
黄褐色 10YR5/6 粘土質シルトブロック 10% 程度入る
径 0.3 cm未満の礫少量入る
- 7) 6) 層に近似 黄褐色粘土質シルトブロック 30% 程度入る
- 8) にぶい黄褐色 10YR4/3 粘土質シルト 鉄分沈着

図 55 第 3 調査区溝断面図

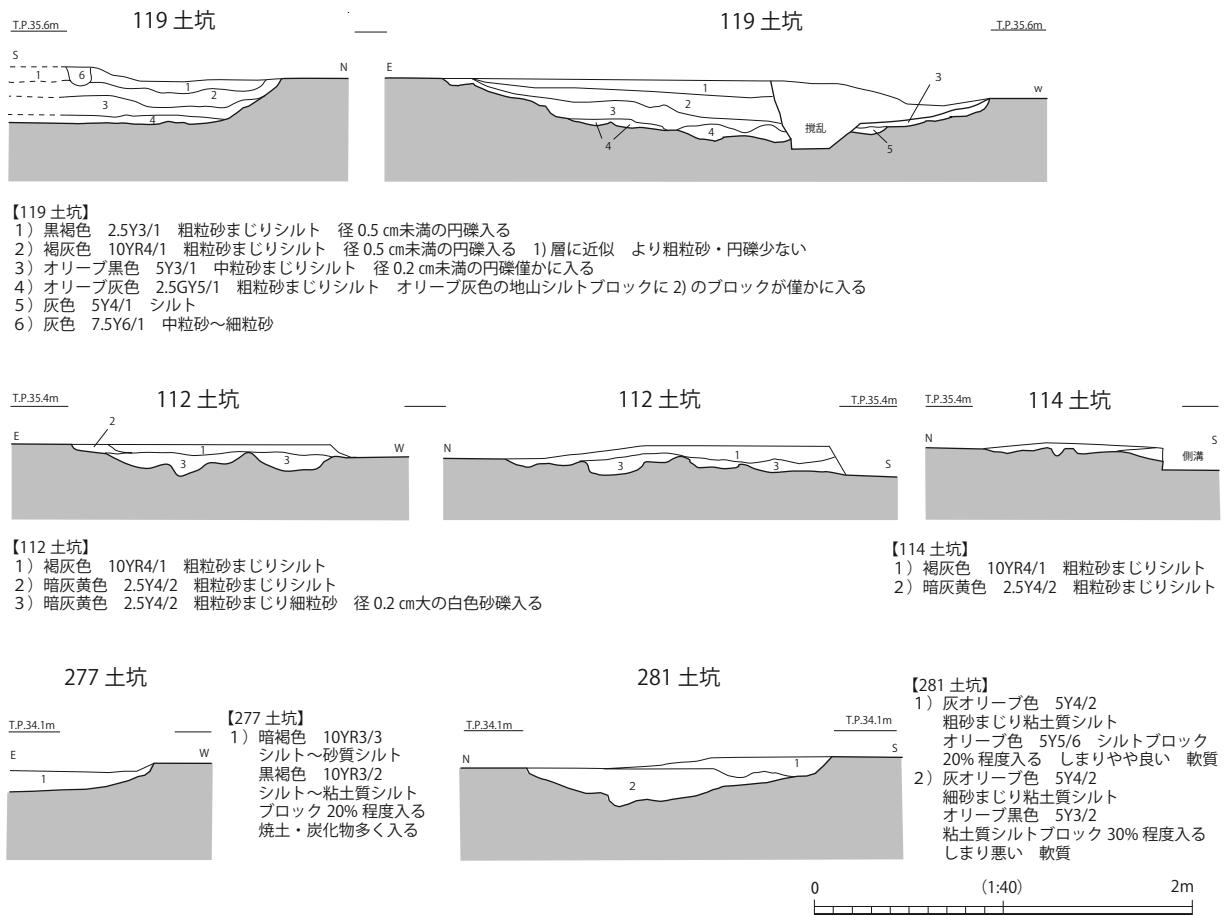


図 56 第 3 調査区土坑断面図

甕、須恵器杯蓋、外面に平行タタキをもつ須恵器甕、須恵器横瓶、金属滓等が出土した。また、底面からは流木が出土した。

102 溝〔溝 12〕 (図 55) 101 溝の東側で検出した溝である。検出長は 5.2 m、最大幅は 1.7m を測る。断面形状は椀形で、最大深度は 30cm を測る。埋土はシルトが主体であり、粗砂を多く含む 101 溝とは対照的に、静かに埋没した状況を窺うことができる。埋土からは、外面に格子目タタキをもつ須恵器甕、須恵器横瓶、脚部にスカシをもつ須恵器高杯、土師器甕、土師器高杯等の遺物が出土した。

110 土坑 (図 35) 110 土坑は 3 - 1 区中央付近において検出した。平面形状は不定形を呈しており、南北幅 2.2 m、東西幅 1.75 m を測る。残存深度 10cm 程度である。掘立柱建物である〔建物 15〕(後述)を構成する 109 ピットに切られていることから、集落内では比較的早く埋没した遺構であるといえる。埋土は黒褐色粗砂まじりシルトを主体としており、底面には地山ブロックを含む灰オリーブ色シルトが堆積する。埋土からは、土師器高杯の破片や土師器甕、須恵器甕が出土した。

112 土坑 (図 56) 3 - 2 区中央付近において検出した遺構である。一辺 2.5 m 以上の隅丸方形を呈しており、埋土は 4 ~ 15cm 程度、残存する。底面には凹凸が認められるが、その上に暗灰黄色粗砂まじり細粒砂を敷いて平坦化を図っている。埋土からは、外面に平行タタキをもつ須恵器甕、土師器甕、土師器高杯が出土した。

114 土坑 (図 56) 112 土坑の東側において検出した遺構である。平面形状は、最大径 1.1 m 程度の不定形を呈する。残存深度は浅く、5cm に満たない。埋土は、褐灰色粗まじりシルトを主体とする。埋

土からは、土師器高杯、須恵器甕の細片が出土した。

119 土坑 (図 56) 3-1 区において検出した土坑である。西半部を攪乱によって損じているが、平面形状は一辺 2 m 程度の隅丸方形を呈していたと考えられる。最大深度は 25cm を測る。

埋土は黒褐色粗砂まじりシルトやオリーブ黒色シルトである。埋土からは、土師器甕口縁部、器壁内面にスリケシ調整をもつ須恵器甕、製塩土器等の細片が出土した。

277 土坑 (図 56) 3-5 区において検出した遺構である。北辺と西辺に攪乱を受けているため規模は明らかではないが、埋土に多量の炭化物を含むため竪穴住居にかかわる遺構であった可能性がある。

281 土坑 (図 56) 同じく 3-5 区において検出した遺構である。北辺と東辺に攪乱を受けているが、277 土坑と連続する可能性がある。埋土は粘土質シルトで、軟質である。

3. 出土遺物

第 3 調査区では、古墳時代の遺構埋土から、比較的残存状態が良好な遺物が出土した。また、中世包舎層からも、特色ある遺物が出土している。

図 57 には、竪穴住居および関連遺構、ピットより出土した遺物の実測図を掲載した。図 57-1 は、須恵器双把手付高杯の杯部である。口縁部は短く外反し、張り出した胴部の外面には、回転ナデによって作り出された低い凸帯と凹線の上に波状文を施す。把手は 2 箇所とその痕跡を残す。底部内面には強いナデが顕著に残る。底部外面には回転ヘラケズリが施されている。5 世紀中～後半の製品である。303 竪穴住居上層より出土した。

図 57-2 は、初期須恵器の杯身である。丸みを帯びたフォルムと内傾した口縁が特徴的である。焼成が甘く、器壁は内外面とも灰色、断面は赤褐色を呈する。外面は回転ナデと静止ヘラケズリを施す。内面には静止ナデを施した痕跡が顕著に残る。TK 73 型式に類される製品である。222 竪穴住居より出土した。

図 57-3 は、須恵器高杯の脚部である。大きく開いた裾の 4 箇所に円形スカシを穿つ。杯部内面中央には、同心円文タタキが残されている。6 世紀の製品である。297 竪穴住居竈内より出土した。

図 57-4～7 は、須恵器杯蓋である。4 は、外面天井部近く浅い凹線をめぐらせ、これより上位にヘラケズリを施す。MT 85～TK 43 型式に類される 6 世紀後半の製品である。〔建物 37〕を構成する 308 ピットの埋土より出土した。5・7 は、やや低い器高をもつ。口縁端部内面をやや突出させて、凹面をつくりだす。6 世紀前半の製品である。7 の天井部内面には同心円文タタキを静止ナデにてすり消した痕跡が残る。ともに 297 竪穴住居竈内より出土した。6 は、外面口縁付近に浅く凹線を一条めぐらせる。部分的に細かい粘土塊の付着が認められる。6 世紀後半の製品である。297 竪穴住居竈内より出土した。

図 57-8 は、蓋杯の底部または天井部である。外面は、回転ヘラケズリを施した後、「×」の線刻を付す。内面には同心円文タタキが残る。297 竪穴住居埋土より出土した。

図 57-9～13 は、須恵器杯身である。すべて 6 世紀後半頃の製品である。9・11 は、296 竪穴住居 2 埋土より、12 は、296 竪穴住居竈 (295 土坑) 内より、10・13 は、297 竪穴住居竈内より出土した。10 の底部内面には同心円文タタキ後、静止ナデによってすり消した痕跡が残る。12 は、外面に細かい粘土塊の付着が目立つ。内面底部付近には、小さな亀裂が走る。13 は、胎土に含まれた白色礫が、露出する箇所がある。

図 57 - 14 は、土師器甕の口縁部である。口縁より頸部内面にかけて、横方向のハケ目をめぐらせる。外面は磨滅が著しい。3 - 1 区 120 竪穴住居の上層より出土した。

図 57 - 15 は、土師器高杯の杯部である。外面は磨滅が著しく、調整痕跡はわずかに指頭圧痕を残すのみである。口縁部近くに二次焼成による変色箇所が認められる。303 竪穴住居より、杯部を伏せ

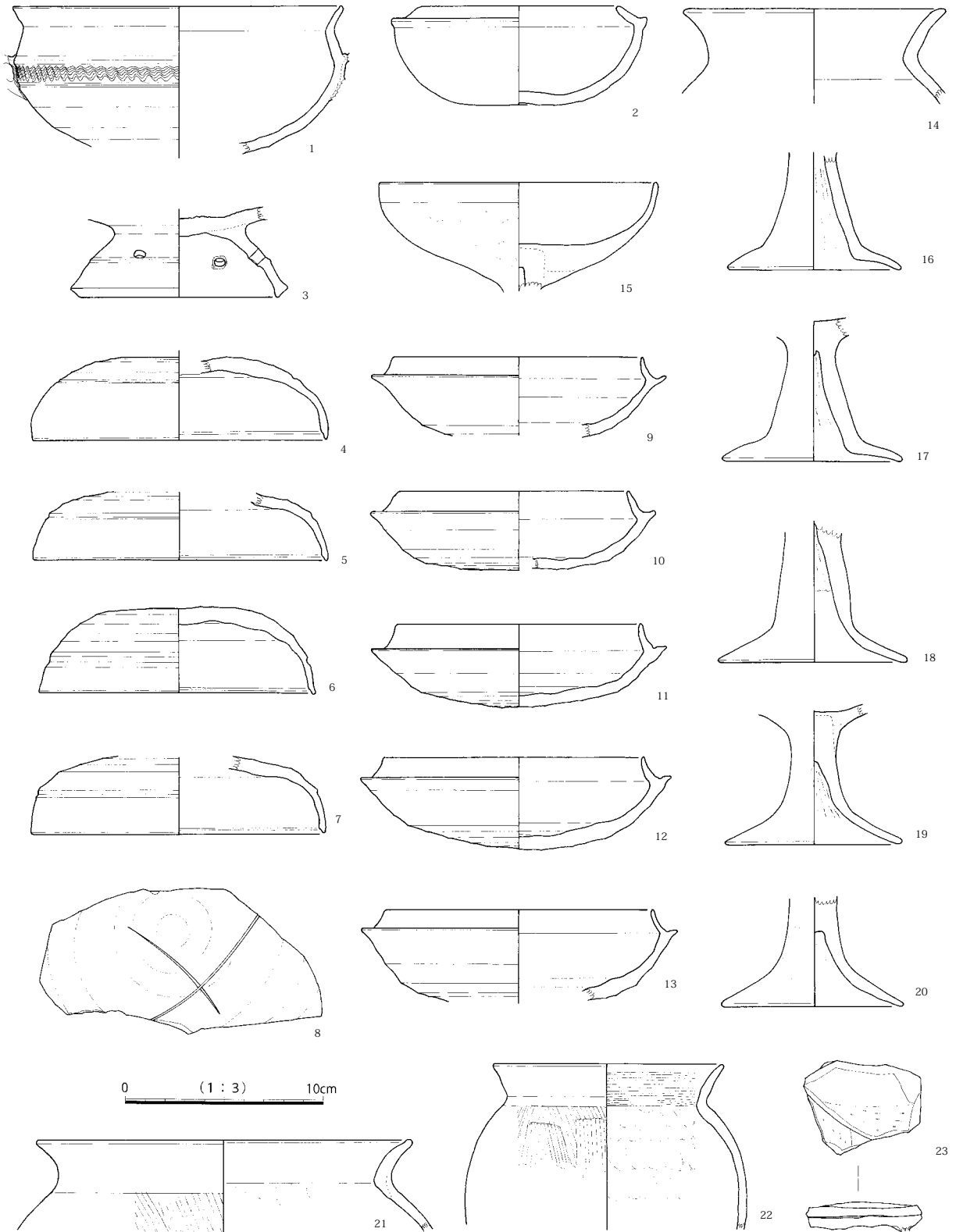


図 57 第 3 調査区出土遺物 (1)

た状態で出土した。6世紀後半の製品である。

図57-16~20は、土師器高杯の脚部である。16は118 竪穴住居埋土より、17は119 土坑より、18は105 竪穴住居壁溝付近より、19は296 竪穴住居内より、20は296 竪穴住居西側の竈より出土した。16~19の外側はハケ後ヘラミガキまたはナデ調整、内側には脚柱部上位を圧縮した際にできた絞り目が認められる。16・20は、内面を板状工具によって削り取っている。すべて6世紀後半~7世紀初頭の製品である。

図57-21・22は、土師器甕である。21は、口縁端部を丸く作る。外側は幅1.5cm程度の原形を用いたハケ調整を施す。22の口縁内側には横方向にハケをめぐらせる。肩部外側は、縦方向のハケ、内側は、指頭圧痕が顕著である。ともに6世紀の製品である。

図57-23は、須恵器の融着資料である。破片であるが1点は杯身の破片である。オリーブ色を呈する自然釉によってもう一個体と接着された状態にある。焼き歪みがひどく、杯身として実際の使用に耐えたとは考えがたい。296 竪穴住居上層より出土した。

図58には、3-1区より出土した遺物の実測図を掲載した。

図58-1~3は、須恵器杯身である。1・2は、TK 43~TK 209 型式に分類される製品である。3は、大粒の白色礫を多く含むため、露出する箇所では器壁表面にひび割れが生じている。6世紀中~後半の製品である。1は中世である34溝から、2・3は111溝下層より出土した。

図58-4は、須恵器長頸壺の蓋である。小型品で、最大径は10cm程度を測る。頂面をくぼませた摘部を大きく作り、その周辺に回転カキ目を一周させる。焼成は甘く、内外面ともににぶい灰褐色を呈する。6世紀後半の製品である。完形で111溝上層より出土した。

図58-5~7は、須恵器甕の口縁部である。5は、口縁端部を細かく損じており、意図的に打ち欠

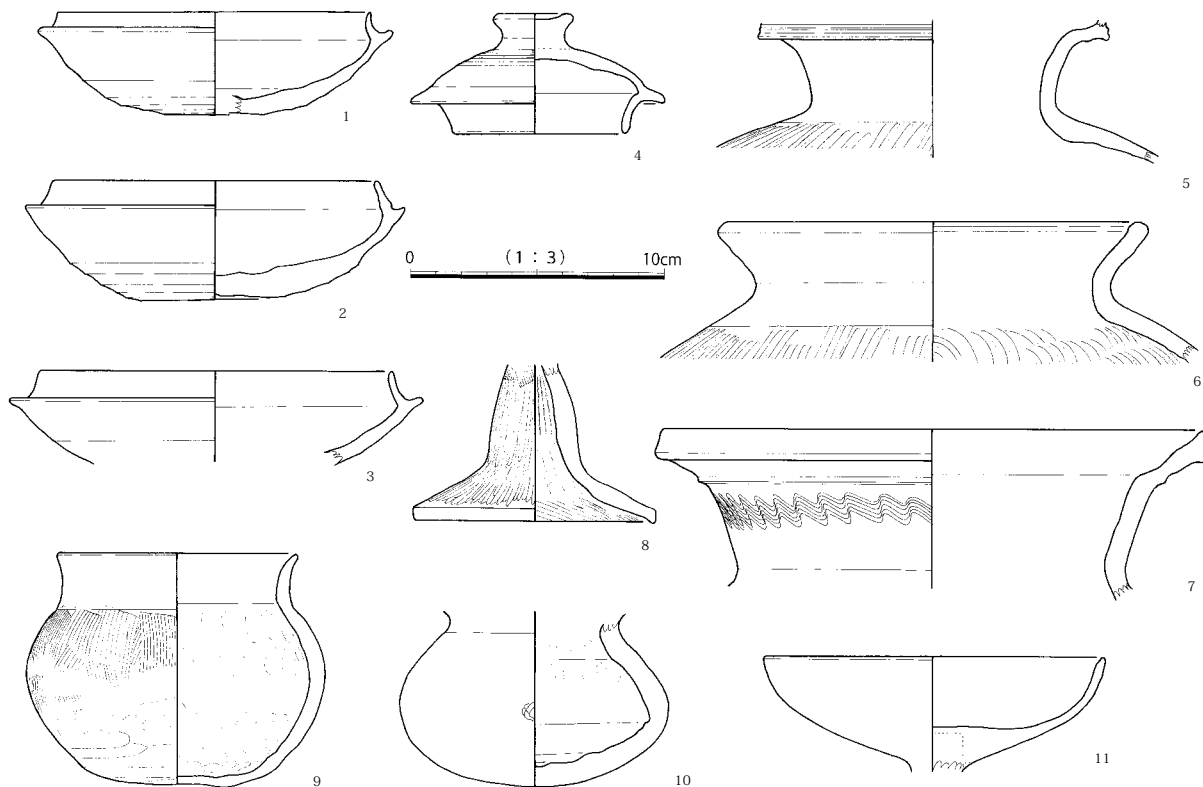


図58 第3調査区出土遺物(2)

いた可能性がある。体部外面は平行タタキ、口縁部内面には縦方向に静止ナデを施した痕跡が一部に認められる。仕上げは粗雑で焼成は甘く、内外面ともに赤褐色を呈する。5世紀後半～6世紀の製品である。111溝下層より出土した。

図58-6は、丸い口縁端部をもつ6世紀の製品である。体部外面は平行タタキ、内面には同心円文タタキを施す。焼成は良好、灰白色を呈する。中世溝である57溝より出土した。

図58-7は、口縁内面を強く横方向になで、やや角度をつけて外方へ開く形状をもつ。口縁外面に波状文を一条施す。6世紀後半の製品である。111溝下層より出土した。

図58-8は、土師器高杯の脚部である。脚柱のふくらみが強く、外方へ大きく開く。外面は、ハケ調整の後、縦方向のヘラミガキを施す。内面裾部はハケ調整後ナデ、脚柱内面には絞り目が残る。7世紀初頭の製品である。100溝埋土より出土した。

図58-9は、土師器小型甕である。丸味をもつ体部から短く立ち上がる口縁をもつ。口縁はヨコナデ以前のハケ目がわずかに残る。体部上半は斜め～縦方向に、下半部は横方向にハケ調整を施す。器壁に凹凸があり、全体的に無骨な印象を与える。6世紀後半の製品である。〔建物15〕の北東隅柱の109ピット内より出土した。

図58-10は、土師器の壺である。厚い器壁をもつ。外面調整はハケ調整後にナデを施す。肩部や胴部中央に器壁を損する部位がある。器形が甕に似ることから、焼成後穿孔を試みた可能性を疑う。111溝より出土した。

図58-11は、土師器高杯の杯部である。器壁表面は、磨滅が著しい。111溝上層より出土した。

図59には、3-1区・3-2区より出土した中世の遺物を掲載した。

図59-1～5は、土師器皿である。すべて近現代水路の前身である中世水路と、その周辺の鋤溝より出土した。6・7は、瓦器である。6は、小型の椀である。斜めに伸びる体部から口縁を上方に向かって立ち上げ、口縁端部をわずかに外反させる。底部には断面三角形の高台を貼り付けている。口縁内面

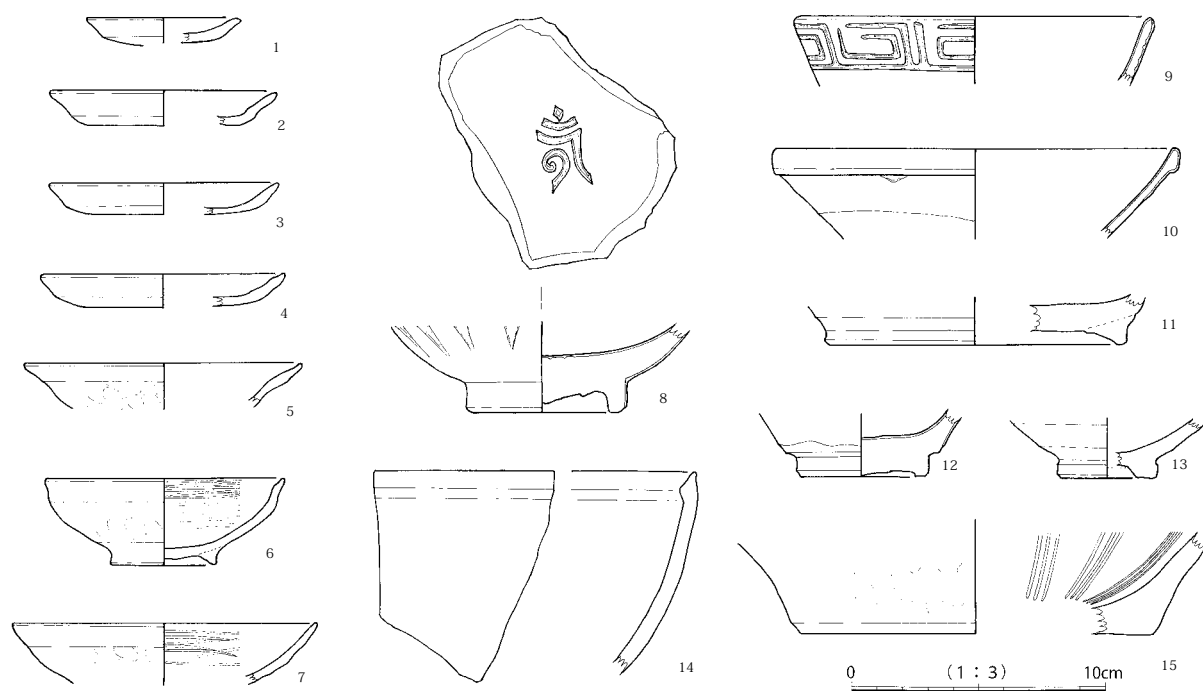


図59 第3調査区出土遺物(3)

は、横方向に強くなでる。7は、和泉型の椀である。低い器高に対して、大きく開く口縁をもつ。内面にはまばらなミガキを施す。13世紀の製品である。

図59-8～13は陶磁器で、8は青磁碗で、器壁外面に蓮弁文、内面中央に梵字を一字刻む。現時点では該当する文字が確認できていないため、異体字の可能性はある。国内では泉佐野市上町東遺跡、広島県三原遺跡の出土品に類例があり、すべて同一文字が刻まれている。9は、龍泉窯系の青磁碗である。やや不明瞭ながら、口縁部外面に雷文帯をめぐらせている。口縁端部には、使用による磨滅が認められる。14世紀末～15世紀の製品である。近世水路（27溝）内より出土した。

図59-10は、厦門碗窯系白磁碗の口縁部である。内面および外面の上半位まで施釉する。口縁付近に釉溜りが認められる。13世紀後半から14世紀の製品である。

図59-11は灰釉陶器鉢の底部である。底部外面には回転糸切り痕、ヘラ状工具による擦痕を残す。高台は、断面台形の貼り付け高台である。内面のうち底部中央は露胎、器壁の一部にオリーブ黄色を呈する釉の塗布が認められる。

図59-14・15は瓦質土器の鉢である。14は、口縁が内湾する鉢であり、口縁端部をとがらせる。15は、播鉢の底部であり、内面に3本を1セットとする播り目が残る。

以上、第3調査区の調査成果を記述した。この調査区では、既往の調査成果に連続する遺構を数多く検出することができた。また、竪穴住居3棟や掘立柱建物2棟を新たに検出することができた。

特に、南半部にあたる3-2区や3-4区では、新たなる竪穴住居を4棟を検出したほか、柱穴等の濃密な分布を確認することができた。これらの成果によって、古墳時代後期の上私部集落は、さらに南へと広がることが確実となった。

第4節 第4調査区

1. 調査区の状況と基本層序

調査区の状況 第4調査区は、平成19年度調査の上私部遺跡（その3）〔本書第I部報告〕において、掘立柱建物をはじめとする遺構群が密に検出された調査区の北側にあたる。現況は住宅地および里道で、標高は東から西へ向かってなだらかに下がる。第2調査区と同様、遺構面は宅地盛土によって守られた部分と、ライフラインの埋設によって大きく損傷を受けた箇所がある。

主要遺構面である古墳時代～古代初頭遺構面の標高は、T.P.33.2～33.4 m前後、調査区中央部分がわずかに高く、東西に向かって緩やかに下がる。中世期には、この傾斜途中に段を設けて水田の境とし、溝を掘り、畦を築いた。これが近年の開発によって再び均され、緩い傾斜をもつ現況に至っている。

基本層序 調査区の中央部では、盛土および旧耕作土の下に中世末～近世包含層、中世包含層があり、これを除去した段階で、地山の露呈を確認した。地山上面が古墳時代後期～古代初頭遺構面に相当する。遺構面は東西に向かって緩やかに傾斜するため、調査区の東西端では、薄層ながら古墳時代後期包含層の残存を確認することができた。

中世末～近世初頭包含層および、中世包含層は基本的に耕作土であり、黄灰色粗砂まじりシルトを主体とする。しかし、オリーブ黒色を呈する古墳時代包含層を激しく巻き上げるため、混じり合って黒色化の著しい箇所がある。調査区西半部では、中世末～近世初頭包含層を除去した面において、南北方向に伸びる畦、杭列を伴う溝を検出した。

古墳時代～古代初頭包含層は、オリブ黒色粘土質シルトを主体とする。軟質で土器片を多く含むが、細片が多い。地山は、灰オリブ色～緑灰色を呈するしまりの良い粗砂まじりシルト層である。

2. 検出遺構

今回の調査では、古墳時代後期～古代初頭の掘立柱建物を、あわせて9棟検出した(図62)。このうち1棟は、既往の調査時に確認されていた建物〔建物2〕に連続すると考えられる。建物の規模は、2間×2間を数える総柱建物が3棟(建物460・建物461・建物572)、4間×3間の建物が1棟(建物433)、5間×4間の建物が1棟(建物432)、他一部のみを検出した柱列群が3棟分(建物431・建物573・建物576)である。

柱穴の上下関係と建物の方向軸から、

- ① 建物461(2間×2間総柱)・建物572(2間×2間総柱)・建物460(2間×2間総柱)
- ② 建物573(2間×3間以上)・建物576(4間×2間以上)
- ③ 建物432(5間×4間)
- ④ 建物433(4間×3間)
- ⑤ 建物431(3間×1間以上)

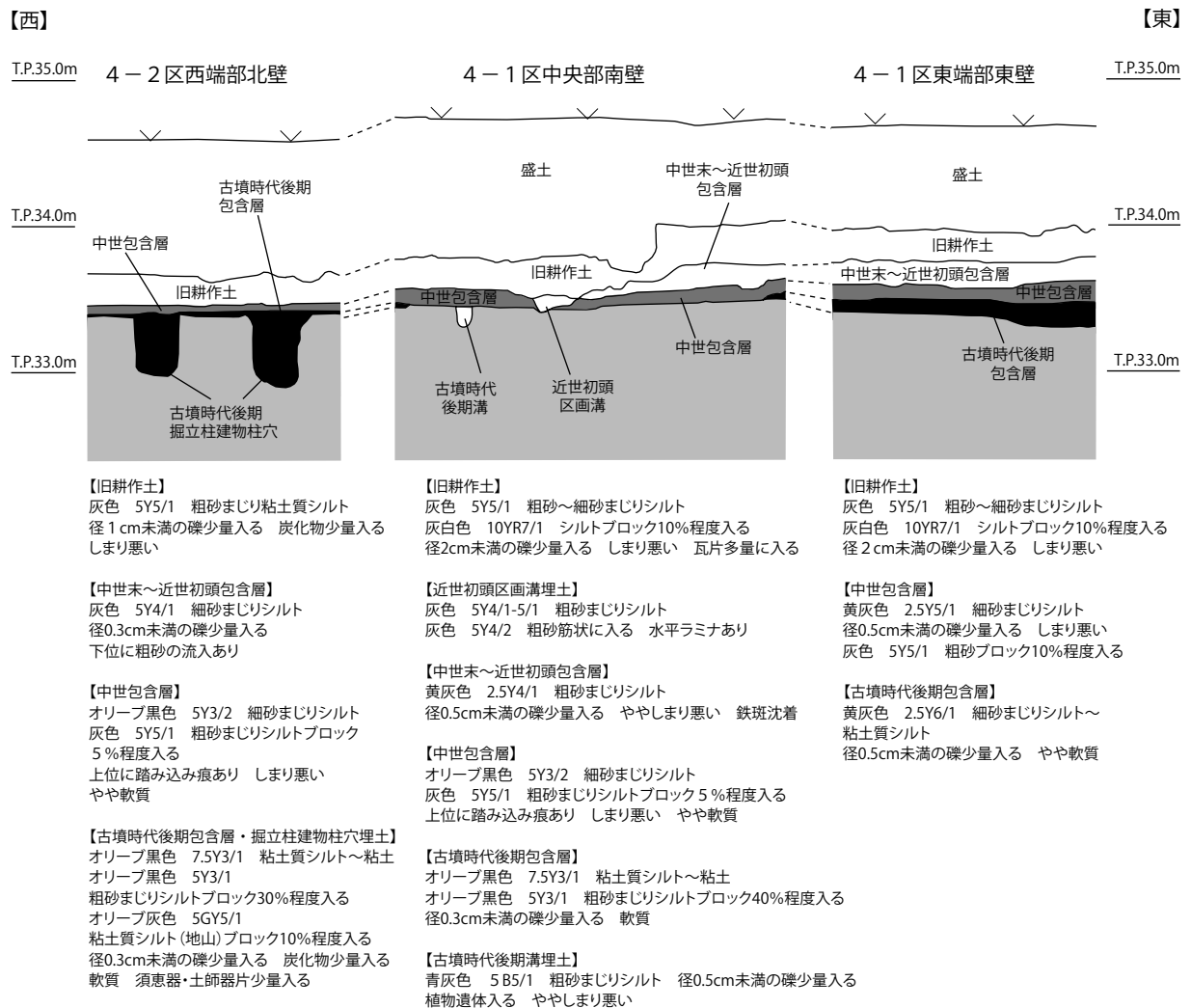


図60 第4調査区基本層序模式図

という、計5期の時期差を想定することができる。

建物の存続時期は、既往の調査成果との対比からおおむね、①期＝6世紀前半～中頃、②期＝不明ながら6世紀中頃～後半、③・④期＝6世紀後半～7世紀前半、⑤期＝7世紀以降と捉えている。

このうち①期の建物群は、平成19年度の調査において確認されている竪穴住居と方向軸が合致する。②期の建物は、平成15年度に調査がなされた区画溝に平行する方向軸をもつ。③期の建物432は、大型の柱穴を備えた建物で、柱数、床面積ともに上私部遺跡集落の中では最大級に分類される。既往の調査では、この時期を、竪穴住居から掘立柱建物への移行期と捉えている。なお、建物432の柱穴のうち、3基に柱根が残存していた(図版三三 5～7)。

建物431(図63) 4-1区北辺部において検出した柱穴群からなる建物である。柱間は、3間×1間以上を数えると考えられるが、調査区外へと続くため、明らかではない。ピットは、413・414・418・419・428の5点を確認した。柱間の長さは、1.52～1.88 m程度である。

検出した南側柱列の長さは、5.00 mを測る。この南側柱列を建物の長辺とするならば、建物の主軸は方位北に対して70度東に振る方向となる。柱穴は、直径50cm前後を測る円形ないし隅丸方形の平面形状をもつ。柱痕は、直径20cm前後である。柱穴掘り方の埋土からは、須恵器甕の小片が出土した。

建物432(図64) 調査区中央において検出した建物である。一部調査区外にかかるため確認できていないピットもあるが、5間×4間の規模をもつ掘立柱建物として復元できる。柱間の長さは1.60～2.00 m程度で、長辺の方がやや長い。建物の主軸は方位北に対して71度東に振る。建物の長辺は9.80 m、短辺は6.60 m、床面積は64.68㎡を測る。上私部遺跡集落では、最大級の規模をもつ建物である。

柱穴は、直径60～90cmを測る円形ないし隅丸方形の平面形状をもつ。柱痕は、直径18cm前後で

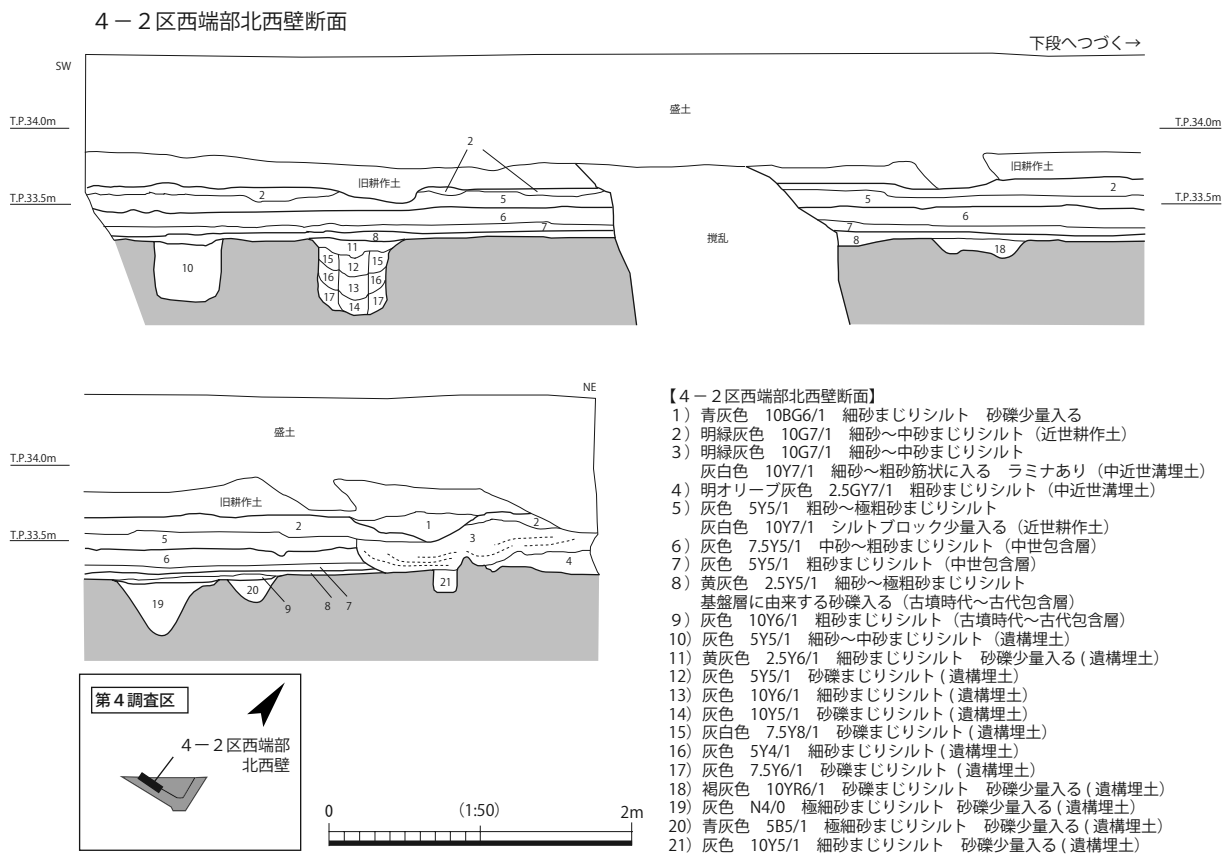


図61 第4調査区壁断面図

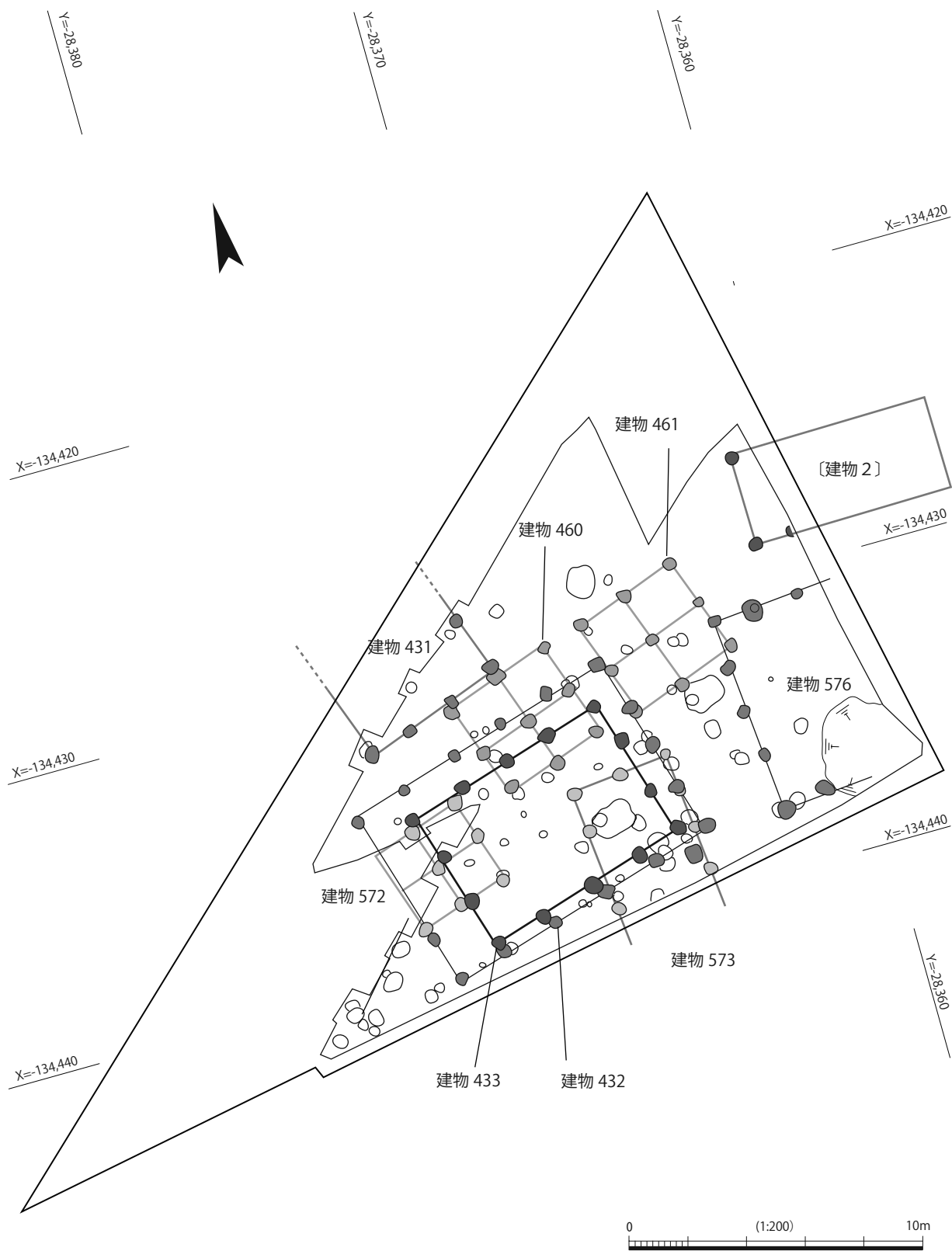


図 62 第 4 調査区遺構面全体図 (古墳時代後期～古代初頭)

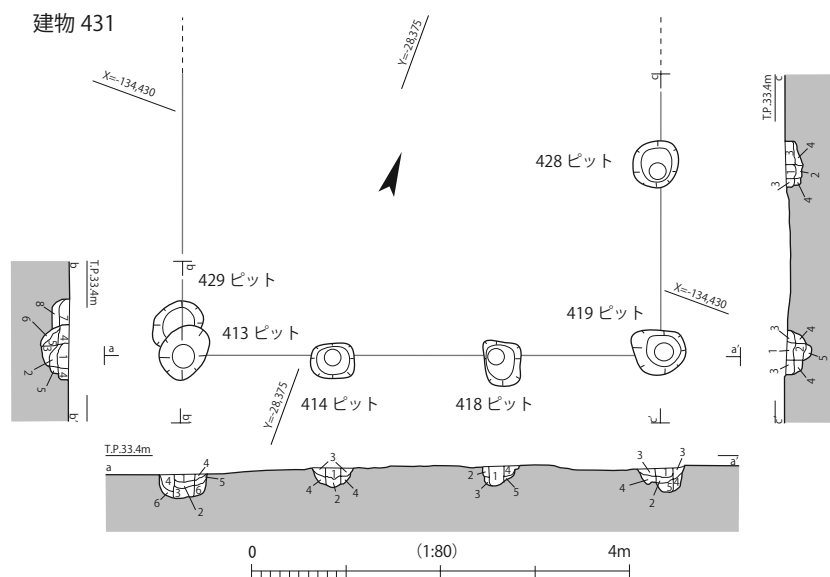
ある。このうち、488ピットには、柱根が残存していた。

建物 433 (図 65) 建物 432 と同様、調査区中央において検出した建物である。建物 432 よりも小規模であるため、その内側に入り込むように位置している。ただし、南西隅の柱穴が建物 432 の南側柱列のひとつと重なるため新旧関係が明らかであり、小規模な建物である建物 433 の方が新しいことがわかっている。

4 間×3 間の規模をもつ掘立柱建物で、柱間の長さは 1.60～1.92 m 程度である。北側柱列は、対応する南側柱列に比べて、柱間の長さにばらつきがある。

建物の主軸は方位北に対して 71 度東に振る。建物の長辺は 7.12 m、短辺は 5.00 m、床面積は 35.60㎡を測る。柱穴は、直径 60～90cm を測る円形ないし隅丸方形の平面形状をもつ。標高が高い場所に設けられた北側柱列に比べて、若干低いところに設けられた南側柱列の方が、柱穴は深く残る。柱痕跡は、直径 18cm 前後である。柱穴埋土からは、須恵器甕、土師器甕の小片が出土した。

建物 460 (図 66) 調査区中央部において検出した建物である。建物 431 の柱群とは切り合う関係で、



[413ピット]

- 1) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
黄灰色 2.5Y4/1 粗砂ブロック 10% 程度入る 軟質 鉄分沈着
- 2) 黒褐色 2.5Y3/1 細砂まじり粘土
暗灰黄色 2.5Y5/2 粘土ブロック 20% 程度入る
径 0.3 cm 未満の礫少量入る 軟質
- 3) 黒色 2.5Y2/1 細砂まじり粘土
黄灰色 2.5Y4/1 粗砂ブロック 20% 程度入る 軟質 炭化物入る
- 4) 1) 層に近似 ややしまる
- 5) 黒色 2.5Y2/1 粗砂まじり粘土
黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルトブロック 30% 程度入る
径 0.5 cm 未満の礫少量入る
- 6) 5) 層に近似 より軟質
- 7) 黄灰色 2.5Y4/1 細砂まじり粘土質シルト
オリーブ褐色 2.5Y4/4 シルトブロック 5% 程度入る
径 0.3 cm 未満の礫少量入る 軟質 (429ピット埋土)
- 8) 黄灰色 2.5Y4/1 細砂まじり粘土質シルト
径 0.3 cm 未満の礫少量入る
黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルトブロック 20% 程度入る
軟質 (429ピット埋土)

[414ピット]

- 1) 黒色 2.5Y2/1 粘土質シルト～粘土
暗灰黄色 2.5Y5/2 粗砂ブロック 5% 程度入る
径 0.3 cm 未満の礫少量入る やや軟質
- 2) 黒色 2.5Y2/1 細砂まじり粘土質シルト
黄灰色 2.5Y4/1 粗砂ブロック 10% 程度入る 軟質
- 3) 黒色 2.5Y2/1 粗砂まじり粘土質シルト 径 0.3 cm 未満の礫多量入る
ややしまる やや軟質 炭化物入る 土器片入る
- 4) 黒色 2.5Y2/1 粗砂まじり粘土～粘土質シルト 軟質

[428ピット]

- 1) 黒色 2.5Y2/1 粘土質シルト～粘土
暗灰黄色 2.5Y5/2 粗砂ブロック 5% 程度入る 径 0.3 cm 未満の礫少量入る
やや軟質
- 2) 黒色 2.5Y2/1 細砂まじり粘土質シルト
黄灰色 2.5Y4/1 粗砂ブロック 10% 程度入る 軟質
- 3) 黒色 2.5Y2/1 粗砂まじり粘土質シルト 径 0.3 cm 未満の礫多量入る ややしまる
やや軟質炭入る 土器片入る 1) 層に比べて砂礫多く入る
- 4) 黒色 2.5Y2/1 粗砂まじり粘土～粘土質シルト 軟質

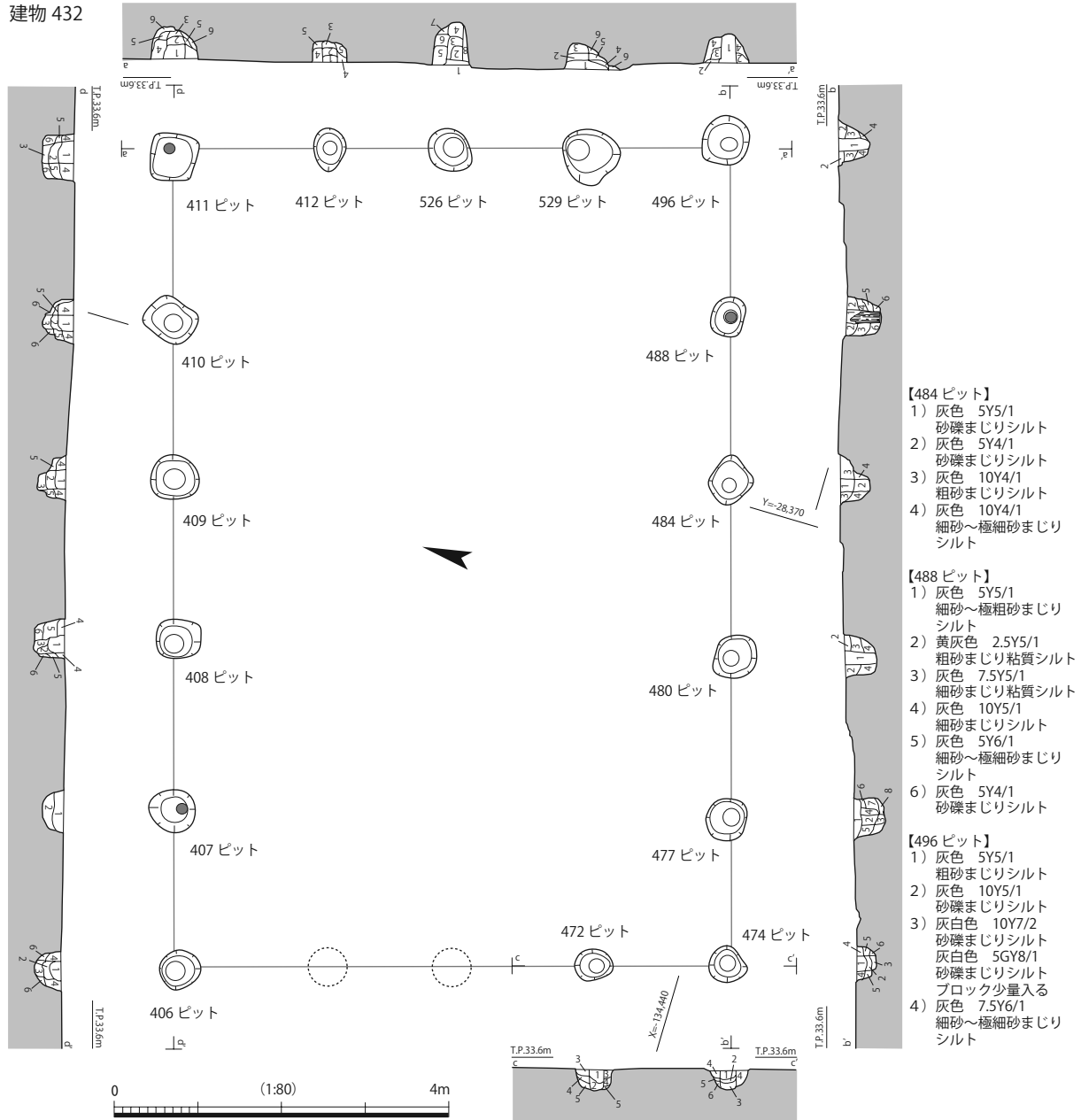
[418ピット]

- 1) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト 径 1 cm 未満の礫少量入る やや軟質
- 2) 黒色 2.5Y2/1 細砂まじり粘土質シルト
黄灰色 2.5Y4/1 粘土ブロック 5% 程度入る やや軟質
- 3) 2) 層に近似 さらに軟質 炭化物入る
- 4) 黒色 2.5Y2/1 粗砂まじり粘土質シルト 径 0.5 cm 未満の礫少量入る やや軟質
- 5) 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗砂まじりシルト 4) 層ブロック 5% 程度入る

[419ピット]

- 1) 黒色 2.5Y2/1 粘土質シルト～粘土
暗灰黄色 2.5Y5/2 粗砂ブロック 5% 程度入る
径 0.3 cm 未満の礫少量入る やや軟質
- 2) 黒色 2.5Y2/1 細砂まじり粘土質シルト
黄灰色 2.5Y4/1 粗砂ブロック 10% 程度入る 軟質
- 3) 黒色 2.5Y2/1 粗砂まじり粘土質シルト 径 0.3 cm 未満の礫多量入る
ややしまる やや軟質 炭化物入る 土器片入る 1) 層に比べて砂礫多く入る
- 4) 黒色 2.5Y2/1 粗砂まじり粘土～粘土質シルト 軟質
- 5) 黒褐色 2.5Y3/2 粗砂まじりシルト 4) 層ブロック 20% 程度入る しまり悪い
軟質

図 63 建物 431 平面・断面図



[406・407・408・409・410・411・412ピット]

- 1) オリーブ黒色 5Y3/1 細砂まじり粘土質シルト
灰色 5Y4/1 粘土ブロック 20%程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る やや軟質 炭化物入る
- 2) 黒色 5Y2/1 粗砂まじり粘土質シルト
灰オリーブ色 5Y4/2 粘土ブロック 10%程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る 軟質
- 3) 黒色 5Y2/1 粗砂まじり粘土 非常に軟質
- 4) 黒色 2.5Y2/1 粗砂まじり粘質シルト
暗灰黄色 2.5Y4/2 粘土ブロック 20%程度入る
炭化物入る 土器片入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る やや軟質 鉄分沈着
- 5) 黒褐色 2.5Y3/1 細砂まじり粘土質シルト
黄灰色 2.5Y4/1 粗砂まじり粘質シルトブロック
30%程度入る 鉄分沈着
- 6) オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじり粘土質シルト
オリーブ黒色 5Y3/1 粘土 10%程度入る
灰色 5Y4/1 粗砂まじり粘質シルトブロック
10%程度入る 径 0.5 cm未満の礫多量入る

[472ピット]

- 1) 灰色 5Y4/1 粗砂まじりシルト
- 2) 灰色 5Y5/1 細砂～中砂まじりシルト
- 3) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト
灰白色 5GY8/1 砂礫まじりシルトブロック入る
- 4) 黄灰色 2.5Y5/1 砂礫まじりシルト
- 5) 灰色 5Y4/1 砂礫まじりシルト

[474ピット]

- 1) 灰色 N4/0 細砂～極粗砂まじりシルト
砂礫微量入る
- 2) 灰色 N5/0 細砂～極粗砂まじりシルト
- 3) 灰色 10Y4/1 極粗砂まじり粘質シルト
- 4) 灰色 5Y5/1 砂礫まじりシルト
- 5) 灰色 10Y5/1 砂礫まじり粘質シルト
- 6) 灰色 10Y5/1 砂礫まじり粘質シルト
灰白色 5GY8/1 砂礫まじりシルトブロック入る

[477ピット]

- 1) 灰色 10Y4/1 極細砂～細砂まじりシルト
- 2) 灰色 10Y5/1 粗砂まじりシルト
- 3) 黄灰色 2.5Y6/1 粗砂～極粗砂まじりシルト
- 4) 青灰色 5B5/1 極細砂まじりシルト
- 5) 暗青灰色 10BG4/1 細砂まじりシルト
- 6) 灰色 N4/0 細砂まじりシルト
- 7) 暗青灰色 5BG4/1 細砂～極細砂まじり粘質シルト
- 8) 明緑灰色 5G7/1 粗砂まじりシルト

[480ピット]

- 1) 灰色 5Y4/1 砂礫まじり粘質シルト
- 2) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト
- 3) 灰色 5Y5/1 砂礫まじりシルト
- 4) 灰色 7.5Y4/1 粗砂～極粗砂まじりシルト

[526ピット]

- 1) 灰色 5Y5/1 砂礫まじりシルト
- 2) 灰色 7.5Y5/1 極細砂まじり粘質シルト
- 3) 灰色 10Y5/1 極細砂まじりシルト
- 4) 灰色 10Y4/1 細砂まじりシルト
- 5) 灰オリーブ色 5Y6/2 砂礫まじりシルト
- 6) 黄灰色 2.5Y6/2 砂礫まじり粘質シルト
- 7) 褐灰色 10YR4/1 砂礫まじりシルト
- 8) 黄灰色 2.5Y5/1 砂礫まじりシルト

[529ピット]

- 1) 灰色 10Y4/1 細砂～極細砂まじりシルト
- 2) 灰色 5Y5/1 極細砂まじりシルト
粘性あり
- 3) 灰色 7.5Y5/1 極細砂まじりシルト
- 4) 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1
砂礫まじりシルト
- 5) 暗オリーブ灰色 5GY4/1
砂礫まじりシルト
4)層より砂礫多量入る
- 6) 灰色 10Y4/1 細砂まじりシルト

[484ピット]

- 1) 灰色 5Y5/1
砂礫まじりシルト
- 2) 灰色 5Y4/1
砂礫まじりシルト
- 3) 灰色 10Y4/1
粗砂まじりシルト
- 4) 灰色 10Y4/1
細砂～極細砂まじりシルト

[488ピット]

- 1) 灰色 5Y5/1
細砂～極粗砂まじりシルト
- 2) 黄灰色 2.5Y5/1
粗砂まじり粘質シルト
- 3) 灰色 7.5Y5/1
細砂まじり粘質シルト
- 4) 灰色 10Y5/1
細砂まじりシルト
- 5) 灰色 5Y6/1
細砂～極細砂まじりシルト
- 6) 灰色 5Y4/1
砂礫まじりシルト

[496ピット]

- 1) 灰色 5Y5/1
粗砂まじりシルト
- 2) 灰色 10Y5/1
砂礫まじりシルト
- 3) 灰白色 10Y7/2
砂礫まじりシルト
灰白色 5GY8/1
砂礫まじりシルト
ブロック少量入る
- 4) 灰色 7.5Y6/1
細砂～極細砂まじりシルト

図 64 建物 432 平面・断面図

建物 431 に先行する遺構であることが確認できている。規模は 2 間×2 間を測る総柱建物である。

柱間の長さは 1.80 m 前後である。建物は東西長が若干長く 3.60 m、南北長が 3.40 m を測る。床面積は、12.24㎡である。建物の長辺軸は方位北に対して 70 度東に振る。柱穴は、中央柱である 420 ピットの最大径が 60cm の楕円形、そのほかは、直径 50cm 前後の円形ないし隅丸方形の平面形状をもつ。中央柱の掘り方は他に比べて浅い。柱痕は、直径 20cm 前後である。

建物 461 (図 67) 建物 461 の東側において検出した 2 間×2 間の規模をもつ総柱建物である。建物 460 とは、距離が近く、同時期に並設したとは考えにくい。

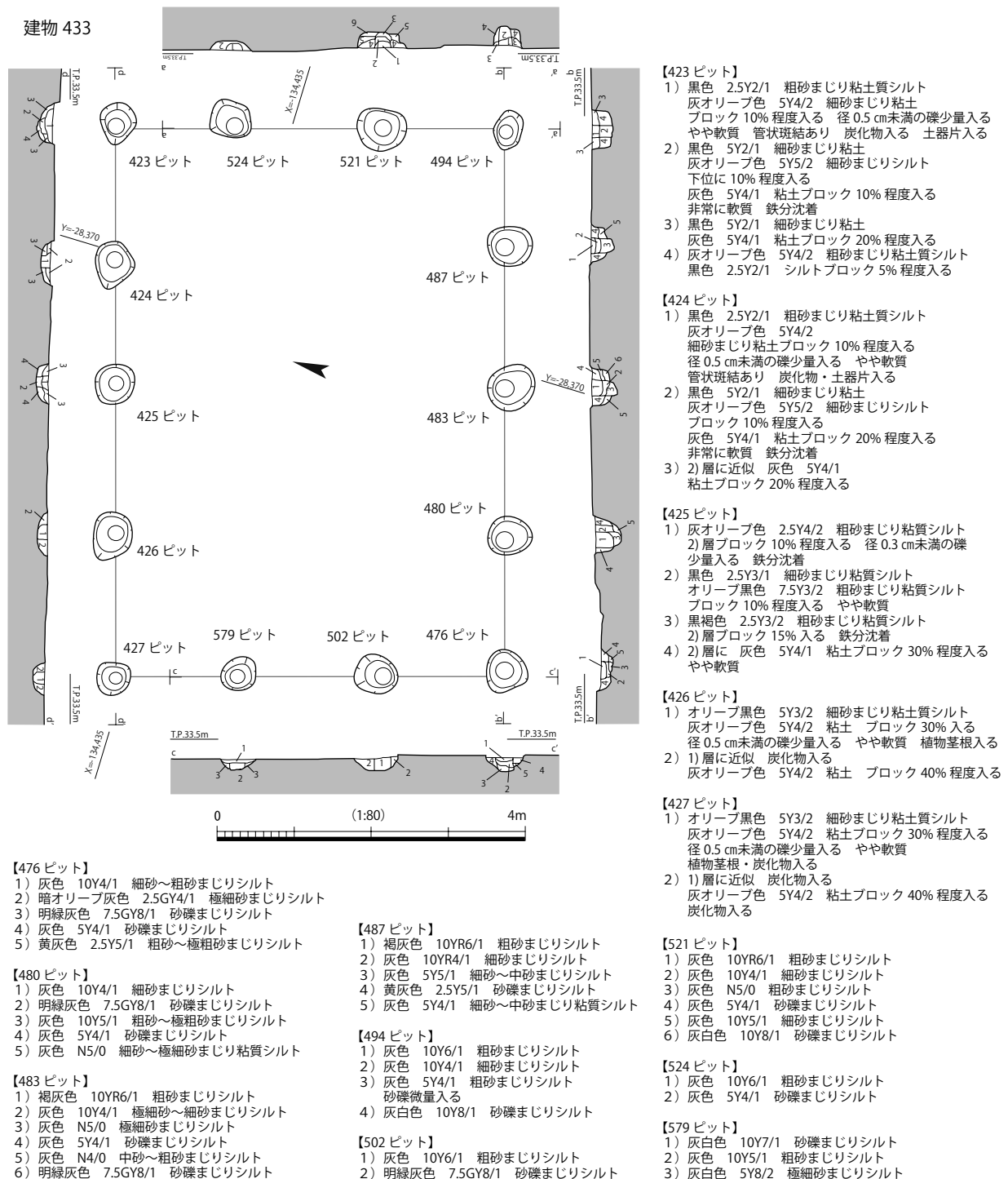
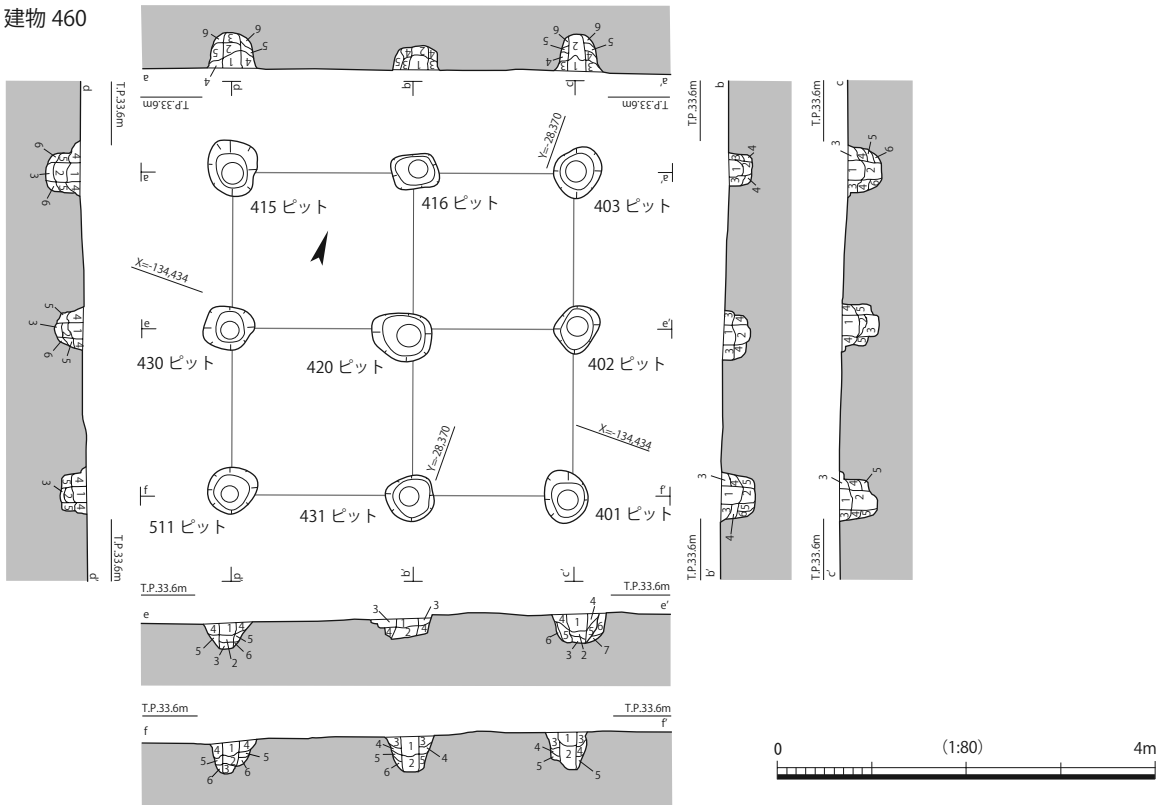


図 65 建物 433 平面・断面図



【401 ビット】

- 1) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト
灰オリーブ色 5Y4/2 粘土ブロック 30% 程度入る
鉄分沈着 炭化物入る やや軟質
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまりやや良い
- 2) 黒色 2.5Y2/1 細砂まじり粘土
暗灰黄色 2.5Y4/2 粘土ブロック 30% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る 非常に軟質
- 3) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト
灰オリーブ色 5Y4/2 粘土ブロック 20% 程度入る
灰オリーブ色 5Y5/3 粗砂まじりシルトブロック
10% 程度入る
灰色 5Y4/1 粘土ブロック 5% 程度入る 鉄分沈着
- 4) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘土 非常に軟質 鉄分沈着
- 5) オリーブ黒色 5Y3/1 細砂まじり粘土
灰色 5Y4/1 シルトブロック 20% 程度入る

【402 ビット】

- 1) 黒色 5Y2/1 粗砂まじり粘土～粘質シルト
灰オリーブ色 5Y4/2 粘土ブロック 5% 程度入る
径 0.3 cm未満の礫少量入る やや軟質
- 2) 灰オリーブ色 5Y4/2 粘土
黒色 5Y2/1 粗砂まじり粘質シルトブロック 30%
程度入る 径 0.5 cm未満の礫僅かに入る 非常に軟質
- 3) 黒色 5Y2/1 粘土質シルト～粘土
オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂～粗砂まじりシルトブロック
30% 程度入る 非常に軟質
- 4) 1)層に近似 やや軟質 鉄分沈着
- 5) 2)層に近似 粗砂の含有率高い 鉄分沈着
- 6) 5)層に近似 灰色 5Y4/1 シルトブロック少量入る
- 7) 黒色 5Y2/1 粘土 径 0.5 cm未満の礫少量入る 非常に軟質

【403 ビット】

- 1) 黒色 5Y3/1 細砂まじり粘土～粘質シルト
黒色 2.5Y2/1 粗砂ブロック 5% 程度入る 軟質
- 2) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
暗灰黄色 2.5Y4/2 粘土ブロック 20% 程度入る
径 0.3 cm未満の礫少量入る 軟質 炭化物入る
- 3) 黒色 2.5Y2/1 粗砂まじり粘土～粘質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る 軟質 鉄分沈着
- 4) 3)層に近似 より軟質
暗灰黄色 2.5Y4/2 粘土ブロック 20% 程度入る
- 5) 黒褐色 2.5Y3/1 粘土～粘土質シルト
暗灰黄色 2.5Y4/2 粘土ブロック 10% 程度入る
径 0.3 cm未満の礫少量入る
- 6) 黒褐色 2.5Y3/2 粗砂まじり粘質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る 軟質

【415 ビット・430 ビット】

- 1) 黒褐色 2.5Y3/1 微砂まじり粘土
黄灰色 2.5Y5/1 粗砂まじりシルトブロック 10% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る
- 2) オリーブ黒色 5Y3/1 微砂まじり粘土
灰色 5Y4/1 粘土ブロック 10% 程度入る非常に軟質
- 3) オリーブ黒色 5Y3/1 粘土
灰色 5Y4/1 粗砂まじりシルトブロック 10% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る
- 4) オリーブ黒色 5Y3/1 細砂まじり粘土質シルト
灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじりシルトブロック 20% 程度入る 1)層に比べて砂質
- 5) 2)層に近似 より砂質
- 6) 3)層に近似 より砂質

【416 ビット】

- 1) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト 径 0.3 cm未満の礫少量入る 軟質 土器片入る
- 2) 1)層に近似 より軟質
- 3) 黒褐色 2.5Y3/1 細砂まじり粘質シルト
オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘土ブロック 20% 程度入る 軟質 径 0.5 cm未満の礫少量入る
- 4) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト
オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘土ブロック 40% 程度入る 鉄分沈着
- 5) 黒褐色 2.5Y3/1 細砂まじり粘質シルト
オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘土ブロック 50% 程度入る 鉄分沈着

【420 ビット】

- 1) 黒色 2.5Y2/1 細砂まじり粘質シルト
暗灰黄色 2.5Y4/2 粘土ブロック 5% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る やや軟質
- 2) 黒色 5Y2/1 粗砂まじり粘土
灰色 5Y4/1 粗砂ブロック下位に 10% 程度入る 軟質
- 3) 黒色 5Y2/1 粗砂まじり粘土
灰オリーブ色 5Y2/1 粘土ブロック 10% 程度入る 軟質 鉄分沈着 炭化物入る
- 4) 黒色 5Y2/1 粗砂まじり粘質シルト 鉄分沈着
灰オリーブ色 5Y4/2 細砂まじり粘質シルト 50% 程度入る しまり悪い やや軟質

【431 ビット】

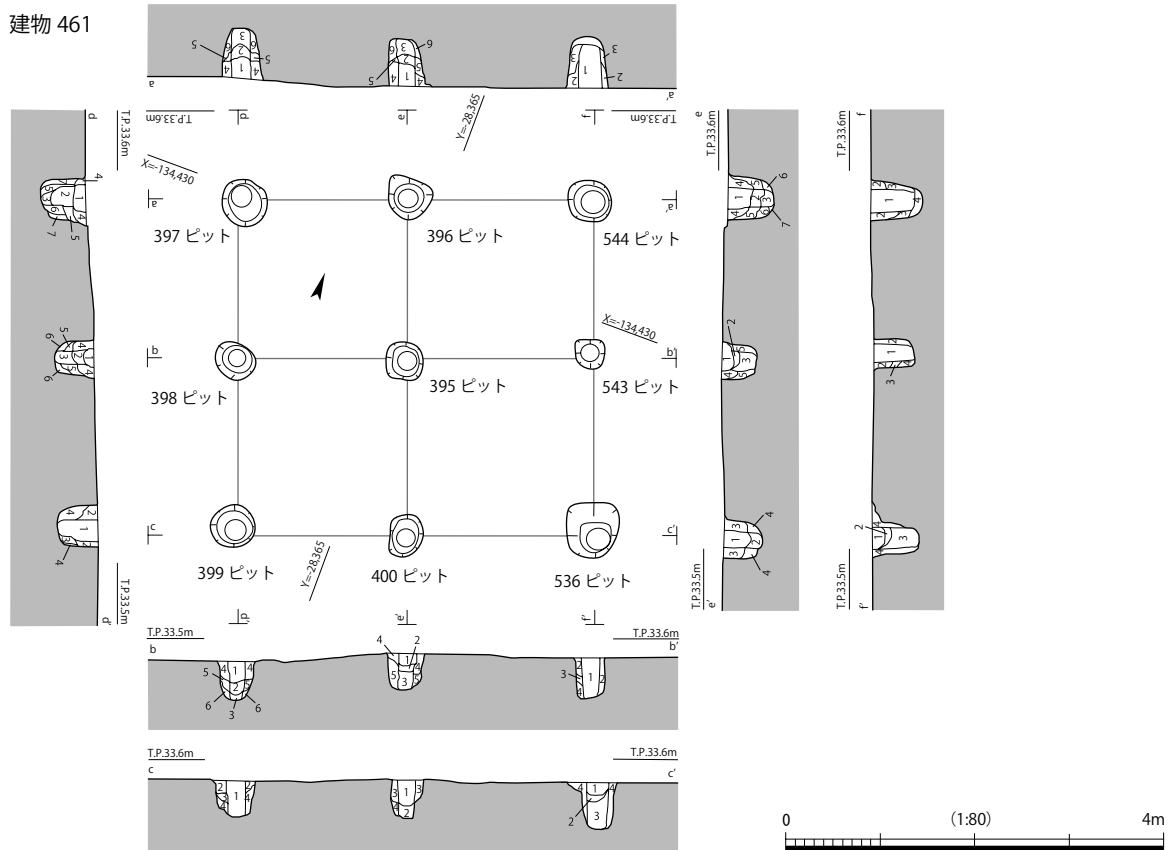
- 1) 黒色 2.5Y2/1 粗砂まじり粘質シルト
暗灰黄色 2.5Y4/2 粘土ブロック 5% 程度入る 径 0.3 cm未満の礫多量入る やや軟質
- 2) 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじりシルト
1)層ブロック 5% 程度入る しまり悪い やや軟質 土器入る
- 3) オリーブ黒色 5Y2/2 細砂まじりシルト
灰オリーブ色 5Y4/2 細砂まじり粘土ブロック 40% 程度入る やや軟質 鉄分沈着
炭化物・土器片入る
- 4) 黒色 5Y2/1 粗砂まじり粘質シルト～粘土
径 0.3 cm未満の礫少量入る 軟質
- 5) 2)層に 灰色 5Y4/1 粘土ブロック縞状に入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまり悪い 軟質
- 6) 4)層に近似 白色礫多く入る しまり悪い

【511 ビット】

- 1) 灰色 10Y4/1 砂礫まじりシルト
- 2) 暗オリーブ灰色 5GY4/1 細砂まじりシルト
- 3) 灰色 5Y5/1 細砂まじり粘質シルト
- 4) 黄灰色 2.5Y4/1 砂礫まじりシルト
- 5) 灰色 5Y4/1 砂礫まじり粘質シルト
- 6) 灰白色 5Y8/2 砂礫まじりシルト

図 66 建物 460 平面・断面図

建物 461



【395 ピット】

- 1) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
灰色 7.5Y4/1 粗砂まじり粘土質シルトブロック 10% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る 軟質
- 2) 黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘土～粘質シルト
径 0.3 cm未満の礫少量入る 軟質
- 3) 2) 層に灰色 5Y4/1 粗砂まじりシルトブロック 30% 程度入る しまり悪い
やや軟質
- 4) 1) 層に近似 砂礫の割合多い ややしまる
- 5) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質 炭化物少量入る

【396 ピット】

- 1) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る
灰色 7.5Y4/1 粗砂まじり粘土質シルトブロック 10% 程度入る 軟質
- 2) 黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘土～粘質シルト 径 0.3 cm未満の礫少量入る 軟質
- 3) 2) 層に 灰色 5Y4/1 粗砂まじりシルトブロック 30% 程度入る
しまり悪い やや軟質
- 4) 1) 層に近似 砂礫の割合多い ややしまる
- 5) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまり悪い 軟質
- 6) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土～粘質シルト
灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂ブロック 40% 程度入る しまり悪い
- 7) 黒色 5Y2/1 粗砂まじり粘土質シルト 軟質
灰色 10Y4/1 細砂ブロック 10% 程度入る

【397 ピット】

- 1) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る
灰色 7.5Y4/1 粗砂まじり粘土質シルトブロック 10% 程度入る 軟質
- 2) 黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘土～粘質シルト 径 0.3 cm未満の礫少量入る 軟質
- 3) 黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘土～粘質シルト 径 0.3 cm未満の礫少量入る
灰色 5Y4/1 粗砂まじりシルトブロック 30% 程度入る しまり悪い やや軟質
- 4) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る ややしまる
- 5) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い
軟質 炭化物少量入る
- 6) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土～粘質シルト
灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂ブロック 40% 程度入る しまり悪い
- 7) オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじりシルトブロック 40% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質

【398 ピット】

- 1) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る
灰色 7.5Y4/1 粗砂まじり粘土質シルトブロック 10% 程度入る 軟質
- 2) 黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘土～粘質シルト 径 0.3 cm未満の礫少量入る 軟質
- 2) 黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘土～粘質シルト
灰色 5Y4/1 粗砂まじりシルトブロック 20% 程度入る しまり悪い やや軟質
- 4) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫多量入る やや軟質

- 5) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る
しまり悪い 軟質 炭化物少量入る
- 6) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土～粘質シルト
灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂ブロック 30% 入る しまり悪い

【399 ピット】

- 1) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
暗灰黄色 2.5Y4/1 粘土ブロック 20% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る 炭化物入る
- 2) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質 炭化物少量入る
- 3) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂ブロック 30% 程度入る しまり悪い
- 4) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト
灰オリーブ色 5Y4/2 細砂まじりシルトブロック 50% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫多量入る しまり悪い 軟質

【400 ピット】

- 1) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト
黒褐色 2.5Y3/2 粘土ブロック 20% 程度入る 炭化物入る
径 0.3 cm未満の礫少量入る やや軟質
- 2) 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘質シルト
黒色 2.5Y2/1 粘土ブロック 10% 程度入る
灰オリーブ色 7.5Y4/2 粗砂まじり粘土質シルト 10% 程度入る
しまり悪い 軟質
- 3) オリーブ黒色 5Y3/1 粘土質シルト
灰オリーブ色 5Y4/2 粘土ブロック 20% 程度入る 軟質
- 4) オリーブ黒色 7.5Y3/2 粗砂まじりシルト
黒色 5Y2/1 粘土ブロック 10% 程度入る
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質

【536 ピット】

- 1) 灰色 N4/0 細砂まじりシルト
- 2) 灰色 10Y4/1 細砂～極細砂まじりシルト
- 3) 灰色 7.5Y4/1 細砂～極細砂まじりシルト
- 4) 暗緑灰色 5G4/1 砂礫まじりシルト
- 5) 暗オリーブ色 5GY4/1 砂礫まじりシルト

【543 ピット】

- 1) 灰色 N4/0 細砂～極細砂まじりシルト
- 2) 暗青灰色 5BG4/1 シルト 砂礫少量入る
- 3) 青灰色 5B5/1 細砂まじりシルト
- 4) 暗緑灰色 5G3/1 粗砂まじりシルト

【544 ピット】

- 1) 灰色 N4/0 細砂まじりシルト
- 2) 灰色 10Y4/1 細砂～極細砂まじり粘質シルト
- 3) 暗オリーブ灰色 5GY4/1 粗砂まじりシルト
- 4) オリーブ黒色 10Y3/1 砂礫まじりシルト

図 67 建物 461 平面・断面図

柱間の長さは 1.70 ～ 1.80 m 程度、南北長に対して東西長が若干長く、南北長 3.52 m、東西長 3.80 m を測る。床面積は 13.38㎡ である。建物の主軸は方位北に対して 70 度東に振る。柱穴は、直径 60cm 前後を測る。残存状態が良好で、深さ 70cm を測るものもあるため、平面積に比べて深い印象を与える。柱痕は、直径 20 ～ 22cm 程度である。

建物 572 (図 68) 調査区西半部において検出した建物である。西側柱列は調査区外に続くため確認できていないが、南側柱列の検出状況から、2 間×2 間の総柱建物であったと推測される。建物 433 の柱群とは切り合う関係にあり、建物 433 に先行する遺構であることが確認できる。

柱間の長さは 1.52 ～ 1.60 m 程度、建物の長さは一辺 3.20 m を測る。床面積は、10.24㎡ である。建物軸は、周辺の建物と同様、方位北に対して 70 度東に振る。柱穴は、直径 60 ～ 80cm 程度を測る。同じく総柱建物である建物 460・建物 461 に比べて、建物の規模は小さいが、柱穴は大型である。

建物 573 (図 69 上段) 調査区南辺において検出した建物である。建物の南半部は調査区外へと続くため確認できていないが、3 間以上×2 間の規模であることが推測される。柱間の長さは 1.30 ～ 1.60 m 程度で、桁行よりも梁行の柱間の方が長い。建物の主軸は方位北に対して 4 度西に振る。建物の長辺は 4.00 m 以上、短辺は 3.32 m を測る。建物 432 とは切り合う関係にあり、建物 432 に先行する遺構であると推測される。

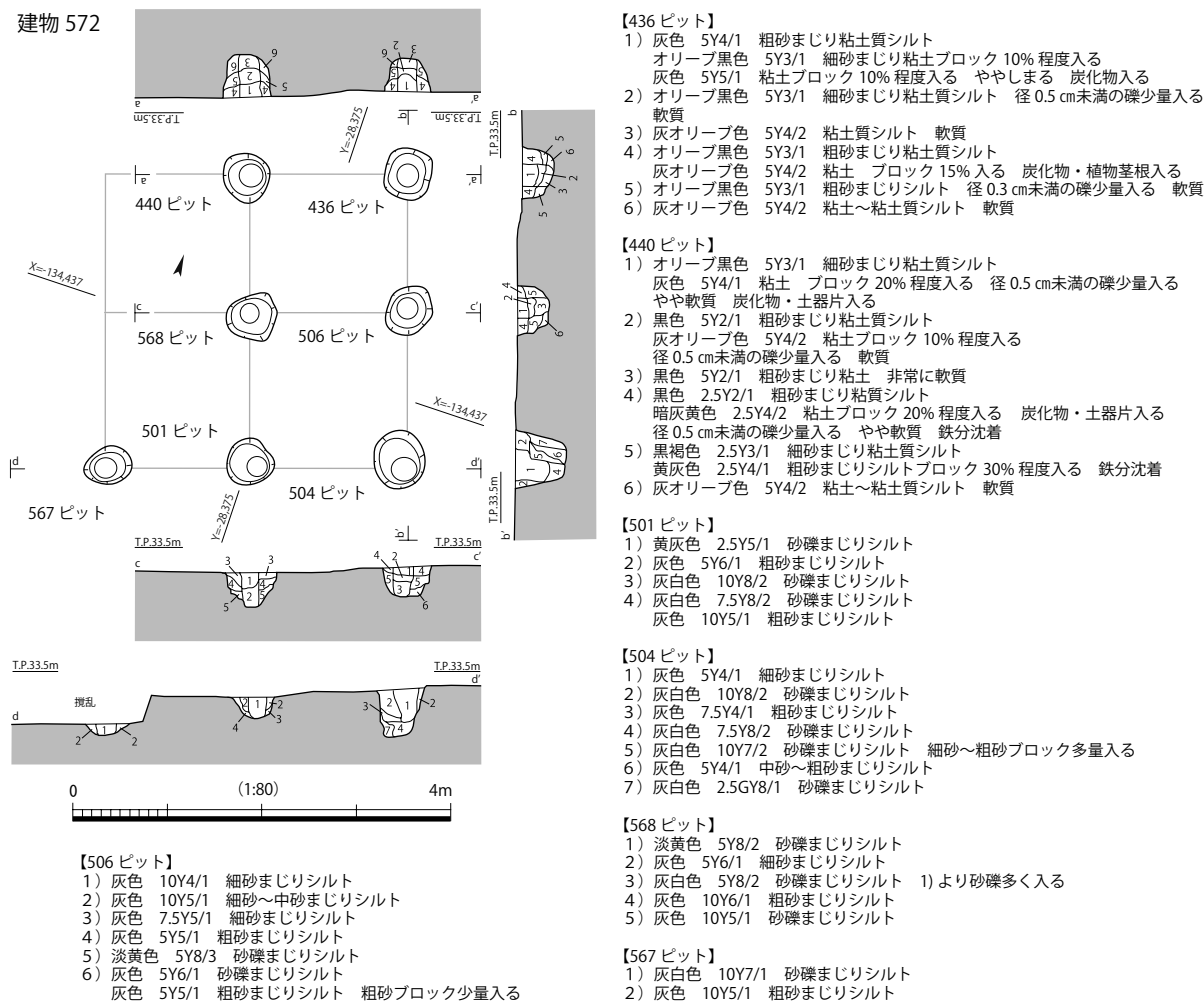
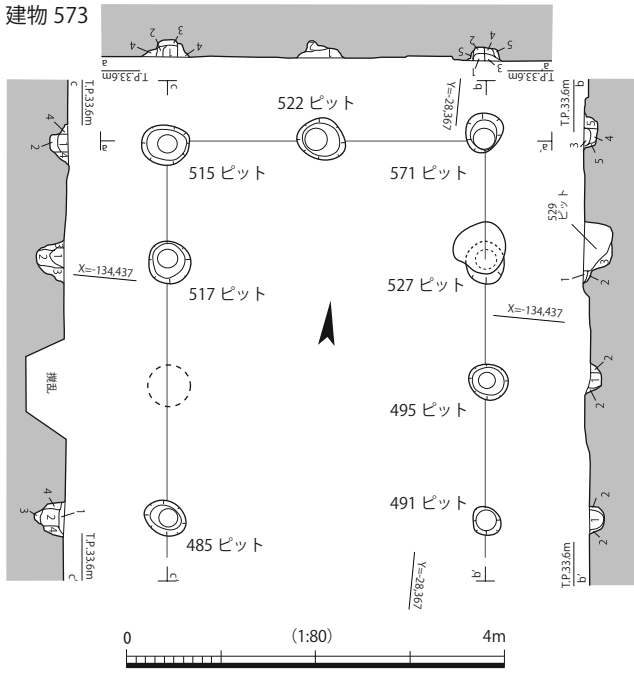


図 68 建物 572 平面・断面図

建物 573



【485 ピット】

- 1) 灰色 5Y4/1 砂礫まじり粘質シルト
- 2) 明オリーブ灰色 5GY7/1 砂礫まじりシルト 砂礫の含有量が多い
- 3) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト
- 4) 灰色 10Y6/1 砂礫まじりシルト

【491 ピット】

- 1) 灰色 10Y4/1 砂礫まじりシルト
灰色 5Y5/1 粗砂まじりシルトブロック少量入る
- 2) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト

【495 ピット】

- 1) 灰色 10Y4/1 砂礫まじりシルト
- 2) 明オリーブ灰色 5GY7/1 砂礫まじりシルト 砂礫の含有量が多い

【515 ピット】

- 1) 灰色 5Y4/1 細砂～極細砂まじりシルト
- 2) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト
- 3) 灰色 7.5Y6/1 砂礫まじりシルト
- 4) 灰白色 10Y8/1 砂礫まじりシルトブロック入る

【517 ピット】

- 1) 灰白色 10Y7/2 粗砂まじりシルト
- 2) 灰色 10Y6/1 粗砂まじり粘質シルト
- 3) 灰色 5Y5/1 砂礫まじりシルト

【522 ピット】

- 1) 灰色 10Y4/1 細砂まじりシルト
- 2) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト

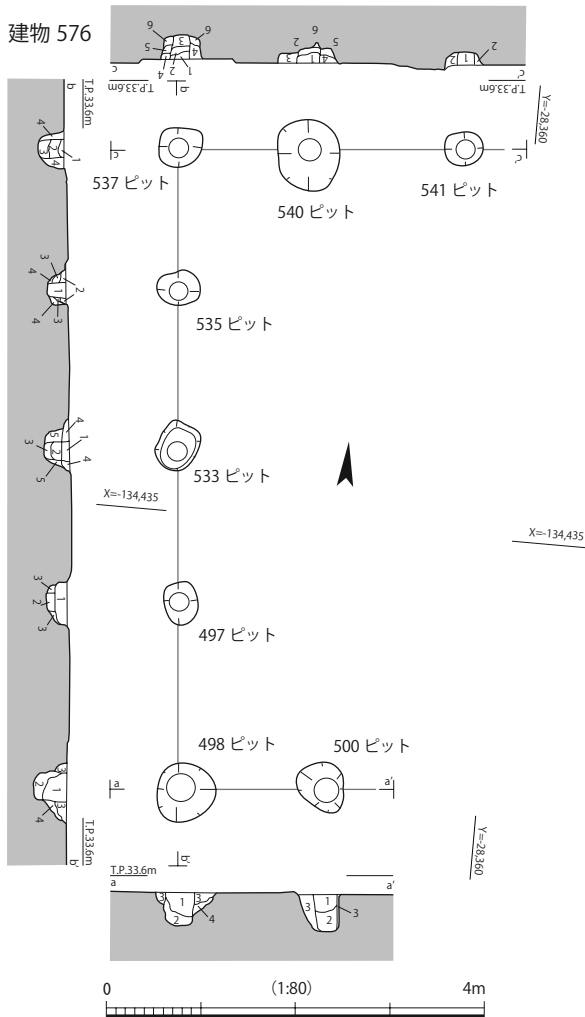
【527 ピット】

- 1) 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 砂礫まじりシルト
- 2) 暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂礫まじりシルト
1) 層より砂礫多量に入る
- 3) 灰色 10Y4/1 細砂まじりシルト

【571 ピット】

- 1) 灰色 5Y4/1 砂礫まじりシルト
- 2) 灰色 2.5Y4/1 細砂まじりシルト
- 3) 灰色 7.5Y4/1 細砂まじり粘質シルト
- 4) 灰色 10Y4/1 砂礫まじりシルト
- 5) オリーブ灰色 10Y6/2 砂礫まじりシルト

建物 576



【497 ピット】

- 1) 灰色 5Y5/1 粗砂まじりシルト
- 2) 明オリーブ灰色 5GY7/1 砂礫まじりシルト 砂礫の含有量が多い
- 3) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト

【498 ピット】

- 1) 灰色 5Y4/1 砂礫まじり粘質シルト
- 2) 明オリーブ灰色 5GY7/1 砂礫まじりシルト 砂礫の含有量が多い
- 3) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト
- 4) 灰色 10Y6/1 砂礫まじりシルト

【500 ピット】

- 1) 灰色 5Y4/1 細砂～極細砂まじりシルト
- 2) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト
- 3) 灰色 7.5Y6/1 砂礫まじりシルト
- 4) 灰白色 10Y8/1 砂礫まじりシルトブロック入る

【533 ピット】

- 1) 灰色 5Y4/1 砂礫まじりシルト
- 2) 灰色 2.5Y4/1 細砂まじりシルト
- 3) 灰色 7.5Y4/1 細砂まじり粘質シルト
- 4) 灰色 10Y4/1 砂礫まじりシルト
- 5) オリーブ黒色 7.5Y3/2 砂礫まじり粘土質シルト

【535 ピット】

- 1) 灰色 N4/0 細砂まじりシルト
明オリーブ灰色 5GY7/1 シルト
- 2) 青灰色 10BG6/1 砂礫まじりシルト
- 3) 灰色 10Y5/1 粗砂まじりシルト
- 4) 灰色 5Y5/1 砂礫まじりシルト

【537 ピット】

- 1) 灰色 5Y5/1 粗砂まじりシルト
- 2) 灰色 5Y4/1 中砂～粗砂まじりシルト
- 3) 灰色 7.5Y4/1 極細砂まじりシルト
- 4) 黄灰色 2.5Y4/1 砂礫まじりシルト
- 5) 褐灰色 10YR4/1 極細砂まじりシルト
- 6) 黒褐色 2.5Y3/1 砂礫まじり粘質シルト

【540 ピット】

- 1) 黄灰色 2.5Y4/1 砂礫まじりシルト
明緑灰色 7.5GY8/1 砂礫まじりシルトブロック入る
- 2) 暗緑灰色 5G4/1 細砂～極細砂まじりシルト
- 3) 暗灰色 N3/0 砂礫まじりシルト
- 4) 明オリーブ色 5GY7/1 極細砂まじりシルト
- 5) 暗オリーブ色 2.5GY4/1 砂礫まじりシルト
- 6) 暗緑灰色 5G4/1 極細砂まじりシルト

【541 ピット】

- 1) 2.5Y4/1 粗砂まじりシルト
- 2) 灰色 5Y4/1 砂礫まじりシルト

図 69 建物 573・建物 576 平面・断面図

柱穴は、直径 50cm 前後を測る円形である。ただし、遺構面の標高が高い地点にあたるため、東側柱列は残存深度の浅いピットが目立つ。柱痕は、直径 18cm 前後である。

建物 576 (図 69 下段) 調査区東辺部において検出した建物である。東半部は調査区外にかかるため確認できないが、4 間×2 間以上の規模をもつ掘立柱建物であったと推測される。柱間の長さは 1.50～1.90 m 程度、西南隅柱と西側柱列の 497 ピットの柱間がやや長い。建物の主軸は方位北に対して 4 度西に振る。建物の長辺は 6.72 m、短辺は 3.00 m 以上を測る。柱穴は、直径 40～70cm、柱痕は、18～28cm と、大小差がみられる。

以上、第 4 調査区の調査成果を記述した。この調査区では古墳時代後期～古代初頭の遺構面において、掘立柱建物の柱穴を緊密に検出し、合計 9 棟の掘立柱建物を復元した。

既往の調査では、上私部遺跡集落の形成は 5 世紀前半にはじまり、6 世紀前半から集落が拡大化、6 世紀後半から 7 世紀初頭に最盛期を迎え、7 世紀前半には終焉を迎えるものと推測されている。今回の調査では、この過程を遺構の先後関係から追認することができた。また、上私部遺跡の集落がより北側へ広がると予想されること、今回の調査範囲が、上私部遺跡集落全体の開発の中では、やや後発的な地点にあたること、さらに時期的に後続する建物が、調査区の北西に位置することが明らかとなった。これらのことから、終息期に入った上私部遺跡集落は、集落が成立した微高地上より、北西の方向へと移動・展開したことが、推測される。

第 5 節 まとめ

以上、有池遺跡および上私部遺跡の調査成果について、その成果を記述した。限られた範囲ではあったが、既往の調査によって得られた成果に加えるべき、新たな知見を多く得ることができた。以下、調査区ごとに列記して、まとめとしたい。

1) 有池遺跡 (第 1 調査区) では、中世遺構面を確認し、中世前半、中世後半、中世末～近世初頭の各遺構を検出した。特に豪族居館をめぐる大溝の一辺を確認し、周辺遺構との切り合い関係を明確に捉えることができた。

また、調査区東半部において、多くのピット群を検出し、有池遺跡の居住域がさらに広がることを追認した。調査区の西半部では、生産域である水田跡や大型土坑を確認し、居住域周辺部の土地利用の様相に新たな資料を加えることができた。

2) 上私部遺跡では、古墳時代後期～古代初頭の遺構面を確認した。既往の調査成果では、調査区周辺は、竪穴住居や掘立柱建物が緊密に立ち並ぶ集落の中心地にあたる。今回の調査では、これらに連続する遺構のほか、新たに竪穴住居 6 棟や掘立柱建物 11 棟を検出することができた。

3) これまで、低地であるため居住域としては不向きと考えられていた上私部遺跡の南半部でも、新たに竪穴住居を検出した。また、柱穴等の濃密な分布を確認することができた。

4) 微高地となる上私部遺跡の北半部においても、集落の範囲がより北側へ広がることを確認した。特に北端部では、一時期、大型の掘立柱建物が目立っており、集落の中心が、時代とともにより北側へと移動した可能性もある。

5) 古墳時代後期～古代初頭の上私部遺跡では、少なくとも東西約 300 m、南北 100 m 以上の範囲において竪穴住居や掘立柱建物が建ち並ぶ状況にあった。これまでの調査により集落居住域の東西

限はほぼ確定できたが、南北方向の範囲については今回の調査によってさらに広がることを確認したにとどまっている。今後の周辺の調査によって、集落の様相がより明らかになることが期待される。

写真図版



1. 1-1区 中世遺構面全景（北西から）



2. 1-2区 中世遺構面全景（南東から）



1. 1-3区 中世遺構面全景(東から)



2. 1-3区 85溝完掘状況(北西から)



3. 1-2区 30土坑 遺物出土状況(北から)



4. 1-3区 87井戸検出状況(南西から)



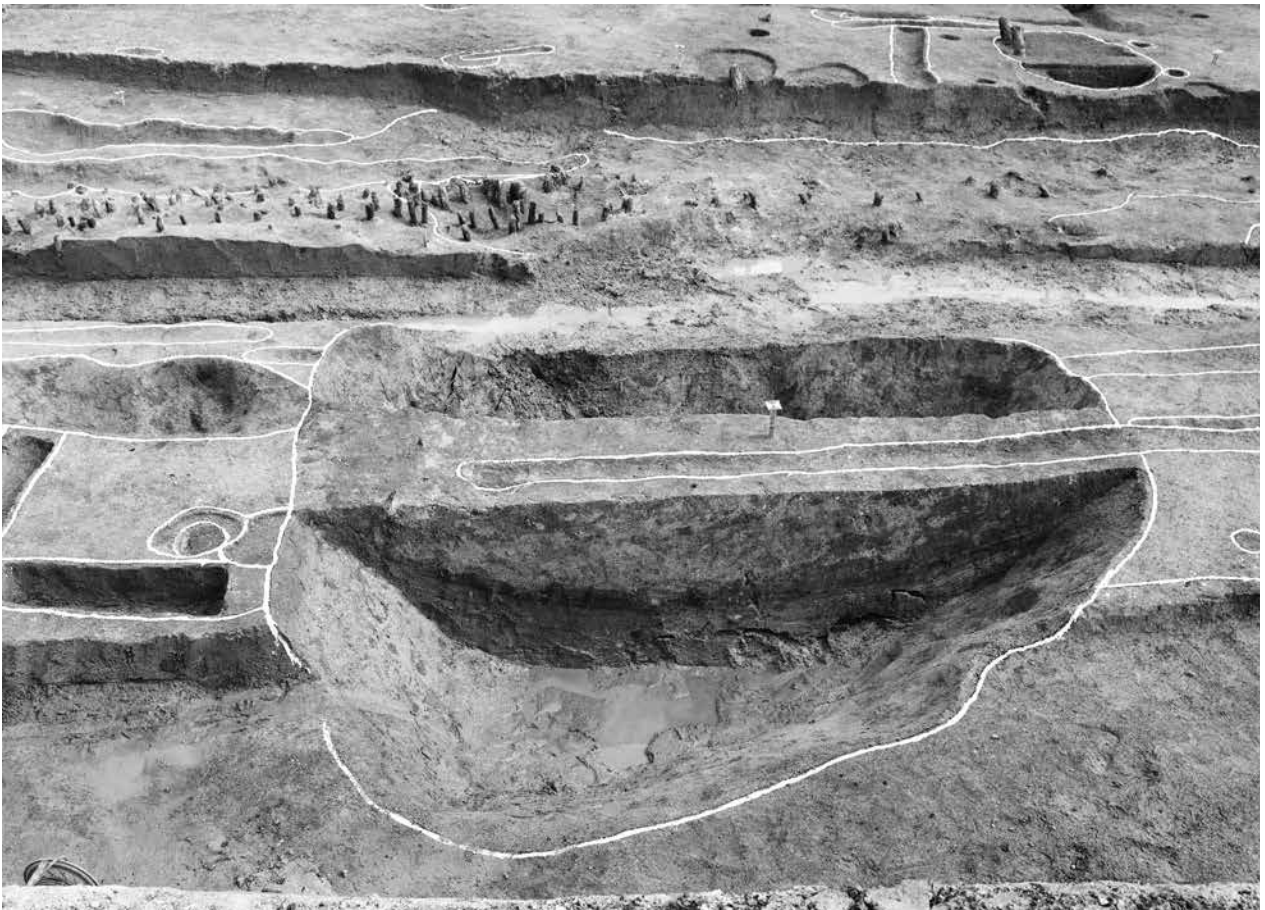
1. 1-3区西半部 中世遺構面完掘状況（南東から）



2. 1-4区 中世遺構面全景（北西から）



1. 1-5区 中世遺構面全景（南東から）



2. 1-5区 130土坑半裁状況（北東から）



1. 2-1区 中世遺構面全景（東から）



2. 2-1区 中世遺構面全景（西から）



3. 2-1区西半部 中近世遺構面全景（東から）



4. 2-1区中央部 古墳時代後期～中世遺構面全景（南から）



5. 2-1区 213 竪穴住居完掘状況（西から）



6. 2-2区 中世遺構面全景（東から）



1.3-1区 中世遺構面全景（西から）



2.3-1区 中世遺構面全景（東から）



3.3-1区 102溝完掘状況（南から）



4.3-1区 111溝完掘状況（南から）



1.3-1区東半部 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（西から）



2.3-1区西半部 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（東から）



1. 3-1区 105 竪穴住居周辺遺構検出状況（南から）



2. 3-1区 105 竪穴住居完掘状況（東から）



3. 3-1区 112 土坑完掘状況（南から）



4. 3-1区 117・118 竪穴住居完掘状況（北から）



5. 3-1区 120 竪穴住居完掘状況（南から）



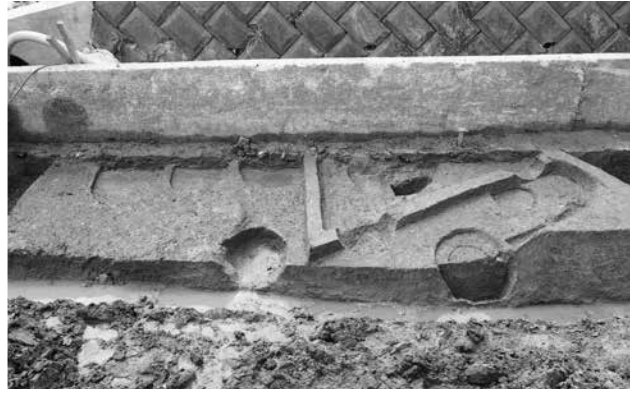
1. 3-1区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（西から）



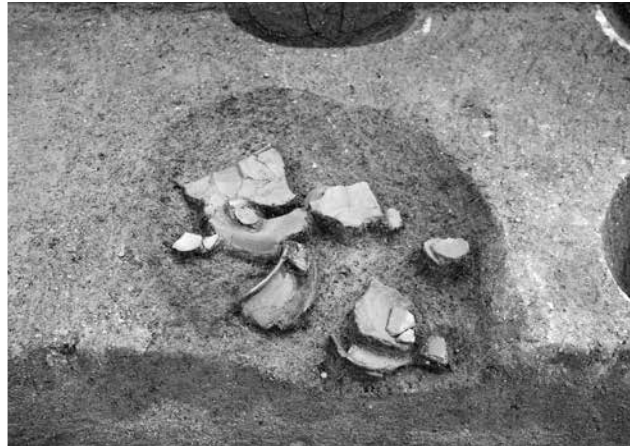
2. 3-1区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（東から）



1. 3-2区 中世遺構面全景 (南から)



2. 3-2区 167 竪穴住居完掘状況 (東から)



3. 3-2区 167 竪穴住居竈遺物出土状況



4. 3-2区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景 (東から)



1. 3-3区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（北西から）



2. 3-3区 〔建物26〕 検出状況（南西から）



1. 3-4区 中世遺構面全景（北から）



2. 3-4区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（北から）



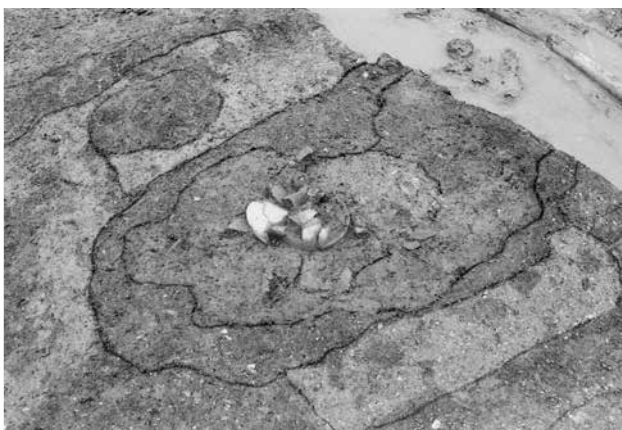
1. 3-3区 303 竪穴住居完掘状況 (西から)



2. 3-4区 296 竪穴住居検出状況 (西から)



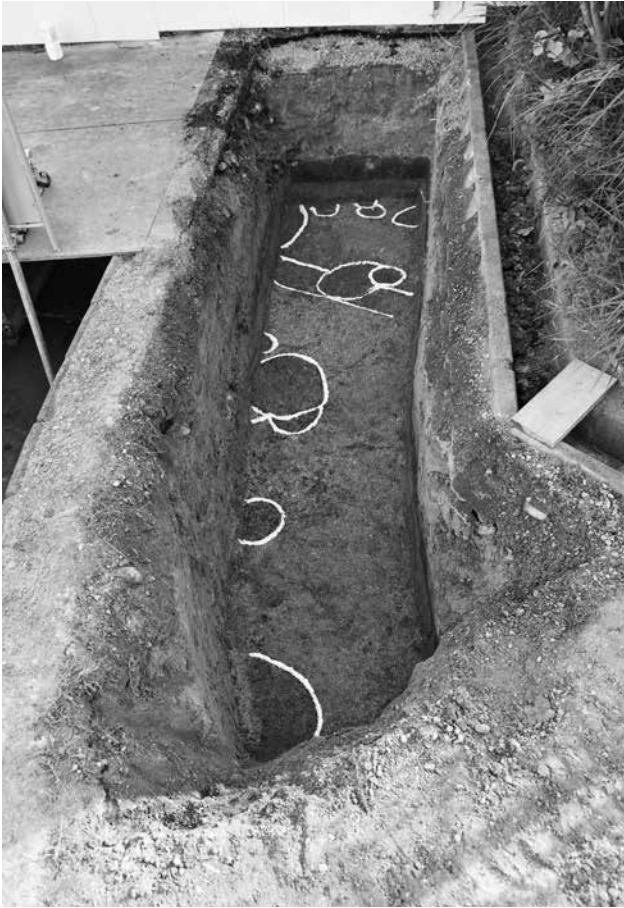
3. 3-4区 297 竪穴住居検出状況 (南から)



4. 3-4区 296 竪穴住居竈検出状況



5. 3-5区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景 (南東から)



1. 3-6区 古墳時代後期～古代初頭
遺構面全景（北から）



2. 4-1区 中世遺構面全景（西から）



3. 4-2区 中世遺構面全景（西から）



4. 4-1区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（西から）



1. 4-1区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（南から）



2. 4-1区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（東から）



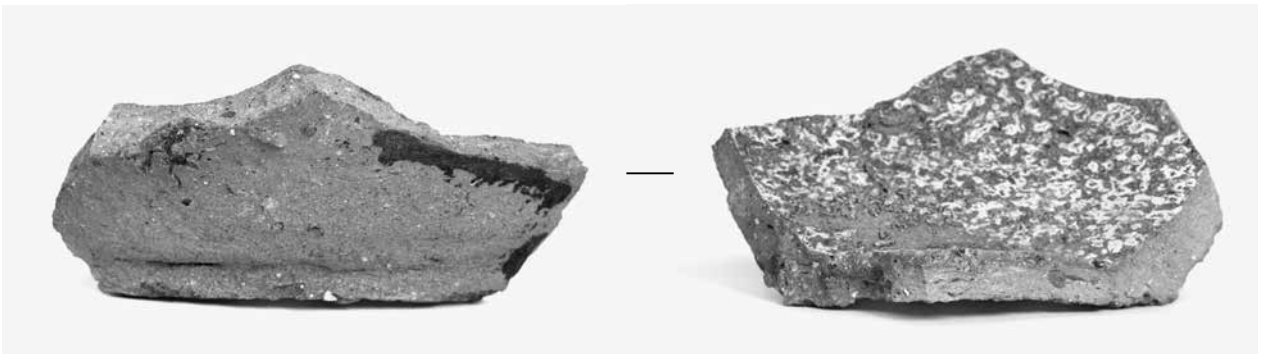
1. 4 - 2区 古墳時代後期～古代初頭遺構面検出状況（西から）



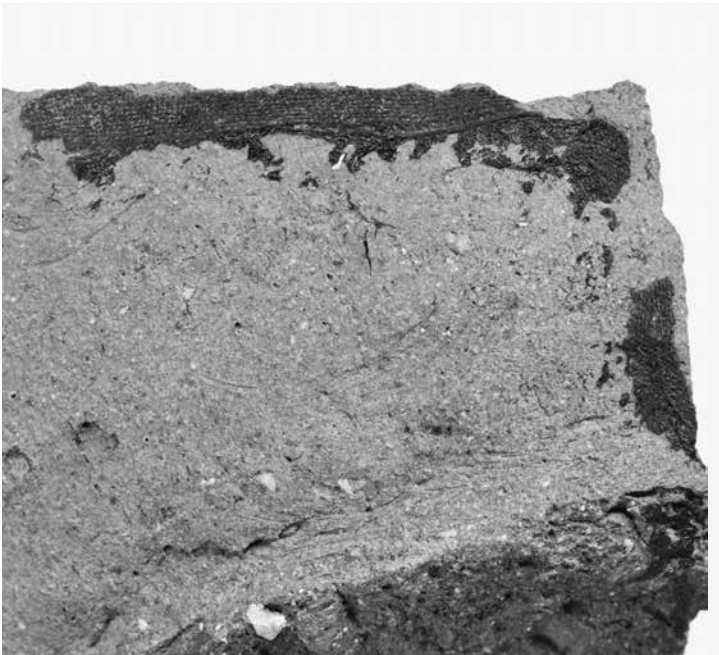
2. 4 - 2区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（南から）



1. 第1調査区 85溝出土常滑焼壺底部



2. 第1調査区 85溝出土備前焼壺底部



3. 第1調査区 85溝出土備前焼壺底部
繊維付着部分拡大



4. 第1調査区 85溝出土土師器皿



5. 第1調査区 85溝出土青磁碗底部



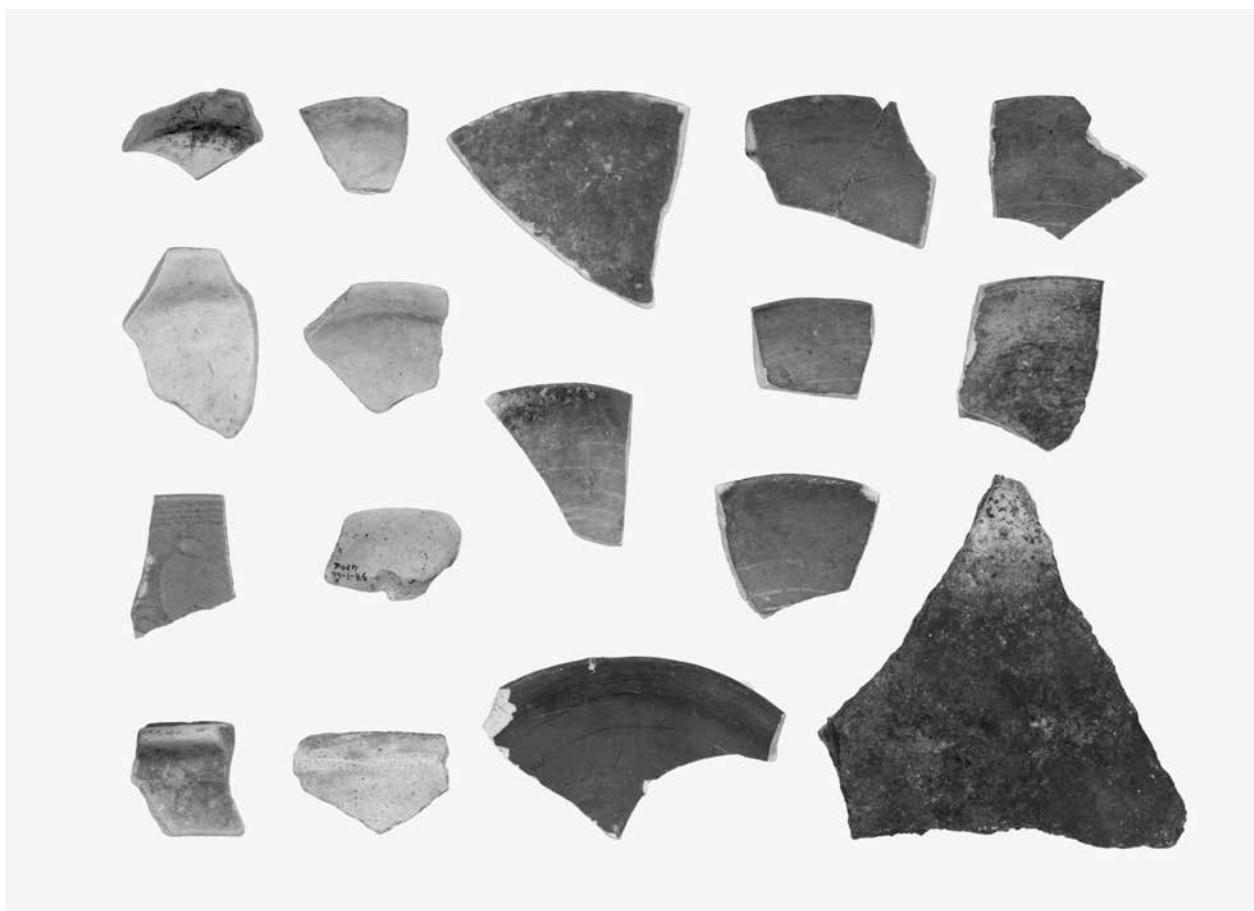
6. 第1調査区 85溝出土白磁碗底部



1. 第1調査区 86溝出土瓦質土器播鉢



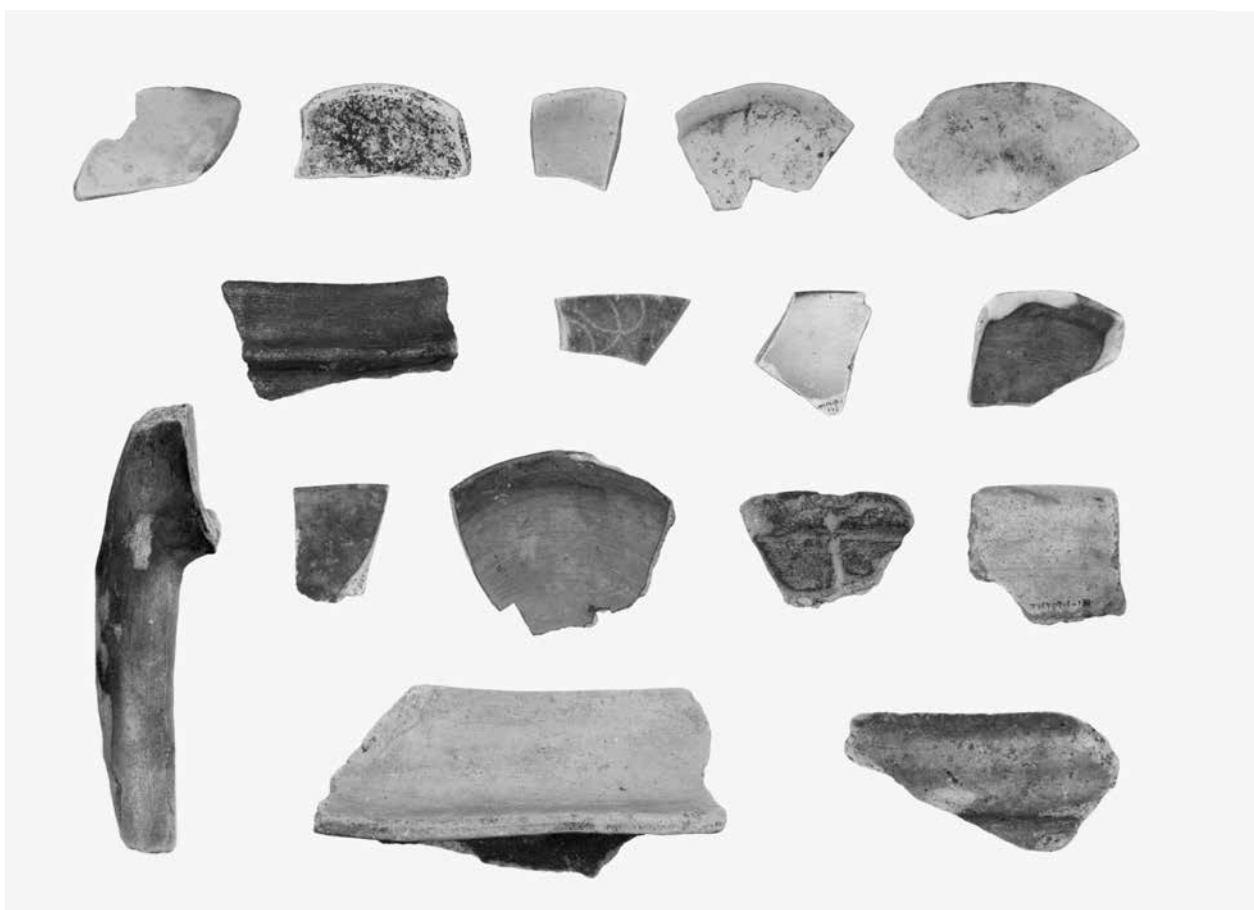
2. 第1調査区 86溝出土遺物



3. 第1調査区 87井戸出土遺物



1. 第1調査区 124溝出土土師器皿



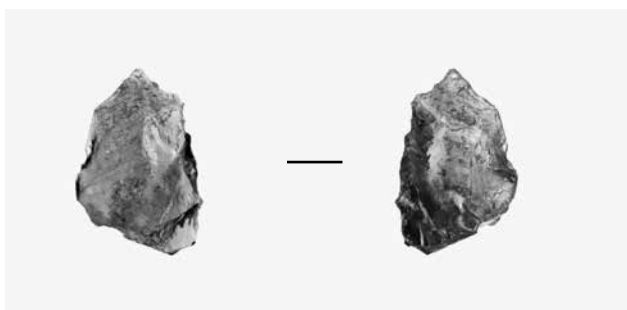
1. 第1調査区 遺構内出土遺物（1）



2. 第1調査区 遺構内出土遺物（2）



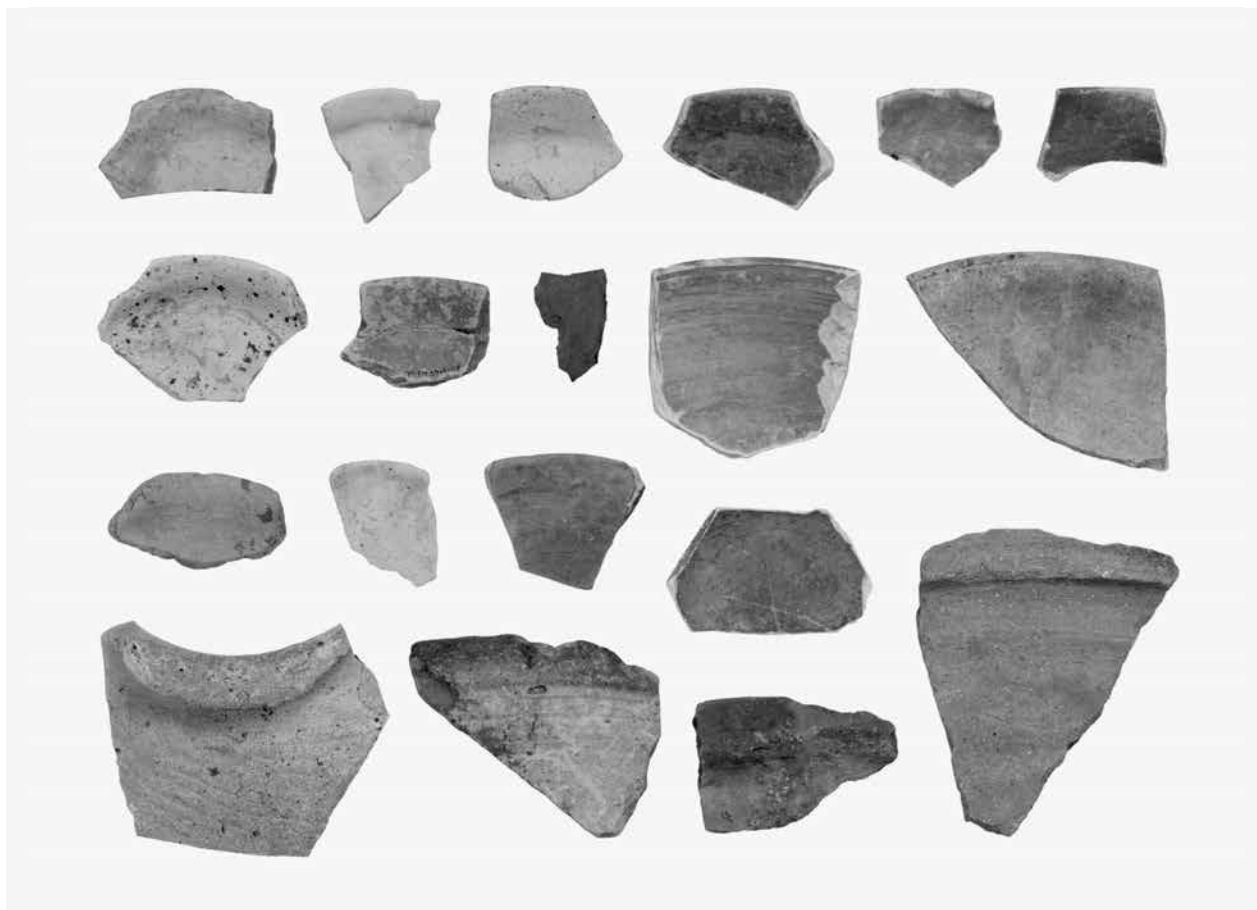
1. 第1調査区 122溝出土遺物



2. 第1調査区 127溝出土水晶製石鏃未成品



3. 第1調査区 中世包含層出土銭貨
「皇宋通寶」「聖宋元寶」



4. 第1調査区 中世包含層出土遺物



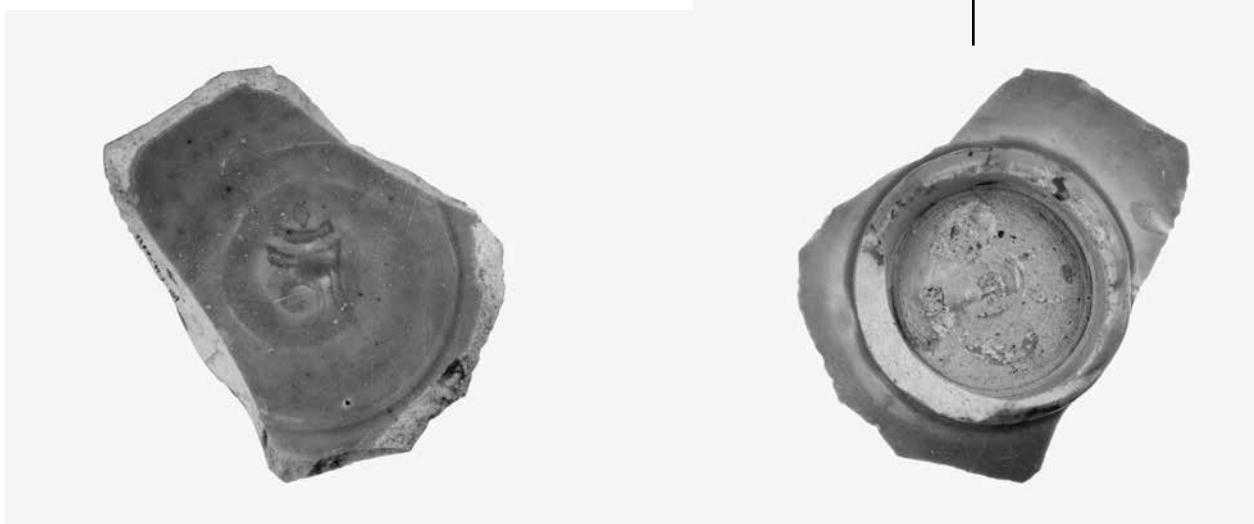
1. 第2調査区 出土遺物



2. 第2調査区 207 溝出土瓦質土器羽釜



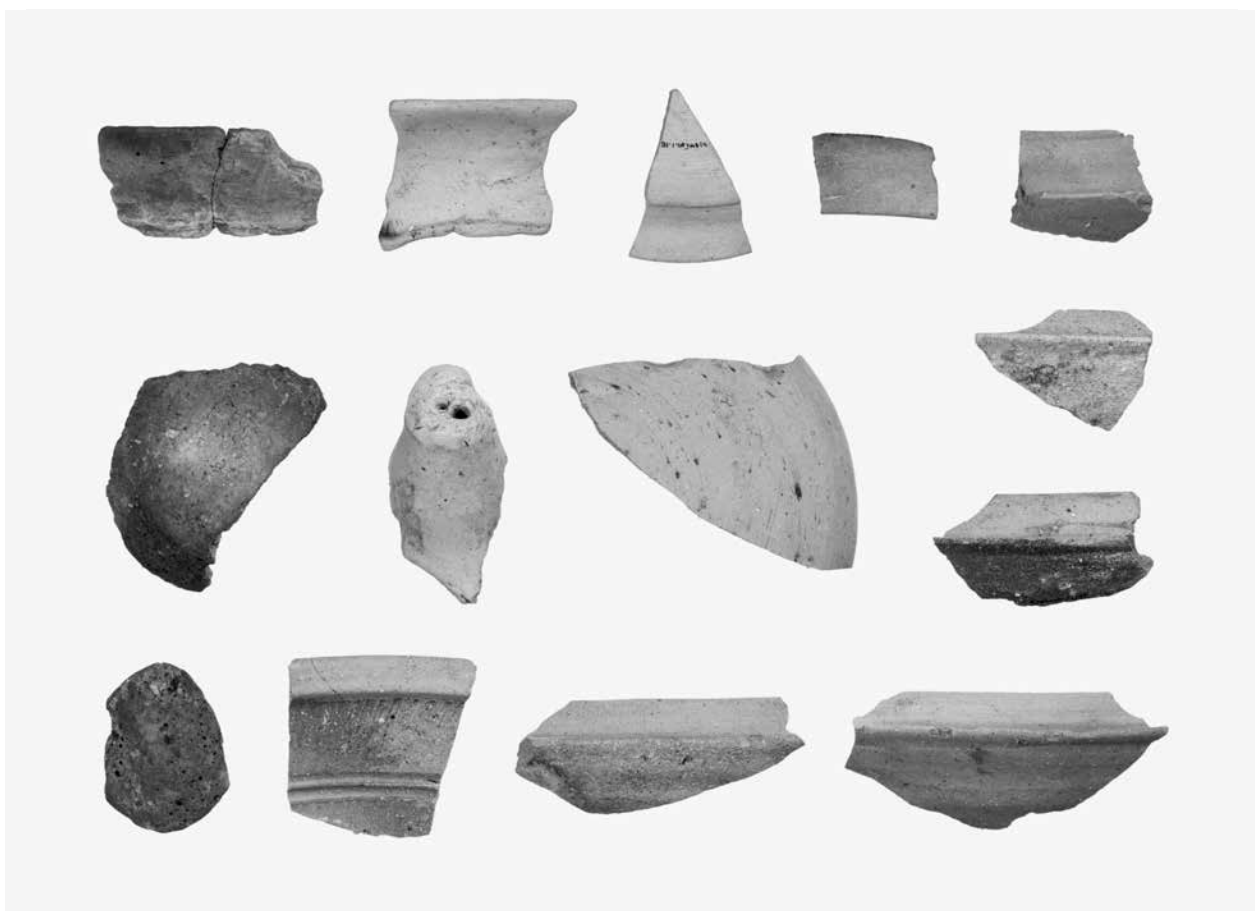
3. 第3調査区 4 溝出土天目茶碗底部



4. 第1調査区 27 溝出土青磁碗底部



1. 第3調査区 中世遺構・包含層出土遺物



2. 第3調査区 古墳時代遺構内出土遺物



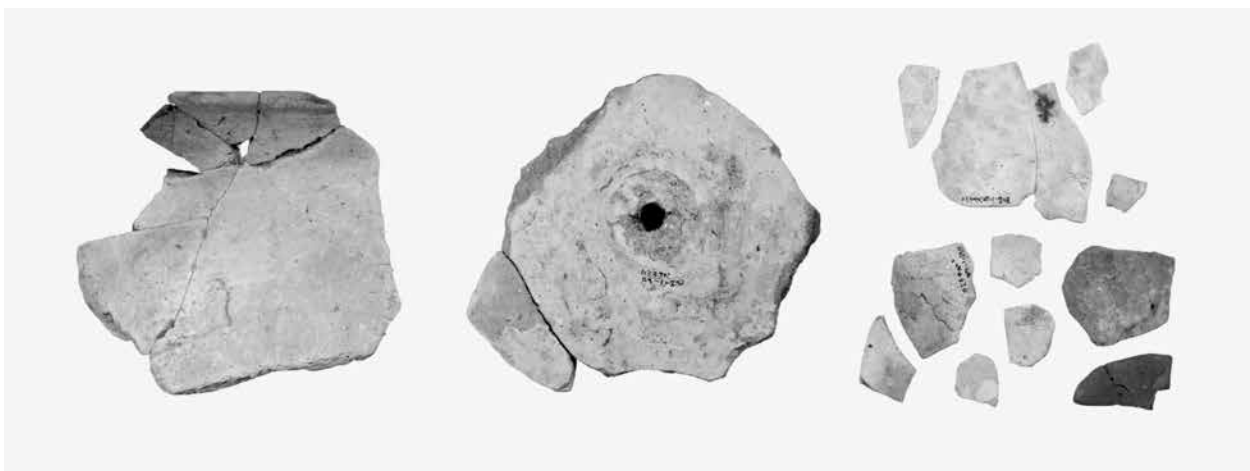
1. 第3調査区 34 溝出土須恵器杯身



2. 第3調査区 99 竪穴住居出土須恵器杯身



3. 第3調査区 57 溝出土須恵器甕



4. 第3調査区 105 竪穴住居出土遺物



5. 第3調査区 118 竪穴住居出土土師器高杯



6. 第3調査区 109 ピット出土土師器甕



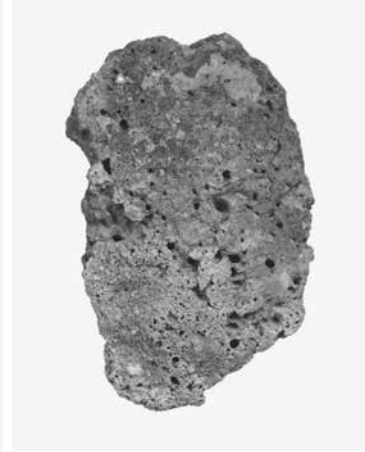
1. 第3調査区 111 溝出土土師器小型壺



2. 第3調査区 111 溝出土須恵器杯身



3. 第3調査区 111 溝出土須恵器壺



4. 第3調査区 111 溝出土鉄滓



5. 第3調査区 111 溝出土砥石



6. 第3調査区 111 溝出土須恵器甕口縁



7. 第3調査区 111 溝出土須恵器甕口縁



8. 第3調査区 111 溝出土須恵器甕口縁



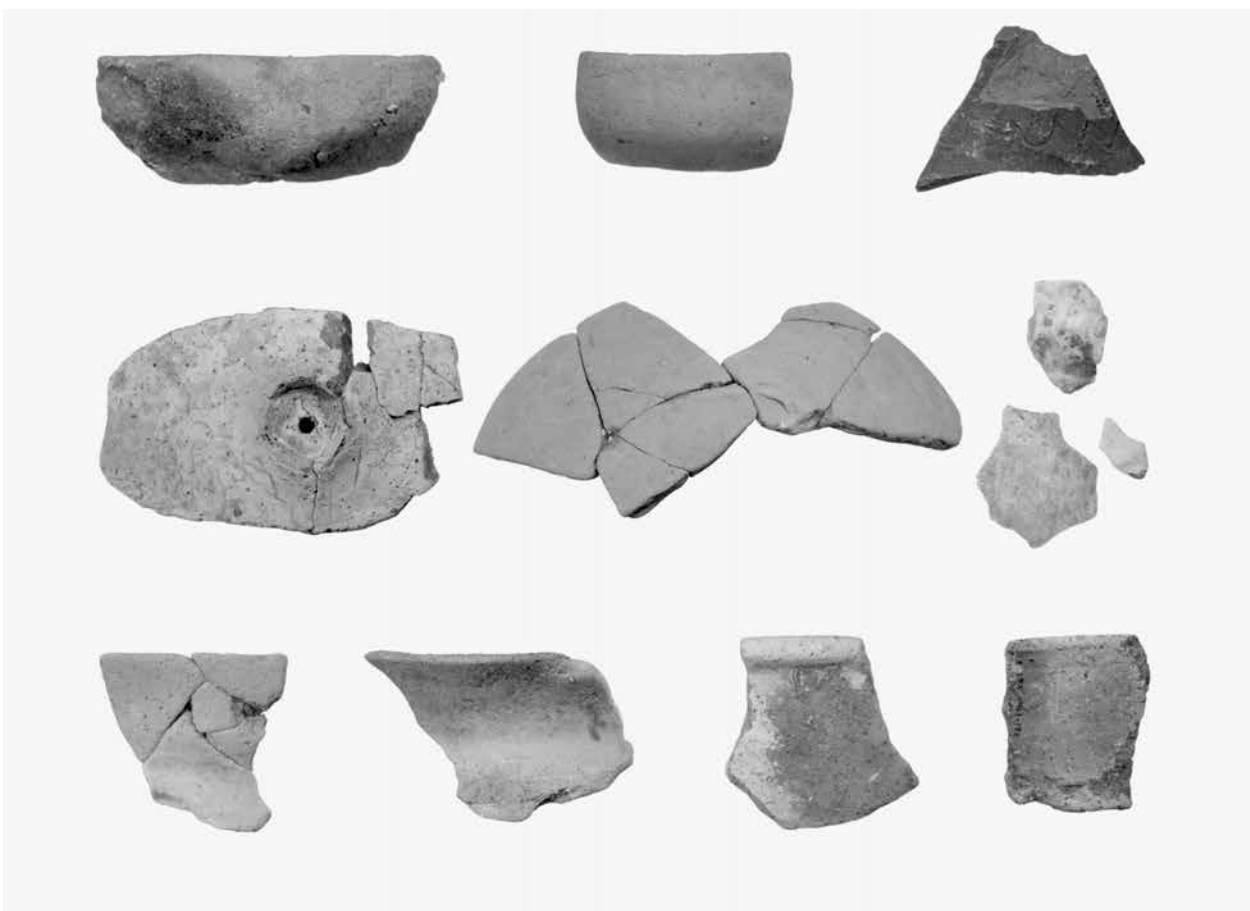
1. 第3調査区 106 溝出土
須恵器杯蓋

2. 第3調査区 112 土坑出土
土師器高杯

3. 第3調査区 119 土坑出土
土師器高杯



4. 第3調査区 古墳時代溝出土遺物



5. 第3調査区 118 竪穴住居出土遺物



1. 第3調査区 214ピット出土土師器高杯



2. 第3調査区 214ピット出土土師器高杯



3. 第3調査区 222 竪穴住居出土須恵器杯身



5. 第3調査区 303 竪穴住居出土土師器高杯



4. 第3調査区 296 竪穴住居出土土師器甕



6. 第3調査区 308ピット出土須恵器杯蓋



7. 第3調査区 308ピット出土土師器高杯



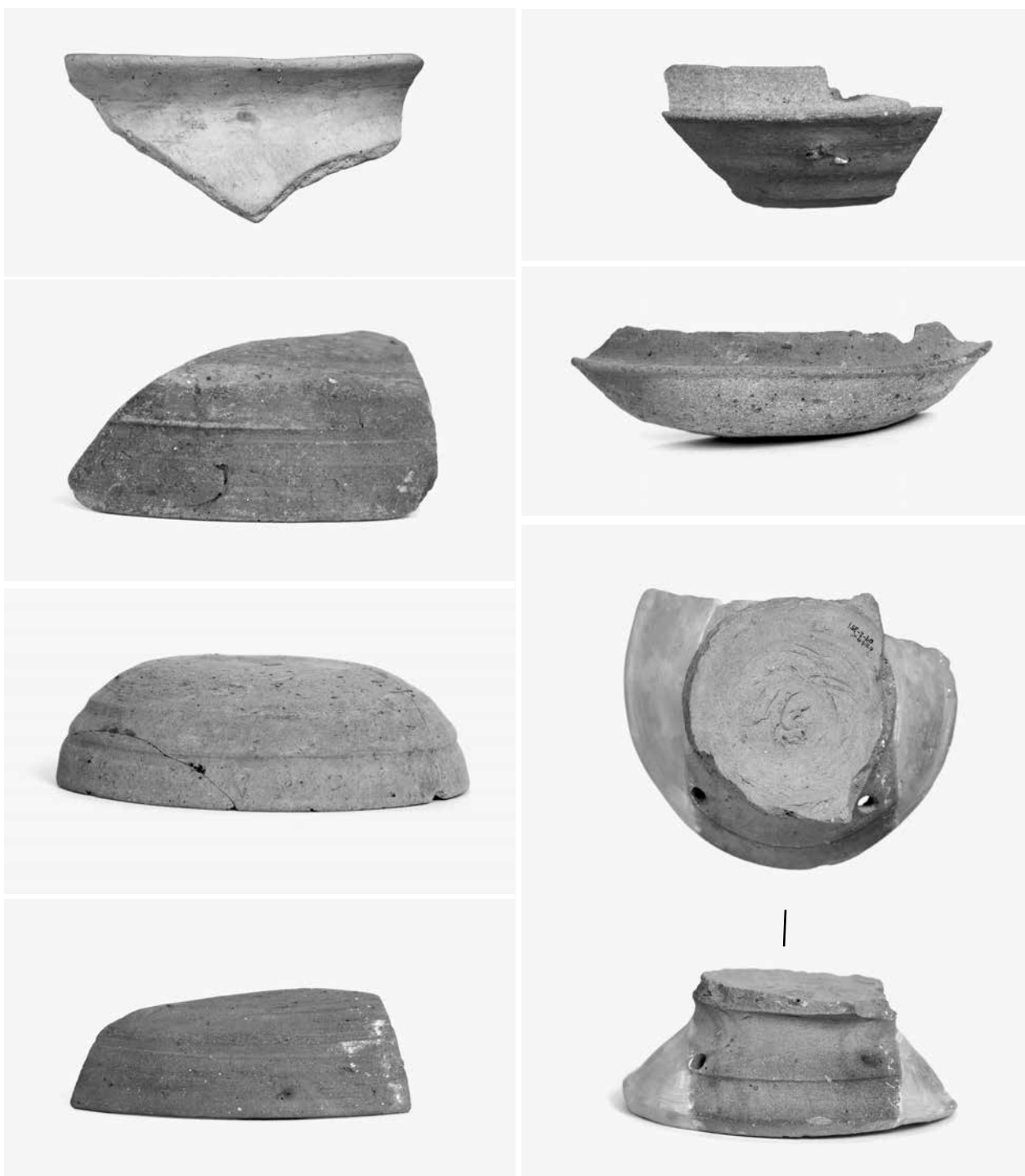
8. 第3調査区 310ピット出土須恵器杯身



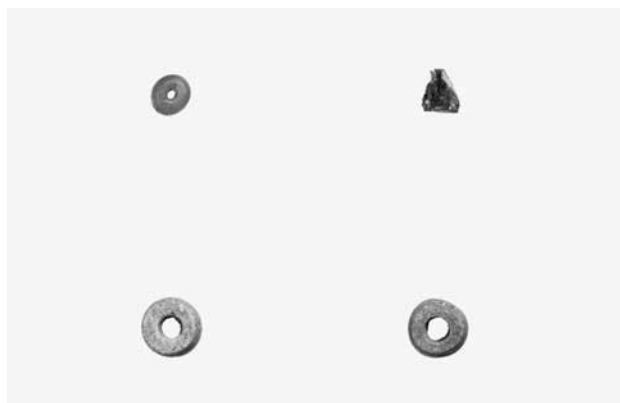
9. 第3調査区 337 溝出土土師器甕



1. 第3調査区 296 竪穴住居出土遺物



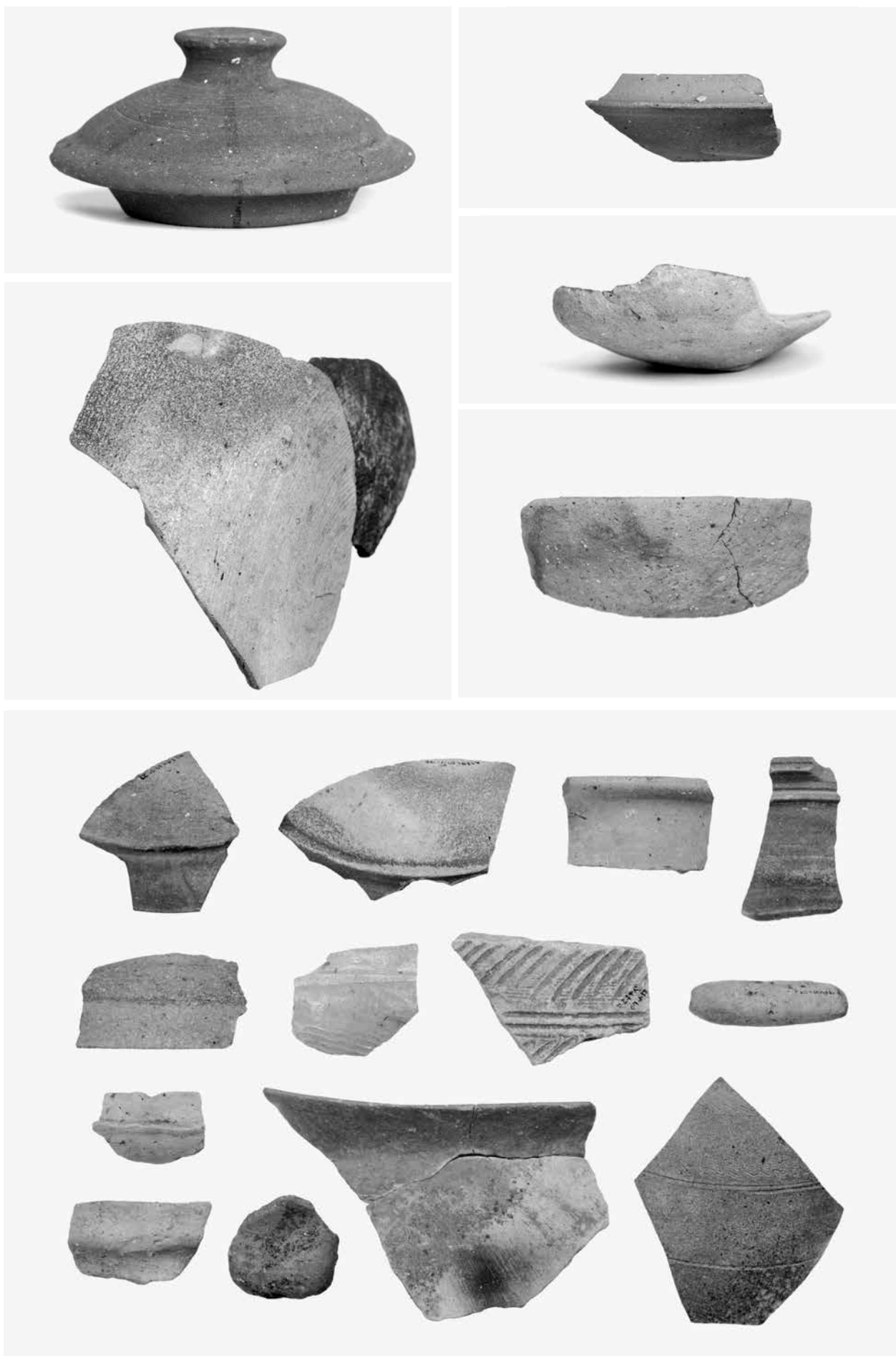
1. 第3調査区 297 竪穴住居出土遺物



2. 第3調査区 296・297 竪穴住居出土
ガラス製小玉・ガラス片・滑石製白玉



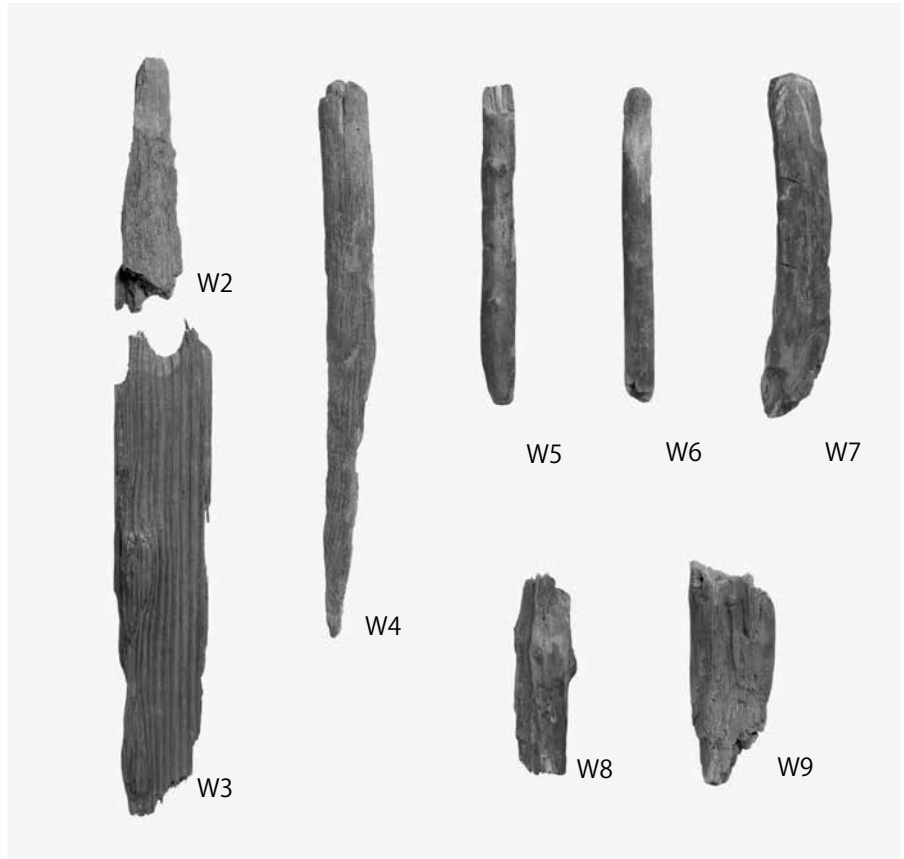
3. 第3調査区 296 竪穴住居竈内出土骨片



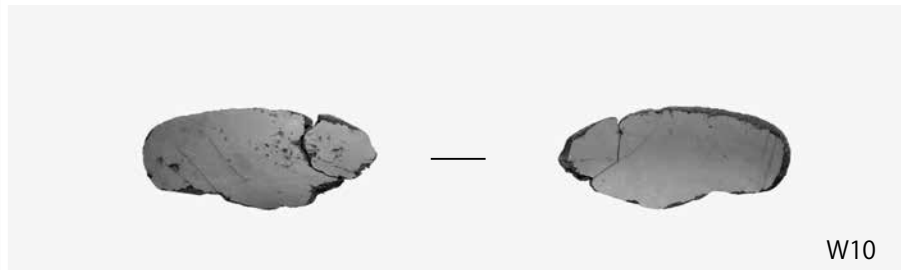
1. 第3調査区 古墳時代包含層出土遺物



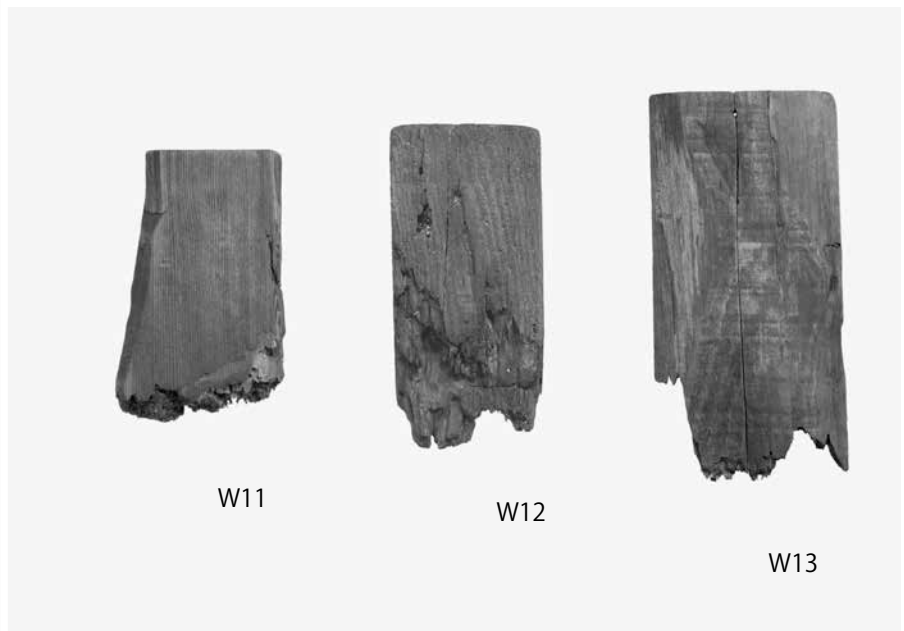
1. 第1調査区
101 溝出土木製樋 (中世末～近世初頭)



2. 第1調査区 89 溝出土板状部材・杭 (中世末～近世初頭)



3. 第3調査区 1 水路出土漆器椀(近世)



4. 第3調査区 1 水路出土板状部材 (近世)



1. 第1調査区
199 井戸出土
棒状部材 (近世)

2. 第2調査区
206 流路出土
板状部材 (近世)

3. 第2調査区
206 流路出土
角材状部材 (近世)

4. 第2調査区
206 流路出土
漆器碗 (近世)



W19

5. 第4調査区
407 ピット出土柱根
(古墳時代後期～古代初頭)



W20

6. 第4調査区
411 ピット出土柱根
(古墳時代後期～古代初頭)



W21

7. 第4調査区
490 ピット出土柱根
(古墳時代後期～古代初頭)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	かみきさべいせきさん ありいけいせきさん							
書 名	上私部遺跡Ⅲ 有池遺跡Ⅲ							
副 書 名	一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	（財）大阪府文化財センター調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第193集							
編 著 者 名	若林幸子 黒須亜希子							
編 集 機 関	財団法人 大阪府文化財センター							
所 在 地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 Tel.072(299)8791							
発 行 年 月 日	2009年8月31日							
ふ り が な	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所 収 遺 跡 名	所在地	市町村	遺跡番号					
かみきさべいせき 上私部遺跡	かたのしあおやま 交野市青山	27230	64	34° 47' 3"	135° 41' 32"	上私部07-1：平成19.5.22～平成20.1.18/有池07-1・上私部07-2：平成20.2.1～平成20.10.31/上私部08-1：平成20.7.15～平成20.10.28	4622㎡	一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設
ありいけいせき 有池遺跡	かたのしあおやまちさき 交野市青山地先		22	34° 47' 17"	135° 41' 47"			
所 収 遺 跡 名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上私部遺跡	集落	古墳時代～中世	竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑・井戸・水田・畦畔	土師器・須恵器・移動式竈・瓦器・陶磁器・瓦		掘立柱建物と竪穴住居を合わせて30数棟検出した。加えて集落を区画する溝群と柵の延長部分を調査した。		
有池遺跡	集落	鎌倉時代～室町時代	掘立柱建物・溝・井戸・土坑	土師器・須恵器・須恵質土器・瓦器・陶磁器・瓦		周囲に区画溝を配した屋敷地の縁辺部を調査した。		
要 約	上私部遺跡		前回までの調査で明らかになった、集落の中心域の北側および西側の状況を明らかにすることができた。これにより6世紀後半に構造差を拡大させつつ居住範囲も最大になる段階を経て、集落構造が均質化しつつ縮小させながら7世紀初頭に廃絶にむかうという、集落変遷をより明確にとらえることができた。					
	有池遺跡		未調査範囲として帯状に残されていた部分を調査したことにより、大小の屋敷地の区画溝がどのように関連付けられるかという点や、居住域縁辺部の様子を明らかにすることができた。					

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第193集

上 私 部 遺 跡 Ⅲ
有 池 遺 跡 Ⅲ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日/2009年8月31日

編集・発行/財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本/株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号